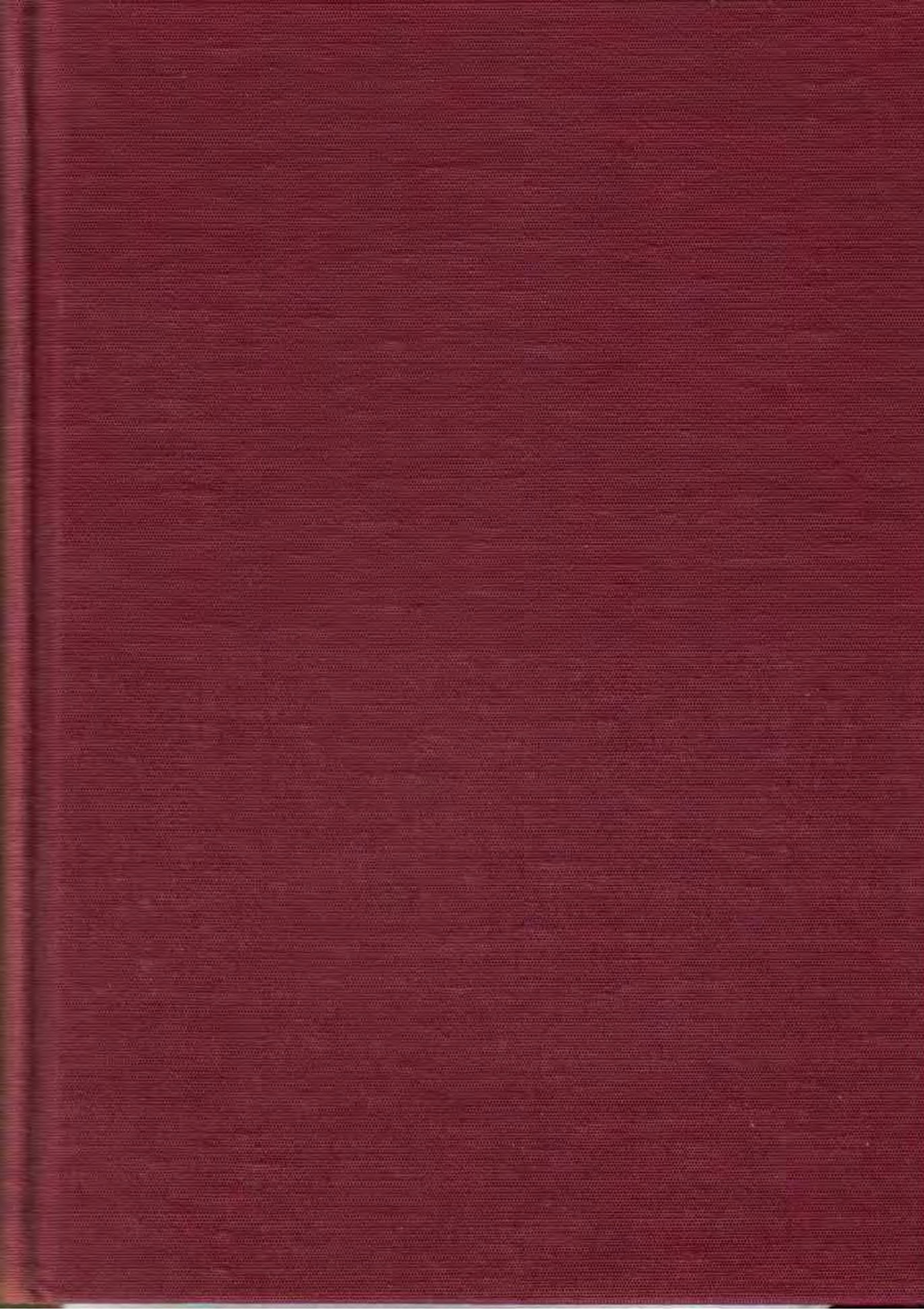


樽本照雄 著

商務印書館研究論集

增補版

清末小説研究会



商務印書館研究論集

增補版

樽本照雄 著

清末小説研究会

商務印書館研究論集 增補版

目 次

1 近代日中出版社交流の謎.....	9
1 商務印書館から	9
2 金港堂から	12
2 長尾雨山と上海文芸界.....	15
1 その頃の商務印書館	15
2 雨山の文章へたかまる期待	18
3 長尾雨山談「現代支那の作家生活」	20
3 商務印書館の日本人投資者.....	28
1 汪家熔論文	29
2 稲岡勝論文	37
3 樽本の追加説明	39
4 結 論	52
4 商務印書館の火災　　いわゆる「焼け太り」の不可解.....	58
1 火災発生	60
2 さまざまな文献	62
3 新出資料	76
5 商務印書館と金港堂の合弁解約書.....	83
1 合弁契約書と合弁解約書	84
2 『実業之日本』問題	86
3 商務印書館と金港堂の合弁解約書	111
4 商務印書館が中華書局を裁判に訴える	119
6 商務印書館関係資料いくつか.....	127
1 『日本人支那問題』について	127
2 『中国出版史料・近代部分』の商務印書館関係	132
3 『涵芬楼新書分類目録』に関連して	133
4 商務印書館宝山路印刷所の配置図	138
5 『最新国文教科書』	141
7 商務印書館の創業記念誌　　日中合弁企業のばあい.....	149

1	創業10年記念誌	150
2	創業30年記念誌	152
3	創業35年記念誌	156
8	初期商務印書館の財政状態	159
1	莊俞の数字	159
2	汪家燊の論文	161
3	商務印書館の記録	164
9	統計表から商務印書館を見る	183
1	教科書の編集出版	183
2	『最近三十五年之中国教育』	184
3	李沢彰「三十五年来中国之出版業」	184
4	「商務出版分類統計表」	185
5	王雲五「中外圖書統一分類法」	187
6	統計表から商務印書館を見る	189
7	その後	191
10	商務印書館創業者の姻戚関係図（補遺）	195
11	最近の商務印書館研究について 日中合弁の側面から	197
1	日中合弁の大略	200
2	評価の基準「初期商務のリトマス試験紙」	203
3	いくつかの専門書	204
12	商務印書館の名称と日中合弁問題	227
1	日中合弁後の商務印書館という名称	227
2	商務書館のこと	230
3	商務印書館 = 金港堂説	233
4	『最新国文教科書』の刊行	240
5	上海商務印書館 = 金港堂説	241
6	中国商務印書館 = 金港堂説	242
13	『繡像小説』出版遅延問題簡論日本語原稿	246

14 『繡像小説』の坂下亀太郎「理科遊戯」	248
15 商務印書館『涵芬楼新書分類総目』について	258
1 阿英が言及した『涵芬楼蔵書目録』	259
2 『涵芬楼旧書分類総目』	260
3 いわゆる『涵芬楼地字号目録』	263
4 いくつかの疑問	265
5 誤字と脱字	271
6 『新書総目』	272
7 5例の種明かし	274
8 7疑問への解答	277
附 「五清末西学出版社概覧」正誤表	279
16 商務印書館版「説部叢書」の成立	288
1 最近の言及	289
2 商務印書館の刊行物から	297
3 中村忠行の研究	303
4 商務印書館版「説部叢書」の成立	307
5 結 論	332
17 商務版「説部叢書」研究の昔と今	338
1 日本におけるこれまでの研究	339
2 「説部叢書」の成立	341
3 中国での研究 1	349
4 謎の版本	350
5 理解度で分類	355
6 中国での研究 2	357
7 日本における研究	370
8 改組時期 問題を絞り込む	372
9 改組年の確定	374
10 中国における最新の研究	377

18 美華書館名称考.....	389
1 中国における研究	389
2 新しい展開	398
3 名称の問題点	410
19 宋家姉妹の父親は商務印書館を創設したか	
チャーリー宋と美華書館.....	417
1 問題の発生	418
2 チャーリー宋と商務印書館	422
3 中華書局の経営危機	425
4 チャーリー宋と中華書局	427
5 美華書館と華美印書館	431
6 中国におけるメソヂスト教会印刷所	434
20 美華書館の最期.....	438
1 商務印書館買収説	438
2 美華書館と華美書局	440
3 ブラウン説	444
4 結 論	447
21 ヘプバーン、マティーア兄弟と美華書館.....	450
1 ヘプバーン辞書初版と美華書館	451
2 岸田吟香の上海日記	454
3 日本語訳『真理易知』の印刷	460
4 ヘプバーン辞書第2版と美華書館	463
5 弟スレーターへの手紙	465
6 美華書館の責任者たち	468
7 マティーア兄と美華書館	472
8 9代目長男カルヴィンの働き	474
9 もうひとつの日本語辞書	477
10 9代目長男カルヴィンの別の工夫	479

11	三男ジョンの上海到着	482
12	北京路の美華書館	484
13	資料としての案内書	486
14	ユダヤ教会堂の存在	490
15	ラウリー記念教会堂	494
16	伝記と美華書館の移転	497
17	ヘプバーンとマティーア兄弟	499
22	『初期商務印書館研究』中文版序.....	509

あとがき 512

増補版あとがき 515

近代日中出版社交流の謎

『平成11年度 大阪経済大学市民教養講座 講義のまとめ』(大阪市教育委員会 刊 年不記 [2000.2]) に掲載。1999年6月12日、19日の2回、大阪経済大学市民教養講座で講演したものの要約。上海・商務印書館が、日本・金港堂との合弁をなぜ秘密にしたかったのか、その原因を明らかにする。さらに、その上海へ漢学者で有名な長尾雨山が教科書編集に参画した。高等師範学校教授の椅子を捨ててまで、なぜ、雨山は上海へ「移住」したのか。今まで、謎として誰も解明することのできなかった事柄について説明したことの記録である。十分に準備し、参会者の興味を引くように工夫をした。だが、観客は熱心であったが、興味を感じているとは見えなかった。あとからものの本を読むと、講演会形式では、その内容の8割を観客が知っていることが重要だと書いてある。中国の商務印書館も日本の金港堂も、急に説明されても知らないことには興味を持ちようがなかったらしい。私が広島で高校生だったとき、岩田一男がカップブックスの本に関連して講演をした。英語学習本のベストセラーの著者だから聞きにいった。その内容は、本に書いてあることばかりでガッカリしたことを今でもおぼえている。だが、そのやり方が正統だったようだ。

1 商務印書館から 中国・商務印書館は、日本・金港堂との合弁をなぜ秘密にしたか

なぜ「謎」なのかといえは、明治30年代後半から大正にかけて、日本の出版社と中国の出版社が共同出資して上海において合弁会社になっていたという事実そのものが、それほど知られておりません。中国においても、また、日本において

も同様です。知られていない事実を探索するのが、私のやり方なのです。

中国側の当事者が、日本の出版社との合併の事実を秘密にしたいという強い意図を持っていました。そうせざるを得ない時代背景がありました。さらに、「謎」が形成された理由としては、日本側の出版社が、現在は存在しておらず、合併の事実を知ろうとしてもその手掛かりがなくなっていることをあげることができます。今から数えれば、ほとんど百年前のことです。事実を知る直接の関係者は、いずれも他界しています。現在では、文献のみの探索になりますから、文献そのものに事実の記載がなければ、これまた日中出版社の合併の事実も忘れられることになるでしょう。

中国の出版社の名前は、商務印書館といい、中国大陸でも有数の大規模総合出版社であると同時に、百年をこえる長い歴史をもつ老舗でもあります。1949年以前の中国における商務印書館を表現して、組織規模の大きさが業界第1位、規則制度の完備している点が業界第1位、資金の豊富さが業界第1位、従業員数の多さが業界第1位、人材の育成が業界第1位、出版物の多様さが業界第1位、営業額の大きさが業界第1位、支店の多さが業界第1位、印刷技術の革新が業界第1位、労使紛争の激烈さが業界第1位、と言っています。

1949年以前には、5大書店と称せられた出版社がありました。規模の大きい順にいうと商務印書館(1897)、中華書局(1912)、世界書局(1921)、大東書局(1916)、開明書店(1926)となります。この5大書店のうち現在まで存続しているのがこの商務印書館と中華書局なのです。

中国・商務印書館と日本・金港堂の合併は、正確にもうしますと、1903年11月19日(光緒二十九年十月初一日、明治36年)から1914(中華民国3、大正3)年1月6日までの足掛け12年、実質約10年間のことでした。創業百年の歴史からすれば、わずかに1割の期間を占めるにすぎません。商務印書館が存続すればするほど、日本・金港堂との合併期間の割りあいは減少していくでしょう。しかし、創業期に行なわざるをえなかった外国企業との合併という事実を抹殺することはできないのです。なぜなら、この10年間の合併こそ、商務印書館がのちの巨大組織となる基盤を作り上げる重要な意味をもっているからです。

1897年2月11日(光緒二十三年正月初十日)、商務印書館は、8名からの出資金

を集めて上海に創業されました。創業者のひとりが、夏瑞芳（1872-1914）です。彼こそが、商務印書館の創業を決意し、日中合弁を決断した人物であり、またその合弁を解消した人でした。商務印書館は、キリスト教の信仰と鮑咸恩、咸昌兄弟との姻戚関係によって結ばれた家族企業として出発しています。教会の出版物を印刷することから事業を始め、英語教科書の出版に事業を拡張していきました。順調な発展をするかに見えた時、日本語教科書の出版に手を出し、でたらめな翻訳原稿をつかまされて損失をこうむる、印刷機器を所有する修文書館の買収に借金をするなどの経済的困難は、夏瑞芳の機転により増資というかたちで乗り切ります。その時の援助に乗り出したのが、張元済と印錫璋です。印錫璋は、紡織工場を経営しており、当時の三井物産上海支店長であった山本条太郎と昵懇の間柄でした。山本条太郎は、日本・金港堂社主である原亮三郎の娘と結婚しております。原亮三郎は、はやくから中国大陆へ進出しようとして計画しておりましたから、娘婿の山本条太郎が上海に赴任するというので当地の出版状況の調査を依頼したと考えられます。山本条太郎は、印錫璋から商務印書館のことを聞き、さらに社長の夏瑞芳から資金援助を乞われました。山本条太郎から原亮三郎に連絡がなされ、原亮三郎は渡りに船とばかりに合弁話を了承します。一方、夏瑞芳は、山本条太郎に資金援助を申し入れた事実を同僚たちには、金港堂が合弁したがっているというふうに話したと考えられます。当時の商務印書館は、出版にかんするノウハウも、印刷技術、機器のいずれもが金港堂より数段も遅れていました。結局のところ、合弁するとなれば、資本が圧倒的に巨大であった金港堂に呑みこまれる恐れが生じます。商務印書館が金港堂と合弁したにもかかわらず、その事実を公表しなかったその底には、この恐怖心が横たわっていたのです。

1903年、商務印書館と金港堂は、合弁会社となりました。日本企業と合弁した事実は、商務印書館が隠そうとすればするほど漏れるもので、これが商務印書館にとっての弱点とみなされることになったのです。日本資本が入っていることを理由に、印刷の受注からはずされる、教科書採用の審査から排除されるということが生じました。清朝末期には同業者の中国図書公司から日中合弁であることを理由に攻撃を受け、民国初期には中華書局からの同じような批判にさらされたのです。時代の流れがありました。異民族の支配する清朝から、その独立を宣言す

る中華民国が成立した時代なのです。日本という異民族と合弁会社を経営する商務印書館にとっては、都合のいいわけがありません。教科書編集の知識を得る、印刷の技術革新を行なう、優良出版物によって営業利益が増加する、商務印書館内部における日本人と中国人の円満な関係などいくらその利点を上げてみても、それが理解され通用するような時代風潮ではなかったのです。外部からの攻撃による精神的重圧に耐え切れず、金港堂との合弁を解消することにしました。持ち株の評価をめぐって金港堂代表者と長時間の交渉を経て、1914年ようやく合弁の正式解消に至ります。商務印書館は、金港堂との合弁時に味わった「呑みこまれる」という恐怖心を奥底に秘めたまま、外部には日本資本との合弁を隠さざるを得ない状況に長年にわたり耐えてきたのです。

現在、中国の「改革開放」政策により、従来の研究とは180度の方向転換がなされています。すなわち、外国企業との合弁事業は、中国側が外国資本に屈伏して一方的に搾取される関係、というお定まりの図式は覆されることになりました。それともない、商務印書館と金港堂との合弁は、双方が利益を上げた非常にうまくいった例として評価されるようになっています。ただし、商務印書館関係者には、日本との合弁に言及したくない、自分たちは被害者だという態度をとる人が今にいたるまで見られるように思われます。合弁時の恐怖心の大きさがわかるのです。

2 金港堂から 長尾雨山は、教授の職を投げ捨ててなぜ上海に移住したか

商務印書館の合弁相手である金港堂は、明治期において各種教科用図書を大量に発行し、文学社、普及舎、集英堂とともに明治の4大教科書出版社とよばれていました。文学雑誌『都の花』『文芸界』などの刊行でも有名な歴史ある出版社であることは、周知の通りです。社主原亮三郎は、1875（明治8）年、横浜弁天町に小書肆金港堂を開き、もっぱら文部省編纂の小学教科書を翻刻発売しておりました。翌年、さらなる発展をもくろみ店舗を東京日本橋三丁目に移します。教科用参考図書、その他の各種書籍を出版発売し、国内各地に代理店を設け、1883（明治16）、1884（明治17）年にいたり府下有数の書籍商となり、教科書書肆とし

て筆頭にあげられるようになっていきます。教科書の出版発売にはきびしい販売競争があり、教科書採用に向けて大々的な運動が繰り広げられるようになったのも当然の流れでしょう。文部省の運動禁止令も効果がなく、書店による運動が毎日の新聞紙面で報道されるほどです。教科書会社と教育関係者の小学校教科書をめぐる贈収賄事件、すなわちいわゆる教科書疑獄事件は、1902（明治35）年12月17日、全国一斉摘発からはじまりました。教科書会社関係者、県知事、府県書記官、府県視学官、師範学校長、教諭などなど、全国ほとんどの府県から逮捕者がでるといって一大醜聞です。すべてが終結したのは、1904（明治37）年でした。予審に付された者152名（内28名が免訴）、そのうち112名が有罪決定となっています。公判ののち、控訴、上告、差し戻し、再上告をへて、最終的には官吏収賄罪69名、恐喝取財犯1名、流職法違犯1名、詐欺取財犯1名、小学校令施行規則違犯44名、合計116名、追徴金7万円にのぼりました。また、この事件をきっかけにして、文部省がただちに教科書国定化に踏み切ったことでも有名です。

商務印書館の編集発行した教科書に日本人の雨山長尾楨太郎、小谷重らが協力したことは、よく知られている事実です。これは金港堂と商務印書館が合併会社となった最初の出版物でもあります。編者のひとり長尾雨山は、夏目漱石が第五高等学校時代に漢詩を添削してもらった同僚でした。雨山の略歴を見れば、帝国大学を卒業し、第五高等学校、高等師範学校の教授となった人物なのですが、どういう経緯で上海に渡り商務印書館の顧問となったのか、金港堂との関係は何だったのか、大きな謎として目の前に浮かび上がります。関係者は、誰も何も記していないのです。その謎が解けたのは、教科書疑獄事件を当時の新聞で追跡していく過程でした。意外な事実にぶつかったのです。長尾雨山は、教科書疑獄事件で拘束されていました。新聞記事を読んで事情が理解できました。出版社からの依頼で教科書の修正をやむをえず引き受けたところが、その報酬について収賄罪を適用されてしまったのです。詳細を知るにいたり、教科書会社の口車に載せられた冤罪ということがわかりました。しかし、裁判の結果は有罪となり、これが、長尾雨山をして高等師範学校教授の椅子を投げ捨てさせる結果に追い詰めたのです。長尾雨山は、中国に移住する決心をもって一家をあげて上海に渡ります。商務印書館では、教科書編纂に尽力し、附属の教育機関では講師もつとめました。

上海の文人との交流に活躍してもいます。商務印書館には、日本にいたころからの旧知の鄭孝胥も在籍していました。旧交を暖めたのはいうまでもありません。上海での生活が10年を数えた頃に、長尾が直面したのが日中合弁の解消でした。日本の資本をすべて商務印書館が買い取ることになり、長尾雨山も辞職します。辞職後に中国国内旅行を実行してのちに帰国、京都に住居を定めました。

長尾雨山が教科書疑獄事件に連座した事実は、日本、中国双方の友人たちもまったく話題にしていません。長尾自身の家庭内においてもそうでした。それは当然のことでしょう。自らすすんで気分の悪くなる話題を持ち出すわけがありません。ですから長尾雨山の子供たちは、その事実を知りませんでした。逆に言えば、沈黙から教科書疑獄事件が長尾雨山に与えた衝撃の大きさを知るので。いくらそれが冤罪であろうとも、有罪という意識が長尾雨山に深く沈潜していたと考えられます。

商務印書館と金港堂の合弁については、日中出版社交流という格好の題材であるにもかかわらず、これまで詳細が追求されたことはありません。資料の散逸が主な原因ではありましよう。今、考えてみれば、出版社と個人の運命を変えた教科書疑獄事件が深くかかわっていたからこそだったのだと思い至るのです。

【参考資料】1999年現在、入手可能な日本語文献（注：以下の文献は初出のまま）

樽本照雄「金港堂・商務印書館・繡像小説」『清末小説閑談』法律文化社1983.9.20

「商務印書館と夏瑞芳」 同 上

「商務印書館と山本条太郎」『清末小説論集』法律文化社1992.2.20

「商務印書館研究はどうなっているか」 同 上

「初期商務印書館をもとめて」 同 上

「変化しつつある商務印書館研究の現在　または、商務印書館の被害者意識」

『大阪経大論集』第46巻第3号（通巻227号） 1995.9.15

杉村邦彦「長尾雨山伝略述」『書苑彷徨』第2集 二玄社1986.8.5

稲岡 勝「教科書合弁、日中交流の師　今世紀初め、日本の出版社が清近代化に一役」

『日本経済新聞』1995.3.3

長尾雨山と上海文芸界

『書論』第35号(2006.10.1)に掲載。長尾雨山「現代支那の作家生活」は、長らく捜して得ることができなかった。渡辺浩司氏のご教示と資料提供を得て、その原文を読むことができた。本文中でも触れたが、あまりにもうれしかったから、ここでも書いておく。また、全文を収録して解説をつけくわえたのは、資料として保存するためでもある。『書論』には、雨山が勤務していたころの商務印書館全体写真と編訳所室内の写真掲げた。杉村邦彦編集長から、当時の写真で珍しいものがあれば提出するようにいわれたからである。辮髪姿の編集者が働いている室内写真は、『初期商務印書館研究(増補版)』に掲げている。『書論』の読者にとっては目新しいであろうと判断した。本書では、初期商務印書館全体写真のみを収録する。手前の空き地も商務印書館の所有地だ。

雨山長尾楨太郎が家族を同伴して神戸から上海に渡ったのは、1903年12月のことだった。その目的は、商務印書館において編集翻訳に従事するためである。商務印書館は、当時、日本金港堂との合併が成立した直後だった^{*1}。

1 その頃の商務印書館

商務印書館は、もともとが商業むけの印刷請負いを主要業務として創業した印刷所である。ゆえに「商務(商業事務の意)」のための「印書館(印刷所の意)」と称する。これにはキリスト教会関係の印刷物が含まれている。創業者たちが主としてキリスト教徒であったことと無縁ではない。商務印書館がのちに総合出版社

として大きく成長していく過程で、社長夏瑞芳がはたした役割は大きい。彼は、時代がなにを必要としているのかを把握する才覚を持っていた。すなわち、印刷業だけにとどまらない業務の幅を広げる努力をしたのだ。中国語注釈つき英語教科書、英漢辞典の発行に手を染めたのがその一端である。だが、波乱なく業務が拡大していったわけではない。創業後しばらくの経営は、形容すれば自転車操業だった。失敗も当然ながら経験している。日本語原書の漢訳ものが流行しているのに目をつけたのはよかった。だが、質の悪い翻訳原稿をつかまされて経済的苦境におちいるということもあった。そのころ、上海から修文書館が撤退しようとしていた。修文書館は、日本の築地活版製造所が上海に設立した支店として有名だ。夏瑞芳は、自社の経営状況がよくないにもかかわらず、印刷機器の全部を購入した。印刷技術改善のためである。そのような営業では、創業以降の借財は当然ながら増加する。これを清算するために、張元済と印錫璋（有模）の資金援助（第1次増資）を受けて経済的にはなんとか持ち直した。そればかりか、日本の三井物産との人的関係も生じることになる。修文書館の機器を斡旋した印錫璋は、紡織関係で三井物産上海支店の山本条太郎と親しくしていたからだ。印錫璋を介して山本と夏瑞芳のつながりができたのも自然の流れだった。

山本条太郎の岳父が金港堂社主の原亮三郎だ。中国での出版をはやくから計画していた原が、山本とのかかわりで上海の商務印書館と結びつく。その結果が、両社の合併であった。

雨山は、上海に到着するまもなく『最新国文教科書』の編集に参加している。金港堂側から雨山と小谷重が出席し、商務印書館側からは蔣維喬、張元済、高夢旦らが出てきての共同作業である。1904年に発行された該教科書が、その編集の斬新さで当時の中国において大いに歓迎されたことは周知の事実だ。雨山らが持ち込んだ日本方式の教科書であったことが大きな要因である。

一方で、雨山は、創刊された『東方雑誌』に論文を発表する（「対客問」第1-4、『東方雑誌』第1-5期1904.3.11-7.8）。また、坪内雄蔵『国語読本』巻5、6を漢訳して『日文読本』（1904）の題名で出版している。

以上を見れば、上海商務印書館における雨山の仕事が、論文執筆、教科書の編纂、翻訳であったことは容易に理解できるだろう。

それらの仕事とは別に、上海において中国文人との詩会を開催し、また、詩社を結成したとも伝えられている。日本で懇意だった鄭孝胥が商務印書館にいたから、彼との交流も復活したはずだ。ただし、その詳しい情況はというと、ほとんど記録が残されていない。

私が上海時代の雨山に注目するのには理由がある。商務印書館が発行していた小説専門雑誌、あるいは小説作品との関連なのだ。

商務印書館は、金港堂と正式に合併する以前、すなわち1903年旧暦五月に小説専門雑誌『繡像小説』を創刊している。外部からわざわざ李伯元を主編に招いての刊行であった*2。彼は、当時、南亭亭長という筆名で著名な小説家であり新聞発行者でもある。文芸方面における出版では、李伯元のほうが商務印書館よりも先行して経験と蓄積があった。それを見込んでの雑誌創刊だったと考える。

『繡像小説』は、書名のとおりに挿し絵を掲げて特徴にし、小説を主として掲載する半月刊である。挿し絵は石版印刷、本文は活版印刷を採用する。両面印刷ではなく伝統的な線装本だ。半月刊といいながら、金港堂との合併会社となってから発行が遅れはじめる。李伯元の死去後も約一年近く発行を継続し、全72冊を出して停刊したのが1906年年末*3のことだった。上海で発行されていた多くの小説専門雑誌が短命であったのに比較すれば、72冊というのは長く続いたほうだ。

外国文学の翻訳書は、単発で発行していた。これをまとめて「説部叢書」と称し出版しはじめる。一集に10種類を収録し、全十集100種という構成である。途中で改組し、後には300種をこえる規模にまで成長した。そのなかには多くの林紘訳を含んでいる。これは後に「林訳小説叢書」と名付けられて別に発行された。

また、嚴復の翻訳、たとえば『天演論』（ハクスリ著）、『法意』（モンテスキュー著）なども発行した。

商務印書館が、教科書発行のほかに文学を含めた多方面に編集発行の重点をおきはじめた時期であった。金港堂との合併が商務印書館に経済的安定と印刷技術の革新、さらには編集の技術情報をもたらした結果であることはいうまでもない。その業績は目に見えてあがりつつあった。辛亥革命の発生によって一時期営業成績が落ちることはあったにしても、基本的に右肩上がりの成長時期なのだ。

雨山が上海に居住し商務印書館に勤めていたのは、ちょうどその頃と時期的に



初期商務印書館 開北宝山路

重なる。

2 雨山の文章へたかまる期待

『繡像小説』の編集は、李伯元にまかされていた。とはいえ、商務印書館の刊行物であることには変わりはない。李伯元、あるいはその協力者である歐陽鉅源らと、編訳所にいた雨山との間になんらかのつきあいがあったとしてもおかしくはなかろう。雨山のほうから積極的に彼らに接触しようと思えば、それができた状況だった。私がそう考えて不都合はなにもない。商務印書館は、林紘の翻訳あれほど大量に発行している。その林紘を含んで、当時の商務印書館と関わりを持った中国の流行作家たちについて、雨山が何らかの情報を得ていても当然だと思うのだ。

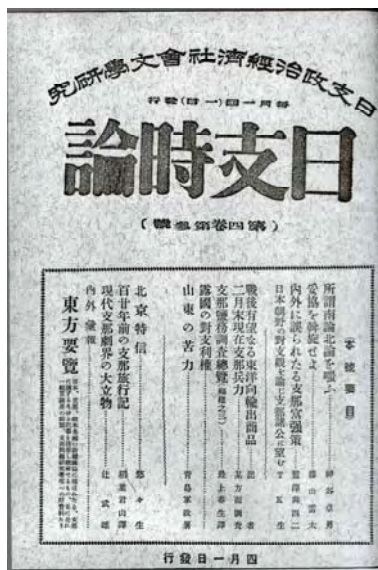
1914年12月24日、雨山は上海より帰国して長崎に到着した。実質11年間の上海

生活であった。この11年間を商務印書館で過ごしていながら、当時の上海文芸界における著名人と何の接触もなかった、と考える方が不自然だろう。私にとっては、その推測が、何か知っていたはずだという確信に近いものになる。今から思えば、根拠はまるでない。だが、私は、長らくそう考えていた。だから、雨山の文章をそれとなくさがし続けた。

談話というかたちで発表されたいくつかの文章はある。だが、雨山は、上海時代の中国人との交流について、ほとんど何も語っていない。なんとも不思議なことだ。

ただひとつだけ手がかりがある。長尾雨山「現代支那の作家生活」(『日支時論』第4巻第3号1918.4)だ。発表されているところまではわかっている。表題からして「現代」なのだ。当時の中国人作家について書いているらしい。雨山が長期間にわたって滞在していたのが、ほかならぬ上海だ。雨山が身近に接していた作家ではなかろうか。もしかしたら流行作家かもしれない。ならば、李伯元たちの名前が出てくる可能性もある。上海で商務印書館とくれば、雑誌『繡像小説』と李伯元が自然に連想される。私の期待は大きくなっていった。

ところが、『日支時論』の該当号が見つからない。雑誌の合冊本を入手したが、肝心のその号が抜けている。図書館の所蔵目録を見ても、ない。個人の所蔵だとすれば、目にできる可能性は少なくなる。長い時間が経過した。



半分あきらめていたころ、渡辺浩司氏からお知らせをいただく。研究機関に念のため問い合わせてみると該当号を所蔵しているとのことである。そればかりか、『日支時論』にある文章は再掲載であって、初出は『大阪毎日新聞』だというご教示だ。初耳である。さらには、長尾雨山談「輓近漢詩壇の傾向」(『大阪毎日新聞』1918.2.25)も掲載されているという。思いもしなかった。

雨山は上海文芸界の様子をどのように紹介しているのだろうか。以下において、彼の文章を引用しながら見ることにする。



3 長尾雨山談「現代支那の作家生活」(『大阪毎日新聞』1918.3.18。総ルビは省略。繰り返し記号の一部は文字に変換した)

新聞記事には副題がついている。「懸賞は無代の新聞 = 名作家の印税 / 四割 = 一千字一圓半乃至四五圓」という。金額を前面におし出す。印税と原稿料を示して読者の注意を引こうという新聞社の意図だと理解する。『日支時論』の再掲載文では、この副題は削除されている。

もともとが談話だから、全体の構成がきちんとしているわけではない。しいてわけるとすれば、内容はふたつになる。(1) 具体的な名前をあげて作家たちを紹介し、(2) 上海の出版社の編集体制とそれに関連して原稿料を説明する。

ここで「作家」としたのは、表題にしたがったからだ。雨山の用語によれば、「文士」ということだろうか。たしかに、表題通りに作家を中心とした談話であり、副題に示すような原稿料の紹介になっている。

(1) 作家たち

文章の冒頭から引用する。

何といつても、現代の支那では、まだ新思想が普及しないと見えて、旧学者は多数に居つても、新しい学者とか、

所謂文士小説家

などゝいふ者

は、時々輩出するにはしても、一向に育たない、

「所謂文士小説家／などゝいふ者」というように途中で二行に分けている。談話だから文章の区切りをつけるという意味を持たせた編集上の工夫だろう。

今、カッコで示した「所謂文士小説家／などゝいふ者」という表現が、なんとなく私の気にかかる。この表現からは、ほめているとは受け取ることができない。おまけに、「一向に育たない」というのだから先行きが不安になる。

其の少ない新学者或は文士の中で有名なのは先づ福建の林紓、巖復、今は故人になつたが広東の黄遵憲、此三人位で、其の他所謂新しい人とでもいふべきは陸甫で、其の父は有名な旧学者であつたが、甫は日本の文科大学に学んで、日本文学を修め、帰朝後新派の俳優となり、盛んに尾崎紅葉の「金色

夜叉」や

徳富蘆花の

不如帰などを

脚色んで、舞台に上し、大に喝采を博した。前後を見廻して先づ是位なもの
で他に新学者思想家文士などゝ称するものはあつても、目星いものはない、

雨山のいう文士が、具体的な名前をあげられている。林紓、巖復、黄遵憲だ。あとで少し詳しい紹介がある。林紓は、翻訳家としても著名だ。だが、当時、上海で注目を集めていた流行作家は、これには含まれていないようだ。おおいに心

配になる。

雨山が目をつけて特に紹介しているのは、「陸甫」という人物だとわかる。陸輔のことである。

陸輔は、芸名の鏡若で知られる。江蘇武進（今の常州）の人。日本に留学しており、名簿にその名前を見ることができる。

陸輔 扶軒 十八 江蘇湖陽 二十八年五月 自費 現在熊本予備入校*4

光緒二十八年五月というのは、「着京年月」が1902年であることを意味している。1907年に東京で春柳社に加入し、1911年ころ帰国後、上海の演劇界で活躍した。雨山がいう「金色夜叉」「不如帰」などを上演したらしい。ほかに知られている作品は、「家庭恩怨記」、佐藤紅緑原著「潮」を訳編した「猛回頭」、また、同佐藤の「雲の響」にもとづく「社会鐘」などがある。

陸鏡若の父は、爾奎である。1906年に商務印書館に入社している。『新字典』『辞源』などの編集で著名だ。陸爾奎は、雨山の同僚ということになる。

林紘は字は万里、年齢は相当に喰つて居るけれども、有名な文学者で文名を馳せて居る、万里は外国文は少しも読めないけれども、人に翻訳させて聞いて居つて、それで忽ち文を成すといふ程の天才で、彼が著書は勿論、その寄稿は

新聞雑誌などの

歓迎する所で

文名噴々たるものがある、

有名な林紘が登場する。だが、万里を林紘の字だと勘違いしている。万里は、林白水の名である。短い談話だが、雨山は自分の勘違いに気づいていない。

嚴復は字を又陵といひ、曾て赫胥黎の天演論（進化論）を翻訳してから、其の造詣と文名とを併せ称せられ、林万里同様一般に歓迎せられる所となつ

た、又黄遵憲は字を公度といひ、前に公使館書記官として、我国にも任に在つたが、英国在留中欧州の学問を学び、帰来新しい言葉を自由に詩に詠み込むことを得意として居た、新詩人で我国で言はゞ

正岡子規に

彷彿とした

詩人である、近頃になつて文名を挙げたのは、現に我国に在る羅振玉の門弟、王国維であつて、新進の文章家として、其の静庵文集の如きは、広く江湖に行はれて居る、

嚴復、黄遵憲、羅振玉、王国維らについて少しの説明があるだけだ。林紓と同様に雨山との関わりは述べられていない。ということは、雨山と彼らの個人的な交遊はなかったということなのだろうか。交遊はあったけれども、私事にわたることはしゃべることを避けたということもできるが。

其他に外国留学生などの帰朝したものは、役人になるには手蔓が必要であり、会社銀行は支那内地には極めて少数で人に制限があるから、容易に雇はれ難い、サウいふ所から為す事なしに、翻訳や著述を仕事として居るが、文名のあるものは殆ど聞かぬのみならず

新聞や雑誌

などの方面

でも、餘りこれらの寄稿を歓迎しては居らぬ様である、

外国留学から帰ってきた人材に対して、当時の中国社会が冷たいようすをうかがうことができる。「餘りこれらの寄稿を歓迎しては居らぬ様である」と雨山は述べる。しかし、雨山は商務印書館において、帰国者を活用しようと思えば、活用できる地位にあったのではなからうか。それとも雨山の目にかなう才能には会うことができなかつたか。どのみち、傍觀者の書き方である。

支那は什麼しても文字の国で、翻訳書の如きも、如何に其の内容がよくても、

文章が拙ければ少しも受けない、コンナ状態で、一般からいふと矢張り、無暗に新しい文学よりも、旧学出のシツかりした根柢ある、而も文名を持つて居る様な人々の方が歓迎されて居る^{ママ}翻つて雑誌や新聞の方を見ると、新聞紙の紙上には、小説や遊紀文等の閑文字が掲載されて、相当の読者を持つて居るが、その執筆者が林万里とか、巖又陵などゝいふ大家になれば、寄稿には相当の原稿料を払ふ様であるけれども

「如何に其の内容がよくても、文章が拙ければ少しも受けない」。中国の伝統的文章観がわかる箇所である。しかも、雨山はそれを否定しない。雨山に言わせると、林紘の翻訳もその内容からではなく、まず文章がうまいのが歓迎されている理由だ、ということになる。だからこそ原稿料も高い。

中国の伝統的文学観にどっぷりとつかった雨山の姿がまごうことなくここに存在している。

(2) 出版社編輯局と原稿料

文章の大家には高額原稿料が支払われる。それは、当然のことだと雨山は考える。それに比較して投稿家となると、評価はかなり低くなる。

多くは懸賞で

広く募集する

懸賞といつても、これは日本の様に何千圓の何百圓のといふ大金を懸賞するのではなくて、大抵幾月分かの新聞なり雑誌なりを無代で贈る位の事で、自然投稿家を専業として、生活を立てゝ居るなどゝいふ人は、広い支那に一人も無いといつてよい、

出版業者の方では各立派な編輯局を持つて、それには著名な人や、学識のある人を相当の給料で雇い入れ、其等の人々が雑誌なり書籍を作つて居るのであつて日本の様に寄書家の寄稿や、著述を当に出版をして居る様な所は殆ど無いと言つてよい、

この部分を読んで、私は少しおどろいた。「自然投稿家を専業として、生活を立てゝ居るなどゝいふ人は、広い支那に一人も無いといつてよい」と雨山は断言するのである。

清末の上海では新聞、雑誌の繁栄という従来に見られない新しい状況が出現した。李伯元は新聞発行と同時に作品を発表していた。吳趼人は、雑誌に小説を投稿して作家になっている。歐陽鉅源は、李伯元の新聞に投稿をつづけて彼の協力者になる。李伯元と吳趼人が経済特科に推薦されながらふたりとも辞退をしているのは、文筆によって生活することが可能になっていたのが原因である*5。

民国になってから職業作家が輩出したのは、この清末時期における上海文芸界の状況変化がもたらしたものだということができるのだ。商務印書館の出版事業は、まさにこの状況変化をうながし、さらには加速したものにほかならない。変化の現場にいる雨山が、その現実を認識していないのである。私が驚くのも無理はなからう。

時に林万里巖又陵などの人の著述を引受けた折には

約四割の

印税を払ひ

その他寄稿のあつた場合には、文辞の可否によつて一千字を単位に一圓五十銭乃至三四圓の原稿料を払ふことが殆ど決まり相場になつて居る、そして其等の編纂局へば上海の商務印書局^{ママ}や、教科書出版専門の中華書局などには、数十人の編纂員を持つて居り、其の学識文名によつて、多きは月三百四五十圓少なきも四五十圓の俸給を与へて居るから、相当な生活を営んで居るが、新聞社の方では、先づ主筆格で百四五十圓、平記者では二十圓位のものもある、以前ならば、上海でも月二三十圓もあれば、かなりな生活をする事は出来たが

近年の如き

物価騰貴では

これだけでは暮し様がない、でも、もともと支那では学問を修め文章でも作らうといふのは、相当の資産があるか、閑人であるか、役人の古手であるか

で相当の資産を持つて比較的裕福な生活をして居る者が多いやうだ。

当時の原稿料の相場については、さすがに詳しい*6。「商務印書局」とあるのは、単なる誤植だ。

出版社の編訳所で雑誌、単行本を制作している。外部の投稿家に頼ってはいない。これが雨山の認識である。だが、実際は、商務印書館でいえば『繡像小説』そのものが李伯元への外注だった。単行本にしてもすべてが内部編集というわけでもない。

相当の資産をもち裕福な生活をしているものだけが、学問を修め文章を作ることができる。雨山は、この中国の伝統的文士観から離れることができなかった。

ゆえに、激しく変化しつつあった当時の上海に新しい作家が出現していても、雨山の目には入らなかったらしい。その意味において、雨山は中国の文士と同じであった。言及があるのではないかと私が期待した流行作家たちは、雨山にとっては、話す価値もないどうでもいい小人物にすぎなかったということだ。

題名を見ただけで、勝手に想像して期待した私の方が悪い。わかってはいる。だが、「小説や遊紀文等の閑文字」の研究をしている私としては、正直なところいささかももの足りない雨山の文章であった。

【注】

- 1) 金港堂の原亮三郎が小谷重と加藤駒二をともなって上海を訪れたのは、1902年10月のことだった。商務印書館と合弁会社を設立するのが目的である。11月19日（陰曆十月初一日）、商務印書館と金港堂は10万円ずつを投資して総資本20万円の合弁会社となった。金港堂といっているが、原亮三郎の個人投資である。詳しくは、以下を参照のこと。樽本『初期商務印書館研究（増補版）』
- 2) 『繡像小説』の主編は李伯元ではない、とかつて汪家燊が主張したことがある。これについて樽本とのあいだに長年にわたる討論があった。問題解決の決定的資料となったのは、新聞に掲載された広告だ。「南亭亭長李伯元」を招いて『繡像小説』を編集してもらった、と明記している商務印書館の自社広告が当時の新聞に掲載されている。以下を参照されたい。

樽本「『繡像小説』編者問題の結末」『清末小説叢考』所収

- 3) 『繡像小説』の終刊は1906年4月だ、というのが中国学界での「定説」である。李伯元が同年4月に死去すると同時に停刊したと考えられている。だが、これは憶測にすぎない。根拠がないにもかかわらず、それが事実だと誤認されたまま現在にいたっている。以下を参照されたい。樽本「李伯元は死後も『繡像小説』を編集したか」『清末小説叢考』所収
- 4) 房兆楹輯『清末民初洋学学生題名録初輯』台湾・中央研究院近代研究所1962.4。42頁
- 5) 樽本「李伯元、呉趼人と経済特科の意味」(『清末小説探索』所収)において述べた。
- 6) 樽本「清末民初作家の原稿料」(『清末小説論集』所収)において詳しく述べた。

【参考文献】

杉村邦彦「有関長尾雨山的研究資料及其韻事若干」『印学論談』杭州・西泠印社出版社1993.10。

268-325頁

松村茂樹「長尾雨山『嘉慶道光以後の支那画』」『中国文芸研究会会報』第150期記念号1994.3.30。

116-121頁

樽本「商務印書館の火災　いわゆる「焼け太り」の不可解」本書所収

樽本「『繡像小説』の坂下亀太郎「理科遊戯」」本書所収

樽本「商務印書館の日本人投資者」本書所収

商務印書館の日本人投資者

『清末小説』第29号(2006.12.1)に掲載。商務印書館に投資していた日本人の名前は、すでに公表されている。だが、各人がどのような人なのかは簡単な紹介があるだけだ。本稿は、それをより詳しく調査したもの。

表題の商務印書館には、「初期」とつけてもいい。しかし、そうはしない。

日本人が商務印書館に投資していたのは、1903年から1914年までの期間である。別の表現をすれば、商務印書館と金港堂の合併時期に重なる。1897年の創設だから、「初期」で間違いはない。現存する商務印書館について、「中期」とか「後期」を設定するのは無理としても、創業から1914までを「初期」と称することはかまわない。本稿で「初期」を使用しないのは、わざわざ特定しなくてもわかるからだ。

辛亥革命をへて中華民国が成立すると、外国企業である金港堂との合併会社ではいられなくなった。日本人の持株を回収して合併を解消することにする。交渉を重ね合併解約にこぎつけるや、商務印書館は、純粹中国資本であることを大いに宣伝した。それ以後は日本人の投資を考慮することもない。時期が限定できるから、わざわざ「初期」とかぶせる必要もないという理由である。

つぎのごく簡単な説明は、大筋であって常識の範囲内だろう。すなわち、1903年、金港堂と商務印書館は、双方平等に10万元を出しあい正式に合併会社となった。実質約10年間の日中合併を解消して日本人株を完全に買収しおわったのが1914年のことだ。その時の日本人の持株は3,781株だった。

これくらいのことは、どこにも書いてある。だが、日本人投資者にはどういう人物がいて、各人が何株を所有していたのか、というより深い部分になると話が違って来る。

日本人投資についての情報は、商務印書館の内部文書にしか存在しない種類のものだ。もとの資料そのものは、これまで公表されたことはない。だが、具体的な人名とその持ち株数はわかっている。論文というかたちで発表されているからだ。

まず、その論文を紹介することからはじめよう。(以下、汪家熔論文と稲岡勝論文についてのべる。手っ取り早く今回の調査を知りたいばあいは「3樽本の追加説明」へどうぞ)

1 汪家熔論文

日本人投資者たちの名前を最初に公表したのは、汪家熔である。商務印書館の内部文書を見なければ書けるはずもない。商務印書館に勤務していたからできたことだ。ただし、彼の前にも資料を見た人はいたに違いないが、それを公表したことはない。商務印書館が日本の金港堂と合弁会社であったという事実を明らかにすることのできない時期が続いたからだろう。1990年代になって、ようやく公開が許されたと考えられる。いずれにしても汪家熔の功績である。

汪家熔は関連論文3本を書いた。それらは、創業時期の株主たちについて紹介するものだ。その中の1本は、日本人株主を特に抜き出して論じる。だから、内容から見れば主として2種類に分けることができる。それらは、最初、雑誌に掲載され、のちに自著などの単行本に収録されている。その過程で部分的に訂正増補を加えているから、まったくの同一文章だというわけではない。それぞれの論文に、便宜上、A1、A2、A3を、内容が類似するからaを、日本人株の専論だからB1、B2のように記号と番号をふる。番号の1は、初出を示し、それ以外は後の収録を表わす。

A1:「商務印書館創業諸君」『江蘇出版史志』総第7期1991.10

表題通り商務印書館を創業した人々について書かれた論文である。以下の単行本に収録された。

A2：汪家熔著『商務印書館史及其他 汪家熔出版史研究文集』北京・中国書籍出版社1998.10

A3：宋原放主編、汪家熔輯注『中国出版史料・近代部分』第3巻 武漢・湖北教育出版社2004.10

創業した人々といっても、日本との合併をへて日本人株回収までを記述の対象とする。創業時期の人々と考えればいいだろう。私は、本稿において日本人投資者に注目する。それ以外は簡単に紹介するにとどめたい。

第1章では、高翰卿の1917年と1934年の2回にわたる回顧にもとづいて、創業当時の出資者とその金額を明らかにする。出資金の合計は3,750元だ。ただし、出資者は7人なのか8人なのか、出資者のひとりである高翰卿自身の発言が異なっている。問題が存在していることだけを、再度、指摘しておく*1。

第2章は、鮑哲才牧師一家に関してのものだ。彼らは、商務印書館を創業した夏瑞芳らの中心人物たちと姻戚関係であった。なるほど、商務印書館のももとの指導者たちは、キリスト教の信仰と姻戚で固められたグループだ、と容易に理解できる。文字通りの家内工業であった。ついでに言えば、夏瑞芳の家族写真がある。夫人（鮑哲才次女鈺）とともに9名の子供が写っている（樽本『初期商務印書館研究（増補版）』清末小説研究会2004.5.1に収録しておいた）。信仰に篤い夫妻だった。

第3章は、第1次増資をあつかう。1901年の夏、張元済と印錫璋が2万3,750元を投資し、資本金を5万元とした。印錫璋は、紡織会社を経営していた関係で三井物産の山本条太郎と知り合いだ。印錫璋は、この投資によって商務印書館の株主になったというわけ。これが、金港堂と合併する下地となったのである。金港堂社主の原亮三郎は、山本の岳父だ。

汪家熔は、この部分に典拠があることを示す。「参関樽本照雄：《商務印書館与山本条太郎》，《清末小説》第2輯」だと書いている。だが、掲載誌を『清末小説』とするのは汪家熔の勘違い。

1970年代のことだ。私は、商務印書館と金港堂の合併問題を調査していた。その結果を「金港堂・商務印書館・繡像小説」（『清末小説研究』第3号1979.12.1。のち

『清末小説閑談』所収)と題して発表した。さらに、両社の合併にかかわって山本条太郎と印錫璋の関係があることを書いた。それが、「商務印書館と山本条太郎」(『大阪経大論集』第147号1982.5.15。のち『清末小説論集』所収)である。そこまでは、なんとか判明した。しかし、それ以上の資料が出てこない。金港堂との合併資料が保存されていないか、と北京の商務印書館あてに問い合わせの手紙を書いた動機である。それに添えた論文のひとつが上述の「商務印書館と山本条太郎」だ。しばらくして商務印書館総編室名義で返答があった。「わが館の早期保存資料は、1932、1937年の淞滬抗戦期にすべてを失ってしまい、ゆえに提供しようにも方法がありません」と書かれている。返答をよこした人物の真意は、私には十分すぎるほど理解ができた。

さらに数年が経過した。無視されたとばかりに思っていた私の「商務印書館と山本条太郎」だったが、意外なところで翻訳されていることを知った。[日]樽本照雄著、東爾訳「商務印書館与山本条太郎」(『商務印書館館史資料』之四十三 北京・商務印書館総編室編印1989.3.20)である。『商務印書館館史資料』は、商務の内部刊行物であって日本で見ることなどではししない。汪家熔は、この漢訳を読んだのだろう。注記するさいに『大阪経大論集』と『清末小説研究』第3号を取り違えたものと考えられる。

第4章が「中日合資」だ。金港堂との合併であるというのは、正確ではない、と冒頭にのべる。原亮三郎が中心となった日本人との合併だという。今まで、商務印書館と金港堂の合併だ、といいならわしていた。また、当事者である高翰卿は、その回憶録「本館創業史」において、山本条太郎と金港堂の名称だけをあげて原亮三郎の名前はない。あくまでも金港堂が中心である。汪家熔がいうのは、原亮三郎の個人投資だという意味だろうが、これは中国では見ることでできなかった説明だ。

それはそのはずで、私が「金港堂・商務印書館・繡像小説」の中で「正式な合併とはいえ、企業間の合併ではなく個人の投資」(111頁)だと書いたのを根拠にしている。私の記述は、原安三郎から直接に証言を得てそれにもとづいたものだった。

以上のように、汪家熔は、日本語の先行文献をもとにして原亮三郎、三宅米吉、

教科書疑獄事件、山本条太郎、加藤駒二、小谷重らについて解説する。

論文を利用するのは、別にかまわない。ただし、日本語文献をそのまま引用して、はたして理解しているかどうかわからない箇所がある。たとえば、小谷重について「金港堂正七位編輯主任」(A1:68頁)と書く。また、「長尾是從六位教授」(同上)という表現をする。後者に続けて「小谷の職稱よりも高い[比小谷的職稱高]」と説明する。これでは意味が不明だと考えたのか、のちに記述を変更した。つまり、前者は、「金港堂“正七位”編輯主任」(A2:15頁、A3:120頁)に、後者は「長尾是“從六位”教授」(同上)のように引用符を使用するのだ。汪家熔は、それらが金港堂内部における「職稱」だと考えたらしい。私は、新聞に報道されたとおりに、「高等師範学校教授從六位長尾禎太郎(号雨山)」、「金港堂編輯主任正七位小谷重」と書いている。「從六位」「正七位」とは、いうまでもなく官位であって金港堂とは関係がない。小谷は文部省に勤務していたし、長尾は高等師範学校教授だったから官位がついているだけのことだ。

もうひとつある。日本人ふたりの貢献度と彼らの「職稱」について、汪家熔は、同じページで次のように説明する。「小谷と長尾は、商務が合弁したあとに編集した『最新教科書』について一定の貢献をした。しかし、その貢献は、日本の学者が信じているような長尾が自分でのべているほどに大きいものでは決してなかった。長尾は從六位の教授で小谷の職稱よりも高いため、『最新教科書』の表紙でも長尾が前にいる」

汪家熔は、長尾があたかも教科書編集について述べているかのように説明している。だが、長尾雨山は、自分が編集に参加した『最新国文教科書』について、何かを語ったという事実はない。汪家熔は、勘違いをしている。これが間違いのひとつ。

長尾の教科書編集についての貢献度は、たいしたものではなかった、という。本当にそうなのだろうか。こういうばあい、日本の学者の「思いこみ」をただ単に批判するだけでは、汪家熔の書き方は感情的だといわれてもしかたがなからう。そうではなく、具体的に編集の内容にわたって説明しなければ、批判にはならない。これが間違いのふたつ目。

みつつ目の間違いは、『最新国文教科書』を見れば簡単にわかる。すなわち、

その表紙には校訂者として、日本前文部省図書審査官小谷重、日本前高等師範学校教授長尾楨太郎、福建長楽高鳳謙、浙江海塩張元済の順で名前があげられている。小谷の名前が長尾の前に置かれているのは誰の目にもあきらかだ。ということで、汪家焘の書いているのは正しくない。この順位は、教科書そのもののほかにも見ることができる。『東方雑誌』創刊号（1904.3.11）の広告「最新初等小学教科書出版」だ。そのまま書き抜いておく。「日本文部省図書審査官兼視学官小谷重君高等師範学校教授長尾楨太郎君及曾從事中国学堂之福建高君鳳謙浙江張君元済」

順位もさることながら、これを見れば商務印書館の意図を鮮明に理解することができる。すなわち、小谷、長尾、高鳳謙、張元済らを教科書編纂のために特に招聘したことを強調してあますところがない。

『最新国文教科書』の編集校訂に小谷、長尾らが大いに貢献したことは、商務印書館自身が認めて広告している。汪家焘は、この事実を無視したいらしい。日本人の貢献を無視したいのならそれでもかまわない。そうならば、同じ広告、あるいは教科書の表紙に見える高鳳謙、張元済らの貢献も同様に無視することになるのが理解できないのだろうか。日本人は無視して高鳳謙、張元済は評価するというのであれば、なにをかいわんや。

それよりも、私が注目するのは、1905年旧暦二月に2度の増資をしたという事実のほうである。それまで、そのような事があったとは知られていない。しかも、日本人投資者の名前が具体的に挙がっているところが新しい。

2度の増資のうち前のほうで投資した日本人は、原亮一郎、山口俊太郎^{ママ}、利見合名会社、篠崎都香佐、益田太郎^{ママ}、益田タタ^{ママ}、藤瀬政次郎、鈴木島吉、神崎正助、丹羽義次、伊地知虎彦だ。後で投資したのは長尾（雨山）のほかに、田辺輝雄、小平元、木本勝太郎、原田民治だという。汪家焘は、「全部で19名」だと書いているのだが、ここに見えるのは16名（うちひとつは会社名）でしかない。日本側理事の名前に原亮三郎と加藤駒二をあげているのを数えれば18名で、それでもひとり不足する。「益田タタ」という日本人名は、たぶん存在しない。カタカナを表記できずに漢字の「タ」で代用したとわかる。それにしても「タタ」はないだろう。推測できるのは「タマ」か。

珍しい資料ということが出来る。私は、すぐさま『清末小説から』第26号(1992.7.1)において、汪家熔論文の該当部分を紹介したくらいだ。

原田民治については、汪家熔が解説している。原田は金港堂とは関係がないらしい。1898年の戊戌前には中国に来ていて、羅振玉らの経営する東文学社、農学会が発行していた『農学報』『教育世界』雑誌の要請で日本語教育と翻訳に従事していたという。王国維は原田に日本語を学んだ。もうひとりの小平元は、紙購入の責任者だった。中国側から尊重され、日本資本が引き揚げたあとも彼は引き続き奉職した。後に自分で仕事をはじめてようやく商務を離れたという(A1:68頁、A2:15頁、A3:120-121頁)。

原田と小平の両名以外には、汪家熔は説明を加えてはいない。

続けて1902年に設立された編訳所に勤務した人々に言及する。高夢旦、蔣維喬、伍光建、孟森、夏曾佑、杜亜泉らである。

第5章は、日本資本の回収についてのべる。ここでは触れない。

この「商務印書館創業諸君」とほぼ同じ内容の、題名が異なる論文がある。

a: 長洲「商務印書館的早期股東」『(1897-1992) 商務印書館九十五年 我和商務印書館』北京・商務印書館1992.1

著者の「長洲」は、汪家熔の筆名であろう(のち、本人に確認した)。私がそうだと判断する理由は、簡単だ。論文の内容が、先のA1-A3「商務印書館創業諸君」と基本的に同じなのである。

部分的に省略しながら、比較的大きな違いもある。たとえば、高夢旦、蔣維喬、伍光建、孟森、夏曾佑、杜亜泉らを差し替えて、嚴復、謝洪賚、艾墨樵、沈知方、沈季方、高鳳崗、張廷桂、李恒春らについて説明している箇所がそうだ。

私が注目する日本人投資者についても、すこしばかり変更がある。

先には「1905年農曆2月」と書いていたのを「1905年2月」と変更する。これでは新暦2月と間違うではないか。

日本人投資者の氏名に出入りがある。変更部分を【】(書き換え) ×(削除)で示す。

原亮一郎、山口俊太郎【郎】、利見合名会社、篠崎都香佐、益田太郎【郎】、益田夕夕【玉】、【田辺輝雄】、藤瀬政次郎、鈴木島吉、神崎正助、丹羽義次、伊地知虎彦

長尾（雨山）×田辺輝雄、小平元、木本勝太郎、原田民治

前出「即」だったのを「郎」と正しく表示し、益田「夕夕」を「玉」に変更する。「2月下旬」の増資時に参加したはずの田辺輝雄を前に移動した（a:650頁）。

「玉」はいいにしても、田辺については、投資の時期が違ってくる。なぜそうなるのか、理由を説明しない。書類の整理がうまくいっていないのだろうか。

a 長洲「商務印書館の早期股東」は、私の知る限り別の単行本には再録されていない。田辺輝雄に関しての変更は、疑問符をつけるほかしかたがないだろう。

前述したように、商務印書館への投資者のうち日本人株主を抜き出したのが次の論文だ。

B1：「商務印書館日人投資時的日本股東」『編輯学刊』1994年第5期（総第37期）1994.10.25

この論文もA2と同様に汪家熔の著作に収録されている。

B2：前出『商務印書館史及其他 汪家熔出版史研究文集』

汪家熔は、該論文において1914年時点での日本人投資者名簿を掲げた。これこそが、注目に値する新しい資料なのだ。

商務印書館が金港堂との合併を解消するためには、日本人の持ち株を買収しなければならない。そこで作成された資料だとわかる。詳細な一覧表には、17の番号をふってそれぞれの氏名（名称）と持ち株をまとめている。各人の持ち株がいくらだったのか、以前には公表されたことなどない。まさに、画期的であった。

この名簿にあがった人名について、1996年、稲岡勝がその所属肩書きを注記した。それをまた、1998年に汪家熔がそのまま自分の著作に収録する、という経過で現在にいたっている。私も、稲岡の成果を引用したことがある。

汪家熔が提出したのはどのような名簿だったのか、下に示して見てもらうことにしよう。ただし、持ち株を1株=100円で評価した金額まで記入するのはわず

らわしいので省略している。「 」で示した箇所は、汪家熔が各人について説明していることを私なりに要約したものだ。

序次	執股人姓名	入股数	
1	木本勝太郎	135股	日籍職工
2	長尾楨太郎	45股	日籍職工
3	篠崎都香佐	88股	
4	小平 元	60股	日籍職工
5	原田 民治	13股	日籍職工
6	神崎 正助	30股	
7	尾中満吾(華南記)	22股	
8	原 亮一郎	515股	原亮三郎の長男。金港堂社長。最初の投資者
9	原 亮三郎	1,055股	金港堂書店の創業者。最初の投資者
10	山本条太郎	764股	山井洋行上海支店長。原亮三郎三女の婿。最初の投資者
11	丹羽 義次	45股	
12	鈴木 島吉	80股	
13	伊地知虎彦	15股	
14	益田 太郎	329股	加藤駒二から株譲渡？
15	益田 タマ	167股	加藤駒二から株譲渡？ B2:33頁,34頁では「タタ」
16	山口俊太郎	383股	
17	利見合名会社	35股	
	共 計	3,781股	

以前、汪家熔は、1905年旧暦二月に2度の増資をした、と書いていた。ところが、この論文では、上記1、2、4、5番の日本籍職員は、「光緒三十一年（1905）十二月二十二日」の株主会議で職員のなかで特別に尽力したものに株の取得を許す、というので投資したと説明する（B1:91頁、B2:32頁）。旧暦二月ではない。お

まけに、「光緒三十一年（1905）十二月二十二日」は、新暦では1906年1月16日だ。旧暦二月に2度増資をし、さらに十二月以降にも増資したという意味なのだろうか。汪家熔の記述がゆれている、あるいは説明が不足しているといわざるをえない。

名簿には見えない人物について汪家熔は、次のように指摘する。

加藤駒二は、日本側理事のひとりだった。商務の規則によれば株主でなければならぬが、最終的な株主のなかに名前がない。

「査賬董事」田辺輝雄は、その肩書きを日本語に翻訳すれば監査役理事ということになるだろうか。彼の名前も名簿にない。

益田タマは、後のB2で「タタ」にもどしている。これも汪家熔の記述のゆれである。

原田民治については、前稿では、商務印書館とは無関係であると説明していた。ところが、13株を所有している事実をふまえて考えを変えたい。すなわち、「日籍職工」と表現する理由だ。汪家熔は、自説について訂正の説明をしない主義だとみえる。

考えてみれば、商務印書館の株を所有することは、商務とのかかわりがあるかないかとは無関係ではなからうか。しいていえば山本条太郎、あるいは原亮三郎と人的つながりがあれば、それだけで株を所有する理由としては十分な気がする。

2 稲岡勝論文

稲岡勝は、「日中合弁事業の先駆、金港堂と商務印書館の合弁1903-1914年」（東京都立中央図書館報『ひびや』第145号1996.3）において、汪家熔の提示した名簿（B1所収）に各人の所属、肩書きをつけ加えた（30頁）。もとの論文では番号は省略しているが、閲覧に便利のように付けて示す。

	株主氏名	持株数	備考（肩書、所属など）
1	木本勝太郎	135	商務印書館（印刷）、元金港堂
2	長尾楨太郎	45	同 編訳人、元高等師範教授

3	篠崎都香佐	88	篠崎医院院長（在上海）
4	小平 元	60	商務印書館（印刷）、元金港堂
5	原田 民治	13	不詳
6	神崎 正助	30	三井物産
7	尾中 満吾	22	不詳
8	原 亮一郎	515	金港堂社長。原亮三郎の長男
9	原 亮三郎	1,055	金港堂創業者
10	山本条太郎	764	三井物産。原亮三郎の女婿
11	丹羽 義次	45	三井物産？（山本条太郎部下）
12	鈴木 島吉	80	正金銀行上海支店
13	伊地知虎彦	15	三井物産（山本条太郎部下）
14	益田 太郎	329	不詳
15	益田 タマ	167	不詳
16	山口俊太郎	383	実業家。原亮三郎の女婿
17	利見合名会社	35	大阪で教具の製造販売
計		3,781	

原田民治についての汪家焜A1あるいはB1の説明は、無視されて「不詳」になってしまった。それ以外は、よく調査された記述だ、と私は今でもそう思う。当時、上海に滞在していたであろう日本人について調べることは、それほど簡単なことではない。だからこそ、汪家焜はB2において、全面的に稲岡の調査を受け入れた。ゆえに、不思議なことながら、汪論文では、原田民治も「不詳」になっている。

ついでにいえば、後のB2では「2 長尾^マ真太郎」、「15 益田^マタマ」とかえって間違っているのは、単なる誤植なのだろうか。

日本側投資者の肩書きを見れば、そのほとんどが金港堂と三井物産の関係者で占められていることがわかる。原亮三郎と山本条太郎の姻戚関係を知っていれば、金港堂関係者が中心となり三井物産の人間をまきこんだ日中合併という事実にはちがいが無い。

3 樽本の追加説明

汪家熔、稲岡勝両氏の調査を尊重しながら、私の調査結果を報告する。ほとんどの人物については、記録の断片を寄せ集める結果となった。先行文献と重複する、あるいは調査が十分ではない部分がある。了解してほしい。

1 木本勝太郎

金港堂（書籍株式会社）勤務。『少女界』創刊号（1902.4.11）の発行人にその名前が見える。上海へ渡って商務印書館技師長となる。給料は180元だった〔朱蔚伯1981:147〕。1910年4月の東亜同文会上海支部会員役員名簿に名前がある〔東亜1988:472〕。『張元濟年譜』には、1908年7月2日に長尾楨太郎と一緒に名前がでてくる。もう1ヵ所、1930年7月30日にもある。こちらには注がついて、上海印刷有限公司を開設、小平元も同社の社員と説明する〔張樹年1991:342〕。小平元のところでも触れる上海印刷株式会社のことだ。木本が先に社長であり、それを継いだのが小平かと考える。

木本と小平のふたりは、『張元濟日記』に併記されて登場することがある。木本は印刷を、小平は印刷用紙の買い付けを担当していた。印刷と用紙だから、印刷所にとってはどちらも欠かすことができない。

商務印書館と金港堂が約10年間にわたる合併を解消したのは1914年1月のことだった。日本人職員はただちに解雇されたかということ、そうではない。木本と小平については、商務側が強く引き留めた。

1916年になっても商務印書館で働いている事実がある。張元濟の記録によると、同年2月26日、色彩石印判について木本が発言している〔張元濟2001:25〕。11月6日の記録には、張元濟、高翰卿、鮑咸昌の3人がかりで夕食をともしながら木本の説得にあたったとある。すでに四十七歳だという木本の言葉から、どうやら上海で印刷所を開業するらしいと知る。それから、条件交渉だ。まだ決定していないのなら、やめるのがよい。もし着手しており機械などを購入しているのなら商務で引受けてもいい。組織ができているのなら、相談しよう、競争はしたく

ないなどなど [張元濟2001:179]。木本は商務印書館の指導者たちから、それくらい重要視されていたことがわかる。11月25日、張元濟ら指導者たちは相談して小平、木本ふたりの待遇改善について相談した。給料を上げて引き留めようというつもりだ。しかし、ふたりの辞意は固かった [張元濟2001:187]。11月27日には、引き留められないのであれば、せめて顧問に、と張元濟は記録している [張元濟2001:188]。木本と小平のふたりは、商務印書館にとってはなくてはならないほど有能だったということだ。

1917年4月9日、木本と小平の新しい工場が開業した。張元濟は、祝いにでかけている [張元濟2001:271]。すなわち上に見える上海印刷株式会社である。

『張元濟日記』を資料のひとつとして『張元濟年譜』が編纂された。こちらの年譜には不思議なことに、木本がふたりいる。木本毅と木本勝太郎だ。日記には「木本(君)」としか記録されていないが、文脈から勝太郎と理解してかまわないと私は思う。ところが、年譜では、なぜだか木本毅とする箇所がある。上に紹介した張元濟ら3人が木本に留まるように説得したのは、年譜では11月5日のことにして、次のように書く。「もと金港堂日本籍職員の木本毅(色彩印刷を管理)が辞職するつもりだというので、氏(注:張元濟)および高鳳池(翰卿)と鮑咸昌は、夕食に誘って引き留めた」[張樹年1991:130]

年譜にある木本毅は勝太郎の間違いではないかと疑う。

2 長尾楨太郎(1864.9.18-1942.4.1)

東京帝国大学文科大学卒業。学習院教師、文部省専門学務局勤務、東京美術学校教授兼務、第五高等学校教授、東京高等師範学校教授などを歴任している。1901年6月、東京の華族会館で東亜同文会明治三十四年春大会が開かれた。会長は近衛篤磨である。この会合に原亮三郎とともに参加していることがわかった [東亜1988:333]。東京高等師範学校の教授だから、書肆金港堂の社主である原亮三郎とも面識はあったかもしれない。そののち、上海に移住することになるとは、この時点で、長尾は思いもしなかっただろう。

1903年、上海に移住し商務印書館編訳人となる。給料は200元だった [朱蔚伯1981:147]。前出1910年4月の東亜同文会上海支部会員役員名簿に名前がある。肩

書きは商務印書館だ [東亜1988:471]。金港堂と商務印書館の合併契約が解消されたのち、1914年、帰国。長尾が家族を連れてなぜ上海に移住したのかについては、私はすでに明らかにした。

3 篠崎都香佐

上海の篠崎医院院長。遠山景直『上海』に病院の広告が掲載されているので紹介しよう。

「明治三十三年二月上海日本居留官紳ノ招聘ニ応ジ着任爾来外来診察所及病院ヲ開設セリノ上海西華徳路（電話七四五）ノ篠崎病院診察所ノ上海北四川路（電話架設中）ノ篠崎病院ノ庭園中種々ノ運動遊戯ノ設備アリノ院長篠崎都香佐ノ医員北村久男」[遠山1907:乙4]。

明治33年とは1900年のこと。また、同書の別のページには「医師 虹口西華徳路11 篠崎都香佐」と書かれている [遠山1907:401]。『上海指南』第4巻16才によると、その所在地は、美租界西華徳路11号と表記される [商務印書館1909]。同書増訂9版（1916.10）には「篠崎都香佐（内外）蓬路三元宮後」[商務印書館1916]と掲載されているのを見ると移転をしたらしい。

東亜同文書院名誉会員名簿に、その名前を見ることができる [松岡ら1908:5]。また、前出1910年4月の東亜同文会上海支部会員役員名簿にも掲載されている [東亜1988:471]。名簿には上海に居住していた有力日本人が名前をつらねているから、後援会的役割をになっていたかとも思う。

1936年5月5日、山本条太郎翁追憶座談会に篠崎都香佐が出席している。肩書きは「元上海医師会会長、医師」だ。当日の会合は、山本の上海時代における旧知を集めたものだった。篠崎のほかに、本稿に関係する数人の名前が連なっている。

篠崎の発言を採取しておこう。「私は色々親切に御世話にはなりましたが、山本さんの上海時代には余り接する機会がなかつたので、具体的に申上げる材料を持ち合はしてゐませぬ。最近の東京に来てからの話ならばありますが……」[原1936:693]。「私はさつき何にも申上げることはないと言つたが皆さんのお話を聞いて居る内に一寸想出したことがあります。私が上海に居りました時に山本さん

は会社の二階にお出になりましたが初めは馬車も貧弱なものであつた。しかし郵船会社支店長が林民雄さんになられた頃からフランスタンの宏壮な家にお入りになり馬車も頗る立派なものになつた。それから私は身幅が広い様な気がした。さつき兜町で駆出すと云ふ話がありましたが、私はどうして市場の動きが敏活に山本さんには分るのかと云ふたことを訊ねたことがあります。「うん、それは分る、頭にピンと来る、それを其儘にやる。間違ふこともある」と言はれました」〔同上:711〕。

1939年、篠崎医院の所在地は文路200号であるが、篠崎都香佐の名前は記載されていない〔金風社1939:377〕

4 小平 元

小平については、汪家熔の説明があつた。「紙購入の責任者だつた。中国側から尊重され、日本資本が引き揚げたあとも彼は引き続き奉職した。後に自分で仕事をはじめてようやく商務を離れたという」。稲岡の注釈を見ると、元金港堂勤務で、のちに商務印書館の印刷を担当したことになる。商務印書館の株を所有するくらいだから有力な社員だつた。

前出1910年4月の東亜同文会上海支部会員役員名簿に名前がある〔東亜1988:472〕。肩書きは「商務印書館」だ。商務印書館の日本人は、彼のほかに長尾楨太郎、木本勝三〔太〕郎、加藤駒治〔二〕らが掲載されている。彼らは、少なくとも1910年には、上海に居たことがわかるのだ。

黄光域『近代中国専名翻訳詞典』に小平の名前がある。「Kodaira, Hajime 小平元 日本商人, 1906年前来華」〔黄光域200:550〕。小平は、1905年の商務印書館増資に応じているから、1906年以前に中国に来ているというのは、それで正しい。

小平は、金港堂と商務印書館の合併解消後もそのまま上海にとどまった。木本とふたりで1917年に開業したのが、上海印刷株式会社である。各種製版印刷、製本印刷用紙および諸材料インキ販売業だと説明してある。その取締役社長が小平元（北海道）だ〔金風社1939:336〕。該会社は、1939年の時点で上海に存在していたことがわかる。その時の社長が小平で、木本の名前が見えない。ゆえに、木本をついで社長になったのだらうと考えた。

5 原田民治

王国維に日本語を教えたという。詳細は不明。『農学報』と『教育世界』の目次を見てみたが、該当者を探し当てることはできなかった。また、汪向荣著、竹内実監訳『清国お雇い日本人』（朝日新聞社1991.7.5）、および劉建雲『中国人の日本語学習史 清末の東文学堂』（学術出版社2005.11.25）にも原田の名前はない。

6 神崎正助

三井物産社員。上海支店勤務をしたことがある。前出1910年4月の東亜同文会上海支部会員役員名簿に三井洋行の所属で名前がでていいる〔東亜1988:473〕。1936年5月5日、山本糸太郎翁追憶座談会に出席した。肩書きは「山東鉱業株式会社取締役」だ。発言したらしいが、記録には採録されていない。伊地知虎彦の発言箇所ですでに「神崎さんの陳べられた三つの特長」とあるだけ。ウェブ上の早稲田大学写真データベースB24-14「憲政会名士来滬記念」に上海南京路居仁里朱篠芳妓館で撮影したものが保存されている。場所からして、これは上海時代のもの。

7 尾中満吾（1881.11.23-1914.7.22）

原資料には「華南記」と注がついているらしい。「記」は屋号によく見られる。華南記は企業名だろうと推測した。だが、それだけでは前にすすまない。

香川政一著『華南双英』（華南図書館1935.12.15。扉は「華南の双英」）を入手してようやくその人の経歴がわかった。

尾中満吾は、山口の人。兄に郁太（号鶴洲）、周一、諦治がいる。その尾中諦治は、1904年旅順港攻撃の際、戦死した。兄諦治とともに華南小学校の出身である。「華南双英」とは、兄弟ふたりを2輪の花にたとえて香川政一が名付けたものだ。華南というのは中国のそれではなく、華南小学校（今の防府市立中関小学校）であった。また、満吾は、尾中華南とも号している。

山口中学から長府へ転校、そこの河村家を後に継いだ（1912）。ゆえに河村満吾ともいう。台湾協会学校（今の拓殖大学）卒業後、沖電気商会に勤務しながら実

業電気学を学ぶ。1906年、沖電気商会から北京に派遣され、同年、上海の三井洋行（三井物産上海支店）に入った。仕事の内容は、「電気用品の販売並に技術のことを担任するの外に、三井洋行専売の新田帯皮販路拡張に渾身の精力を傾注することゝなつた。三井洋行は中清一帯に次第に対清貿易の拡張に連れ、電気事業に経験を有する君を特に労する必要があつた」（125-126頁）

ベルト販売について知人の山縣純輔がつぎのように述べている。三井物産との関係があるので引用する（ベルトにつけられた傍線は省略）。

「当時我国のベルトは未だ上海市場に於て信用を博する不能、外国品の独専する処と相成候、三井に於てベルトの担当たる君は、煙筒の有る処は西洋人の会社たると支那人の会社たるとを不問、一々ベルトの見本を以て商品の売込に着手せられ、北京語の不通なる上海にては筆談にて商取引をなし、本邦ベルトの今日の如き盛大なる販路を開きたるは、一に君の尽力の働す処に御座候、始めこれが販売に関しては、当時の三井の主任高橋氏と意見の衝突より三井を辞せられたるも、三井は其辞表を見て大に驚き辞を低くして例へ会社を去ると雖もベルトの販売のみは是非願ひたしと依頼し来りたるは、如何に其手腕に依頼せしか知れ申候」（152頁）

尾中が三井物産上海支店で働いたのは、せいぜいが3年間ほどの期間だった。「輸入課主任丹羽氏漢口支店長に栄転するに及び、君偶々後任者と意見を異にし断然三井を辞して、独立して一行を開くことになつたのは明治四十二年九月である」（126頁）

ここに見える丹羽とは、本稿に登場している「11丹羽義次」である。1909年、尾中は上海狄思威路華南洋行を設立した。その業務は、「電気機械各種販売並に工事請負、紡績織布並に各種工場用品類一切を取扱ふ」（127頁）ものだった。

該書に収録された前原謙治「隠れたる亡き偉人河村満吾君を偲びて」を紹介しよう。上海での活躍を称賛して次のように書いている。

「君は華南洋行創立以来全然支那人と取引した。在留邦人など丸で眼中に置いてなかつた。従つて華南洋行の真価は在留一万五千の邦人には殆ど知られて居ない。併も事実上「シーメンス」三井などと相並んで取引したなどは、到底成金志願の虚業家輩の企及し得る処でない」（77頁）

三井物産上海支店を辞めて、ひとりではじめた華南洋行をいかに隆盛にみちびいたか。これが、なんと強引ともいえるやり方だった。

「如何に天才的実業家と云へ、ホンの無資本より僅々数年の間に、殊に百人中一人の成功者すら出し難いとされてる上海で、到底華南洋行今日の隆盛の得らるべき道理がないとは何人にも起り来る。疑問であらねばならぬ。併し事實は絶対に事実だから致方がない。君は徹頭徹尾令兄からも何等の援助を受けてない。実に君は其の資本を信用借りで支那人から引き出したのであつた」(77-78頁)

無資本ではじめて「信用借り」で切り開いたというのだ。物を動かす仕事だから資本よりも人間関係が重要だということか。「信用借り」の内容をもう少し聞いてみる。

「今君の実話を紹介するが、人名等多少記憶に洩れた点のあるのは遺憾だが……君が断乎袂を払つて三井を辞した時に、君には十二分の胸算があつた。君は三井にある内に、いつとはなしに土地の支那富豪某甲及某乙と親密に交際してつた。取引上(三井の一員として)君の律儀に感じて、彼より来つて君に許したのであつた。愈々独立するや君は直ちに甲の許に走つて、立談の間無証文で借用期限を二ヶ月として即座に五百金を引き出した。其の返済期限の数日前、今度君は乙を訪うた。そして同様に五百金を引出し、其の足にて之を甲に返済し、厚く礼を述べた。この確実なる返済は甲をして愈々益々君を信ぜしめた。爾後数回に亘りて此の巧妙なる支那富豪との折衝は繰返された。五百は八百に、八百は千……或は遞加し或は遞減した。君は確実な銀主を得たのであつた。斯くてこの天才的実業家の営業する華南洋行は隆々の勢で発展した」(78頁)

これが尾中満吾のやり方であつたようだ。どうしても「強引」という言葉を使いたくなる。だが、丹羽との例に見るように、性格のあう人間にはいい人のようだった。だからこそ、名前を並べて商務印書館の株を所有している。

一覧表をみると、尾中は、1905年の増資時には商務印書館株を持たなかった。当然だ。尾中が三井物産に入るのは1906年のことだからだ。その後を持つことになったとわかる。

1914年、商務印書館が日本人の持株を回収しおわってから、尾中は上海に病死した。

8 原亮一郎

金港堂社長。原亮三郎の長男。1907、08年に商務印書館の理事 [梁長洲2004c:35]。

9 原亮三郎 (1848-1919)

金港堂創業者。1903年、加藤駒二、小谷重をともない上海を訪問し商務印書館と合弁の契約を結ぶ。1903、05、06年に商務印書館の理事 [梁長洲2004b:9] [梁長洲2004c:35]。妻は礼子、11男6女の子供にめぐまれる。原亮三郎について、私は詳しく書いた。

10 山本条太郎 (1867.10.11-1936.3.25)

三井物産社員。1898年原亮三郎の三女操と結婚。1901-05年、三井物産上海支店長。1907、08年に商務印書館の理事 [梁長洲2004c:35]。1908年本店勤務になるまで上海に居住する。

山本条太郎こそ、金港堂と商務印書館を結びつけた人物だ。彼についても、詳述した。くりかえす必要もなく、原亮三郎 - 山本条太郎 - 印錫璋 - 夏瑞芳という人間のつながりがあったことが、両社合弁の決定的要因である。

日本人が中国の会社に投資をするという行為は、単に金儲けだけが目的だ、と考えると判断を誤ることになる。少なくとも金港堂と商務印書館のばあいが、そうだ。合弁を解消した時、最終的に日本人株主は利益を手にした。これは事実だ。しかし、同時に、商務印書館に所属する中国人株主の所有株も同額に評価されたという事実を見逃してはならない。日本人株主の1.8倍もの利益を中国人株主は得たことも書かなければ、不公平だといわれてもしかたがなかりう。

合弁解消後も、張元済たちと山本の交流は続いていた。たとえば、中華書局との合弁話にまつわって次のような事がある。

中華書局は、中華民国成立後、商務印書館からとびだした陸費達たちによって設立された強力な競争者である。それが、1917年頃業績が悪くなり、古巣の商務印書館へ売却、連合するという話がもちあがった。中華書局側から交渉に出てきたのがチャーリー宋である。商務印書館の内部では、張元済が買収に賛成し、鄭孝胥が反対した。あくる1918年2月8日のことだ。張元済、高夢旦、鮑咸昌が主

人となって、山本、小平、木本を一品香に招待した。そこで鮑咸昌が、中華書局買収について山本に意見を求めたという。山本は答えて「買収するのはよくない。一に、書業を独占するとますます人に嫌われる。二に仕事をするのに敵がいなければ必ず傲慢になる。傲慢は最大の病だ。また、あそこは自滅するから、うち破ることもない」と〔張樹年1991:149〕〔張元濟2001:475〕。山本のいった自滅云々の箇所は、はずれた。しかし、やみくもに競争者をうち破るのはよくない、と山本が考えていたことは記録する価値のあるものだ。

彼は、のち三井物産株式会社常務取締役となった。日本火薬製造株式会社、満洲製麻株式会社など多数の会社を創立。衆議院議員。南満洲鉄道株式会社社長、貴族院議員などを歴任した。

11 丹羽義次

三井物産社員。上海支店に勤務したことがある。前出『華南双英』に「(序) 故河村満吾君を懐ふ」を書いている。「余が君を識りしは君が北京から上海の三井に転じられた時で、今から十年前の事と記憶する。君は腕の人であつて理論の人でなく、空論を排して実行の人で有つた。或日余に向つて三井を辞し独立して上海に於て電気に関する商業を經營したいとの相談を受けたが、余は日常君の性行を知るを以て其拳に賛成し、……」とのべる。三井物産上海支店から漢口支店長に栄転したことは、尾中満吾のところですでに触れた。

1936年5月5日、山本条太郎翁追憶座談会に出席している。肩書きは「大正海上火災保険株式会社取締役」である。上海支店当時の思い出を紹介する。「当時支那で穴銭銅貨を日本の一銭銅貨の様なものに改鑄すると云ふ問題があつて、盛んに外国から銅を輸入するので、其銅の輸入仕事を私がやらされた。そして豪洲、ヨーロッパ、アメリカ、日本等から買込んで支那に入れる仕事を山本さんの指図に依つて三井は如何なる外国の輸入商にも立ち優つた結果を挙げ得たのであります」〔原1936:694〕

12 鈴木島吉

横浜正金銀行上海支店に勤務したという。前出1910年4月の東亜同文会上海支

部会員役員名簿に名前がある [東亜1988:471]、『中外商業新報』(1918.4.7付)では、横浜正金銀行重役だ。前出『近代中国専名翻訳詞典』には、つぎのように記述される。「Suzuki,Shimakichi(1866-) 鈴木島吉 日本銀行家, 1900年前後來華」[黄光域200:669]

13 伊地知虎彦

三井物産社員。山本条太郎の部下。1936年5月5日、山本条太郎翁追憶座談会に出席している。肩書きは「液化炭酸株式会社社長」だ。上海時代の山本を回想する。「山本さんはあらゆる方面に特長を發揮されましたが、就中人を鞭撻して働かせることに特に妙を得て居られたと私は考へるのです。何時も山本さんにお小言を頂戴すると何糞と云ふ氣になつて仕事をやる。其内に興味が出て来るといつた塩梅で、いくら目玉が飛出る様にお小言を頂戴しても却つて愉快に仕事をすることが出来た。つまり緊張して仕事をする、斯う云ふご指導振が実に手に入つて居つたのであります。さればこそ上海支店の成績がアノやうに挙つたのだと思ひます」と発言している [原1936:706-707]。伊地知自身について説明しているわけではないが、上海で働いていたということはわかる。

14 益田太郎

三井物産関係者で益田といえば、益田孝にきまっている。その次男が、太郎だ。益田太郎(1875.9.25-1953.5.18)、元貴族院議員、男爵。台湾精糖社長など。三井物産の元社長益田孝の次男。太郎冠者の筆名で多くの喜劇、流行歌を作った。

だから上の名簿に見える益田太郎は、三井物産との関係からいえば益田孝の次男太郎であってもおかしくはない。上海に行ったことはなかったようだが、投資だけならば可能だろう。ただし、高野正雄『喜劇の殿様 益田太郎冠者伝』(角川書店2002.6.6)には、商務印書館についての言及はない。また、益田タマの名前もでてこない。太郎冠者と同姓同名の別人かもしれない。

前出『近代中国専名翻訳詞典』に収録している人物は、必ずしも中国に関係しているとは限らない。だが、益田太郎を掲げて「日本人, 工商界」とある [黄光域200:584]。参考までにつけくわえる。

15 益田タマ

不詳。汪家熔は、玉、タタ、タマと表記する。

益田太郎の父は孝、母は栄子だ。長男の象（きさし）は、生後まもなく病死したという。孝の愛妾は「たき」で、その子は信世（のぶよ）。太郎の妻は貞（のち、貞子）。その愛妾は、「ことり」（岩崎登里）という。太郎と貞の間には、克信、孝信、義信、智信、信子、智恵子、貞信の子らがいる。だが、益田タマは、どこにも出てこない。

1907年の「上海在留日本人営業案内」にあげられた多くの業種（畳職、人力車製造及修繕業、三味線まで）と氏名のなかに、益田姓はひとりしかいない。旅人宿の「英界広東路八 番菜館 益田モト」というのがそうだ〔遠山1907:406〕。モトとタマは異なる。違うが、ほかに手がかりがまったくないので触れておく。

16 山口俊太郎

実業家というが、具体的な事業内容は不明。

原安三郎が山本条太郎夫人操の13回忌にあたり追悼集を編纂発行している。『山本操夫人乃おもかげ』という。これに収録された集合写真のなかに山口も写っている。原亮三郎の娘操の妹幹尾が山口の夫人である〔原1966:57〕。

17 利見合名会社

「大阪で教具の製造販売」だという。これを見たとき、大阪の会社が、なぜ上海の商務印書館に投資するのか不思議な気がした。投資者のなかで、これだけが会社であるのも、ほか個人株主だからよけいに目立つ。合名会社というのは、社員全員が会社の債務について共同で無限責任を負う。いってみれば社長と社員の区別がない、あるいは、全員が社長という組織形態である。小規模だから家族企業的ということもできる。

2006年1月、あるウェブサイトにおいて競売品のひとつとして手作りのそろばんが出品してあることを教えてもらった。掲げられた写真に「利見合名会社（大阪市唐物町二、東京大伝馬町）」という菱形の紙が貼られているのが見える。そろばんなどを製造する会社で、東京と大阪に店を持っていたことがわかる。利見合名

会社の誰かが、三井物産か金港堂の関係者と知り合いなのかと想像する。そろばんだから、学校教育と関係が深い。それならば教科書の金港堂と結びつくかもしれない。社長がその誰かだろうが、氏名もわからなければ、投資の経緯も、詳細は今のところわかっていない。

以上、汪家熔が提出した日本人投資者について、すこしばかり補充をした。

以下の人々は、上の投資者名簿には出てこない。しかし、商務印書館とかかわりがあるので簡単に説明しておきたい。番号は、筆者がつけた。

18 田辺輝雄

三井物産社員。山本条太郎が上海三井支店長をつとめていた時代の部下である。彼自身が当時を回想して、「嘗て上海三井支店長として勤務せられた頃、自分も常に大人に咫尺し、其下に親しむものが多かつた」[原1936:275]と書いている。

汪家熔論文B1、B2によると、田辺は商務印書館監査役理事だったことがある。1905年の臨時株主会記録に見える[梁長洲2004b:9]。三井物産上海支店の勤務と兼ねていたらしい。のち、『京城日報』(1917.8.31付)に朝鮮紡織会社調査委員の肩書きで田辺の名前がある。前出1910年4月の東亜同文会上海支部会員役員名簿に名前が見える[東亜1988:473]。所属は、上海紗廠だ。1939年、日華紡織株式会社取締役社長[金風社1939:50]、および、上海日本商工会議所顧問[同上:323]となっている。

前出『近代中国専名翻訳詞典』には、「日本商人，1921年前後來華」とある[黄光域200:674]。中国に来た時期が一致しない。

19 藤瀬政次郎

三井物産社員。山本条太郎のあとをついで三井物産上海支店長になった。前出1910年4月の東亜同文会上海支部会員役員名簿に名前がある[東亜1988:471]。商務印書館と金港堂の合併解約書に保証人として署名している。

前出『山本操夫人乃おもかげ』に文章を寄せた藤瀬英二郎について、以下の注がついている。「元三井物産株式会社上海支店長、後に同社常務取締役等を歴任した藤瀬政次郎氏(亡)の次男、現ジェットロ理事」[原1966:221]

20 加藤駒二

金港堂総務部長、帝国書籍株式会社取締役。商務印書館の株主でもあった。給料は200元 [朱蔚伯1981:147]。1903、05、06年に商務印書館の理事 [梁長洲2004b:9] [梁長洲2004c:35]。加藤の持株は、益田太郎、益田タマに譲渡した可能性があることを汪家熔は言ったことがある。前出1910年4月の東亜同文会上海支部会員役員名簿に商務印書館加藤駒^マ治で掲載される [東亜1988:472]。

21 小谷 重

帝国大学文学士、元文部省図書審査官、図書課長。金港堂編輯部長。原亮三郎の依頼で商務印書館の役員として上海に移住したことがある。

22 福間甲松

商務印書館との合併を解約するにあたり、金港堂から上海に送り込まれた人物が福間甲松である。金港堂を代表しているから、合併解約書には、商務印書館を代表した夏瑞芳とならんで署名をした。

『日本紳士録』第17版（交詢社1912.12.28）の「東京の部」565頁にその名前がある（同上第16版（明治44.12.25）には福間の名前は見えない）。

福間甲松 金港堂書籍株式会社取締役、日本硫黄株式会社監査役、赤坂区新坂町四三

金港堂に勤務していたことがわかる。ただし、それだけではなかった。

山本条太郎が中心になって対中国投資会社を創立していた。旭公司という。中国の鉱山調査と開発が目的である。のちの中日実業株式会社につながっていく。この旭公司について、高木睦郎は、つぎのように証言している。

「……これより先き、山本翁と藤瀬政次郎氏が、旭公司といふのを創立して、福間甲松氏を上海の主任に、北京に上仲尚明、漢口に丸岩、東京に尾崎敬義氏等を置き、主として支那の鉱山調査を行ひ、併せて他の事業にも投資した」[山本1942:283]

前出『山本操夫人乃おもかげ』に掲げられた平原初音「行き届いた慈愛」には、著者を説明してつぎのように書いている。

福間甲松氏（亡）（山本家の事業代表で若くして永眠）の夫人、現在福間甲松氏（亡）長男の養家平原家に再婚 [原1966:189]

福間甲松は「山本家の事業代表」だというのだ。そうなると、金港堂と山本条太郎の関係者は、自由に行き来のできる状態であつたらしい。ならば、原亮三郎と山本条太郎の関係からいって、ふたりを取り巻いてその知人たちは、ひとつの共同体を形成していたということが出来るかもしれない。金港堂グループなのである。

23 三木甚市

1914年の商務印書館と金港堂の合弁解約書に名前が見える。

見 議 三木甚市*² 印

三木は、東亜同文書院第3期（1906年6月）の政治科卒業生で、後に上海同文書院助教授になった [松岡ら1908:26]。また、大学史編纂委員会『東亜同文書院大学史』（滬友会1982.5.30非売品）の「第3期銘々伝」にも「三木甚市（徳島）は母校の助教授となり」（411頁）とだけ書いてある。同じ上海に住んでいたとはいえ、東亜同文書院助教授の三木がなぜ合弁解約書に出てくるのか。ここだけを見てもわからない。ところが、前出1910年4月の東亜同文会上海支部会員役員名簿に名前があるのだ [東亜1988:472]。しかも、その肩書きは福岡法律事務所と変化している。三木は、東亜同文書院をやめたあと福岡法律事務所に勤務しているとわかる。ならば、商務印書館と金港堂の合弁解約書に名前がでてきてもおかしくはない。

4 結 論

合併当初を振り返ってみる。1903年に金港堂が投資したのは10万元だった。1株 = 100円で計算すれば、1,000株ということになる。

その割合で見ていくと、1905年が1,500株、1906年が1,800株、1907-1912年は2,520株のままで、1913年に最終的持ち株が3,781株である。合併解消を予定していた時に、急に日本人投資者を認めるとも思えない。1907-1913年の期間に増資したらしいのだが、その詳細はわからない。

最初の2、3年、すなわち1905年までは、商務印書館と金港堂の持株は平等に同数であった。ところが、1906年以後は、商務印書館側の経営方針に変換が生じる。つまり、日本人の投資を抑制しはじめる。その後、中国側のみが増資をくりかえしたのである。

経営方針の変換は、理事名簿にもはっきり表われている。1903年の理事は、夏瑞芳、原亮三郎、加藤駒二、印錫璋だった。中国2人、日本2人で平等だ。1905年は、序列がかわっただけで同じ人々である。すなわち、夏瑞芳、原亮三郎、印錫璋、加藤駒二となる。さらに、1908年では、夏瑞芳、原亮一郎、張元濟、印錫璋、山本条太郎にかわる。中国3人、日本2人である。日本人理事が就任するのは、ここまで。翌1909年からは、日本人理事を排除しすべての理事が中国人となる。

合併解消時に、日本人持株は、それでも3,781株に増えていた。だが、一方の商務印書館側は、8,219株であり、日本人株の約2.2倍なのである*3。

日本人投資者の一部には、まだ不明の部分を残している。

判明している日本人投資者を見てみれば、そのほとんどは金港堂の原亮三郎とその娘婿山本条太郎を中心とした人的関係者ばかりであることがわかる。日本人株主の多くは上海に生活をしていて、だが、必ずしも上海に長期滞在している必要はなかったのではないかと推測される。原亮三郎は、合併契約時のみ上海を訪問しただけだ。また、山本条太郎も日本に引き揚げたが、最後まで株主でありつづけた。

山本は三井物産の社員ではあったが、三井物産そのものからの投資を誘ってはいない。あくまでも面識のある自分の関係者を商務印書館への投資に紹介したと推測できる。私にいわせれば、まさに日本の金港堂グループの持ち株なのである。

次に「商務印書館の日本籍投資者名簿」を掲げて本稿の終わりとする。

商務印書館の日本籍投資者名簿

	1905	1905	*4 1914	備 考
1 木本勝太郎	×		135株	元金港堂。商務印書館勤務
2 長尾楨太郎	×		45株	元高等師範教授。商務印書館編訳人
3 篠崎都香佐		×	88株	上海篠崎医院院長
4 小平 元	×		60株	元金港堂。商務印書館。上海印刷株式会社取締役社長
5 原田 民治	×		13株	王国維に日本語を教えた
6 神崎 正助		×	30株	三井物産上海支店勤務
7 尾中 満吾	×	×	22株	三井物産上海支店勤務。華南洋行を創設
8 原 亮一郎		×	515株	金港堂社長。原亮三郎の長男。最初の投資者
9 原 亮三郎	×	×	1,055株	金港堂創業者。最初の投資者
10 山本条太郎	×	×	764株	三井物産。原亮三郎の女婿。最初の投資者
11 丹羽 義次		×	45株	三井物産上海支店勤務。大正海上火災保険株式会社取締役
12 鈴木 島吉		×	80株	横浜正金銀行上海支店勤務。のち重役
13 伊地知虎彦		×	15株	三井物産上海支店勤務。液化炭酸株式会社社長
14 益田 太郎		×	329株	不詳。益田太郎冠者か？
15 益田 タマ		×	167株	不詳。汪家焜は、玉、夕夕、タマと表記する

商務印書館の日本人投資者

16	山口俊太郎	×	383株	実業家。原亮三郎の女婿
17	利見合名会社	×	35株	東京大阪で教育器具の製造販売
	合計		3,781株	
<hr/>				
18	田辺 輝雄	×	×	商務印書館監査役理事。朝鮮紡織会社調査委員。日華紡織株式会社取締役社長。上海日本商工会議所
19	藤瀬政次郎	×	×	三井物産上海支店長。合弁解約書に保証人として署名する
20	加藤 駒二			金港堂。商務印書館
21	小谷 重			元文部省。金港堂。商務印書館
22	福間 甲松			金港堂。合弁解約書に署名。山本家事業代表。旭公司
23	三木 甚市			東亜同文書院。福岡法律事務所。合弁解約書に署名

【引用文献】中国語音ABC順

- 黄 光域2001 『近代中国専名翻訳詞典』成都・四川人民出版社2001.12
- 東亜文化研究所1988 『東亜同文会史』財団法人霞山会1988.2.1
- 金 風 社1939 『支那在留邦人人名録』中支版 上海・金風社1939.9.10第29版
- 梁 長洲2004b 「商務印書館股東会記録(選)」宋原放主編、汪家熔輯注『中国出版史料・近代部分』第3巻 武漢・湖北教育出版社2004.10
- 2004c 「商務印書館歴届董事名録」同 上
- 山本条太郎1942 『山本条太郎伝記』山本条太郎翁伝記編纂会、発行者：原安三郎
1942.3.25
- 商務印書館1909 『上海指南』上海・商務印書館 宣統元年(1909)五月初版／七月再版
- 1916 『上海指南』上海・商務印書館1916.10増訂9版
- 松岡恭一ら1908 「東亜同文書院学友会會員名簿」松岡恭一、山口昇編(東亜同文書院)『沿革史』上海・東亜同文書院学友会1908.6.20
- 汪 家熔2004 宋原放主編、汪家熔輯注『中国出版史料・近代部分』第3巻 武漢・湖北

教育出版社2004.10

- 香川政一1935 『華南双英』香川政一編「磯崎拾玉」前篇 華南図書館1935.12.15非売品
 原安三郎1936 『山本条太郎翁追憶録』1936.9.5非売品
 1966 編纂『山本操夫人乃おもかげ』1966.9.5非売品
 遠山景直1907 『上海』出版社名不記1907.2.28
 張 樹年1991 張樹年主編、柳和城、張人鳳、陳夢熊編著『張元濟年譜』北京・商務印書館1991.12
 張 元濟2001 『張元濟日記』上下 張人鳳整理 石家莊・河北教育出版社2001.1
 朱 蔚伯1981 「商務印書館是怎样創辦起来的」『文化史料(叢刊)』第2輯 1981.11

【注】

- 1) 出資者の人数については、つぎの文章を参照すること。樽本『初期商務印書館研究(増補版)』19-20頁。また、『中国出版史料・近代部分』第3巻(武漢・湖北教育出版社2004.10)に収録した高鳳池「本館創業史」の注2において、郁厚坤の息子郁為瑾が7名であると1988年の手紙で書いている、とある(60頁)。
- 2) 『中国出版史料・近代部分』は、「見証」「三本条太郎」と誤る[汪家熔2004:41]。
- 3) 日本人が獲得した利益について、汪家熔はふたつの数字を提出している。ひとつは、論文B1の「表2 投資収益表」、同論文B2では「表2 原始投資収益表」というのがそれだ。だが、前者では、全部の金額が1桁少ない(B2で訂正されている)。もうひとつ出しているのは、株の利益率が異なっているからややこしい。すなわち、以下の論文だ。

汪家熔「主権在我的合資 一九〇三年～一九一三年商務印書館的中日合資」『出版史料』1993年第2期(総第32期) 1993.7 / 『商務印書館史及其他 汪家熔出版史研究文集』1998所収 / 『中国出版史料・近代部分』第3巻2004所収

問題の一覧表は、「商務印書館日股投資和獲利表」という。雑誌初出の1906年の金額に「約」をつけているが、のちにはそれを外している。それ以外にも初出の数字とは違っているのはなぜなのか。会計の数字違いは論文としては致命的だ。わずらわしいとは思うが下に示す(数字が異なる箇所のみ。初出 後出の順。位取りのコンマをつけないのは初出のまま)。

年份	総資本	日方股本
1906	403500元 40万元	約180000元 18万元
1907		252000元 25万元

商務印書館の日本人投資者

1908		252000元	25万元	
1909	759500元	76万元	252000元	25万元
1910	787400元	79万元	252000元	25万元
1911	796500元	80万元	252000元	25万元
1912	797000元	80万元	252000元	25万元
1913		378100元	38万元	

基本となる数字を概数化した結果、不都合が発生する。すなわち、日本の持株に株利息率を乗じると不正確な数字しか得られない。たとえば、1907年の日本持株は252,000元だ。この年の株利息率は20%だから50,400元になる。しかし、概数化した25万元に株利息率20%をかけると5万元にしかならない。以下同様に汪家焜が一覧表で示す数字と一致しなくなるのだ。検証しようとする利用者はとまどうだろう。

もうひとつ私が問題だと考えるのは、日本側だけの獲得利益を示していることだ。論文の主題が、いくら日本人投資者の利益を問題にしているとはいっても、不公平にちがいない。一方の商務印書館の獲得利益をも明らかにしてこそ、一覧表の意味がある。私は、そう考えて公平な一覧表を作り直した。「商務印書館と日本の獲得利益」という(樽本「変化したつある商務印書館研究の現在 または、商務印書館の被害者意識」『大阪経大論集』第46巻第3号(通巻227号)1995.9.15。のち『初期商務印書館研究』清末小説研究会2000.9.9、および同書増補版2004.5.1所収)その結果、判明した事実がある。資本金が増加しているのだから当然のことながら、全体として商務印書館は、金港堂に比較して約1.8倍にのぼる利益を獲得している。なるほど、汪家焜は、この事実を明らかにしたくなかったらしい。だからこそ、彼は、私の作り直した一覧表を一貫して無視した。「主権が商務印書館にあった合弁だ」と主張する汪家焜が、金港堂を大きくうまわる商務印書館の獲得利益を隠そうとするのだ。矛盾である。

汪家焜は、自分で提出した不公平かつ不正確な数字を『中国出版史料・近代部分』第3巻に収録した。中国では、これが今後、利用されることになるだろう。研究にとっては残念なことだった。つけくわえれば、日本側が得た利益に8万元を加えるのは正しくない。それについても知らん顔をしているのは、いかがなものか。

4) 1905年二月に2度増資した[汪家焜1991]。1906年の可能性があるが、このままにしておく。

商務印書館の火災

いわゆる「焼け太り」の不可解

『清末小説から』第80-82号（2006.1.1-7.1）に掲載。沢本香子名を使用。商務印書館が失火して、なぜ福建路に巨大な印刷所を建設することができたのか。大きな謎である。これについて説明した文章を読んだことがない。それが謎であるという認識すらないからだ。商務印書館の自社出版の記録と当事者たちの証言を、再度、洗いなおすことにした。新印刷工場建設の資金がどこから出たのかを考える有力な材料となる。いくつかの新出資料を加えることができたから本書に収録する。

商務印書館が創業して数年間の状況について、いまだに不明の部分がいくつかある。資料が残っていないらしい。商務印書館自身の説明によると、1902年の火災で書類が消滅したからだ、ということになる。そもそも、この火災そのものが明らかにされていない部分を多く含んでいる。

商務印書館が遭遇した火災の意味を考えるためにも、創業の過程を簡単に復習しておく。

正式に開業したのは、光緒二十三年正月初十日（1897.2.11）だった。その場所は、江西路北京路首徳昌里末街3号である。3間2側房を月額50余元で借り、印刷機3種類10台と活字鑄造機などを購入したら、みなで出しあった最初の資金3,750元はなくなった。鮑咸恩、夏瑞芳、郁厚坤の3人が、まず専任で働くことにする。鮑咸昌と高翰卿のふたりは、美華書館に残ってそのまま勤めた。残留したのは、保険の意味でもあっただろう。全員が新会社で働くと、失敗したときに身動きができなくなる。

翌年、借りていた家屋が倒壊した。移転先は、北京路慶順里である。なじみの美華書館から道路を隔てた隣だ。12部屋を借りて（6部屋という説もある）、植字部と印刷部が置かれた。

創業者のひとり鮑咸恩には、咸昌と咸亨の弟がいる。北京路慶順里に移ったのを機会に、美華書館で働いていた咸昌と税関に勤めていた咸亨も商務印書館に入ることになる。それぞれ植字部と印刷部を主宰した*1。彼ら兄弟は、商務印書館内部で大鮑、二鮑、三鮑と呼ばれた。

創業後の数年は、ほとんど家内企業とかわらなかった。夏瑞芳は社長とはいえ、営業から店番までなんでもこなさざるをえない。彼もほかの仲間と同じカトリック教徒だ。家族写真を見ると、遅くとも1913年までに9人の子供に恵まれている。月給が24元では生活するには不十分だった。印刷の注文を取るかたわら、保険会社のブローカーも兼務して家計の足しにする必要があった理由だ。

中国語の注釈をつけて編集した英語教科書『華英初階』が売れて経営的には一息ついた、ということはある。だが、経営状況はかならずしもよいとはいえなかった。いくつかの証言によれば、高翰卿に支払いの保証をしてもらい、沈伯芬に営業資金2,000元を用立ててもらい、張元済に保証人になってもらって銭荘から借金をする、などというありさまだ。

そういう状況であるにもかかわらず、1900年に修文書館の機器を買収している。修文書館は、日本の築地活版製造所が上海で10万元近くを投資して設立した印刷所兼印刷用品販売所だ。上海から撤退するので機材一式を商務印書館は1万元で購入したという。仲介者は印有模（錫璋）である。修文書館の印刷機器、各種活字などを入手して設備は充実した。紙型を使用するようになったのも商務印書館が最初である。ただし、この資金をどこから借りたのか不明だ。誰も何も説明しない。自分たちで使用しない機器、部品は販売した。だが、それで1万元が回収できたとも思えない。印有模が立て替え払いしたのではないかと推測する。

不良翻訳原稿のために1万元の損失をこうむったこともある。

それまでにかさなった負債を解消するために第1次増資を行なった。1901年のことだ。

最初の資本金3,750元は7倍に評価することにした。すなわち、相談の上、2万

6,250元だと決めて、それに加えて張元済と印有模のふたりの投資金額が2万3,750元だ。合わせて総額5万元である。増資分の2万3,750元が、最初の資本と修文書館の買収費用、および不良翻訳原稿の損失を合計したものであることは偶然ではない。

そこに待ち受けていたのが火災だった。

火災が発生したのは、光緒二十八年七月十九日（1902.8.22）のことだ。

火災とそれにまつわる保険金については、私はすでに文章を書いている。本稿で、もう一度むしかえすのには理由がある。ひとつは、新しい文章を見つけたからだ。ふたつは、重要な事柄でありながら多くの研究者が見逃しているからである。

使用する文献は、以前のもものと重複する。説明の必要上くりかえすことになるがご了承いただきたい。

1 火災発生

焼けたのは、借りていた部屋だった。長屋形式の一部分だと考えていいだろう。重要なのは、「借りていた」という事実だ。自前の建物を購入する、あるいは新築するなどの経済的余裕は、当時、なかった。

まず、火災の状況について新聞記事を見してみる。

『同文滬報』光緒二十八年七月二十一日（1902.8.24）

火警紀聞 前晚鐘鳴十二点捕房蒲牢乱吼旋分三下訪知火起於北京路塊商務印書館四十一号門牌發時烈烈轟轟冒穿屋頂英法美三界洋龍各驅皮帶車馳至汲水狂灌祝融君勢方不敵旋即斂威而退是役也共焚燬房屋三幢聞均保有火險云
火災ニュース 一昨晩十二時、警察署の鐘が激しく鳴った。ただちに三方を調査し、北京路角41番地の商務印書館に火災が起こっているのがわかった。盛んな火は、すぐさま屋根をつきぬける。イギリス、フランス、アメリカ3租界のポンプ車がかつけ水をそそぐや、火の神様（祝融君）の勢いはようやく失せた。家屋3部屋が焼け落ちるが、すべて火災保険をかけていたとい

う。

この報道を見れば、火元は、商務印書館そのものである。類焼ではない。焼け落ちたのは家屋3部屋だ、と書いてある。借りていた12部屋の一部分ということになるのか。しかし、残りの部屋が焼け残ったとしても無傷のままであるわけがない。水をかぶっているはずだ。紙をあつかい印刷と出版を商売としている商務印書館にとっては、大きな損失であったことは容易に理解できよう。

「すべて火災保険をかけていたという」。新聞記事にわざわざ載ったということは、当事者から取材をしたものと見える。商務印書館が強調したかったことだと判断する。火災保険は、普通に考えれば、家屋だけにかけるものだろう。借間人が、家主より強制的に加入するよういわれるはずだ。「火災保険」とわざわざいうのは、家屋のほかに家財、この場合は印刷機器などにも保険をかけていたということだろうか。詳細は、わからない。

事件直後の新聞記事だ。あとで火災保険金がどれくらいおりたか、などの言及がないのも当たり前である。

以上の新聞記事から把握できるのは、商務印書館自身の失火であること、火災保険をかけていたこと、のふたつである。詳細が不明なのはやむを得ない。火災の事実だけでも明らかになったところに価値がある。

商務印書館は、上の『同文滬報』と同じ版に自社広告を出している。十九日夜に失火したこと、連絡は北京路40番地にしてほしいという。

印刷を請け負っていた『外交報』は、火災のために期日通りに刊行することができなかった。数号をまとめて「補印」という形で発行する。その自社広告で以下のように説明している。

「商務印書館広告」『外交報』壬寅第19号（第21期）光緒二十八年八月十五日（1902.9.16）補印

.....雖不幸于上月間忽遭回祿尚幸棧房鑄字房書板房等均未殃及現已重行部署益擴規模仍在北京路原處隔壁四十號內照常工作.....

.....先月、不幸なことに火災にあいましたが、幸いなことに倉庫、活字鑄造

部、書板部などは災難をまぬかれました。現在、すでに新たな配置を行ない、規模をさらに拡張し北京路の元のところの隣家40番地におきまして通常営業を行なっております……

失火から約一ヵ月後の告知である。通り一遍の説明であって、火災保険とか新しい印刷工場とかの内部にかかわる情報は外に出すはずもない。

商務印書館の火災に言及する文献を発表の順番にあげていく。

2 さまざまな文献

商務印書館が創業10周年を記念して発行した自社の図書目録がある。これが新資料のひとつだ。

商務印書館編訳所編輯『上海商務印書館創業十年新廠落成紀念冊』上海・商務印書館 光緒三十三(1907)年七月 非売品

本館経始於光緒二十三年正月賃小屋数椽於上海英租界江西路德昌里購印機二具聊事印刷翌年六月移北京路有屋十二楹規模稍拓二十八年七月不戒於火乃建印刷所於美租界北福建路同時設発行所於棋盤街翌年正月又置編訳所於蓬路(後略)

光緒二十三年正月、本館は上海英租界江西路德昌里に数部屋を借り、印刷機2台で印刷業を始めた。翌年六月、北京路に移転し12部屋に規模が拡大した。二十八年七月、不注意にも火災にあった。そこでアメリカ租界北福建路に印刷所を建設し、同時に発行所を棋盤街に設けた。翌年正月には編訳所を蓬路に置いた。

創業10周年を祝う冊子だから、苦しい経済状況をそのまま書き込んではいない。移転して12部屋に規模が拡大したように書いている。だが、部屋数が多いだけで、狭ければ拡大したことにはならない。火災に言及している点では珍しい文章だといえる。よそからの火災に襲われた、すなわち類焼とは説明されてい

ない。だから商務印書館が火元だ。新聞報道と同じだとわかる。

注目すべきは、火災保険には言及していないことだ。しかも、自社の失火と北福建路の印刷所建設をなにも説明しないままにならべた。



印刷所は、借りたものではない。赤レンガ3階建ての印刷工場でしかも自前の新築なのだ。なによりも、印刷所の建設が何月なのかを明記しないのには首をかしげる。時間を示さず、火災と印刷所建設を併記した。ふたつの事柄が、あたかも関連があるように書いた。詳細を明らかにしなくなかったと考えれば、この曖昧な説明のわけが理解できる。この解

説は、誤解を生みながらのちの文献にそのまま引き継がれることになる。

つけくわえていえば、金港堂との合併についても触れない。4年前、すでに合併会社となっているにもかかわらずだ。これも曖昧にしたかった事柄のひとつに入るのだろう。

上の創業記念誌とほぼ同時期に日本で発行された書物のなかに、商務印書館について言及するものがある。

東亜同文会編纂局『支那經濟全書』第12輯 丸善株式会社1908.10.1 / 1909.6.17四版

「第4編出版業 第4章上海ニ於ケル出版業」464-465頁

同館（注：商務印書館）ハ光緒二十一年^{ママ}即チ今ヨリ十二年前ニ創立セラレタルモノニシテ当時美華書館ニ在リテ印刷術ニ従事セル華人四名相謀リ独立シテ一出版所ヲ設立セントシテ各五百円宛出資シテ北京路ニ印刷請負出版業ヲ開設セシガ後二年ニシテ火災ニ遇ヒ反テ焼肥ノ有様ニテ目下ノ印刷所タル宏大ナル工場ヲ福建路ニ設立スルニ至レルモノナリ然レドモ之ガ為メ一時多大ノ負債ヲ生ジ非常ナル苦境ニ陥リ収支償ハズシテ將ニ解散ノ悲運ニ遭遇セン

トスルニ当リ金港堂主原亮三郎氏ノ来港ニ際シ氏此事ヲ耳ニシ山本達^マ三^マ郎氏
等ノ大ナル斡旋ニヨリ彼我合同六十万円ノ資本ヲ以テ茲ニ其類運ヲ挽回シ遂
ニ現今ノ隆盛ヲ見ルニ至リシナリ是レ実ニ光緒二十九年十月ナリキ

数字のこまかな違いはある。創業は光緒二十三年が正しい。創業者4人が美華書館に勤めていたというのも不正確だ。また、各人が各500円（元）を出資したのであれば合計2,000元になろう。しかし、実際は3,750元である。火災にあうのを創業「後二年」としているが、約5年の間違い。山本達太郎ではなく山本条太郎だ。金港堂と合併した時の資金は、両者10万円を平等に負担し合計20万円であった。60万円というのは多すぎる。

だが、基本的な経過は押さえてある。美華書館の関係者が独立したこと、火災にあうこと、福建路に工場を設立したこと、金港堂と合併したことなどだ。火災と工場建設をならべたところは、創業10年記念誌の記述に似ている。

注目されるのは、「焼肥ノ有様」だと表現しているところだ。火災にあったにもかかわらず巨大な印刷所を福建路に建設できたのは、はたから言えば、焼け太りにほかならない。多額の保険金でもおりたのではなかろうか、と推測する余地が生じる。

見た目は焼け太りだが、その実、工場を設立して多大な負債を生じ倒産しそうになった。それが、日本の出版社と合併する原因である、と説明するのは興味深い。

火災と工場建設のために多大の負債が生じたという箇所は、自然な流れのように見える。火災保険には言及していないが、自然だと受けとめるのは、私が火災保険の事実を知っているためだろうか。無意識に記述の欠如を自分で埋め合せているかもしれない。ここに落とし穴がある。

まず、火災にあったにもかかわらず、どうして巨大な工場を建設できるのか。火災保険金は、はたして本当におりたのか。疑問がわくのは当然だろう。その説明がない。また、火災発生と工場建設の時間的關係はどうなのか、ここでもはっきり書かれていない。さらに、失火した会社に工場建設の資金を提供したのは誰なのかもわからない。借金をしたであろうが、そこが明確ではない。詳細が不明

なのだ。

何もないところから勝手に出てくるような説明ではない。文献にもとづかなければ書けない種類のものだと考える（後述）。

事実を把握しているように見える『支那経済全書』の文章だ。それをそのまま取り込んだふたつの文献が発表された。

内山清、山田修作、林太三郎合著『大上海』大上海社1915.8。568-569頁
商務印書館 は今より十数年前の創立にして当時米国人経営の美華書館に在りて印刷に従事せる支那人四名相謀り独立して一出版社を設立せんとし各五百弗を出資し北京路に於て印刷請負出版業を開設せしが後二年にして火災に遇い更に福建路に於て宏大なる工場を設立するに至りしが之が為め一時多大の負債を生じ収支相償はずして將に解散の非運に遭遇せんとするに当り恰も上海滞在中の金港堂主原亮三郎氏之を聞き日支合同の計画を為し明治三十六年遂に合同資本六十万元を以て漸く其類運を挽回し以て今日の盛大に及びたるものなり

中華道人「日支合弁事業と其経営者」『実業之日本』第22巻第13号1919.6.15。
163頁

十、商務印書館

商務印書館は最初支那人のみにて経営せられ印刷出版を業とせしが、開業後二年にして火災の為め全部を烏有に歸し、更に多額の負債を為して新工場を建設せしも、遂に収支償はずして將に解散せんとするの非運に遭遇せるを、金港堂の原亮三郎氏聞きて、茲に日支合弁の事業と為し、万難を排して明治三十六年十二月遂に彼我合同資本金六十万元を以て開業の運びに至り漸く其類運を挽回し、以て今日の盛大に及ばしめた。

両者は、数字の誤りを踏襲して『支那経済全書』の関連部分とほぼ同文だ。

中華道人の文章は、中華書局が漢訳して商務印書館との裁判沙汰にまで発展する原因となった、とだけしておく。

さて、中国側の古い文献で商務印書館の火災に触れるものをさがすのは、むつ

かしい。せいぜいが上に見た創業10年記念誌くらいだ。『創立三十年商務印書館志略』(1926.5)、あるいは、莊俞、賀聖鸞編『最近三十五年之中国教育』(上海・商務印書館1931.9)などは、失火の事実そのものを無視する。

後者の『最近三十五年之中国教育』に収録されている莊俞「三十五年来之商務印書館」は、研究の基本文献になっている。商務印書館の公式記録と見なされ、ほとんどの研究者が利用するから影響が大きい。つまり、火災について認識のない論文が再生産されるのである。

だが、そのような文章ばかりではないことも事実だ。知っている人は、知っている。しかし、中途半端な記述は、誤解を生むことにもつながる。

時間の流れに配置し直すと、次にくるのが高翰卿の文章である。

高翰卿「本館創業史 在発行所学生訓練班の演講」冰巖筆記原稿1934？
初出未見。『(1897-1992)商務印書館九十五年 我和商務印書館』北京・商務印書館1992.1。宋原放主編、汪家熔輯注『中国出版史料・近代部分』第3卷 武漢・湖北教育出版社2004.10

高翰卿の文章について、少しばかり説明しておきたい。

商務印書館の長老幹部が、1934年に社内で話した自社の歴史である。金港堂との合併にも触れる。そればかりか、金港堂の娘婿が三井洋行の山本(条太郎)であること、夏瑞芳、印有模とも親しい間柄であることにも言及している。驚くことに、夏瑞芳と印有模のふたりと相談したあと「山本は本館と合併する気になった[山本倒有意同本館合辦]」とまで書いている。すなわち、商務印書館側のほうから金港堂側に合併の件を持ちかけたという意味なのだ。長老でなければ知らないことだ。これを含めて、いくつかの貴重な証言がなされている。重要文献のひとつだということができる。

だが、1930年代に行なわれたこの貴重な高翰卿講話は、商務印書館内部において深くしまいこまれたままだった。一般の目に触れるようになったのは、なんと約60年後の1992年のことだった。それ以前から商務印書館と金港堂の合併問題を追求していた私にとっては、なにをいまさら、と気が抜けるような思いがした。どうということかといえば、高翰卿論文を読んでいれば、合併問題に山本条太郎と

印有模らが関係していることをつきとめるのにあれほど苦勞はしなかつたらう、と感じたからだ。逆にいえば、それまで私が追求して得ていた結果（1982年に論文を発表した）が正しかったことが、高翰卿論文によって確認されたということにもなるのだが。

それはさておき、火災である。

遷到北京路約有五年，在光緒二十八年的七月，忽遭火焚，所有機器工具，尽毀於火，幸新定的機器已到而事前保有火險，領到賠款。就在福建路海寧路購地建造印刷廠。（即是現在大東書局的印刷所）發行所遷到河南路，地址為現在冠生園北隔壁之171、173号門牌。7頁

北京路に移転して五年がたった光緒二十八年七月、火災にあい、すべての機器工具が焼けてしまった。新しく注文していた機器はすでにとどいていたが、幸いなことに事前に火災保険をかけていたので賠償金を受け取った。ただちに福建路海寧路に土地を購入し印刷工場を建設した（すなわち現在の大東書局の印刷所である）。発行所は河南路に移転し、場所は現在の冠生園の北隣の171、173号である。

ここでひさしぶりに火災保険がでてくる。しかも、賠償金を受け取ってそれが印刷工場の新築につながったとはっきり述べている。あとで説明するが、これは張孝基論文と一致する。

最初にいっておきたいのは、高翰卿は、火災保険について述べているがそれは印刷機器にかけたという。家屋の火災保険について何も書かない。不思議である。

このたび、この箇所を引用して、以前の私の読みとは別の解釈も可能ではないかと思うようになった。ただし、かなり無理な別の解釈だとは思う。

以前は、新しく注文していた印刷機器がすでに届いていて、それが焼けたと考えた。だから、火災保険金がおりた。

新しい印刷機械が届いていれば、すぐさま古いものと入れ替えるのが普通だろう。だから、焼けたのは入れ替えたばかりの新しい機器にちがいない。まことに理解しやすい話だ。新しい機器には火災保険がかけてあった、というのも納得が

いく。夏瑞芳が副業に保険ブローカーをやっていたからでもある。

だが、そうではないようにも読める。機器が火災で焼けた。ここまでは、いい。だが、焼けたのは、古いものか、それとも新しく注文してすでに届いていたものか、あやふやだ。

別の解釈というのは、こうだ。

焼けたのは古い機器で、「新しく注文していた機器はすでにとどいていた」は、別物である。つまり、古い機器が火災にあい、新しく届いていた機器は別のところに置いてあった、と読めなくもない。焼けてしまったのは、以前から設置していた機器工具だけだ。新品の印刷機械は無傷で存在しており、これにかけていた火災保険金が下りた、という解釈だ。だが、どう考えても奇妙な論理である。火災の被害にあっていない機器に保険金があるだろうか。可能な解釈かもしれないが、私は納得しない。

ところが、この奇妙な論理をそのまま展開する文章がある。実をいえば、高翰卿論文の別の読み方を考えたのも、次の文章を見たからだ。火災と保険と印刷機器の関係については、あとでまとめて考察する。

張孝基「商務印書館開辦之初」1914? 初出不記。『20世紀上海文史資料文庫』6 上海書店出版社1999.9

該叢書第1冊目の口絵を見ると『文史資料選輯』の表紙が複数かかっている。1960年ごろから出版されていた内部発行の刊行物だろうか。該叢書全10冊は、説明によると1996年以前に出版された250種に近い資料から精選して編集したとある。

その6には、新聞、雑誌、出版社関係の文章が収録される。新資料のふたつ目は、張孝基の次の文章だ。短文である。初出は書かれていない。書かれてはいないが、高翰卿の文章と関連するのでここに紹介する。適当に区切って説明したい。

夏^マ粹^マ芳本是文匯報館排字工人，因故被撤職，光緒二十四年（1898），即与鮑姓等若干友人合股3000兩銀子在北京路開辦商務印書館。當時適逢戊戌維新，印刷新書的機會到来了，於是股加股3万兩銀子。

夏粹芳は、もともと文匯報館の植字工であったが、免職になったので、光緒二十四年（1898）に鮑たち若干の友人と3,000元の資本で北京路に商務印書館を開設した。当時は、戊戌維新にあたっており、新しい書籍を印刷する機会がやってくる。そこで3万元の増資を行なった。

粹芳は、夏瑞芳の字である。イギリス商の『文匯報』館で英字の植字をしていた。のちに『捷報』に入った夏瑞芳は、鮑咸恩と同じく植字工として働く。この社長兼編集者の外国人からひどい扱いを受け、それを嫌って独立したというのが商務印書館創設の経緯である。「免職になった」というのは、立場の違いからくる表現の差異であろう。張孝基論文は、『文匯報』と『捷報』を混同している。創立年を勘違いしている。最初の資金が3,000元というのは、正確な数字3,750元よりすこしばかりはずれている。3万元の増資というのは、該当するとすれば1901年の第1次増資だ。張元済と印有模が合計2万3,750元を投資した。このことを指すのだろう。

細かな部分は異同があるにしても、いきさつについては正確に書かれている。商務印書館の内部事情を知った人物の筆になる文章だと考えてもいいだろう。

問題は、つぎの箇所だ。

当時商務印書館業務蒸蒸日上，夏粹芳即經前清心書院校長范約翰介紹向美生洋行（American Trading Co.）定購印刷機器，價值12万兩銀子，並由范約翰作保，貨到滬後，商務印書館即向保險公司保足12万兩銀子。機器尚未運進廠內，但提單已開出，當時北京路商務印書館被焚，即領到保險費12万兩銀子。於是利用此款即在海寧路造屋建廠，營業逐漸發達，以致資金運轉不靈。

当時、商務印書館の業務は日に日に発展しており、夏粹芳は前の清心書院校長ファーマムの紹介で美生洋行から印刷機器を購入することに決めた。価格は12万元であった。ファーマムに保証してもらい、貨物が上海に到着した後、商務印書館はすぐさま保険会社に12万元の保険をかけた。機器はまだ工場内に運び込まれてはいなかったが、保証書はすでに発行されていた。当時、北京路の商務印書館は火災にあったため、すぐさま保険金12万元を受領した。

そこでこの金を利用して海寧路に工場を建設し、営業は漸次発展したが、資金は回転不良になってしまった。

まず目を引くのが、印刷機器の保険金が「12万元」であるとのべるくだりだ。具体的に金額をあげているのは、私の知る限り、この論文しかない。また、保険が家屋にかけられたとはいっていないことに注目しておく。

商売繁盛をいうのは、いわば外交辞令のようなものだ。なにしろ第1次増資で資金の損失を埋め合わせただけだった。そういう時期に12万元もする印刷機械を購入した。この事実を見て、商売繁盛と誤解したのではなかろうか。

12万元がどれくらいの巨額かといえば、第1次増資でようやく5万元の資本になったのを見ればわかるだろう。修文書館の機器を購入するのでも1万元だった。

ファーム（范約翰。John Marshall Willoughby Farnham, 1830-1917）という具体的な名前が出ている。事情に詳しい人物でなければ示すことのできない人名だと考える。彼は、アメリカ北長老派教会の宣教師だ。1860年に中国にやってきて、上海清心書院の院長を24年間つとめた*2。

American Trading Co. といえば、「茂生洋行」の名前でおなじみかもしれない。「美生洋行」は、それとは別会社なのだろうか。

「提単」とは、普通、船荷証券（通称B/L）を意味する。船会社が船積みを認め、指定された場所まで運送して引き渡すことを約束した有価証券である。つまり、商品の輸入業者の段階で必要になるものであって、このばあい美生洋行が担当する手続きに含まれる。商務印書館とは直接に関係が生じない性質のものなのだ。だから、上に見える「提単」は、保険に関する書類だと考えざるをえない。仮に「保証書」と翻訳しておいた理由である。

前出『支那経済全書』のなかに私が注目した箇所があった。引用すれば、「宏大ナル工場ヲ福建路ニ設立スルニ至レルモノナリ然レドモ之ガ為メ一時多大ノ負債ヲ生ジ非常ナル苦境ニ陥リ収支償ハズシテ將ニ解散ノ悲運ニ遭遇セントスルニ当リ」という部分だ。これが原因で、日本金港堂と合併した、という筋書きである。

張孝基の「そこでこの金を利用して海寧路に工場を建設し、営業は漸次発展し

たが資金は回転不良になってしまった」という箇所と重なる。ということは、先行する『支那経済全書』の執筆者たちが扱った資料あるいは伝聞を、この張孝基も目にし共有した結果なのかもしれない。また、前出の高翰卿も同じ見方をしていることがわかる。なんらかの関係があるのだろう。

さて、印刷機器購入と保険の関係部分を検討することにしよう。

ファーマムの紹介で美生洋行より印刷機器を12万円で購入することにした。この資金は、どこから出たのか。借金したといっても、ファーマムが負担したわけではないだろう。銭荘から借りたとしたらそれこそ借金だ。まず、これが問題だ。

上海に印刷機器が到着したのちに12万円の保険をかけた。これは理解できる。ただし、補償額が12万円であって実際の掛け金は、ずっと少ない金額のはずだ。

「機器はまだ工場内に運び込まれてはいなかった」とは、荷物が着岸したあと港あるいは別の場所に一時的に置かれていたという意味だろう。そうなると続く説明が理解できない。「保証書はすでに発行されていた。当時、北京路の商務印書館は火災にあったため、すぐさま保険金12万円を受領した」とはどういうことか。

「保証書はすでに発行されていた」とは、保険が発効していたと考える。腑に落ちないのは、新しい印刷機器が別の場所に保管されていたとすれば、火災にあうわけがない。焼けなかったものに保険金は支払われないはずだ。なぜ、保険金を受領できるのか。

ありえないことだが、焼けなかったが12万円の保険金はおりたとしよう。その12万円は機器購入のために支払うべき資金にほかならない。商務印書館の手元には残るはずのない金だ。あるはずのない金を印刷工場新築に使うことなどできない。

仮に、新しい印刷機器が火災にあって保険金が出たとしよう。この保険金12万円は、当然、おりるべきものであって疑問は生じない。だが、焼けてしまったとしても購入した事実は残るわけで、美生洋行に全額を支払わなくてはならない資金である。

つまり、どのような形であれ保険金の12万円が支払われたとしても、どのみち商務印書館の手元には残らない資金である。重要なところだ。印刷工場新築に使

用できるものではないという結論になる。

また、間借りをしていて火をだせば、家主に補償をしなければならないが、それに触れないのも不可解だ。

12万元という数字を出したのは張孝基論文の新しいところだといえる。だが、以上のように不可解な部分がある。保険金がありたという説明そのものに、さらに印刷工場の新築が何月なのかを明示していないという点で、ほかの文献と同じ過ちをくりかえしている。

逆にいえば、火災に遭遇しているにもかかわらず赤レンガ3階建ての印刷工場を建設できた理由を説明するために、火災保険金がありたといっているにすぎない。つまり、つじつま合わせなのだ(後述)。

其時適有日本人擬在上海開設印書房，往訪美華書館費啓鴻研究，經費啓鴻告訴日人：“30万兩銀子在上海開印刷廠，開不大的，不如投資与商務印書館合作更好。”於是業務更加拡大，營業更加發達，此後即在四馬路設立發行所。發行所成立後，夏粹芳即和日人拆股。伝聞夏粹芳被刺与日人有関。

この時、ちょうど日本人が上海に印刷工場を開設しようとしており、研究しようと美華書館のフィッチを訪ねたから、フィッチの口から日本人につげた。「30万元で上海に印刷工場を開くにしても、大きいものはできない。商務印書館に投資して合作するのがもっといいだろう」と。そこで業務はさらに拡大し、営業も發達した。その後、四馬路に發行所を設立し、すぐに日本人をクビにした。伝え聞くとところによると、夏粹芳が暗殺されたことと関係があるということだ。

フィッチ(費啓鴻。George F. Fitch, 1845-1923)が登場している。彼もアメリカ北長老派教会宣教師である。1870年、中国に到着したのち上海で伝道する。1888年から1914年まで美華書館主任と『教務雑誌』の主筆を兼任した*3。

フィッチの名前が出てくるところからも、執筆者の張孝基は美華書館の事情に通じた人間だと思われる。あるいは美華書館に勤務していて商務印書館の人々とも面識があったのかもしれない。山本条太郎が三井洋行の上海支店長に赴任して

きたのが1901年だった。岳父の原亮三郎から金港堂の中国進出について調査を依頼されていたはずだから、その一環としてフィッチに接触することもあったであろう。

今まで見たこともない「30万元」という金額が出てくる。事實は、商務印書館と金港堂が10万元ずつを平等に出資して合弁会社となった。もしも、この「30万元」が正しいとすれば、金港堂にとってみれば予定よりも比較的安価な投資ですんだということになるろう。

発行所を設立したあと、日本人をクビにした、という箇所は私にはじめて見る。だが、その事實はなかった。合弁解消と取り違えているのではなからうか。1914年に夏瑞芳が暗殺されたのは金港堂との合弁を解消したのが原因だ、というデマが流れたことがある。この記述を見るとデマがあったことは本当だったらしい。張孝基論文は、合弁解消という重要な事実をいわない。夏粹芳暗殺だけを記す。この部分は、当時の風聞を反映している。

夏瑞芳の暗殺が見えるから、張孝基論文が1914年以後に執筆されたことが明らかだ。1915年の『大上海』の前だとすれば、時期的にうまくおさまる。

事情通である張孝基ですら、印刷工場の新築がいつなのか明示していないことを強調しておきたい。商務印書館と金港堂の合弁問題を解明するひとつの重要な鍵だと考えているからだ。

さて、1949年後の中国ではどのような説明が行なわれているのか見ることにする。参考資料として利用できる文献のなかでわずかに3本の文章しかない。火災に言及する主要論文は、多くはないのだ。

章錫琛「漫談商務印書館」『文史資料選輯』第43輯1964.3 / 1980.12第2次印刷（日本影印）。66頁 / （有刪節）『商務印書館九十年 我和商務印書館』北京・商務印書館1987.1。107頁 / （選）宋原放主編、汪家熔輯注『中国出版史料・近代部分』第3卷 武漢・湖北教育出版社2004.10。該当部分は未収録

1902年，北京路工場被火焚毀，得到一筆巨大的保險賠款，於是決定再增資金，在北福建路自建廠房，並在河南路新設發行所。又為了增設編譯所，在廠房對面唐家弄租屋三間。

1902年、北京路の工場が火災で焼け、巨額の保険賠償を得た。そこでふたたび増資を決定し、北福建路に自前で工場を建設し、河南路に発行所を新設した。また、編訳所を増設するため、工場のむかひの唐家弄に3部屋を借りた。

「巨額の保険賠償を得た」というのは、張孝基の記述を拡大解釈したとわかる。もし高翰卿の文章によっているとすれば、きわめて拡大して解釈したことになる。だいいち、この時期に増資した事実はない。自前の工場を建設できたのは、火災保険金が、それも巨額のものが出たからにちがいない、という思いこみだと考える。章錫琛も、新工場の完成日時を明示していない。正確な事実を把握していないらしい。

羅品潔遺作「回憶商務印書館」『商務印書館館史資料』之三 北京・商務印書館総編室編印1980.11.25。18頁

他們最初合辦的印刷機構設在北京路，只有一開間門面，以後擴充為兩開間。中間曾遭到過一次火災，因為曾投火險，所以損失不大。

彼らが、最初、共同ではじめた印刷組織は、北京路におかれた。たった1部屋で、のち2部屋に拡張した。1度火災にあったが、火災保険に加入していたため損失は大きくはなかった。

羅品潔は、1906年、十三歳で商務印書館の発行所に入った。身をもって体験した回想録である。

「火災保険に加入していたため損失はおおきくはなかった」。商務印書館は、間借りをしていたのだ。火災保険金は家主の手にわたったと考えるのが正しい。たとえ、印刷機器にも保険をかけていたとしても古い機器であれば査定されるだろう。よくてせいぜいが保有していたのと同等の印刷機を入手できるくらいのものだ。自らが火元で隣近所に迷惑をかけたまま知らん顔をするわけにはいかない、と考えるのが普通の感覚だ。北福建路海寧路の印刷所と火災の関係は述べていない。羅品潔が表現したように「損失はおおきくはなかった」というのが、私には

いちばん納得がいく。

朱蔚伯「商務印書館是怎样創辦起来的」『文化史料(叢刊)』第2輯1981.11。
145頁

一九〇二年七月、北京路館屋失火焚毀、乃自建印刷所於北福建路海寧路、以鮑咸恩為所長、另設編訳所於唐家街、設發行所於河南路棋盤街、内部職務有了比較明確的分工、經濟基礎有了進一步的發展鞏固。

1902年七月、北京路の家屋は失火で焼けた。そこで印刷所を北福建路海寧路に自前で建設し、鮑咸恩を所長とした。別に編訳所を唐家街に、發行所を河南路棋盤街に設立し、内部の職務にかなり明確な分担を行ない、經濟的基礎はさらに發展し強化された。

朱蔚伯も商務印書館に勤務していたという。内部資料を利用したと思われる詳細な数字を合併解消の説明に織り込んでいる。研究論文として重要だと私は考える。だが、火災と印刷所建設を併記して、火災保険についてはなにも書かない。

以上、いくつかの文献を見てきた。時間順に整理し直し要点を書き抜く。

『同文滬報』1902では、火災保険をかけていたことを明らかにした。

創業10年記念誌1907では、火災保険について言及しない。火災にあって印刷工場を新築したとだけいう。

『支那經濟全書』1908は、創業10年記念誌と同じ。「焼肥ノ有様」と表現しているのが興味を引く。

張孝基1914?は、12万元の火災保険金を利用して印刷工場を建設したとする。火災と新工場の建築を関係づけたのだ。

『大上海』1915と中華道人1919は、『支那經濟全書』をそのまま踏襲する。

高翰卿1934は、賠償金を受け取って印刷工場を新築したとする。

章錫琛1962は、巨額の保険賠償を得た、と表現が拡大する。

羅品潔1980は、火災保険に加入していたため損失は大きくはなかった、とおとなしい。

朱蔚伯1981は、火災保険に触れず、印刷所の新築だけをいう。

火災保険に触れるものそうでないもの、賠償金が出たの巨額だの損失は少なかつただの、記述はマチマチである。

ただし、各文献ともに、筋道はほぼ一致しているといってもいい。火災にあい、その後、印刷工場を新築し、資金繰りがうまくいかずに日本金港堂と合併することになった。

火災に見まわれたことと印刷工場の新築を結びつけて説明するために、それぞれの意見が分かれる。

すなわち、次のような疑問が出現して、無理矢理の解釈を引き出すのだ。

疑問：火災にあったにもかかわらず、印刷工場を新築できたのはなぜか。

解釈：火災保険をかけていたので、多額の賠償金を受け取った。

無理に解釈をしない文献もあることは上に見たとおりだ。

火災について商務印書館から説明を聞こう。新しい資料である。

3 新出資料 商務印書館が説明する火災

火災について商務印書館が説明した文章は、すでに見ている。すなわち、『外交報』壬寅第19号（（第21期）光緒二十八年八月十五日（1902.9.16）補印）の広告だった。

新しくここに提出するのは、『中外日報』に掲載された広告だ。『外交報』の文章と部分的に重なる。商務印書館自身が、火災のあとで説明しているという点で同様に貴重だ。そればかりか、保険について言及している部分がある。『外交報』広告よりも詳しい。見逃すことはできない。

『中外日報』光緒二十八年八月十三日（1902.9.14）

「商務印書館照常交易」

啓者本館向設上海北京路四十一号中外馳名生意蒸蒸日上乃不幸於七月十九晚

號內照常工作如蒙 仕商採辦機器託印書報及批購書籍
附陳藉鳴謝伏維 鈞鑒

能一踵門道謝為歉 附陳藉鳴謝伏維 鈞鑒

商務印書館謹啟

啟者本館向設上海北京路四十一號中外馳名生意蒸蒸日上不幸於
七月十九日忽遇火災現承三井洋行沙遜洋行並華商所設之長安公司各將
保險銀兩如數繳訖足見該保險行皆信實可靠至焚損之機器等貨
均由該保險行拍出售去惟尚幸鑄字房釘書房電氣房書板房棧房
等均未殃及現用本棧備售之新機器鉛字等件仍在北京路原處隔
壁四十號內照常工作如蒙 仕商採辦機器託印書報及批購書籍
寄遞往來銀函等請至四十號本賬房便是本館失慎後荷蒙 諸親
友盛情慰問銘感無既惟未能一一踵門道謝為歉 附陳藉鳴謝
悃伏維 鈞鑒 商務印書館謹啟

間忽遇火災現承三井洋行沙遜洋行並華商所設之長安公司各將
保險銀兩如數繳訖足見該保險行皆信實可靠至焚損之機器等貨
均由該保險行拍出售去惟尚幸鑄字房釘書房電氣房書板房棧房
等均未殃及現用本棧備售之新機器鉛字等件仍在北京路原處隔
壁四十號內照常工作如蒙 仕商採辦機器託印書報及批購書籍
寄遞往來銀函等請至四十號本賬房便是本館失慎後荷蒙 諸親
友盛情慰問銘感無既惟未能一一踵門道謝為歉 附陳藉鳴謝
悃伏維 鈞鑒 商務印書館謹啟

「商務印書館は平常どおり営業をしております」

拝啓。本社はこれまで上海北京路41番地において国内外に名
前をひびかせ営業は日の出の勢いでありましたところ、不幸
なことに七月十九日夜間、突然火災に見舞われました。三井
洋行、沙遜洋行ならびに中国資本設立の長安公司各社より規
定通り保険金の支払いを受けました。それら保険会社が信用
でき頼りになることがわかります。焼けて損傷した機器など
はすべて該保険会社が競売にかけました。ただ、幸いなこと
に活字鑄造室、製本室、電氣室、書板室、倉庫などはすべて
災難をまぬかれ、また、弊社で販売を準備しておりました新
しい機器活字などを使用し、北京路の元のところの隣家40番
地におきまして現在平常どおり営業を行なっております。機
器購入、刊行物の印刷、書籍の注文などを皆様方からいただ
けるようでしたら取引の現銀封筒などは40番地の本社事務室
へお願いいたします。本社が火を出しましたあと、皆様より
ご厚情お見舞いを賜り心よりお礼を申し上げます。じきじき
におたずねし感謝をすることができないことを遺憾に存じま
す。謝意をのべ謹んでご高覧をお願いいたします。

商務印書館敬具

興味深いことが書いてある。商務印書館の発した社告である点を再度強調しておきたい。伝聞ではなく、当事者の証言だからだ。

まず、文中に出てくる固有名詞について説明する。

この広告で最も注目されるのが、保険会社の名前を具体的に掲げている箇所である。上に各種文献を紹介したが、このことを指摘したものはない。

いわく、三井洋行、沙遜洋行、ならびに長安公司である。

三井洋行とは、いうまでもなく三井物産の上海支店をさす。遠山景直『上海』（出版社名不記1907.2.28）の167頁には、三井と沙遜の名前が見える。また、同書168頁には「東京海上保険会社（上海最古）／明治火災保険会社……代理店・三井洋行」と記載される。これを見れば、三井洋行が東京海上保険会社の代理店だったことが説明しなくてもわかる。だいたい、東京海上保険会社の創設者益田克徳は、三井洋行創設者益田孝の弟なのだ。両者が一丸となって上海に出ていっても不思議ではない。

ここで思い出して欲しいのが夏瑞芳が保険のブローカーをやっていたという事実だ。三井洋行と関係があるのではないか。1901-05年に山本条太郎は、三井物産上海支店長の任にあった。保険という業務を介して夏瑞芳と山本の関係にひとつの道筋がたつのである。

もうひとつ、『上海指南』（商務印書館 宣統元年（1909）五月初版／七月再版）には、以下のようにある。

三井 Mitsui & Co. 經理人 J. Yamamoto 在英租界四川路四十号。水火二險。

山本条太郎の名前が、なぜかしらローマ字表記で掲載されている。水害と火災の保険2種類を扱っていた。

沙遜のほうは、同書にふたつ掲載される。

老沙遜 David Sasson. & Co. Ltd 經理人 A. C. Moses 在英租界黄浦灘路二十三号。水火險。

新沙遜 C. D. Sassoon & Co. 經理人 S. A. Hardoon 在英租界黄浦灘九江路

転角。

ただし、長安公司の名前は見あたらない。

商務が保険会社名をみつつあげているのは、3カ所に分散して保険をかけていたという意味だ。

「規定通り保険金の支払いを受けました」というのであれば、3カ所だから保険金は十分に支払われただろうか。もしそう考える人がいるとすれば、それを短絡しているという。保険のブローカーは、契約を取るのが仕事である。まず、自分が加入する。つぎに親戚縁者友人を勧誘するのが普通だ。そうして成績をあげたことにする。夏瑞芳は、保険会社3社と契約を結んでいた。広く薄くであろう。「それら保険会社が信用でき頼りになることがわかります」と書くのは、夏瑞芳みずからの副業をも宣伝しているのだ。

また、保険をかけた範囲も上記の広告から推測できる。

「焼けて損傷した機器などはすべて該保険会社が競売にかけました」という箇所からは、もともとあった印刷機器だけに保険がかけてあったと了解する。だからこそ、保険会社が競売に出した。この競売に関して、夏瑞芳の身にあとでとんでもない事件が発生する。

以前に問題とした張孝基が説明する12万元の新しい印刷機器が、ここに出現している。見て欲しい。「販売を準備しておりました新しい機器活字など」である。新しい機器というのだから、外国から輸入した例の12万元の物件に違いなからう。

くりかえすが、この新しい印刷機器の代金は、火災保険金とは関係がない。商務印書館の借金として残ったはずだ。

商務印書館の社告より三日後の同月十五日付『申報』に裁判ニュースが掲載された。これが商務印書館の火災がらみなのである。しかも、夏瑞芳が逮捕されたというのだから驚く。

『申報』光緒二十八年八月十五日(1902.9.16)附張

「英美租界公堂瑣案」

包探竇如海解夏瑞芳到案稟称此人開設印書館曾保火險上次被焚經保險行賠

銀若干將燼餘之物交王国記拍賣內有值洋銀一百元之墨水一箱被夏私匿報由小的拘解請究王延律師哈華託声訴情由夏称墨水未經保險司馬諭令保險行与拍賣人自行理處

「英米租界裁判所の些細案件」

警察官竇如海は、夏瑞芳を護送し出廷して以下のように報告した。当人は印刷所を創設し火災保険をかけていた。このたび火災にあい保険会社より若干の賠償金を得た。焼け残りの品を王国記に引き渡して競売した。そのなかに価格洋銀百元のインク 1 箱が存在したが、夏によって不正に隠匿されたという報告があったため逮捕し護送したので取り調べていただきたい。王は弁護士プラットを招聘し事情を訴えて、インクには保険をかけていないと夏はいう。判事は、保険会社と競売人が自分たちで処理するように命じた。

夏瑞芳が逮捕された事実は、今まで商務印書館の関係文献で触れられたことはない。当然だろう。いくら事実であったとしても、自社の歴史に社長逮捕を記載したがる関係者はいないからだ。

記事の後段に意味の通じない箇所がある。王と弁護士プラットについてだ。後日、これに関して訂正文が掲載された。

『申報』光緒二十八年八月十八日（1902.9.19）

正字 本月十五日附張所錄英美租界公堂瑣案中夏瑞芳一案律師哈華托係夏所延当日誤為王今既訪明合即更正

弁護士プラットを招聘したのは王ではなくて夏瑞芳であったという。逮捕された夏瑞芳が弁護士を雇った。これで話のつじつまがあう。

哈華託はプラット（Winfred Alured Comyn Platt 1859-?）である。イギリス人の弁護士、1892年に中国に来た。彼は共同経営者を変えていくつかの法律事務所を開業している*4。

夏瑞芳が逮捕された理由に注目したい。価格洋銀百元のインク 1 箱を隠匿したというのだ。それに対して、インクには保険をかけていないとプラット弁護士は

異議申し立てを行なった。

私が興味深く思うのは、保険のかけかたが細かいという事実だ。機器備品の一つひとつにわけて決めたい。

商務印書館の自社広告には「焼けて損傷した機器などはすべて該保険会社が競売にかけました」とあった。つまり、保険をかけた機器備品については、罹災後は保険会社の所有になると理解できる。保険会社は、それを競売人王国記に委ねた。だから、インクを隠匿した、いやもともと保険をかけていない、という問題が発生すれば、結局は保険会社と競売人に処理をまかせるよりしかたがない。これが判事の判断だった。

上記新聞記事で私が注目するのは、「若干の賠償金」という箇所だ。

商務印書館が失火で受領した保険金は、多額ではありえない。これが、各種文献を検討した結果、私が出た答えだった。それを裏付ける資料だと考える。俗にいう「焼け太り」などあろうはずがない。

最後に、火災と新印刷所建設に関する私の見解をくり返す。

従来の見方は変えなければならない。事実を反映しているとは思えないからだ。すなわち、火災にあったことと印刷工場新築は、もともと因果関係がなかった。

【附記】渡辺浩司氏より資料の提供を受けました。感謝します。

【注】

- 1) 場所の名称と役割分担などの説明は、鄭逸梅「夏瑞芳、鮑咸恩創辦“商務”略記」(『書報話旧』上海・学林出版社1983.8。3-6頁)、高翰卿「本館創業史 在発行所学生訓練班的演講」(冰巖筆記原稿1934?)および朱蔚伯「商務印書館是怎样創辦起来的」(『文化史料(叢刊)』第2輯1981.11。142頁)による。以下も同じ。
- 2) 中国社会科学院近代史研究所翻訳室『近代来華外国人名辞典』北京・中国社会科学出版社1981.12。135頁
- 3) 『近代来華外国人名辞典』142頁

- 4) 黄光域『近代中国専名翻訳詞典』(成都・四川人民出版社2001.12。282頁)に以下のものが収録されている。

Platt, Macleod & Wilson 哈華託律師公館

Platt, Macleod, Gregson & Ward 哈華託律師公館

Platt, Teesdale & Macleod 哈華託律師公館

Platt, White-Cooper & Co. 哈華託公館：古沃公館

商務印書館と金港堂の合弁解約書

『清末小説』第27号（2004.12.1。実際の発行は同年8月）に掲載。沢本郁馬名を使用。商務印書館と金港堂が合弁を解消したときの契約書である。新聞に掲載されているにもかかわらず、誰もこの事実を指摘したことがない。合弁解消を説明し、日本人株を買収するための金額、利子、手数料、支払日などを詳細に記述している。関係者の署名捺印があって研究上の第1級資料である。この契約書は、「商務印書館清退日股合同」と題して、宋原放主編、汪家熔輯注『中国出版史料・近代部分』第3巻（武漢・湖北教育出版社2004.10）に収録されている。発行の月日を見ると『中国出版史料』の方が早い。しかし、私が該書を購入したのは2005年3月（出版社から贈呈を受けたのは同年12月）であって、これを見たわけではない。主編の汪家熔氏は、契約書の存在をはやくから知っていたようだ。該書のいわば目玉として収録したのだろう。中国の出版事情からしてありうることだ。だが、『清末小説』がそれとは無関係に先を越して公表した。これは、まったくの偶然である。『中国出版史料』第3巻所収の契約書に誤植があることは、別の文章で指摘しておいた。笈文生氏よりご教示をうけた。感謝します。

【増補附記】『清末小説』第27号に掲載した新聞の複写にもとづき復刻した次のものがある。「商務印書館与日本金港堂終止合辦合同」『張元濟全集』第4巻詩文、北京・商務印書館2008.12。285-286頁

商務印書館と金港堂は、それまで維持していた合弁関係を解消することにした。協議を経て契約書(以下、合弁解約書と称する)を作成し双方が調印したのは、1914年1月6日のことである。

合弁解約書は、今までその存在が明らかにされたことはない。私は、それを日

本でみつけた。ここに報告する。

1 合併契約書と合併解約書

1903年11月19日（光緒二十九年十月初一日）からはじまった両社の合併事業は、結果として足かけ12年間、実質約10年間で終結したことになる。

合併契約締結時には、金港堂の原亮三郎は、日本からわざわざ上海にまで赴いた。合併の契約書に署名するためだ。ただし、合併契約書そのものは、現在まで公表されたことがない。

合併するための契約書があるなら、解約書もあるはずだ。

当時、商務印書館の理事をつとめていた鄭孝胥は、1914年1月7日の日記に、日本株回収の調印を前日に行なったと記録している[鄭孝胥1993:1497]。鄭孝胥自身は、調印の場に出席したわけではない。理事会の議題になった。正月31日に臨時株主会を開催することに決めてもいる。調印したのだから、文書になっているとわかる。これが、私のいう合併解約書である。

商務印書館と金港堂が締結した合併契約書、また後の解約書は、いうまでもなく内部文書である。普通、外に出てくることはない。私は、そう考えていた。

文書は商務印書館の内部に秘蔵されているにしても、しかし、その内容のおおよそは、すでに知られているといってもいい。

合併契約書については、当時の商務印書館の指導者たちが、いくつかの証言を残している。その証言を、研究者たちは無条件で信用しているのが現状だ。だが、その証言の内容が正しいかどうかは、契約書そのものが出現しないかぎり、検証することはできない。未解決の大きな問題として、いまだに存在していることを知らなければならないだろう。

一方、合併解約書のほうも、原物を見ることができない。しかし、その存在を示唆する文章がある。朱蔚伯が書いた「商務印書館はどのように創業したか[商務印書館是怎样創辦起来的]」だ[朱蔚伯1981]。

商務印書館は日本株主代表福間甲松と日本株回収のための契約12条を結んだ、と朱蔚伯はのべる。さらに、日本株回収に必要な金額をこまかく記録している。

説明の都合上、項目別に整理して紹介しておきたい。

朱蔚伯の記述

1. 日本株総額 55万3,916.5元
2. 支払い期日 1914年1月6日および6月30日にそれぞれ半額を支払う
3. 利息 4,370元を商務印書館が負担する
4. 為替差額 1万4,477.5元を商務印書館が負担する
5. 経費 2,769.58元を商務印書館が負担する
6. 諸経費合計(3+4+5) 2万1,817.08元
7. 支払い遅延利息 1万2,464元
8. 総額(1+6+7) 約58万8,200元^{ママ}[朱蔚伯1981:150-151]

計算間違いがある。単純な加算だ。6の諸経費合計は、表示したものよりも200元少ない2万1,617.08元とするのが正しい。総額は、58万7,997.58元だ。おおよその数で示せば、約58万8,000元となる。

詳細である。概数ではないのだ。分の位まで明示しているところに注目してほしい。私の知る限り、朱蔚伯を除いて、これほどまでに細かな数字を提出している研究者は、いない。

さらに、日本株主代表者として福間甲松の名前をあげていることに注目したい。内部事情に詳しくなければ、あるいは資料を手元においていなければ、福間の名前を掲げることはできないだろう。

私が朱蔚伯の文章を重視する理由は、以上のようにほかの文献が述べていない事実を記しているからだ。

資料がなければ書くことのできない種類のものであると断言できる。合弁解約書そのものか、あるいは詳細を記録した内部文書に依拠しているのだろう。朱蔚伯は、商務印書館に勤務していたというから、それも可能だった。

そのころの当事者のひとりであった鄭孝胥の日記にも、合弁解消についての言及がある。日付をおって交渉の変化を知ることができて貴重だ。だが、具体的な金額となると「総価五十四万余元」[鄭孝胥1993:1496]というようにおおざっぱな数字しか記録していない。

比較すれば、朱蔚伯の文章が珍しいものであることが理解できる。

ただし、上に示した計算違いのほかに、疑問がないわけではない。

3の利息は、理解できる。それでは7の支払い遅延利息とは、なにか。1万円をこえており、少額というわけにはいかない。3の利息4,370元とくらべると約3倍になっている。いちじるしく平衡を欠くと感じる。ただし、こちらの数字も詳細であって、なんらかの根拠があることを示唆しているようにも思う（後述）。

すこし先回りして説明すれば、日本人の所有する株数は3,781株であった。商務印書館（代表：夏瑞芳）と金港堂（代表：福間甲松）が協議を経て、1株を146.5元に評価することで合意する。両者を乗じて得られた総額55万3,916.5元という金額は、朱蔚伯の記述と完全に一致する。

朱蔚伯の文章から、合併解約書の影をみることができる。だが、彼は、それらの数字がどこに記録されているのか根拠を示さない。事実だから、典拠を示す必要を感じなかったのか、ともいもする。

影はあるが実物は見たことがない。内部文書だから姿をかくしたままで、と私が長く考えていた理由である。

ところが、合併解約書は、年を経て1度だけ公表されていたのだ。2004年にそれを見つけた私自身が、意外だと感じるくらい奇妙な出現のしかただった。順を追って説明する。

2 『実業之日本』問題^{*1}

話は、時間がすこし経過してからのことになる。商務印書館が金港堂との合併を解消して5年がたったころだ。

1919年、第1次世界大戦後のパリ講和会議において、旧ドイツ山東利権の回収、日本の対華21カ条の廃止などの要求はすべて拒否された。

5月4日、北京の学生たちは集結しデモ行進を行なった。学生たちは、「条約調印拒否」「21カ条撤廃」「日貨排斥」などのスローガンをかけた。ニュースは、またたくまに中国全土に伝わり、大規模な運動に発展する。五四運動の始まりだ。

鄭孝胥日記の5月6日には、日本が青島を返還しないことをもって北京の各学校の学生が、曹汝霖の住居に火をかけ、章宗祥を殴打、あるいは殺した、との伝聞が記録されている[鄭孝胥1993:1781]。

同じく鄭孝胥日記から関連記事を拾ってみる。

5月11日、上海で国民大会が開催され、日貨ボイコットが宣言された。

6月5日、北京の学生千名余が逮捕された。上海の学校は授業ボイコットを行ない、学生は商会もそれに応じるよう要求した。

6月6日、昨日の集会で日本人数人を負傷させたことが『大陸報』で報道された。

6月9日、学生らは工場がストライキをするよう要求し、イギリス、フランス租界では軍隊が出てきて弾圧した。

上海の騒然とした雰囲気伝わってくる。

中国における反日運動の燃え上がりと広がりを目にして敏感に反応した日本の雑誌があった。『実業之日本』である。

該誌第22巻第13号(1919.6.15)は、「支那問題号」と題して特集を組んだ【図1】。

「対支外交の一転機」、増田義一「日支諒解論」、浮田和民「日支提携して東洋モンロー主義を樹立せよ」、小村欣一「日本の対支外交方針」、青柳篤恒「支那外交の特質批判」、中華道人「日支合辦事業と其経営者」【図2】、服部宇之吉「支那の国民性及ひ支那人」などを掲げる。署名論文24本そのほかを収録して1冊まるごとを特集にあてた。

そのなかの中華道人の文章が、問題を引き起こすことになる。そればかりか、のちに商務印書館と中華書局の裁判にまで発展するのだ。

中華道人論文は、「日支合辦事業の沿革」「日支合辦事業の現況」「日支合辦事業の将来」の3章で構成される。「現況」部分で21以上の会社名をあげ、そのなかに商務印書館を入れた。つまり、日本と中国の合併企業として商務印書館が存在していることを宣伝する結果となっている。

短い文章で、商務印書館の創業の歴史を述べる。中国人が創立したが火災にあり、経営不振のあり、金港堂との合併により挽回したことを説明する(詳細は[樽本2004]を参照されたい)。

内容から判断すると、1912、13年ころまでの商務印書館を描写していることが

【図1】



る、本店を湖南省長沙に置き、取締役は倉知鐵吉、尾崎敬義、小野豊太郎、齋誠伯の諸氏である。最近一割の利益配當を爲した。

八、鴨綠江探木公司

本公司は明治三十八年十二月締結の日清條約附屬第十條の規定に基き、明治四十一年五月日清合同村木會社章程を協定し、同年九月より開業するに至つたもので、今日に於ては純然たる日支兩國合辦の禁利會社である。本公司事業の主なるものは、木材の直營採伐木材の採收及び木材の販賣にして、此外其採伐區域内の伐木業者に對する資金の融通をも營み、資本金三百萬元で、日支兩國にて各半額を出資して居る。本公司は事業としては比較的有望であるに拘らず從來其成績兎角不良にして、人の日支合辦事業の經營困難を説く者先づ本公司に指を屈するが如き狀況なりしは、如何なる原因に基くやと云ふに、其經營方法と日支兩國人の權衡問題が其宜しきを得ざりしに基くもの、如くある。殊に日支兩國人權衡問題に關しては合辦事業に於て最も注意を要するもので、聞く所に依れば同公司の如きは役員は悉く兩國人均等ならしめた結果總て倍數となり、經費の負擔少なからざるのみならず、業務上事務員の出張等に就ては支那人の猜疑心と利己心とは遺憾なく發揮せられ、爲めに空費を要する場合多しと云ふ。

九、立大麵粉公司

本公司は立大機器製粉株式會社とも稱し、明治四十一年七月の設立に依り、資本金二十萬兩にして麵粉製造並に販賣を目的とし、日本人側出資者は歸化人葉子徳で、本店を上海に置き、支那人主として經理の任に當り、該二十萬兩を固定資本とし、運轉資金は經理人に依りて調達せられ、約二十萬兩を以て之れに充つ。原料小麦は無錫蘇州鎮江蘇州漢口及び大連より購入し、一日約一千袋を生産し、營業成績良好なりと聞く。

十、商務印書館

商務印書館は最初支那人のみにて經營せられ印刷出版を業とせしが、開業後二年にして火災の爲め全部を烏有に歸し、更に多額の負債を爲して新工場を建設せしむ、遂に収支償はずして將に解散せんとするの非運に遭遇せるを、金港堂の原亮三郎氏開きて、茲に日支合辦の事業と爲し、萬難を排して明治三十六年十二月遂に彼我合同資本金六十萬元を以て開業の運びに至り漸く其運轉を挽回し、以て今日の盛大に及ぼした。當時支那人側に於ては實權の日本人に歸するを恐るゝもの多く、爲めに株主間の内訌を避くる必要ありと、且つ官廳の物議を醸すことなからしむる爲め、日本の登記手續は煩雜に過ぎ不適當なりとの理由にて、香港に於て登記し、

尙ほ支那人の誤解を避くる爲め、清國農工商部に登錄し以て清國會社となし業務の擴張を圖つた。當時新舊兩派の過渡時代にして、新學書籍の刊行多かりし爲め、事業は益々盛況に向つた。現今資本金百萬元(八十萬元拂込済)を有し事業成績甚だ良好にして、幾年か年々二割内外の配當を爲して居る。

今や支那人側に於ても、營業成績漸次良好なる爲め、日本人側に依歸する傾向を生じ、兩者間益々圓満に進み、業務は益々擴張の機運に向つた。然れども未だ該書館が表面支那會社なるも實權は日本人に歸屬するものなりとの思想は掃蕩する能はざるもの、如くある。現に先年北京に開催せられたる中國教育會の會長張元濟氏が、該書館の支那人側代表者なりし爲め、教育會員の一部分及び外部の一觀人等は、張氏を商務印書館に於ける日本人の用人なりと誤解し、彼れが教育會長となれるは該書館の出版物を廣く支那の諸學校に供給せんとするものにして、支那教育權の基礎は全然日本人の手に俟つたの不都合を來たすべしとの批難を蒙りしに至つた。此種の輿論は獨り該書館の身合のみならず、日支合同事業の場合に往々見聞する所にして我當業者の堪難亦尠からぬ。

日支合併辦事業と其經營者(中華道人心第貳拾貳卷第拾參號) (一六三)

【圖 2】

日支合辦事業及其經營者

中華道人



◎日支合辦事業の沿革

日支合辦事業の沿革を尋ねるに、其發端は日清戦役後にある。顧みれば日清條約が馬關に於て締結せらるゝに當り、我國は同條約に於て支那開港場に於ける工場設置の權利を獲得せる結果、最速國條款を有する歐米諸國は先を争ふて、上海其他の開港地に工場を設置するに至つた。然るに我國に於ては當時未だ國內の事業資金にさへ不足を告ぐるの有様であつたから、進んで海外に投資する者なく、去りとて外人の支那に於ける活動を傍觀するは忍ぶ能はざる所であつたので、本邦の有志者は日支合辦事業の必要にして有利なるを説き、極力其出現を促した。即ち日支兩國人は同文同種にして互に相親み易き

こと、支那には死なせらるゝ資金多くして之れを利用するには合同事業に如くものなきこと日本人の企業能力を提供して支那資本に依り彼地に合同事業を經營するは、一舉兩得にして實に時宜に適したる良策なること等の説盛に行はれ、且つ時を同ふして戦後滿洲經營の急務なること、世上の當套語たるに至り、漸次本邦人中に南滿地方に出で、所謂合辦事業を爲さんと企つる者續出するに至つた。是れ今日謂ふ所の日支合辦事業の始めである。

斯くの如くにして北滿地方に幾多の小規模なる合同事業興れるも、其多くは支那人の資本豊富なりとの誤解と、支那經濟事情に適せなかつた爲め、適當なる經營を爲すこと能はざりしとに依り、資金を多額に要せざる事業か、然らざれば主として本邦人の出資に依るものゝ外悉く失敗に歸した。次で明治三十三年俄國の亂起るに及び、排外熱熾となり、諸外國の支那に於ける各種の企業は一大打撃を蒙るに至つた。然るに近來利權回收熱大に興り、内地産業は之れに作いて勃興し、漸次外國商品を驅逐せんとするの傾向見ゆるや、歐米人の支那内地に於ける企業熱は再び勃興して、各種企業の成立を觀るに至つた。即ち漢口奉天に於ける英米トラスト、煙草工場の如き、露人の哈爾濱に於ける製粉所、九江に於ける製茶所、獨逸人の北滿洲に於ける製糖業、青島に於ける麥酒釀造業等の如き其一例である。本邦人も亦過去の經驗と、支那の事情に精通せるとによりて支那人の資金乏しくして到底其

わかる。必然的に1914年の合弁解消には言及しない。ゆえに、読む人は、雑誌の発行された1919年の時点で商務印書館は日中合弁企業のままだと誤解する。

1919年に発表されたにもかかわらず、6、7年前の情報しか盛り込んでいない。その箇所についていうならば、時代遅れの文章でしかない。

執筆者である中華道人は、商務印書館がすでに日本との合弁企業ではなくなっている事実を知らなかったのだろうか。文面から判断すると、そのことについて知識が欠落していたように思える。無知というなら、『実業之日本』の編集者も同様であった。まさか、これが日本と中国の間で問題になろうとは、想像もしなかっただろう。

すこし触れておくと、中華道人の文章の前半は、先行文献を孫引きしたにすぎない。

先行文献とは、『支那経済全書』第12輯（1908）である[東亜同文会1908a]。商務印書館が金港堂と合弁企業となっただけをかなり詳しく述べている。しかし、こちらは、商務印書館側の注意を引かなかった。1908年といえば、まさに合弁時期の最中である。合弁企業だという点に間違いはないからだ。

だが、中華道人の文章が発表された1919年は、以前とは状況が違う。だいいち、商務印書館が金港堂との合弁を解消してすでに5年が経過している。さらには、日本製品ボイコットが叫ばれているのに、現在進行形で日中合弁企業だとする誤った文章が日本で発表されたのだ。

時期が時期だけに商務印書館の神経を逆なでしたのも当然だろう。首脳陣は、なんらかの対策を早急に立てざるをえなかった。

実業之日本社にむけて

商務印書館の指導者たちは、『実業之日本』誌へ記事訂正の申し込みを行なうことにした。

1919年6月29日の『張元濟年譜』には、次のように書いてある。

夜、鮑咸昌、王顕華、高夢旦、李拔可、陳叔通らと家で食事をする。日本『実業之日本』雑誌が一文を掲載し、すでに日本株を回収している商務印書

記事がのった次号（『実業之日本』第22巻第17号1919.8.15【図4】）に下のような文章があるのに気づいた。

瓊川生「無適語」

本誌の読者は前号広告欄に、支那の商務印書館が同社の事業を日支合辦として紹介した『支那問題号』の誤を正し、純然たる支那人の事業であることを証明する為、日本人所有の株式全部を買収した民国三年の契約書を掲げた支^{ママ}部[那]文広告二頁を看過しなかつたであらう。商務印書館は中華書局と相並んで上海に於ける二大出版業者である。従来互に鎬を削つて競争してゐたが、商務印が日支合辦の事業であると誤報せらるゝや、中華書局は奇貨措くべしとなし、排日熱の支那民衆に瀰漫せるに乗じ、盛に競争者の日支合辦なるを新聞に広告し、恰も商務印の書を買ふは憎むべき日本の書を買ふと同じであるかの如く中傷し、一挙敵壘を覆へさんとした。従つて商務印も亦之に対抗して事実の無根を支那新聞に及び本誌に広告した。中華書局が最初より商務印の純支那事業たるを知り、只『支那問題号』の記事を故らに悪用したものか否か吾人は之を知らぬ。併し商務印が契約書を公表して記事の誤を正した後に於て尚且つ商務印を非難するに日支合辦事業を以てするは、排日熱を商策に濫用し、商敵を無根の事実^{ママ}に苦しむるものである。排日熱全盛の日、この問題を提起せるは、中華書局として或は巧慧であらう、併し其手段は餘りに卑劣である。（後略）[瓊川生1919:12]

瓊川生が「商務印」と書いているのは、誤解にもとづく読み癖である。事實は、商務+印書館が正しい。漢語の「印書館」は、印刷所を意味している。だが、日本人は、ややもすれば、商務印+書館と勘違いする。

文中に「純然たる支那人の事業であることを証明する為、日本人所有の株式全部を買収した民国三年の契約書を掲げた支^{ママ}部[那]文広告二頁を看過しなかつたであらう」とはっきり書いてある。

1914年の合弁解約書を掲げた漢語の広告だというのだ。2頁あるとも明記してある。該誌「前号」は、第22巻第16号にあたる。第16号といえば、訂正記事が掲

【圖4】

無適語

生川瓊



◎本誌の讀者は前號廣告欄に、支那の商務印書館が同社の事業を日支合辦として紹介した「支那問題」の誤を正し、純然たる支那人の事業であることを證明する爲、日本人所有の株式全部を買収した民國三年の契約書を掲げた支那文廣告二頁を看過しなかつたであらう。

◎商務印書館は中華書局と相並んで上海に於ける二大出版業者である。従来互に鏢を削つて競争してゐたが、商務印が日支合辦の事業であると誤報せらるゝや、中華書局は奇貨措くべしとなし、排日熱の支那民衆に瀾漫せるに乗じ、盛んに競争者の日支合辦なるを新聞に廣告し、恰も商務印の書を買ふは憎むべき日本の書を買ふと同じであるかの如く中傷し、一舉敵讎を覆へさんとした。従つて商務印も亦之に對抗して事實の無根を支那新聞に及び本誌に廣告した。

◎中華書局が最初より商務印の純支那事業たるを知り、只「支那問題」の記事を故らに悪用したものか否か吾人は之を知らぬ。併し商

務印が契約書を公表して記事の誤を正した後に於て尙且つ商務印を非難するに日支合辦事業を以てするは、排日熱を商業に濫用し、商敵を無根の事實に苦しむるものである。排日熱全盛の日、この問題を提起せるは、中華書局として或は巧慧であらう、併し其手段は餘りに悪辣に餘りに卑劣である。

◎何れの國の商人も不斷に競争し、競争は飽までも正々堂々の態度を以て品質、價格、取引方法に他に優るを期し以て競争に勝たんとする。文明商人の競争は斯くあらねばならぬ。揚足を取り、無根の事實を流布し、多數の意志に迎合し、敵を苦めんとするは、營利一片の商人でも尙且つ之を恥とする。

◎併し是は一書局の事でない、苟くも乗すべき隙あらば事實の有無と正否とを問ふの遑なく、廣く言論を以て民衆を煽動し惑亂し、而して其間に利益を擲らんとするは支那人性情の一端を暴露したものであらう。山東問題は書局の態度

を擴大した事件に過ぎぬ。

◎支那參戰前、寧ろ支那が獨逸の力に憚れる當時、我國は日英同盟の體によりて獨逸を膠州灣より驅逐し對獨逸に本づき戰役終結後之を支那に還附するを約し、爾來幾回か之を聲明した。

◎而も國際聯盟成り弱小國の安全保障せらるるや、米國の東洋發展に志あるを看た支那は、對獨參戰の一事を口實とし、日本の不還附を邪推し内には盛に排日熱を鼓吹し、外には巴里に華盛頓に得意のプロバガンダを行ひ、理否を顛動し曲直を無視し、膠州灣の還附を直接に獨逸より受けんとし條約不調成を敢行して顧みなかつた。

◎山東直接還附行はるゝとせば是れ正義の死である。聰明なるべき世界の耳目が支那の誇張的巧妙なる宣傳に眩まざるゝものである。

◎兎に角吾人は商務印書館の問題と山東問題とを對照し、只彼等の惡辣なる競争振と惡辣なる外交振とに驚かざるを得ない。

第貳拾貳卷第拾七號 (一一一)

載されている号だ。

ところが、雑誌のどこをさがしても、いくらさがしても漢語の広告2頁を見つけることができない。

私が見た『実業之日本』には、ページに欠落があるのかもしれない(実際にはそのようなことはなかったが)。念のため、別の図書館におもむいてその所蔵本をも閲覧した。しかし、ないものは、やはり、ない。不思議なことだ。

瓊川生は、漢語広告2頁が掲載されていると間違いなく書いている。にもかかわらず、該当雑誌にはそれが、ない。

『実業之日本』には、それ以後、関連する記事は掲載されなかった。

日本の雑誌では、探索の糸はこうして途切れてしまった。ところが、中国の資料をさぐっているうちに合弁解約書に出会うことになる。

中華書局にむけて

『実業之日本』「支那問題号」に注目したのは、商務印書館ばかりではなかった。ライバル会社の中華書局が、先手をうって行動を開始している。雑誌を漢訳し出版したのである。

商務印書館と中華書局がなにかにつけて競っているのには、理由がある。両者の関係というのが、最初からねじれているのだ。すなわち、中華書局は、商務印書館の出版方針に満足できない人々が、中華民国成立を機会に飛び出して創業した出版社だった。最初に出資したのは、陸費逵、戴克敦(懋哉)、陳寅(協恭)たちだ。のちに、沈頤(朶山)、沈継方(季方)らが加わった。

中華書局の方が、商務印書館を目の敵にした。外からながめると、商務印書館を攻撃することにみずからの存在理由を求めているかのような印象をうける。

民国後、学校教科書をめぐって両者が熾烈な競争を繰り広げたのもそのひとつだった。

商務印書館をライバル視した中華書局だが、創業後しばらくして経営危機にまわられたことがある。

1917年、業務の急速な拡張と商務印書館との競争が激烈をきわめ、それに加えて副局長の沈知方が投機に失敗して営業停止直前までになった。

陸費逵の回憶によると、「副局長の某君が個人的に破産し、公私ともに被害を受けた」[陸費逵1987:225]という。この某君というのが、沈知方だ。陸費逵は、匿名にして述べているだけで、個人の破産については詳しい説明をしない。別の文章では、沈知方が会社の金3万元を流用したというのもある[沈芝盈2002:507]。何に流用したのか、不明だ。

沈知方は、1900年、商務印書館に入社すると営業に従事していた。1913年に中華書局に招かれている。ある説によると、アメリカ商を通じて大量の紙を購入予約したところが、第1次世界大戦の勃発により紙価が暴落して数万元の損失を出したという[鄧詠秋2003:48]。戦争が始まれば紙価は、急騰するのではないかと納得しにくい説明だ。だいいち、中華書局で使用する紙を購入するのだから、これは業務だろう。それと個人的な破産とは、無関係ではないのか。詳細がわからない。

中華書局の営業不振は、沈知方だけが原因ではなかろう。いくつかの要因が重なって、そうなった。

そこで商務印書館に身売りする話が浮上する。足蹴にして飛び出した古巣への帰還ということだ。皮肉なことだといわなければならない。

1917年12月14日の商務印書館の理事会では、張元済は買収に賛成し、鄭孝胥は反対した。結局、賛成多数で買収を決定している。しかし、12月16日、中華書局では臨時株主会議を開催し、理事、監察を改選し陸費逵が局長を辞任することになった。これで商務印書館への身売り話は立ち消えになったというのだ[張樹年1991:141,146][銭炳寰2002:30-35]。

後日談がある。商務印書館が中華書局を買収する件について、山本条太郎の発言が伝えられている。

1918年2月8日夜、張元済、李拔可、高夢旦、鮑咸昌らは、山本条太郎、小平元、木本毅らと宴会を開いた。その席上、山本は、「買収してはならない」「出版業を独占すれば、人に嫌われる」「外からの圧力がなければ必ず驕る、おごりは最大の病となる」といったという[張樹年1991:149]。

山本条太郎は、出版社には健全な競争が必要不可欠だ、競争があって事業が発展する、と考えていたのだろう。

だが、競争は、健全なものばかりだとは限らない。スキがあれば足をひっぱろうという相手であれば、なおさらだ。

中華書局は、商務印書館にとっては、その類の競争者になっていたのかもしれない。山本条太郎の想像を超えていた。

中華書局の創業者は、その多くが商務印書館にもともと勤めていた。商務印書館がすでに日本との合併企業ではなくなっていることは熟知している。しかし、中華道人の文章は格好の商務印書館攻撃材料になる、と中華書局の首脳陣は判断した。

商務印書館と中華書局は、『実業之日本』の漢訳をめくって新聞紙上で連日の広告合戦をくりひろげた。

単行本について、のちの『中華書局図書総目』には、次のように載っている。

『日本人之支那問題』〔日〕実業之日本社著 中華書局編輯所訳 1919年7月初版 32開

内収《日本对华外交方針》、《中国之国民性及国民思想》、《中日合辦事業与其経営者》、《中国外交之特質批評》等13篇論文。〔中華書局1987:66〕

日本語論文は24本だから、そのうちの約半数13本を選択漢訳したらしい。

この記述からは、漢訳本は、1919年7月初版だとわかるだけだ（実際の発行は7月末だとあとで判明する）。それにしても素早い中華書局の仕事ぶりだった。

『申報』紙上でくりひろげられた商務印書館と中華書局の広告合戦を読んでいくと、上記の『日本人之支那問題』がいきなり単行本で発行されたわけではないことが理解できる。

すなわち、単行本の前に、中華道人の例の論文だけが特に抜き出され、先にピラとして印刷されているのだ。そればかりか、そのピラは、各省の学校にむけて大量に送付されたともいう。配布先が学校というのが意味をもっている。「日貨排斥」が叫ばれている最中なのだ。日本企業と合併である商務印書館の教科書は採用するな、という圧力であることはいうまでもない。

商務印書館の首脳は、それが中華書局の仕業であるとはウスウスは気づいてい

【圖 5】

申報

中華民國八年八月九日
 西曆七月十九日
 舊曆己未年六月二十二日
 今日禮拜六
 第四千六百七十三號
 第一萬六千六百七十二號

本館現已遷入...
 本館定價目
 本館廣告刊例
 頭等...
 二等...
 三等...
 四等...
 五等...

賞格一千元

乃事斷數年尙有借此以爲誣陷其用心不問可知本館不能坐視用特登報布告如有人能查明此項單件在本埠何處印刷出何人指使用何法遞寄各界交出各種真正憑據經本館查究得實者當以現洋一千元爲酬儀款以待統惟 公鑒

上海商務印書館敬啓

學術演講會

今日十九日上午十時請會仙舟先生演講「連帶學說」地址改在徐家匯李公祠復旦大學講學諸君僑來聽講

拆股再告
 嚴會記燬失單契聲明
 柱兒(即高劍秋)速覽

嚴會記燬失單契聲明
 柱兒(即高劍秋)速覽
 現在汝久無信來朋友傳說汝在外已遺下妻中八日夜交念我現已來滬尋訪汝妻家中汝見此告白立刻來見

【圖6】

申報

中華民國八年
 曆一千九百一十九年
 十二月二十二日
 曆未巳年十二月二十二日
 第四張半售大洋三分
 一萬六千六百七十三號

本館廣告刊例
 第一日每行一元二角
 第二日每行七角五分
 第三日每行五角
 第四日每行四角五分
 第五日每行四角
 第六日每行三角五分
 第七日每行三角
 第八日每行二角五分
 第九日每行二角
 第十日每行一角五分
 以上各日每行均含白字
 本館廣告刊例
 第一日每行一元二角
 第二日每行七角五分
 第三日每行五角
 第四日每行四角五分
 第五日每行四角
 第六日每行三角五分
 第七日每行三角
 第八日每行二角五分
 第九日每行二角
 第十日每行一角五分
 以上各日每行均含白字

本館啟事

今日因新聞廣告擁擠特增添老申報半張共計四張半

請閱者注意如有遺失向送報人索取可也

賞格一千元

前見日本某報載有中華道入撰述盟舉中日合股之公司而以本館列入其中正深駭異當向該報聲明業已得覆允為更正近聞本埠有人將該報譯成華文印刷多數分寄各界按本館於民國三年一月六日將日股全數收回呈部立案并有紀念贈品登報布告是本館之為完全華商舉國皆知乃事隔數年尙有借此以為誣陷其用心不問可知本館不能坐視用特登報布告如有人能查明此項單件在本埠何處印刷由何人指使用何法遞寄各界交出各種真正憑據經本館查究得實者當以現洋一千元為酬儲款以待統惟 公鑒

上海商務印書館敬啟

答商務印書館賞格一千元

各篇譯成華文名曰日本人之支那問題以供國民對日之研究其中有一段涉及該館本局照原文翻譯未曾刪去抱款何似至賞格所查各節中明如左○係中華書局印刷所印刷○係中華書局編輯所譯行並未受人指使○係真品由郵政暨轉運分達各省○憑據存中華書局總廠至該館賞格開洋一千元當捐入全國學生聯合會望該館送交該會為幸 中華書局謹啟

分送各省憑據存中華書局總廠至該館賞格開洋一千元

劍秋西家為南通張季直先生所編賞者其書查物券隨意變化而一合於右人海非易事欲得佳書者勿交臂失之現住上海大東門中華路二百一三號

ただらう*2。ピラの原物も入手していた。しかし、ピラそのものには中華書局の名前は掲載されていなかったと思われる。つぎの新聞広告から、そうと推測される。

1919年7月19日付『申報』に商務印書館の懸賞広告が掲載された。題して「懸賞1千元〔賞格一千元〕」【図5】という。内容のおおよそは以下のとおり。

日本の某雑誌が中華道人の論文を掲載した。中日合弁の会社のなかに本館（商務印書館）を入れている。その雑誌には声明を出し、訂正されることになっている。近頃、上海の人間が該雑誌を漢訳し印刷したうえに多数を各界に送っているという。本館は、民国3年（1914）1月6日に日本株のすべてを回収しており、部に提出し、記念プレゼントをすると新聞広告をした。完全華商であることは誰でも知っていることだ。ピラを上海のどこで印刷し、誰の指示で、どのような方法で各界に送っているのか。証拠をわたしてくれた人に現金1千元を報酬として出す。

「訂正されることになっている」というのは、『実業之日本』第22巻第16号（1919.8.1）に掲載される「訂正」記事のことを指している。実業之日本社から事前に連絡があったのかもしれない。

商務印書館の懸賞広告には、中華道人の論文だけを名指ししている。各界に送っていると表現している。だから、これはピラについて説明していると私は判断するのだ。『日本人支那問題』そのものではありえない。単行本は、この時、まだ出版されていない。また、まさか単行本を贈呈するとも思えない。ピラが中華道人の論文にしぼっているからこそ、その効果が期待できる。

商務印書館の懸賞広告には、中華書局の名称を出していない。だしてはいないが、犯人が中華書局だとわかった上での懸賞広告なのだ。商務印書館から中華書局へむけての警告という意味をもつ。

ところが、中華書局は、翌20日、商務印書館の2度目の懸賞広告のとなりに「商務印書館の懸賞1千元に答える〔答商務印書館賞格一千元〕」【図6】という広告を掲載した。

「査中日合股事業及其経営者」は、日本『実業之日本』雑誌の本年6月15日発行の特別号に掲載された。本局（中華書局）は、各論文を漢訳するつもりでその

【図7】

中華書局出版

日本人之支那問題

學界……商界……工界……注意 日本人之最新論調

日本雜誌大王「實業之日本」社因我國此次愛國風潮發行特號曰「支那問題」對於吾國種種方面研究討論至為詳盡其中最注意者厥有兩點。一山東問題 彼主張當視為割讓地當視為租界。二利權問題 鼓吹中日合辦事業主張龍絡吾國人士及留學生以為其利用。此外述中國外交情形彼非對我經過種種及將來對待方法均吾人所當詳知者也茲特譯行以供國人研究。全書百九十餘頁。定價四角。准本月底出版。僅售印無多。備供零售。如有團體定印。每千部收工料銀一百四十元。定銀續到日起十天交齊。外埠另加郵寄日期郵費每千部收銀五元。

目錄

對華外交之一轉機
中國外交之特質批評
排日之解剖
就中國對外散佈心忠告中國之有識者
日本對華外交方針
中國之國民性及其國民思想
中日合辦事業與其經營者
中國為天與之原料國
山東問題與中日兩國之救濟
中日經濟同盟論
中日諒解論
歡迎留學生為親善之根本策
新中國之將來 (125)

書名を『日本人の支那問題』という。原文通りに翻訳したもので削除はしていない。(ピラは) 中華書局印刷所が印刷したものだ。中華書局編輯所が編集翻訳したもので他人の指示によるものではない。郵便で各省に送ったもの。証拠は中華書局総廠にある。懸賞の1千元は全国学生聯合会に寄付するから送ってほしい。

ピラを作成したのは自分だ、と中華書局みずからが名乗りでた。

ピラの題名は、「查中日合股事業及其經營者」である。同時に、単行本の名称が、この段階ではじめて明らかにされた。それに収録される中華道人の論文名は、「中日合辦事業與其經營者」であって、ピラの題名と異なっていることに注意してほしい。

日本で出版した雑誌の内容を削除せずに翻訳しただけだ、と中華書局はいう。つまり、商務印書館が日本との合併企業であると原文に書いてあるから、そのままを漢訳してどこが悪いのか、と居直ったのである。さらに、中華書局自身が懸賞金を要求するにいたっては、ほとんど悪い冗談である。『實業之日本』問題につ

いて、中華書局は確信犯であることがわかる。

同じ7月20日付には、中華書局の出版広告が掲載されている。これが問題の『日本人支那問題』だ【図7】。

「学界……商界……工界……注意 日本人最新論調」と小見出しをつけている。見れば、いくつかの事実が浮かびあがってくる。紹介のなかで「中日合辦事業」に触れる。しかし、商務印書館がそうであるとは一言もいわない。全190頁、定価4角、月末には出版する〔准本月底出版〕とある。ということは、7月20日の時点で、書籍そのものは出版されていない。だから、商務印書館が懸賞広告で指摘していたピラは、書籍に先行して印刷配布されたと理解できる。

さらに翌21日、またしても商務印書館の広告が出た。「真相露呈〔水落石出〕」【図8】と題する。『申報』の紙面を使用して、両社はまるで手紙のやりとりをしているかのようだ。広告の内容は、19日とほとんど同じ。中華書局は事実を認めたのだから訂正するように要求する、と最後部分だけを書き換える。

商務印書館と中華書局が新聞で広告合戦を行なっているのを見て、仲裁に入った人がいる。王顕華が書報聯合会で史量才に出会うと、史は調停に名のりをあげ、双方が広告を出すことをやめるように要求する。翌日、中華書局は調停を受け入れず広告を継続したので、張元済らは中華書局を名誉毀損で訴え損害賠償を要求することにした〔張樹年1991:178〕。

史量才は、1917年の中華書局経営不振のとき、改組された理事会参事のひとりに選ばれている〔錢炳寰2002:37〕。その史が調停に乗り出したのは、中華書局との関係からなのだろう。

商務印書館が中華書局に対して名誉毀損だ、損害賠償だ、というだけでは不十分であるのは明らかだ。刊行物について裁判に訴えるというばあい、事実無根の記事を掲載したことを理由に、刊行物の回収、絶版、謝罪広告の掲載を求めるのが通常ではなかろうか。商務印書館は、そうしていない。というよりも、そうできない。なぜなら、商務印書館が過去において日本の企業と合併会社であったのは、事実だからだ。ゆえに、名誉毀損と損害賠償どまりである。

中華書局が継続して掲げた広告というのが、7月23日付に見える。題名が刺激的なのだ。「真相露呈？捏造？承認？商務印書館に答える〔水落石出？誣陥？承

【圖8】

申報

中華民國八年
西曆一千九百一十九年
七月二十一日
星期一
第四千六百七十四號
第一萬六千六百七十四號

本館定價
本館廣告刊例
本館地址
本館電話

水落石出

乃事隔數年尚有借此以為誣陷者其用心不問可知本館不能坐視當經登報聲明
前見日本某報載有中華道大撰連體舉中日合股之公司而以本館列入
其中正深駭異當向該報聲明業已得覆尤為更正近聞本埠有人將該報
譯成華文印刷多數分寄各學按本館於民國三年一月六日將日股全數
收回呈部立案並有紀念贈品登報佈告是日本館之為完全華商舉國皆知

劍秋書家

劍秋書家為南通張季直先生所稱譽者其書者初秀晚隨意變化而一合於
古人而非易事欲得佳者勿交臂失之現住上海大東門中華路三百一三號
作交中報館廣告 鄭孝許 吳昌碩 哈少甫 費龍丁 同啟
處設各處莊 李鍾珩 楊 題 費龍丁 同啟

不週

飛啓者揚君於本月廿二日午時忽染時疫延至廿三日子時移溘於世
除本埠各親友處已再與本埠外對恐投力不週特再登報聲明諸希
該旅社內與本台幹事員周子南君接洽可也 臨時幹事部啓

聯合會啓事

本會通函處物說本路名利大旅社內本會會員及各界諸君如有賜
該旅社內與本台幹事員周子南君接洽可也 臨時幹事部啓

【圖9】

商務印書館

小說月報

十卷六號出版

日本號

安言安地 泰西古劇 殊勝與死

借血遺魂 兩難 白衣女 魚頭調

茶寮小史 四屋 盤龍劍 偶絲線彈詞

五台山紀游 近代書評 小說俱樂部第四

次液文初選 郵費

每冊一元六角 全年三元二分

上海盤街 商務印書館發行所

廉價部

▲本版中文西文各書及美術圖書中西文具等仍舊設立樓下中間歐美原版西文各書設立二層樓上

逐日更換 任憑選擇

水落石出之証陷？承認？答商務印書館

今日報載商務印書館「水落石出」廣告敬答如左○「日本人之支那問題」係本局之光榮正問題之出版並無暗昧何謂水落石出貴館是與否之可言貴館大登告白懸賞一千元指指全國學生聯合會是否送去貴館告白未曾提及豈貴館不承認已所懸之賞格耶○貴館來函謂「實業之日木誤載貴館為中日合股公司請求更正」一節本局為願全同業情誼起見當將來函補刊該書卷首惟貴館告白所謂借此誣陷云云未知何指應請登報聲明中華書局謹啟 八年七月念一日

日本人支那問題

學界……商界……工界……注意日本人之最新論調

中華書局出版

●日本雜誌大王「實業之日木」社因我國此次愛國風潮發行特號曰「支那問題」對於吾國種種方面研究討論至為詳盡其中最堪注意者厥有兩點 一山東問題 彼主張當視為割讓地當視為德國領土二利權問題 鼓吹中日合辦事業主張籠絡吾國人士及留學生以爲其利用此外述中國外交情形彼邦對我經過種種及將來對待方法均吾人所亟當詳知者也茲特詳行以供國人研究全書百九十餘頁 定價四角 准本月底出版 惟書印無多 僅供零售 如有團體定印 每千部收工料銀一百四十元 定銀到日起十天交齊 外埠另加郵寄日期郵費每千部收銀五元

目錄

- 對華外交之一轉機
- 中國外交之特質批評
- 排日之解剖
- 就中國對外救國心忠告中國之有識者
- 日本對華外交方針
- 中國之國民性及其思想
- 中日合辦事業與其經營者
- 中國為天與之原料國
- 山東問題與中日兩國之救訓
- 中日經濟同盟論
- 中日諒解論
- 歡迎留學生為親善之根本策
- 新中國之將來 (已出版)

【圖10】

商務印書館

商務印書館

劍秋書家為南通張季直先生所極稱賞其書皆勁秀逸隨意變化而一合於古人之神非易事欲得佳書者勿交臂失之現住上海大東門中華路二百〇三號書

商務印書館特別啟事

本館前以日本某報載有中華道撰述臆舉中日合股之公司而以本館列入其中正深駭異當向該報聲明業已得覆允為更正近聞本埠有人將該報譯成華文印刷多數分寄各界中書局登報承認本館為本館之為完全華商舉國皆知乃事

申報

中華民國八年八月
西曆一千九百一十九年七月
七月二十六日未已曆舊
今日張四售大洋三分
第一萬六千六百七十七號

本館廣告刊例
第一張中頭
第一日每行一元二角
第二日起每行七角五分
第二張中頭
第一日每行六角
第二日起每行五角
第三張中頭
第一日每行三角
第二日起每行二角五分
第四張中頭
第一日每行二角
第二日起每行一角五分

永元機器織染廠召盤
本廠組織之精機織工部聘自日本經驗各業精熟之職工不遺餘力本廠人才一時又難得其資
從速出盤以免損失此擬將坐落英租界引翔港八十八號廠基廠屋及一切機器生財登報召盤如有熱心買者請即向本廠經理處接洽
英大馬路
久華鞋帽莊發售鞋券廣告
本莊為便利諸君起見特發行鞋券一萬張每張一元取貨時可作一元之用該券每張一元取貨時可作一元之用如荷賜顧無任歡迎此佈

【圖11】

申報

中華民國八年八月二十六日
第九千九百九十八號
星期五
己未年六月二十八日
第四張
六千六百七十八號

本館廣告角例
一、頭等 每行每日收銀一元二角
二、二等 每行每日收銀七角五分
三、三等 每行每日收銀五角
四、長行告白 每行每日收銀三角
五、短行告白 每行每日收銀二角
六、每日收銀五分
七、每日收銀四分
八、每日收銀三分
九、每日收銀二分
十、每日收銀一分

本報今日因評前廣告擁擠將拍賣及遺失告白移入第三張第九版 閱者注意

商務印書館特別啟事

按本館於民國三年一月六日將日股全數收回呈部立案並有紀念贈品登報佈告是日本館之為完全華商舉國皆知乃事
隔數年尚有借此以為誣陷其用心不問可知本館不能坐視當經懸賞查究嗣經中華書局登報承認本館為
願全同業情誼起見曾函請就所印該書每冊內在該段之後用大字更正並已登報聲明乃該局於二十二二十三登報
答覆殊與本館願全同業原旨相違本館惟有訴諸法律 統維 公鑒

中華書局特別啟事

連日為日本人之支那問題一書商務印書館與本局互登告白
俱見報端諒邀 公鑒七月二十四日該館特別啟事謂本局答
覆與該館願全同業原旨相違惟有訴諸法律云云殊深詫異本
局翻印此書初無成見亦不違背法律不知該館原旨何在如何方為不違背茲將該館來函暨本局覆函錄左希 全國各界鑒之
商務印書館來函 中華書局台鑒敬啟者今日各報廣告得悉前有人將實業之日本課被裁將該館來函暨本局覆函錄左希 全國各界鑒之
貴局印書館亦為同情形之請求將該館收回日股一事業經登報佈告尤為 貴局諸君所深知且實業之日本課被裁將該館來函暨本局覆函錄左希 全國各界鑒之
及更正之稿擲下一閱可 貴局告白有由郵政轉送分送各省之語未知已寄出若干正寄至何處并乞 見示不勝感禱之至專此啟頌
公啟 七月二十日

本局印書館與商務印書館同業之支那問題一書商務印書館與本局互登告白
俱見報端諒邀 公鑒七月二十四日該館特別啟事謂本局答
覆與該館願全同業原旨相違惟有訴諸法律云云殊深詫異本
局翻印此書初無成見亦不違背法律不知該館原旨何在如何方為不違背茲將該館來函暨本局覆函錄左希 全國各界鑒之
商務印書館來函 中華書局台鑒敬啟者今日各報廣告得悉前有人將實業之日本課被裁將該館來函暨本局覆函錄左希 全國各界鑒之
貴局印書館亦為同情形之請求將該館收回日股一事業經登報佈告尤為 貴局諸君所深知且實業之日本課被裁將該館來函暨本局覆函錄左希 全國各界鑒之
及更正之稿擲下一閱可 貴局告白有由郵政轉送分送各省之語未知已寄出若干正寄至何處并乞 見示不勝感禱之至專此啟頌
公啟 七月二十日

本局印書館與商務印書館同業之支那問題一書商務印書館與本局互登告白
俱見報端諒邀 公鑒七月二十四日該館特別啟事謂本局答
覆與該館願全同業原旨相違惟有訴諸法律云云殊深詫異本
局翻印此書初無成見亦不違背法律不知該館原旨何在如何方為不違背茲將該館來函暨本局覆函錄左希 全國各界鑒之
商務印書館來函 中華書局台鑒敬啟者今日各報廣告得悉前有人將實業之日本課被裁將該館來函暨本局覆函錄左希 全國各界鑒之
貴局印書館亦為同情形之請求將該館收回日股一事業經登報佈告尤為 貴局諸君所深知且實業之日本課被裁將該館來函暨本局覆函錄左希 全國各界鑒之
及更正之稿擲下一閱可 貴局告白有由郵政轉送分送各省之語未知已寄出若干正寄至何處并乞 見示不勝感禱之至專此啟頌
公啟 七月二十日

餘收回日股之証據

第一條 凡屬本館所有之各項資產...	第二條 凡屬本館所有之各項負債...	第三條 凡屬本館所有之各項債權...	第四條 凡屬本館所有之各項債務...	第五條 凡屬本館所有之各項權利...	第六條 凡屬本館所有之各項義務...	第七條 凡屬本館所有之各項利益...	第八條 凡屬本館所有之各項損失...	第九條 凡屬本館所有之各項費用...	第十條 凡屬本館所有之各項收入...	第十一條 凡屬本館所有之各項支出...	第十二條 凡屬本館所有之各項盈餘...	第十三條 凡屬本館所有之各項虧損...	第十四條 凡屬本館所有之各項資產...	第十五條 凡屬本館所有之各項負債...	第十六條 凡屬本館所有之各項債權...	第十七條 凡屬本館所有之各項債務...	第十八條 凡屬本館所有之各項權利...	第十九條 凡屬本館所有之各項義務...	第二十條 凡屬本館所有之各項利益...	第二十一條 凡屬本館所有之各項損失...	第二十二條 凡屬本館所有之各項費用...	第二十三條 凡屬本館所有之各項收入...	第二十四條 凡屬本館所有之各項支出...	第二十五條 凡屬本館所有之各項盈餘...	第二十六條 凡屬本館所有之各項虧損...	第二十七條 凡屬本館所有之各項資產...	第二十八條 凡屬本館所有之各項負債...	第二十九條 凡屬本館所有之各項債權...	第三十條 凡屬本館所有之各項債務...	第三十一條 凡屬本館所有之各項權利...	第三十二條 凡屬本館所有之各項義務...	第三十三條 凡屬本館所有之各項利益...	第三十四條 凡屬本館所有之各項損失...	第三十五條 凡屬本館所有之各項費用...	第三十六條 凡屬本館所有之各項收入...	第三十七條 凡屬本館所有之各項支出...	第三十八條 凡屬本館所有之各項盈餘...	第三十九條 凡屬本館所有之各項虧損...	第四十條 凡屬本館所有之各項資產...	第四十一條 凡屬本館所有之各項負債...	第四十二條 凡屬本館所有之各項債權...	第四十三條 凡屬本館所有之各項債務...	第四十四條 凡屬本館所有之各項權利...	第四十五條 凡屬本館所有之各項義務...	第四十六條 凡屬本館所有之各項利益...	第四十七條 凡屬本館所有之各項損失...	第四十八條 凡屬本館所有之各項費用...	第四十九條 凡屬本館所有之各項收入...	第五十條 凡屬本館所有之各項支出...	第五十一條 凡屬本館所有之各項盈餘...	第五十二條 凡屬本館所有之各項虧損...	第五十三條 凡屬本館所有之各項資產...	第五十四條 凡屬本館所有之各項負債...	第五十五條 凡屬本館所有之各項債權...	第五十六條 凡屬本館所有之各項債務...	第五十七條 凡屬本館所有之各項權利...	第五十八條 凡屬本館所有之各項義務...	第五十九條 凡屬本館所有之各項利益...	第六十條 凡屬本館所有之各項損失...	第六十一條 凡屬本館所有之各項費用...	第六十二條 凡屬本館所有之各項收入...	第六十三條 凡屬本館所有之各項支出...	第六十四條 凡屬本館所有之各項盈餘...	第六十五條 凡屬本館所有之各項虧損...	第六十六條 凡屬本館所有之各項資產...	第六十七條 凡屬本館所有之各項負債...	第六十八條 凡屬本館所有之各項債權...	第六十九條 凡屬本館所有之各項債務...	第七十條 凡屬本館所有之各項權利...	第七十一條 凡屬本館所有之各項義務...	第七十二條 凡屬本館所有之各項利益...	第七十三條 凡屬本館所有之各項損失...	第七十四條 凡屬本館所有之各項費用...	第七十五條 凡屬本館所有之各項收入...	第七十六條 凡屬本館所有之各項支出...	第七十七條 凡屬本館所有之各項盈餘...	第七十八條 凡屬本館所有之各項虧損...	第七十九條 凡屬本館所有之各項資產...	第八十條 凡屬本館所有之各項負債...	第八十一條 凡屬本館所有之各項債權...	第八十二條 凡屬本館所有之各項債務...	第八十三條 凡屬本館所有之各項權利...	第八十四條 凡屬本館所有之各項義務...	第八十五條 凡屬本館所有之各項利益...	第八十六條 凡屬本館所有之各項損失...	第八十七條 凡屬本館所有之各項費用...	第八十八條 凡屬本館所有之各項收入...	第八十九條 凡屬本館所有之各項支出...	第九十條 凡屬本館所有之各項盈餘...	第九十一條 凡屬本館所有之各項虧損...	第九十二條 凡屬本館所有之各項資產...	第九十三條 凡屬本館所有之各項負債...	第九十四條 凡屬本館所有之各項債權...	第九十五條 凡屬本館所有之各項債務...	第九十六條 凡屬本館所有之各項權利...	第九十七條 凡屬本館所有之各項義務...	第九十八條 凡屬本館所有之各項利益...	第九十九條 凡屬本館所有之各項損失...	第一百條 凡屬本館所有之各項費用...	第一百零一條 凡屬本館所有之各項收入...	第一百零二條 凡屬本館所有之各項支出...	第一百零三條 凡屬本館所有之各項盈餘...	第一百零四條 凡屬本館所有之各項虧損...	第一百零五條 凡屬本館所有之各項資產...	第一百零六條 凡屬本館所有之各項負債...	第一百零七條 凡屬本館所有之各項債權...	第一百零八條 凡屬本館所有之各項債務...	第一百零九條 凡屬本館所有之各項權利...	第一百一十條 凡屬本館所有之各項義務...	第一百一十一條 凡屬本館所有之各項利益...	第一百一十二條 凡屬本館所有之各項損失...	第一百一十三條 凡屬本館所有之各項費用...	第一百一十四條 凡屬本館所有之各項收入...	第一百一十五條 凡屬本館所有之各項支出...	第一百一十六條 凡屬本館所有之各項盈餘...	第一百一十七條 凡屬本館所有之各項虧損...	第一百一十八條 凡屬本館所有之各項資產...	第一百一十九條 凡屬本館所有之各項負債...	第一百二十條 凡屬本館所有之各項債權...	第一百二十一條 凡屬本館所有之各項債務...	第一百二十二條 凡屬本館所有之各項權利...	第一百二十三條 凡屬本館所有之各項義務...	第一百二十四條 凡屬本館所有之各項利益...	第一百二十五條 凡屬本館所有之各項損失...	第一百二十六條 凡屬本館所有之各項費用...	第一百二十七條 凡屬本館所有之各項收入...	第一百二十八條 凡屬本館所有之各項支出...	第一百二十九條 凡屬本館所有之各項盈餘...	第一百三十條 凡屬本館所有之各項虧損...	第一百三十一條 凡屬本館所有之各項資產...	第一百三十二條 凡屬本館所有之各項負債...	第一百三十三條 凡屬本館所有之各項債權...	第一百三十四條 凡屬本館所有之各項債務...	第一百三十五條 凡屬本館所有之各項權利...	第一百三十六條 凡屬本館所有之各項義務...	第一百三十七條 凡屬本館所有之各項利益...	第一百三十八條 凡屬本館所有之各項損失...	第一百三十九條 凡屬本館所有之各項費用...	第一百四十條 凡屬本館所有之各項收入...	第一百四十一條 凡屬本館所有之各項支出...	第一百四十二條 凡屬本館所有之各項盈餘...	第一百四十三條 凡屬本館所有之各項虧損...	第一百四十四條 凡屬本館所有之各項資產...	第一百四十五條 凡屬本館所有之各項負債...	第一百四十六條 凡屬本館所有之各項債權...	第一百四十七條 凡屬本館所有之各項債務...	第一百四十八條 凡屬本館所有之各項權利...	第一百四十九條 凡屬本館所有之各項義務...	第一百五十條 凡屬本館所有之各項利益...	第一百五十一條 凡屬本館所有之各項損失...	第一百五十二條 凡屬本館所有之各項費用...	第一百五十三條 凡屬本館所有之各項收入...	第一百五十四條 凡屬本館所有之各項支出...	第一百五十五條 凡屬本館所有之各項盈餘...	第一百五十六條 凡屬本館所有之各項虧損...	第一百五十七條 凡屬本館所有之各項資產...	第一百五十八條 凡屬本館所有之各項負債...	第一百五十九條 凡屬本館所有之各項債權...	第一百六十條 凡屬本館所有之各項債務...	第一百六十一條 凡屬本館所有之各項權利...	第一百六十二條 凡屬本館所有之各項義務...	第一百六十三條 凡屬本館所有之各項利益...	第一百六十四條 凡屬本館所有之各項損失...	第一百六十五條 凡屬本館所有之各項費用...	第一百六十六條 凡屬本館所有之各項收入...	第一百六十七條 凡屬本館所有之各項支出...	第一百六十八條 凡屬本館所有之各項盈餘...	第一百六十九條 凡屬本館所有之各項虧損...	第一百七十條 凡屬本館所有之各項資產...	第一百七十一條 凡屬本館所有之各項負債...	第一百七十二條 凡屬本館所有之各項債權...	第一百七十三條 凡屬本館所有之各項債務...	第一百七十四條 凡屬本館所有之各項權利...	第一百七十五條 凡屬本館所有之各項義務...	第一百七十六條 凡屬本館所有之各項利益...	第一百七十七條 凡屬本館所有之各項損失...	第一百七十八條 凡屬本館所有之各項費用...	第一百七十九條 凡屬本館所有之各項收入...	第一百八十條 凡屬本館所有之各項支出...	第一百八十一條 凡屬本館所有之各項盈餘...	第一百八十二條 凡屬本館所有之各項虧損...	第一百八十三條 凡屬本館所有之各項資產...	第一百八十四條 凡屬本館所有之各項負債...	第一百八十五條 凡屬本館所有之各項債權...	第一百八十六條 凡屬本館所有之各項債務...	第一百八十七條 凡屬本館所有之各項權利...	第一百八十八條 凡屬本館所有之各項義務...	第一百八十九條 凡屬本館所有之各項利益...	第一百九十條 凡屬本館所有之各項損失...	第一百九十一條 凡屬本館所有之各項費用...	第一百九十二條 凡屬本館所有之各項收入...	第一百九十三條 凡屬本館所有之各項支出...	第一百九十四條 凡屬本館所有之各項盈餘...	第一百九十五條 凡屬本館所有之各項虧損...	第一百九十六條 凡屬本館所有之各項資產...	第一百九十七條 凡屬本館所有之各項負債...	第一百九十八條 凡屬本館所有之各項債權...	第一百九十九條 凡屬本館所有之各項債務...	第二百條 凡屬本館所有之各項權利...
--------------------	--------------------	--------------------	--------------------	--------------------	--------------------	--------------------	--------------------	--------------------	--------------------	---------------------	---------------------	---------------------	---------------------	---------------------	---------------------	---------------------	---------------------	---------------------	---------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	---------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	---------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	---------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	---------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	---------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	---------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	---------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	---------------------	-----------------------	-----------------------	-----------------------	-----------------------	-----------------------	-----------------------	-----------------------	-----------------------	-----------------------	-----------------------	------------------------	------------------------	------------------------	------------------------	------------------------	------------------------	------------------------	------------------------	------------------------	-----------------------	------------------------	------------------------	------------------------	------------------------	------------------------	------------------------	------------------------	------------------------	------------------------	-----------------------	------------------------	------------------------	------------------------	------------------------	------------------------	------------------------	------------------------	------------------------	------------------------	-----------------------	------------------------	------------------------	------------------------	------------------------	------------------------	------------------------	------------------------	------------------------	------------------------	-----------------------	------------------------	------------------------	------------------------	------------------------	------------------------	------------------------	------------------------	------------------------	------------------------	-----------------------	------------------------	------------------------	------------------------	------------------------	------------------------	------------------------	------------------------	------------------------	------------------------	-----------------------	------------------------	------------------------	------------------------	------------------------	------------------------	------------------------	------------------------	------------------------	------------------------	-----------------------	------------------------	------------------------	------------------------	------------------------	------------------------	------------------------	------------------------	------------------------	------------------------	-----------------------	------------------------	------------------------	------------------------	------------------------	------------------------	------------------------	------------------------	------------------------	------------------------	---------------------

照錄商部註冊

茲悉查該公司成立有年於印刷出版事業辦理頗著成效茲據報印刷日期業亦頗速經股東特別會議決收回外股現已完全華商自行集股辦理之公司等語該股方至請將原呈改訂章程亦均屬妥當應准備案此批
民國三年三月十一日 上海商務印書館啓

時報

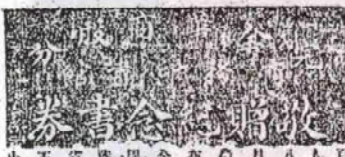
EASTERN TIMES.

分三洋大德張大國天今

時報 三千六百冊
小本每冊一元五角
大本每冊二元五角
零售每份五分

致方夢超啟事

本公司現收足資本一百八十萬元據前日本人所附股分三十七萬八千一百元於本年一月五日截止 各名分額另行約定日期於各該名分額開學期前在本行登報佈告



贈送規則
凡在本報刊登廣告者...

贈送規則
一、上海總發行所於本年陽曆七月二十三日起至九月四日止，即陰曆六月朔日起至七月十五日止，各名分額另行約定日期於各該名分額開學期前在本行登報佈告

本館現 在置有 銅版部 專製粗 細照相 銅版及 鋅版鉛 版等件 質料精 良價格 公道且 製造之 法非 特迅 速又 極優 美特 此佈告 館申報 啟

【圖12】

請看商務印書館

本館自創始以來，承蒙各界人士之愛護，業務日見發達。茲因本館與金港堂之合併，業經雙方議定，自即日起，金港堂所有之業務，概歸本館經營。凡與金港堂有往來賬目者，請於一月內向本館清理。特此公告。

第一條 凡與金港堂有往來賬目者，請於一月內向本館清理。逾期不理者，概不負責。

第二條 本館自即日起，所有之業務，概歸本館經營。凡與本館有往來賬目者，請向本館清理。

第三條 本館自即日起，所有之業務，概歸本館經營。凡與本館有往來賬目者，請向本館清理。

第四條 本館自即日起，所有之業務，概歸本館經營。凡與本館有往來賬目者，請向本館清理。

第五條 本館自即日起，所有之業務，概歸本館經營。凡與本館有往來賬目者，請向本館清理。

第六條 本館自即日起，所有之業務，概歸本館經營。凡與本館有往來賬目者，請向本館清理。

第七條 本館自即日起，所有之業務，概歸本館經營。凡與本館有往來賬目者，請向本館清理。

第八條 本館自即日起，所有之業務，概歸本館經營。凡與本館有往來賬目者，請向本館清理。

第九條 本館自即日起，所有之業務，概歸本館經營。凡與本館有往來賬目者，請向本館清理。

第十條 本館自即日起，所有之業務，概歸本館經營。凡與本館有往來賬目者，請向本館清理。

申報

SHUN PAO

中華民國三年四月廿六日即甲寅年四月初一日
 第四千九百一十四號
 星期一
 每份大洋四分
 每月一元二角
 每季三元六角
 每年十二元

本館設在上海
 本館電話
 本館地址
 本館發行所

秀女學校招生廣告
 本校定於陽曆五月一日開學，現正招收學生。凡有志於教育者，請速來校報名。詳情請洽本校辦事處。

商務印書館股東特別會
 茲定於陽曆五月十日（即甲寅年四月初一日）下午二時，在本館大禮堂舉行股東特別會議。屆時請各股東準時出席。特此公告。

新聞報

SIN WAN PAO, LTD.

第五千七百五十七號
 第四分二洋大售銀五全計

本報地址
 本報電話
 本報發行所
 本報廣告費

照業公司
 本公司承印各種中西文字、名片、信箋、帳簿、表格等。印刷精美，交貨迅速。歡迎各界人士垂詢。地址：上海南京路。

敬製照相銅版鮮版者鑒

認？答商務印書館」】【図9】

『日本人之支那問題』は中華書局の公明正大な出版物であって、真相露呈というのは商務印書館が中日合弁であることが明らかになったということだ。

『日本人之支那問題』は『実業之日本』を翻訳したものであって捏造ではない。

『日本人之支那問題』は自ら翻訳し、自ら印刷し、自ら販売するものである。承認など必要はない。1千円の懸賞金は送っただろうな。商務印書館が手紙でよこした「実業之日本が誤って商務印書館を日中合弁会社と掲載したことにたいして訂正を要求する」という文面は、将来、該書の巻頭に補うことにする。

これが、商務印書館の書籍広告のとなりに、『日本人之支那問題』の広告と並べて掲載した文面の内容である。

商務印書館は、24日付特別広告「商務印書館特別啓事」【図10】において、中華書局を告訴することを宣言する。

商務印書館と中華書局が『申報』紙上でくりひろげた広告合戦のなかに注目すべき文書が掲載された。1919年7月25日付の第1面、すなわち広告欄に見ることができる。

冒頭の「商務印書館特別啓事」は、24日と同じものだ。

「中華書局特別啓事」【図11】は、それに答える。『日本人之支那問題』は、翻訳にすぎない。法律に違反はしていないのに訴えとはどういうことか、と。商務印書館の手紙とそれに対する中華書局の返答を掲げている。

商務印書館の中華書局あての手紙（7月20日付）がある。『実業之日本』が弊館（商務印書館）を中日合股会社と間違えて掲載した文章を漢訳して出したと各新聞の広告で知った。同業者どうして、弊館がむかし日本株を回収したことは新聞にも掲載し、貴局もよく知っているはずだ、うんぬん。新聞広告で明らかにしたことを書面のかたちをとって中華書局に直接あてたものだとわかる。

中華書局の返書も、新聞広告で明らかになっているものと違わない。

なによりも、興味深いのは、第1面の下半分を占める商務印書館の広告なのだ。題して「商務印書館が日本株を回収した証拠を見てほしい」【請看商務印書館收回日股之証拠】【図12】という。

商務印書館が示した証拠は、ふたつの部分によって構成されている。

上方には、こまかな文字で書かれた文書が写真版で3枚と3行分掲げられる。

下方には、1914年1月10日付『申報』、1914年4月26日付『新聞報』、1914年7月4日付『時報』の3紙(部分)を写真で示す。

影印版『申報』の小さすぎる文字に目をこらす。これこそが『実業之日本』を追求する過程で失った探索の糸の実態であった。すなわち、商務印書館と金港堂の合弁解約書なのである(後述)。

下方の『申報』は、「商務印書館股東特別会」の開催を予告する。すでに樽本がその存在を指摘している[樽本1991a:16-18]。

『新聞報』の広告は、外国株を回収して「完全華商」であることを農商部が批准したという内容だ。この広告は、私ははじめて見た。

もうひとつ、『時報』の広告はといえば、完全華商になったことを記念して図書券を贈呈するというものだ。こちらとは意匠の一部が異なるが同文の広告を、樽本は『学生雑誌』においてすでに見つけている[樽本1991a:18]。

当時の新聞を資料として掲げたのには、当然ながら理由がある。日本人(金港堂)の株を回収したという事実を、すでに新聞の広告というかたちで公表しているという証拠なのである。これだけ広告を出しているのだから中華書局の人間が、それ、すなわち商務印書館がすでに完全な中国人の企業になっていることを知らないはずがない、という意味だ。

さて、手書きの文書3枚と3行こそが、まぎれもない合弁解約書であることを知って、私は、すこしとまどう。なぜなら、新聞に掲載されているにもかかわらず、その存在に気づいた研究者は、今まで、誰ひとりとしていなかったからだ。商務印書館の内部文書を発掘したというのであれば、感心はしても驚きはしない。関係者ならば、発掘する可能性もあるだろう。だが、広告として新聞に掲載されていようとは思いつかなかった。

商務印書館がみずからの「潔白」を証明するために取り出してきた合弁解約書である。珍しい出現のしかたである、と私がいう理由だ。逆にいえば、内部文書までも提出しなければ、理解を得ることができないほどのきびしい状況であった。

次に合弁解約書を紹介する。

3 商務印書館と金港堂の合併解約書

本稿では、「合併解約書」と称しているが、実物(写真版)には「立合同」【図13】とあるだけだ。契約を結ぶ、という意味に過ぎない。

夏瑞芳と福間甲松の名前が、冒頭に掲げられている。夏瑞芳には肩書きがない。福間甲松には「商務印書館日本股東全体代表」とある。日本人株主を代表する。重要な箇所だから説明をする。

光緒二十九年十月初一日(1903.11.19)、金港堂が商務印書館に投資して、商務印書館は合併会社となった。双方が10万円ずつを負担し、合計で20万元である。理事も日中で同数が就任した。中国側は、夏瑞芳(社長兼任)と印錫璋だ。日本側は、原亮三郎と加藤駒二だった。

その時、金港堂の原亮三郎が個人で投資した。1株を100元とすれば、10万元は1,000株となる。

ただし、この個人というのは金港堂と区別がつかない。原亮三郎と金港堂は、一体化しているからだ。原は個人であり、また同時に金港堂そのものでもある。

合併を解約するときにも、原亮三郎個人がでてきてもいい。だが、事実はそうになっていない。金港堂の原亮三郎は、福間甲松を派遣して全権を委任した。金港堂という名称がどこにも使用されていないとはいえ、福間は原亮三郎であり、また金港堂だった。

合併時期の約10年に、原亮三郎の所有株をふくめて日本株は3,781株にまで増加した。

合併解約ということの実態は、日本人の所有する株を商務印書館が一括して買い取ることである。調印する時は、代表者の個人名を出して署名する。

前文がある。

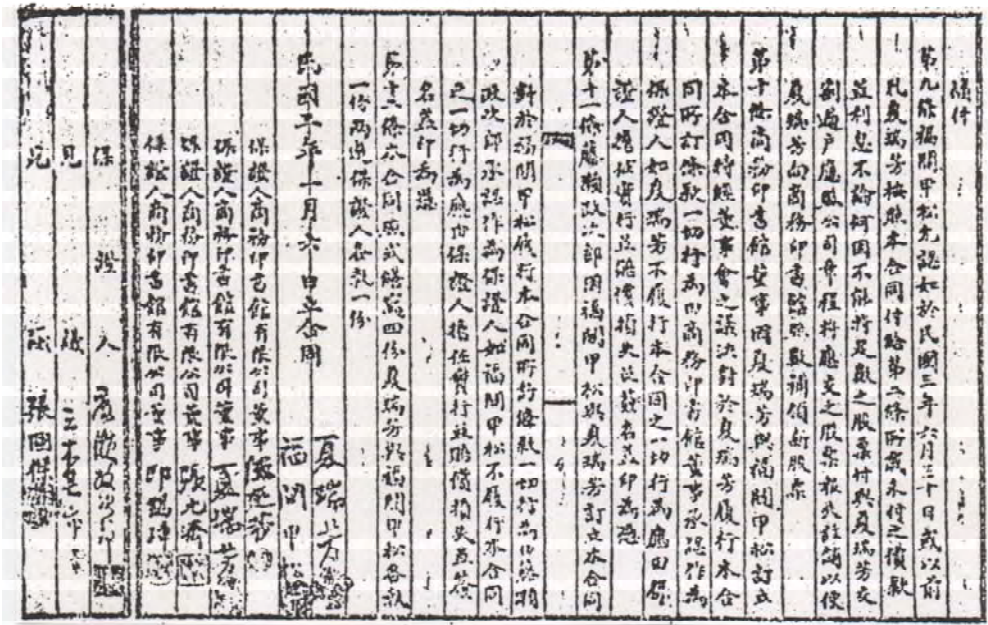
日本の株主が所有する総数3,781株を中国人のものとするのが宣言される。

日本人の所有する株数が3,781株というのが、基本だ。カッコのなかの但し書きには、附属文書で株所有の日本人姓名を明らかにしているとある。しかし、その文書はこの新聞広告に含まれていない。具体的な氏名と所有株数については、

【圖13】

本會同
 為合併之目的，茲將本會同之條件，列明於後：
 第一條 瑞芳允認福開甲松股先出賣其相繼完
 股股份之價每股計銀壹百四拾六元五角，計銀
 五拾五萬零九百九拾六元五角，自簽定本會同以後，瑞芳允
 認二年及以後公司之一切利益，均歸與日本股東無涉。
 瑞芳允認前與日本股東訂立之契約等，一概作廢。
 第二條 瑞芳允於簽定本會同之日，將該股份總額價款之
 一半，即銀壹拾柒萬六千九百九拾八元五角五分，交付三
 井洋行之瑞芳允，即瑞芳允給瑞芳允六千九百九拾八元五角
 五分，及瑞芳允於民國三年六月三十日以前交付。
 第三條 瑞芳允於民國二年十二月一日至二年一月五日之
 間，對於第一條所載該股份總額價款，即銀壹拾柒萬六千九
 百九拾六元五角，瑞芳允八股起息，計銀肆千零
 百零拾元，正於簽定本會同之日，併付與上海三井洋
 行之瑞芳允，即瑞芳允。

第四條 瑞芳允認民國三年一月六日銀價比二年十一月
 十九日銀價可也。十一月十九日銀價股份之價款，總額壹
 萬日金，市價補貼通水計銀壹萬四千四百零柒元五角，
 於簽定本會同之日，併付與上海三井洋行之瑞芳允，
 即瑞芳允。
 第五條 瑞芳允於簽定本會同之日，將該股份總額價款
 之總額銀壹拾五萬零九百九拾六元五角，以壹千分之
 五，即銀壹千柒百六拾九元五角八分，作為辦費，付與
 瑞芳允，即瑞芳允。
 第六條 瑞芳允認第二條所載未付之價款，按長年九
 厘起息，於民國三年六月三十日，隨本條所
 載未付之價款若干，福開甲松當按每股以拾拾元
 九元五角，計其並到期之利息，以足數之，股亦付與
 瑞芳允，即瑞芳允。如有已付之款，即於付款之日，停止
 利息。
 第七條 瑞芳允認於民國三年六月三十日，必將第二條所
 載未付之價款，即銀壹拾柒萬六千九百九拾八元五角
 五分，併清決不遲誤。如瑞芳允到期不付，何因不併清，
 瑞開甲松有權代表日本股東，按外國銀行規例先行
 通知，於兩星期後，任便將該股份之股票，自行出售，
 還未付之價款，即利息，扣收因及瑞芳允，違背本會同
 商費，皆由瑞芳允一切，瑞芳允，瑞芳允，瑞芳允，
 之預如有無餘，應付瑞芳允，如有不足，應由瑞芳允。



汪家熔がすでに明らかにしている[汪家熔1994a]。詳しくは別の文献を見てほしい[稲岡勝1996:30][樽本2004:371-372]

合併解約書は、以下の12条によって構成される。12条という数字が、朱蔚伯論文と一致する。

第1条

夏瑞芳が購入し、福間甲松が売却することを承認する。1株をメキシコ銀146.5元で計算する。すなわち総額55万3,916.5元である。以前の契約はすべて廃止する。

前文に示された3,781株と146.5元を乗ずれば、総額55万3,916.5元になる。間違いない。本稿冒頭にまとめておいた朱蔚伯の1、すなわち日本株総額と一致している。

第2条

契約成立と同時に総額の半額27万6,958.25元を支払う。支払先は、三井洋行の藤瀬政次郎とする。藤瀬より福間甲松へ届ける。残金は、6月30日あるいはそれ以前に支払う。

2回に分割して支払うという契約である。

支払い日は、6月30日かそれ以前だと指定されている。つまり、最終期限が6月30日であって、それ以前に支払う可能性を残していると読める。支払い利子に関係するからだと考える。

全額を1度払いにすることはできなかったようだ。それほど大金であったということだろう。ただし、それでも商務印書館が予想していたよりもはるかに安い金額で妥結したことは確かだ[樽本2003]。

支払方法については、三井洋行の藤瀬政次郎を介在させているところが興味深い。商務印書館の夏瑞芳から金港堂の福間甲松へ直接現金を手渡してもいいように思う。それをわざわざ三井洋行を経由させたのは、なぜか。

福間は上海に常駐するわけではなさそうだ。契約書に署名をすれば、日本に帰国するのだろう。分割支払いだから、上海の三井洋行を窓口にするのが便利だったと考えられる。もうひとつは、安全に送金するための方法だろうくらいの推測しか私にはできない。

第2条は、朱蔚伯の2と基本的に一致する。ただし、朱蔚伯は、藤瀬政次郎に触れない。

第3条

買収総額について1913年12月1日から1914年1月5日まで年利8厘で総計4,370元を契約成立日に三井洋行の藤瀬政次郎へ届ける。

朱蔚伯が書いていた「3. 利息 4,370元は商務印書館が負担する」と数字が完全に一致している。朱蔚伯が合弁解約書を見ているのは、このことから理解できる。

しかし、この第3条は奇妙だ。年利8厘だとすれば、4,431.332元になる。計算があわない。

もうひとつおかしい部分がある。期限を切って1913年12月1日から1914年1月5日までだという。実質36日間である。1914年1月5日というのは、合弁解約締結が1月6日だからその前日に当たる。では、なぜ1913年12月1日からなのか。説明がない。また、年利8厘で計算するとして、日にちを限るならば、普通は日割り計算をするものだ。それを1年分の計算をするだろうか。疑問を感じる。ただし、説明がなくても、両者が合意しているからよしとしよう。

利息についていえば、契約上は、36日間分として4,370元を支払うことに合意した。これを確認しておく。

第4条

1913年11月19日を基準にして為替差額1万4,477.5元を三井洋行の藤頼政次郎に届ける。

これも朱蔚伯の「4. 為替差額 1万4,477.5元は商務印書館が負担する」と合致する。金額が大きいように思うが、基準の日にちを明確にしているからそのまま納得するよりしかたがない。

第5条

総額の5厘2,769.58元を経費として藤頼政次郎に届ける。

支払いに三井洋行の藤頼の手を煩わせるから、その手数料だと解釈する。

朱蔚伯のいう数字と、ここも端数までが同じだ。

第3条から第5条に明記された金額を合算する。 $4,370元 + 1万4,477.5元 + 2,769.58元 = 2万1,617.08元$ が正しい。くりかえすが、朱蔚伯の示す「6. 諸経費合計(3+4+5) 2万1,817.08元」は計算間違いである。

第6条

残額に年利9厘の利息をつける。

第3条で計上した利息8厘は、1913年12月1日から1914年1月5日までのもの、しかも総額に対してかけるものだった。合意して4,370元だ。

第6条では、6月30日までの利息となる。厳密に区別していることがわかる。しかも、1厘高くなっている。支払いを延期した分だ。ただし、こちらは残額に対してのものであることに注目されたい。

それまでの文面と比較して変化がある。第6条には、具体的な数字を書き込んでいない。

その理由は、契約を結んだ1月6日から、支払い期限の6月30日までには時間の幅があるからだと推測する。随時、繰り上げて支払うこともできるように取り決めた。ということは、繰り上げ支払いをすれば、遅延利息が軽減されるという含みをもたせていると思われる。いつ支払うことになるのか不明だ。だから、金額を明示できなかった。

理解しにくいと私が思うのは、第6条でも利息計算の方法を述べないところだ。第3条で年利8厘での計算結果が違うことに触れた。おまけに、36日間であるにもかかわらず1年分の金額にしている。細かい数字が出ているにしては、その根拠がはっきりしない。

条文のとおり単純計算してみよう。

支払い残額は、27万6,958.25元だ。年利9厘は、2,492.62元となる（日割り計算はしない）。1厘高くしたにもかかわらず、4,370元よりも安くなった。

そこで、朱蔚伯が書いている「7. 支払い遅延利息 1万2,464元」が問題になる。

私は、この数字に疑問を出しておいた。合弁解約書を見て計算すれば、とてもそのような数字はでてこないように思える。総額に対する利息の4,370元と比較しても、額が大きい。彼はどこから「1万2,464元」をもってきたのか。

以下は、私の計算である。

合弁解約書に見える利息の4,370元は、日にちをかぎって36日分であった。残金支払いの猶予日数は、1月6日より6月30日までで176日になる。これは、36日の約5倍だ。

残額の利息2,492.62元の5倍は、1万2,463.1元となる。端数を切り上げれば、朱蔚伯のいう「1万2,464元」と完全に一致する。

支払い遅延利息の計算方法が書かれていないところから、以上のような推測をすることになってしまった。はたして、これが正しいかどうかはわからない。

結局のところ、なにもないところから出てくる数字ではないと思うのだ。朱蔚伯は商務印書館の内部資料に拠っていると想像する。

というわけで、合弁解約書に明記することのできなかった支払い遅延利息は、朱蔚伯のいう「1万2,464元」が正しいということにする。繰り上げ支払いはなかったとも判断する。

第7条

第2条に記載の残金は、随時、支払う。福間甲松は、1株につき73.25円で計算する。

73.25元という数字は、146.5元の半分であるといっているにすぎない。総額を

2分したということは、1株あたりの評価額を2分したことと同じ意味である。

第8条

いろいろと書いてあるが、結局のところひとつのことだけを言っている。すなわち、夏瑞芳は、支払いが遅れないように保証をする。

第9条

第8条と同じ条件である。こちらは福間甲松の責任をいう。福間甲松は、支払いが完了したら株券を引き渡すことを保証する。

第10条

要旨。夏瑞芳が契約を履行しない場合、保証人が一切の責任をとる。

第11条

要旨。福間甲松が契約を履行しない場合、保証人藤瀬政次郎が一切の責任をとる。

第12条は、契約書をそれぞれが保持することを定める。

署名人は、以下のようになっている。

民国三年一月六日立合同	夏瑞芳 印
	福間甲松 印
保証人商務印書館有限公司董事	伍廷芳 印
保証人商務印書館有限公司董事	夏瑞芳 印
保証人商務印書館有限公司董事	張元濟 印
保証人商務印書館有限公司董事	印錫璋 印
保証人	藤瀬政次郎 印
見 議	三木甚市 印
見 議	張国傑 印

以上、合弁解約書を紹介した。

合弁解約書のなかの確定している数字と、書かれていない支払い遅延利息を分けて計算しておきたい。

確定部分は、以下のようになる。

- 1 . 総額55万3,916.5元
- 2 . 1月5日までの利息4,370元
- 3 . 為替差額1万4,477.5元
- 4 . 経費2,769.58元
- 5 . 諸経費合計(2+3+4)2万1,617.08元

書かれていない数字は、次の利息だ。

- 6 . 6月30日までの支払い遅延利息1万2,464元[朱蔚伯1981:151]
- 7 . 総計(1+5+6)58万7,997.58元

以上、合併解約書を検討し、朱蔚伯の提出する数字をおぎなって58万7,997.58元を得ることができた。

今まで、朱蔚伯が提出した「8 . 総額 約58万8,200元」が事実にもっとも近いと考えていた。彼の計算間違いを訂正すれば、約58万8,000元となる。それで正しかった。

ただし、問題がもうひとつ残っている。

1914年1月31日の株主大会において理事会が合併解消について報告を行なった。

そのおりの「商務印書館特別株主大会理事会報告」には、上に紹介したような詳細な数字は報告されていない。日本人株が3,781株あり、1株につき130元に16.5元を加えた金額で決着したことをいうだけだ。

そのなかで雑費について言及がある。「一切の雑費は、株の利息で相殺し、約8万元あまりとなる[並一切雑費, 合計以股息抵過, 約合八万余元]」

雑費を株の利息でまかなうというのは、問題ではない。「約8万元」という数字が不可解なのだ。どこから出てきたのか。

雑費というのは、上の数字でいえば5+6の3万4,081.08元にあたる。「約8万元」には、はるかにおよばない。

商務印書館の理事会が報告するのだから、いいかげんな数字ではないはずだ、とだれでもが考える。ただし、1月31日という日付が、判断するためのひとつの決め手になる。支払期限の6月30日よりもはるか以前の報告である。ということは、この「約8万元」という数字は、あくまでも事前の予想にすぎない。ゆえに、

「約」をつけておおよその数字にするしかない。商務印書館理事会は、多めに見積もって報告をしたとわかるのだ。

以上、合弁解約書を見ることによって、ようやく正しい数字を得ることができた。

あらためて確認しておきたい。商務印書館は、金港堂との合弁を解消するために、総額58万7,997.58元を支払ったのである。

4 商務印書館が中華書局を裁判に訴える

中華人の文章をめぐって、商務印書館と中華書局は新聞紙上で広告合戦を派手に行なっていた。

その一方で、もうひとつの問題が浮上する。日本製品ボイコットに関連するのだ。

日本製品ボイコットをいうのであれば、日本製の印刷用紙を使うわけにはいかない。あえて使えば「日本製品の不正使用」ということになる。紙の1枚1枚に「日本製品」と書かれているわけでもあるまいが、当事者にとってみれば、今日明日の印刷をどうするか判断を迫られる事態である。それほどにきびしい社会状況だった。

商務印書館が広告で説明するのを追跡すれば、以下のような事情であった。

中国産の用紙を使うことにしたが、まもなく品不足に陥った。そこで日本以外の外国、すなわちアメリカ、スウェーデンから輸入することにする。商務印書館は、同業者にもそれを分けて販売するというものだ。

用紙不足になったということは、逆にいえば、中国の出版社の多くが日本製の印刷用紙を大量に使用していたことの証拠にほかならない。日本製印刷用紙に依拠して大量の教科書出版をふくむ出版業を営んでいたその根底が揺らいでいるという意味だ。

これにも中華書局が広告を出している。商務印書館は、同業者に用紙を分けるといいながら、『日本人の支那問題』問題を口実にして中華書局には販売を拒絶している、と。

中華書局は、商務印書館とどこまでもあらそうつもりなのだ。この広告合戦は、1919年の8月中旬までくりひろげられている。

実業之日本社が訂正記事を自社の『実業之日本』に掲載したことは紹介した。

8月7日、雑誌掲載記事に社長の手紙を添えたものが、商務印書館に届いた [張樹年1991:174]。

その原文と漢訳をならべて『申報』1919年8月15日付に広告を掲載している。

題して「日本の実業之日本社が支那問題号で商務印書館を日支合辦と誤記したこと訂正 [日本実業之日本社支那問題号誤載商務印書館為日支合辦之更正]」【図14】という。

雑誌の訂正記事とともに、実業之日本社社長の手紙も写真版で掲げ、それに漢訳をつけている。『実業之日本』に掲載された訂正記事はすでに引用しておいた。それとまったく同じものだ。実業之日本社社長の私信は珍しい。日本語を以下に引用する。

上海

商務印書館御中

肅啓

貴館益御隆昌之段大慶至極奉存候陳者本年六月十五日弊社発行実業之日本特刊支那問題号第一六三頁（日支合辦事業ト其經營^{ママ}.....中華道人述）中第十節二商務印書館ヲ日支合辦事業トシテ紹介セルモ其後貴館全ク日本人ノ手ヲ離レテ純然貴国人ノミノ經營ニ係ルコト判明致シ候故八月一日発行ノ実業之日本ニ誤記事ノ訂正ヲ掲載致置候へ共尚聞知スル所ニ依レバ誤記事掲載ノ為ニ貴館及ビ中華書局トノ間ニ累ヲ及ボシ尠カラザル御迷惑相懸候トノ事驚愕措ク所ヲ知ラズ爰ニ同文ノ書面ヲ貴館及ビ中華書局ニ呈シ陳謝ノ意ヲ表スルト共ニ一日モ速ニ和衷共同益々

貴業ノ発展セラレンコトヲ切ニ希望仕候 敬具

大正八年七月二十一日

実業之日本社社長増田義一 印

商務印書館御中

中華道人の誤記事によって商務印書館に迷惑をかけた、というのはよい。社長の増田義一は、率直に謝罪している。社長は自社の刊行物の内容に責任を持つ、という態度を表明しているのだ。この部分についていうと、増田社長がとった態度は潔い。

だが、それが原因で中華書局と紛糾しているのを聞いて申し訳ない、中華書局にも陳謝する、とはどういうことか。

中華書局にもあやまるというのであれば、増田社長は、該社にも同じ手紙を送ったのであろうか。ここの部分は、私には余計なことだと思われる。中華書局は、事実を熟知したうえで確信をもって商務印書館を批判している。それを知らないらしい増田社長は、自社刊行物が巧妙に利用されていることを認識していないことになる。

自社の刊行物『実業之日本』に掲載された瓊川生の文章を読んでいないのかという疑問も感じる。すなわち、「併し商務印が契約書を公表して記事の誤を正した後」に於て尚且つ商務印を非難するに日支合辦事業を以てするは、排日熱を商策に濫用し、商敵を無根の事実苦しむるものである。排日熱全盛の日、この問題を提起せるは、中華書局として或は巧慧であらう、併し其手段は餘りに卑劣である」[瓊川生1919:12]と書いているではないか。

中華書局にも陳謝うんぬんという部分は、増田社長の無知を暴露している。きわめて軽率であるといわなければならない。

商務印書館は、中華書局が翻訳した『日本人之支那問題』によってこうむった営業損失と名誉毀損の代金を銀1万両と決めて提訴した。

1919年12月16日、第1回公判が開かれている。張元済が原告兼証人となり、弁護はライト(来脱 Right)と丁榕がつとめた。被告代表は陸費逵、弁護士は羅傑だった[張樹年1991:180]【図15】。(関連して『申報』1920.1.14【図16】)

1920年1月27日の午前に第6回公判が、午後に第7回公判が開かれて結審する【図17】。

2月10日、午前9時半、第4民庭において判決が申し渡された。被告の中華書局は、1万元および訴訟費用を支払うこと、反訴は却下。「反訴」とあるところから、中華書局が逆に商務印書館を訴えていたことがわかる。商務印書館の勝利

【圖 15】

商務印書館在公共公廨呈訴中華書局譯行日本人之支那問題一書內記該書館附有日本股份一篇有意引起國人仇視致受營業及名譽損失請追損失銀一萬兩等情業已由麻將該書局經理陸費伯鴻傳案諭令呈遞訴詞聽候訊核在案昨日上午由愈襄謙會同英卓副領事升座第四民庭傳訊即據兩造代表律師投案各將稟詞內逐條申辯約一小時始畢由商務印書館董事兼經理人強元奇上堂經其代表律師詰訊并將各種日報並部批執照及日本人之支那問題某雜誌與此事交涉之函件一併呈案請察復由被告代表律師向強送屏盤駁因時已過午奉中西官宣諭退庭判候改期再審

卷一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十 二十一 二十二 二十三 二十四 二十五 二十六 二十七 二十八 二十九 三十 三十一 三十二 三十三 三十四 三十五 三十六 三十七 三十八 三十九 四十 四十一 四十二 四十三 四十四 四十五 四十六 四十七 四十八 四十九 五十 五十一 五十二 五十三 五十四 五十五 五十六 五十七 五十八 五十九 六十 六十一 六十二 六十三 六十四 六十五 六十六 六十七 六十八 六十九 七十 七十一 七十二 七十三 七十四 七十五 七十六 七十七 七十八 七十九 八十 八十一 八十二 八十三 八十四 八十五 八十六 八十七 八十八 八十九 九十 九十一 九十二 九十三 九十四 九十五 九十六 九十七 九十八 九十九 一百

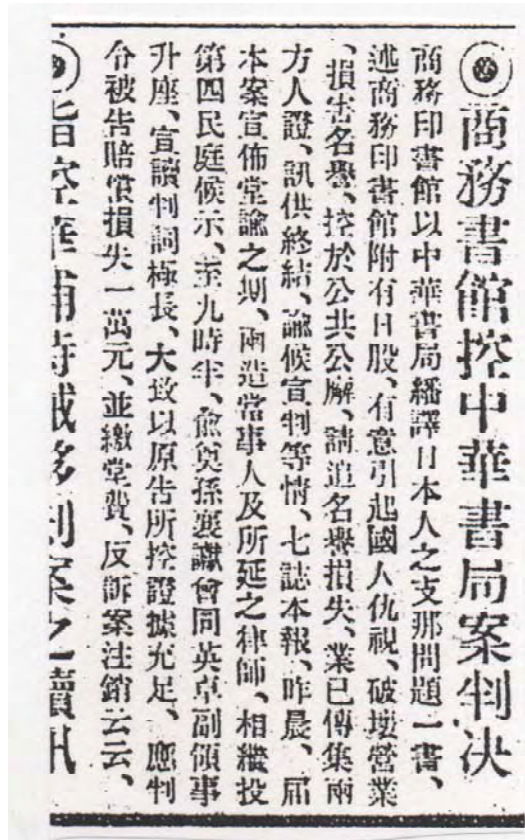
【圖 16】

續訊商務印書館控中華書局案

河南路商務印書館、以中華書局譯行支那問題一書、內有商務印書館係中日合資之紀錄、有意破壞名譽、引起國人仇視、稟控公共公廨、請追損失銀一萬兩、業已將被告書局經理陸費伯鴻傳訊等情、已三誌本報、昨晨、又經愈襄謙與英卓副領事、升座第四民庭續訊、即由原告之律師、起令商務印書館張元濟至案、續向盤供、歷一時餘始畢、並由張將本埠中華新報、漢口大陸報、向單簿、合同收條、報告賬目冊子、逐件呈察、旋由被告之律師、向張盤問、創辦商務印書館之年代、招收日股之時期、營業之盛衰、收回日股經過之手續、此次起訴之原因、直至十二時、堂上宣諭退庭、原告呈案各件、存候改期續訊、

卷一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十 二十一 二十二 二十三 二十四 二十五 二十六 二十七 二十八 二十九 三十 三十一 三十二 三十三 三十四 三十五 三十六 三十七 三十八 三十九 四十 四十一 四十二 四十三 四十四 四十五 四十六 四十七 四十八 四十九 五十 五十一 五十二 五十三 五十四 五十五 五十六 五十七 五十八 五十九 六十 六十一 六十二 六十三 六十四 六十五 六十六 六十七 六十八 六十九 七十 七十一 七十二 七十三 七十四 七十五 七十六 七十七 七十八 七十九 八十 八十一 八十二 八十三 八十四 八十五 八十六 八十七 八十八 八十九 九十 九十一 九十二 九十三 九十四 九十五 九十六 九十七 九十八 九十九 一百

【図17】



であった。

裁判には勝利した。しかし、商務印書館が金港堂との合併を解消して数年が経過した後においてもこれほど煩瑣な事柄が発生する。過去において外国企業との合併会社であったという事実が、中国社会にあってはライバル会社からの攻撃理由となる。事あるごとに蒸し返される。骨身にしみて認識したはずだ。

商務印書館は、自らの合併問題についてはますます敏感にならざるをえない。

【注】

- 1) 稲岡勝論文が、はやくからこの問題を紹介している[稲岡勝1996]。最近では、柳和城論文がある[柳和城2003c]。
- 2) 『張元濟年譜』1919年7月21日の項目に以下の語句が見える。「不久前中華書局根拠《実業

之日本》雜誌所載商務有日資一篇文章，訳成中文小冊子《支那問題》，並另印伝単分寄各地学校」[張樹年1991:173]。ピラ（伝単）に先行して単行本（小冊子）『支那問題』が刊行されたと考えているらしい。事實は、その逆である。

【文献一覧】*印未見

- 稲岡 勝1996 日中合併事業の先駆、金港堂と商務印書館の合併1903-1914年 『ひびや』(東京都立中央図書館報) 第145号1996.3
- 鄧 詠秋2003 “才気宏闊”的出版家沈知方 『編輯学刊』2003年第6期2003.11
- 東亜同文会1908a 『支那経済全書』第12輯 東亜同文会編纂局、丸善株式会社1908.10.1/1909.6.17四版
- 柳 和城2003c 商務印書館法律顧問丁榕 『出版史料』2003年第3期(新総第7期)2003.9.25
- 陸費 達1931* 中華書局二十年之回顧 『中華書局圖書月刊』1931.8.10
1987 中華書局編輯部 『回憶中華書局』上編 北京・中華書局1987.2
俞筱堯、劉彦捷編 『陸費達与中華書局』北京・中華書局2002.1
- 錢 炳寰2002 『中華書局大事紀要(1912-1954)』北京・中華書局2002.5
- 瓊 川 生1919 無適語 『実業之日本』第22卷第17号1919.8.15
- 沈 芝盈2002 陸費伯鴻行年紀略 俞筱堯、劉彦捷編 『陸費達与中華書局』北京・中華書局2002.1
- 汪 家熔1994a 商務印書館日人投資時的日本股東 『編輯学刊』1994年第5期(総第37期)1994.10.25
『商務印書館史及其他 汪家熔出版史研究文集』北京・中国書籍出版社1998.10
- 張 樹年1991 『張元濟年譜』張樹年主編 柳和城、張人鳳、陳夢熊編著 北京・商務印書館1991.12 (『出版史料』に連載された。今、単行本に拠る)
- 鄭 孝胥1993 『鄭孝胥日記』全5冊 中国歴史博物館編、勞祖德整理 北京・中華書局1993.10
- 朱 蔚伯1981 商務印書館是怎样創辦起来的 『文化史料(叢刊)』第2輯1981.11
- 中華道人1919 日支合併事業と其経営者 『実業之日本』第22卷第13号1919.6.15
- 中華書局1987 『中華書局圖書総目』中華書局編輯部編 北京・中華書局1987.3
- 樽本照雄1991a 商務印書館が触れられたがらない事 『中国文芸研究会会報』第113号1991.3.30
2003 辛亥革命前後における商務印書館と金港堂の合併 孫文研究会編 『辛亥革命

商務印書館と金港堂の合併解約書

- 命の多元構造』汲古書院2003.12.25
- 2004 『初期商務印書館研究（増補版）』清末小説研究会2004.5.1

商務印書館関係資料いくつか

『清末小説』第28号(2005.12.1)に掲載。沢本郁馬名を使用。商務印書館関係の資料をいくつか紹介する。疑問を解決するには、原本を見るしかない。わかっているが、実行するのはむづかしいのだ。資料を提供して下さった人の名前は本文中に明記している。

1 『日本人之支那問題』について

拙稿「商務印書館と金港堂の合併解約書」(本書所収)において、商務印書館と中華書局の関係が紛糾する原因となった『日本人之支那問題』に触れた。

もとは、日本の雑誌『実業之日本』第22巻第13号(1919.6.15)の特集「支那問題号」である。該誌から論文13本を選択し漢訳のうえ出版したのだった。

論文執筆時には、該書を見ることができなかった。

本稿においてもうすこし詳しく紹介する。

表紙は、「日本実業之日本社著 / 日本人之支那問題 / 上海中華書局訳行」と文字だけで構成されている。

奥付は「民国八年七月発行 / 訳者 中華書局編輯所 / 発行者 中華書局」となっている。

目次は、甲76頁、乙68頁、丙52頁の合計196頁だ。

奇妙なのは、原本『実業之日本』で各論に掲げられたそれぞれの著者名は、漢訳ではすべて削除されている点である。中国では、個々の日本人の名前などどうでもよく、単に「日本人」で十分だという認識なのかと思われる。

調度約亦有二十萬兩。原料之小麥。從無錫營州鎮江蕪湖漢口及大連購入。一
日生產約二千袋。營業成績甚佳。

十、商務印書館

商務印書館最初為中國人所營之事業。開業後二年。全部燬於火。前此建設新
工場所負之巨債。遂不能償還。恐多方責難。乃商之金港堂原亮三郎。改為中日
合辦之事業。時為明治三十六年十二月。當時力排萬難。利用我資本金六十萬
元。因得復業。漸獲頹運。而有今日之盛大。中國人方面。多恐實權歸於日人。又欲
避股東之內訌。及官廳之責備。遂根據日本登記手續。過於煩瑣之理由。乃於香
港登記。又恐生中國人之誤解。乃於中國農工商部註冊。為中國公司。以圖業務
之擴張。是時適為新舊兩學之過渡時代。新學書籍刊行既多。則事業益臻繁盛。
現今資本金百萬元。成績甚佳。年年有二分內外之利益。

中日合辦事業與其經營者

乙三九

日本人之支那問題

乙四〇

圖圓滿。而業務愈形發達。但中國人之心理。以為該書館表面雖為中國公司。然
實權仍歸日人。終有不能掃除之勢。前年北京開教育會時。會長張元濟氏。為該
書館中國人方面之代表者。而教育會員之一部。及外部之一般人等。多誤會張
氏。為該書館中日本人之使用人。彼之所以為教育會長者。以該書館之出版物
多能供給中國諸學校。中國教育權之基礎。全然操於日本人之手。當時以此相
責難者。亦有其人。蓋此種輿論。不獨該書館方面有之。其他中日合同之事業。亦
往往聞之。是我當業者所受影響不少也。

十一、上海絹絲製造股份公司

本公司以屑物為原料。依化學及機械之作用。以為絹絲紡績。設立於明治三十
九年五月。資本金四十萬元。中日各半。日本方面之出資者。初為絹絲紡績公
司。後以該公司歸為鐘淵紡績公司。故現日本人之代表者。轉為鐘淵紡績公
司。成績甚佳。由日本經營之其原料。由無錫常熟杭州等處。購入屑物。成為製品。供

日本の対支外交方針……小村欣一

中国之国民性及国民思想 乙17

支那の国民性及び国民思想……服部宇之吉

中日合辦事業與其經營者 乙29

日支合辦事業と其經營者……中華道人

中国為天与之原料国 乙49

天との原料国支那……吉田虎雄

山東問題与中日両国之教訓 丙1

山東問題と日支両国の教訓……中野正剛

中日經濟同盟論 丙11

日支經濟同盟論……藤山雷太

中日諒解論 丙21

日支諒解論……増田義一

歡迎留学生為親善之根本策 丙33

留学生を迎ふるは親善の根本……高田早苗

新中国之将来 丙36

新らしき支那の将来……稲葉君山

このなかに「中日合辦事業与其経営者」がある。そこに商務印書館が出ているものだから、商務印書館側の反発を招いた。日本企業との合弁はすでに解消しているにもかかわらず、いまだに合弁企業のひとつにあげている、このままだと誤解を生む、というのが理由だ。しかも、中華書局は、単行本が出版される前に、日中合弁部分だけを別に印刷してピラを作成し各界にばらまいた。中華書局の商務印書館に対するいやがらせである。だからこそ、商務印書館は、証拠としていわゆる「合弁解約書」を新聞で公表した、といういきさつだった。

商務印書館と中華書局が『申報』紙上でくりひろげた広告合戦のなかで、あきらかにされたひとつの事実がある。

すなわち、そのピラを見た商務印書館が、中華書局にむけて訂正を要求する手紙を送っているということだ。中華書局は、つぎのように書いている。「商務印書館が手紙でよこした「実業之日本が誤って商務印書館を日中合弁会社と掲載したことにたいして訂正を要求する」という文面は、将来、該書の巻頭に補うことにする」(『申報』1919.7.23)。

『日本人之支那問題』の冒頭には、上の広告通りに商務印書館の手紙が掲載されている。中華書局の返書もあるから下に原文を示す。

商務印書館来函

中華書局台鑒敬啓者讀今日各報告白得悉前聞有人將実業之日本誤載敝館為中日合股公司之撰述訊成華文發行者即為 貴局敝館与 貴局既屬同業彼此情形俱所熟悉敝館往年收回日股一事疊經登報布告尤為

貴局諸君所深知且実業之日本社亦已函復敝館允為更正今

貴局既將該段文字訊印敝館亦為同様之請求謹將敝館收回日股契約送呈 鑒閱務祈

貴局即予更正於所印該書每冊內在該段之後用大字登載并祈

先将印成之書一分及更正之稿擲下一閱再

貴局告白有由郵政暨轉運分達各省之語未知已寄出若干分寄至何处并乞

見示不勝感禱之至端此敬頌

公祺

商務印書館謹啓七月二十日

復商務印書館函

商務印書館台鑒敬啓者奉

惠書謂「実業之日本載敝館為中日合股公司 貴局既將該段文字訳印敝館亦為
同様之請求務祈為更正」云云查敝局訳印日本人之支那問題一書係為資國民對
日之研究其中日合股事業篇第十款叙述

貴館合股情形敝局係照原文翻譯

貴館告白所謂借此誣陷云云未知何指應請登報声明至

雅意諄囑更正一節自當将来函補刊卷首以全同業之誼一俟印就即以一份呈
覽專此佈復即頌

台安

中華書局謹啓七月廿二日

商務印書館は、中華書局にあてた手紙において、『実業之日本』が「誤載」していると書く。すでに合弁を解消しているにもかかわらず、あたかも現在も合弁が続いているように該文は説明している。商務印書館側にしてみれば、これは明らかに「誤載」である。

だが、中華書局側から見ればどうか。返信に見える商務印書館の手紙からの引用に注目してほしい。商務印書館が「実業之日本誤載」とあくまで「誤載」と書いているにもかかわらず、中華書局は、わざわざ「実業之日本載」と書いてもとの手紙の「誤」を無視する。中華書局側にすれば、商務印書館は日本企業と現在は合弁企業ではないかもしれないが、問題はそこにはなく、過去においてそうだったという事実を重視しているのだ、ということだ。

中華書局のこういうかたくなな態度が、商務印書館をして裁判に訴えさせることになるのだ。

2 『中国出版史料・近代部分』の商務印書館関係

宋原放主編、汪家熔輯注『中国出版史料・近代部分』全3巻（武漢・湖北教育出版社2004.10）が出版された。

1815年から五四運動前までの出版史料である。

第1巻は、官立、キリスト教会などの出版機構、あるいは関係文書を収録する。第2巻は、翻訳、雑誌新聞、教科書などの重要出版物を集める。第3巻は、民営の出版活動と印刷、発行材料を採取する。張静廬輯註『中国出版史料』所収の資料と重複しないのが編集方針だという。

商務印書館関係で気のついたことだけをのべる。

第2巻の『最新国文教科書』について

「編輯大意」を掲げているが、537頁に文章の欠落がある。

この欠落は、張人鳳「商務印書館的《最新初等小学国文教科書》」（『清末小説』第20号1997.12.1）に見られる。その欠落をおぎなったのは、樽本「初期商務印書館における教科書の系譜 『最新国文教科書』第1冊まで」（『大阪経大論集』第53巻第4号（通巻第270号）2002.11.15）なのだ。該当部分は、樽本『初期商務印書館研究（増補版）』の251頁にも収録してある。

『中国出版史料・近代部分』の該文に欠落があるということは、原文から採録していないことだろうか。張人鳳の文章から孫引きして知らぬ顔をしているように見える。

第3巻の「商務印書館清退日股合同」について

この契約書は、いわゆる「合弁解約書」そのものである。私の発見とは関係なく中国でも同一文書を見つけていたらしい。

いくつかの誤植がある。そのうち重要であると思うものを指摘する（清末小説研究会のウェブサイトに掲げた）。

1 奇妙なことだが、史料は『申報』の掲載月日を「1919年7月24日」と誤っ

ている。41、42（注1）頁

正しくは、7月25日だ。なぜ、このような間違いが生じたのか理由はわからない。

2 最後の署名部分に誤りがある。

誤「見証 三本条太郎」 正「見議 三木甚市」（41頁）

山本条太郎から連想して誤記したのかもしれない。

3 『涵芬楼新書分類目録』に関連して

商務印書館編訳所は、仕事上の必要から書籍を収集していた。その蔵書をまとめて涵芬楼と称し、これがのちの東方図書館である*1。

本稿で問題にする『涵芬楼新書分類目録』あるいは『涵芬楼新書分類総目』という目録は、商務印書館編訳所が所蔵する書籍について記した自社出版物ということになる。

私がこの書目の存在を知ったのは、はるか昔のことだ。阿英『晚清小説史』（上海・商務印書館1937.5）の「第1章晚清小説的繁栄」に出てくる。彼は、清末小説の発行が繁栄していることを説明するためにいくつかの書目を例に引き、それらに収録された小説の数を問題にする。

該当部分を引用する。

書目で最も多くを収録しているのは、『涵芬楼新書分類目録』をあげなくてはならない。文学類では全部で翻訳小説を400種近くと創作約120種を収録している。出版時期でもっとも遅いのは宣統三年（1911）である〔書目上収的最多的，要算涵芬楼新書分類目録，文学類一共収翻訳小説近四百種，創作約一百二十種，出版期最遲是宣統三年（一九一）〕1頁

『涵芬楼新書分類目録』には、創作120種と翻訳400種近くが収録されているらしい。合計520種として計算すれば、翻訳が全体の約77%を占めることになる。これが、清末小説は「翻訳が創作よりも多い」という阿英の主張の根拠のひとつ

となったと考えられる。また、1911年発行の小説を収録しているというのだから、該目録の出版は、1912年ころだとの推測が成り立つ。

阿英の同書「第14章翻訳小説」では、『涵芬楼新書分類総目』(278頁)という名称で登場する。「目録」が「総目」となっており、まぎらわしい。同じ書目であろうと推測されるが、異なった書名は、のちの改訂版2種でも訂正されていない。改訂を行なった阿英自身も気付かなかったのか、校勘をした呉泰昌の手元には該目録がなかったのか、そのわけはわからない。

著者の阿英が注意していないから、同文を再録するばあいも、そのままにされる。

上の第1章と第14章は、「晚清小説的繁栄」という題名でまとめられ、張静廬輯註『中国近代出版史料初編』(上海・上雑出版社1953.10。184-203頁)に収録されている。『涵芬楼新書分類目録』『涵芬楼新書分類総目』と表記され原文のとおりである。訂正も注釈もない。

中島利郎訳注「阿英『晚清小説史』試訳ノオト(1)」(『啾啾』第5号1975.12.31)には、つぎのような注釈がほどこされている。該目録に言及して珍しい部類に属する。

註 涵芬楼新書分類目録 未見。涵芬楼とは上海商務印書館の蔵書閣名であり、その蔵書閣所蔵の新学書分類目録を指すものと思われる。涵芬楼の蔵書目録としては、ほかに『涵芬楼蔵書目』および『涵芬楼蔵書目録再続編』などがある。尚、十四章では「分類総目」となっているが、いまいずれが正しいか詳らかでない。43頁

書名に違いがあることに注目している。そのほかの蔵書目録を列挙しているのが新しい。あげた『涵芬楼蔵書目』は、いかにもありそうな書名だ。だが、『涵芬楼蔵書目録再続編』とはなにか。「再続編」という箇所違和感を覚える*2。その書き方を見れば、くりかえすまでもなく『涵芬楼新書分類目録』のほかに2種類の蔵書目録が出ていることになる。中島がわざわざ書いているのだから、これらの書目が存在していることについて何か根拠があるのだろうとは思う。残念

ながら、かかげた目録間の関係がもうひとつはっきりしない。原物で確認をしていないから無理もない。

中島の注釈は、つぎにあげる翻訳にほぼ全文が採用されている。

阿英著 飯塚朗、中野美代子訳『晚清小説史』(日本・平凡社 東洋文庫349 1979.2.23)に見える2カ所の注だ。

(1)『涵芬楼新書分類目録』涵芬楼とは上海の著名な出版社である商務印書館の蔵書閣名であるが、その蔵書目録としては、宣統三年(一九一一年)刊の『涵芬楼蔵書目録』(あるいは『涵芬楼蔵書書目録』か)及び民国八年(一九一九)刊『涵芬楼蔵書目録再続編』がある。他に『涵芬楼中外新書目録』(刊行年不明)あり、ここに謂う『新書分類目録』とは、『中外新書目録』を指すのであろう。290頁

こちらの注で新しいのは、『涵芬楼蔵書目録』(または『涵芬楼蔵書書目録』)、『涵芬楼蔵書目録再続編』、『涵芬楼中外新書目録』と3種類も登場させているところだ。中島のもとの注と微妙に異なった書目の名称なのだ。

3種の目録をあげたうえで、その中の『涵芬楼中外新書目録』が正しいのではないかと推測している。阿英が示した『涵芬楼新書分類目録』は間違いである、そういう目録は存在していない、といているのとかかわらない。

阿英の勘違いは、別の場所でもいくつかある。しかし、第14章でよく似た『涵芬楼新書分類総目』を挙げているのだから、まったく別物であるらしい『涵芬楼中外新書目録』を持ち出したのは、かなり大胆であるといわねばならない。

(14)『涵芬楼新書分類総目』第一章注1参照。第一章では『涵芬楼新書分類目録』となっているが、未見のためこのままにしておく。370頁

こちらの注には、第1章の注で掲げた『涵芬楼中外新書目録』には言及していない。それとの関係はどうなるのか。記述をしないから無視をするつもりらしい。中島試訳ノオトの注釈は、それで一貫していた。しかし、翻訳『晚清小説史』の

注では、別の見解をつけ加えた、あるいは、考えを変更したらしいから記述にソゴが生じた。

どのみち、未見の書目について、別のこれまた見ていない書目との関係をうんぬんしたところで、説得力が増すわけではない。

のちに発行された『商務印書館図書目録(1897-1949)』(北京・商務印書館1981)には、自社の発行物であるにもかかわらず、『涵芬楼新書分類目録』あるいは『涵芬楼新書分類総目』の記載がない。市販された目録ではないということなのだろうか。

考えてみれば、阿英以外に言及した例を知らない(私が知らないだけで、専門家のあいだでは有名なのかもしれない。ご教示をいただけるとうれしい)。阿英の文章を引用して示すものは、ある*³。引用しているだけだから、目録の原物を見ているとは限らない。

『涵芬楼新書分類目録』あるいは『涵芬楼新書分類総目』は、どうやら阿英を除いて、ほとんどの研究者が手に取ったことのない目録だとわかる。それほど珍しいものらしい。蔵書目録だから、研究者の目に触れないということはないはずだが、奇妙なことだ。もっとも、商務印書館が内部の参考用に編集したものだとしたら、広く出回っていない理由になるかもしれない。

私が入手したのは、涵芬楼蔵書目録の複写である。表紙も扉も奥付もない。もともとなのか、それとも複写のためなのか、わからない。

とりあえず内容を説明しよう。

いきなり「借閲図書規則」がある。

本館図書は、現在のところ編訳所同人が編訳するときの参考に供するだけだ、と宣言する。

ということは、この蔵書目録は内部参考用のみの出版物のように受け取れる。それにしては、活版印刷でしっかりと製本されている(ように見える)。内部参考用であれば、奥付がないのも理解できないこともない。

興味を引くのは、図書を次の8門に分類していることだ。

天字 旧書

とある。経史子集および叢書の順に配列される。

くりかえす。旧書には小説類を含まず、さらに分類の8門には小説を立てていない。ということは、これらとは別に小説だけを独自にまとめて配置しているように見える。

目次および本文の柱には「涵芬楼蔵書目録」と記す。

もうひとつ目を引くのが、この蔵書目録には、「続編」がついていることだ。つまり、増補している。そのなかのひとつに呉曾祺『涵芬楼文談』商務印書館印本がある。これは、宣統三（1911）年の発行だという。となれば、該目録は、1911年あるいは1912年頃の発行と推測できる。

以上から次のことが考えられる。

商務印書館の涵芬楼に所蔵される図書について、『涵芬楼蔵書目録』が編集発行された。

この『涵芬楼蔵書目録』には、2種類があると推測される。

ひとつは、旧書を収録した「涵芬楼旧書分類総目」である。これには「続編」がついている（確認済み）。

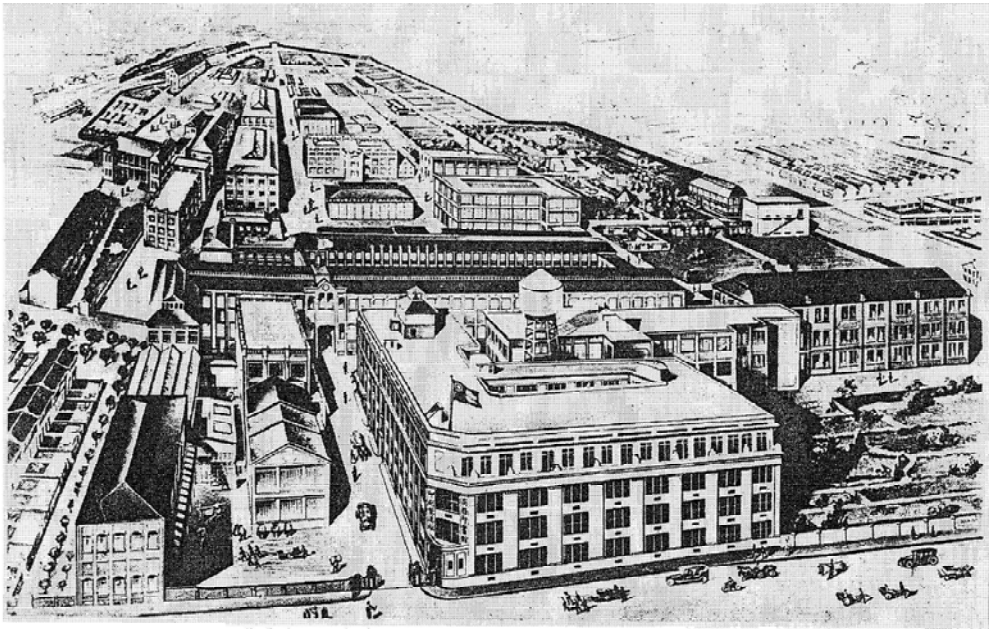
もうひとつは、新書を収録する「涵芬楼新書分類総目」である（推測）。今、手元にある「旧書分類総目」の名称と合わせるには「新書分類総目」とした方がおさまりがよい。

「涵芬楼新書分類総目」には、小説類を収録する。阿英の説明するように、「文学類では全部で翻訳小説を400種近くと創作約120種を収録している」のだろう。もしかすると、上の「天字旧書」以外を加えたものかもしれない。教科書、東文書、英文書、日報雑誌などはいずれも新しい書物に分類されても不思議ではないからだ。

というわけで、阿英の示した『涵芬楼新書分類総目』は、依然として追跡中であると報告しておく。

【増補附記】「商務印書館『涵芬楼新書分類総目』について」を本書に収録

4 商務印書館宝山路印刷所の配置図



號館十八地古路山寶海上在景全廠造製所刷印及司公總海上

【図】宝山路印刷所全景

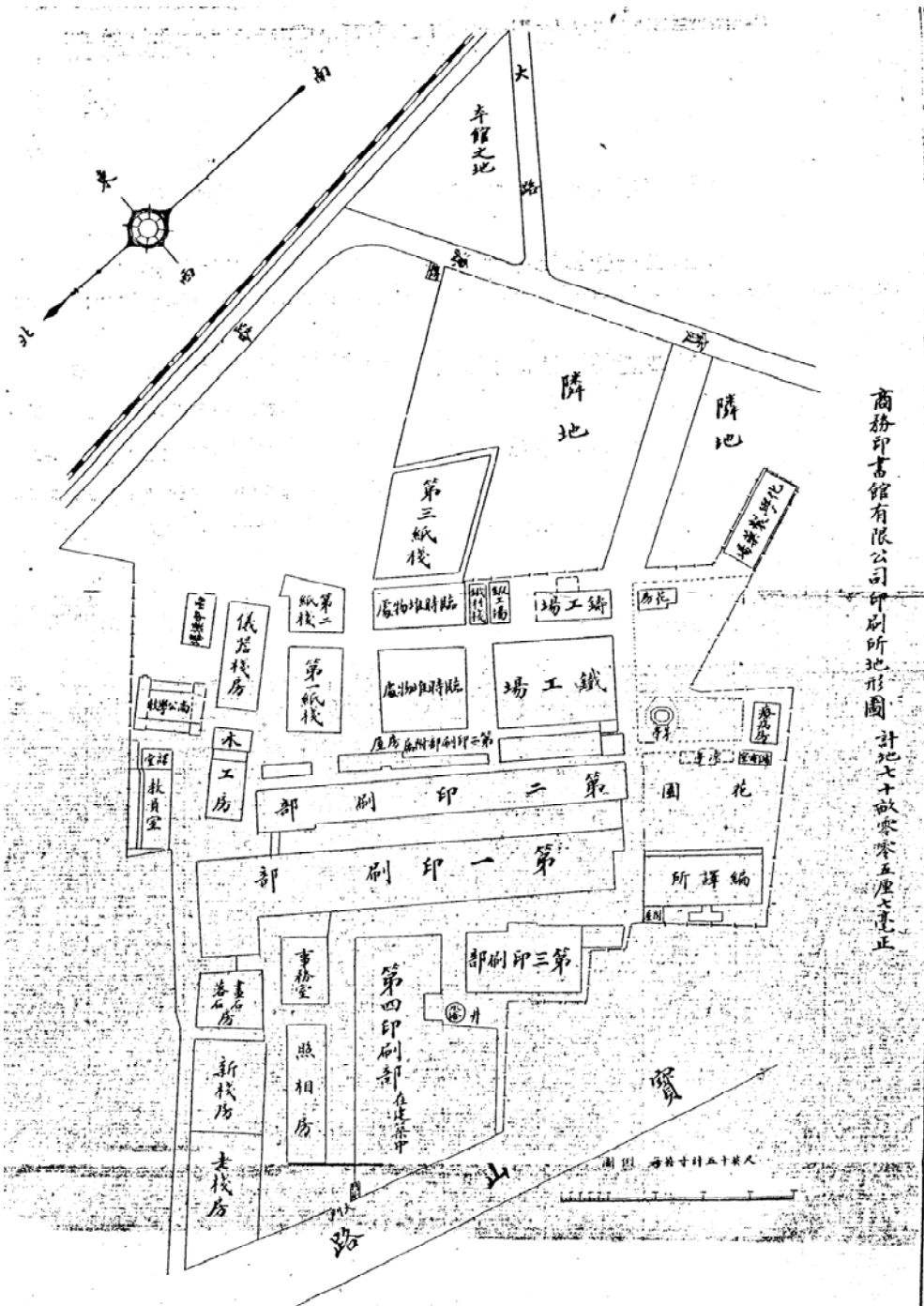
商務印書館の規模拡大と繁栄ぶりを示した絵図に宝山路印刷所全景がある。

宝山路印刷所は1907年に落成した。創業後、わずかに10年しか経過していないのにこの壮挙である。日本金港堂との合併後であることにも注目しておこう。その後、広大な敷地に印刷工場そのほかを不断に増築する。

創立35周年を記念した荘厳「三十五年来之商務印書館」(1931)に掲載されたそのイラストは、よく引用されておなじみのものだ。手前のビルが堂々としており、いやがうえにも人の目を引く。そこだけ見ても全体の規模の大きさを感じさせる。

見慣れた全景の絵図とはいえ、多くの建物が、それぞれ何に使われていたのか、はっきりしない。解説をした文章を見たこともない。ただただ大規模な商務印書館の印刷所である、という印象をふりまくだけだ。

汪家熔氏にご教示をお願いしたところ、うえに掲げた配置図を送ってくださった。1921年のものだという。



【図】宝山路印刷所の配置図

創立35周年の全景よりも10年をさかのぼる配置図ということになる。両者を比較してみると、ほぼ一致する。

目立つ手前の建物の奥に黒い屋根が2棟横たわっている。これが、宝山路印刷所の中心である。中心というのは、この地に最初に建設されたという意味である。すなわち、第一印刷部と第二印刷部だ。

商務印書館は、金港堂と合併をしたあと、業務拡大にそなえて宝山路に土地を買収し、巨大な印刷所を建設した。1棟では不足して第2棟を建設したというわけだ。

うえの配置図の左下に見える「新倉庫（新棧房）」と「旧倉庫（老棧房）」は、以前は、編訳所だった。

その編訳所は、1921年の時点で第一印刷部の右側、花園に新築して移転したとわかる。

第三印刷部のとなりにそれよりも規模の大きな第四印刷部が「建築中」と表示されている。これこそが全景の手前中央部に位置する大きなビルである。印刷所であった。

左下の倉庫と第四印刷部にはさまれた写真部は、アメリカ人スタッフオードの指導で建設された。最初の場所に、そのまま存在している。

右手の編訳所の上方には、花園であって、その右手には蓄電部と医療部の建物がある。

第二印刷部の上方も配置図をたよりに見ると、鉄工場と隣接して臨時物置場だ。その左は第一紙倉庫、というぐあいに、まさに配置図のとおりが全景の絵図にもれなく描かれていることが判明する。

貴重な資料であることはいうまでもない。（2004.5.16清末小説研究会ウェブサイトにあらましを掲載した）

5 『最新国文教科書』

渡辺浩司氏より『最新国文教科書』関係の複写をもらった。教科書類は、資料として保存されることがすくないから、10冊そろいというのはめずらしい。重版

数がバラバラだから、集めたものだとわかる。

それぞれの扉と奥付の記述を以下に示す。ただし、書名は省略する。図版を参照してほしい。なお、張人鳳「張元濟直接参与編纂、校訂的商務印書館版教科書有幾種？」(『清末小説』第27号2004.12.1。135頁)において、第1-7冊を原書で確認しているという。初版の月日が新曆に換算して示してある。これを「/張」と表示して該当部分に補う。

第1冊 10版

扉

日本前文部省図書審査官 小 谷 重

日本前高等師範学校教授 長尾楨太郎 校訂

福 建 長 楽 高 鳳 謙

浙 江 海 鹽 張 元 濟

/

江 陽 湖 莊 俞

武 進 蔣 維 喬 編纂 上海 / 商務印書館印行

蘇 陽 湖 楊 瑜 統

奥付

光緒三十年歲次甲辰二月二十三日初版 / 張1904年3月29日[樽本注：1904年4月8日の間違い]

光緒三十一年歲次乙巳四月十五日十版

第2冊 21版

扉

福 建 長 楽 高 鳳 謙 校訂

浙 江 海 鹽 張 元 濟

/

江 武 進 蔣 維 喬

蘇 陽 湖 莊 俞 編纂 上海 / 商務印書館印行

奥付

光緒三十一年歲次甲辰二月第一版 / 張1904年3月28日

翻印必究

編纂者 陽湖莊 武進蔣維喬 陽湖楊瑜統

發行者 商務印書館

印刷所 商務印書館

發行所 商務印書館

光緒三十年歲次甲辰二月二十三日初版
光緒三十一年歲次乙巳四月十五日十版

(每本定價洋一角五分)

(國文教科書第一冊)

本館爲普及教育起見特于外埠分設支店並託各書坊代售如有僻遠之地無從購買本館者請即函示并將書價及郵費照舊增加一或函郵政票封入信申本館當即照數寄空函定購恕不作復

最新國文教科書

江蘇 武進蔣維喬 陽湖楊瑜統 編纂

上海 商務印書館 發行

日本前文部省圖書審查官 小谷重
日本前高等師範學校教授 長尾謙太郎 校訂
福建 長樂高鳳謙
浙江 海鹽張元濟

第 1 冊 10 版

書經存案 翻印必究

編纂者 陽湖莊 武進蔣維喬 陽湖楊瑜統

發行者 商務印書館

印刷所 商務印書館

總發行所 商務印書館

光緒三十年歲次甲辰二月第一版
光緒三十二年歲次丙午七月廿一版

(定價每本大洋二角)

(國文教科書第二冊)

最新國文教科書

江蘇 武進蔣維喬 陽湖莊 編纂

上海 商務印書館 發行

福建 長樂高鳳謙 校訂
浙江 海鹽張元濟

第 2 冊 21 版

總發行所 商務印書館 <small>上海英大馬路中法大藥房對面</small>	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 0 auto;"> 必翻存書 究印案經 </div>	光緒三十一年十月初版 <small>(國文教科書第十冊) 定價每本大洋二角</small>
	編纂者 武進 蔣維喬 陽湖 莊維翰	發行者 商務印書館 <small>上海北馬路第二號</small>

江蘇 武進 蔣維喬 編纂
 上海 商務印書館 印行

最新
 國文教科書

日本前文部省圖書審査官
 小尾谷太郎
 長尾元培
 蔡元濟
 高鳳謙
 張元濟
 鹽樂陰
 浙江 長山 海
 福建 江
 校訂

第10冊初版

光緒三十二年歲次丙午七月廿一版

第3冊 14版

扉 第2冊と同じ

奥付

光緒三十年歲次甲辰十二月第一版 / 張1905年1月6日

光緒三十二年歲次丙午 五月十四版

第4冊 12版

扉 第2冊と同じ

奥付

光緒三十年歲次甲辰十二月初版 / 張1905年1月6日

光緒三十二年歲次丙午五月十二版

第三課第三四字	手口	初版	再版	三版	六版
第三課上方	田禾	田禾	田土	刪禾字	
第六課上方	分寸	寸分			
第七課第三句	手爪	指爪			
第七課第五句	口舌	手足	增指字		
第七課第六句	口舌	手足	刪足字		
第七課上方	林大	林茂	增茂字		
第九課第六句	兄作文	姊作文			
第九課上方	弟習字	妹習字			
第十一課上方	田中禾	村中大			
第二十課第三句	兄作文	姊作文			
第二十課第四句	弟習字	妹習字			
第二十一課第六句	田中禾	村中大			
第二十一課第七句	紡紗人	紡紗女			
第二十一課第八句	采桑女	采桑人			
第二十二課第七句	父坐左	父坐右			
第二十二課第八句	客坐右	客坐左			
第二十八課第七句	汝爲兵	彼爲兵			
第二十八課上方					

本書第一冊編就未印承 同志紛紛催促急行付印以應新年開學之用文字圖畫均有未愜之處至以爲憾再版三版間有訂正茲當六版大加改良惟同一學堂雜用數版稍有窒礙謹將各版異同之處列爲校勘表以備尋檢(四五版與三版相同故不列表)

光緒三十一年歲次乙巳七月初版 / 張1905年 8月20日

光緒三十二年歲次丙午三月六版

第7冊 5版

扉 第2冊と同じ

奥付

光緒三十一年歲次乙巳十月初版 / 張1905年11月

光緒三十二年歲次丙午四月五版

第8冊 5版

扉 第2冊と同じ

奥付

光緒三十一年歲次甲辰十二月第一版

光緒三十二年歲次丙午 六月 五版

第9冊 15版

扉 第2冊と同じ

奥付

光緒三十一年歲次甲辰十二月第一版

光緒三十二年歲次丙午 六月十五版

第10冊 初版

扉

日本前文部省図書審査官 小 谷 重

日本前高等師範学校教授 長尾楨太郎

浙 江 山 陰 蔡 元 培 校訂

福 建 長 楽 高 鳳 謙

浙 江 海 鹽 張 元 濟

/

江蘇 武 進 蔣 維 喬 編纂 上海 / 商務印書館印行

奥付

光緒三十一年十月初版

以上、10冊にわたって扉と奥付の記述をかかげた。わずらわしい、なんの意味があるのか、と読者はいぶかられることだろう。だが、この表示には、興味深い事実が反映されているのだ。

扉の表示には、いくつかの形があるが、基本的には大きく分けてふたつになる。日本人の小谷重と長尾楨太郎の名前を掲げるものと、そうではないものだ。中国人の名前には出入りがあるが、これが問題なのではない。

くりかえす。教科書の扉に日本人名を出すかださないか。これが重要なのだ。

日本人名を掲げるものの発行年月は、第1冊の10版、すなわち光緒三十一年四月十五日(1905.5.18)である。もうひとつある。第10冊の光緒三十一年十月発行

だからこれも新暦になおせば1905年となる。

日本人名を削除するのは、第2冊から第9冊まで、それぞれ重版数は異なるが、発行年はすべて光緒三十二年、すなわち1906年なのだ。分かれ目は、1906年であることがはっきりしている。

1906年から学部の「審定」を経る必要が生じた。そのために日本人名をはずしたと理解できよう。第1冊の1906年版（「学部第一次審定」とかかげる）には日本人名を掲載していない事実を指摘しておいた（『初期商務印書館研究（増補版）』2004.5.1。249頁）。そういうことだ。

第1冊10版には、もうひとつ興味深い文書がついている。初版、再版、三版、六版の字句異同表である。これを見ると、教科書本文に絶え間なく手を加えていることがわかる。参考までに、異同表を掲げておく。

【注】

- 1) 参考文献：汪家熔「涵芬楼和東方図書館」『商務印書館一百年（1897-1997）』北京・商務印書館1998.5。355-357頁。呂長君「商務印書館的涵芬楼」『出版史料』2004年第3期（新総第11期）2004.9.25。102-105頁
- 2) ものの本によると『涵芬楼旧書目録』5巻、同統編5巻、同再統編5巻、同三統編5巻があるという。このことを指しているのか。
- 3) 郭延礼『中国近代文学発展史』第1巻 済南・山東教育出版社1990.3。4頁。施蛰存「導言」『中国近代文学大系』第11集第26巻翻訳文学集1（施蛰存主編）上海書店1990.10。15-16頁

商務印書館の創業記念誌

日中合弁企業のばあい

未発表。2006年8月執筆。商務印書館が刊行した創業記念誌に、日本の金港堂との合弁をどのように記述しているかを探る。創業10年、30年の記念誌は、珍しい部類に属する。一般の学生を対象にして書いた。そのため内容が重複している部分がある。ご了解いただきたい。

現代中国において創業100年以上の歴史をもって存続する出版社は、多くない。1897年に上海で創業した商務印書館は、ほとんど唯一の存在だといってもいい。

その歴史の長さや規模の大きさを誇る商務印書館は、過去において日本の金港堂と合弁会社であった。創業まもないころの約10年間だけだ。日本でいえば明治末から大正のはじめにかけてのこと。だが、この事実を知る人は少ない。日本でもほとんど知られていないのではなかろうか。数年前、大阪経済大学で開催された市民教養講座において紹介したことがある。熱心な参会者ではあったが、まったく知らないことについてどのように反応していいのかわからない様子だった。日本であれほど有名であった出版社の金港堂が、すでに消滅していることも関係があるのかもしれない。

近現代史のなかで日本の企業と合弁していた事実は、中国では正負の両側面を持つ。日中関係が良好であればその事実は前面に押し出され、悪化すれば背後に追いやられる。簡単にいえば、そういうことだ。その評価が政治情勢に影響されるのは、商務印書館研究にかぎらない。今の中国では避けられないことである。

本稿では、商務印書館が自社刊行物において、日中合弁の事実をどのように説

明しているか簡単に紹介する。あわせて、今では珍しい部類に属する創業記念誌に触れたい。

商務印書館が自社の創立を記念して発行するのが、ここでいう「創業記念誌」である。

最近ではよく知られるようになった。たとえば、90周年の『(1897-1987) 商務印書館九十年 我和商務印書館』(1987)、95周年の『(1897-1992) 商務印書館九十五年 我和商務印書館』(1992)、100周年の『(1897-1997) 商務印書館一百年』(1998)などがある。節目に出版された大部な文集だから人の目を引く。また、85周年の『商務印書館図書目録(1897-1949)』(1981)は、出版目録というかたちで発行された。5年間隔で出てくる最近の状況をみれば、以前もその調子で刊行されていたかのように思ってしまう。だが、それほど多くは出ていない。また、過去の記念誌は、見ることさえ容易ではない。

1 創業10年記念誌

初期のものには、商務印書館編訳所編輯『上海商務印書館創業十年新廠落成紀念冊』(上海・商務印書館 光緒三十三年(1907)年七月 非売品。「紀念」は漢語)がある。創業10年だからかなり早い。

その内容は、自社刊行物の目録を主にし、生活便利資料を附録にする。たとえば、「光緒三十三年中西合歴表」は新旧暦の換算表だ。そのほかは、電報用漢字符号一覧表とか列車の時刻表価格表なのである。

自社の創業に触れて次のように記述する(資料だから原文を引用する。わずらわしいと感じられるむきはとばしてください。以下同じ)。

本館經始於光緒二十三年正月賃小屋數椽於上海英租界江西路德昌里購印機二具聊事印刷翌年六月移北京路有屋十二楹規模稍擴二十八年七月不戒於火乃建印刷所於美租界北福建路同時設發行所於棋盤街翌年正月又置編訳所於蓬路(後略)

西暦に改め、必要事項を補って説明する。

1897年2月11日が創業日である。日本でいえば明治30年だ。部屋を借り簡単な印刷機を設置して開業した。商業関係の印刷を請け負う印刷会社だから「商務印書館」と称する。「印書館」は印刷会社の意味。創業者たちはキリスト教徒だったから、教会関係の印刷をあてにしているの独立である。翌年六月に北京路に移転し12部屋を借りた。拡大したように書いているのは数字の魔術だ。事實は、空間を狭く区切れば部屋数だけは多くなる。経営は以前とかわらない自転車操業だった。1902年8月22日、失火により焼け出された。失火の事実を自らが明記している文書は、数少ない。ここでいうアメリカ租界の北福建路に印刷所を建設したのが、書いてはいないが同年10月16日以前の事である。

資料を読むばあい、事実をふまえたうえで執筆者が何を記録し、何を無視するかを見なければならない。当事者にとって当たり前のこと、たとえば上でいえば創業者たちがキリスト教徒であったことなどは、記述する必要を認めなかった。だから、右から左に引用するだけでは、その意図が不明になってしまうおそれがある。特に、創業を記念する刊行物なのだから、赤裸々に事実だけが述べられていると考えるほうが不自然だ。なんらかの粉飾がほどこされていると受け取るのがよい。

1903年11月19日、商務印書館は日本の金港堂と合併会社になった（1914年1月6日まで）。この創業10年記念誌は、金港堂と合併最中の刊行物になる。だが、なぜだか合併の事実には口を閉ざす。書いていないということは、その事実を公表したくなかったからだと推測される。商務印書館に勤務したことのある朱蔚伯が、後にそう証言してもいる。

もうひとつ記していないのは、印刷所を北福建路に新築した日時だ。私は調査してそれが1902年10月16日以前だと把握している。だが、山のように書かれている文献で印刷所新築完成の月日に言及したものが、ない。その重要さに気づいていないようなのだ。なにが重要かといえ、8月22日に失火して2ヵ月にもならない10月16日以前にどうしてレンガ造り3階建ての印刷所を新築できるのか説明できないからである。しかし、ここに金港堂との合併話が1902年前後には進められていた、という事実を導入すれば、理解するのは簡単になる。金港堂から前倒

しで印刷所建設の資金が出ていたことが推測される*1。

創業10年記念誌に掲載された文章の重点はふたつある。ひとつは、商務印書館自らの失火を記録していること。もうひとつは、金港堂との合併を無視していることだ。

1917年は、創業20年にあたる。金港堂との合併はすでに解消しているし、記念誌が発行されていても不思議ではない。だが、その事実を確認することができない。私の知る限り、つまり、今までの文献で見るとという意味だが、刊行された様子はなさそうだ。

そうして、ここに紹介する創業30年記念誌が出てくる。

2 創業30年記念誌

『創立三十年商務印書館志略』(1926.5)という。複写で見るとほぼB6判を横長に製本している。

肖像は大きくふたつに分けてかかげる。ひとつは商務印書館前任職員録と称し、夏瑞芳、鮑咸恩、印有模の3名だ。もうひとつは同現任職員録といい、高鳳池、張元濟、鮑咸昌、李宣龔、王顯華である。

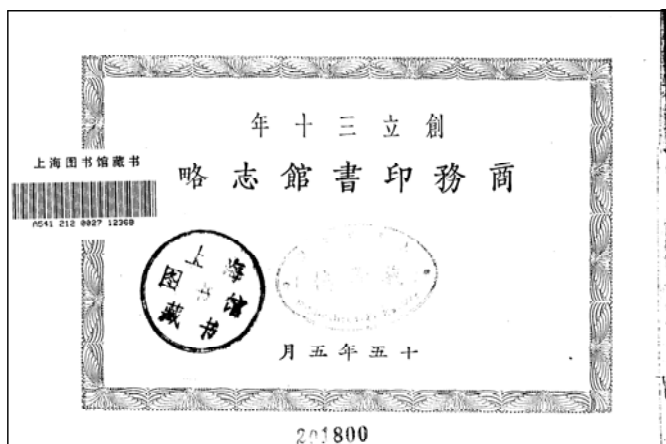
多数の写真を適宜配置して、この冊子の内容は、以下ようになる。

1 創業経過、2 組織概況、3 股本増加、4 編訳豊富、5 印刷精進、6 製造研究、7 国産提倡、8 賽会褒奨、9 教育施設、10 職工待遇

「創業経過」は、資料として貴重なので原文のままで紹介する。必要に応じて分割し下線をほどこし説明を加える。

一 創業経過

本公司經始於清光緒二十三年丁酉正月。夏瑞芳高鳳池鮑咸恩鮑咸昌諸君，共集股本四千元，在上海江西路，租屋三楹，購印機兩架，是為創業之始基。翌年夏六月，遷於北京路，有屋十二楹，是為發展之初步。越五年當壬寅癸卯之交，始建印刷所於福建路，設編訳所於唐家街，設發行所於棋盤街，規模粗具。



『創立三十年商務印書館志略』
1926.5 扉（上海図書館蔵）

創業10年記念誌では省略していた創業者の名前を掲げる。夏瑞芳が社長をつとめ、鮑兄弟は印刷方面の責任者だ。その資金は4,000元だとするが、正確に書けば3,750元である。創業の地と移転先は、同じ。だが、自らの失火については言及を避けている。

是時日本金港堂擬至上海開設印刷廠，公司因欲利用外国技師，改組股份有限公司，向本国商部註冊。旋於宝山路改建印刷所編訳所，復於棋盤街建築發行所，基礎由是鞏固，但引用外人，兼收外股，實為一時權宜之策，遂為根本計畫，一面遣派学生赴国外學習印刷，一面招集青年学徒，授以各種技術，以為獨立經營地步。其時吾国風氣漸開，本公司又辦有成績，附股者漸多。

該文を創業10年記念誌と比較してわかるもうひとつの変化は、金港堂との合併に触れていることだ。書く方向に転換をしたらしい。

日本の金港堂が上海で印刷工場を開業しようとしていたという。教科書出版で有名な金港堂が、なぜ印刷工場を開業するのか。疑問に思うのは当たり前だろう。当時の上海では、出版社は印刷会社をかねていた。商務印書館は、印刷会社から英語教科書の編纂出版に進出して業務を拡大していったといういきさつがある。みずからの経験を日本の金港堂に勝手にあてはめて理解したようだ。

この記念誌には書かれていない裏の事情を説明しよう。

金港堂の原亮三郎は、日本で成功した教科書の編集出版事業を中国でも実現したいと考えていた。彼自身の教育に対する情熱からである。日本の出版社が中国に進出するのが流行していた時代背景もあった。なぜ、上海でしかも商務印書館を合併相手に選んだかといえば、人的関係にほかならない。原亮三郎の娘婿山本条太郎が、三井物産上海支店長をつとめていた。その親しい友人印有模は、商務印書館にも投資していた。上に示した前任職員のなかに彼の名前を見いだすことができる。この人間関係がなければ、日本の巨大教科書出版社の金港堂と経営的に順調であったとはいえない商務印書館が結びつく接点がない。

重要だからくりかえす。もともと金港堂は、独自に出版社を中国で設立しようと計画していた。資金と編集知識は十分に所有していた。中国の出版社と合併することなど最初の計画にはなかったのだ。ありえないことだが、もしも金儲けだけを目的にして上海に進出したのであれば、商務印書館は金港堂の視野には入ってくるはずもないほどの小さな存在であった。それが、結果として合併会社となったのは、山本条太郎と印有模、さらには夏瑞芳との関係があったからだ。

以上のような細部にわたる事情が、記念誌にはなぜ書かれぬのか。公開する刊行物においては、言及するにしても日本との関係は最小限にとどめたいという幹部たちの意思が働いたものと思う。

商務印書館からいえば、金港堂の資金と印刷技術、および教科書編纂の知識を吸収するいい機会だった。逆にいえば、金港堂は、商務印書館が利用するにあたいする資金と技術を保有していたということだ。ということは、普通に見れば、金港堂は、資金、技術において商務印書館を圧倒する存在だったことがここからもわかる。金港堂の出現は、倒産するかもしれない商務印書館にとっては滅亡の淵から救い出してくれるまことに得がたいものであった。それが「外国人を任用し、あわせて外国資本を導入するという一時の便宜的な方法が、ついには基本計画となった」という説明の背景なのだ。ここでいう外国人、外国資本とは、日本人、日本資本であることはいうまでもない。

ただし、上の説明に見える「外国技師を利用しようとした」という表現が、商務印書館の最初からの主体的な姿勢であったという誤解を生む原因になる。

双方が10万元ずつ出し合い対等の関係で商務印書館は改組して株式有限会社と

なった。

ここには名前が出てこない長尾楨太郎、小谷重らの日本人がいたことを忘れてはならない（なぜ上海に行くことになったのか説明すれば長くなるのでここでは省略。隠れた経緯があることだけを示唆しておく）。彼らが中国側人員と協力して編集した小学生用『最新国文教科書』が爆発的に売れて商務印書館の経済的基礎を形成した。だから宝山路に広大な敷地を購入することができ、1907年に目を見張るように大規模な印刷所および編訳所を新築することになるのだ。

乃於民国元年，提議收回外股，由夏瑞芳君与日本股東磋商，歷時二載，會議數十次，始得全數收回。民國三年呈報農商部立案，奉批有『熱誠毅力，至堪嘉許』等語，此不特本公司引以自慰，實為我國實業界至有關係之事也。自外股收回後，營業愈發達。自創辦迄今，歷三十年，股本達五百萬元矣。

1912年に外国（日本）株回収の提議がなされたという。清朝から中華民国への転換は、満洲族という異民族の支配から漢族が脱却することだ。外国資本との合併企業である商務印書館が攻撃的になるのも無理はない。その点をつかれて、清朝末期には、中国図書公司から攻撃された。中華民国になってからは、中華書局から攻撃を受けるようになる。商務印書館から飛び出した人たちが創業したのが中華書局だ。内部事情を熟知しているから、その攻撃は過激なものとなった。合併を継続することは無理だという幹部たちの判断である。

日本の株主との交渉が2年も続いたというのは、間違いである。1913年11月に福間甲松が上海に派遣されて合併解消の交渉がはじまった。妥結するのは、1914年1月6日だ。実際の交渉期間は、約2ヵ月である。だから、2年という説明は正しくない。商務印書館の正式な歴史ともいべき創業30年記念誌にそう書いてあるため、踏襲する論文が再生産される。

1914年、商務印書館は金港堂との合併を解消した。合併会社ではなくなったにもかかわらず、競争者の中華書局は、その後も商務印書館があたかも日本の出版社と合併を継続したかのような印象をふりまいて中傷する。商務印書館は名誉毀損の裁判をおこし、勝利した。これが1919年から翌1920年にかけての出来事だ。

両者は、新聞広告をやつぎばやに掲載して派手な非難合戦を演じたのは周知の事実だろう。そのきっかけになったのが日本で刊行された『実業之日本』第22巻第13号（1919.6.15）の特集「支那問題号」だった*2。

以上の経過を頭にいれて上の「創業経過」を見ると、なかなか興味深い。

商務印書館は、創業30年記念誌において、それまで日本金港堂との合併を隠そうとしていた姿勢を改めている。隠す態度が競争者の敵意をあおると理解したのではなかろうか。私が方向転換という理由だ。

社会状況が以前とは変化した。日中合併がそのつど批判の原因になる。対応に苦慮するし、それが営業に直接影響する可能性がでてくる。商務印書館発展の基礎を形成した金港堂との合併であった。だが、その正の側面を強調すると周囲の反感を惹起することになる。かといって過去を抹殺することもできない。商務印書館が金港堂の取り扱いに慎重な態度をとるようになったのも無理はない。

なお、『商務印書館志略』と書名のついた刊行物は、1928年、1929年にも発行されたという*3が、私には見る機会がない。

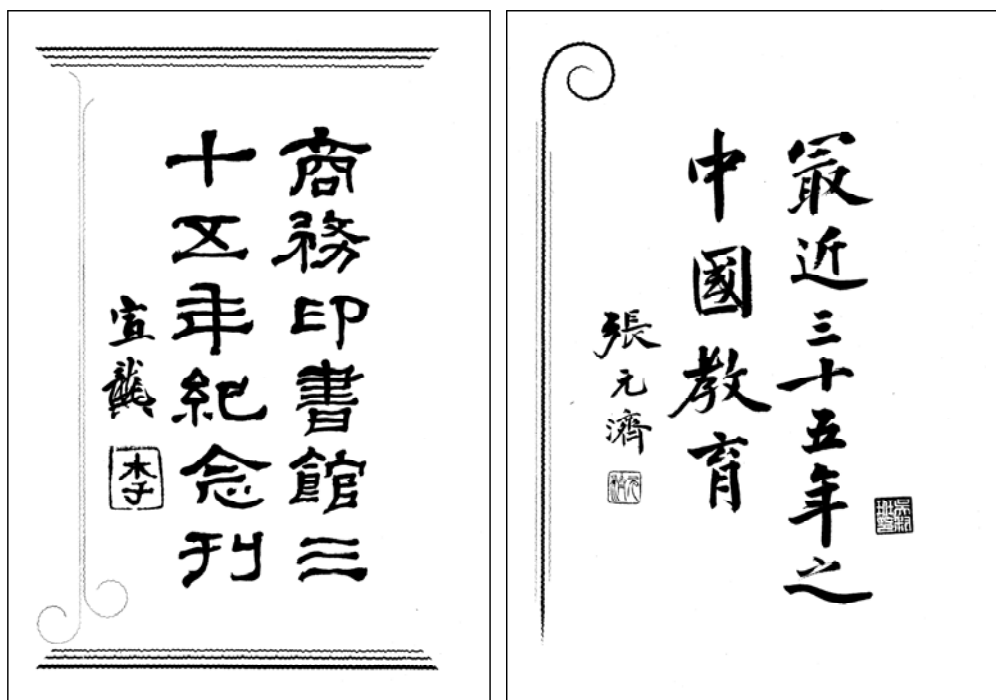
3 創業35年記念誌

莊兪、賀聖籟編『最近三十五年之中国教育』（上海・商務印書館1931.9）が創業35年記念誌である。目次には「商務印書館創立三十五年紀念刊」と記されている。

最近35年間の教育と出版文化について論じた文集を主内容とする巨冊だ。論文集の最後に位置する莊兪「三十五年来之商務印書館」が、創業記念部分の主要内容となっている。莊兪論文は、前の創業30年記念誌の骨組みをそのまま下敷きにしている。使用する写真もほぼ同一である。創業経過については、説明を増やしているが基本的な記述は共通していることを指摘しておきたい。

たとえば、創業の地を江西路だけではなく徳昌里だとより詳しく記す。次に移転した場所を北京路につけ加えて順慶里と誤記する。慶順里が正しいが、莊兪の間違いを踏襲する文章が少なくない。それほど多くの研究者が参考に使っているという証拠ともなる。

金港堂が上海に進出してくるという。その資本の大きさに商務印書館がかなう



『最近三十五年之中国教育』1931.9

扉2 李宣龔(抜可書)

扉1 張元濟書

はずもない。競争することはむづかしい。ゆえに「合作」の方法を利用することにした。これが荘俞の説明である。創業30年記念誌の記述を基本的に守っている。だが、その次に余計なことをつけ加えた。

惟所訂条件，並非事事平均，如經理及董事全係華人，祇一二日人得列席旁聽，聘用日人得隨時辞退等是也。

締結した条件は、決して事ごとに平等であるというものではなく、たとえば支配人（社長）と理事はすべて中国人であり、ただ一、二の日本人は列席して傍聴することができただけで、招聘した日本人は、随時、辞めさせることができる、などである。

日本人は理事ではなかった、というのはウソである。1903年から1908年まで理

事になっている日本人は、原亮三郎、加藤駒二（金港堂社員）、原亮一郎（亮三郎の息子）、山本条太郎らがいると商務印書館の記録に残っている。

莊兪が意図したのは、日中平等の合弁会社ではなかったと外部にむけて強調することだ。合弁の事実は否定しようがない。だが、その内実は、商務印書館が、あくまでも主導権を握って主体的に日本の金港堂を引きずり回して利用しつくすための合弁だった。これが、莊兪の提出した幻想だ。

莊兪は、商務印書館の長老幹部である。彼がこのように虚偽の説明をするから後の研究者のなかにはだまされるものが出てくる。主権が商務印書館にあった合弁だと強弁する。双方が10万元ずつを出し合った平等な合弁がどうして片方に有利な契約になるのだろうか。普通に考えて、ありえない。

従来の研究論文は、初期商務印書館について主として莊兪の文章に依拠して説明する。そのまま引用して事実から遊離する傾向が生じるのは、該文の内容を検討することなく頭から信じ込む、あるいは事実を無視してそうあってほしいと願望するからである。

莊兪論文の影響は大きい。さらにことばを変えて、商務印書館が金港堂を吸収したと記述するにいたる（「商務五十年」1950）。「吸収」という原語に、商務印書館が優位に立って小さな金港堂を受け入れたという語感をにじませる。多くの論文が現在にいたるまでそのままを引用するのは、そう考えることによって研究者の自尊心が満足させられるからだろう。その時点で、研究論文ではなくなることにそれらの著者は気づかない。

【注】

- 1) くわしくは樽本『初期商務印書館研究（増補版）』を参照のこと。
- 2) 樽本「商務印書館と金港堂の合弁解約書」本書所収。中華書局が漢訳したのが『日本人支那問題』だ。樽本「商務印書館関係資料いくつか」本書所収
- 3) 張志強『20世紀中国的出版研究』南寧・広西教育出版社2004.1。20頁

初期商務印書館の財政状態

未発表。2006年8月執筆終了。新しく発表された理事会報告書にもとづいて財政状態を点検する。ただし、たいへん残念なことが判明した。資料集に収録された文書には、もともと記入してあった詳細な数字がない。編集者が勝手に判断して削除した。資料としての価値が減少する。これでは概要しか知ることができない。なんとかならなかったものか。

ここでいう「初期」とは、その創業から日本金港堂との合併が終了した時期までを指す。

初期商務印書館の財政状態について数字をあげて説明する文献は、従来は、ほとんどなかった。

だいいち、1902年の失火によって書類をすべて失っている。それ以前の財政がどのようなものであったのか、わからない。これが商務印書館自身が行なっている一貫した説明だ。

書類の有無も問題だが、1903年以後は、会計報告そのものがきちんと行なわれていたかどうか不明であった。

ただし、営業の数字は、あることはある。だが、おおざっぱであるとの印象をぬぐいきれない。

1 莊兪の数字

たとえば、莊兪「三十五年来之商務印書館」(莊兪、賀聖蕪編『最近三十五年之中

国教育』上海・商務印書館1931.9)に収録された「商務印書館歴年営業比較表」(47頁)を見よう。西暦を補う(以下で数字を引用するばあいは「荘**元」のように示す)。

光緒廿九年1903	300,000元
光緒三十年1904	441,230元
光緒卅一年1905	866,728元
光緒卅二年1906	1,377,444元
光緒卅三年1907	1,697,564元
光緒卅四年1908	1,519,817元
宣統元年1909	1,548,099元
宣統二年1910	1,731,695元
宣統三年1911	1,676,052元
民国元年1912	1,819,078元
民国二年1913	2,789,073元

(以下略)

この営業総額というのは、一般には収益を指す。収益から費用を差し引くと純利益がでてくる。単純に言えば、そうなる。ところが、旧式の記録方法なのか実情はそう簡単ではない。あとで述べることにする。

以前は、上にあげる数字しか利用できるものがなかった。王雲五『商務印書館与新教育年譜』(台湾商務印書館1973.3)は、このままを引用してすましている(ただし、宣統元年分を1,548,499^マ元と誤植する)。

大雑把という理由のひとつは、1903年の30万元は端数を示しておらず信頼性に欠けると感じるからだ。もうひとつの理由は、営業総額を示すだけにとどまっている。費用と純利益を明示する数字が明らかにされたことは1度もない。

数字が増加の傾向を示しているから全体の営業規模が大きくなっている、と理解できるだけのこと。利益がどれくらいの規模なのかわからない。重要だからもう1度いう。細目が不明である。損益計算をするのに必要な収益と費用の明細もあきらかではない。また、貸借対照表を構成する資産、負債などが明記されてい

るわけではない。あいまいな数字だと私は断言する。

増加する営業総額を見て、商務印書館が順調に発展していったと勝手に想像する人が出てきても不思議ではない。後の発展を視野に置いて、以前の経営を推測する。すると、力強く発展している商務印書館を見て金港堂が合併を申し込んだ、というありえない粗筋を提出する人がでてくる。すべての原因は、詳細が不明であるところにある。

すこし状況が変わってきたのは、汪家熔が一連の論文を発表しはじめてからである。

2 汪家熔の論文

主として3本の論文で商務印書館の財政問題について説明をしている。

その1：汪家熔「主権在私の合資 1903-1913年商務印書館的中日合資」*1
彼は、論文のなかに「商務印書館日股投資和獲利表」をかかげる。1903年から1913年までの商務印書館における日本人の持株数と株式配当を明らかにした。誰も出すことのできなかつた資料である。時間は、まさに合併時期だ。

汪がそのとき依拠したのは、商務印書館理事会が発表した毎年の決算書であるという。内部の人間しか見ることができない資料だ。利用する側からいえば、決算書の原物を目にするできないのだから、汪家熔が示した数字をそのまま信頼するよりしかたがない。

一覧表を検討してみた。ところが、商務印書館側の数字が省略されていることにすぐ気がつく。論文の主題が、日本人がいくらの利益を得たかを明らかにするためだからだ、という理由がなりたつ。だが、日本人の株利益といったところで商務印書館全体を視野にいれなければ正確な把握はできないだろう。それを無視するのだから、結果として、当然のことながら日本人株主だけが利益を得たような印象を受ける。汪家熔が、それを意図して作成した一覧表だと理解できる。

私は、汪家熔が公開した初出の数字にもとづいて再計算することにした。省略している商務印書館側の獲得利益を割り出して作成しなおしたのだ。その結果は、金港堂を大きくうわまわる利益を商務印書館が得ていたという事実だった。汪家

熔は、そのことを隠したかったのかと思に至った。

会計報告の一部分を抜き出した、あるいは一部分にもとづいて算出したのが、汪家熔の一覧表であった。

その2：汪家熔「商務印書館的経営管理 解放前史料輯録」*2

商務印書館の創業から1946年あたりまでの、資本管理、経営方針、資金と資本の増加などについて説明をしている。今まで見たことがないくらいに詳しい。その抛る資料を見れば、商務印書館内部に所蔵する原資料である。汪家熔は商務印書館に勤務していたからこそ利用できた。

外部の人間には見ることのできない資料を十分に利用して、彼はもう1本論文を発表している。

その3：汪家熔「商務印書館日人投資時的日本股東」*3

日本人の所有株数を明らかにし、また、「投資収益表」をかかげて日本人の獲得利益を公表したのである。

汪家熔ひとりだけが、この詳細で「信頼のおける」数字を発表しているのは、まさに目を見張るといふことばが当てはまる。私は、敬服する。

だが、のちに奇妙なことが出現した。汪の提出する数字が、初出と再録では細かなところで異なっているのだ。あるいは、論文によってまったく違う数字になっているばあいがある。具体的に指摘しよう（あらかじめことわっておくが、以下に示す異同表は、汪論文を批判するものではない。数字を確定することがむづかしいことを示している）。

汪論文のなかで数字の異なる部分には*をつける。また、見やすいように適宜「万」を挿入する。×は空欄を表わす。汪1初は、「その1」で示した汪論文の初出。汪1再は、再録。以下同じ。

総資本

	汪1初	汪1再	汪2
1903年	15万元	15万元	×
1904年	20万元	20万元	20万元
1905年	30万元	30万元	30万元
1906年	40万3,500元	40万元*	40万3,500元

初期商務印書館の財政状態

1907年	75万元	75万元	75万元
1908年	75万元	75万元	75万元
1909年	75万9,500元	76万元 *	75万9,500元
1910年	78万7,400元	79万元 *	78万7,400元
1911年	79万6,500元	80万元 *	79万6,500元
1912年	79万7,000元	80万元 *	79万7,000元
1913年	120万元	120万元	150万元 *

再録論文では、端数を省略して概数にしたとわかる。一方で、別の論文ではもとのままの数字を掲げていたりする。1913年では、120万元と150万元の2種類を掲げ大きく差が生じているではないか。どれが正しい数字なのか。貴重な資料を発掘している点には敬服する。だが、彼は説明をしないから、私は首をかしげる。もっと混乱している例をあげよう。

日本側の得た株利益（上：利率、下：金額）

	注1初	注3初*	注3再
1903年	×	7.1024%	30% *
	7,168元	710.24元	7,102.4元
1904年	×	24.6572%	24.6572%
	2万4,657元	2,465.72元	2万4,657.2元
1905年	×	28.8765%	28.3756%
	4万2,564元 *	2,837.65元	2万8,376.5元
1906年	40% *	38.698%	38.698%
	7万2,000元 *	4,643.76元	4万6,437.6元
1907年	20% *	27%	27%
	5万0,400元 *	3,294元	3万2,940元
1908年	14%	14%	14%
	3万5,280元 *	2,049.6元	2万0,496元
1909年	18%	18%	18%
	4万5,360元 *	2,635.2元	2万6,352元
1910年	20%	20%	20%

初期商務印書館の財政状態

	5万0,400元 *	2,928元	2万9,280元
1911年	12%	12%	12%
	3万0,240元 *	1,756.8元	1万7,568元
1912年	20% * *	21.99%	21.99%
	5万0,400元 *	3,219.34	3万2,193.4元
1913年	30% *	20%	20%
	11万3,430元 *	4,392元	4万3,920元

注3初で示した数字は、すべての位取りを間違えたい。それを再録するときに注3再のように訂正したと考えられる。それだけなら、まだ理解の範囲内である。

困惑するのは、注1初で提出した数字と注3再のものが大幅に異なるからだ。

1903年と1904年の獲得利益はほぼ一致する。だが、1905年以降は比較すれば7割から4割にしかっていない。なぜ、これほどまでに違う数字になるのか。

「股息」、すなわち出資金額に応じて配当される利益のパーセント数は、一部をのぞいてほぼ変わらない。にもかかわらず、株利益として示された数字が違うというのは、日本側の出資金額の認定が前後で異なるからである。

汪家熔だけが利用できる資料があって、それにもとづいて算出した結果がこの通りにバラついて信頼できない。資料そのものが厳密に整理されているわけではなさそうだ。

私は、これ以上つけ加えることばをもたない。

考えてみれば、株式配当があった、という前提に立って汪家熔の一覧表は作成されている。実際に支払われたかどうかを検証する手段はない。

いずれにしても、以上は、その原資料が公表されておらず、明細が不明であることに起因する不都合である。

3 商務印書館の記録

このたび、梁長洲「商務印書館股东会記録(選)」(宋原放主編、汪家熔輯注『中国

出版史料・近代部分』第3巻 武漢・湖北教育出版社2004.10)が公表された。理事会が作成した公式の報告書だ。ここには、初期商務印書館の財政状態を知るてがかりとなる資料を含んでいる。内部文書だから、今回が初めての公開となる。その意味で貴重であるのはいうまでもない。

汪家熔が過去において論文を執筆した時に依拠したのは、ここに収録された資料であろう。すでに彼が数字を抽出しているといっても、すでに見たように確固としたものではない。私なりに検討する必要があるのだ。

全部で20件の文書を収録する。その期間は、1905年から1914年1月の臨時株主会までだ。日中合併の時期に重なる。

1から20まで資料にふられた番号を示して株主会記録を見てみよう。本稿の主旨から、主として収益、費用、利益に注目する。

1 定期株主会 1904年までの決算

開催日：光緒三十一年二月廿六日(1905.3.31)

興味深く思うのは、この報告書において1903年と1904年の会計報告をあわせて行なっていることを知るからである。

癸卯年(1903)の営業総額(原文：生意)は約29万元、利益は1万1,480.20元、甲辰年(1904)の営業総額が44万元で支出は11万9,000元、利益は5万7,890.92元という。

先に荘俞論文から営業総額を引用しておいた。

光緒廿九年1903 300,000元

光緒三十年1904 441,230元

これと比較すれば、約29万元(荘30万元)、44万元(荘44万1,230元)という概数表示になっていることがわかる。たしかに前者は、概数表示ということが可能だ。だが、1903年分は、30万元なのかそれとも約29万元なのか。商務印書館の関係者が出してくる数字が、どうして1万元も違ってくるのだろうか。両者の数字が一致していないのが腑に落ちない。株主会に向けての報告がこのような概数でいいのだろうか。詳細は各株主に点検してもらい、とあるから細かい数字をあげなかったのかとも推測する。

もうひとつ興味を引くのは、癸卯年十月初一（1903.11.19）に有限公司へと変わったことをいう箇所だ。すなわち、日本金港堂との合併が成立した月日にほかならない。

前述のように、年末までの三ヵ月(旧暦)で利益は1万1,480.2元だ。また、1904年の利益は5万7,890.92元だと書いてある。この数字は、そのまま後述する資産負債表に計上される。

単なる会計報告のように見える。だが、いくつかの事実を読みとることが可能だ。

1. 商務印書館は、日本金港堂と合併してから株主会を開催するようになった。
 2. 理事会は、株主会で財政報告をするために書類を作成した。
 3. 合併開始の1903年と1904年の2年分について一括して財政報告をしている。
- ということは、この株主会が第1回の開催であることを意味する。

以上をまとめてわかることは、こうだ。

商務印書館は、金港堂と合併会社になる前は、株主はいても株主会は組織としては存在しなかったと考えていい。ゆえに、会計報告をきちんとしたかたちで行っていなかったということになる。もともと夏瑞芳社長のワンマン経営であった。彼は、創業者たち、あるいは幹部たちにむけて簡単な説明はしていたかもしれない。当時、商務印書館を動かしていた幹部はせいぜい5、6人にすぎなかった。会議を持つまでもなかっただろう。だが、金港堂と合併したあと、株主会が開かれるようになった。それにともない経営内容が株主に公開されはじめたと理解できる。同時に記録として残ることもなった。

この報告書には、需要に応じきれないので印刷機械を増やす、印刷所も拡張する、出版物のほかに洋紙の販売にも力を入れるなどと書かれている。また、日中折半で資本を30万元に増加させることもいう。業務が確実に拡大しつつあることがわかる。

文末に添えられたのが、「光緒三十年資産負債表」だ。

表題にあるように資産と負債の明細である。資産合計が35万7,768.12元であり、負債総額が同数だ。数字は、小数点以下まで一致している。だが、点検すれば、一致しているように見えるだけで、事実は異なる。

資産負債表【表】

別に掲げたのは、私が作成しなおした「光緒三十年資産負債表」である。

作り直したといっても、基本的にもとの表のままだ。すなわち、項目、数字などは元表と同一だ。ただ資産を負債よりも前に移動して示している。説明の都合上、各勘定科目に数字をふった。科目に私の注をつけたものもある。

さて、この表のどこがおかしいのか。

まずいかなければならないのは、冒頭で示した営業総額の44万元（ $440,000$ 元）をこの資産負債表に見つけることができない。表に出てくるのは、 $357,768.12$ 元だけである。これには資本金も含めているにもかかわらず、だ。まさに、謎の「44万元」ということになる。

さらにいえば、営業総額44万元が仮に収益だとして、これから支出すなわち費用 $117,900$ 元を差し引いた $322,100$ 元が利益になるとかといえば違う。さらに、資本金 $200,000$ 元を引くと $122,100$ 元になるが、1904年度の利益 $57,890.92$ 元とも大きくかけ離れる。だから、営業総額は収益であると簡単にいうことができない。

資産部分の問題

問題は、そればかりではない。資産負債表そのものの中にある。

簡単なことだ。資産を合計しても $357,768.12$ 元にはならない。 $3,577.88$ 元が不足する。「雑損」として資産の項目33と34のあいだに追加しておいた。これで、資産と負債の数字が一致する。

「雑損」が出る理由はなにか。もとの資料が間違っているのだろうか。それとも本来はあった何かの科目を間違って抜かして筆写したのか、またはどこかの数字が違うのか、そのわけは私にはわからない。資料編集者も気づかなかつたらしく、注釈はついていない。単に気づかなかつたならば、編集者の怠慢である。知っていて注釈をつけなかったというなら、編集者は無責任である。こういう単純な誤りがあると資料そのものへの信頼性が揺らぐ。

資産を見る。

初期商務印書館の財政状態

光緒三十(1904)年資産負債表

勘定科目	折扣	資産	負債
1 存錢莊	73	7,111.06	
2 存發行所	73	3,985.64	
3 存印刷所		1,665.77	
4 徐桂記	73	1,369.86	
5 外交報股本(資本)		500.00	
6 漢莊		3,000.00	
7 漢莊盈余(利益)		4,395.68	
8 廠基	73	14,025.54	
9 廠屋	90	29,330.17	
10 又	30	165.00	
11 棧房地基	73	2,940.03	
12 棧房工料	73	5,479.45	
13 漢莊貨洋(價格合計)	60	7,597.85	
14 広莊貨洋(價格合計)	60	6,364.30	
15 外埠各号貨	60	30,228.74	
16 本埠各号貨	60	3,860.35	
17 各号該小説、雜誌款	60	243.47	
18 各西客貨	60	1,415.19	
19 進貨各戸該	73	4,872.68	
20 存書棧房	35	51,339.66	
21 存書發行所	35	14,961.83	
22 存書西釘作	25	16,003.24	
23 存書華釘作	25	2,087.50	
24 代印各書	90	7,148.34	
25 各種洋紙、原料	90	39,194.76	
26 各色材料	90	270.00	
27 各種儀器	90	4,062.01	
28 中西鉛版	70	12,323.85	
29 各種訊稿	70	6,141.96	
30 甲辰自編稿子		10,000.00	
31 各処生財(備品)	60-90	60,238.20	
32 預支保險費	80	1,135.11	
33 煤氣樓		700.00	
雜損		3,577.88	
34 資産合計		357,735.12	
35 股本(資本)			200,000.00
36 海先生等戸存款(預金)			75,439.14
37 応支存款利息(預金利子)			1,497.28
38 金港堂貨款(商品代金)			2,568.89
39 金港堂寄售款(委託販売代金)			2,331.57
40 進貨応付款			2,864.30
41 外埠各号存			432.22
42 各西客存			114.60
43 華英字典定款			116.00
44 癸卯年冬季盈余(利益)			11,480.20
45 癸卯年冬季官利成(利子)			3,000.00
46 甲辰年盈余(利益)			57,890.92
47 負債合計			357,735.12

「折扣」とは減価償却の割合を示している。つまり、建物など使った分だけその価値を減じていくものについては、一定の割合で減価する。表示のしかたを見ると、減価分を控除した価格を計上しているとわかる（直説法という。別の方法では、価格の減少を示す減価償却累計額勘定を用いる。こちらは、間接法という）。減価償却の表示があるものは、建物、商品（商務印書館の主力商品は出版物）などだと考えていい。

「3存印刷所」は「折扣」の表示がないから土地だと判断する。「5外交報股本」は所有株だ。「6漢荘」も株だから、5と同じく有価証券ということになる。

「17各号該小説、雑誌款」は、商務印書館が発行する単行本、雑誌類の在庫品だとわかる。在庫については減価償却するという考え方なのだろう。

私にとって理解がむづかしいのは、「24代印各書」、「29各種訳稿」と「30甲辰自編稿子」などである。

「24代印各書」は、普通に考えれば印刷代金だ。商務印書館は、もともとが印刷会社である。請負いの印刷をしてそれが収入になるのは当然だ。だが、減価償却している。ということは、在庫する商品扱いだ。印刷代金をもらうかわりに印刷物を引き取ったという意味だろうか。まさか、と思うが帳簿上はそうあつっていると理解する。

「29各種訳稿」も減価償却している。だから、すでに手元に翻訳原稿があるように読める。商品としての刊行物は倉庫に保管するうちに価値が減じるというのは、わかる。だが、商品になるまえの原稿を減価償却させるのは妥当なことなのか。大いに疑問だ。疑問を感じるが、当時の分類に今は従うことにする。

一方の「30甲辰自編稿子」は、金額が1万元とだけあり端数がついていないのが不自然である。自社編集の原稿であっても字数計算にもとづく原稿料であれば、1万元ちょうどという金額にはならないだろう。そもそも自社編集ならば、それは給料に含まれるはずだ。別の科目にする意味がわからない。それとも、単なる編集費用という意味だろうか。編集の結果完成した原稿が存在していると考えればいいのか。出版される前の原稿は、原稿である限り価値が減るというものではない。ゆえに、減価償却はしない。これならわかる（こちらは、あとで支出に振り分ける）。

負債部分の問題

負債部分を見る。

普通、この部分には、資本金、繰越利益を計上する。ところが、商務印書館の表には、収入全般を記入している。その中には支出も含まれている。混乱しているといってい。というよりも、これが旧式の記入法なのだろう。

「36海先生等26戸存款」の海先生は、張元済を指すと思う。張は浙江海塩の出身である。つまり、張元済ら26名より金を預かっている。社内預金の類だと考える。だから（預金）と注を入れた。社内預金に利子を支払ったのが「37応支款利息」だ。

「38金港堂貸款」は、金港堂の出版物を商務印書館が中国で販売すること。「39金港堂寄售款」は、商務印書館の出版物を日本金港堂へ送って委託販売をすること。いずれも収入になる。

「40進貨応付款」は、輸入品の支払い代金だと考える。

「44癸卯年冬季盈余」は1903年冬の利益だ。なぜ冬季だけかというと、商務印書館と金港堂の合併は光緒二十九年十月初一日からはじまったからである。十、十一、十二月の冬三ヵ月だけの利益となる。合併会社になってからの会計報告であることがわかる。

資産と負債の数字が一致するのを見ると、これで完成した会計報告のように思う。

ところが、専門家でもない私が見ても重要な勘定科目が抜けている。

支出では、従業員給料、原稿料、発送費、広告宣伝費、通信費、水道光熱費、旅費交通費、税金などである。また、収入では、印刷代金、商品売り上げ、つまり商務印書館が発行する各種教科書、雑誌、単行本などの収益が計上されていない。

思いつくだけで、以上の未記入がある。

これは、重大な欠陥をもった報告書だといわなければならない。株主会で明らかにされた正式の会計報告が、このようにズサンであるのはなぜなのか。それとも、ズサンという問題ではなく旧式簿記であるからだ、というのだろうか。それならば、決算が赤字か黒字かがわかるだけのこと。それ以上の詳しさは不必要だ

ということになる。

はっきりいって、ここにある「光緒三十年資産負債表」では、商務印書館の財政状態を理解することができない。資産、負債、資本と費用、収益を混在させて一覧表にしているだけだからだ。しかも、前述のように数字に間違いもある。

「光緒三十年資産負債表」で使用されている数字を利用して私は別に精算表を作成した。

精算表【表】

大きくふたつに分かれる。

貸借対照表は、財政状態を示す。損益計算書は、経営成績を示す。

問題は、「光緒三十年資産負債表」から勘定科目をどのように振り分けるかだ。

貸借対照表

手掛かりのひとつは「折扣」だ。つまり減価償却するものは、資産に分類する。

「5外交報股本」と「6漢荘」は、有価証券だから、これも資産である。

「35股本」は、商務印書館と金港堂の双方が平等に10万円ずつ出資した資本である。「36海先生等26戸存款」は預り金だから負債だ。

資産総額は、33万9,761.56元である。「46甲辰年盈余」は次年度繰越金となる。

負債と資本を合算して資産と同額だから、不明金は、6,431.50元になる。

損益計算書

借方は、費用と純利益だ。前述したように費用に含まれるのは従業員給料、原稿料、発送費、広告宣伝費、通信費、水道光熱費、旅費交通費、税金などである。だが、それらが計上されていないことはすでに述べた。

「光緒三十年資産負債表」の計算間違いを「雑損」として借方に挿入する。

「30甲辰自編稿子」も支出としてあつかう。37は支払うべき利子だし、40も商品購入代金となる。

費用の全額は不明なのだが、てがかりがひとつだけ残されている。すなわち、報告書のなかに書かれている支出11万9,000元である。ここから「30甲辰自編稿子」、「雑損」、「37応支款利息」、「40進貨応付款」を減じて得られる10万1,060.54元が、すなわち従業員給料、原稿料など充当されたと考えられる。「不明」とし

初期商務印書館の財政状態

光緒三十(1904)年精算表

勘定科目	損益計算書		貸借対照表		
	借方	貸方	折扣	借方	貸方
1 存銭荘			73	7,111.06	
2 存發行所			73	3,985.64	
3 存印刷所				1,665.77	
4 徐桂記			73	1,369.86	
5 外交報股本(資本)				500.00	
6 漢荘				3,000.00	
7 漢荘盈余(利益)		4,395.68			
8 廠基			73	14,025.54	
9 廠屋			90	29,330.17	
10 又			30	165.00	
11 棧房地基			73	2,940.03	
12 棧房工料			73	5,479.45	
13 漢荘貨洋(價格合計)			60	7,597.85	
14 広荘貨洋(價格合計)			60	6,364.30	
15 外埠各号貨			60	30,228.74	
16 本埠各号貨			60	3,860.35	
17 各号該小説、雜誌款			60	243.47	
18 各西客貨			60	1,415.19	
19 進貨各戸該			73	4,872.68	
20 存書棧房			35	51,339.66	
21 存書發行所			35	14,961.83	
22 存書西釘作			25	16,003.24	
23 存書華釘作			25	2,087.50	
24 代印各書			90	7,148.34	
25 各種洋紙、原料			90	39,194.76	
26 各色材料			90	270.00	
27 各種儀器			90	4,062.01	
28 中西鉛版			70	12,323.85	
29 各種訳稿			70	6,141.96	
30 甲辰自編稿子	10,000.00				
31 各処生財(備品)			60-90	60,238.20	
32 預支保險費			80	1,135.11	
33 煤氣樓				700.00	
雜損	3,577.88				
35 股本(資本)					200,000.00
36 海先生等戸存款(預金)					75,439.14
37 応支存款利息(預金利子)	1,497.28				
38 金港堂貨款(商品代金)		2,568.89			
39 金港堂寄售款(委託販売代金)		2,331.57			
40 進貨応付款	2,864.30				
41 外埠各号存		432.22			
42 各西客存		114.60			
43 華英字典定款		116.00			
44 癸卯年冬季盈余(利益)		11,480.20			
45 癸卯年冬季官利成(利子)		3,000.00			
46 甲辰年盈余(利益)	57,890.92				57,890.92
不明	101,060.54	152,451.76			6,431.50
合計	176,890.92	176,890.92		339,761.56	339,761.56

て計上しておく。

借方（費用＋純利益）総額の17万6,890.90元がわかれば、貸方も自動的に決まってくる。

貸方（収益）は、38、39、41から45までが収入となる。総額との差額15万2,451.76元が、印刷代金、書籍雑誌などの売り上げである。

2 臨時株主会

開催日：光緒三十一年五月初八日（1905.6.10）。内容を抜粋する（以下同じ）。

会計報告は、年末に行なう。理事に印錫璋、原亮三郎、夏瑞芳、加藤駒二を任命する。張桂華、田辺輝雄を監査役に任命する。

3 臨時株主会

開催日：光緒三十一年十月廿六日（1905.11.22）

四月に香港で登記した。著作権に関係する。

海賊版が出現して被害を受けていることについて報告がありその対策を議論する。

4 臨時株主会

開催日：光緒三十一年十一月初二日（1905.11.28）

商部で登記する予定。これも著作権に関係する。

秋に師範伝習所を開設したために費用がかかること、すでに2,000元を使っている。

5 臨時株主会

開催日：光緒三十一年十二月十五日（1906.1.9）

科挙が廃止され多くの学校が開設されることになる。ゆえに教科書と器具の需要が増加する。それに対応しなければならない。

印刷所建設の土地および機器購入に総額銀12万両が必要である。土地を売ることにする。

そのほか、分館を増やすこと、編訳所の人員増加、中国教育儀器館に2万元を

投資すること、某書局に2万両を投資することなど。

6 臨時株主会

開催日：光緒三十一年十二月二十二日（1906.1.16）

昨年の収入は30万元あまり、来年は10万元の増加が見込まれる。将来は多くて50万元止まりだろう。などなど、順調に収入が増加していることが書かれている。だが、会計報告はなされていない。8の光緒三十二（1906）年二月の定期株主会を待たねばならない。

7 理事会

開催日：光緒三十二年二月初五日（1906.2.27）

発行所の土地家屋を購入、給料の賃上げ、印刷所の土地購入と建設、分館の設立などを議決する。

8 定期株主会

開催日：光緒三十二年二月十六日（1906.3.10）

昨年（1905）度の会計報告が行なわれる。ところが、この『中国出版史料・近代部分』は、肝心の精算書を掲載していない。「史料」といいながら、史料になっていないといわざるをえない。

ただ、注3に前文だけを収録している（32頁）。前文に出てくる数字を取り出してみよう。

営業総額を出すことによって自社の商売が繁盛していることを説明しようとするのだ。カッコの中におなじみ荘愈の数字を参考までにあげておく。

1903年 30万元（荘30万元）

1904年 43万元（荘44万1,230元）

1905年 87万元（荘86万6,728元）

両者が一致するのは、1903年分だけ。ただし、1定期株主会で理事会が提出した約29万元とは異なる30万元だから不思議に感じる。

1905年の収益割合に言及する。すなわち、書籍が全体の6割を、洋紙、機器、

鉛字、銅模（活字の鋳型）が3割を、印刷請負いなどが1割を占めている。

1904年の精算表にもどって検証すれば、勘定科目が判明している収入（利益を除く）は、収益の5.6%にすぎない。この例を見れば、上の説明はほぼ納得がいく。

もうひとつ内訳を示す。1905年の営業総額87万元のうち、事務費が約3万元、営業費が約14万元であり、その結果の利益は約15万2,000元だという。営業総額から事務費、営業費を減じても利益の数字にはならない。ということは、営業総額には、不動産、資本金などを含んでいると考える必要がある。

1904年の繰越利益が5万7,890.92元であったことを見れば、1905年の利益は約2.6倍になっていることがわかる。

9 理事会

開催日：光緒三十三年三月二十八日（1907.4.10）

北河南路の新しい印刷所の西に土地を購入する。某日報館に2万元を、また5千元を新日報館に投資する。会計報告は、次の10定期株主会で行なわれた。

10 定期株主会

開催日：光緒三十三年四月十一日（1907.5.22）

1906年の精算書が提出された。本史料はそれを収録していない。報告書は、概数として以下のように説明する。

収益は約143万元。内、書籍が7割、紙張、機器、鉛字、銅模が3割。分館の利益を含めて全部で約29万8,000元の利益だ。昨年（1905年度）の利益が約15万2,000元であったのと比較すれば、約2倍の純益増加となる。

報告書はつづけて、（利益は）分館が16株で分配し、本館は18株で分配する。10株は株主の利益で、積立金はもともと2株だが、将来を考えて3株に増やす、などとある。

この部分は、私には内容がわからない。1株と称しているが、これ現金になおすと何元になるのか知らないからだ。それぞれの分館は、独立採算なのかどうかもわからない。複雑な構成になっているから、お手上げである。こういう箇所こそ注釈をつけてもらいたかった。それが無い、ということは、編集者の理解を

超えているのだろう。

資本総額は、40万3,500元であるという。

前述の総資本の箇所、汪家熔が違う数字を示している例をあげた。

その部分を引用すると「1906年 40万3,500元 40万元 * 40万3,500元」であった。

数字の出所は、この定期株主会の書類であるらしい。

つづけて、資金が集まりつつあることをいい、75万元を限度とするとも。これが、1907年の総資本が75万元であることの根拠なのだろう。

そのほか、いくらかの数字が出てくるが、精算書を見ることができないので紹介してもムダである。

11 理事会

開催日：光緒三十三年十月十八日（1907.11.23）

尚公小学の経営について。印刷所で働く工員は、通勤に困難を感じている件について、など。

1907年といえば、宝山路に巨大な印刷所を建設した年だ。つまり、新築の印刷所だから以前とは通勤距離が遠くなったという意味である。注5の説明によると、工員のための住居群を建築するために、夏瑞芳と高級職員の沈継方（季芳）が出資して宝興公司（不動産会社）を設立したという。

この宝興公司是、のちのゴム株投機事件で倒産する。夏瑞芳がゴム株に投資していて大損をこうむり、精神的な打撃を受けたという例の有名な話に関係する。注釈者（汪家熔だろう）は、一部の人が、ゴム株投機に失敗したため商務印書館は苦境に陥り、宝興路の不動産を売却したなどというのは根拠がない、と書く。その証拠に、1部も欠けていない商務印書館の資産負債表を見れば、不動産の細目に宝興里の項目などないからだ、と。

貴重な説明である。だが、この注釈を見て、私は少し失望した。説明よりも証拠の資産負債表を1部残らず本書に収録しておいた方がもっと説得力がある、と思うからだ。

収録すべき資産負債表がない。初期商務印書館の財政状態を追跡する可能性を

これで失ってしまった。

12 理事会

開催日：光緒三十四年三月七日（1908.4.7）

1907年度の出資者にたいする配当（官利）は、8%とする。純益は20株の配当とし、12%で合計年20%とする。以後、年配当は8%とする。

13 定期株主会

開催日：光緒三十四年四月六日（1908.5.5）

1907年の精算表が提示された。

収益は、150万元。莊兪が示した169万7,564元と異なる。利益は、20万4,700元。前年が約29万8,000元の利益だったから前年比9万3,300元の減益である。洋紙、原材料の販売で利益がでなかったこと、不景気で販売不振などをその理由にあげる。

株主会に出席したのは39名、5,078株であった。出席者の株数であって総株数ではなからう。票決により、総発行所の日曜休業を改めて日曜日も休まないことになった。ただし、その他の部門は日曜休業のまま。これは、創業者がキリスト教徒であったことが関係する。日曜も仕事をするようになったのは、社内に占めるキリスト教徒の割合が低下したからだとの注がついている。

14 議定

議定日：宣統元年正月初二日（1909.1.23）

預金方法を改めるとある。そのほか財政についての項目はない。

15 年次株主総会

開催日：宣統元年閏二月二十五日（1909.4.15）

1908年度の収益は、本店が約76万4,000元、支店が76万5,000元で合計153万元。本店の支出は約31万4,900元。分館を含んで総利益は、24万0,135元。収益は、前年比2万元の減少である。

以上のような説明がある。

示された数字を検討する。本館と分館にわけ、それぞれの売り上げを合計すると以下のようなになる。

	本館	分館	
書籍	36万4,600元	54万2,000元	
洋紙	11万7,600元	22万3,000元	
機器、印刷ほか	27万7,000元	上に含む	
文具	5,000元	上に含む	
合計	76万4,200元	76万5,000元	合計152万9,200元

総収益は、152万9,200元となる。153万元と上にあるのは概数だ。前年比2万元の減少と説明している。だが、1907年度の収益は約150万元だと会計報告していた（13定期株主会参照）。ならば、前年比約3万元の増収ではないか。明らかに間違っている。ズサンな報告だとわかる。

16 年次株主総会

開催日：宣統二年三月十八日（1910.4.27）

1909年度の売り上げを同じように一覧表にする。

	本館	分館	
書籍	34万6,111元	67万3,849元	
洋紙	43万7,113元	24万0,489元	
機器、印刷ほか	上に含む	上に含む	
文具	上に含む	上に含む	
合計	78万3,224元	91万4,338元	合計169万7,562元

本館と分館の支出が49万6,452元で利益は26万元である。

17 年次株主総会

開催日：宣統三年三月二十四日（1911.4.22）

報告書のなかの数字だけを抜き出す。

本館の収入は、79万7,800元。分館は、93万4,314元。収入の合計は、173万2,114元となる。

前年比の増加数をこまごまとあげているのは、あとで大きな欠損を説明する時の平衡を取るためだろう。

だいいち1910年度の利益はいくらになるのか、ここでは明らかにしていないのだ。

分館のなかで奉天の収益が第一であるとか、棋盤街の総発行所を改装建築するのに着手するとかの報告がある。

それらが終わったあとで、欠損の報告を張元済が行なった。錢莊が倒産して商務印書館は、総額6万4,750両の損失をこうむった。その内訳は、正元荘5万5,600両、謙余荘8,000両、兆康荘1,150両である。

張元済の説明では、預金していた錢莊が倒産したのだから損失をこうむったのは不可抗力であるということになる。

これより以前の1910年7月22日に商務印書館で特別会議が開催された。鄭孝胥が知らされた事実は、驚くべきものだった。錢莊が倒産して14万元を失ったが、それを夏瑞芳が取り扱っていたというのだ。夏瑞芳がゴム株投機に手を出して失敗した結果である。

特別会議から1年近く経過している。夏瑞芳が関係して発生した損失の14万元というのは、よく調べてみると上の総額6万4,750両ということに落ち着いたのだろうか。どこかあいまいだ。

夏瑞芳の損失14万元は、商務印書館の会計からワンマン社長が勝手に引き出してゴム株に投資したものだ、と私は理解している。張元済が問題解決のために原亮三郎、山本条太郎あてに書いた手紙を見てもそうとしか考えられない。

張元済の年次株主総会での報告は、事実を隠蔽して、つまり夏瑞芳の責任問題にならないように配慮したものだとは推測できる。表沙汰にしくなかつた部類の事柄である。だから、外部の人間にそのカラクリの詳細が理解できないのだろう。謎として残る。

18 定期株主会

開催日：1912年6月8日

中華民国になってからの定期株主会開催である。辛亥革命によって地方の収入が減少している。

1911年度の収入はつぎのとおり。

本館は、85万7,351元。分館は、81万7,152元。合計は、167万4,503元である。前年比4万8,203元の減少だと書く。正しくない。単純に減算すればいいだけのことで、減少額は5万7,611元である。簡単な間違いは、原文がそうなのか、それとも筆写した時の誤記なのかわからない。

地方の収入が減少している原因は、辛亥革命である。上海の本館が売り上げを伸ばしているのは、革命運動によって印刷の需要があったという説明である。

利益は、13万6,104元だ。1910年に比較して15万数千元の減少である。半分以下の利益減におちいった。清朝から中華民国への大転換だからそれくらいの影響はあるだろう。

昨年の利益については記載がなかった。この「15万数千元」をもとにして類推しよう。といっても「数千元」では計算できない。「5,000元」前後だと勝手に読み替える。1910年の利益は、約29万2,000元となる。

19 定期株主会

開催日：1913年4月19日

1912年度の利益は、25万4,951元だと冒頭に書いてある。収益は、本館が95万3,753元、分館が86万5,325元。合計で181万9,078元となる。

昨年の約2倍近い利益になったとはいえ、辛亥革命前の1910年水準にはまだ回復していない。報告書では、各地の分館の財政状態に触れ、印刷機器の拡充、編訳所、倉庫の増築などいう。

20 臨時株主会

開催日：1914年1月31日

金港堂の株を回収したことを報告する。有名な文書で、日本でまず発表された。「商務印書館特別株主大会理事会報告（原文：民国三年一月三十一日非常股東大会董事會報告）」（『清末小説から』第30号1993.7.1）である。これは、汪家燊から送られてきた中国語ワープロの文書をそのまま複写したものだ。汪家燊は、「主権在我的合資 1903-1913年商務印書館的中日合資」を執筆し、全文を引用している。さらに、樽本「辛亥革命時期的商務印書館和金港堂之合資経営」（『大阪経大論集』第53巻第5号（通巻第271号）2003.1.15）、樽本「辛亥革命前後における商務印書館と金港堂の合併」（孫文研究会編『辛亥革命の多元構造』汲古書院2003.12.25）、樽本『初期商務印書館研究（増補版）』にも附録として収める。そうして、本史料に見えるというくらい重要文献だ。

日本人の所有する3,781株を、1株146.5元で買い取ることにした。雑費に8万元を準備する（準備しただけで支払われることはなかった）。大筋の報告である。実際に支払った金額については、拙稿「商務印書館と金港堂の合併解約書」（本書所収）を見てほしい（原文は複写でかかげておいた。また、本史料には「商務印書館清退日股合同」という題で収録されている。39-42頁）。

1月31日の時点では、1913年度の財政状態は把握されていない。ただ、営業総額は予定として約280万元、利益は1912年度の約2倍になるだろうと報告しているだけだ。

商務印書館の内部文書で明らかになった利益と収益を一覧表にする。参考のため荘兪が示した営業総額も掲げる。

利益収益一覧

	利益	収益	荘兪
1903年	1万1,480.20元	29万元、30万元	30万元
1904年	5万7,890.92元	43万元*4	44万1,230元
1905年	約15万2,000元	87万元	86万6,728元
1906年	約29万8,000元	約143万元	137万7,444元
1907年	20万4,700元	150万元	169万7,564元
1908年	24万0,135元	152万9,200元	151万9,817元

初期商務印書館の財政状態

1909年	26万元	169万7,562元	154万8,099元
1910年	約29万2,000元*5	173万2,114元	173万1,695元
1911年	13万6,104元	167万4,503元	167万6,052元
1912年	25万4,951元	181万9,078元	181万9,078元
1913年	予定2倍	予定280万元	278万9,073元

理事会報告に見ることのできる収益は、一部にアイマイさを残す。たとえば、1903年などは29万元といたり30万元といたりする。端数がついているのを切り上げ、切り捨てたのかもしれない。

問題なのは、荘兪が示した数字である。商務印書館の長老幹部だから正確な数字を把握しているだろう、という前提のもとに研究者は引用してきた。だが、上に見るように実際の数字とは一致しないのである。かろうじて1912年だけが端数まで一致しているだけだ。

初期商務印書館の財政状態については、一部分が明らかになったにすぎない。今後、完全なかたちで精算表が公表されることがあれば、その時はじめて全貌を理解することができるであろう。

【注】

- 1) 汪家熔「主権在私の合資 1903-1913年商務印書館の中日合資」『出版史料』1993年第2期(総第32期)1993.7 / 2度再録されている。汪家熔『商務印書館史及其他 汪家熔出版史研究文集』北京・中国書籍出版社1998.10。および宋原放主編、汪家熔輯注『中国出版史料・近代部分』第3巻 武漢・湖北教育出版社2004.10
- 2) 汪家熔「商務印書館の経営管理 解放前史料輯録」『江蘇出版史志』1994年第1期初出未見。『商務印書館史及其他 汪家熔出版史研究文集』所収。汪は、利潤計算式は単で、「利潤 = 期末総資産 - 資本金」(79頁)だと書いている。勘違いだろう。「利潤 = 期末総資産 - (資本金 + 負債額)」が正しい。
- 3) 『編輯学刊』1994年第5期(総第37期) 1994.10.25。『商務印書館史及其他 汪家熔出版史研究文集』所収
- 4) 私が計算すると17万6,890.90元(総額33万9,761.56)である。
- 5) 記載がない。総額6万4,750両の損失

統計表から商務印書館を見る

『清末小説から』第25、26号（1992.4.1、7.1）に掲載。商務印書館が、1902-50年間に発行した書籍の種類変動を概観する。使用したのは、商務印書館が公表した統計表である。この文章を発表した当時は、図を示して分析したものはなかったように思う。MS-DOS時代のソフトで作図し立体表示した。そのグラフが見にくい、とある読者から言われた。多種類を表示するから、やむをえなかったのだ。今回、作り直して平板なものにした。見やすいものではないが、しかたがない。

数字の羅列の中から立ちあらわれてくるものがあるとすれば、それはなにか。「商務出版分類統計表」を見つめて、1950年までにおける商務印書館の出版傾向を探ることが本稿の目的である。

1 教科書の編集出版

創業後、英語読本を編集出版して大いに売れた。だが、上海・商務印書館は、最初、印刷請負いが中心の小規模印刷業者として出発したのだ。商務印書館にとって転機になったのは、1902年8月22日（光緒二十八年七月十九日）の失火と翌年の日本金港堂との合併である。焼け出された商務印書館は、北福建路に印刷所と編訳所を、河南路棋盤街に発行所を建設した。1903年11月19日（光緒二十九年十月初一日）、金港堂との合併が成立すると、日本側から長尾雨山、小谷重らが国文教科書編集に参加することになった。この時から商務印書館は、出版業者へと本格

的に変貌する。

清代には最新教科書、民国成立時には共和国教科書、国語運動が興った時期には新法教科書、学制改革時には新学制教科書、国民政府成立時には新時代教科書などなど、その時代に応じた教科書を発行し続けた。これに対して商務印書館は、強い自負をしめしている*¹。

教科書の編集出版は、商務印書館にとっては重要な事業のひとつである点を見逃してはならない。

このことを押さえたうえで、商務印書館は、出版事業において教科書以外のどの分野に力点を置いていたのか。

使用する統計表について説明する前に、この表が掲載された書物を紹介しておく。

2 『最近三十五年之中国教育』

莊俞、賀聖胤編『最近三十五年之中国教育』(上海・商務印書館1931.9)という大型の書物がある。なぜ「最近三十五年」かといえば、副題にうたう「商務印書館創立三十五年紀念刊」を見れば理解できるだろう。商務印書館創立35周年を記念して、商務自身ばかりでなく中国の教育全般について回顧しようというものだ。

王雲五の「導言」が7頁、「巻上」には、35年来の教育に関する9本の論文を掲げて274頁、「巻下」に6本の論文で278頁、商務の記録として莊俞「三十五年来之商務印書館」が62頁、印刷見本が合計28種類、全部で649頁の大冊である(目次を巻末に掲げておく)。

本稿で利用する統計表は、李沢彰「三十五年来中国之出版業」の巻末に付せられている。

3 李沢彰「三十五年来中国之出版業」

李沢彰(伯嘉)は、当時、商務印書館の出版部部长であった*²。

彼は、「一国の文化の盛衰は、出版図書の多寡に正比例する」と書きはじめる。

商務印書館が創業した1897年より数えて35年間で3つの時期に区分する。

その1、革新運動時期、その2、新文化運動時期、その3、図書館運動時期、である。それぞれについて、簡単に紹介しよう。

その1、革新運動時期。1894年、中日間に戦争がおり、中国が日本に負けて革新運動が発生した。初期には、キリスト教会、政府刊行局の活動が活発であったが、1904年前後よりその比重は、民営の出版業に移っている。中心は、商務印書館である。

その2、新文化運動時期。中華民国の成立によって人々ははじめて言論著作刊行の自由を手に入れた。数年後発生した新文化運動とは、旧制度の批判および文言から口語へという文体の変更である。新文化を伝える刊行物は、雑誌のほかは叢書であった。それと急増したのは、東洋西洋の文学書の翻訳だ。

その3、図書館運動時期。1925年より始まる。文化の保存と建設を主旨とするこの運動は、具体的には広く図書館を建設することを目的としていた。容器(=図書館)が増えれば内容(=書物)が必要になる。商務印書館の万有文庫、百衲本二十四史、中華書局の殿版二十四史などが図書館のために出版されたという。

李沢彰が区分したそれぞれの時期に、商務印書館の出版はいかなる動きを示しているのか、「商務出版分類統計表」を見てみよう。

4 「商務出版分類統計表」

「商務出版分類統計表」【表1】について説明する。

横に年、縦に分類項目を置く。年は「光緒二十八年(1902)」より「民国十九年(1930)」までの29年間、分類は、「総類」より「史地」まで10分類である。

なぜ商務印書館創立の1897年ではなくて1902年からの数字しか表示しないのか。前述したように、創業後の数年は印刷請負いが仕事の中心だった。出版業に変貌するのは、1902年以後だからなのだろう。それよりも、1902年8月22日の失火によってそれまでの記録が焼失したのが大きな原因だった。ゆえに、1902年分の統計には、数字が空白になっている部分が多い。該当種類の出版がない、というばあいと区別がつきにくい。

10の分類は、図書館でよく見かけるような気がするが、これについても、一応、解説しておく。

5 王雲五「中外図書統一分類法」

商務印書館の編訳所には附設の書庫があり、涵芬楼と名付けられていた。1921年、商務印書館編訳所に入り、所長となった王雲五は、涵芬楼を一般公開することを建議する。雲五の提案を受け入れた商務印書館は、宝山路の印刷工場むかいに建物を新築し東方図書館と改名した（1926年）。図書の公開閲覧と検査の効率をあげるため、王雲五により考案されたのが「中外図書統一分類法」だったという。これは、アメリカのデューイ（Melvil Dewey, 1851-1931）が創始した「十進分類法」をもとに、独自の記号「+、++、±」を加味したものである*3。

『商務印書館図書目録（1897-1949）』（北京・商務印書館1981）を見ると記号「+、++、±」がそのままに使用されていることがわかる。王雲五「中外図書統一分類法」は、現在においても有効であるらしい。

それぞれの分類の中身がどのようなものが、主な項目だけでもあげて理解の助けとする。

000総類：目録学、図書館学、百科全書、各科論文叢輯、新聞学を収録する。万有文庫、四部叢刊などの叢書は、この総類に分類される。

100哲学：哲学一般、中国哲学、形而上学に心理学、倫理学なども含む。

200宗教：宗教原理、宗教史、仏教に各種宗教、神話などを収める。

300社会科学：三民主義、社会学、統計学、政治学、中国外交、経済学、法律、国際法、行政、軍事、教育、民俗学など包括する範囲は広い。

400語文学：「語文学」とは、「言語学」の意味だ。比較言語学、英国言語学、日本言語学、ドイツ言語学、フランス言語学など。教科書、辞典、会話、読本なども含まれる。

500自然科学：算術、代数、微積分、天文学、物理学、化学、生物学、人類学などがある。

600応用技術：中国医学、医学、解剖学、生理学、外科、婦人科、獣医学ばかりでなく、軍事、橋梁、鉄路、農業、牧畜、園芸、印刷、著作権、会計、建築など。これも項目だけ見ていると幅広い。

700芸術：中国芸術、彫刻、画学、油絵、音楽、娯楽など。

800文学：文学思潮、修辞学、小説研究、戯劇研究、中国文学、中国詩文総集、各国文学、各国小説それぞれ。

900史地：歴史学、地理、中国各省区地理、中国伝記、世界伝記、西洋史、中国歴史など。

ちなみに同じくデューイ十進分類法にならった「日本十進分類法」では、「000総記」「100哲学」「200歴史」「300社会科学」「400自然科学」「500技術、工学」「600産業」「700芸術」「800語学」「900文学」となっている。王雲五方式は、日本十進分類法と較べると、順序が異なっているくらいで、ほぼ、項目はおなじである。ただし、王雲五方式の「200宗教」のかわりに日本十進分類法の「600産業」があるところが違う。1項目だけの相違であるが、王雲五方式は、分類そのものが、やや、文科系にかたよっているということもできる。

以上でだいたいの把握ができたことにして、「商務出版分類統計表」の説明にもどる。

こまかい数字ばかりで目をこらすとチカチカする。目を酷使することによって、「商務出版分類統計表」では、種類数に3カ所、冊数に同じく3カ所、合計6カ所に数字の間違ひがあることがわかった。

種類数では、1924年の合計440を540に誤る。社会科学の合計2,290を2,390に誤る。ゆえに種類の総合計7,939を8,039に誤る。

冊数でも、1917年の合計651を641に誤る。総類の合計2,777を2,767に誤る。必然的に総合計18,718を18,708に誤る。(以上の誤りは、表1の該当箇所に手書きで記入しておいた)

なお、この「商務出版分類統計表」の数字は、王雲五『商務印書館与新教育年譜』(台湾商務印書館1973.3)の該当年次に分散して採用されている。また、種類と冊数の合計の数字で民国12年(1923)までのものが該書82-83頁に見える。ただし、

いずれも数字の誤りを踏襲したままだし、さらに誤植が付け加わっているので注意されたい。

それぞれの分類に「種(類)数」と「冊数」のふたつが記入されている。商務印書館の出版業における重点の置きかたをさぐるのに、私は「種類数」の多寡の方が有効と考える。ゆえに以下は、種類数によって話を進める。

6 統計表から商務印書館を見る

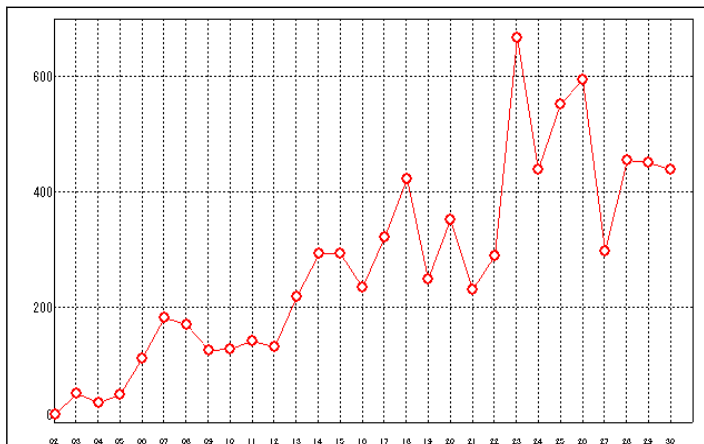
まず全体の流れをながめたいので、次に分野別の動向に話を進める。

全体の流れ

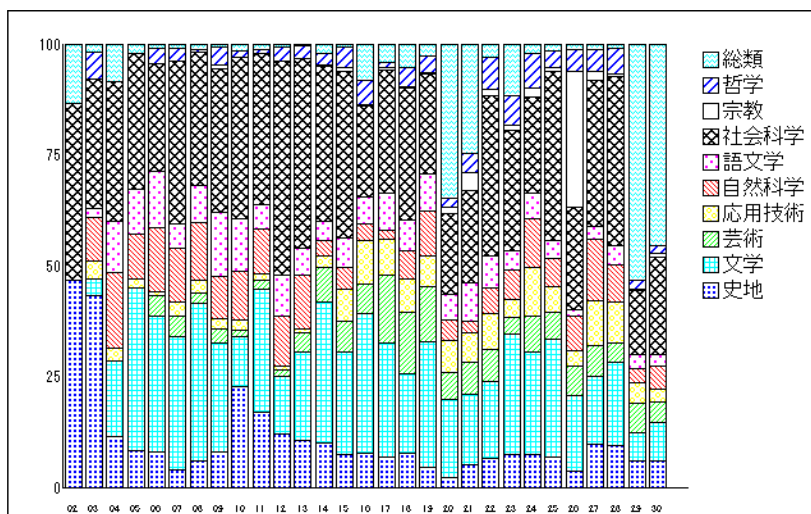
商務印書館の発行種類の推移【図1】から見てみよう。全体の流れがあらわれているはずだ。

波はあるものの、1900年代より10年代、20年代を通じて、発行種類は全体として増加傾向にあると見てよい。

1903年より1914年までの金港堂との合併時期は、順調に業績をあげているといえるだろう。1911年の辛亥革命前後に見られる少しの停滞は、政治的、社会的にあわたしい時期だっただけにやむをえない現象だ。この合併時期は、李沢彰のいう革新運動時期とほぼ重なる。



【図1】商務印書館の発行種類の推移



【図2】分野別の構成比動向

商務印書館の業績が着実にのびていった背景に金港堂があるとすれば、他の書店の怨嗟の的となるのは必定だ。商務印書館が金港堂との合弁を解消したのは、その非難をかわすのが原因のひとつだった。清朝から中華民国への転換による民族意識の高揚が背景にあったのは、いうまでもない。

合弁解消後も発行種類は、それほど大きく落ち込むことはなかった。この事実は、商務印書館が、独りで歩むことのできる実力をすでに身につけていたことを物語っている。新文化運動時期に当る。

李沢彰は、図書館運動時期を1925年以降のこととする。図書館には書物が必要だということになる。だが、視点をかえて20年代の流れとしてとらえるならば、書物の収め場所として図書館の設置が推進された、と逆の見方も成り立つのではないか。1925年の直前に多種の書籍が発行されている事実に注目してほしい。

分野別の動向

1902年から1930年まで、各年を100%としてそれぞれの分類がいくらの割合を占めるのかという構成比グラフを見る【図2】。

総類が1920、21年と1929、30年に突出しているのが目を引く。上の図書館運動時期と重ねあわせると、叢書などの大規模な出版が求められていたと考えることができよう。

統計表から商務印書館を見る

類別	1902-1910		1911-1920		1921-1930		1931-1940		1941-1950		総計	
	種数	冊数	種数	冊数	種数	冊数	種数	冊数	種数	冊数	種数	冊数
總類	15	24	197	845	619	1,908	333	607	33	53	1,197	3,437
哲學	20	32	84	113	216	321	287	306	121	138	728	910
宗教	1	1	13	17	231	860	50	64	19	22	314	964
社會科學	279	825	801	1,949	1,210	2,290	1,611	2,324	634	751	4,535	8,139
語文學	81	152	177	369	181	270	163	305	54	72	656	1,168
自然科學	102	115	164	177	313	350	579	637	141	163	1,299	1,442
應用技術	22	50	158	175	272	291	679	741	220	236	1,351	1,493
藝術	23	51	232	399	263	571	343	390	54	56	915	1,467
文學	220	639	626	1,755	815	2,269	656	892	259	323	2,576	5,878
史地	102	153	205	1,288	297	459	676	955	265	305	1,545	3,160
合計	865	2,042	2,657	7,087	4,417	9,589	5,377	7,221	1,800	2,119	15,116	28,058

【表2】商務印書館歴
年出版物分類総計

全体の流れとしては、社会科学および文学の比率が多くを占めているのがわかる。

革新運動時期には、確かに自然科学、応用技術関係の書籍がある程度の比率で発行されている。しかし、1931年以降、そのままこの2分野の書籍が継続して増加するかどうかは、この時点ではっきりしない。

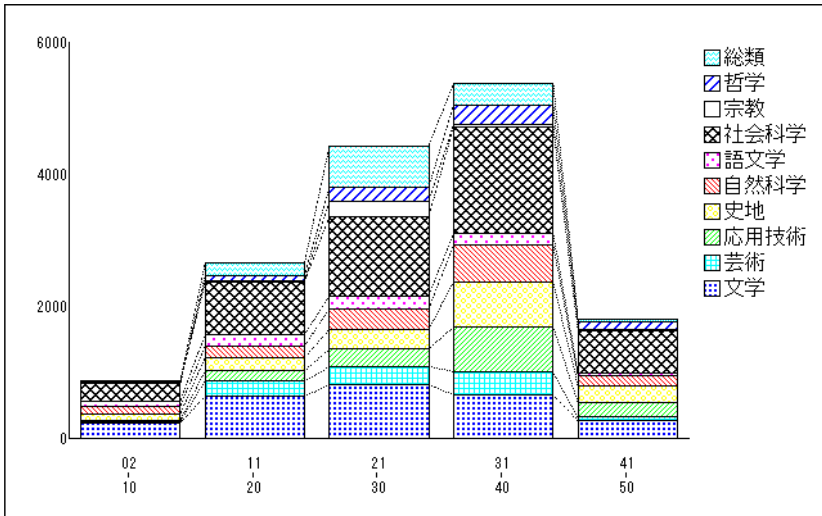
この図2を見る限り、商務印書館は、1930年までは社会科学と文学の2分野に主力をそそぎつつ事業を展開していたととらえることができる。また、総類のある時期における突出と史地の漸減が対照的であることにも注目しておこう。

7 その後

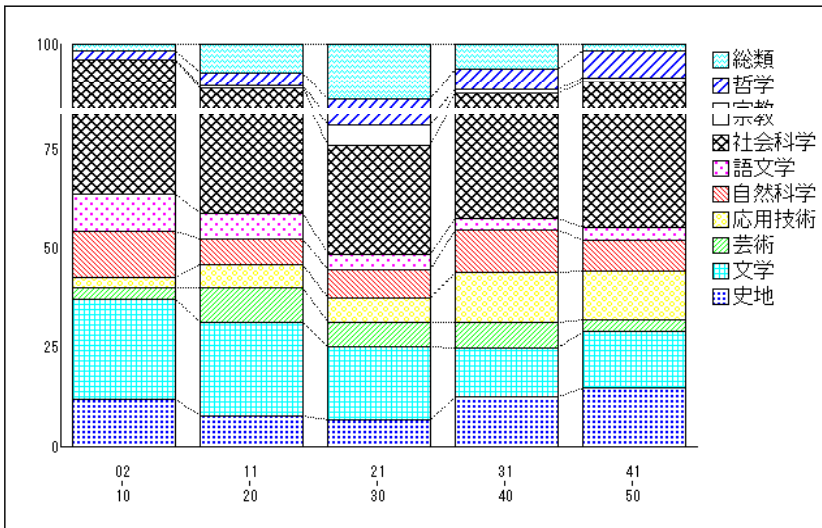
1931年以降の商務印書館の出版動向を補的に見ておきたい。ただし、1930年以前の統計である「商務出版分類統計表」のような詳細な数字が発表されているのかどうか私は知らない。かろうじて、『商務五十年』からとったという「商務印書館歴年出版物分類総計」(前出『商務印書館図書目録(1897-1949)』所収。【表2】)が手元にあるだけだ。これには、1902年から1950年までほぼ10年毎に区切って種類と冊数の数字が掲げられている。この1902-1930年分は、「商務出版分類統計表」の数字とまったく同一である。

これをもとに年代別発行種類の動向をグラフにした【図3】。

統計表から商務印書館を見る



【図3】 商務印書館年代別発行種類の推移



【図4】 年代別分野別の構成比動向

1902年以来、順調に種類を増加させていたが、1940年代は大きな落ち込みを示している。ついでにいうと、全体として種類数の多寡は、冊数の多少と基本的に連動していることを、ねんのため言い添えておく。

各年代の分野別構成比動向を示す【図4】。

商務印書館にとって社会科学関係の書籍が大きな柱となっていることは、この

図4から明らかだ。30、40年代は、文学の割合が、やや、減少しているが、実質は大きな柱であるといってもいいだろう。1930年まで、増加の様子を見せていた総類は、反対に減少している。それと対照的なのが史地の分野だ。

応用技術の増加を考慮にいれると、30、40年代では各分野の平均化の傾向を認めることができる。

つまり、1902年から1950年までの全体の動きをまとめて言えば、社会科学、文学の2本柱から出発し、その2本柱を堅持しつつも他分野の種類を増やしながら、全体の平衡をはかっていた、ということになる。

以上が、統計表の中から浮かび上がってきた商務印書館の姿である。

【注】

- 1) 「商務印書館歴年出版小学教科書概況」1935.12。『商務印書館図書目録(1897-1949)』北京・商務印書館1981。付録
- 2) 王雲五『商務印書館与新教育年譜』台湾商務印書館1973.3。82頁
- 3) 王雲五『岫廬八十自述』台湾商務印書館1967.7.1 / 9.24四版。85-91頁。王雲五『商務印書館与新教育年譜』台湾商務印書館1973.3。155-173頁

【参考】

莊俞、賀聖焄編『最近三十五年之中国教育』(上海・商務印書館1931.9)

目次

編者敬啓

王雲五 導言(轉載 王雲五『商務印書館与新教育年譜』台湾商務印書館1973.3所収。
301-305頁)

卷上

吳研因、翁之達 三十五年来中国之小学教育

廖世承 三十五年来中国之中学教育

何炳松 三十五年来中国之大学教育

黄炎培 三十五年来中国之職業教育

高踐四 三十五年来中国之民衆教育

俞慶棠 三十五年来中国之女子教育

統計表から商務印書館を見る

汪亜塵 三十五年来中国之芸術教育

吳蘊瑞 三十五年来中国之体育

朱経農 三十五年来中国之教育行政

卷下

蔡元培 三十五年来中国之新文化

吳敬恒 三十五年来中国之音符運動

黎錦熙 三十五年来中国之国語運動

賀聖鼐 三十五年来中国之印刷術（轉載 張静廬輯註『中国近代出版史料初編』上海・上
雑出版社1953.10所収。257-285頁）

頼彦于 三十五年来欧美之印刷術

李沢彰 三十五年来中国之出版業

商務印書館創立三十五年紀念刊

莊 俞 三十五年来之商務印書館（轉載 王雲五『商務印書館与新教育年譜』台湾商務印
書館1973.3所収。305-329頁。ただし、文章と表の一部を削除する）

凸版印刷 / 平板印刷 / 凹版印刷（注：印刷見本）

商務印書館創業者の姻戚関係図（補遺）

2008.7.27清末小説研究会ウェブサイトに掲載後『清末小説から』第92号（2009.1.1）へ

浩然「商務籌創人的「聖徒相通」」（香港『基督教週報』第2263期2008.1.6 電字版）
につぎの図が掲載されている。

126

中国出版史料（近代部分）第三卷



- 符号：最早的投资者
- △符号：终身服务于商务印书馆
- 符号：在商务印书馆工作过
- ()：商务印书馆职工对他们的称呼

此图表为日本大阪经济大学樽本照雄教授所绘制。

たしかに私が作成した。樽本『初期商務印書館研究（増補版）』（2004、21頁）にも収録してある。

下部の説明文が中国語であるところから、わかる。その出所は、汪家熔「商務印書館創業諸君」（宋原放主編、汪家熔輯注『中国出版史料・近代部分』第3巻 武漢・湖北教育出版社2004.10、126頁）だ。

これには、「商務印書館創業者の姻戚関係図」と表題がつけられている。

私が作成したのは間違いはない。だが、汪家熔氏の論文にもとづいている。一応図にしてみて、説明と一致しない部分が出た。汪氏に問い合わせ、訂正のうえで上のかたちになったのだ。

そういういきさつがあったから『中国出版史料・近代部分』に収録されたのだろう。

私が浩然論文に注目するのは、自分が書いた図が紹介されているからではない。郭秉文についての新しい情報が書き加えられているからだ。以下にまとめる。

郭秉文は江蘇江浦の人。上海に生まれる。父親は、医者で長老会教会の長老だった。

郭は、1896年清新書院を卒業し、そのままとどまって1年間教えたあと、1908年にアメリカに留学し、1914年コロンビア大学博士号を取得。のち帰国し商務印書館の総編集となり、英語辞典翻訳に協力した。1921年東南大学（のちの国立中央大学）が成立すると校長に任命され、1925年、商務印書館の総編集に転任となる。鮑哲才の三女を娶っていたが彼女ははやくに亡くなり、夏瑞芳の三女路徳と結婚した。

郭の経歴については、私は知らなかった。浩然は教会関係者らしく、さすがに人事については詳しい。

おなじ文章に、謝洪賚の肖像が掲げられていることをつけ加える。

最近の商務印書館研究について

日中合弁の側面から

『商務印書館研究文献目録』(清末小説研究会2010.6.1 清末小説研究資料叢書13)収録。
「最近の商務印書館研究に見る日中合弁の事実」(2001)の続編。

商務印書館と日本の金港堂は、20世紀のはじめに合弁会社であった。合弁は、辛亥革命をはさんで実質約10年間にわたって継続されている。

商務印書館は、最初この事実を隠そうとした。少なくとも、社会にむけて公表する考えはなかった。せいぜいのところ日本金港堂の代理店となったと広告を出したくらいだ。一方の金港堂は、明治時代は教科書の編集出版であれほど隆盛を誇った。また、文芸界でも知らぬ人はいない有名出版社だった。だが、金港堂はみずからの社史を残さない。ゆえに、商務印書館との合弁については、説明はないのと同じになってしまう。長いあいだ、日本と中国の出版社が合弁していたということを知る人は、それほど多くはなかった。

しかし、関係者にとって話は別だ。

辛亥革命は、満洲族による支配を終了させ、中華民国が成立する。それと同時に商務印書館をとびだした陸費逵らは、中華書局を設立した。中華書局という名前からして時代に即応する姿勢を示している。

彼らは、独自の教科書を編集発行した。それまで教科書といえば、商務印書館の主力刊行物だ。中華書局にとって商務印書館は、営業上の当面の競争相手、敵となる。敵が古巣の商務印書館という、やや複雑な関係である。勤務していたの

だから商務印書館の内部事情には詳しい陸費逵らだった。商務印書館の弱点をよく承知していたのも当然だ。中華書局は、商務印書館を攻撃する新聞広告を連発していく。その際に暴露したのが、商務印書館が日本企業との合併会社であるという事実だった。それより以前に中国図書会社が、商務印書館に日本資本が入っていることを攻撃したことがある。商務印書館にとっては、清末期に遭遇した危機のひとつだった。中華書局の商務攻撃は、その蒸し返しだ。商務印書館は、異民族（ここは日本人）と共同で経営している会社にほかならない。外国人のいる出版社が編集発行する古い教科書を新しい中華民国の子どもたちに使用させてもいいのか。これが攻撃理由である。これを商務と中華の「教科書戦争」という。それ以来、政治状況の変化にともない陰に陽に商務印書館が金港堂との合併会社であった事実がくり返し問題にされることとなった。出版史研究においても例外ではない。

商務印書館は、金港堂との合併時期に印刷編集刊行に関する技術を吸収していた。そのころ、日本金港堂の方が関連する専門知識をより多くもっていた。それゆえ、商務印書館は自社刊行物の内容を質的に大きく向上させることができた。営業上の利益を上げると同時にそれは一方で不利益をもたらす。外国人との合併会社であるのを理由にして営業の場からたびたび排除されることがおこる。当時の社会的反発に直面することがかさなった。商務印書館としては、結局のところ合併を解消せざるをえなくなる。両社は交渉のすえ合意に至り、文書に署名をしたのが1914年1月のことだった。

日中合併企業が、中国においていかに存在しにくい時代だったのか、その一端を理解することができるだろう。

合併の当事者として片方の商務印書館しか現在は存続していない。しかも、日中間に複雑な状況が生じたこともあり、商務印書館は合併の事情を正確に説明する努力をしなかった。それどころか、商務印書館は、金港堂からむりやり合併を迫られたかのように装うことがあった。後にはその逆で、主権があくまでも商務印書館側にあった合併だ、と主張する当時の指導者がでてくる（主権説。後述）。その時の社会情勢にあわせた恣意的な説明がなされたのである。当事者としては、当然の態度かもかもしれない。だが、それらの発言を鵠呑みにするだけでは、日

中合併の実態を理解することは困難だろう。

商務印書館と金港堂の合併をどう評価するのか。正方向かあるいは負の方向にか。そのどちらであるにせよ、まず基本事実を押さえることが研究のはじまりである。どういった人物が、どういう状況で合併会社を作るに至ったのか。以前は、詳細がはなはだ曖昧なままだった。事実を知らずに結論だけ、評価だけが出てくるはずもなかろう。

私は、商務印書館と金港堂の合併関係を重視する。その状況をどれだけ把握しているかが研究論文の水準に深く関係している、と考えるからにほかならない。事実の積み重ねのうえに結論がでてくる。結論をあらかじめ設定し、それにあわせて事実を取捨選択することは、私の考える研究ではない。

本稿では、日中合併の箇所を焦点を当てながら、いくつかの専門書を取りあげる。

拙著『初期商務印書館研究（増補版）』（清末小説研究会2004.5.1。注：2016年に電字版を公開した）を出してから数年が経過した。それに前後して商務印書館を研究主題とする漢語の単行本複数も目に入っている。求めて得られない書籍もあるが、これはしかたがない*1。

あるいは、商務印書館に関する専門書であっても日中合併の時期を研究範囲に含まないものは基本的に触れない*2。

最近の専門書は、商務印書館と金港堂の日中合併をどのように説明しているだろうか。これを明らかにすることが本稿の目的だ。

日本と中国にまたがる研究課題である。2カ国の文献を手元に置かなければ実態を正確に把握することはむづかしい。その分、目に見えて研究水準が露わになる。

本稿は、以前に書いた論文の延長線上にある。すなわち、樽本「最近の商務印書館研究に見る日中合併の事実」（『大阪経済大学教養部紀要』第19号2001.12.31。『初期商務印書館研究（増補版）』所収）だ。そこで明らかにした論文評価の基準を、ここにふたたび提示する。記述の前後を入れ替え重複する箇所があることをお断わりしておく。

まず、商務印書館と金港堂が合併にいたった経緯、また合併を解消するまでの大略を説明する。くりかえすことになるが、ここに鍵語が含まれるからご了承いただきたい。

1 日中合弁の大略

商務印書館は、キリスト教徒の若者たちが中心となり設立した。上海で小規模印刷工場として出発したのが最初である。運転資金の調達に苦労しながら、印刷業務を基礎において教科書ほかの出版分野にむけて事業を拡大しつつあった。

日本で教科書の編集刊行販売に成功をおさめた金港堂社主の原亮三郎は、以前から中国進出の考えをあたためていた。娘婿にむかえた三井物産の山本条太郎は、のちに上海支店長になる。山本は中国の紡織に深く関係して事業を展開していた。原は、山本に上海の出版状況について調査を依頼しただろう。

中国側の紡織関係者に印錫璋（有模）がいる。仕事柄、山本条太郎と懇意であった。築地活版製造所が上海に設置した印刷会社が修文書館である。上海での営業を停止したとき、商務印書館は活字など印刷機器を一括購入した。それを斡旋したのは、印錫璋である。商務印書館についていえば、その購入資金の出処も問題のひとつだ。印錫璋は、張元済とともに商務印書館の第1回増資に応じた人物でもある。

増資について誤解があるからひとこと指摘しておく。

商務印書館が1901年に増資したのは、経営が順調である証拠だと考える研究者がいる。事実はそうではない。創立者たちの投資分（印刷機器の購入に使ってしまった）とその後の損失分（翻訳原稿^{*3}を含む）を印錫璋と張元済が投資というかたちで肩代わりしたにすぎないのだ。

印錫璋が商務印書館社長の夏瑞芳と親しいのはいうまでもない。山本条太郎と夏瑞芳を引き合わせたのが印錫璋であるのは自然なことだ。商務印書館と金港堂の合弁は、人と人の結びつきによって成立した。

巨大な資本を持つ金港堂が、経営規模の小さい商務印書館を支援するかたちで合弁したのが実状である。商務印書館は夏瑞芳が単独で合弁を決断した。金港堂側が負担する10万元は、原亮三郎個人の投資である。商務印書館側の出資も金額こそ同じだが、細目は異なる。保有する資産を5万元に査定し、残りの5万元を関係者複数から募って集めざるをえない。そのため全額がそろうのには時間がか

かった。

合併の条件は、双方ともに同額の資本を提出し、人事についても基本的に平等である。どちらか一方が有利な条件を持つ、あるいは特権を有するというものではない(後述)。正式に合併契約を締結する前に、金港堂から商務印書館へ新しい印刷工場を建設するための資金が提供されたと考えられる。私は、1901年ころであろうと推測している。

両社の合併は、深く静かに順風満帆に進むかと思われた。ところが、1902年に日本と中国でそれぞれが別個の災難に見舞われる。

日本では教科書事件が発生し、金港堂からも逮捕者が出た。学校教科書採択にまつわる賄賂醜聞事件だ。

商務印書館は、1902年の失火により印刷工場兼編集の家屋を失った。経営的にも大打撃である。ところが、その直後にレンガ建ての巨大な印刷所が完成した。金港堂から前倒しで資金が提供されていたと考えられる。

1902年に偶然発生したそれぞれの事件のため、正式な合併契約は延期された。1903年11月を待たなくてはならなかった。

教科書事件に巻き込まれた雨山長尾楨太郎、金港堂の社員加藤駒二、小谷重らが上海の商務印書館に派遣された。当面の仕事は新しい国文教科書の編纂である。教科書事件で時期が遅れてしまったが、事前の計画がそのまま実行された。

長尾雨山は、東京高等師範学校教授の地位を捨て商務印書館に勤務する。長尾は一家で上海移住を決意していた。しかし、後に合併が解消されるにともない日本に帰国せざるをえなくなる。彼の上海滞在は11年間であった。

商務印書館は、日中合併時期に日本を含めた諸外国から先進印刷技術を導入しつづけた。のちに出版界で飛躍するだけの基礎を築くことができた原因のひとつだ。しかし、困難がまったくなかったわけではない。商務印書館を襲った大きな災難のひとつにゴム投機事件がある。上海で発生した金融危機のひとつだ。

1910年、夏瑞芳が資金をゴム株に投入し14万元を失った。夏の旧式な金銭感覚が露呈した。自分の財布と会社の会計を区別することができなかつたのである。同時に理事会の管理能力も問われた。会社にと与えた損害は夏瑞芳個人が弁償することになる。張元済は、原亮三郎、山本条太郎に手紙を書いて対処方法を真剣に

相談している。すでに理事ではなくなっていた原、山本は、それでも親身になって相談にのり救済策を提案した*4。

商務印書館にしてみれば内部組織にかかわる重大事件といえる。それまでの夏瑞芳ワンマン経営からいかに脱却していくかが問題になるのだ。

1903年当時は日中双方から2名ずつの理事が出ていた。その後、商務印書館は出資金を増加させ、中国側理事の比率をそれにあわせて増やす。1909年には理事の全員が中国人になった。夏瑞芳のゴム投機失敗は、その後に発生したのだ。中国人ばかりの理事会が夏の暴走を知らなかった、あるいは知っているもそれを阻止できなかった。理事会として機能していなかったという事実が明らかになる。これが組織上の問題である。

中華民国成立後、日本の資本が入っている商務印書館は、合併というその事実が社会的批判を引き起こすことに耐えられなくなった。もうひとつ、編集印刷刊行の専門知識は、金港堂からすでに吸収しつくしたという認識を持つにいたったのだろう。実質約10年にわたる合併を解消することに決定した。福間甲松は、合併解消の交渉をするために金港堂側から送られてきた人物である。この人の名前を出す文章は、相当に資料を調べているということが出来る。

商務印書館は、日本側所有の全株を購入する。商務印書館と金港堂の「合併解約書」は、1919年7月25日付『申報』に広告として掲載されている。1914年の内部文書が約5年後になぜ日の目を見ることになったのか。公表されるにいたる事情とその内容については、榎本「商務印書館と金港堂の合併解約書」（『商務印書館研究論集』所収*5。注：本書所収）をご覧ください。

商務印書館と金港堂の合併は、同額の出資金ではじまった。合併解消までの変化の例として株に注目する。それを解いたとき、商務印書館の持ち株は日本側の約2.17倍になっていた。商務側の方針で自社の持ち株を徐々に増加させていたからだ。約10年間の合併を獲得利益でしめくくる。結局のところ、商務印書館が所有する株で得た配当利息は、日本側の約1.82倍にのぼる巨額なものになった。これには日本側から得た印刷編集出版に関する専門知識の料金は含まれていないのだ。

2 評価の基準「初期商務のリトマス試験紙」

初期商務印書館を説明して金港堂の合併をいわない論文は、それだけで論外である。執筆当時の社会状況から影響を受けているばあいもあるだろう。気の毒ではある。しかし、研究論文、あるいは資料として欠陥を抱えているといわざるをえない。

日中合併期の商務印書館をあつかう文章については、以下の鍵語あるいは項目に言及しているかどうかキメテとなる。鍵語はあっても、その解釈が異なる場合もあろう。ただし、鍵語がなくて、正しい解釈に到達している例を知らない。ひとつの目安になることは確かだ。それを称して「初期商務のリトマス試験紙」という。

初期商務のリトマス試験紙

- | | |
|---------------|-----------------------|
| a . 金港堂 | 1.合併の事実に言及しているか |
| | 2.金港堂の名前を出しているか |
| b . 教科書事件 | 3.この事実を明らかにしているか |
| c . 原亮三郎 | 4.名前を出しているか |
| | 5.金港堂主としているか |
| d . 山本条太郎 | 6.名前を出しているか |
| | 7.合併の仲介者としているか |
| | 8.原と姻戚関係にあることをいっているか |
| e . 長尾禎太郎(雨山) | 9.名前を出しているか |
| f . 加藤駒二 | 10.名前を出しているか |
| g . 小谷重 | 11.名前を出しているか |
| h . 印錫璋 | 12.名前を出しているか |
| | 13.修文書館買収の仲介者としているか |
| | 14.山本と親しく合併の仲介者としているか |
| i . 修文書館 | 15.名前を出しているか |
- (修文印刷局、修文印書館、修文印書局などを含む)

- j . 火災 16.失火したことを書いているか
k . 中国図書公司 17.名前を出しているか
l . ゴム投機 18.名前を出しているか
 19.夏瑞芳が投機に失敗したとしているか
m . 福間甲松 20.名前を出しているか

補足する。

商務印書館からとびだした陸費逵が設立し、民国期のライバルである中華書局を点検表（初期商務のリトマス試験紙）の1項目にはあげなかった。あまりにも有名であるからだ。普通には出てこない鍵語であるからこそ鍵語の意味がある。

教科書事件は、金港堂が商務印書館と正式に合併契約を結ぶ以前に発生した。日本における疑獄事件であり、合併とは直接の関係はない。ところが、教科書事件で蹉跎した金港堂が、中国に活路を求めて商務印書館と合併したという通説がある。いかにも俗耳に入りやすい。私は、この説に賛成しない。すでにのべたことがある。教科書事件と金港堂の上海進出を結びつける論文があれば、それは単なる物語を書いているにすぎない。研究論文とは無関係であることを重ねていっておきたい。

金港堂の名前はあっても社主である原亮三郎の名前が出てこない文章をたまに見受ける。要注意だ。商務印書館と金港堂の合併は、人間関係が重要な意味をもっていることを知らなければならない。

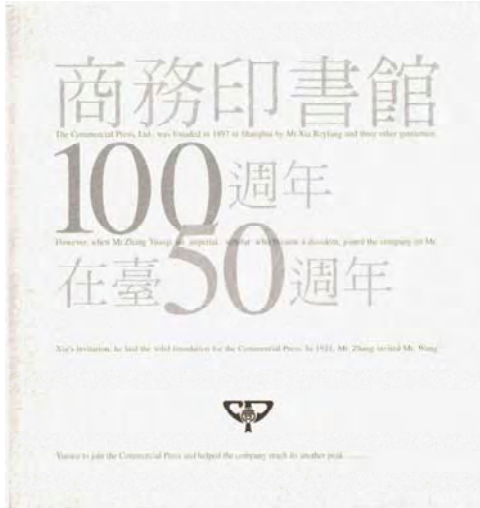
以上、13項目、細目20個である。言及があれば1点とする。合計を100%に換算し、それぞれの論文の文頭に [鍵語言及率：00%] と表示する。

3 いくつかの専門書

では、それぞれの文章に試験紙を適用するとどうなるか。

古いところから。前稿の補遺を兼ねて、長く入手できなかった台湾商務印書館の記念本からはじめる。

[鍵語言及率：20%] 『商務印書館100週年暨在台50週年』台湾商務印書館股份有限公司1998.2.17



20cm×19cmという変型デザインを採用し、その内容はひとことと言えば写真入りの年表だ。北京で発行している『商務印書館大事記』と同じだと考えてよい。

「非売品」と表示されている。関係者だけに配布されたものか。どうりで書店の販売目録に見かけなかったはずだ。

創設の1897年は、創設者のうち4名の肖像写真を掲げて2ページを割いた以外は、1年に1ページをあてている。

私の興味が商務印書館と金港堂の合併時期にあるから、その視点で該書を見ることになる。

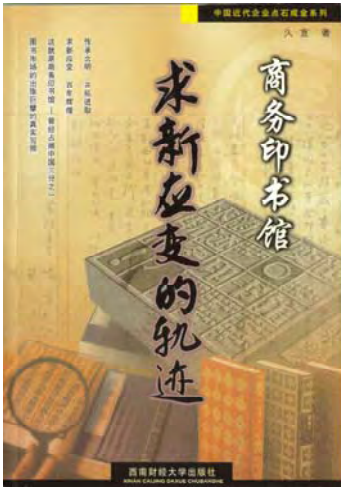
「鍵語言及率」は、20%である。年表だから詳細に述べることはできない。1903年の日中合併を説明して「吸収日資，改進印刷」とだけいう。高鳳池（翰卿）「本館創業史」を部分的に引用してはいる。だが、金港堂など具体的な名称は一切ださない。強調するのは、商務側に主権があったという箇所だけである。

1914年の合併解消についても簡単なものだ。「董事会收回日本股份」とあるだけ。蔣維喬「夏君瑞芳事略」から引用して、かろうじて原亮三郎と山本條[条]太郎の名前がでてくる。

扱いが小さいのもわからないわけではない。合併時期は100年のうちの1割を占めるだけだ。なによりも、台湾商務印書館からいえば日中合併などまったく関係はない。はるか昔の上海における出来事だ。記述が冷淡になるのは、しかたがない*6。

[鍵語言及率：55%] 久宣 『商務印書館 求新应变的軌跡』成都・西南财经大学出版社2002.1

同じ著者の同名書が台湾・利豊出版社（1999.5. 未見）から出ている。また、書



名が少し異なる縦組みの『出版巨擘商務印書館 求新應變的軌跡』(台湾・宝島社2002.11)がある。内容は同じ。

該書は、商務印書館が経験した百年の歴史をまとめたものだ。沿革篇、経営篇、啓示篇および商務印書館百年大事記(1897-1997)によって構成されている。

沿革篇で、その経歴をのべる。経営篇では、刊行物と経営する学校、支店の設立、内部管理などをまとめる。啓示篇においては、主として商務印書館の職員、および関係する人々について紹介する。



商務印書館の百年にわたる歴史のなかで、日中合弁の時期は、くりかえすがわずかに約1割にしかならない。だが、資料の不足する時期をどの程度まで追求しているかを知れば、全体の研究水準がわかるうというものだ。

その沿革篇に「利用日資」という項目をもうけて金港堂との合弁を説明している。55%という数字は、それほど悪くはない。しかし、詳細な説明にはなっていない。

あいかわらず、金港堂が教科書疑獄事件によって上海で投資を決意した、と誤った俗説を引用して平気である。

推測に熱がはいっている。原亮三郎らは上海に到着すると、商務印書館が勢い盛んに発展しており、業務が日増しに高まっているのを見て、ただちに投資することに賛成した、という(13頁)。

あいた口がふさがらない。それほどまでに業務が発展しているのであれば、日本の出版社からの投資を受け入れる必要など、まったくなかった。合弁相手として、日本で教科書疑獄事件によって傷ついている金港堂でなければならない理由もない。

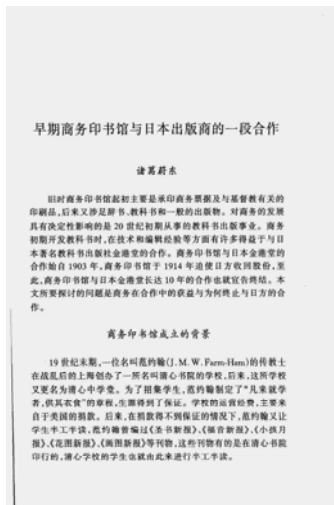
普通に考えて、矛盾がすぐにくてくる説明を、久宣はなぜこうも簡単に書いて

しまうのか。そちらのほうが不思議だ。あるいは、第1回増資についての誤解がもとになっているのかもしれない。

参考資料を明示しない。その意味で、該書は、一種の読物だと考えていいのだろう*7。

[鍵語言及率：80%] 諸葛蔚東「早期商務印書館与日本出版商的一段合作」

『日本学』第12輯 2003.12第1版、2004.2第1次印刷



単行本ではなくて論文である。ここにわざわざ取り上げるは、日中合弁そのものを正面からあつかった論文であるからだ。その種の文章は、それほど多くはない。あったとしても私から見るといくらか偏向している。あくまでも商務印書館が主導権を握って金港堂を引き込んだとか、人事権を握っていたとか主張する。当初は、投資額は同額、理事も同数をだしていたという事実を無視する。その矛盾に気づかない。あるいは気づかないふりをする。なぜそうなるのかは、別の研究課題となるだろう。

諸葛論文は、それらの論文とは一線を画している。日中双方の文献に目を通してからのほかならない。

鍵語言及率は80%を示している。高水準だと判定できる。商務印書館と金港堂が合弁会社を組織するまでの状況は、ほぼ説明されていると思う。高く評価されるべきだ。

ただ、裏付け資料が欠けている部分があいくつもある。例としてひとつだけあげる。私が知りたいことでもあるからだ。

諸葛は、こう説明する。「火災後に商務を再建するとき、合弁を前提にして日本金港堂は大量の資金を注入した」(408-409頁)。1902年の状況を説明している。大筋はほぼ正しいだろう。ただし、私が注目するのは火災に関してなのだ。もう少し詳しい説明、あるいは資料がほしい。

1902年、商務印書館は当時借りていた北京路の部屋から火を出した。多くの論

文は、その後新しい印刷工場を建設したと説明してふたつの事柄を関連づける。火災保険をかけていたのでその賠償金を使用した、と書く論文もある。根拠となる文献が提出されたことはない。そう推測しているだけ。

この失火と新工場建設は、いつのことなのか。その時間を追究していくと奇妙なことに気づく。

失火は8月22日だ。新聞報道が複数あり、それによって確認することができる。北福建路に赤レンガ3階建ての新しい印刷工場が完成したのは、遅くとも同年10月中旬に違いない。商務印書館の自社広告（『外交報』第24期1902.10.16）にもとづく。商務印書館は、この新工場が自慢だった。後年の記念誌には絵画を掲載して誇るように示している。

何が問題かといえば、簡単なことだ。火災からほぼ2ヵ月が経過した時期にどうしてそのような新しく巨大な建築物が完成するのか。たとえば、失火から約1年後に新しい印刷工場が堂々と完成したというのなら、まだ理解することは可能だ。だが、わずかに約2ヵ月後である。常識から考えて短期間にすぎる。土地を探し、設計を行ない、工事を実施し完成するのに約2ヵ月というのは、不可能だろう。

くりかえせば、火災の保険金賠償で「焼け太り」、それで新しく印刷工場を建設した。そう説明する人もいる。これが根拠のない俗説だというのは、以上の時間関係を考慮していないからだ。すなわち、火災と新工場は無関係である。着工していたのは失火よりも以前のことで、営業と印刷工場を兼ねていた借間が火につつまれた。だが、別の場所で建設工事は進んでいた。金港堂から事前に資金が提供されていたと考えてこそそれができる。

『外交報』の広告がある。これから新工場完成のおおよその時間はわかる。しかし、私はさらに一步深めた資料を探求している。完成月日を特定することのできる資料だ。新工場完成を祝って新聞広告を出すくらいはしたのではないか。文献として言及するものはないか、と探しているのだが見つからない。諸葛も資料を入手していないらしい。それほどに裏付けがむづかしいと理解しておく。

[鍵語言及率：25%] 史春風『商務印書館与中国近代文化』北京大学出版社2006.1



鍵語及率はそれほど高くはない。だが、いくつかの箇所に日本人が出てくる。合併問題については、主として汪家熔の「主權がわが方にある合併 [主權在我的合資]」*⁸（以下、主權説と称する）に依拠している。汪家熔が主權説を主張するにあたり基礎文献に採用したのが高翰卿「本館創業史」*⁹である。1930年代に商務印書館内部で行なわれた講演を文章に起こしたものだ。長いあいだ未公表だった。ほぼ60年後にはじめて発表されたという奇妙な経過がある。内部文書だから公表するにも

周囲の状況を考慮していたのだろう。商務印書館関係者で日中合併に触れて説明したのは、それ以前では莊俞論文*¹⁰が有名だ。莊俞論文が公表されたのは1931年である。高翰卿の講演は、時期的にはそれと離れていない。内容が重複する部分がある。両者は関係すると思われる。

商務印書館に主權があった日中合併である、と高翰卿がいうのだから平等公平ではない印象を受ける。商務印書館が金港堂とは関係なく好きなように人事を決める、といたいのだ。汪家熔が根拠とする要点を莊俞と高翰卿の文章から引用する。以前にも紹介したことがある。重要だからくりかえす。

莊俞「締結した条件は、決してすべてが平等というものでもなかった。ひとつは支配人と理事は全員が中国人であること、ただ日本人の一、二人を傍聴に列席させることができること。雇った日本人は随時退職させることができることなどだ」

高翰卿「締結した条件は、決してすべてが平等というものでもなかった。わが方にはふたつの主要な条件があった。ひとつは支配人と理事は中国人であること、ただ日本人ひとりを監査役に選ぶこと。ふたつは雇った日本人は随時退職させることができること」

莊俞と高翰卿の文章は、奇妙なくらい一致している。しかも、高翰卿の文章に

は同僚の張蟾芬が補足して、当時、理事に当選したのは、当然すべて中国人だった、ただ、監査役のふたりのうちひとり日本人だ、と書いている。

商務印書館の首脳陣が、全員口を揃えて同じ内容の証言をしている。すなわち、合弁当初から理事は中国人が独占していたと言う。日本人はひとりも理事には就任していない。これらの説明がおこなわれたのは1930年代のことだった。汪家熔が直接引用するのは高翰卿の文章だ。しかし、結局のところ莊俞論文とあわせてふたつの文章が根拠になって主権説が成立していると考えてよい。

実際は、莊俞、高翰卿、張蟾芬らのいう通りではなかった。

理事は、最初、日中から2名ずつ（印錫璋、夏瑞芳、原亮三郎、加藤駒二）、3年後の1907年は、中国3日本2（夏瑞芳、張元濟、印錫璋、原亮一郎、山本条太郎）だった。1908年、さらに中国2日本1（夏瑞芳、印錫璋、原亮一郎）の割合に変化する。1909年より、日本人は理事に就任していない。商務印書館の方針で日本人理事を排除した。商務側が資本金の割合を増やした結果である。その間、夏瑞芳がずっと社長を兼ねた。

日本人理事が存在していたという事実は、莊俞と高翰卿、張蟾芬らの証言が虚偽であったことを証明する。

この名簿は、汪家熔自身が作成して同じ論文のなかに提示したものだ。すなわち、汪家熔は高翰卿の説明とはあきらかに矛盾する名簿を提出した。しかも、その矛盾に目をつむって商務主権説を主張したのである。

何度読み直しても奇妙なことだと感じる。研究論文としての重要な箇所が成立しない。汪家熔は自分で書きながら、その矛盾に気づいていないはずがない。わかっている主権説を主張する。その時点で研究論文ではなくなった。

汪家熔は、事実ではないことを主張している。彼にはそうする必要があったのだろう。私にはどういう事情が背後にあったのかは知らない。問題なのは、主権説が提出された後の研究者たちだ。読めば明らかに矛盾する論文を目の前にして研究者自らは検討しないのだろうか。鵜呑みにして左から右に引き写している人がいるのだ。

史春風は結論部分でつぎのように書く。「中日合弁の10年間に於いて商務印書館の重要な職務は終始中国側の人間が就任した。自らの独立性を保持した合弁は、

商務印書館に巨大な利益を獲得させたと同時に、中国側出版家たちにも出版について自己の出版意図と戦略を完全に貫徹させることができたのだ」(217頁)
主権説そのものである。

[鍵語言及率：40%？] 李家駒『商務印書館与近代知識文化的傳播』北京・商務印書館2005.2 / 香港・中文大学出版社2007



出版社と発行年が異なる2種類がある。同一内容の書籍が北京と香港で出版されたことを意味する。

商務印書館が出現する前の上海における出版状況から説明がはじまる。商務印書館の組織、人物、出版、市場、広告などについて数字を使用し全面的に考察する専門書である。1949年までを記述範囲とする。

日中合併問題に著者李家駒の関心はそれほどないと見える。たとえば、山本条太郎、原亮三郎らの名前は、注釈に資料として言及があるくらいだ。まとまった説明はなされていない。関係する固有名詞は、分散している。それらを鍵語言及率に含めた。ゆえに「鍵語言及率」には「？」をつける。

日本人の名前を出すのを避けているように思う。たとえば、『最新初等小学国文教科書』だ。張元済が、蔡元培、蔣維喬、高夢旦、莊俞らと主宰し、日本人顧問の協力を得て編集したと説明する(54頁)。日本人というだけで名前を明記していない。第5章でも詳しく教科書の説明をしているが同様である

(217-222頁。219頁注5に注目。商務内部の文章では金港堂顧問の協力を得たことに言及するものはなはだ少ない、と)。実物の『最新国文教科書』を見れば、校訂者として小谷重、長尾楨太郎が前方に配列され、その後ろに並列して高鳳謙(夢旦)、張元済が

あがっているのがわかるのだが。

著者の関心は書名に表われている。商務印書館の歴史には当然言及する。それよりも、商務印書館が近代知識文化を伝播した作用と影響を分析する方に重点が置かれる。

例をあげよう。商務印書館と中華書局の間で発生した新聞広告合戦だ。当時、日本で刊行されていた雑誌『実業之日本』(1919.6.15)が問題発生の原因になる。その「支那問題号」特集がきっかけなのだ。文中に、商務印書館は日本との合弁企業だ、と説明されている箇所がでてくる。中華書局がそれを漢訳した意図は、明らかに商務印書館攻撃にあった。合弁は数年前の1914年には解消している、と商務印書館は身の潔白を主張せざるをえない。その際、新聞に公開したのが証拠の文書、すなわち私が見つけた前出「解約書」だ。この文書にこそ、いままで不明であった商務印書館と金港堂の合弁解消についてその実態を明らかにする手がかりがある。1次資料にはほかならない。しかし、著者の関心は文書そのものにはないのだ。「解約書」の中身を解読するのではなく、新聞に広告を出す効用という側面に説明が進んでいく(305頁)。

合弁問題についての著者の姿勢がよく表現されているのは、次の文章だ。「(51頁注4)初期商務と日本人および日本資本の出版会社との関係については、樽本照雄の詳細な分析が参考になる；『初期商務印書館研究』の第1-3章」

合弁の具体的状況については、他人の著作をあげて代替とした。つまり、著者自身は合弁の経緯に関しては自分で考えずに通り抜けた。事実の確認にそれほど興味はないということらしい。それはそれでひとつの考えだと思う。

[鍵語言及率：55%] 劉曾兆『清末民初的商務印書館 以編譯所為中心之研究(1902-1932)』台湾・花木蘭文化工作坊2005.12 古典文献研究輯刊初編第12冊 (韓錦勤「王雲五与台湾商務印書館(1965-1979)」と合冊)

劉曾兆の論文は、台湾・国立政治大学歴史系研究所の碩士論文として書かれたという(1997)。それまで未刊行であったものが上記叢書に収録された。

論文名からわかるように商務印書館編訳所を中心とした研究であるのが興味深い。1902年は、日本金港堂との関係が深まっているころだ。まさに合弁時期と重



なる。

劉曾兆は、「緒論」において研究資料として王雲五『商務印書館与新教育年譜』(1973)を最も重要な資料だとする(5頁)。それはそうだが、1千頁をこえる該書には日本金港堂の名前は出てこない。日中合弁について一言も触れない書籍だからその点は注意を要する。商務印書館の内部資料である『商務印書館通信録』があげてある(7頁)。私はその第429期しか見たことがない。劉曾兆は珍しい資料を参照しているといえる。日中合弁について

新しい説明があるかもしれないと期待がもてる。

いくつかの説明を紹介しよう。

「原亮三郎は(教科書疑獄)事件に連座した文部省官員小谷重および長尾兩山らのために活路をつくるため上海にやってきて商務(印書館)の出版活動に参加した」(21頁)。根拠は、章克標「商務印書館引進日資雜記」(『商務印書館館史資料』第39期1987.9。私は未見)だという。ほかからの引用であるとは示してしている。しかし、このような通説を、内容を検討せずにいかにも事実のように書くのには落胆した。この俗説通説は本当に広く好まれている、と思う。

「商務と金港堂の提携というこの歴史は、当事者双方がひた隠しにしたため、また提携当初の条件およびのちに日本株の回収の交渉過程について現在のところわかっていることは多くない」(22頁)。劉曾兆は、商務印書館と金港堂の合弁を表現して漢語の「合作」を使用している。その日本語の普通の意味は、一方が資金、設備を提供し、片方が用地、労働力を提供する形態をいう。合弁は漢語では「合資」と書いて区別している。しかし、劉曾兆は「中外合資」を外国人が経営の管理権を掌握している、と理解して「合作」を使用する(23頁)。用語の定義がずれていることがわかる。商務印書館と金港堂は、同額の資金を出し合い、理事も平等に選出する同等の関係だ。普通の「合資」でいいと考える。だが、劉曾兆がわざわざ「合作」を使用しているから劉曾兆論文の関係部分は「提携」と訳す。ひた隠しにしたという文章の前半は、商務印書館についていえば、正しい。また、

現在にいたるまで合併契約書は公表されてはいない。だが、合併解約書は2004年に日本で再発見されている。叢書に収録される時、修正する可能性もあったが、間に合わなかったようだ。とこう書くのは少し好意的かもしれない。なぜなら、劉曾兆は日本語文献については探索が十分ではないからだ。参考書目に見えるのは、すべて漢語文献のみである。中国の内部資料まで見ているのに比較すれば、その落差が大きい。

合併の最初から商務印書館が自由に金港堂の人員を誅首できた、などといういわゆる「主権説」を劉曾兆は信じている(22頁)。それが成立しないことは、すでに述べた。

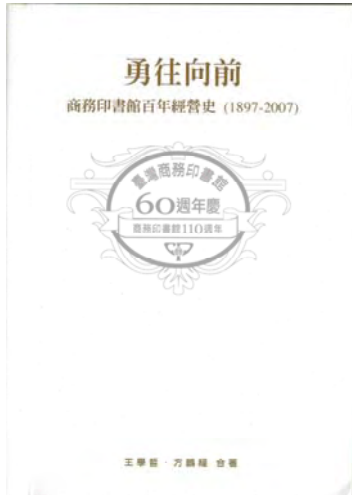
山本條[条]太郎(25頁)、中国図書公司(24頁)などの名前は出てくる。失火したことにも触れる(27頁)。しかし、山本は商務の顧問になったことがあるといい、彼からの発言を劉は紹介するだけ。金港堂と合併した際の鍵人物としての説明はない。また、劉のあげる中国図書公司是商務が合併した出版社のひとつではない。商務が中国図書公司から日中合併会社であったことを理由に攻撃された事実にも触れない。劉は、失火によってそれ以前の書類が消失したことをいうのみ。失火後の2ヵ月足らずで巨大な印刷工場を新築した謎にも無関心だ。日中合併についてそれらの事柄が有機的に結びついているという認識に欠ける。

編訳所に所属する日本人として長尾雨山、小谷重、加藤駒二らをあげるのはい(49頁)。ただし、彼らをなぜ「顧問」とするのか。劉曾兆がもとづいた周越然の原文では「編訳員」となっている。また、「顧問」と示して『張元濟年譜』の記載によったとある(50頁)。しかし、『張元濟年譜』(47頁)には、編訳所に参加した、と記述されており「顧問」とは書いていない。あるいは、鄭貞文の文章に「顧問」とあるのを引用したのかもしれない。伊沢脩[修]二の名前もある(49、81頁)。編訳所に勤務したとは『張元濟年譜』には見えない。

珍しい資料を使用しているからもう少し詳細かと期待したのだ。鍵語言及率の55%は、悪くはないがそれほどよくもない。日中合併については、それらの資料にもやはり言及が少ないのだとわかった。

[鍵語言及率：65%] 王学哲、方鵬程合著『勇往向前 商務印書館百年経営

史 (1897-2007)』台湾商務印書館股份有限公司2007.5



裏表紙には「飛躍六十・邁向未來 台湾商務印書館60週年 / 商務印書館110週年」と書かれる。

商務印書館は上海に創業した。中国各地に多くの支店(分館)を開設したことは周知のことだろう。営業網を全国的に展開していった。1914年に香港分館を設立し、1916年にはシンガポール分館ができた。1947年の台湾分館から数えて「台湾商務印書館60週年」となる。正確に言えば1949年に大陸とは縁が切れた(202頁)。1950年、台湾商務印書館股份有限公司と改称して独立したのだ。ただし、

該書は、その断絶は断絶ではないという認識があるらしい。そうでなければ60周年にはならない。とはいいいながら巻末附録の「商務印書館大事記」では、1950年から項目を分ける。すなわち、台北、北京、シンガポール、さらに加えてクワラルンプール、香港である。

該書に序文が3篇掲げられる。それらの執筆者は、王学哲(台湾商務印書館董事長)、楊德炎(北京商務印書館總經理)、陳万雄(聯合出版(集团)有限公司總裁、商務印書館(香港)有限公司董事長)だ(陳万雄序は、李家駒著作への序言を再録したもの)。肩書きを見れば、各商務印書館の責任者たちである。もうひとりの著者方鵬程は、台湾商務印書館の総編輯でもある。なにが言いたいかといえば、該書は商務印書館自らがみとめる公式の社史ということなのだ。

日中合弁については、「第5章 1920年代以前の經營方式」の「一、引進日商資金与技術」において説明する。

鍵語言及率の65%を見れば、かなり詳しく言及しているといえる。以前には利用できなかった文章、たとえば高翰卿「本館創業史」を引用している。ゆえに、「1903年、日本の出版業者金港堂が上海に投資するために来たときは、印有模(錫璋)の紹介を経て双方が合弁に同意したのである」(56頁)とほぼ正確に記述することができた。従来の説明、つまり金港堂がいきなり上海にやってきて商務印書館に投資した、などと荒唐無稽な話にはしていない。本稿の最初に紹介した

『商務印書館100週年暨在台50週年』に比較すれば、鍵語普及率も格段に向上している。同じ「本館創業史」から引用するにしても、紙幅を取ることができたから、それだけ詳しい説明になっている。台湾商務印書館にすれば、日中合併とは関係がない。しかし、百年経営史と称するからには、触れざるをえないのだろう。

金港堂主人の原亮三郎は、上海三井洋行經理山本條〔条〕太郎に委託し、山本が印錫璋、夏瑞芳と知り合いだったから商務印書館との合併を考えるようになった（57頁）。私が説明したことと一致する。

比較的詳細な解説になっているが、それでも気になる箇所がある。

印錫璋からの投資を1903年の合併成立時だとする（57頁）。正しくない。印錫璋が張元済とふたりで投資に応じたのは1901年のことだった。

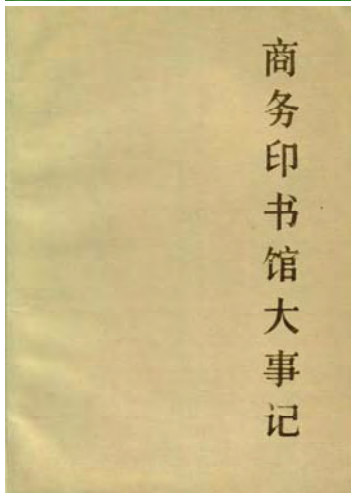
合併条件は、社長（經理）と理事長（董事長）は中国側が、日本側は監査役1名のみにし、日本側の人員は随時にやめさせることができた（57頁）。だから「主権が商務にある合併」だった、といたいらしい。台湾にまで汪家燊のいう主権説が普及している。誤解である。当時の理事名簿を見れば、理事には日中同数の人数を基本的にそろえている。あくまでも対等の合併だ。誤りをくりかえすから、私もくりかえし否定する。

事実を無視した主張が、こうも長く続くというのはなぜだろう。矛盾した資料を手にしなが、その資料の意味するところをわざと無視する。こうなると研究といっても心理学の分野になる。主権が商務にあってほしい、いやあるべきだった、金港堂の日本人を差別し、商務側で自由に人事を行っていた。そういうありもしない願望が文章になった。商務が圧倒的に優位を保った合併であったと主張する。根拠がないから幻想である。

長尾楨太郎を「楨」太郎と誤植する（57、58頁）。

〔鍵語言及率：45%〕商務印書館110年大事記編写組編『商務印書館110年大事記（1897-2007）』北京・商務印書館2007.5

「大事記」というのは、日本語でいえば年表だ。節目ごとに異なったかたちで発表されている。大型の単行本で刊行されたのは、90周年、100周年につづいてこれで3回目になる。



鍵語言及率の45%というのは、該シリーズにしてはより改善された数字だといえることができる。

資料を補充し掲載したからいままでよりは詳しくなった。そのために数字が向上したのだ。

たとえば、1902年の失火である。以前の年表では無視した。しかし、本年表では1907年の項目に『創業十年新廠落成紀念冊』から部分的に説明を引用する。それに「二十八年七月不戒於火」とあって失火した事実が判明する。ただし、光緒二十八年すなわち1902年の項目にそれを明記するまでにはいたっていない。

何に対して「改善された」といえば、90周年の年表に比較してということだ。『商務印書館大事記』（北京・商務印書館1987.1）の鍵語言及率は、25%にすぎなかった。

商務印書館の年表は、金港堂との合併についてほとんど何も説明していない。

さかのぼってみると『商務印書館大事記』は、会社創立90周年を記念して編纂された。見開き左頁に事柄を記し、右頁に関連する文章を引用する。

金港堂との合併をどう説明しているか。1903年の項目には次のようにある。

「十月、商務印書館有限公司が正式に成立する。日本資本を吸収し印刷を改善する」

金港堂の名前もなければ原亮三郎もいない。対等の合併であるのに、なぜだか「吸収し[吸収]」という一方的な表現をわざと採用している。それが商務印書館の従来からの一貫した執筆姿勢である。

日本金港堂との合併を、商務印書館はどうして隠

そうとするのか。私が商務印書館と金港堂の合併問題に興味をいだききっかけになったのは、まさにその点においてだった。その理由を追及してきた。

商務印書館百年大事記編写組編『商務印書館百年大事記（1897-1997）』（北京・商務印書館1997.4）があるということだけを記す。

別の出版物で珍しい写真が公開されたから紹介しておきたい。

上海図書館編『上海図書館蔵歴史原照』上冊 上海世紀出版股份有限公司、上海古籍出版社2007.11



上海の商務印書館が日本金港堂と合併を解消したのは1914年のことだ。日本人職員であった長尾雨山は、永住する決意で上海に渡ったものの、状況が変化したのだからしかたがない。商務印書館を辞職した。

長尾雨山は、帰国前に中国国内を旅行することにする。1914年6月21日、商務



長尾雨山を囲んで 商務印書館社員

後列左から 朱赤萌 蔡松如 小平元 木本勝太郎 莊百俞 李拔可 蔣竹莊
前列左から 鮑咸昌 印錫璋 長尾雨山 陶惺存 張菊生(元濟)

印書館同人が徐園で歡送会を開いた。

別に掲げたのは、その時の記念写真だ。上海図書館に所蔵されているという。

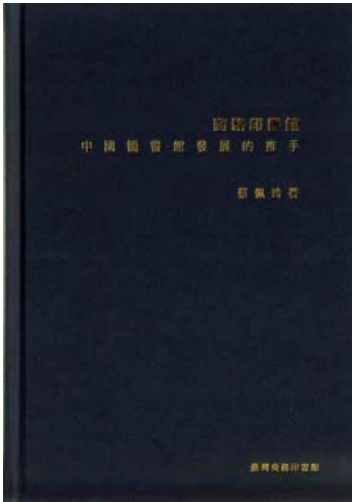
人物だけを拡大しておく。白服に修正が施されているのは、写りが悪かったものだろうか。それにしても不自然な修正のしかただ。修正理由は不明。

この写真を説明して蔣維喬跋「商務印書館送日本人離華帰国」としている。何度も送別会を開いているから、そのうちのひとつだと考えられる*11。

[鍵語言及率：65%] 蔡佩玲『商務印書館 中国図書館発展的推手』台湾商務印書館股份有限公司2009.9

商務印書館は本業の出版事業のほかに教育文化方面にも事業を展開していた。通信教育、講習班、教育補助用品の作製、映画制作、図書館設立などだ。著者が研究主題とするのは、そのうちの図書館事業である。早期の涵芬楼からのちの東方図書館が記述の対象となる。中国における図書館の成立発展過程を追及するその一部分に商務印書館の日中合弁が含まれる。蔡には執筆の意図が別にあるから金港堂との合弁にそれほどページを割いているわけではない。それでも第2章第2節「創立階段(1897-1915)」は61-89頁を占める。

細かいことから指摘する。



商務印書館は小さな印刷工場から出発し移転をくり返しながら拡大していった。それは、いい。ただし、1898年火災にあって保険賠償金をえて北京路順慶里（莊俞の誤記）に移転した（72頁）というのは間違い*¹²。最初の移転をせざるをえなくなったのは部屋が倒壊したからだ。北京路慶順里が正しい。ここで失火したのが、何度でもいうが1902年のことだった。長尾禎太郎と長尾雨山を別人扱いしている（79頁）。同一人物だ。なぜこういう不思議なことになるのか不明とせざるをえない。

蔡佩玲はつぎのようにいう。金港堂の原亮三郎が上海で投資しようとしたとき、印有模（錫璋）に意見を聞くと、商務の株主だった印有模はこの情報を夏瑞芳に伝えた（75頁）。ほぼ正しい記述になっている。ただし、原亮三郎と印錫璋がどうして結びつくのかが説明されていない。ここは原の娘婿で三井物産上海支店長の山本条太郎を欠いては成立しないのだ。蔡佩玲は多くの文献を読みこなしている。山本条太郎の存在を知らないはずがない。その点に気づかなかったのは残念なことだった。

蔡佩玲は、莊俞の上記文章を引用して例の主権説に言及する。そうしてこう書く。「これがはたして中日双方が最初に合弁したときに締結した条件かどうか、すでに知ることはできないにしても、しかし日本人とははじめをつけるふりをするという意図がとても強いのである」（77頁）。あるいは、こうある。「（莊俞が金港堂との合弁を説明するとき、当時商務が合弁に賛成する立場にあったことをいう）ただ、後に日本は中国の民族主義に対して損害をあたえ侵略を続けたから、民国^{ママ}30〔20〕年代の高〔翰卿〕氏および莊〔俞〕氏が当時の歴史を回憶するとき、商務の立場を擁護するために論駁する必要があった」（78頁）。ほぼ妥当な見解だと私は思う。この部分を特に紹介するのは、資料を客観的に読むことのできる研究者が出現したからだ。

蔡佩玲が附録につけた「主要参考資料」を見ると、あがっているのは漢語文献だけだ。日本語文献を見る機会があったならば、もう少し鍵語言及率が向上した

かもしれない。

日中合弁と直接の関係はないが、最近の商務印書館研究ということで張人鳳論文に触れておく*13。

張人鳳「蔡元培為商務印書館第一任編訳所所長説質疑」(『済南大學学報(社会科学版)』2010年(第20巻第1期))である。



その論文の主旨は、こうだ。商務印書館が設置した編訳所の初代所長は、今までいわれているような蔡元培ではなかった。

私は、蔡元培が初代編訳所所長であると思っていた。張人鳳自身も、過去にはそのように書いていたのだ。いわば定説とっていい。

私がよった根拠は、汪家熔整理「解放以前商務印書館歴届負責人(董事長、總經理、總編輯)」(『商務印書館館史資料』之十九 北京・商務印書館總編室編印 1982.11.5)だ。21頁に「3 編訳所長、編審部長 /

1902年底-1903年5月 蔡元培」とある。

これを見れば、どうみても初代所長は蔡元培となる。

なにしろ汪家熔が整理した資料だ。彼が当時勤務していた商務印書館に所蔵される書類であろう。そういう記録があるということにほかならない。その資料を直接確認することのできない私は疑問をはさむ余地はないように思った。

高平叔編著『蔡元培年譜長編』上(北京・人民教育出版社1996.3)を見ても「兼任商務印書館編訳所所長」と説明されている(251頁)。

ところが、張人鳳によると資料には蔡元培の名前は、ない、ということか。

商務印書館には「商務印書館編訳所人員名冊」稿本が所蔵されているそうだ。そこまでは、汪家熔の記述と一致する。編訳所にいた900人全員の名簿で、筆頭は張元濟とある。蔡元培の名前は、ない。そう張人鳳は説明する。これは驚いた。張人鳳と汪家熔は、たぶん同じ資料を見ているはずだが、結論が異なるのである。

張人鳳はつぎのように説明する。すなわち、辛亥革命後、保守と見られがちな商務印書館は、精神的な支柱として革命の元老級人物である蔡元培を必要とした。と。蔡元培の初代所長説は、1930年代に蔣維喬が言い出した。のちの人々は、蔣維喬の不確かな回想にとびついた。

批判の集まる日中合併については、長年にわたってほとんど無視し続けた商務印書館である。編訳所の創設時期に協力しただけの蔡元培を持ち出して、その逆を行なったことになる。都合の悪い事実は無視し、そうあってほしいという希望を事実として提出したわけだ。

高翰卿、莊俞らの商務印書館首脳が、ありもしない商務印書館主権説を唱えたのが1930年代だった。同時期に蔣維喬も同じことを行なったらしい。なるほど、その可能性が高そうだ。

では、汪家燊が整理した資料はなんだったのか。疑問のままに残ってしまう。

【注】

- 1) 次は未見。香港商務印書館『商務印書館与廿世紀中国』香港・商務印書館1998。
- 2) たとえば、王飛仙『期刊、出版与社会文化变遷——五四前後の商務印書館与《学生雜誌》』(台湾・国立政治大学歴史学系2004.8 政治大学史学叢書14)がある。しいていえば、鍵語言及率は15%だ。



該書は、主として1920年以降を研究対象とする。ゆえに、日中合併問題とは直接に関係しない。ところが、なぜだか少しだけ言及している。それが15%という数字に表われた。わざわざ合併問題に言及する必要があったのかどうか、疑問に思う。

「金港堂は、もとは規模が最大の日本の出版業者であり、教科書を主要業務としていた。1902年に勃発した教科書疑獄事件により苦況に陥ると、そのために中国におもむき印刷出版業に投資する計画がもちあがり、それにより新局面を切り開こうとしたのだった」(23頁)

商務印書館の合弁相手である金港堂の、それもわずかな部分を説明しただけ。王にとっては中心からはずれた周辺の話だ。中国の先行論文をそのまま受け入れた知識だとわかる。ご注意ください。私は批判をしているのではない。多くの研究者が、このように間違っただけの通説を信じている。それほどまでに誤りが定着していると知るべきなのだ。

- 3) 汪家熔『中国出版通史』7 清代卷(下)(北京・中国書籍出版社2008.12)が、181頁で損害をこうむった事実を否定する。夏瑞芳に対する「遠回しな批判[微詞]」のひとつとして、役に立たない翻訳原稿を購入して失敗したことを挙げる。汪家熔は次のように説明する。「ある人は中傷して次のようにいっている。夏瑞芳は金もうけのため、粗製濫造した「新学」の翻訳原稿を大量に買い込み印刷したが誰も買うものはなく、そこで南洋公学に頼んで改訳してもらったが、とうとう完成しなかった」。賈平安「記商務印書館創始人夏瑞芳」(『商務印書館九十五年 我和商務印書館』北京・商務印書館1992.1. 545頁)から引用した部分も含む(ここでは必要な箇所だけを翻訳した)。つまり、クズ翻訳原稿を購入したのは夏瑞芳が「金もうけ」をたくらんだからだ、と。それは、中傷である、と汪家熔は批判する。汪家熔は翻訳原稿そのものを否定している。つまり、夏瑞芳は翻訳原稿を購入しなかった。にもかかわらずそれをいうのは「遠回しな批判」であるという。

私が反論する。ひとつは、賈平安は「金もうけ」などとは書いていないこと。ふたつは、有力な証言がある。翻訳原稿を購入したと指摘しているのは、賈平安が最初ではない。それどころか、蔣維喬、章錫琛らは、購入金額が当時の金で1万円であったと証言している。また、朱蔚伯も金額こそ示さないが同様の事があったと書いているのだ。彼らは商務印書館に早くから勤めていた人々だ。汪家熔は、なぜそれらの証言を無視するのか。(参照：樽本『初期商務印書館研究(増補版)』61頁)

- 4) 汪家熔は、ゴム投機事件について異論を提示している。夏瑞芳は損をしていないと2度主張する。

その1。いきさつは、こうだ。夏瑞芳は高級職員沈継方(季芳)と共同出資して宝興公司を創設し、宝興里において商務印書館従業員用の住宅を建設し提供していた。資本金は3万元で、実際は沈継方が経営した。建物を造るとそれを抵当にしてさらに建築することをくり返し、大きな借金をこしらえた。(そこにゴム投機事件が発生し)政府が金融危機からの救済のために関与する。銭荘に借金している人物として沈が拘留され、(銭荘への)借金弁済のため宝興公司の不動産は売り払われた(宋原放主編、汪家熔輯注『中国出版史料

・近代部分』第3巻 武漢・湖北教育出版社2004.10。注5。32-33頁)。

汪家焜は続けてこういう。夏瑞芳がゴム投機で損失を出したというが、それは根拠がない。その理由として、商務印書館の資産表には宝興里の項目がない。つまり、売却の事実がない。だから、夏瑞芳は損失を出していない。

汪家焜による以上の説明は疑問が多い。たとえば、共同経営者の夏瑞芳が拘留されなかったのはなぜか。借金をした銭荘が倒産したのならば、その借金はどうなったのか。

私は素朴な疑問を持つ。そもそも宝興公司の資本金3万元は誰が提供したのか。夏瑞芳と沈継方は、ふたりとも商務印書館の首脳者たちだ。それが別会社を設立して従業員用の住宅を建築しているのだから、商務印書館とは無関係ではない。商務印書館が直接住宅を建設するのが本来の事業だろう。なぜ別会社にしたのか。汪家焜によれば、宝興公司が住宅建設のための資金を銭荘から借りたという。それがゴム投機事件で銭荘が倒産して借金だけが残った、ということか。夏瑞芳はゴム投機に無関係ではないし、宝興公司の借金も負っているはずだ。それがなぜ夏瑞芳は損失を出していないという汪家焜の説明になるのか。腑に落ちない。

その2。さらに、最近では、汪家焜『中国出版通史』7清代巻(下)182頁において、夏瑞芳の株による損失そのものをふたたび否定する。次のように書いている。「(夏瑞芳に対する)「遠回しな批判」の2は、さらにわけがわからない。夏瑞芳が1910年に会社の公金を流用して株の思惑売買を行ない巨額の損失をだして会社の資産を売らせる結果になった、また、流動資金を不足させた云々というのだ。『張元濟年譜』の編者はこの1項目を組み入れたが、それは材料を吟味しなかった結果である。これは、もともと軽はずみな文人の「埋め草」の文章である。実は、いわゆる1910年の「株」事件とは「陳逸卿事件」といい上海の金融危機をもたらしたが、夏瑞芳の当時の株売買は欠損でなかったばかりか、相当な巨額、40万元を稼ぎ出したのである」

汪家焜の説明は、従来の定説とは逆だ。夏瑞芳はゴム投機事件で、大きな損失を出したといわれていたが、実は巨額の利益を得ていたというのである。私の方が「わけがわからない」。

当時の商務印書館理事である鄭孝胥の日記(1910.7.22)に記録がある(「午後、商務印書館開特別会議、夏瑞芳経手、被銭荘倒去十四万」1265頁)。理事会で夏瑞芳が引き起こした損失について報告を受けているのだ。それを否定するならば、汪家焜は資料を提出しなけ

ればならない。

張元済から鄭孝胥、印有模、高鳳池（翰卿）にあてた手紙（1910年）がある（張樹年、張人鳳編『張元済蔡元培来往書信集』香港・商務印書館1992.10。143頁。『張元済全集』第2巻書信。515頁）。「得夢翁信，知滬上錢莊相繼倒賬，本公司被正元等家倒欠共有七万之数，為之驚駭不置。又聞粹翁為正元調票，致被波累，有六万之巨」。張元済は高夢旦から、商務印書館の被害額は7万元、夏瑞芳の被害は6万元だと知らされている。

損失の事後処理に関して、張元済から原亮三郎、山本条太郎にあてた相談の手紙が複数ある（樽本『初期商務印書館研究（増補版）』309-316頁。これらの手紙は、最近出版された張元済『張元済全集』第3巻書信（北京・商務印書館2007.9）にも収録）。

1911年株主会で報告がなされた（「十七、宣統三年三月商務印書館股東年会」『中国出版史料・近代部分』第3巻。21-23頁。以下も同文。「在宣統三年商務印書館股東常会上的報告」『張元済全集』第4巻詩文（北京・商務印書館2008.12）。285頁）。ゴム投機事件が原因で錢莊が倒産した。それによって商務印書館がこうむった被害額は、合計銀64,750両である（樽本「初期商務印書館の財政状態」『商務印書館研究論集』164-165頁）。株主総会での報告だから決算書に計上した損失だ。この数字とは別に夏瑞芳の個人損失がある。張元済らが考えた夏瑞芳救済策というのは、商務印書館が夏個人に融資することだった。夏は、分割返済を行なう。だが、夏瑞芳の死後も巨額の借金が残った（「夏氏欠款事」『張元済全集』第4巻詩文。334-335頁）。

『張元済年譜』の編者のひとりから汪家熔へ反論がなされている。柳和城「商務印書館“橡皮股票”風波豈容否認！ 与汪家熔先生商榷」『中華讀書報』1990.8.15電字版。両者がそれぞれに文章を発表している。汪家熔「商務印書館從未炒過股票 答柳和城先生」『中華讀書報』2009.11.18電字版。柳和城「我与汪家熔先生的分歧在哪里？」ウェブサイト「書評周刊同仁Blog」2009.11.21

5) 私のいう「解約書」原文は、以下の名前をつけられてそれぞれに収録されている。

「商務印書館清退日股合同」宋原放主編、汪家熔輯注『中国出版史料・近代部分』第3巻武漢・湖北教育出版社2004.10。39-42頁。汪家熔が独自に見つけた。

「商務印書館と日本金港堂終始合辦合同」『張元済全集』第4巻詩文。293-295頁。樽本「商務印書館と金港堂の合併解約書」（『清末小説』第27号2004.12.1）に掲げた複写版にもとづく。

- 6) 台湾商務印書館本について、2009年10月17日付清末小説研究会ウェブサイト^マに文章を掲載した。
- 7) 久宣本についての本文は、2004年3月3日付清末小説研究会ウェブサイト^マに掲載した。
- 8) 汪家熔「主権在我的合資 一九〇三年～一九一三年商務印書館の中日合資」『出版史料』1993年第2期（総第32期）1993.7
「主権在我的合資 1903-1913年商務印書館の中日合資」『商務印書館史及其他 汪家熔出版史研究文集』北京・中国書籍出版社1998.10
同上 宋原放主編、汪家熔輯注『中国出版史料・近代部分』第3巻 武漢・湖北教育出版社2004.10
- 9) 高翰卿「本館創業史 在發行所学生訓練班的演講」(曹) 冰巖筆記原稿 1934? 初出未見
同上 『(1897-1992) 商務印書館九十五年 我和商務印書館』北京・商務印書館1992.1
高鳳池 同上 宋原放主編、汪家熔輯注『中国出版史料・近代部分』第3巻 武漢・湖北教育出版社2004.10（録自《商務印書館九十五年》第1-13頁，商務印書館，1992年）
- 10) 莊俞「三十五年来之商務印書館」莊俞、賀聖羣編『最近三十五年之中国教育』上海・商務印書館1931.9
同上 『(1897-1992) 商務印書館九十五年 我和商務印書館』北京・商務印書館1992.1
- 11) 写真と本文は2008年5月4日付清末小説研究会ウェブサイト^マに掲げた。
- 12) 賈平安「記商務印書館創始人夏瑞芳」に同じ表現があって間違っている（544頁）。蔡は、これを参照したか。
- 13) 張人鳳論文について、2010年1月24日付清末小説研究会ウェブサイト^マに文章を掲載した。

【関連書籍】

- 樽本 『初期商務印書館研究』清末小説研究会2000.9.9
樽本 『初期商務印書館研究（増補版）』清末小説研究会2004.5.1
樽本 『商務印書館研究論集』清末小説研究会2006.12.15

商務印書館の名称と日中合弁問題

『清末小説から』第107-108号（2012.10.1-2013.1.1）に掲載。

商務印書館と金港堂の合弁問題を論じる文章に中村忠行「検証：商務印書館・金港堂の合弁」1-3（『清末小説』第12、13、16号 1989.12.1、1990.12.1、1993.12.1）がある。

中村忠行（1915-1993）は、日本文学の方向から日中比較文学研究を進めて著名だ。商務印書館と金港堂の合弁についても、日中文化交流のひとつとして取り上げている。その研究は、残念ながら1993年の死去によって中断した。

本稿は、中村論文、主として『清末小説』第12号掲載のものを紹介しながら、商務印書館の名称を検討し考える。その背景に日中合弁問題が存在しており、複雑だ。

1 日中合弁後の商務印書館という名称

合弁会社とは、いうまでもなく複数の企業が共同出資し特定の事業を営むことをいう。その際、普通は会社名を新しくする。すこし古いが、日本のソニーとスウェーデンのエリクソンのばあいがある。両社は携帯電話事業に特化して、合弁会社ソニー・エリクソン・モバイルコミュニケーションズを設立した。

1903年の日中合弁会社も事情は同じだ。商務印書館と金港堂だから商務印書館金港堂とか、また商金書局とか、あるいはまったく別の商号、屋号、名称、呼称

にしてもよかった。だが、そうならなかった。従来通りの商務印書館を継承した。これが問題を発生させることになった。

商務印書館と金港堂のばあい、最初の出資金は平等である。双方が10万元を出資する。合計20万元の資本金となる。金港堂側からは社主原亮三郎が出資する。金港堂は原の個人会社のようなものだ。ゆえに、この10万元という出資が金港堂という会社組織か、原個人によるものか、と区別することはできない。とにかく日本側が10万元を出した。合弁の初期において、日中双方から同数の理事を選出しているのは、出資率に応じたものだと理解できる。両者が同等の権利を有する。一方に優先的権利を付与するものではない。社長は夏瑞芳である。商務印書館といえば、創立から経営を取り仕切っていたのが夏瑞芳だ。その意味で夏と原は同じような立場にあったということが出来る。夏瑞芳も原亮三郎もひとことではいえばワンマン社長だった。

商務印書館の資本は、1901年の第1次増資で額面上は5万元になっている。これは合弁以前のことで、1903年の正式合弁にあたり残りの5万元を現金で用意する。全額が納められるのにほぼ1年かかった。商務印書館側の資本については、そう説明されており問題はなさそうだが、細かく見ていけば疑問は残る。商務印書館が所有する資産などをどう算定したのか、詳細が不明である。今にいたるまで、合弁契約書は公開されていない。関連書類が現在の商務印書館にはすでに紛失しているのか、あるいは秘して出さないのか、それすらもわからない。なぜそのように書くのか。先例があるからだ。

高翰卿「本館創業史 在発行所学生訓練班的演講」(『1897-1992 商務印書館九十五年 我和商務印書館』北京・商務印書館1992.1)である。創業当時の状況を比較的詳細に説明している。当事者の証言だからこそ貴重だ。1934年に商務印書館内部で行なわれた講演らしい。そこには日本の金港堂と合弁した経緯も述べられている。以前、私が日中合弁について調べていたとき、北京の商務印書館に直接問い合わせたことがある。関連資料が保存されていないだろうか、と。返答があり、日本軍が上海を攻撃したさいにすべて失われてしまった、という意味のことが書いてあった。しかたがない。独自に調査を進めた。数年後、失われた資料であるはずの上記高翰卿の文章が公表された。私は、驚いたものだ。私があればこれ資料

を集めて知った事実とほとんど同じ証言を高翰卿がはるか以前に行なっていたのである。つまり、1934年の講演原稿（あるいは内部刊行物に掲載された*1）がながく商務印書館内部に保存されていた。それが、ほぼ60年後に公表されたということになる。その間、内部資料として関係者だけが閲覧していたのだろう。ところが、商務印書館の外部において（つまり日本で）日中合弁のおおよそが明らかにされたから、高翰卿の講演原稿は解禁されたと理解できないこともない*2。

さて日中合弁にかかわる商務印書館の名称問題だ。

合弁会社になったにもかかわらず商務印書館という旧称を変更しないまま引き継いだ。これが、いろいろな臆測を生む原因になっている。

商務印書館大事記では、「日本資本を吸収した [吸収日資]」と今でも説明している。あたかも吸収合併したように受け取れるではないか。ここには、金港堂を吸収合併したと短絡させたい、つまり、商務印書館の相対的優位をうたいたい、との姿勢が現われている。しかし、金港堂は日本に存続しているから、吸収はありえない。ならば、金港堂からの単なる投資だろうか。一部分ならばいざしらず、資本の半分を外国側から受け入れているのだ。それで投資しただけ、ということではできない。だいいち長尾雨山ら日本人を編訳所に迎えて刊行物を共同で編集している事実がある。両社是对等の立場で合弁会社となった、という事実を確認しておく。

金港堂は日本にそのまま存続しているからいい。問題があるのは、上海の商務印書館の方だ。光緒二十九年十月初一日（1903.11.19）に日本の会社と合弁したあとも、前述のとおりそのまま商務印書館と称した。商務印書館有限公司となった、と商務印書館大事記などでは説明している。だが、正確に言えば、有限公司となったのは1901年の第1次増資の時だった。普通は「有限公司」をつけないで呼ぶ。また、刊行物に記名して商務印書館のままだ。

ところが、ここに奇妙な事実がある。商務印書館ばかりではなく、上海商務印書館、中国商務印書館という表記が併存する。

中村が指摘するのは、それらの名称が曖昧なままに使用されている事実だ。この3者が存在しているところに着目して、その背後には金港堂と商務印書館の文化摩擦があったからだと推測する。あるいは、その逆で、両者に摩擦があること

を異なる名称に根拠を求めた。これが、中村説の基本だ。

商務印書館の名称について考える前に、商務印書館が別に「商務書館」と表記していることを説明しておきたい。中村説によれば、これも日本人が関係しており、その意味で同根になる。

2 商務書館のこと

中村は、小説専門雑誌『繡像小説』の創刊と停刊に、あるいはその編集に金港堂社主原亮三郎が深くかかわっていると考える。李伯元が西村天囚を介して原亮三郎に紹介されたであろうともいう*3。

日本人が『繡像小説』に関係しているひとつの証拠として中村があげるのが、「中国商務書館」という表示だ。「印」が抜けて、ただの「書館」になっている。

その《繡像小説》も、第三十一期（推定光緒三十一年三月十五日刊）以降終刊までの柱記が、繡像の部分を除いて、凡て<中國商務印書館印行>に改まつてゐる。正確には、第三十二期以下の柱記がさうなつてゐるので第三十一期の柱記は<中國商務書館>である。<中西女學堂に中西先生を訪ね、書館を圖書館か書肆と心得る赤毛布>とは、口さがない上海つ子が、日本渡來の新參者を嘲つた言葉だが、正にその愚を演じてゐるのである。ここでも、金港堂の意圖したところが、<新しい合辦會社の設立>であり、それを前提とする原の投資であつたこと、又社名變更の問題に安易に妥協してしまつたことへの後悔が、まざまざと窺へる。（注、ルビ省略）第12号107頁

日中の合弁会社を設立したとき、社長を夏瑞芳に譲るかわりに、合弁会社の名称をたとえば金港堂書局にしてもよかった。中村はそう考えているらしい。そうならなかったから「社名變更の問題に安易に妥協してしまつたことへの後悔」ということばになった。あくまでも推測の域を出ない。私が考えるに、名称を変更することなど夏瑞芳には受け入れることはできなかつただろう。なんのために苦心慘憺して経営を維持してきたのか。張元濟、印錫璋らからの増資を得て経営建

て直しに奮闘の最中でもあった。印錫璋を通じて日本の三井洋行上海支店長山本条太郎に資金援助を申し入れたとしても、商務印書館を改称するなど考えたこともなかっただろう。その結果が、改称なしの合弁会社設立だ。

さて、「中国商務書館」である。中村が説明しているのは、日本人には中国語の「書館」という意味が理解できていないということだ。日本人は「書館」を図書館か書店だと考えるが、実は中国では寄席のこと。つまり、『繡像小説』の柱に「中国商務書館」と「印」抜きに表示するのは日本人だから犯した誤りだといいたいのである。もうひとつ、商務印書館に「中国」を冠するのは、原が金港堂を暗示させるための意図的な行為だという。

中村の説明には不確定要素が多い。確かに西村天囚には、李伯元を含む中国人たちとの交流があった。原亮三郎が小説雑誌の創刊を商務印書館に勧めたかもしれない。だが、そうであったという証言は今のところ見つからない。さらにいえば、雑誌『繡像小説』の運営に関与していたかどうかはまったく不明なのだ。不明だからこそ中国人が間違はずがない「商務書館」という表示に中村は注目したのだろう。中国人であれば「商務書館」とは書かないはずだ。すなわち、日本人の原亮三郎が深く関与していたからこそその表記になった、と。中村による仮説だ。

私が反論する。

ひとつは「中国商務書館」と見えるのは『繡像小説』第31期だけだ。原亮三郎の強い意思があるのならば、なぜ全72冊に及んでいないのか。その理由を説明できない。

ふたつに、「印」抜きの「商務書館」は、それ以外にも普通に見ることができる。たとえば、商務印書館の看板刊行物のひとつである英漢字典だ。その書名は、『商務書館華英音韻字典集成』『商務書館華英字典』となっている。「印」抜きであることは明らかだ。

この「印」抜き商務書館の字典については、中村は広告を検討して言及している。『清末小説』第13号91頁から引用する（商務書館に傍点があるのは省略。注も略）。

だが、広告の冒頭に《商務書館華英音韻字典集成》・《商務書館華英字

典》などであるのは、何と解釋したらよいか。書名は、《普魯士地方自治行政説》巻末の廣告は勿論、《繡像小説》創刊號巻末の新書廣告でも、《教育界》三卷七號（明治三十七年四月、1904）にみられる金港堂の廣告（商務印書館の日本總代理店の挨拶廣告）などでも、凡てさうなつてゐるから、誤植ではない。これは、何と解すべきか。

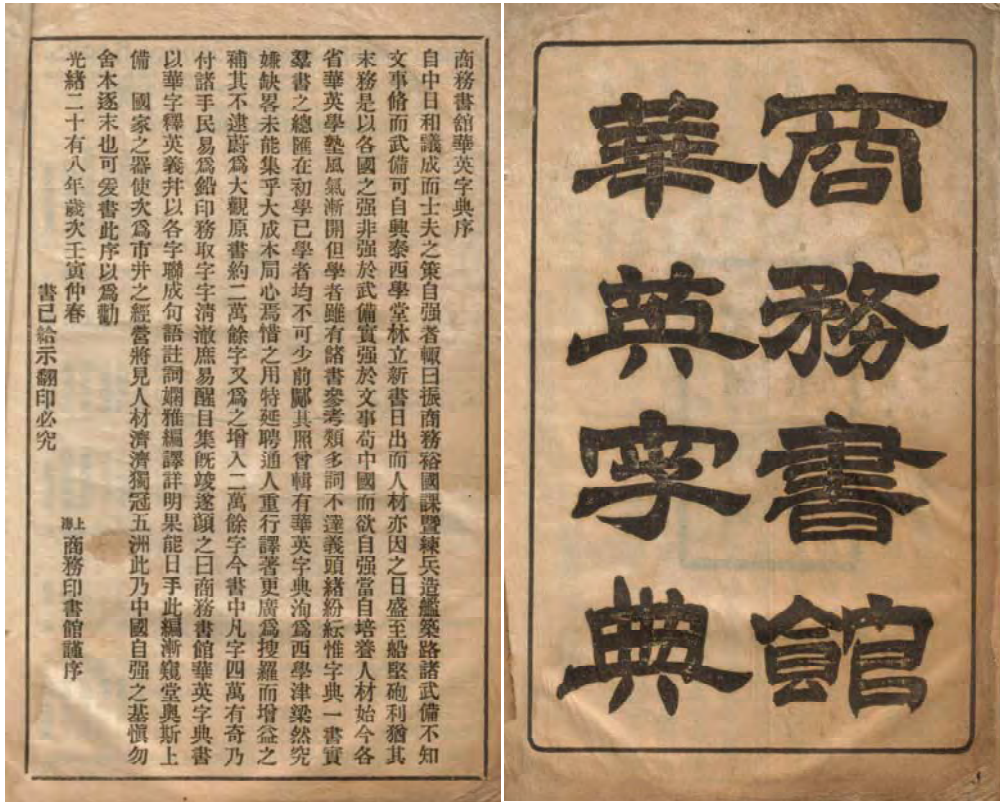
贅するまでもなく、〈書館〉は講釋の寄席を設けてある茶館、轉じて俗語では〈私塾〉、隱語では〈遊廓〉の意となる。先聖の國の君子が、この様な文字を書名に冠する筈がない。明らかに、中國を知らぬ日本人の仕業であり、書物も東京で印刷されたものに違ひない。蓋し、廣告には《華英字典》に注して、〈洋紙洋装一元〉・〈洋連史紙五角〉とある。〈龍章〉の工場は既に稼働してゐるから、洋紙の供給には事關かぬとしても、洋装（精装、平装）の技術は、未だ發達してはゐまい。勿論、書店名を刊本に冠する慣習もない。忖度すれば、從來印刷所として知られて來た商務印書館が、今、新しく書店として轉生するのであるから、大いに名を賣って置く必要があると打算したのが、この愚行を演ずる結果となつたのであらう。

中村は、「商務書館」と表示したのはあくまでも日本人の仕業だと考えた。「隱語では〈遊廓〉の意となる」ことばを自社の出版物に使用するはずがないではないか。そう指摘して一貫している。「商務書館」について、「先聖の國の君子が、この様な文字を書名に冠する筈がない。明らかに、中國を知らぬ日本人の仕業であり、書物も東京で印刷されたものに違ひない」と断言してしまつた。

中村の説明は、残念ながら廣告に見える書名にもとづいた推測にすぎない。ありえない名称だと思ひこんだ。だから実物が存在することなど想像できなかったのだらう。

しかし、原物の字典を見れば明らかに「商務書館」なのである。該書裏扉には「光緒壬寅三次重印」と見える。1902年のことだ。発行元は「上海／商務印書館」である（写真1、2）。

印刷したのは失火前の自社印刷所においてだ。日本東京ではない。北京路の商務印書館は、美華書館の西側にあつた。商務印書館自身が編集印刷する字典であ



(写真2)

(写真1)

ることにご注目いただきたい。「印」がないからといってこれらの字典に日本人が参画していたということにはならない。

3 商務印書館 = 金港堂説

中村が商務印書館の名称に注目したのは、『清末小説』に論文を連載することだった。前出中村「『繡像小説』と金港堂主・原亮三郎」(1986。注3参照)において、以下のように述べている。

「上海商務印書館」・「中国商務印書館」とは、実は商務印書館と合弁した我が金港堂の別名に他ならないのではないか。544頁

商務印書館と金港堂との意見の対立は、その他の面でも色々あつたらしい。両者の商慣習が異り、合弁といふことにも習熟してゐなかつたのが、その原因であらう。調印後、半年余りを経て、再び問題が起つた。時期から考へて、期末決算に絡むものであることは、想像に難くない。業を煮やした原（亮三郎）は、それまで専ら用ゐてゐた「上海商務印書館」と併行して、新会社に、「中国商務印書館」の名を用ゐた。外国資本が導入されてゐる事実を一般に知られることは、商務印書館の最も忌み嫌ふところであつたから、夏瑞芳や張元済には、極めて不愉快な行動であつたに違ひない。553頁

中村によれば、原亮三郎は商務印書館との合弁にあたって会社名を変更しなかつたことを悔やんでいた（ここは中村の仮説）。商務印書館は、日本資本と合弁したことを社会に知られたくなかつた（これは事実）。その強い姿勢を原は受け入れざるを得なかつた（仮説）。名称は商務印書館のままにした（事実）。自らの弱腰を後悔して、ことあるごとに名称をいじくり、金港堂の存在を暗示しようとした（仮説）。それが商務書館であり、上海商務印書館であり、中国商務印書館だった（これらの表記があるのは事実）。複数の名称が出てきたのは、いずれも金港堂側の思惑が原因であつた。そういう筋書きである。

考察を続けた中村は、さらに加えて商務印書館までも金港堂の化身にした。商務印書館も金港堂ということになれば、合弁会社なのだから別にかまわないようにも思える。しかし、中村がほしいたいのは、商務印書館と称して内容は金港堂なのだ。理解するのに骨がおれる。ますます複雑化するのだ。

商務印書館が小説本の訳者に使われるのは、これが買い取り原稿であつたことを暗示するという。そこまでは、なるほどそうかと思う。

注目されるのは、商務印書館が合弁を前提とする金港堂の匿名である、と書いた箇所だ。合弁前から金港堂は中国で書籍の刊行を行なつていたことになる。

ひとつの根拠は、『明治法制史』の奥付にある。

ひとこと説明しておけば、失火後の印刷所と総発行所は、場所が分かっている。印刷所は銭業会館西文昌閣隔壁に新築し、総発行所は棋盤街中市に置いたのだつた。

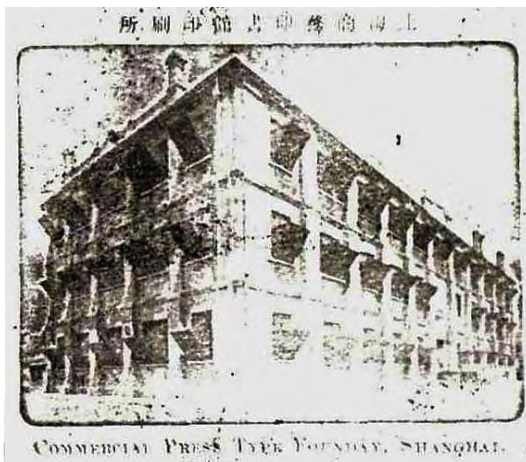


写真4: 商務印書館印刷所

写真3: 『繡像小説』裏表紙

さて、『明治法制史』の奥付だ。刊年、原著人、訳者、校者と示して次が印刷者、住所付の発行者および総発行所の上海商務印書館となる。中村があげるのは、その住所付発行者が「上海鉄馬路橋北銭業会館西文昌閣隔壁 発行者 商務印書館」となっている箇所が問題だという。

これをもとにして「発行者は<商務印書館>を稱してはゐるが、舊來の<商務印書館>ではないことを、それとなく匂はせてあるのである。端的に言へば、この印刷所は、<金港堂>が上海に開設した印刷所であり、<金港堂>の上海支店でもあつた」(第12号98頁)となる。

印刷所の住所であるはずのところに商務印書館の表示がかぶさっている。すなわち、金港堂上海支店を兼ねていたという主張だ。印刷所が金港堂上海支店で、しかも商務印書館と称したという。

くりかえす。1902年に商務印書館は失火で発行所兼印刷所を失った。上海鉄馬路橋北銭業会館西文昌閣隔壁(また北福建路海寧路、美界北穿虹浜路: 写真3)に3階

レンガ建ての印刷所を新築したのは、失火後の二ヵ月が経ったかたためうちのことだ。

『寒桃記』の裏表紙に印刷所の写真が掲載されている（写真4）。夏のころに撮影されたか。すべての窓に日よけが開いている。堂々とした建築物であることがわかる。従来は絵図でのみ知られていた。その意味でこの写真は珍しい。上海商務印書館印刷所とある。英文表示は、Commercial Press Type Foundry, SHANGHAI だ。Type Foundry とは、活字鑄造所を意味する。英文表示を手がかりにすれば、上海にある商務印書館印刷所ということになる。ここの上海商務印書館は、しいて表記すれば所在地を併記する上海・商務印書館である。

当時、上海で刊行された英文会社録にも商務印書館印刷所が掲載されている*4。上の写真に添えられた英文「Commercial Press Type Foundry」と同じ表示がある。所在地は「2, North Fukien Road 北福建路2号」だ。北福建路第二号と書いても同じになる。

中村説を確認しておきたい。この新築成った印刷所は「商務印書館」と称する中身は金港堂のことだという。

中村説を検討する。

氏が証拠とするのは、気がつかないほどに小さな部分だ。印刷所の住所であるはずのところに発行者商務印書館の名前が配置されている。すなわち、上海鉄馬路橋北銭業会館西文昌閣隔壁が印刷所ではなく、発行者商務印書館の住所にされている例が1件だけある。『明治法制史』の奥付だ。指摘されなければ、わからない。

以下にいくつかの書籍から奥付ほかの関連部分を抜き出した。出来事も 印をつけて注記する。

【表】印刷所と総発行所

年月	印刷所	総発行所	書名
1902光緒二十八年二月	北京路四十一号	上海商務印書館	『商務書館華英字典』
1902光緒二十八年七月十九日	北京路四十一号（美華書館西首）で失火 - - - - -		
1902光緒二十八年八月十五日	不記	上海商務印書館	『外交報』第21期

商務印書館の名称と日中合弁問題

1902光緒二十八年九月十五日以前	印刷所を上海鉄馬路橋北錢業会館西文昌閣隔壁に新築 - - - - -		
1902光緒二十八年十一月	上海鉄馬路橋北錢業 会館西文昌閣隔壁	商務印書館	『日本政治地理』
1903光緒二十九年三月	漢口分館の設立 - - - - -		
1903光緒二十九年五月初一日	美界北穿虹浜路	上海商務印書館	『繡像小説』第1-12期広告
1903光緒二十九年五月	上海鉄馬路橋北錢業 会館西文昌閣隔壁	上海商務印書館	『普魯士地方自治行政説』
1903光緒二十九年六月	不記 (上海鉄馬路橋北錢業会館西文昌閣隔壁)	上海商務印書館	『明治法制史』 発行者 商務印書館)
1903光緒二十九年十月初一日	日本金港堂と合弁 - - - - -		
1904光緒三十年二月二十五日	不記	商務印書館	『東方雜誌』第2期広告
1904光緒三十年七月	上海鉄馬路橋北錢業 会館西文昌閣隔壁	中国商務印書館	『英国詩人吟辺燕語』 説部叢書第一集第八編
1904光緒三十年十月	上海北福建路第二号	商務印書館	『和文漢訳読本』扉に商務書館
(推定：1905光緒三十一年二月)	不記	中国商務書館	『繡像小説』第31期柱)
(推定：1905光緒三十一年三月)	不記	中国商務印書館	『繡像小説』第32-72期柱)
1905光緒三十一年三月二十五日	不記	中国商務印書館	『東方雜誌』第2年第3 期広告
1905光緒三十一年四月	上海北福建路第二号	中国商務印書館	『珊瑚美人』 説部叢書第二集第五編
1906光緒三十二年二月	上海北福建路第二号	中国商務印書館	『寒桃記』印刷所の写真 説部叢書第四集第一編
1906光緒三十二年四月	上海北福建路第二号	商務印書館	『澳洲歴険記』 説部叢書第四集第六編
1906光緒三十二年孟夏	上海北福建路第二号	中国商務印書館	『煉才爐』 説部叢書第五集第八編
1906光緒三十二年季夏	上海北福建路第二号	中国商務印書館	『美人煙草』 説部叢書第六集第三編

印刷所の住所は、のちに改められて前出の上海北福建路第二号となった。表示が変更されただけで同じ場所である。

表示を見ても知らなければわかる。『明治法制史』の奥付だけがほかと異なってい

る。印刷所の住所であるはずのところに、発行者商務印書館の名前がある。中村の指摘するとおりだ。

これらの奥付をならべて見て、私はひとつのことに気づいた。表示項目の順番なのだ。

奥付の表示項目と順序は決まっている。刊年、作品名、原著者、訳者、校者、発行者、印刷所（者）および総発行所である。書籍の内容によっては訳者がなかったり校者があげられなかったりはする。しかし、発行者が先行して次が印刷所、最後に総発行所の順であることにはかわりがない。

しかし、例外がひとつある。中村説が根拠とする『明治法制史』だけが、印刷者を前におき、そのあとに住所付の発行者がくる。印刷者と発行者が入れ違っているのだ。

ほかの書籍は、すべてが住所付の印刷所である。ということは、『明治法制史』だけが奥付に誤植があるのではないか。住所付の発行者をもって中村説の根拠にするのは不十分だということだ。

「未だ正式調印を見てみないとは言へ、合辦を前提とする投資が既に行はれ、出版活動さへ営まれてみたことは明らかである」(第12号100頁)とまで書かれている。説明文の前半部分は、正しいと私は考える。なぜなら、問題にしているレンガ造りの巨大印刷所の完成時期を考えても金港堂の事前投資、あるいは援助がなければ新築はありえない。商務印書館の失火とは無関係に以前から建設が進められていた、と考えざるをえない。私は従来からそれを主張している。

このいわゆる事前投資について、中村はその時期を以下のように述べている。

金港堂の投資が行はれたのは、光緒二十八年（1902）七月の〈舞馬の災〉に商務印書館の経営が破綻に瀕してから以後、上記《日本政治地理》が上梓された同年十一月以前 例の〈教科書疑獄〉などの、一部で密やかに囁かれはしてみたものの、摘發されるに至るまでには三・四ヶ月もある時であった。第12号100頁

私の見方は、異なる。失火のずっと前、たぶん1901年頃にさかのぼる。その理

由は、新築になる巨大印刷所の完成が火災後のわずか二ヵ月ほどであったからだ。商務印書館と金港堂ともに合弁を前提に事業を進めていた。ところが1902年、両社に偶然のようにそれぞれ異なる災難が襲った。商務印書館には失火が、金港堂には教科書事件である。そのため正式合弁の締結は1903年に延期せざるをえなかった。そういう経緯である。

中村説後半の部分はどうか。金港堂が商務印書館の名称を使用して独自の出版活動を行っていたと踏み込んで記述する。しかも、正式合弁以前にはすでにその動きをしていたというのだ。金港堂の上海支店であったという発想は興味深い。それを証明できる資料があれば私も読みたい。

「中国商務書館」という「印」抜き表示のある『繡像小説』がよい例となるだろう。該誌は商務印書館が金港堂と合弁する前に創刊された。中村も、それを視野にいれて正式合弁以前に金港堂が独自の出版活動を行っていたという。

《繡像小説》の場合も、亦同様であつたらう。総發行所として商務印書館の名を借りてはゐるが、新書廣告の欄で<上海商務印書館>の名を隠見させてゐる。實は、原亮三郎が李伯元に委託して編輯させた雑誌で、金港堂上海支店發行としてもをかしくはない體のものであつた。第12号107頁

中村は、広告に見えるこの上海商務印書館は金港堂上海支店だ、ともいう。はたして、そうか。

『繡像小説』の奥付に金港堂を示唆する文字を組み込んでいるかどうか。それを見る方がよい。

原亮三郎が『繡像小説』の運営に深く関与しているのであれば、柱に「印」抜きの「中国商務書館」を部分的に使用する必要はないだろう。奥付、あるいは裏表紙に堂々と自らの存在を誇示できる表示を出すのではないか。それがあってこそ金港堂による独自の出版活動であるということが出来る。しかし、全72期をつうじて奥付には「総發行所 / 上海棋盤街中市商務印書館」とあるだけだ。

例外の『明治法制史』を見てこの商務印書館が金港堂の匿名であるとするのは無理である。

4 『最新国文教科書』の刊行

原亮三郎あるいは金港堂が関与したというならば、『繡像小説』よりも『最新国文教科書』のほうがより適切な例となる。

教科書の編集刊行において、商務印書館を一躍著名にしたのが『最新国文教科書』であった。長尾雨山が家族とともに上海へ移住したのは、商務印書館と金港堂が合弁した直後だ。商務印書館では、それまで独自に進めていた教科書編集作業を中止した。それにかわり長尾らが、商務印書館編訳所の人々と取り組んだのが『最新国文教科書』の編集である。教科書編集において実績と経験をもつ日本人の協力があつたから短期間のうちに完成を見た。しかも、その出来映えがよかった。当時の人々に広く受け入れられる結果となる。

その表紙には、日本人と中国人の名前が掲げられている。第1冊と第10冊に見える人名を示す（肩書きは省略。渡辺浩司氏より複写をいただいた。感謝します）。

第1冊 小谷重、長尾楨太郎、高鳳謙、張元濟校訂。莊俞、蔣維喬、楊瑜統
編纂

光緒三十年歳次甲辰二月二十三日初版 / 光緒三十一年歳次乙巳四月十五日
十版

第10冊 小谷重、長尾楨太郎、蔡元培、高鳳謙、張元濟校訂。蔣維喬編纂
光緒三十一年十月初版

まさに日中共同編集による教科書であることが明らかだ。商務印書館と金港堂が合弁会社となった事実がこの刊行物の背景に存在する。

では、この教科書のどこかに金港堂を匂わせる部分があるだろうか。もし、原亮三郎に自己の存在を示したいという願望があるのであれば、この刊行物にこそそれを込めるだろう。印刷所の住所に発行者の商務印書館を置くような小細工は必要ない。

だが、それらしい記述は、どこにも見つけることはできない。

表紙に上海を割注して「上海ノ商務印書館印行」とある。

中村説がすこし理解しにくいのは、この上海商務印書館も金港堂の分身であるかのように考えているところだ。

5 上海商務印書館 = 金港堂説

中村論文（第12号97頁）から引用しながら、私の説明をつける。

換言すれば、総發行所として掲げる〈商務印書館〉の名が、突如として〈上海商務印書館〉に改められるのは、管見の限りでは、上記《普魯士地方自治行政説》の奥付からのことで、以後合辦の正式調印時まで続く。

上の表に示したように、上海商務印書館が出てくるのは『繡像小説』も早いものになる。その時期はといえば、漢口に分館を設立したあとだ。漢口分館の設立は光緒二十九（1903）年三月だった（王雲五『商務印書館与新教育年譜』11頁）。ここから見れば、普通は漢口に対比した上海という意味だ。中村も、そう考えないわけではない。

〈商務印書館大事紀要〉（張靜廬輯註《中國出版史料補編》所収）には、光緒二十九年（1903）の條に〈成立第一個分館 漢口分館〉とあり、同年五月初一日創刊された《繡像小説》第一期の裏表紙奥付によつてもその開設が確認され、しかもその時期が《普魯士地方自治行政説》の刊記ともほぼ一致するから、或いは〈分館〉に對する〈本館〉の意味で、〈上海〉の文字を冠したものかとも考へられる。しかし、それは聊か考へ過ぎであるらしい。

同年五月初一日に創刊した『繡像小説』奥付には次の表示がある。「總發行所ノ上海棋盤街中市商務印書館」「寄售處ノ……漢口商務印書分館……」。分館、すなわち支店であることが明白な表示だ。『繡像小説』創刊号から、それに対比するかたちで広告にも上海商務印書館と示している。どう考えてもこちらは上海の

商務印書館という意味だ。それを中村は「しかし、それは聊か考へ過ぎであるらしい」と退ける。考えすぎではなく、普通の捉え方だと思うのだが。退けるその理由というのは、こうだ。

現に、光緒二十九年六月首版の《明治法制史》(清浦奎吾原著・商務印書館譯)はじめ、同年九月首版の《納爾遜傳》(中村佐美譯・何震彝編訂)などの奥付にも<漢口分館>の記載はない。歴史的に意義深い分館の設置であっても、当事者はその重要性を、さ程明確には意識してゐないのである。されば、この場合さう解釋するのは適當ではない。のみならず、合辦以後に於てすら、<商務印書館>・<上海商務印書館>が使ひ別けられてゐる趣きが、見え隠れしてもゐる。

奥付に漢口分館の記載はなくても、分館が存在している事実はある。記載のあるなしが問題ではないのだ。上海をつけるのは、国内の別都市と区別するためだと考えるのが一般的だろう。漢口分館に対して上海の商務印書館と捉えるのがよるしい。

6 中国商務印書館 = 金港堂説

上海商務印書館という表示は、上海の商務印書館である。では、中国商務印書館はどうか。「中国」をつけるのは、これは当然日本を意識している。

前出の表に明らかなように、金港堂と合弁した後に中国商務印書館が出現する。中村は、こちらの中国商務印書館表記についても金港堂の主導で行なわれたものだという(第12号103-104頁。図版、傍点省略。誤植は正した)。

《東方雜誌》第二期(光緒三十年二月二十五日刊)以下に、The Russo-Japanese War.(fully illustrated)なる畫報の廣告が、屢々掲載されてゐる。發行所は、<日本東京市、金港堂書籍株式會社>、総代理寄售所として、<上海棋盤街中市、商務印書館>とある。それが第二年第三期(光緒三十一年三月二十五日

刊)掲載の第八號の廣告からは、發行所<大日本東京市、金港堂書籍株式会社>、総代理寄售所<清國上海棋盤街中市、中國商務印書館>と改められる(圖版4)。雑誌の背文字も、同時に<中國商務印書館印行>と改められる(圖版5)。<日本>の頭に<大>の一字を加へ、<大日本>として<清國>に對比せしめ、これまでは<上海商務印書館>と、相手を牽制するに止めてみた態度を一擲して、<中國商務印書館>と誰の目にも異様に映る呼稱を用ゐ始めたところに、問題點の所在や金港堂側の氣概が窺はれよう。その權幕に怖れをなしたか、創刊號に見えて以來久しく掲げられなかつた<日本の金港堂の在清國總代理店>といふ商務印書館の挨拶廣告が、二卷三期・五期・六期と續けて出る。殊に滑稽なのは第五期の場合で、表頁が<中國商務印書館>を唱へる上記 The Russo-Japanese War.の廣告、裏が右の代理店の廣告といった工合で、嫌がらせとも覺しき空氣さへ感ずるのである。

同じ書籍について廣告の表示が変化しているという指摘だ。

發行所である金港堂書籍株式会社(名称はそのまま)の住所が、日本東京市から大日本東京市へ変化した。

一方の総代理寄售所である商務印書館は名称も中国商務印書館に変わったばかりか、住所は上海棋盤街中市から清国上海棋盤街中市へ書き換えられている。

同時に掲載された図版を見ても、『東方雑誌』背表紙は、第2年第3期から第7期までは中国商務印書館だが、第8期からは「上海 商務印書館」だ。

以上の表示を見ると、中国商務印書館と上海商務印書館が混在していることになる。

中村説によれば、金港堂による嫌がらせだという。ここは理解しにくい。両者のあいだには文化摩擦があり、金港堂の存在を強調したいがために、わざわざ中国商務印書館という名称を使用したといいたいらしいのだ。それにしては、見え隠れするだけで一貫したものとも思えない。だからこそ「嫌がらせ」なのか。しかし、そのような嫌がらせをして何か意味があるのであろうか。金港堂はそうしたかったのだ、という中村の把握なのだろう。

私にいわせれば、金港堂が嫌がらせをするのであれば、中国商務印書館とは命

名しないだろう。可能性として清国商務印書館とでもつけば、金港堂の「思惑」も実現したかもしれない。だが、私が見るところ金港堂にそれらしい「思惑」があったとは考えられない。

商務印書館は、上海に創設された。上海に1社だからわざわざ上海とつける必要はない。しかし、漢口に分館を設けてからは事情が異なる。それとの区別をする必要が生じる。上海商務印書館と称するのは自然なことだった。その商務印書館が日本金港堂との合弁会社となる。名称は商務印書館を継承したとはいえ、外部に向かって合弁会社であることを宣伝するわけではない。どちらかといえば、日本との合弁の事実を隠しておきたかったのが本音である。しかし、合弁の事実を知る人がでてくれば、それに対する手当も必要になってくる。迫られて日本ではないことを強調するために自らの発案で中国商務印書館名を使用した。私はそう推測する。

商務印書館に日本の資本が入っていることを攻撃した中国図書会社の例があった。1908年のことだ。中国と名のること自体に商務印書館と日本の関係を批判する意味を込めていた。

商務印書館は、当時の中国社会の雰囲気を感じて察していたにちがいない。今から見れば、1911年の辛亥革命を直前にひかえた時期だ。清朝という異民族支配から脱出しようとしていた。だからこそ異民族である日本の金港堂と合弁したという事実を公表しなかった。合弁後は、前もって中国商務印書館と名のことで防衛する意思を示していたと考える。しかし、これはかえって逆効果ではなかったか。日本を意識していることを、商務印書館みずからが暴露してしまったからだ。

私は、上海商務印書館であれ、中国商務印書館であれ、それらは商務印書館自身のつごうから生じた名称であったと考える。日本の金港堂との合弁が少しは関係している。しかし、それが主要な理由ではない。ましてや、金港堂の分身、上海支店ということは実質的に存在しないのだ。まことに常識的な結論に落ち着くわけである。

【注】

- 1) 中村は、次のように書いている。「文中に見える高鳳池の言葉は、《同舟》 商務印書館の企業誌であらう 第二巻第十期に原載された〈本館創業史〉から抜かれたものであらう」第12号100頁。この指摘は当たっていた。
- 2) 沢本郁馬「鍵としての高翰卿「本館創業史」」『清末小説』第15号1992.12.1
- 3) 中村忠行「『繡像小説』と金港堂主・原亮三郎」『神田喜一郎博士追悼中国学論集』二玄社 1986.12.15。548頁
- 4) *THE DESK HONG LIST; A GENERAL AND BUSINESS DIRECTORY FOR SHANGHAI AND THE NORTHERN AND RIVER PORTS, 1904*, (SHANGHAI: The Office of the “North-China Herald.” 1904 / 電字版)、20頁

『繡像小説』出版延期問題簡論日本語原稿

未発表。汪家燭氏の勧めにしたがい短文を書いた。「《繡像小説》出版延期問題簡論」(『出版史研究』第2輯 北京・中国書籍出版社1994.11)である。執筆の時間も限られているため、箇条書きにした。要点をきわだたせる意味でもある。本稿は、その元原稿だ。自分で漢訳したものが上記雑誌に掲載された。末尾に「10年近く以前より」と書いている。すでに20年余が経過した。漢語原稿は、『清末小説研究集稿』に収録。

1. 『繡像小説』は、光緒二十九年(1903)五月初一日に創刊され、全72冊を出版して停刊した。

2. 『繡像小説』停刊と李伯元の死去を結びつけたのは、阿英であった(阿英「晚清文学期刊述略」『文芸報』1957年1957.10.20)。李伯元の死去が光緒三十二年三月十四日だから、半月刊が守られた場合、該誌第72期の発行を光緒三十二年三月十五日とすれば、時期的に一致するように見えるのだ。中国においてこれが定説となった。

3. 張純は、日露開戦を詠みこんだ「時調唱歌」を『繡像小説』第15期に見つけた。日露開戦は、光緒二十九年十二月二十三日だから該誌第15期は、これ以後の発行でなければならない。ところが、通説では、それより以前の十一月初一日の発行ということになっていた。あきらかに予定よりも遅れて雑誌は発行されている。さらに張純は、終刊は、光緒三十三年七月以降だと推測する。

4. 樽本照雄は、『繡像小説』創刊号が記述通りに発行された事実を確認した

(上海『同文滬報』光緒二十九年五月初七日)。天津『大公報』、『東方雜誌』、『消閑報』などの記事にもとづき、以下の推測を提出した。

第一年份二十四冊到光緒三十年十二月才出版了。比預定的計畫晚九個月。

第二年份的第二十五期至第四十八期到光緒三十一年年底出版。比預定的計畫也晚了九個月。

第三年份的第四十九期至第七十二期到光緒三十二年年底出版、才結束了。比預定的計畫晚了十個月。

5. 『繡像小説』終刊について、張純説は光緒三十三年七月以降だとし、樽本照雄説は光緒三十二年年末である。この点が両者不一致。

6. 『繡像小説』発行遅延説は、単に雑誌の発行問題にとどまるものではない。文学史の書き換えを要求しているのだ。すなわち、李伯元の死後も『繡像小説』は発行され続けており、李伯元の作品とされている「文明小史」「活地獄」は、その一部分が李伯元のものではなくなる。

7. 南亭亭長という筆名は、李伯元単独のものではなく、歐陽鉅源との共同筆名である可能性が高い。

以上、私が10年近く以前よりくりかえし述べていることを簡単に紹介した。

『繡像小説』の坂下亀太郎「理科遊戯」

『清末小説から』第83号(2006.10.1)に掲載。神田一三名を使用。坂下亀太郎の名前は、『繡像小説』の目録を作成した当時から気になっていた。手がかりのないまま長い時間が経過した。インターネットの発達で、自宅から古書の検索ができる。ようやく入手した『理科遊戯』なのだ。

小説専門雑誌の『繡像小説』に、毛色のかわった作品が掲載されている。

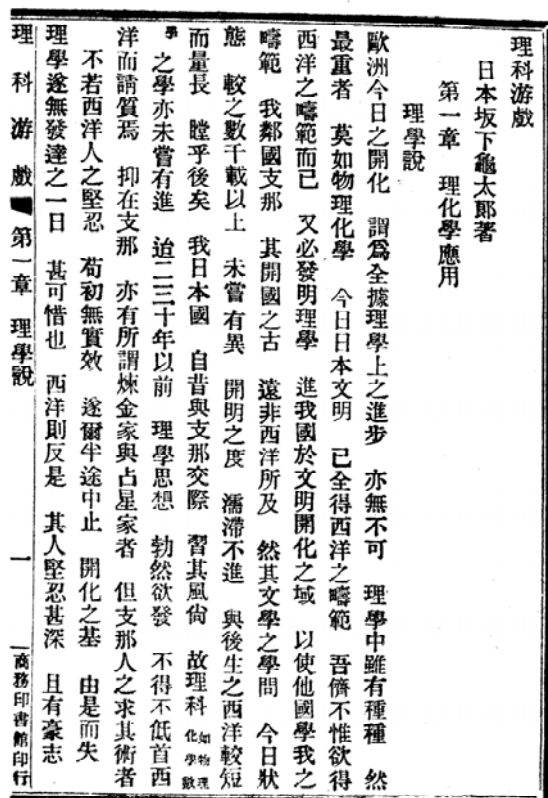
日本坂下亀太郎著「理科遊戯」という。創刊号と第2期にだけ掲載された。それも文章の途中で、つまり中断状態で終わっているのだ。該誌において、長篇作品ならば連載になるのが普通である。その中であっての登載中止は目立つ。

日本語表題が「理科遊戯」で、漢訳がそれと同じになっている。遊戯だから小説雑誌にふさわしい、と思われるかもしれない。科学を主題とした幻想小説が『繡像小説』に連載されたことはある。いわゆるSF (science fiction または fantasy) だ。しかし、「理科遊戯」は小説ではない。その内容は、理科についての啓蒙的説明なのだ。

1例をあげよう。「自動汽車」において説明するのは、遠心力についてである。原文は、図をそえて遠心力を応用した遊びを紹介する。ループ状の線路を作り玩具の馬車(原文のまま。表題と一致しない)を走らせると、勢いにのってループを外れることがない。1種の遊戯法である。漢訳では、「如一図」と原文通りに翻訳している。ただし、『繡像小説』はなぜだか原書に掲載された図を削除する。「繡像(挿し絵)」を売り物にしている雑誌であるにもかかわらずだ。版元の商

務印書館は、本文に凸版で図を組み込む技術は持っていたはずだが、それをしていない。該誌の本文は活版で繡像は石印である。印刷物の種類によって使い分けていたのだろうか。いずれにせよ、図のない遊戯法は、言葉だけで説明されても理解するのはむづかしい。

坂下龜太郎の『理科遊戯』は、「理学的工芸的の著書少き」（緒言）状況を憂え、歴史、政治、小説の上をいく啓蒙書のつもりで執筆されたものだ。少年たちにむけて書かれた「理化学的応用の遊戯と工芸の趣味を含みたるもの」



という種類の著作である。ゆえに、「通俗教育全書」中の第51編なのだろう。

私が見たのは上巻だけだ。あるいは、下巻は発行されなかったかもしれない。以下のような構成になっている。

坂下龜太郎『少年必読 理科遊戯』上巻 東京・博文館 明治廿五（1892）年十二月三十日 通俗教育全書第51編。200頁

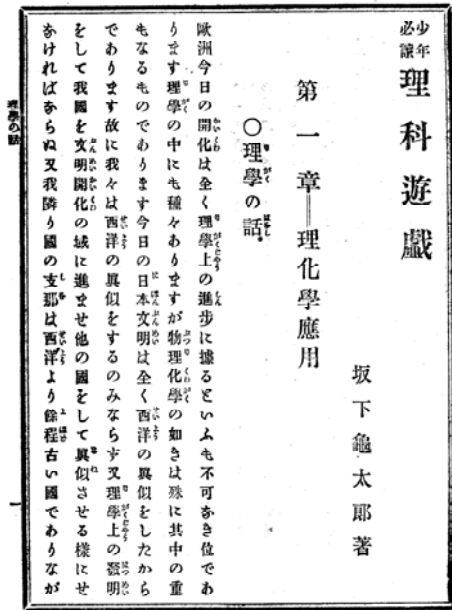
緒言

目次

第一章 理化学応用

第二章 数学応用

第三章 手芸遊戯



第四章 知慧叢談

坂下龜太郎 (1870-1907) *1、新潟の人。号は愛柳だという。博文館に入社し、雑誌『幼年雑誌』などを編集した。編集をしながら「幼年全書」の単行本を数冊書いている。著作の1冊がこの『少年必読 理科遊戯』なのだ。

くりかえしになる。原著の意義は、わかる。だが、その漢訳がなぜ『繡像小説』という中国の小説専門雑誌に掲載されなければならないのか。

各章の漢訳と日本語原題を対照しておこう。「×」をつけた文章は、漢訳がなされていない。

日本坂下龜太郎著「理科遊戯」

『繡像小説』第1期癸卯五月初一日 (1903.5.27)

第一章 理化学応用 (原題同じ)

理学説

理学の話

自動汽車	自動汽車
船浮水上	面白き船浮べ
『繡像小説』第2期癸卯五月十五日(1903.6.10)	
巧妙之合図	巧妙なる合図
可恐之怪物	恐しき怪物
新式幻灯	新式幻灯
異人之蹣躑	異人の蹣躑
煙上灯	速製ガス灯
幻灯製造法	幻灯製造法
×	奇妙なる燭光
無根之火	根なし火
簡單之水車	簡單なる水車
×	新工夫の水
鶏卵之喜怒	鶏卵の喜怒
×	百色眼鏡
水独楽(独楽即転盤陀)	水独楽
雲竜之術	雲竜の術
旋風之試験(中断)	旋風の試験

漢訳は、日本語原書全200頁のうちの33頁でしかない。漢訳のわずかな分量しか『繡像小説』には掲載されなかった。やはり理科の啓蒙的説明が、小説専門雑誌という性格にはあわなかったのが原因だと私は考える。総合雑誌ならば、別の話になるだろう。

それでも掲載されたのには、理由があるはずだ。

私が見るところ、坂下の文章の冒頭部分が『繡像小説』の編集長には必要だった。

日本語原文と漢訳を併記した方が理解しやすい。日本語の変体仮名は書き直し、適宜、句点をつけた。読点は原文のまま(訂正した箇所もある)。ルビは省略。漢訳原文は句読点のかわりに1字を空けている。

理学の話。

欧州今日の開化は全く理学上の進歩に據るといふも不可なき位であります。理学の中にも種々ありますが物理化学の如きは殊に其中の重なるものであります。

理学説

欧州今日之開化 謂為全據理学上之進歩 亦無不可 理學中雖有種種 然最重者 莫如物理化学

坂下は、物理化学のふたつをまとめて「理学」と称している。漢訳は、見てのとおり逐語訳といていい。ヨーロッパが発展しているその根本には、物理化学の進歩があることを強調するのだ。

今日の日本文明は全く西洋の真似をしたからであります。故に我々は西洋の真似をするのみならず又理学上の発明をして我国を文明開化の域に進ませ他の国をして真似させる様にせなければならぬ。

今日日本文明 已全得西洋之疇範 吾儕不惟欲得西洋之疇範而已 又必発明理学 進我国於文明開化之域 以使他国学我之疇範

ヨーロッパと同じ意味で西洋を使う。西洋に追いつくためには、そのマネをしなければならぬ。日本を文明開化の水準に押し進めるためには、それが必要だという考えだ。追いつけ追い越せである。少年たちを啓蒙する文章だから、主旨を明確にしている。

又我隣り国の支那は西洋より余程古い国でありながら唯文学の学問のみにて今日の状態は千年二千年も同じ事にて少しも開明の度は進まず却て後から生れた西洋に何事も後れてあります

我鄰国支那 其開国之古 遠非西洋所及 然其文学之学問 今日状態 較之数千載以上 未嘗有異 開明之度 濡滯不進 与後生之西洋較短而量長 瞠

乎後矣

坂下は、中国批判を展開する。中国にあるのは「文学の学問」だけだという。だから中国は西洋に大きく後れた。ここも日本語原文の逐語訳になっている。省略も加筆もない。『繡像小説』の編集長は、中国の雑誌に中国批判の文章を掲載するにあたり、躊躇していない。

さて又我日本国は余程古昔から支那と交際いたし支那風のみ学ひし故兎角今日となりましても理学（割注：物理、化学、数学の如き）を学ぶの心進まず二三十年以前までは理学の思想は葉にたくも無い程でありました故西洋人に頭を下けねばならぬ様になりました

我日本国 自昔与支那交際 習其風尚 故理科（割注：如物理化学数学）之学亦未嘗有進 迨二三十年以前 理学思想 勃然欲発 不得不低首西洋而請質焉

「理学の思想は葉にたくも無い程でありました故」という消極的表現を「理学の思想がにわかになり起こり [理学思想 勃然欲発]」とやや積極的とも取れる漢訳にかえた。そのためその後の表現が少し異なることになっている。ただし、日本が古来より学んできた中国が、物理化学数学の方面で頼りにならないという原文の批判は、十分に伝わっている。

勿論支那にも煉金家や占星家がありましたれど、支那人は、西洋人のやうに何処までも遣り通すといふ氣象が無いと見えて煉金煉丹の目的を貫くとか出来ず遂に半途にて立ち消えの姿となり、真の開化の土台となるべき理学の考を失ひました。

抑在支那 亦有謂煉金家与占星家者 但支那人之求其術者 不若西洋人之堅忍 苟初無实效 遂爾半途中止 開化之基 由是而失 理学遂無發達之一日 甚可惜也

中国人は、物事を探求するのに持続力がない、と坂下は書く。日本語原文の中国人批判は、そのまま翻訳されている。

之に反し西洋にては実に忍耐、勉強、豪志の人が多く蒸気船、電信、汽車、電話、蓄音器其他いろいろの便利の物を發明いたし、今日我々は皆使用いたしております。吾々も大勉強で理学を学び富国強兵の種を蒔かねばなりません。

西洋則反是 其人堅忍甚深 且有豪志 故能發明蒸気船 電信 汽車 電話 蓄音器 及其他種種便利之物 以為我今日所用 吾儕有鑑於此 安得不抖擞精神 深究理学 以蒔富国強兵之種哉

坂下が強調したのは、「理学を学び富国強兵の種を蒔」くことだった。日本の当時の世情を反映した主張であることはいうまでもない。それをそのまま漢訳した文章が、中国の小説専門誌に掲載されているというわけだ。

私は性来文学の方が嗜好でありまして常々文書詩巻は少しも傍より離しません位でありますけれども能く能く考へて見ますと文学は実に割合に贅沢なる学問で到底理学程著しく国家に効益を与ふることは出来ないと思ひました故に私は自分の嗜好な学問を止して是から皆様と理科の学問を勉強しようと思う則ち一己の私情を割いて国家に有益なる学問を諸君に勧め申します。

余素嗜文学 文書詩巻 常不少離左右 然嘗細思之 文学者乃無用之学 雕虫之技 不若理学之有益於国家也 故余断己之所好 而勉力於理科 尤望世之与余同病者 割一己之私愛 而從事有益於国家之学 是則余之大願也

坂下がここでいう「文学」とは、詩歌小説戯曲などの文芸を指す。だが、中国では、伝統的には学問学芸のことだ。だからこそ「文章の字句を飾る [雕虫之技]」といい「無用之学」に結びつく。日本と中国では意味の差が生じている。結局は、国家に有益な学問として理学あるいは理科を位置づけているのは一致するから、よしとしよう。

つづいて、坂下はひとつのエピソードを紹介する。ハンブルクのブランドという人物が、小便を研究するという「実に笑ふべきの極といわなければなりません」その結果、燐を発見して化学上に一進歩をあたえたという。つまり、「児戯に等しき企てが却つて今日の如く理学進歩の緒を開いた」といいたいのだ。この部分も原文に忠実な漢訳となっている。ここでは省略し、そのつづきを示す。

只今申上げました通り西洋ではかの煉金家や占星家か仕損ひをしても少しも力を落さず辛抱強く試験をするので目的の物を作ることか出来ぬにせよ、却て是が偶然の助けになりて別に色々の発明をして今迄分からぬ事柄が次第に分明になりだんだん年数を経過するに随ふて学問の味も解り大造な仕業か出来てまゐります、そこで従来考が又間違つて居る事を悟り遂に眞の考か出る様になります夫れ御覧なさま古への煉金術が色々に変化して今日の化学となり占星術が其精神を入れ換へて今の天文学となりました

在泰西諸国 之数家者 当其從事此術也 縦有損失 志不少衰 抱辛苦勤試験 務以達其目的 今日不成 期以明日 経歴年数 而学問之途日広 大造之業乃成 蓋昨以為是 今悟為非 探索研究 真理始出 理固然也古之煉金術者 变化無窮 即今之化学也 古之占星術者 觀察天象 即今之天文学也

日本語の「従来考が又間違つて居る事を悟り」を翻訳して「昨日は是と思つたものが、今日は非であると悟る [昨以為是 今悟為非]」とはどうか。日本語では進歩の方向を強調するのだが、漢訳では混迷への変化になってしまった。翻訳者には、その口調の方がなじんでいたのかもしれない。

固より西洋にも東洋にも煉金とか占星という様な考は最初は共にあつたに違ひかないが唯東洋（日本支那等）では其考を試験する精神が弱くして、之を仕果すことか出来ず為に貴重なる理学思想の発達を妨害いたしました

西洋与東洋 煉金家占星家之思想術 固初無少異 惟東洋（支那日本等）則精神脆弱 思想窒塞 不能窮其所蘊

いうまでもなく、日本語の「東洋」は範囲が広い。念のために坂下は、「日本支那等」と注釈をつけた。漢語で「東洋」といえば、日本をさす。漢訳者は、坂下の注釈を取り入れ、しかも支那を日本の先にする工夫をつけ加えた。物事を追求する辛抱強さに劣る点では、日本も中国も同じことになる。

西洋では之に反し辛抱強く此考を研究し若し其一人一代にて出来なければ、其子に志を示めして其業をつがせ、其人出来されば又其子に其業をつがせる様に致しました。決して古人に無駄骨を折らせずして理学上の土台を打ち立て遂には今日の如き東西の開化に雲泥の差を生ずる様になりました。

西洋不然 抱其毅然不屈之志 以研究斯学 若非一人一代所能竟也 則示其志於子 使繼之 其子又未能竟也 則又示其志於子 使繼之 要之不達其目的不止 於理学上建此基礎 遂成今日之結果 此東西文化 所以判若雲泥也

以上が、冒頭部分である。進んだヨーロッパがあり、後れた中国が存在する。日本はその中間にあって、西洋のマネをして追いつかなければならない。坂下の認識は、福沢諭吉『文明論之概略』(1875)から来ているのは明らかだろう。

坂下の考えは、国家に無益の(日本でいう)文学を捨て、富国強兵のため、国家の利益になる物理化学の勉強をしよう、と少年たちに勧めることだ。小説専門雑誌である『繡像小説』を発行する主旨とは、基本的に相容れない考えであるといわなければならない。

中国批判の部分を読んで心穏やかな中国人読者はいないだろう。しかも、日本人が行なう批判なのだ。それをあえて『繡像小説』に掲載するのは、それなりの理由がある。

中国の読者に、目覚めよ、という意味の警告をあたえる意図があったとしか私には考えられない。日本人が行なう中国批判をそのまま掲載する。自分で書くよりも、坂下の文章を漢訳する方が、衝撃度が強くより効果的に違いない。小説雑誌発刊の主旨とは矛盾していても、『繡像小説』編集長にとっては、なお、掲載を必要とした種類の文章だといえる。

それにしても、小説専門雑誌に理科の啓蒙的文章では、水と油であった。連載が中断される理由である。

【注】

- 1) 坂下亀太郎については、堀田穰「第11巻解説」(『叢書日本の児童遊戯』第11巻 株式会社 クレス出版2004.7.25)によった。坂下の生没年は、「明治三年一月二日生まれ、明治四十年十月二十六日没」だと堀田は書いている(3頁)。明治三年の「一月二日」が旧暦なのか新暦なのかは、説明がないから不明。

【増補附記】坂下亀太郎の該文は、『小説月報』創刊号(1910.8.29)に掲載されている。次に指摘がある。相浦泉「『小説月報』の研究」『求索 中国文学語学』未来社1993.1.30。286頁

商務印書館『涵芬楼新書分類総目』について

『清末小説』第35終刊号（2012.12.1）に掲載。沢本郁馬名を使用。

商務印書館に編訳所が設立されたのは、創業からかぞえて5年後の1902年だった。

商務印書館は、名前の「印書館」が表示すとおり印刷を主要な業務として創立された。印刷業を営みながら業務を拡大するためのひとつの足がかりにしたのが、教科書の編集発行だ。社主の夏瑞芳は、印刷と出版は異なることを知っていた。注文を受けて必要な印刷物を作る。注文主がはっきりしているかぎり収入を予定することができる。だが、自分で書物を発行するとなれば、それとは異なる。出版を行なうには危険性がつきものである。彼はそれを知る経験があった。社会に受け入れられる出版物を刊行するためには、編集段階で内容を吟味しなければならない。そのためには独立した専門組織が必要だ。まわりからの助言を得て、夏は編訳所の重要性を理解していた。日本金港堂との合併交渉が、表立たないよう静かに進行していた時期にあたる。1903年11月、商務印書館と金港堂の合併が正式に発足した。東京の金港堂から雨山長尾楨太郎らが上海に派遣される。日本人の彼らが所属したのが、この編訳所だ。長尾楨太郎たちは、ただちに商務印書館の担当者たちと共同して小学生用国文教科書を編集しはじめた。同じ日本人でも印刷担当の木本勝太郎は、商務印書館印刷所に配属されたのだろう。

1904年、編訳所に資料兼図書室が設置された。

編訳所の図書室は、参考書籍を集めていた。編集に役立てるのが目的だ。所長の張元済がその方針を実行していたのは周知のことだろう。最初は内部閲覧に限っており、一般には公開しない。蔵書楼、つまり図書館を「涵芬楼」*1と称するのは1910年のことだ。

蔵書が増加するにしたがい、それを整理分類する必要にせまられる。保管管理を強化するために蔵書目録を編集することにした。整理の責任者は孫毓修であった*2。

1 阿英が言及した『涵芬楼蔵書目録』

阿英が『晚清小説史』（1937）の冒頭で紹介している。清末小説を収録したいいくつかの目録をあげたそのなかに『涵芬楼新書分類^{ママ}目録』がある（別の箇所では『涵芬楼新書分類総目』と書く。以下『新書総目』と略す）。『新書総目』に掲載された書物のうち刊行が時期的にもっとも遅いのは、1911年だという。わざわざそう説明するのを見ると、刊年を印刷した奥付はないことがわかる。書名からして明らかに商務印書館編訳所の蔵書目録だ。阿英は次のように説明する。その「文学類」には、翻訳は400種近く、創作は約120種を収録する、と。

阿英は、清末小説に関連して蔵書の多い例として『新書総目』をあげたのだった。彼自身が『晚清小説史』改訂版（1955）でいうのには、少なくとも1,000種以上、涵芬楼所蔵の約3倍^{ママ}*3を知っている、と。阿英がここで知っていると思うのは、単行本を実物で所蔵しているという意味にちがいない。集書の時間差があるから両者を単純に比較することはむづかしい。そこをあえていえば、小説について当時の涵芬楼よりも阿英個人の蔵書のほうがはるかに多かった。阿英が早くから清末小説に注目していた証拠のひとつだといっていい。また、涵芬楼蔵書がのちのち話題にのぼるのは、阿英のこの言及があるからだ。

『新書総目』は、相当数の創作、翻訳作品を記録しているらしい。私は、該目録を見たいと思った。ところが、その機会を得ることができない。『涵芬楼蔵書目録』のことを頭の隅に置く。『新書総目』と限定しないのは、『涵芬楼蔵書

目録』に『新書総目』が含まれているという予想による。

それにしても奇妙なことだ。阿英が言及したのち、該目録について説明した研究者はいない。いろいろ推測する文章はある。だが、目録そのものを手にとって説明する文章は、長い間でてこなかった。

実際に刊行された書籍の目録だ。たとえ蔵書そのものを見ることはできないにしろ、目録だけでも研究にとっては有用であるに違いない。だが、手にした人は少ないらしい。私は商務印書館の関係者に、該目録を所蔵しているかどうか質問したことがある。昔のことだ。その人も見たことはないという返答だった*4。

商務印書館編訳所にとっての蔵書目録は、内部資料、あるいは内部発行ということになるのか。当初の形態が内部向けであるならば、目録は外部に出てこない。それが普通だろう。ところが阿英は見ている。彼の資料捜査網は、かなり深いところまでひろがっていたわけだ。

2 『涵芬楼旧書分類総目』

ものはためし。『新書総目』と指名して中国書籍専門店で注文したことがある。試したかいがあった。私のもとに届いたのは複写だった。原本と複写は違う。だが、内容を見ることができれば、複写であろうとかまわれない。手にとれば、『旧書総目』だった。奥付はない。刊行は1912年か*5。

本文上部欄外には、「涵芬楼蔵書目録」と印刷されている。これが蔵書全体の名称だと理解した。書店が送ってきた複写は、間違いではない。ただ、阿英が手元において説明した目録ではないことも事実だ。つまり、私が見たいと思う目録『新書総目』ではなかった。

涵芬楼蔵書のなかの「旧書」部分を選び出して「旧書分類総目」というのか。ならば、それと対になった「新書」の総目録なのだろうか。関連する複数の文章を読むと、いくつかの呼び方があるらしい。『旧書総目』を見ているだけでは、そのほかと簡単には区別ができない。

参考までに示す。『旧書総目』の構成は、次のとおり。借閱図書規則、旧書編

目芻言、目次（部／類／属の3級に分ける）、目録本文、続編 である。

複写には、扉、奥付ともに存在していない。表紙はついているにしても文字の類は印刷されていないらしい。ゆえに複写されていない。

冒頭に掲げられた「借閱図書規則」を見る。涵芬楼の蔵書全体について説明している。関係する部分について説明しよう。

番号のかわりに千字文（元は玄の避諱）を使い、蔵書を以下の8門に分けている。

- 天字 旧書
- 地字 教科書及教科参考書
- 元字 東文書
- 黄字 英文書
- 宇字 日報雑誌章程
- 宙字 地図掛図雑画
- 洪字 照片明信片
- 荒字 碑帖

この分類は、今に見る一般図書館の分類方法とは違う。また、のちの商務印書館が自社刊行物を分類するさいに採用した規則とも異なる*⁶。当時の商務印書館編訳所が独自に考案した分類だ。書籍を編集するにあたって参考になる書籍を、効率よく引き出すことを優先させた。その結果がこのような分類になったらしい。いかにも出版社の資料室兼図書館のように思える。

「天字 旧書」に所属する書籍を集めて上記のとおり『旧書総目』と呼んでいる。

目次ページの頭に目を引く箇所がある。「涵芬楼旧書分類総目」と明記してあるのだ。これが『旧書総目』の書名だと考えていいだろう。

目録本文は、書名、冊、字、号の各欄にわけて2段組で記録される。

「書名」「冊」は、そのままを記入する。

「字」欄には「天」1字が入る。すべてが「天字」に属する書籍だから、記入は必要でないように思う人もいるだろう。しかし、図書管理者からいえば、8門

のどれかが明記されていなければ本の捜しようがない。必須なのだ。

「号」は、受け入れ順につけた書籍の個別数字だと最初は推測した。だが、よく見ればそうでもない。複数の書籍が同じ数字を共有する。さらに、巻末の「続編」を見る。あとから増補したのであれば「号」は、すべてが4桁かといえば、3桁のものも混じっている。おおよその配置場所を示しているのかもしれない。

収蔵庫内部を大きく8門にわけ、書籍は番号順に配置されていたことが想像される。そうだからこそ閲覧請求があったとき、目的の書物をすぐさま取り出すことができる。

分類表をもういちど見る。2番目の「地字 教科書及教科参考書」は、涵芬楼蔵書の特徴を示して象徴的だ。金港堂と合併した以降の商務印書館では、主力刊行物が教科書だった。そのことの反映にほかならない。教科書を編集するにあたって必要になる材料を収蔵している。他社の教科書を手元において比較することもあっただろう。

3番目の「元字 東文書」とは、日本語書籍を意味する。ひとつの門を構成するほど大量に所蔵していたらしい。参考価値が高いという認識があったと考えられる。

いくつかの疑問がでてくる。

「地字」以下の各門ごとに目録が別に編集されたのだろうか。たとえば、地字ならば『涵芬楼教科書及教科参考書分類総目』とか、元字では『涵芬楼東文書分類総目』などなど。そのような目録があるとは、聞いたことがないのだが*7。

また、小説という分類が涵芬楼の蔵書には設定されていないことに気づく。参考図書としての小説は、編訳所にとって必要がないという考えだろうか。だが、阿英の説明を読むかぎり、そのようなことはあり得ない。彼のいう「文学類」には、創作と翻訳の両方が収録されている。あるいは、上の分類のひとつに吸収されているのか。可能性があるとするれば、「地字 教科書及教科参考書」あたりになるか。いや、当時の小説が「教科参考書」になるだろうか、という疑問もないではない。資料が少ないからいろいろと考えてしまう。

上述のとおり、阿英は「文学類」と書いている。小説史のなかでとりあげる創作と翻訳だから、小説類を含んでいることに間違いはないだろう。しかし、くり

返しになるが、蔵書の8門には、独立した「文学」も「小説」もその名称がない。彼がその目録から抽出して文学類といったのだろうか。あやふやな推測ともいえない想像しかできない。

「旧書」目録については私の手元に複写があるからわかる。だが、「新書」目録との関係はどうなるのか。漠然と、旧書に対する新書と2分して考えていた。どうも違うらしい。阿英の説明とも、どこか食い違っている。

書名を見るだけでは問題は解決しそうもない。さがし続けて数年が経過した。

3 いわゆる『涵芬樓地字号目録』

汪家熔輯集「五清末西学出版社概覽」(以下、「概覽」と略す)が、汪家熔輯注『中国出版史料・近代部分』補卷下冊(武漢・湖北教育出版社2011.2。182-411頁)に掲載されている。

これは、いくつかの図書目録にもとづき、汪家熔がそれらを再編集して作成したものだ。題名は「出版社概覽」となっている。いかにも当時の出版社について解説したものに見える。だが、そうではない。その内容は出版社別に整理しなおした図書目録である。出版社の名称を現代中国語音abc順に配列した。それぞれの出版社が清末時期にどのような刊行物を世に送り出したのか、それが一覧できるようにになっている。図書内容による分類はしていない。刊行されたあらゆる書籍が含まれる。簡単にいってしまえば、清末時期出版社別書籍一覧だ。汪が整理した結果、550以上の出版社が、約4,000種の書籍を出版していたことが判明する(該書185頁)。

「概覽」本文の記述についておおよそを紹介しておく。

まず、さきほどのべたとおり既存の目録から出版社を抽出し、現代中国語音順にならべる。汪家熔の工夫は、まさにこの部分にある。出版社には通し番号をふった。刊行した書籍名、著訳者、発行年を記録する。各書の末尾に典拠として数字などをつける。汪家熔がそのほかに参照したもの、たとえば叢書であれば、典拠欄に「叢書」と記入する。

再編集の際に使用したという目録は、以下のとおり（便宜のために数字をふる）。

- 1 『涵芬樓地字号目録』（以下、『地字号目録』と略す）
- 2 上海図書館編『近代現代叢書目録』
- 3 当時の書籍に掲載された広告4本

1『地字号目録』が再編の主体である。主体であるから圧倒的な数を占める。問題が多いから後で述べたい。

2の叢書目録について、汪家熔は書名を示すのみ。私が出版社と刊年を次のように補う。香港・商務印書館1980.2。

3の広告は、4本だけにはとどまらない。「概覧」本文を見ると典拠（『地字号目録』のページ数など）を空欄にしている作品がある。これが広告を示すと思われる。それらの明細は、次のとおり（出版社の前にある数字は、出版社別の通し番号。カッコ内の数字は「概覧」のもの）。

82改良小説社（209-210頁）、189鏡今書局（245頁）*8、208鏡今書局（249頁）、384時報館（339頁）、448小説進歩社（365頁）など。

ほかに、汪家熔は説明していないが、上の3件とは別物がある。典拠欄に「実物」と示すものを収録する。413通雅書局の4種である（346頁）。文字通り、汪家熔の手元にある実物で補ったらしい。

以上の2と3は、それほど量があるわけではない。再編集にあたって主として使用したのが、1の『地字号目録』だ。その概要について、汪家熔の説明を読みながら紹介する。

該書の出版年は宣統三年（1911）、全435頁の分類目録であるという。ページ数（いわゆるノンブル）は、通しでふられている。商務印書館図書館が独自に考案した3級の分類表〔三級分類表〕を採用する。すなわち、第1級は、哲学、教育、文学、史地〔歴史地理〕、政法、理科、数学、実業、医学、兵事、美術、家政、叢書、雑書の14類だ*9。見てわかるように、出版物の全体をおおっている。

収録された書籍の出版年は、光緒二十五年（1899）*10から宣統元年（1909）*11まで、3,689種を収録する（183頁）。汪家熔は、刊行物は全体で「約4,000種」だと書いて

いる。そうすると、『地字号目録』は、全体の約92%を占める。再編集の主体であるというにふさわしい。

4 いくつかの疑問

私になぜ「問題の」とつけるのか。上にみる汪家燊の説明は、大事なことをいくつか脱落させているからだ。「概覧」本文をみただけで、その不足部分が自然にわかる。「疑問」と書いて数える。

書名にある「涵芬樓」は、いうまでもなく商務印書館の蔵書樓だ。そこまではよい。では、「地字号」とはなにか。今まで見てきた『旧書總目』、あるいは、のちに紹介する『新書總目』とは、どういう関係にある目録なのか。汪家燊は説明しようとはしない。

疑問1：『地字号目録』は、なじみのない書名だ。汪家燊以外にそれを言った人はいない。当然ながら、その『地字号目録』は、はたして本当の名称なのか、と疑問がでてくる。

手がかりは「地字」である。読者はお気づきだろう。前出『旧書總目』に8門があった。「天」とくれば次は「地」だ。「天字」に分類された書籍を集めたのが『旧書總目』だった。ならば「地字」は、「教科書及教科参考書」を指すに違いない。

疑問2：これこそが、私の捜していた『新書總目』そのものではなからうか。

該目録の「出版年は宣統三年」だ、と私は紹介した。汪自身が、「宣統三年の《涵芬樓地字号目録》をさがしあて〔找到一個宣統三年的《涵芬樓地字号目録》〕」（183頁）と記述しているところからそう読みとった。

しかし、奥付に刊行年が宣統三年だと明記してあるかどうかは、別の問題になる。『涵芬樓蔵書目録』を紹介する今までの文章を読めば、この目録には奥付はつけられていないことがわかっている。理由は簡単だ。内部資料だからそれらを記す必要はなかった。彼は奥付に拠って宣統三年だと書いているわけではないだろう。

疑問3：汪家熔は微妙な説明のしかたをしている。収録書物の発行年から類推して宣統三年の刊行だといっているにすぎない。つまり、奥付の有無について言明を避けているように思われる。

第1級14類の分類は、目録(目次)に掲げてあるものを書き写したのだろう。汪家熔は、それをもとにしているから哲学、教育、文学などの明細を示すことができた。

疑問4：では、「3級の分類表[三級分類表]」とは、どういう種類の分類なのか。第1級が14類に分けられているのはわかる。汪は、その細目をあげている。しかし、第2、3級は具体的にいえばどういう内容か。詳細が不明だ。

疑問5：『地字号目録』の構成内容が『旧書総目』と同じであれば、目次の頭に書名をかかっているに違いない。それを取りだして『涵芬樓地字号目録』だというのだろうか。旧書総目が『涵芬樓旧書分類總目』と称したのとは、書名をならべると字面の釣り合いがとれない。目次を見たはずだが、なぜわざわざ『涵芬樓地字号目録』と称するのか。その理由がわからない。そこに再びたちもどる。

さきほど「ノンブルは、通しでふられている」と私は書いた。ページの通し番号といっても同じことだ。「概覧」では、各作品のうしろに典拠として明示してある。ついでに言えば、出版社別刊行物の並べ方は、このページ順になっている。

ページが通し番号であるのは当たり前だと思われるかもしれない。ところが、『旧書総目』は経史子集と叢書の各部に分類し、それぞれ別に新しくノンブルをたてている。通し番号ではない。

疑問6：それにくらべると、『地字号目録』が採用したのは違うやり方になる。本当にそうなのか。

汪家熔輯集「概覧」は、前述したように『地字号目録』を再加工するのが編集の基本方針だ。また、「基本の原則は単行本にもとづいている[基本原則是根拠書]」(186頁)。目録によって目録を作るのだから原本の誤りを引き継ぐのもしかたがない。これも汪家熔の説明だ。縦のものを横にただけ、といいたいらしい。

書きすすただけだから、簡単な作業だと思うかもしれない。しかし、それは違う。写し間違い、書き間違い、読み間違い、勘違い、さらには見落としなどから免れるのはむつかしい。自分の経験からいっている。小説類にしぼっても、本稿附録

の正誤表くらいの量になる。原物の書籍を見ていないから、というのはいいわけにならないだろう。

読み間違いとは次のような例だ（以下は、主として小説類を検討する）。

445香港中国日報社[館]^{ママ}にまとめられた作品がある。最初の頁と行は、「概覽」を収録する『中国出版史料・近代部分』補巻下冊のもの。

364頁-1行から365頁7行まで

幾道山恩仇記上編 法国亜歴山大仲馬著 抱器室主人訳 光緒三十三年 125

幾道山恩仇記上編上編巻一 法国亜歴山大仲馬著 抱器室主人訳 光緒三十三年 125

幾道山恩仇記上編上編巻二 法国亜歴山大仲馬著 抱器室主人訳 光緒三十三年 125

幾道山恩仇記上編中編巻一 法国亜歴山大仲馬著 抱器室主人訳 光緒三十三年 125

なぜこのように同じ書名らしきものが配列してあるのか。不思議に感じる。共通している箇所をしいていえば、書名が『幾道山恩仇記上編』だということくらい。上の表示は、『幾道山恩仇記上編』にまた上編と中編があることを意味する。

原文 [涵訳74] (『新書總目』文学部、小説類、翻訳之属。74頁) は以下のようになっている。2行のみだ。

幾道山恩仇記上編 / 法国亜歴山大仲馬著 抱器室主人訳 / 香港中国日報館 / 清光緒丁未年 / 一 / 地 / 四五九九

又 上編巻一二 中編巻一 / 又 / 又 / 又 / 三 / 地 / 四五九九

説明するまでもないだろう。書名は『幾道山恩仇記』だ。上編で1冊を所蔵す

る。次行の「又」は同じ作品である。その上編が2巻あり、中編で1巻、合計3冊が蔵されている。請求番号は同一だから、同じ場所に置いてある。原文に記された発行年の「光緒丁未年」は、編者のほうで「光緒三十三年」に換算したらしい。

常識の範囲内で読んで、奇妙だと気がつくはずだ。「上編」が作品名の一部だと思いこんだ。間違った理由だろう。

疑問7：私が「単行本」と訳した「書」からして、『地字号目録』は単行本だけを収録していると汪家熔は考えたらしい。それは正しいのか。

書目をよく見れば、単行本では説明のつかない作品がある。

354商務印書館が刊行した書籍の一部は次のように記述する。

例1：316頁-9行 月球殖民地 荒江釣叟 137

この1行は、こう読む。

354商務印書館に集められた作品だから、発行元は商務印書館である。書名が『月球殖民地』、著者は荒江釣叟。発行年は空白、つまり記載されていない。最後の数字は、典拠を示す。もとづいた『地字号目録』137頁に記載されているという意味だ。

これを見れば、刊年不明の商務印書館発行『月球殖民地』が、単行本で出版されたことになる。普通は、そう考える。汪家熔は、編集方針は単行本に基づいた、とわざわざ説明したのだ。

樽本照雄編『清末民初小説目録』を検索し照合してみる。

まず、作品名が違う。正しくは「月球殖民地小説」という。初出は、『繡像小説』第21-62期（刊年不記）掲載である。雑誌連載のままで終了した。当時この作品が単行本で刊行されることはなかった。

この事実を知っていると、上の「概覧」（すなわち『地字号目録』）に見える作品がどういう種類のものかわからなくなる。初出が雑誌であることを示唆しているわけでもない。

449小説林にも同様の例がある。

例 2 : 365頁-3行 電冠 陳鴻璧 133

ここにあげられた『電冠』という翻訳作品は、原著者不記、訳者が陳鴻璧で、小説林が発行元である。そうとしか読みとれない。

まず、発行元を「449小説林」にしているのがすこし気になる。出版社としてならば「小説林社」と表示してほしい。ただし、「小説林」を出版社の意味で使用することもある。原文のままなのだろう。

これも『清末民初小説目録』を見れば、雑誌『小説林』第1-8期（光緒三十三年正月-丁未十二月）に掲載されている。単行本にはなっていない。

ほかにもいくつかの異同が見つかる。

506月月小説社のばあいはこちらだ。

例 3 : 384頁8行 宜春苑 月月小説社 134

版元が月月小説社であり、また訳者も月月小説社という意味である。ここもなぜだか刊年不記になっている。

ところが、該作品は、(法)某著、無歆羨齋訳で雑誌『新小説』第6号-第2年第2号(第14号)(光緒二十九年六月十五日-刊年不記[光緒三十一年二月](1903.8.7-[1905.3]))に連載された。月月小説社とはもともと関係がない。また、単行本でもない。なぜそのような誤りが生じるのか。理由は不明とせざるをえない。

少しとまどい、疑問を感じるのは、次のような例だ。こちらも月月小説社の刊行である。

例 4 : 384頁-7行 警黄鐘伝奇与盗偵探血之花合集 祈黄楼主人 139

表記がないから刊年不記に分類される。小説にしては長い書名だ。見れば「警黄鐘伝奇」「盗偵探」「血之花」の3作品を「合集」している。共通の作者が祈黄楼主人という意味になる。そうとしか読めない。

これも調べてみれば、それぞれの作品は別々なのだ。

「警黄鐘伝奇」の著者は祈黄楼主人でよい。しかし、該作品は雑誌『新小説』に連載された。「盗偵探」は、解朋著、迪斎訳述で、雑誌『月月小説』に連続掲載だ。「血之花」というと、蘇格蘭小説家施高脱（スコット）原著、猿述、虫筆と表示し、雑誌『新小説』に連載だということがわかる。

「合集」というかたちで刊行されたものは存在しない。異なる3作品の著者を祈黄楼主人ひとりに代表させている。掲載雑誌はすべて省略し、発行元も月月小説社で一括りにした。実際にはないはずのものが、ここに掲げられている。しかも、刊年不記であるところは共通する。

もうひとつ、同じような例をあげる。こちらも月月小説社が版元だ。

例5：385頁5行 上海遊驂録^{ママ}錯海波与美国独立史別裁合冊 吳研人^{ママ}英国哥林斯 146

一見して普通ではない。これほど長い名前の作品は、当時としては珍しい。いや、よく見ればこれも例4と同じように複数の作品を連ねたものだ。「上海遊驂録」「錯海波^{ママ}」「美国独立史別裁」の3点である。吳研人^{ママ}は、ありふれた誤植にすぎない。

さきに見た汪家熔の説明によれば、単行本が基本になっている。それから見れば、上に示した例はいずれも原則からはずれる。少なくとも、単行本ではない。汪は彼なりの注釈をつけてもよかったのではないか。たとえ元の記述がそうあったとしてもだ。あるいは、そうだからこそか。

上記の実物は、見るできない。しかし、共通する箇所がある。つまり、いずれも雑誌に掲載された作品である。これにはなにか意味があるはずだ。あとでもういちど触れる。

そういう種類の記述は、たぶん汪家熔が拠ったいわゆる『地字号目録』そのものにあるのだろう。彼が再編集したときに誤記したとは考えにくい。といっても、それを確かめるには、『新書総目』を見る必要がある。これは私の興味からいつている。当時の書目の利用者からいえば、わざわざとりあげる問題ではないかも

しれない。

いうまでもなく、商務印書館編訳所の蔵書楼に置かれている書籍目録だ。たとえば、「月球殖民地小説」を読みたいと思う利用者は、図書請求書にそう書くだけで用が足りる。実物を手にすればそれがどういう形態の書籍かがわかる。書目本文に細かい説明をする必要もない。そういう考えも成り立つだろう。それゆえにあくまでも蔵書目録なのだ。

5 誤字と脱字

汪家熔輯集「概覧」には、その元本（いわゆる『地字号目録』）を見るまでもなく誤字と脱字があることがわかる。元本と対照もせずになぜそうだと言うことができるのか。

あげられた作品のひとつひとつを前出『清末民初小説目録』を使って調べる。すると、ありそうもない誤字脱字がでてくる。

参考までに、めだつ誤字の例をいくつかあげる（頁数は「概覧」）。

思綺齋の「齋」を「齊」に誤る（239、397頁）。ただし、正しく表示するものもある（247頁）。

曾宗鞏（312頁）、曾広銓（402頁）の「曾」を「会」に誤る。

「現形」を「現行」に誤る（228、261、362頁）。

「馨」を「声」に誤る（210、316頁）。

蒋景緘の「蒋」を「将」に誤る（369頁に2カ所）。

以下は脱字の例だ。

「遯廬」を「廬」にする（262頁に2カ所）。

「吳榮鬯等訳」を「吳榮等訳」にする（352頁）。

「奚若訳」を「若訳」にする（366頁に1カ所、367頁に3カ所、368頁に3カ所）。

「吳櫛訳」を「吳訳」にする（393頁）。

「無歆羨齋主人訳」を「無羨齋主人訳」にする（216頁に3カ所）。

いずれも単純な間違いのように見える。普通に考えて、誤る箇所ではなさそう

編目書藏樓芬語	英倫之友版	精刻	空谷蘭	時報短篇小說第一集	雷刀勇血記	閉秀之秘密日記	小情情仇	紅霞影	小美加	東洋二王子第一種	又 廣博士第二種	又 法螺君第三種	又 驢公主第四種	編著之屬	編著之屬
通俗小說	又	又	又	又	又	又	又	又	又	又	又	又	又	又	又
文學部 小說類 (翻譯之屬)	文學部 小說類 (翻譯之屬)	文學部 小說類 (翻譯之屬)	文學部 小說類 (翻譯之屬)	文學部 小說類 (翻譯之屬)	文學部 小說類 (翻譯之屬)	文學部 小說類 (翻譯之屬)	文學部 小說類 (翻譯之屬)	文學部 小說類 (翻譯之屬)	文學部 小說類 (翻譯之屬)	文學部 小說類 (翻譯之屬)	文學部 小說類 (翻譯之屬)	文學部 小說類 (翻譯之屬)	文學部 小說類 (翻譯之屬)	文學部 小說類 (翻譯之屬)	文學部 小說類 (翻譯之屬)
八十五															

編目書藏樓芬語	涵芬樓新書分類總目
哲學部	總記類
倫理類	修身之屬
經濟類	格言之屬
心理類	催眠術之屬
哲學類	妖怪學之屬
宗教類	宗教之屬
教育部	總記類
教育論證之屬	國民教育之屬
法令制度類	本國法令制度之屬
室廬之屬	外國制度之屬
外國法令之屬	教育行政之屬
教育學類	中國史之屬
教育史類	外國史之屬
教授法類	各種教授之屬
綜合教授之屬	二部教授之屬
單級教授之屬	教授學之屬
教授術之屬	沿革史之屬
教授細目之屬	

目次冒頭に「涵芬樓新書分類總目」とある

文学部小説類の翻譯之屬から編著之屬へ

だ。編集作業の詳細は不明のまま、結果として誤字脱字の事実が残った。そのほかは、うしろの「附 「五清末西学出版社概覽」正誤表」をご覧ください。

6 『新書總目』

私が入手した『新書總目』は、複写である。

『旧書總目』を参照しながら説明する。

その内容構成は、次のとおり。借閱図書規則、目次(部/類/属の3層に分ける)目録本文などだ。

表紙*12、扉、奥付などは、ついていない。これは新旧總目の両方で共通する。「借閱図書規則」も同文である。『新書總目』は、『旧書總目』と基本的には同じ構成だと理解できる。

違いといえば、旧書にはある「旧書編目芻言」に相当する文章が新書にはない。次が重要だ。目次の冒頭に「涵芬楼新書分類総目」と明記してある。ならば、『旧書総目』と同じことだ。『涵芬楼新書分類総目』が正式名称である。

こちらのページ数は通しではない。各部ごとにページを新たに起こしている。また、「続編」はない。

普通ならば凡例によって示されるはずの編集方針が不明である。だが、目次がヒントになってそれを推測することができる。

書籍の内容によって分類し、「部／類／属」を使うのは、『旧書総目』と同様だ。以下の14部に分類してある。哲学、教育、文学、歴史地理（汪家熔は、略して史地にした）、政法、理科、数学、実業、医学、兵事、美術、家政、叢書、雑書だ。枝分かれした類から属に降りていけば、だいたいの様子が見える。

本稿に関係する部分を例として示す。大きく分類した「文学部」のなかの「小説類」で、さらに「翻訳之属」と「編著之属」のふたつに分かれる。

汪家熔がいう第1級とは「部」といいかえても同じ。これが阿英の説明した「文学類」のことだった。正確に書くならば「文学部」だ。第2、3級はそれぞれ「類」と「属」に相当する。

阿英が紹介した『新書総目』の「文学類」は、翻訳は400種近く、創作は約120種（合計約520種）を収録していた。私の見ている総目の「文学部／小説類」を数えてみれば、翻訳（属）は444種、創作（属）は195種の合計639種だ。阿英が示した数字の約1.2倍の作品を収録している。収録数の違いから、こちらの『新書総目』は、のちの再版、あるいは増補版だといっていいたいだろう。

目録本文は上から順に、書名、著作人名、発行処、出版年月、冊数、字、号を記入するようになっている。

『旧書総目』に比較して項目が増えている。それだけ記述が細かいことがわかる。

「字」欄には「地」1字が入る。

『旧書総目』で説明した「借閱図書規則」は、『新書総目』にも同じものが収録されている。千字文を使った蔵書分類の8門だ。くりかえせば、「天字」は「旧書」を内容とする。つぎの「地字」は、「教科書及教科参考書」である。字

に「地」を集めたということは、そのまま「教科書及教科参考書」の目録である。汪家熔のいう『涵芬樓地字号目録』にほかならない。

奥付はないから、収録図書 of 刊行年を参考にして推測する。

小説類を見ていると、中華書局の刊行物がある。これが決め手のひとつになる。中華書局本は、汪家熔輯集「概覽」には収録されない。これは当然である。中華書局の創設は、中華民国成立直後の1912年だからだ。汪家熔のいう『地字号目録』はその発行が清朝の1911年だ。また、彼の説明では、増補された「続編」はついていないらしい。1911年に刊行された目録に、民国成立（1912年）後の刊行物が収録されることはない。

また、商務印書館が刊行した小本小説叢書も未収録だ。

見ていくと『薄倅郎』の1914年12月発行がある（[涵訳69]）。それを根拠にすれば、こちらの『新書總目』は、1915年ころに刊行されたらしい。王中忱が見た『涵芬樓蔵書目録』の刊年が1914年だというのに近い。近いというよりも、同一本ではなかろうか。

7 5 例の種明かし

記録された作品のいくつかを見てみよう。

涵芬樓に所蔵される「新書」の1冊1冊がもれなく記載されている。蔵書目録だから、その時目の前にあった印刷物を1点と数える。ゆえに、記述の原則は、1作品1行である。同じ作品が重複するばあいは、「又」字を使う。同一作品で刊年が異なれば、出版歲月箇所に記入して区別する。

なぜ当たり前のことを説明するのか。その理由は、1作品1行の原則は、ややもすると単行本1種が1行に記述されていると誤解されるからだ。

汪家熔「概覽」には収録していないが、もとの『新書總目』には記載される。そういう例のひとつを見る。

編著之属 [涵著85]（『新書總目』文学部、小説類、編著之属。[85]は別立てのページ数

を示す)

繡像小説 / 本館 / 本館 / 清光緒癸卯年 / 一二 / 地 / 五八五九

『繡像小説』は雑誌である。著者を「本館」と書いている。実は、李伯元、歐陽鉅源らが編集した。つぎの「本館」は商務印書館が刊行したことを示す。発行が癸卯年（1903）だから総目にはその創刊年を指しているとわかる。冊数が12というのは、全72冊からすれば数が少ない。合訂したものが12冊なのかどうか。合訂していれば合冊とか表記するだろう。1906年末に刊行を停止して該誌は全72冊である。上の冊数箇所に「七二」とあっても不思議ではない。だが、そうはなっていない。

汪家燾は、なぜこの『繡像小説』を彼の「概覧」に採録しなかったのか。うっかり収録し忘れたわけではないだろう。それともいわゆる『涵芬樓地字号目録』には掲載されていないのか。

掲載されていないならしかたがない。あえて想像して、排除したとすれば、雑誌だからではないか。単行本を記載の基本としているならば、雑誌の『繡像小説』は原則からはずれるからだ。だが、涵芬樓には『繡像小説』12冊がまとめて置いてあったのが事実がちがいない。

これが、手がかりになる。前にあげた説明できなかつた例1から例5までを説明する

目録1行に収録された作品は、かならずしも単行本ではない。そう思い至れば、あとは簡単だ。つまり、そこにあるのは、掲載雑誌からその作品だけを抜き出したものである。別刷り、抜き刷りという。いま、抽印本と表記する。雑誌に掲載された特定の作品だけを抜き出し合訂したうえで販売する。当時、出版社はそれを普通に行っていた。読者、利用者が自作することもあつただろう。商務印書館編訳所の所員が作成したとも考えられる。原著訳者、刊年、出版社を記さないこともある。目録編集者が採録するさいに迷うところだ。

例1「316頁-9行 月球殖民地 荒江釣叟 137」は、『繡像小説』が掲載誌であることを記録しない。どう考えても抽印本である。あとの、例2「365頁-3行 電冠 陳鴻璧 133」にしても、例3「384頁8行 宜春苑 月月小説社 134」

も同様。

ひとつの典型として例4の「384頁-7行 警黄鐘伝奇与盗偵探血之花合集 祈黄楼主人 139」をもういちど見てみよう。

『新書総目』では、頭に「警黄鐘伝奇」を置く。その下に割り注風に「与盗偵探血」と「之花合冊」を詰め込んでいる。つまり、くりかえせば、「警黄鐘伝奇」「盗偵探」「血之花」を「合冊」した。著者はそれぞれ異なるし、掲載誌も『新小説』『月月小説』『新新小説』と違う。違っていようが抽印本がひとまとめに合冊してあれば、蔵書目録には1冊として記載せざるをえない。細部は省略したことが理解できよう。例5も同様だ。『新書総目』では、割り注風に2行に押し込めて「上海遊驂録」「醋海波」「美国独立史別裁合冊」という。すなわち、3作品の抽印本をあわせた1冊である。

かたちのうえでは1種類だ。だから、『新書総目』には収録されている。しかし、その内容が抽印本となれば、目録の記述が実物の内容を反映しないものしかたがない。

抽印本のはずだが、詳細不明の作品も収録している。多くはない。だが、たしかに記載がある。

506月月小説社(384-385頁)になぜだか集まる。以下の4種だ。

- 1 384頁-12行 世界奇談 月月小説社 134
- 2 384頁-11行 国民小説 角勝子等 134
- 3 384頁-10行 電術奇談 月月小説社 134
- 4 385頁 1行 短篇小説 月月小説社 145

1 『世界奇談』という書名はみあたらない。角書だと思う。原抱一庵訳、陳景韓訳「食人会」と「巴黎之秘密」が角書に「世界奇談」をつけている。いずれも『新新小説』に載った。著者を月月小説社とするのは不適當だ。

2 には著者名角勝子が見える。それを鍵語にして検索する。「(国民小説)刺国敵」が『月月小説』に連載されていることがわかる。つまり、書名としてかかげた「国民小説」は、角書であった。

3の「電術奇談」は日本菊池幽芳の作品だ。吳趸人が一枚加わっているのによく知られている。ただし、著者を月月小説社とするのは誤り。また、『月月小説』に掲載されたわけでもない。連載されたのは『新小説』だ。さらに、月月小説社から単行本も出ていない。単行本ならこちらにも新小説社が刊行した。つまり、月月小説社とはまったく関係がないのだ。誤記したままが抽印本の表紙に見えるのだろう。

すこし脇道にそれて同類の例を示す。4「短篇小説」と同じ「短篇小説」と題する作品がある。名前は同じだが内容は別物だ。それは別の場所に出現している。「概覧」365頁-2行の「449小説林」だ。こちらには、著者を紫崖等と表示する。紫崖は雑誌『小説林』に3作品を発表している。その抽印本をたばねたものだと推測できる。

さて、4の「短篇小説」にもどる。こちらについては、決め手は月月小説社だけだ。ここでいう月月小説社は、上の例からみて雑誌の『月月小説』だと推測できる。『月月小説』に掲載された作品名「短篇小説」そのものは存在しない。あるとすれば角書が短篇小説のもの。しかし、絞り込んだ25作品のどれであるかは、特定することができない。冊子の表紙に「短篇小説」と書かれているだけだろう。当時の利用者は、詳細が不明だからとまどったに違いない。

8 7 疑問への解答

さきに疑問を7件だしておいた。『新書総目』を見たうえでの私の考えをのべる。

疑問1：汪家熔が『涵芬樓地字号目錄』とよぶのは妥当か。

いわゆる『地字号目錄』と、私が見ている『新書総目』は、基本的に同じものだ。本文の記述構成は、両者ともに一致している。また、『新書総目』という従来からの呼称もある。それらを見捨てて特別に『涵芬樓地字号目錄』という必要があるのだろうか。どうしてもそうよびたいのであれば、理由を説明しなければならない。汪は根拠を提出していないのだ。

疑問2：汪のいう『地字号目録』は、私の捜していた『新書總目』そのものか。基本的にはそうだ。ただ、違うところもある。分岐点のひとつは、中華書局の刊行物を収録しているか否か。そこが異なる。1912年以降の刊行物を収録しているかいないか、と書いても同じこと。汪家熔が見る目録は、初版本だろう。私の見る『新書總目』は、後の再版、あるいは増補版だと考える。

疑問3：『新書總目』の発行年について、なぜ断言することができないのか。奥付がないから推測になる。汪家熔があいまいに書いているのもしかたがない。

疑問4：書目内部にある第1から3級までの区別を問題にした。

『新書總目』も『旧書總目』と同じく上から「部／類／属」の3級だ。「文学部」について例を示しておいた。ご理解いただけたと思う。

疑問5：疑問1と重なる。書名の問題だ。

私が見ているものには、目次の冒頭部分に「涵芬樓新書分類總目」と明記されている。汪家熔がよった版本には、目次がついていなかったのだろうか。彼は何もいわない。大きな疑問が残る。

疑問6：通しページ数か、別立てノンプルか。

『新書總目』は通し番号ではない。『旧書總目』も同じく別立てだ。同系統の総目でありながらページ数の表示法に2種類があるのだろうか。私は首をひねる。ただし、汪が扱った実物を見ていないから断定はできない。

疑問7：『新書總目』に掲載される作品は単行本だけなのか。

そんなことはない。涵芬樓では、冊子になっているならば単行本と同じあつかいをしていた。たとえ抽印本であろうともだ。

さて、『新書總目』によって阿英「晚清小説目」の誤りを正すことができた1例をご紹介します。次のように記述された作品がある。

[阿英76]血性男子 聽雨窗主人編。内容為日本前田正名伝。光緒壬寅（一九〇二）時務報印本。

阿英が採用していた当時の書き方によれば、波線は雑誌を指す。だが、『時務報』に該作品は掲載されてはいない。疑問のままになっていた。

それが、『新書總目』には次のようにある。

[涵訳77]血性男子 日本前田正名著、聴雨窗主人訳、時務書局、清光緒壬寅年

作品名および発行年は同じ。時務書局という出版社が単行本を刊行したとわかる。「時務報」と「時務書局」では、名称の細部が異なる。阿英は、なぜだか出版社を雑誌名だと勘違いしたらしい。

長年にわたって捜していた『新書總目』だ。それが今になって、初版と増補版がほとんど同時に出現したことになる。

附 「五清末西学出版社概覽」正誤表

主として小説類に限る。原著者不記、共訳者不記、刊年の違い、繁体字と簡体字の違いは基本的に数えない。民国以後に出版した書籍は、未収録であっても掲げない。

[涵哲]『新書總目』哲学部

[涵訳]『新書總目』文学部、小説類、翻訳之属

[涵著]『新書總目』文学部、小説類、編著之属

[涵歴]『新書總目』歴史地理部

：元本の『新書總目』が誤ったため「概覽」も誤る。

：もとづいた『新書總目』は誤っているが、「概覽」は正しい。

頁	行	誤	正
201	4	一名二載繁華夢	一名廿載繁華夢
201	未収録		倭刀恨[涵訳78]
202	-6	蘇子等訳	蘇子穀等訳
209	-2	美国毛茂迪克著	美国毛茂笛克著
		逸群訳	軼群訳
209	-1	洛逸	治(冶)逸
210	14	声谷	馨谷
211	10	劉楽訳著	劉楽義著
211	11	劉楽訳著	劉楽義著

211	-4	李提摩太著	[涵哲27]同左。李提摩太訳
212	13	威廉振興荷蘭紀略	威廉振興荷蘭記略
212	-7	印度広学会著	俄国克雷洛夫著
215	-4	知心室主人訳	知新室主人訳
215	-2	斯蒂芬偵探案	司蒂芬偵探案
215	-1	毀拿破侖遺像案	竊毀拿破侖遺像案
216	5	無歆羨齋主人訳	無歆羨齋主人訳
216	7	英国八達克礼著	英国巴達克礼著
216	7	息影廬生訳	[涵訳77]同左。息影廬主訳
216	8	英国甘糜倫夫人著	英国甘糜倫夫人著
216	8	无悶居士訳	无悶居士訳
216	11	日本江山見忠功著	日本江見忠功著
216	13	無羨齋主人訳	無歆羨齋主人訳
216	14	無羨齋主人訳	無歆羨齋主人訳
216	15	第一百十三案	一百十三案
216	16	笏山記	笏山記
228	-5	革命鬼現行記	革命鬼現形記
237	-4	攢生生訳	暫生生訳
238	-5	向隅倦	向隅仙
238	-4	棲霞女侠小伝	[涵訳82]同左。棲霞女侠
238	-1	元和雲氏	元和痴雲氏
239	1	思綺齋藕隱	思綺齋藕隱
243	7	江西各書房	『江西』
243	8	于江鞭獅子等訳	[涵訳71]同左。笑我生訳
243	11	日本広末鉄腸著	[涵訳77]同左。日本末広鉄腸著
245	-2	189鏡今書局	208鏡今書局 重複させる / 読み間違い
245	-1	欧美風雲録	美風欧雲録
245	-1	鍾樸岑訳	鍾樸岑訳
246	4	英国培倫著	[涵訳76]同左。美国培倫著
246	4	進化社訳	[涵訳76]同左。中国教育普及社訳
249	8	日本江保著	日本洪江保著
249	10	欧風美雲録	美風欧雲録

249	10	鍾樸岑訳	鍾樸岑訳
250	-6	日本山上上泉著	[涵歴28]同左。日本山上上泉著
251	2	俄国普希原著	[涵訳81]俄国普希原著。普希金
251	2	訳者不記	駁翼翬重訳
256	5	文明結婚	[涵訳69]同左。新訳文明結婚
256	6	冰山雪梅	冰山雪海
256	7	神友蓮著	沈友蓮著
258	-2	科学儀器館(正)	科学彝器館[涵訳77]の誤り
261	-11	繡像	繡像
261	-11	警羅仙著	警夢癡仙著
261	-10	松齡田鐘著	松陵田鑄著
261	-9	学生現行記	学生現形記
262	-5	廬著	遯廬著
262	-4	廬	遯廬
266	-8	243美生書館	[涵訳77]同左。243美華書館
266	-7	陳春生等訳	[涵訳77]同左。陳春生演話
286	-5	付闕甫訳	傅闕甫訳
287	7	蟄園氏	蟄園氏
290	7	日本村井弦斎著	日本村井弦斎著
308	未収録		『繡像小説』[涵著85]
308	10	林紓等著	林紓等訳
308	12	一愁三怨	一仇三怨
308	13	英国布斯	英国布斯俾
309	-7	魯賓遜漂流記	魯濱孫瓢流記
309	-6	魯賓遜漂流記続記	魯濱孫瓢流記続記
310	-6	路康華等訳	陸康華等訳
311	10	双孝子吸血酬恩記	双孝子噴血酬恩記
311	14	二侖案	二俑案
311	-4	英国格理尼著	[涵訳56]同左。英国格理民著
311	-3	英国布斯著	英国布斯俾著
312	5	羅倦小伝	羅仙小伝
312	8	幻翼想	幻想翼

312	14	林紓等訳	陳家麟訳
312	-11	模範村町	[涵訳58]同左。模範町村
312	-9	英国布斯著	英国布斯俾著
312	-8	英国付闌錫著	英国傅闌錫著
312	-7	長楽会宗等重訳	長楽曾宗鞏
313	16	匈牙利利育珂摩耳著	匈牙利利育珂摩耳著
314	1	納里雅偵探談	[涵訳61]同左。納里雅偵探譚
314	5	商務印書館発行	[涵訳62]同左。中外日報館発行
314	6	法官秘史	法官秘史
314	9	日本幸徳秋水著	日本幸徳秋水著
314	13	経過美談	経国美談
314	14	英国式勤徳著	[涵訳62]同左。英国式勤徳著
314	-6	俄王義文第四専制史不測之威	[涵訳63]同左。不測之威
314	-6	英国	俄国
314	-1	玉楼花劫	玉楼花劫正統編
315	1	玉楼花劫続編	上と同じ
315	2	未収録	《賊史》[涵訳64]
315	5	絶島漂流	絶島飄流
315	8	紅紫露伝	[涵訳64]同左。紅紫露伝
315	13	美国	[涵訳65]同左。英国
315	15	美国	[涵訳65]同左。英国
315	-8	新訳希臘興亡記	新訳を取る
315	-8	長楽高魯訳	長楽曾宗鞏訳
315	-6	薛一鏢等訳	[涵訳66]同左。薛一鏢訳
315	-2	惨世界	惨女界
316	3	夜光壁(正)	夜光壁[涵著89]の誤り
316	13	狭義佳人初集	侠義佳人
316	-11	声児就学記	響児就学記
316	-9	月球殖民地	[涵著91]同左。月球殖民地小説
316	-6	負曝閑談	負曝閑談[涵著91]負曝閑譚とする
319	8	少年叢書哥倫布畢斯麥納爾遜華盛頓	光緒三十四年

			哥倫布 / 畢斯麥 / 訥爾遜 / 華盛頓 / 大彼得 / 加里波的 (注:一括。「少年叢書」は叢書名。作品を「 / 」で区切る)
319	13	少年叢書哥倫布畢斯麥訥爾遜華盛頓大彼得加里波的	宣統二年 哥倫布 / 畢斯麥 / 訥爾遜 / 華盛頓 / 大彼得 / 加里波的 (注:一括。「少年叢書」は叢書名。作品を「 / 」で区切る)
319	-13	商務印書館	鴻宝齋
339	-7	吳研人	吳旰人
342	-4	湯女士絨訳	湯女士絨訳
348	2	万国美術研究社訳	[涵訳82]同左。李石曾訳
348	3	万国美術研究社訳	[涵訳82]同左。李石曾訳
352	-13	唯一偵探談	唯一偵探譚
352	-13	英国愛考難陶著	英国愛考難陶列著
352	-13	吳榮等訳	吳栄鬯等訳
353	-12	日本佐藤蔵大郎著	[涵訳80]同左。日本佐藤蔵太郎著
352	-9	陶立重訳	陶懋立重訳
352	-5	英国史徳原著	英史穀徳原著
352	-4	法国阿孟查登著	[涵訳82]同左。法国阿猛查登著
352	-2	法国阿孟查登著	[涵訳82]同左。法国阿猛查登著
353	1	珊海余談 (正)	珊海余談[涵著95]の誤り
362	-4	家庭現行記	家庭現形記
362	-4	仙源蒼園	仙源蒼園
364	11	442香港荷李活道宝雲樓	[涵訳74]同左。香港小説編訳社
364	12	五命離奇案	[涵訳74]同左。英国最近五命離奇案
364	-2	445香港中国日報社	445香港中国日報館
366	9	元和若等訳	奚若訳意
366	-7	英国托馬斯加泰著	英国脱馬斯加泰著
366	-7	陶旦訳	陶叫旦訳
366	-5	隧中灯	隧中灯
366	-5	張伯森訳	張柏森訳

366	-1	英国白痒著	英国白髭痒著
366	-1	烏衣使者訳	烏衣使者訳
367	1	元和若等訳	元和奚若訳
367	6	謝慎冰等訳	謝慎冰訳
367	7	福爾摩斯再生後案	[涵訳73]同左。福爾摩斯再生後探案
367	7	元和若等訳	元和奚若訳
367	8	呉江仁墨縁等著	呉江任墨縁等著(訳が正しい)
367	9	英国蕭而斯勃内著	英国蕭爾斯勃内著
367	-12	法国嘉禄付蘭儀著	法国嘉禄傅蘭儀著
367	-9	美国史徳蘭	美国史徳蘭
367	-7	彼徳警長	[涵訳76]同左。彼得警長
367	-6	元和若訳	元和奚若訳
367	-3	東海覚我生訳	[涵訳77]同左。東海覚我訳
367	-2	法国迦而威客	法国迦爾威克(迦爾威尼が正しい)
368	2	身毒叛乱記	身毒叛乱記
368	2	溪子	磻溪子
368	3	英国哈葛得著	英国哈葛徳著
368	3	元和若	元和奚若
368	6	君殺訳	君毅訳
368	7	東海絶我訳	東海覚我訳
368	8	法国迦而威尼著	法国迦爾威尼著
368	9	無錫章仲等訳	無錫章仲謚等訳
368	-12	英国瑪麗孫著	英国瑪利孫著
368	-12	元和若訳	元和奚若訳
368	-10	元和若訳	元和奚若訳
368	-8	李秋涵	李涵秋
369	5	将景緘	蒋景緘
369	6	鳳春	鳳扈春
369	6	将景緘	蒋景緘
369	-9	而梅	爾梅
未収録のため頁表記なし			[涵著92]双花記
370	3	警羅仙著	警羅癡仙著

370	7	新撰拒約奇談	[涵著98]同左。拒約奇談
370	7	涼雪人	涼血人
371	8	林翼訳	林翼清訳
371	9	守白訳	[涵訳71]同左。守白
371	10	白侶鴻訳(正)	白鴻侶訳[涵訳71]の誤り
371	-12	日本大津天仙著	[涵訳73]同左。日本大沢天仙著
371	-9	駭殺奇談	[涵訳74]同左。駭殺奇譚
371	-8	大俠盜	[涵訳95]同左。大俠盜邯洛屏
371	-7	莫等齋主人訳	莫等閑齋主人訳
371	-5	双鋒	霜鋒鬪
371	-5	歩青訳	[涵訳78]同左。吳歩青訳
371	-4	網中雨	網中魚
371	-3	花之魂	憲之魂
372	1	新小説林	[涵訳72]同左。新小説社
372	7	黄繡秋	黄繡球
372	-7	新婆子伝	新痴婆子伝
372	-7	笑居士	笑龕居士
372	-6	天繡樓詩史	[涵著101]同左。天繡樓侍史
379	7	最新聶格卡脱偵探案	[涵訳78]同左。最新聶克卡脱偵探案
382	1	先天客	[涵訳71]同左。洗天客
382	5	双絲	双胃絲
384	7	盜偵探血之花	血之花
384	-12	世界奇談	[涵訳83]詳細不明
384	-11	国民小説	(国民小説)刺国敵
384	-10	電術奇談	[涵訳83]詳細不明
384	-8	知心主人	知新主人
384	-7	警黄鐘伝奇与盗偵探血之花合集	警黄鐘伝奇与盗偵探血之花合冊
385	1	短篇小説	[涵著101]詳細不明
385	5錯海波.....醋海波.....
385	5	吳研人	[涵訳101]同左。吳研人
393	-7	縁音絮語	縁陰絮語

393	-4	棠花怨(正)	棠怨花[涵訳80]の誤り
393	-4	吳訳	吳構訳
397	-12	頼子訳	[涵訳76]同左。支那頼子訳
397	-8	思綺齋生	思綺齋主
401	-9	女界鐘	女界鐘
402	-10	亜子訳	憂亜子訳
402	-9	英国歌洛克呵而唔斯	英国歌洛克呵爾唔斯
402	-8	湘郷会広銓	湘郷曾広銓

【注】

- 1) 最初は「涵芳楼」といった。その呼び名が使われたのは短期間のこと。1910年には「涵芬楼」に定まったという。張人鳳、柳和城編著『張元濟年譜長編』上巻 上海交通大学出版社2011.1。154頁注1、274頁注1、277頁注1。/ 2012.11.10追記/ また、張人鳳「張元濟研究中近年新発見の史料」『出版博物館』(2012年第3期(総第19期)2012.10。51頁)には、次のようにある。「約在1909年11月末至12月, 1910年初起就定名為涵芬楼」
- 2) 呂長君「商務印書館的涵芬楼」『出版史料』2004年第3期(新総第11期)2004.9.25。103頁。次の書籍が詳しい。柳和城『孫毓修評伝』(世紀出版集団、上海人民出版社2011.10)に「第四章涵芬楼“館長”和図書館学開拓者」(99-122頁)がある。
- 3) 翻訳400種と創作120種は合計すると520種だ。その約3倍とは約1,500種になるはず。数字があわないのは、初版と改訂版とではこの数字に書き換えがあるからだ。初版は1,500種以上と書いているから約3倍でいい。改訂版ではそれを1,000種に訂正した。だが、約3倍はそのままにしたから整合性がなくなった。
- 4) 関連する文章が何もなかったというわけではない。後になって次の文章をウェブ上で見つけた。王中忱「探訪《涵芬楼蔵書目録》」『中華読書報』原載 新華網2003.08.14電字版。それによると『涵芬楼蔵書目録』の概要は以下のとおり。全4冊で初刊と続刊の2種類にわかれる。それぞれは「旧書分類総目」と「新書分類総目」である。刊年は書かれていない。収録された図書の出版年が1914年だから目録の編集は1914年だと推測できる、と。また、続刊の編集は1920年8月らしい。該文は、のちに「尋探涵芬楼」と改題され同氏『走読記』(北京・中央編訳出版社2007.12)所収

- 5) 「続編」、つまり増補部分に刊年を「宣統辛亥年」とする書籍がある。1911年を表わしているから、該目録の刊年は1912年頃だろうと考えた。1912年10月2日に張元濟は鄭孝胥に『涵芬樓書目』を贈呈した、と記録する。『張元濟年譜長編』上巻368頁
- 6) 参考までに『商務印書館圖書目録(1897-1949)』(北京・商務印書館1981)の分類大項目をあげる。総類、哲学、宗教、社会科学、語文学、自然科学、応用技術、藝術、文学、史地となっている。
- 7) 『涵芬樓和文書』(表示のまま)という目録があるそうだ。書名からして、その内容は『涵芬樓東文書分類總目』のことだと推測される。該書目および『涵芬樓旧書 続編』『涵芬樓新書』の3冊を一括して(『涵芬樓藏書目録』とある)中国のウェブ競売会に出品された。2007年のことだ。『涵芬樓和文書』について、各図書館には見ることができない、と出品書店主が注記している。落札されたかどうか、その後の消息は不明。
- 8) 189鏡今書局と190鏡鏡社の2社は、「鏡」の読み間違いで208鏡今書局と別々になっている。また、232楽群小説社(262頁)の1作品は、『地字号目録』のページ数を記載し忘れる。389時中書局342頁の翻訳3種は340頁と重複する。
- 9) 分類法の違いを知るために注6を参照されたい。
- 10) 実際には、光緒八年がある。380頁
- 11) 実際には宣統二年五月がある。329頁
- 12) ある版本の表紙は、別の紙で装丁してあるように見える。だが、書名はない。背文字があるかどうかは不明。

【関連論文】

- 汪 家焜「涵芬樓和東方図書館」『商務印書館館史資料』之七 北京・商務印書館総編室編印 1981.3.20
- 汪 家焜「涵芬樓和東方図書館」『商務印書館一百年(1897-1997)』北京・商務印書館1998.5
- 蕭 新祺「商務印書館涵芬樓与地方志」『商務印書館館史資料』之二十七 北京・商務印書館総編室編印1984.6.20
- 樽本照雄「阿英「晚清小説目」の構造」『大阪経大論集』第48巻第4号(通巻240号)1997.11.15
- 陳 応年「涵芬樓的文化名人」『商務印書館一百年(1897-1997)』北京・商務印書館1998.5
- 沢本郁馬「『涵芬樓新書分類目録』に関連して」「商務印書館関係資料いくつか」所収『清末小説』第28号。のち『商務印書館研究論集』2006所収

商務印書館版「説部叢書」の成立

『清末小説』第25号(2002.12.1)に掲載。神田一三名を使用。商務印書館の翻訳シリーズ「説部叢書」は、有名である。しかし、その成立について論じた論文は多くはない。日本ではわずかに中村忠行が文章を発表しているだけだ。中国では、その存在を紹介するだけの短文があるという寂しさである。資料上の制約があるのかどうか、詳細は不明だ。本論文は、中村論文よりもより詳細に、原物の書影をかかげながらその成立過程を述べる。知ればその成立過程は、単純ではない。

「説部」とは、小説を意味する。「説部叢書」は、その名前のとおり小説を集めたひとつのシリーズを指す普通名詞だ。このばあいの説部は、翻訳小説とは限らない。創作小説をも含む。

清朝末期の上海において、いくつかの出版社が、「説部叢書」と銘打ったシリーズを発行した。

目録を見れば、改良小説社が創作を主体とし、群学社が創作と翻訳の、小説進歩社が数種類の「説部叢書」を発行しているのがわかる。

だが、一般に、「説部叢書」と聞けば、商務印書館が発行した外国小説の翻訳シリーズを連想する。

商務印書館は、300種類をこえる翻訳書を出版した。数のうえからも、内容からも、それらを前にしては、ほかの出版社の「説部叢書」は、影が薄くなる。比較にならない。商務印書館以外の出版社が、「説部叢書」をだしていたことすら、今では言う人は少ない。

清末から民初にかけて、大量に翻訳発行された商務印書館の「説部叢書」である。のちに作家となる青年の多くが、該シリーズによってはじめて外国文学に触れた。その存在は、研究者ならば、誰でも知っているといってもいい。

しかし、存在が知られていることと、商務印書館の「説部叢書」について文章が書かれることには、直接の関係がないかのように見える。つまり、言及する人が、なぜだか極端に少ない。論文中に「説部叢書」という単語を使うが、その内容について説明しない。ただ、発行されたことがある、というだけであったりする。

1 最近の言及

商務印書館版「説部叢書」が当時の中国文藝界におよぼした影響の大きさを考えれば、解説のないほうが不思議に思える。いくつかの具体例をあげよう。

『中国翻訳詞典』

林煌天主編『中国翻訳詞典』（武漢・湖北教育出版社1997.11）は、文字通りの巨著だ。

「総合条目」には、翻訳家、原作者、作品、雑誌、翻訳組織、作品の翻訳状況などなど、翻訳に関するあらゆる項目があげられる。これに加えて識者の翻訳についての考えを記述する「百家論翻訳」がある。このふたつで1133頁になる。附録、索引もついた大部な出版物だ。

これほど大きな辞書だから「林訳小説（百種）叢書」（418頁。陳応年執筆）は、ある。だが、「説部叢書」の項目はない。また、年表の「中国翻訳大事記」にも単語のかけらもない。

さがせば、「商務印書館」（陳応年執筆。584頁）の項目に、「20世紀初頭より外国文学および社会科学の訳著が大量に出版された。たとえば「説部叢書」（1-4集、全322種）、「嚴（復）訳名著」（8種）、「林（紓）訳小説」（両集、全100種）などである」と記述される。これだけだ。「説部叢書」が全322種であることをさりげなく書いているところに注目しておこう。

「林訳小説叢書」を独立項目としてあげるならば、やはり「説部叢書」もそうしなければ平衡がとれない。

専門の辞典に言及がないとなると、一抹の不安をおぼえる。忘れられかけているのではあるまいか。

郭延礼説

郭延礼『中国近代翻訳文学概論』（漢口・湖北教育出版社1998.3）は、翻訳文学研究の本格的専門書として出現した。翻訳文学研究をする場合の必読基礎書籍だ。その言及範囲の広さと記述の深さには、目を見張るものがある。

目配りのいい研究書だから商務の「説部叢書」について、その成立経過、収録種類など、全体を概観する解説が当然あると考えるではないか。だが、なぜかしら、ない。

文中に、単語としては出てくる。たとえば、「《説部叢書》中の《回頭看》」（131頁注4）とか「商務印書館的《説部叢書》也出版了……」（192頁）というぐあいだ。

ついでにいうと、「説部叢書」から林紘の作品を抜き出した「林訳小説叢書」についても同様だ。「林訳小説」（278頁）はいうが、商務の「林訳小説叢書」を説明しない。「林訳小説叢書」（300頁注1）の名称は出てくる。また、引用文のなかに「那両小箱《林訳小説叢書》……」（303頁）と見える。さらに「“林訳小説”叢書」（386頁注1）と言及がある。ほんのすこしの説明でもあれば、それでいいのだが、あまりにそっけないので、これまた忘れられたのではないかと心配なのだ。

情況がこうだから「説部叢書」についての説明にであうと、少し安心する。

鄒振環説

最近の例をあげれば、鄒振環『20世紀上海翻訳出版与文化変遷』（南寧・広西教育出版社2000.12）がある。

その説明を引用翻訳しておこう。

「説部叢書」は商務印書館が早くに発行した大型叢書であり、1903年4月^{ママ}から出版が始まった。第一集は、わずかに『佳人奇遇』と『経国美談』の2^{ママ}

種を収録しただけだったが、それ以後各集10種で、1908年までに10集総計92種^{ママ}を出版した。そのなかには大量の名著の訳本がふくまれ、たとえば……（略）。以後、「説部叢書」は、初集、二集が編集され、それぞれに翻訳小説を100種収録する。のち、売れ行きがよいため第三集、第四集も出版された。そのなかの林訳小説に対する読者の特別な愛好を考へて、商務印書館は後に「説部叢書」のなかから林訳小説の全部を抜き出し、紙箱に入れて「林訳小説^{ママ}」と題し売り出して、その売れ行きはまことによかった。51-52頁

鄒振環は、翻訳された書名を具体的に示しながら説明をする。また、「説部叢書」と「林訳小説叢書」との関係をも簡潔に述べている。さらに、謝冰心、魯迅、沈從文、蘇雪林、錢鍾書たちがいかにそれらの翻訳小説を好んだのかも、彼らの文章を引用しながら紹介しているから理解しやすい。【増補附記】鄒振環には同趣旨の「商務印書館版“林訳小説”的魅力」『訳林旧踪』南昌・江西教育出版社2000.9がある。

ただし、鄒振環の説明文は簡潔にすぎて著者自身知っているのかどうかかわからないが、事実と異なる部分がある。

第一集には、2種類の翻訳しかない、と断定する。だが、なぜ2種類だけなのか、説明がない。

各集10種を出して、10集で92種だと明示している。ここには、疑問符がつかないのだから、あたかも原物で確認しているかのような印象をあたえる。だが、はたして92種は正しいのだろうか。

ひとつ不明なのは、全10集のものと、初集、二集、第三集、第四集の関係はどうなっているのか。「説部叢書」は全体で幾種類の小説を収録しているのか、鄒振環は、説明しない。

鄒振環が書いたそのほかの文章を読んでの私の想像だが、原物を調べて記述する人であるらしい。だから詳細な説明になるのもうなずける。ただし、例外があるようだ。それが、「説部叢書」である。鄒振環は、原物を見ているわけではなく、第2次資料の目録に拠っていると思われる。

つまり、第一集には2種の翻訳しかない、という説明は、「説部叢書」の原物

を手にとってそう書いているわけではない。第2次資料にその典拠がある。鄒振環は、注記、明記してはいないが、知っている人は、容易にその資料を指摘することができる。上海図書館編『中国近代現代叢書目録』（香港・商務印書館1980.2）だ。

『中国近代現代叢書目録』には、商務印書館版「説部叢書」の細目が収録してある（777-789頁）。

第一集には、1『佳人奇遇』、2『経国美談』の2種類をあげるのみだ。残りの8種は、収録していない。鄒振環は、この目録の記述を信じた。2種類の書名しか見えないから、2種類しか出版しなかったと短絡して理解したらしい。典拠資料を示していればまだしも、なにも書かないからその誤りを指摘されることになる。

第一集には、複雑ないきさつがあることについては後述するが、とにかく1『佳人奇遇』、2『経国美談』の2種類を含んで全10種類の翻訳を出版していることだけを、ここでは言っておきたい（参照：附録2）。

第二集以降について、該目録には具体的な書名が書かれている。今その数だけを示しておく。

第二集十編、第三集十編、第四集十編、第五集十編、第六集十編（第四編『天方夜譚』は未収）、第七集十編、第八集十編、第九集十編、第十集十編で総計百編（種）だ。

説明の都合上、この全十集を元版（中村忠行の用語に従う。ただし、元版を1型と2型に分けることについては後述）とよぶことにする。

この元版一百種を初集と呼びかえて初集1-100編を出し、2集1-100編、第3集1-100編とつづいて第4集1-22編（ただし第17編『矚目英雄』は目録に未収録）が出た。

該目録には、注記したように第六集第四編と第4集第17編をとりこぼしている。

最初の十集、すなわち元版と後の初集以降を区別するために、前者元版の集編数には漢数字を（例：第二集第一編）、後者にはアラビア数字を用いることにする（例第2集第1編）。

鄒振環の説明は、著書のなかのほんの一部分を占めるにすぎない。本格的紹介というのには、ほど遠い。

陸昕説

そういうなかでの陸昕「説《説部叢書》」(『蔵書家』第3輯 2001.6. 106-109頁)は、注目に値する。短文とはいえ、書影4幅を添えて、「説部叢書」をうまく紹介している。

最初に指摘しておきたいのは、陸昕が「説部叢書」の実物を多数所蔵していることだ。

彼の説明によると、初集91種、第2集87種、第3集63種、第4集4種の合計245種を所有しているという。所蔵数をあげて実物をこれほどまでに持っている人を、私は、今まで聞いたことがない。

十数年前、彼がバラ本を購入したころには、話題にするひとはまだ少なかったという。そののち、日本人や韓国人が争って購入しはじめ、4、5年前には入手しようにもどこにもなくなってしまったらしい。道理で、現在、私が欲しいと思っても購入はおろか実物を目にする事さえできないはずだ。争って購入した日本人や韓国人が、その後、研究論文を発表したとも聞かないから、どこかに所蔵されたままなのだろう。

それはさておき、多数の実物を所蔵する陸昕だから、その記述には信頼がおける(と思われる)。

彼がまず述べるのは、「説部叢書」は重要でありながら、ややもすればなおざりにされる傾向である。

旧文学と新文学の継ぎ目のところに「説部叢書」は出現した。当時の青年は、「説部叢書」を読むことによって、西洋文化の影響を受けた。そのことについて、言及しないのは、不当だというわけだ。おっしゃる通りです。

陸昕が解説する「説部叢書」の種類数は、以下ようになる。

説明：4集にわかれた前の3集は、それぞれ100種をあつめており、第4集は^{ママ}40種である。(106頁)

つまり、合計は^{ママ}340種となる。

最初から文句をつけるようで申し訳ない。私が数字に「ママ」をなぜつけるかと言えば、340種という数には疑問があるからである。目録類には、第4集22種とある。合計322種にしかない。どちらが正しいのだろうか。

陸昕の説明をもう少し聞いてみよう。

説明：初集100種は、光緒末年には出そろった。紙は道林紙を用い、表紙は一律に柳と桃花で縁取りし、柳の枝は緑色、桃花はあでやか、真ん中に黒色で縦書きの書名がある。(107頁)

陸昕は、「初集一百種」とはっきり書いている。間違いない。「中間為黒色豎体書名」だから縦書きの書名だ。だが、該文に添えられた書影には、これに該当する初集本は掲げられていない。示されている初集第47編『簾外人』は、あきらかに1914年の再版本だ。特別な用語を使ってしまったが、おいおい説明していく。

緑色の柳の枝に桃花模様にも黒色縦書き書名の初集本は、私は、見たことがない。この部分は、陸昕論文の重要箇所だから、あとでまた問題にする。

説明：民国2、3年ころ、再版した。紙は新聞用紙にかわり、表紙も藍色の飾り模様と紅色の縦書き書名になった。2集100種も同じ装丁である。(107頁)

紅色の縦書き書名のこの初集本は、普通によく見ることができる。書影がかかげられている初集第47編、と第2集第66編が、まさに陸昕が書いているとおりだとわかる。

説明：3、4集を出版したとき、紙はやはり新聞用紙を使ったが、表紙は一変し、本の内容に合った彩色絵画になる。3集100種と4集³⁷40種も同様である。(107頁)

第3集第6編と第4集第16編の書影がある。表紙が絵画で飾られていることがわかるから、明らかに初集、第2集の意匠とは違うことに納得する。

説明：「説部叢書」のほかに「林訳小説叢書」がある。「説部叢書」には林紘の翻訳が多いので、商務はそのなかから³⁷50種を選び出し「林訳小説」の名称を用いて単独で発行したのだ。ただし、表紙を変えただけで、ページも用紙もまったく「説部叢書」と同じものである。「林訳小説」の表紙も「説部叢書」とほとんど同じで、藍色の飾り模様を緑色のものに変え、書名も紅色の縦書き、表紙の上方に横組みで「林訳小説叢書」と6文字が書かれる。そのほか48開本、16開本もある。(107頁)

「林訳小説叢書」を50種とするのは、不十分であるといわねばならない。これ

には第2集があり、50種ずつで合計100種を発行したというのが正しい。

「林訳小説叢書」の表紙が「説部叢書」とほとんど同じ、という指摘も正確ではない。書名は第1集が横組みで、第2集は縦組みだ。叢書名も、第1集は、横組み「林訳小説叢書」でいいが、第2集は、縦組みで「林訳小説」のみとなる。

商務版「説部叢書」を紹介して貴重な陸昕論文である。なにしろ原物を手元において書いているのだから、強い。「説部叢書」について書かれた中国ではほとんど最初のまとまった文章かもしれない。

くりかえすが、陸昕の文章は、比較的詳しい紹介文であることは間違いがない。だが、原物を所有したうえで説明しているにしては、いくつかの疑問が生じる。ひとつ、「説部叢書」第4集には40種があるというのは本当だろうか。前述したように、目録を見るかぎり22種類しかないはずだ。陸昕は、340種とはっきり2箇所に書いているからなんらかの典拠があるのかもしれない。疑問としておく。

また、「説部叢書」から派生した「林訳小説叢書」についても、前述したように誤解があった。

陸昕の紹介文で、私がいだく疑問の大きなものは、「説部叢書」初集100種以前のいわゆる元版について一言も説明していないことだ。

陸昕は、初集100種は光緒末年に完結していると説明している。光緒末年に完結しているのは、私のいう元版のことに相当するはずだ。しかし、私が見ている元版の表紙と陸昕の説明する初版の表紙が違う。

陸昕が書くのは、柳の枝に桃花、縦書きの書名だ。私の手元にある元版(2型)は、タンポポをもとにして変形させた意匠で表紙下部に葉っぱを上部に花を左右対称に配置し、中央の名札のなかに横組みで書名を置く。2、3色を使っているわりには、地味な表紙だ。両者は異なるといわなければならない。

陸昕は、初集についてしか説明しない。だから、元版の存在があることが読者には伝わらない。商務印書館は、最初から初集100種を「説部叢書」として発行したように読める。掲げられた表紙書影も、初集以前のものを提示しない。

重要だから気にとめておいてほしいのだが、商務印書館の「説部叢書」には、初集に改題する前に、第一集から第十集までの元版が存在している。このことに

陸昕は、言及しないのである。

文章のなかで触れていないのだから、初集100種以前にも「説部叢書」と称する刊行物があるとは知らないのではなからうか、という疑問を払拭することができない。

ただ、元版の存在を知らないことについて、陸昕の不勉強といってしまうえば簡単だ。だが、もしかすると中国ではやむをえない事情があるのかもしれない。その例として、『商務印書館百年大事記(1897-1997)』(北京・商務印書館1997.4)をあげよう。

『商務印書館百年大事記(1897-1997)』

この年表の巻頭には、創業当時の商務印書館を描いた絵画、創業者の肖像、刊行物がかかげられている。

そのなかに「林訳小説叢書」と「説部叢書」の一部をカラーで見ることができる。それらは、すべて改称後の初集と第2集であるにもかかわらず、その説明文に「《説部叢書》(1903)」と書くのだ。改称は民国後の1913年のことだから、1903年ではありえない。明らかに間違いであるにもかかわらず、まったくその間違いに気づいていない。1903年から「説部叢書」を刊行しはじめた、といたいのであれば、元版の書影をかかげなければならない。

どのみち、該年表の1906年の項目に、「出版《説部叢書》第一、二、三集」と書いて、これとも矛盾している。

元版を示してほしい箇所には、それがない。どうやら商務印書館の編集部では、元版が入手できなかったものか。所蔵はするが、示す手間をはぶいたのか。その間の事情は、わからない。本家本元で示すことができなければ、その存在に気づく研究者はマレということになる。

元版の存在が知られていないのは、原物が入手しにくいという事情とあわせて、商務印書館の発行する書目類の多くがその存在を明示していないからだろう。元版の存在にいかにつれていないか、その証拠をあげよう。

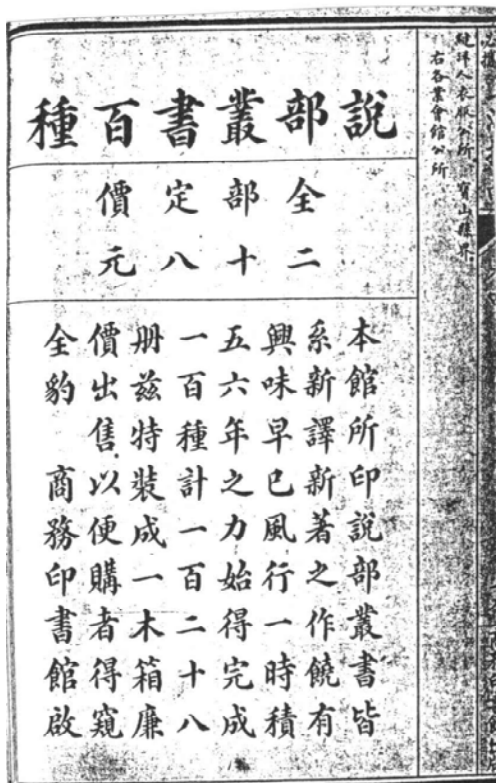
2 商務印書館の刊行物から

「説部叢書」を広告する商務印書館の刊行物をすべては見ることにはできないから、私の知っている範囲内で示す。

さかのぼれば、『繡像小説』にまで行き着く。ただし、『繡像小説』の広告は、「説部叢書」成立と同時期のものになるから、「説部叢書」成立を説明する箇所では触れることにしたい。

上海のガイドブックからはじめよう。

『上海指南』商務印書館 宣統元年（1909）五月初版／七月再版
石印線装本。一部の広告は活版で印刷されている。



その広告に「説部叢書百種／全部定價／二十八元」とある。説明文を引用しておこう。

本館所印説部叢書皆系新訳新著之作饒有興味早已風行一時積五六年之力始得完成一百種計一百二十八冊茲特裝成一木箱廉價出售以便購者得窺全豹 商務印書館啓

ここにある百種128冊が元版である。誤解してはならないのは、初集についての広告ではないことだ。区別しなければならない。だが、この事実気づく人は多くないかもしれない。

身體検査統計表	金石搨本類	西清續鑑 四十二冊	旬齋臧石記 十二冊	甯壽鑑古	小説類	説部叢書 全集百種 連木箱	言情 天際落花	偵探 劇場奇案	偵探 夢遊二十世紀	偵探 華生包探案	偵探 小仙源	偵探 案中案	科學 環游月球	神怪 吟邊燕語 林紓譯	學部審定 美洲 萬里尋親記 林紓譯
六角五分	定價二十四元 預約十五元			近刊	二十八元		三角	四角	二角	二角	一角五分	二角	三角	三角五分	三角

第一 - 十集各十種合計百種だ。五六年で完結したともある。数えれば、そのはじまりは1903年頃になる。

叢書名の「説部叢書」が1903年にすでに成立していたという意味で間違いないと考える理由が、別にある。これは後述する。

この広告から読みとれるもうひとつの事柄は、刊行完了の時間だ。遅くとも1909年に、絞り込めば1908年には、元版十集は発行を完了していたのではないか。ひとつは該『上海指南』の発行年が1909年であること。もうひとつは、元版第十集第十編『(偵探小説)海衛偵探案』の発行が1908.3(1913.10三版)であるからだ。

以上から、元版百種の発行完了は、1908年ころだったという推測がなりたつ。

ただ、『上海指南』の広告が惜しいのは、全体の刊行完結をいうだけで、具体的な書名がかかげられていないことだ。書名を知るためには、つぎの『東方雑誌』広告を見る必要がある。

『東方雑誌』第8巻第1号(1911.3.25)の広告

「商務印書館出版図書総目録 小説類 説部叢書／全集百種／連木箱／二十八元」と書かれ、その百種の書名とそれぞれの定価までも掲げる。

この広告でいう木箱に入れて28元は、『上海指南』の広告に見られた木箱に28元と一致する。

『天際落花』『劇場奇案』からはじまり、『夢遊二十一世紀』『華生包探案』と書名がつづく。『上海指南』にはあげられなかった元版の題名が『東方雑誌』によって明らかにされた、と誰しもが考える。自然な流れであって、とくに不自然なところはない。

そこで改組の問題が生じる。

ここでいう改組とは、収録作品の入れ替えを意味する。

『東方雑誌』にかかげるのは、元版百種を改組したものなのだ。作品を入れ替えているのだが、書名を見る限り、その事実をうかがうことができない。元版第一集を知っていなければ、気がつかないだろう。

あとでも問題にするが、広告の最初に出てくる『天際落花』は、元版の『佳人奇遇』を差し替えたものだし、『劇場奇案』の前は、『経国美談』だった。『華生包探案』は、元版では『補訳華生包探案』という題名である。

商務印書館自身が、初集に改組したことを説明しない。知らん顔なのだから、読者にとっては迷惑なはなしだ。

改組その1

元版の2作品を入れ替え、配列の順序を手直ししていることを記憶にとどめておいてほしい。

この改組が即「初集」への改称とはならないから、複雑だというのだ。

改組の時期は、『天際落花』の発行が1908年五月、『劇場奇案』が1908年六月らしいから、1908年ではないかと考えられる。

「説部叢書」は、最初、『佳人奇遇』『経国美談』からはじまった。1908年に、それぞれ『天際落花』『劇場奇案』に入れ替え改組した元版百種を木箱に入れて販売する。その広告が、上にみた『上海指南』の記事だ。あとでもう一度、論じる。

これ以後も、商務印書館は、「説部叢書」に元版があったことは、広告のうえでも一言も触れない。ただし、実際には、元版も改称後の初集などと一緒に刊行していたことを示す証拠がある。

『商務印書館訳印説部叢書三集様本』
刊年不記（1920年？）

「説部叢書」第3集100種173冊の購入
予約募集冊子である。

その発行年は、記載がない。ただ、「旧
曆庚申年七月底為止八月底出書」とある
ので1920年の発行だと予想される。

あわせて第1集（すなわち初集）、2集の予約も募る。貴重なのは、第3集の書目ばかりではなく、初集、2集のものを収録している点だ。

初集の題名は、『天際落花』『劇場奇案』『夢遊二十一世紀』『華生包探案』と
ならんで、あきらかに表示通りの初集である。元版については、何もいわない。

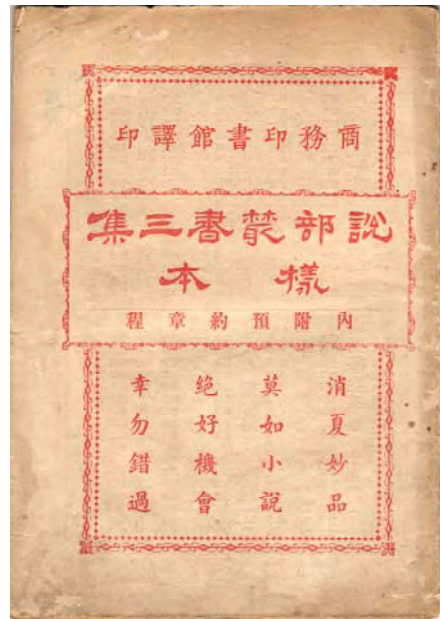
『小説書目』商務印書館 刊年不記

これも商務印書館の広告冊子だ。

収録「説部叢書」の呼称を「第一集」などと書いて、初集との区別をしない。
ずさんである。

この書目のおもしろいところは、ひとつは第4集22種を掲載していること。ふたつめは、内容別に分類し、さらに一部の作品に原書、原著者を明示していることだ。残念なのは、発行年月日を書かない。広告のための書目だからしかたがない。

第4集第22編『情天補恨録』の発行が1924年5月だから、これを掲載する『小説書目』の発行は1924年以降となるう。





商務印書館『図書彙報』第118期（1927.4）

「説部叢書」初集から第4集22種の書名をかかげる。分類せず、順番に書名を並べ、これにも一部の作品には、原書と原著者を掲載している。

のちの『図書彙報』1936年3月版には、「説部叢書」の掲載はない。売りきったとしても、売れるとなればいくらでも重版するのが出版社のやりかただ。あるいは、陸昕がその文章のなかで書くように、商務印書館が日本軍の爆撃を受け、紙型などすべてを焼いてしまったから再版できなかったのだろうか。また、文言で翻訳された「説部叢書」は、すでに時代の流れにあわなくなってその使命を終えていたとも考えられる。

以上のような書目をも参考にして編集されたのが、次に紹介する『商務印書館図書目録（1897-1949）』だ。

『商務印書館図書目録（1897-1949）』北京・商務印書館1981。92-98頁
創業当時からの刊行物を分類収録したこの目録は、とても貴重である。

貴重であるにもかかわらず、出版年月を省略するという大失態を演じている。これでは、それまで商務印書館が発行していた広告用の冊子とかわらない。それが商務印書館の編集方針である、といわれれば、そうですかと答えるしかない。原物で確認しながら記録したであろうに、出版年月を書き落とすとは、中途半端といわれてもしかたがなかり。研究用の資料とすることは、できない。まことに残念なことだ。

それでも、書名と一部の原著と著者名がわかるだけマシ、といえようか。全体の規模を数字で示すと、こうなる。

第一集初集一百種130冊

第二集二集百種162冊

第三集三集百種173冊

第四集四集二十二種35冊

「第一集初集」などとわけのわからぬ表記をしている。もしかして、初集以前に元版十集があることを知らないのではなかりか。

というわけで、商務印書館の発行する目録類は、いずれも元版第一-十集とのちの初集から第4集までの区別をしていない。区別しないどころか、元版第一集第一-十編と初集の第1-10編に書籍の入れ替えがあったことを知るてがかりは、これらの目録にはどこにもないのだ。

だから、くりかえして申し訳ないが、やむをえない事情があるにせよ、陸昕の紹介文は貴重ではありながら、大きな欠点があるといわざるをえない。

欠点が欠点であるとなぜわかるのか。簡単なことだ。日本では、これよりもはるか以前に「説部叢書」を論じる中村忠行の詳細な論文が発表されているからである。

中村の研究を紹介しながら、商務印書館版「説部叢書」の複雑な成立情況の説明に筆を進めたい。

3 中村忠行の研究

中村忠行「商務版『説部叢書』について 書誌学的なアプローチ」(『野草』第27号1981.4.20)の説明は、きわめて詳細である。日本古典文学研究と並行して長いあいだ日中比較文学研究に従事していた著者にはじめて著述が可能になった、といってもいい。深い学識と広い調査、および長い経験と鋭い洞察に裏打ちされた注目すべき論文である。

論文は、全5章より成る。各章の内容を要約しておこう。

内容要約 1

利用できる資料として前出『中国近代現代叢書目録』が出版されたことをいう。

中村論文の冒頭に第2次資料が出てくるのは、日本の研究者としてしかたのないことだ。どういう意味かということ、日本には、商務印書館版「説部叢書」の原物全冊を所蔵する公共機関は、存在しないからだ。ほんの一部分が実藤文庫(東京都立図書館)に収蔵されているくらいか。中村忠行自身は、台湾で原物を収集していたが、敗戦で日本に渡ってくるとき、すべてを失った。のちアメリカに交換教授として日本文学を教えに赴任した先に、「説部叢書」が所蔵されていることを知った。それを複写してふたたび研究論文を発表しはじめた、といういきさつがある。

原物の多くが手元になれば、目録の記載を頼りにせざるをえない。だから、まず目録の記載を問題にする。

この『中国近代現代叢書目録』について中村が指摘した不備は、いくつもある。

ひとつは、「説部叢書」の刊行開始を1903年(光緒二十九年)4月とするが、ほかの資料では1906年(光緒三十二年)となっていて一致しない(鄒振環が「説部叢書」の出版開始を1903年4月としたのは、『中国近代現代叢書目録』にもとづいていることがわかる)。

ひとつは、元版の第一集第三編以下第十編までと、第六集第四編の書名が抜けている。

ひとつは、原著者名を間違っているものがある。

ひとつは、刊記には、元版のそれと初集本のそれとの間に、相異なるものがある。

ひとつは、重版の記録が、年月と矛盾する。たとえば、1906年5月3版、12月再版のように。

いずれも、原本の矛盾した記載を指摘するものだ。『中国近代現代叢書目録』の記載の問題もあるのだが、これらは「説部叢書」それ自体がもっている矛盾であるといってもいい。それだけ、成立の過程が複雑であったことの証拠となるだろう。

内容要約2

いくつかの作品についてその刊記を問題にする。年月が話題の中心となり、ややこしい。

問題を複雑にしている原因のひとつは、『繡像小説』がからんでくるからだ。

『繡像小説』にはじめ連載されていたものが、のちに単行本となり、さらにそれが「説部叢書」に吸収される。

別のある作品は、最初に単行本が刊行され、のちに『繡像小説』において再度連載がはじまる。

ところが、ある作品は、日本語翻訳から漢語に翻訳しているにもかかわらず、日本語翻訳の刊行年月よりも漢訳の『繡像小説』連載のほうが時間的に早いという信じられない「事実」があることを指摘する。

今、深入りすることは避ける。その理由のひとつは、元版の「説部叢書」を全部は見るができないからだ。元版といっても、その1型と2型がある（後述）。再版の奥付に記載された初版の刊年は、信用度が低い。初版の元版を見ることは、きわめてむづかしい。

となると、再版の元版を根拠にしての推測は、確実性をそこなうといってもいい。

もうひとつ留意しなければならないのは、『繡像小説』の刊年が記載されなくなり、発行が遅れ気味であった事実がある。だから、予測される刊年をもとにし

て問題を検討しても、事実とは離れることになる。

中村忠行がこの論文を書いた時には、『繡像小説』発行遅延説は、まだ提出されていなかった。

現在は、研究がより深化しているから軽々しく論じるわけにはいかない。

中村論文のこの部分は、刊記について一筋縄ではいかないことが存在している、くらいに認識すれば、それで十分だ。

内容要約 3

中村論文の中心をなす部分である。

主張：「説部叢書」は当初から計画立案したものではない。

論文から引用すると次のようになる。

「初版上梓の期日が、編序に従ってはいない。それも、一二個月前後する程度のものではなく、年を隔てるものが、雑然と並べられているのである。これは、当初から計画立案された叢書の出版され方ではない。既刊のものを任意に拾い、叢書に仕上げたことを示すものである」(287頁)

その証拠として、版式が統一されていないことをあげる。

32字詰め13行、25字詰め11行、33字詰め12行、32字詰め11行という不統一である。この不統一は、「先行する本の組版乃至は紙型をその俣に用いて、印刷したものであるに違いない」(288頁)。

初集の整った版式と統一された表紙を見ているだけでは、誰でもが最初から計画的に「説部叢書」が編集発行されたと考える。統一感のある初集なのだ。

だが、初集以前の状態を考えれば、確かに、中村論文のいうように、バラバラで発行され統一感はないかもしれない。

中村の主張には、大いにうなずくことができる。あとで別の訳書をあげて説明しよう。

内容要約 4

表紙を示しながら、いくつもある装丁の違いを説明する。

第1形式から第3形式までである。さらに第3形式のなかには5種を数える。複

雑にしてその数は、多い。

ここで問題をややこしくしているのは、表紙、扉の絵柄の違いだけでなく、商務印書館の呼称が上海商務印書館であったり中国商務印書館であったりするからだ。

中村が商務印書館の頭に上海がつくか、中国がつくかで区別しようとしているのには、理由がある。

商務印書館と金港堂の合併にからんで名称が変化したと考えるからだ。

すなわち、創業時は上海商務印書館とよび、金港堂との日中合併時期は中国商務印書館とし、1911年5月以降の独立期は商務印書館といった、と推測する。

この呼称の変化は、中村の持論である。私の見るところ、そのようでもあり、そうでもなさそうでもあり、今のところ確認できない。

陸昕が初集、2集と第3、4集の表紙が異なることだけを指摘するのに比較すれば、中村論文の示す多様な表紙には目をみはる。日本では20年前にすでに相当深い研究論文が発表されているのだと、いまさらながらに感心せざるをえない。

内容要約5

元版第一集の『佳人奇遇』と『経国美談』が、それぞれ『天際落花』と『劇場奇案』に入れ替えられたことを指摘するのが第1点だ。第2点は、元版第五集第三編として発行した『魯濱孫飄流続記』をくりあげて第四集第三編『魯濱孫飄流記』に接続したことをいう。つまり、配列に手を加えたのである。

中村は、初集に改称したのは、商務印書館が金港堂との合併を解消したのがきっかけだという。

「既刊の百種を「初集」の名に統一し、各集十編、十集一具という組織を改めて、第一編から第百編までの通し番号として、覆刊を図った」(296頁)

以上、中村論文は、商務印書館版「説部叢書」の成立状況をほぼ説明していると考ええる。

私が以下にのべることは、中村説を大きくはずれることはないかもしれない。資料を提出しながら、私なりの整理説明を試みたいと思う。

4 商務印書館版「説部叢書」の成立

強調しておきたいのは、商務印書館版「説部叢書」は、初集100種からはじまって第4集22種で完結した、という単純なものではないことだ。初集が最初からのかたちではない、といたい。

初集100種の前には、すでに「説部叢書」が存在していた。中村忠行は、それを元版と呼んだ。今、その呼称に私も従う。ただし、元版を、1型と2型のふたつに分ける。

さらに、この元版の前にも刊行物が存在しているばあいがあって、これを先元版とよぶ。ただし、この先元版は、「説部叢書」とは直接の関係はない。どういふことかといえば、商務印書館が単なる翻訳として出版したものであるにすぎない。当初は、「説部叢書」という名称で翻訳作品をまとめる意図はなかったということだ。

「説部叢書」の成立過程をたどるためにここで使用する資料は、『繡像小説』と『東方雑誌』に掲載された自社刊行物の広告だ。

先元版

先元版とは、「説部叢書」に組み込まれる前の刊行物を指す。簡単にいえば『繡像小説』連載の、あるいは単行本になった翻訳小説である。

まず、『繡像小説』の出版広告から見ていく。

『繡像小説』広告

自社刊行物の広告を追っていくと興味深い事実を見いだすことができる（なお、この広告は、上海書店の影印本では削除されている。周知の事実ではあるが、念のために書いておく）。

商務印書館にとって『繡像小説』は、最初の文藝雑誌である。その時々発行した書籍がそのつど掲載広告される。これを見れば、のちに「説部叢書」としてまとまる翻訳書群は、最初はひとつふたつの独立した単行本にすぎなかった。

「説部叢書」など影も形も存在しないことが理解できる。

その証拠をかかげよう。

第1期癸卯（1903）五月初一日

華英字典、華英文教科書を冒頭におく。英文、漢文、和文教科書のあとに政学叢書、歴史叢書、財政叢書、地理叢書、帝国叢書、戦史叢書などがつづいて、それらのなかに説部叢書がある。

説部叢書 経国美談前後編、佳人奇遇、広長舌

商務印書館が刊行した翻訳小説の初期のものは、日本の『経国美談』と『佳人之奇遇』であったことがわかる。

同時に掲げられている『広長舌』は、日本幸徳秋水著、中国国民叢書社訳*1であって、こちらは小説ではない。政治類（『商務印書館与新教育年譜』では社会科学類の国際関係）に分類される種類の翻訳だ。

小説以外の書籍も含んでいるところからわかるように、この広告に見える「説部叢書」というのは、のちに有名になる固有名詞ではなく、普通名詞の「説部叢書」ということだ。それにしても、いいかげんな分類である。

第2期癸卯（1903）五月十五日

説部叢書の欄に2点の刊行物が加わる。

説部叢書 経国美談前後編、佳人奇遇、広長舌、造化機新論、繡像小説

『造化機新論』は、日本細野順君著、出洋学生編輯所訳*2で『商務印書館与新教育年譜』では応用科学類の生理に分類される。『繡像小説』は、いうまでもなく中国大陸では最初の小説専門雑誌だ。自社刊行物だからここに収録したのだろう。

ここでも『造化機新論』という小説以外の書籍を含んでいる。

小説とその他を混在させる広告は、このあとも第6、7期とつづく。

第6期癸卯（1903）六月十五日

説部叢書 経国美談前後編、佳人奇遇、広長舌、造化機新論、繡像小説、天演論

第7期癸卯（1903）七月初一日

説部叢書 繡像小説、佳人奇遇、経国美談前後編、広長舌、造化機新論、天演論、夢遊二十一世紀

巖復の有名な翻訳論文『天演論』までも「説部叢書」に収録しているのが目を引く。

小説以外の作品を説部叢書に収録する矛盾によろやく気がついたためか、分類に変化が生じるのが第9期からだ。

第9期癸卯（1903）八月初一日

説部叢書 繡像小説、佳人奇遇、経国美談前後編、夢遊二十一世紀
雑誌 広長舌、造化機新論、天演論など

ここに見える「雑誌」というのは、書名を見ればわかるように、今日の用語と同じではない。「その他」というくらいの意味で使われている。

『繡像小説』は、第13期より刊行年月日を記載しなくなる。

第18期刊年不記

説部叢書 繡像小説、佳人奇遇、経国美談前後編、夢遊二十一世紀、補訳華生包探案

広告を見れば、発行書籍が確実に増加していることが理解できる。

あいかわらず普通名詞としての「説部叢書」が使われている。このあとも、かなり長期にわたって事情は変化しない。

本館出版説部叢書	
第一集	
第一	佳人奇遇 每本洋七角
第二	英國美談前後編 每本洋五角
第三	夢遊二十一世紀 每本洋一角
第四	補譯華生包探案 每本洋一角
第五	小仙傳 每本洋
第六	梁中案 每本洋一角
第七	環遊月球 每本洋二角
第八	時人奇遇 每本洋二角五分
第九	東方雜誌 每本洋二角
第十	黃金血 每本洋二角
第二集	
第一	金銀島 每本洋一角
第二	回頭看 每本洋
第三	降妖記 每本洋
第四	寶圖奴 每本洋
第五	是本道箇小傳 每部洋一元
第六	降妖記 每本洋二角五分
第七	環遊美人 每本洋二角
第八	寶圖奴 每本洋
第九	埃及金字塔日記 每部洋一元
第十	續出書 每部洋
第十一	雙龍圖 每本洋二角五分
第十二	鬼山風傳 每本洋一元

上海商務印書館新評説部叢書出版廣告	
英國詩人吟邊燕語	每本洋三角五分
佳人奇遇	每本洋七角
英國美談前後編	每本洋五角
夢遊二十一世紀	每本洋一角
奪嫡奇冤	每本洋五角
補譯華生包探案	每本洋一角
梁中案	每本洋一角
環遊月球	每本洋二角
黃金血	每本洋二角五分
空中飛艇上	每本洋一角
空中飛艇中	每本洋一角
金銀島	每本洋一角
美洲童子萬里尋親記	每本洋三角
評註繪圖聊齋志異	每部洋七角
繡像三國志	每部洋一元
繡像列國志	每部洋七角
日俄戰紀	每冊一角五分
東方雜誌	每冊一角五分
續出書	每冊一角五分
回頭看	每本洋
降妖記	每本洋
寶圖奴	每本洋

たとえば、該誌第30期には、「上海商務印書館新評説部叢書出版廣告」と銘打って『英国詩人吟邊燕語』以下18種類の書名があがっている（そのなかには『東方雑誌』も含む）。「続出書」には4種類がある。

この時点でも、あいかわらず単なる翻訳小説として集められているにすぎない。変化が見られるのは、第41期の広告からだ。

「本館出版説部叢書」と題して第一集十編と第二集十編、および第三集二編の書名が掲げられている。

ここではじめて固有名詞の「説部叢書」が出現した。

ただ残念なことに『繡像小説』第41期には刊行年月日が記載されていない。雑誌そのものの刊行が遅れ気味であった。私の推測では、該誌第41期は、1905年八月ころには発行されていた。

これを根拠にすれば、およそ1905年ころには組織的な「説部叢書」第三集が発行されていたことがわかる。第一集の刊行は、それよりも前にはじまった可能性

が高い。これが元版1型である。

『佳人奇遇』『経国美談』を「説部叢書」第一集に収録する広告が、『繡像小説』の第72期まで掲載された。

『繡像小説』の刊行は、なんどでも言うが、遅れていた。最後の第72期は、私の推測では、1906年年末に発行されている。

『繡像小説』の広告から推測されるのは、『佳人奇遇』『経国美談』を収録した「説部叢書」は、1906年年末頃まで刊行されていたということだ。

別の手掛かりがないか『東方雑誌』の出版広告を見ることにする。

『東方雑誌』出版広告

広告ページに小説作品を並べるのは、『繡像小説』とかわらない。

第2年第2期光緒三十一年（1905）年二月二十五日

商務印書館出版小説類 夢遊二十一世紀、補訳華生包探案、金銀島、三国志演義、東周列国志演義、水滸伝、岳伝、聊斎志異ノ英国詩人吟辺燕語、案中案、環遊月球、奪嫡奇冤、空中飛艇、経国美談前後編、佳人奇遇

『経国美談』と『佳人奇遇』の2書が見えるが、これも先元版であって「説部叢書」とは関係がない。

『東方雑誌』に組織化された「説部叢書」の広告が表われるのは、『繡像小説』よりも少し時間的に遅れる。

第3年第2期光緒三十二年（1906）年二月二十五日

商務印書館出版 説部叢書第三集

第三集第五編 巴黎繁華記、第六編 斐洲烟水愁城録、第七編 撒克遜劫後英雄略

説部叢書第一集

第一集第一編 佳人奇遇、第二編 経国美談前後編、第三編 夢遊二十一世紀、第四編 補訳華生包探案

説部叢書第三集

第三集第三編 曇花夢、第四編 指環党

(後略)

なぜだか順序を入れ替えて第三集からはじまる「説部叢書」の広告だ。これらが元版である。ここでもすでに第三集が発行されていることに注目したい。

元版1型 a b

元版を1型と2型に分けるのは、表紙の意匠が異なるからだ。

元版1型をさらにabにわけて複雑なように見えるかもしれない。だが、1型aは、扉の説部叢書と商務印書館が毛筆で書かれており、1型bは、それらが活字であるにすぎない。

私が考えるに、元版1型は、先元版にもとづいて制作されている。

『補訳華生包探案』を例にして説明しよう。

該作品は、もともと「華生包探案」として1903年の『繡像小説』第4-10期に連載された。コナン・ドイル作シャーロック・ホームズ物語のなかの6篇である。

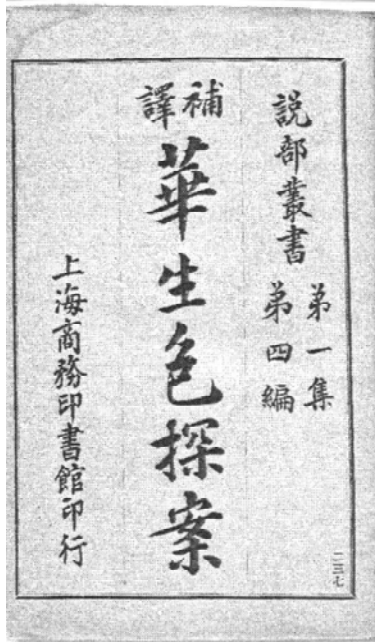
『繡像小説』は、線装の活版印刷だ。連載終了後、「華生包探案」部分のみを抜き出して1冊の単行本に仕立てた。単行本にできるよう、初出の雑誌では最初からページ数が連続するように印刷してある。単行本化が目的であるかのように、雑誌の連載途中で物語が断ち切れようと、その不自由な体裁には配慮しない。

線装本だから表紙と扉をつければ、それで単行本となる。単行本にするとき『補訳華生包探案』と題名を変更するのも簡単だ。

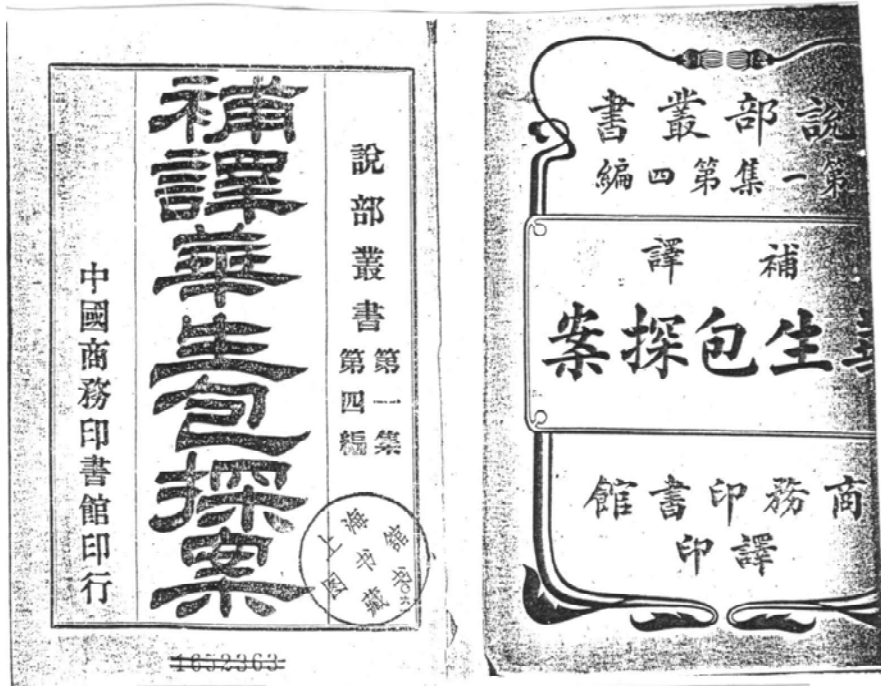
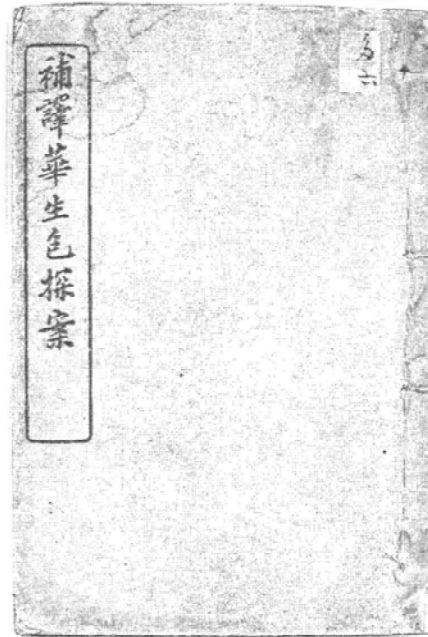
表紙は印刷題簽、扉は毛筆書きで右側に「説部叢書」第一集第四編と示し、中央に大きく書名を置く。左下は「上海商務印書館印行」と書く。本文は『繡像小説』連載分を流用する。奥付は、ついていない。お手軽に単行本ができあがった。

ただし、「序」の日付が「光緒二十九年癸卯仲冬」とあるから1903年陰暦十一月頃には発行されていたと予測される。

第一集第四編という比較的早い序列の作品が1903年の刊行だとすれば、「説部

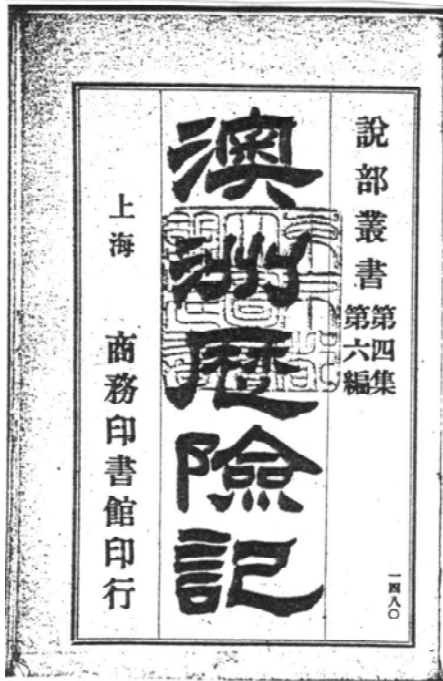


元版1型a



元版1型b

元版2型タンボボ文様



ところが、ここに奇妙な版本がある。表紙はタンポポだが、扉に前の世代の元版1型bもあわせもったものが存在している。

元版第四集第六編『澳洲歴険記』(光緒三十二年四月首版)の表紙は、タンポポで、扉は縦書きの元版1型bそのものである。

もうひとつは、元版第六集第3編『美人煙草』(光緒三十二年歳次丙午季夏首版/光緒三十二年丙午九月二版)も同様だ。

先に紹介した元版2型第一集第四編『補訳華生包探案』も同じ例であった。

せっかく印刷していたものを捨てるのは惜しいから、使用したということだろうか。おおらかなことだ。

改組その2

「説部叢書」に作品の入れ替えがあった事実は、中村忠行がすでに指摘している。本稿でも、たびたび言及した。

その時期は、いつか。先に1908年と書きはしたが、実は、確定するのは、むづかしい。

入れ替えられた『佳人奇遇』について見てみよう。

第一集第一編に配列され、しかもタンポポ文様の2型の表紙をもつ版本がある。

ただし、奥付はない。裏表紙に掲げられた小説類のなかに、定価を示さない作品がある。『金塔剖尸記』(1905年三月)、『珊瑚美人』(同年四月)、『売国奴』(同年十一月)の3作だ。中村が書くように、定価がないということは、まだ発行されていないことを意味する。それぞれの初版は、カッコ内に示したとおりで、ならば、2型『佳人奇遇』の刊行は、1905年ということになる。

また、おなじ広告に見られる『繡像小説』一至三十五期から推測しても、1905年六月以降の発行だ。

元版第六集第三編『美人煙草』の裏表紙には、『佳人奇遇』『経国美談』を掲げているから、これも改組前の発行だとわかる。奥付には、「光緒三十二年歳次丙午季夏首版/光緒三十二年丙午九月二版」とあって、1906年九月とわかる。すなわち、改組は、1906年九月以後に絞られる。

前出『東方雑誌』第8巻第1号(1911.3.25)の広告には、すでに改組されてい

る作品が紹介されている。

以上から、改組は、ほぼ1906-10年の間に実行されたと推測できよう。

『天際落花』の発行は1908年五月、『劇場奇案』が1908年六月となれば、両者の出版は、推測の期間内だ。

そうなると、両書の示す1908年を改組の時期と考えてもいいのではないか。

中村忠行は、「これを差換えの時期と見るには、少しく躊躇」(294頁)するという。この2書のみ、字詰めとアラビア数字を用いるノンブルの打ち方、波ケイを引いた柱の位置といった版の組み方が、ほかのものとは異なるからだ。つづけて「これは明らかに他からの流用である」と主張する。

何度もいうように、「説部叢書」といっても表紙と奥付を張り替えるだけで成立する。だから、「説部叢書」用に新しく活字を組みなおす必要など、最初からないのだ。「他からの流用である」からこそ、簡単に『佳人奇遇』『経国美談』と入れ替わることができる。手間がかかるのであれば、なにも作品を入れ替える必然性もない。

私の手元に、(英)蜚立伯倭本翰著 林紓、魏易同訳『(偵探小説)藕孔避兵録』(上海・商務印書館 宣統元(1909)年五月初版 E. PHILLIPS OPPENHEIM“THE SECRET”1907)がある。見れば、その組版は、中村が指摘したのとまったく同じなのだ。

当時、商務印書館が翻訳小説を刊行する時に採用していた共通の組版があった。それを使用して出版したか、これから出版しようとしていた単行本を表紙と奥付を張り替えて「説部叢書」に組み入れたということだ。

そうであるならば、『天際落花』と『劇場奇案』にある1908年を改組の時期だと断定してもいいのではないか。

改組にともなって生じる疑問をいくつか書いておきたい。

改組の理由

1908年になって、なぜ日本人の原作の『佳人奇遇』と『経国美談』を別作品に入れ替える必要があったのだろうか。納得のいく説明を聞いたことがない。もっとも、この事実に気づいている中国の研究者は、ほとんどいないようだから、無



理もない。

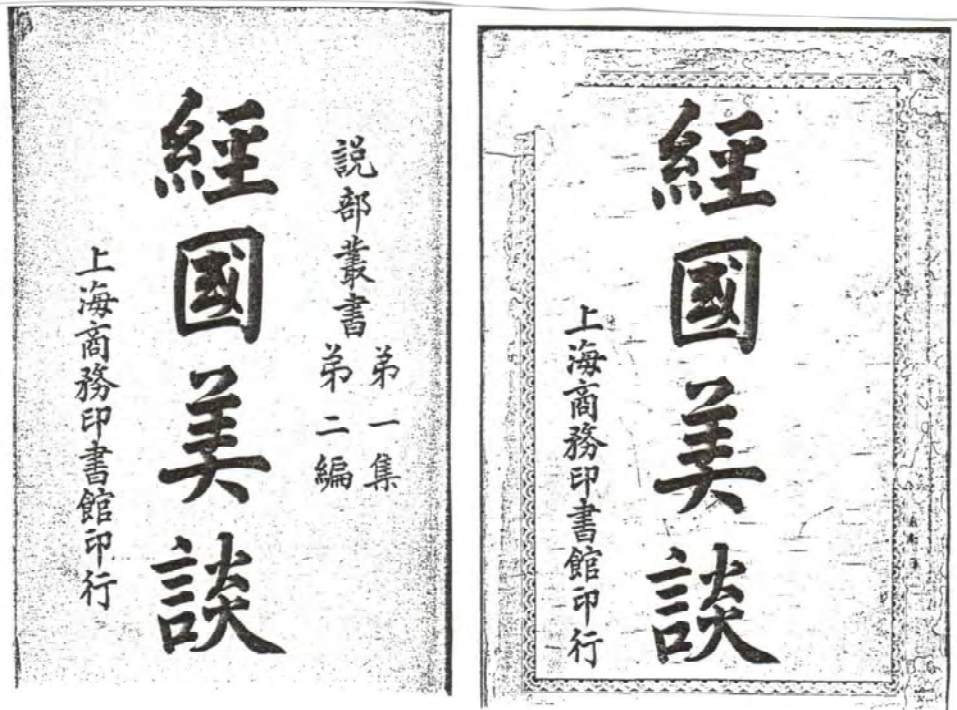
「説部叢書」に収録する日本語原作にまつわる事実を書いた文章がある。

謝菊曾「《説部叢書》和《林訳小説》」(「涵芬楼往事」のうちのひとつ『隨筆』第6集 1980.2)だ。

謝菊曾は、1916年、商務印書館編訳所に入所して働いたことがあるから当事者の証言となる*3。

おおよそ次のように説明している。

当時、欧米の小説が大量の読者をもっていた。そこで商務印書館は、『東方雑誌』『小説月報』に連載した欧米の長篇小説の翻訳を、単行本にして「説部叢書」に収録した。第1集、第2集の売れ行きがいいので、また第3集をだす。そのなかのいくつかは、雑誌に連載せず、原稿を買い取ってそのまま単行本にしたものもある。日本の小説を翻訳した『乳姐妹』という作品があった。そのころ、日本の小説の評判は欧米の小説よりも低く、また「説部叢書」はすべて欧米名家の作品であることを標榜していたから、日本の小説が入り込むと非難を引き起こしかねない。しかし、すでに印刷しはじめていたため、主編の憚鉄樵と高夢旦は相談し



て、それを「説部叢書」第3集から引きぬき、表紙をかえて中国図書公司名義で発行した。(82頁)

「説部叢書」の成立過程から、収録作品の出し入れの内情までを公表している興味深い。

補えば、翻訳作品を連載していた雑誌は、『東方雑誌』『小説月報』のほかに、『繡像小説』があることを謝菊曾は忘れていた。彼が編訳所に入所したのが民国になってからで、それよりずっと以前に『繡像小説』は停刊している。謝菊曾が言及しないのも無理はないか。

上でいう「第1集」は、初集を指す。初集以前の元版については、謝菊曾も知らないらしい。

「説部叢書」第3集からはじきだされた作品は、以下のものだ。

菊池幽芳著、韻琴訳『乳姉妹』上下冊 上海・中国図書公司和記1916.6

(BERTHA M. CLAY“DORA THORNE”1883。菊池幽芳「家庭小説乳姉妹」『大阪毎日新聞』1903.8.24-12.26。翻案)

たしかに中国図書公司和記の発行になっている。この出版社は、清朝末期に商務印書館に対抗して設立された。のち、商務印書館が買収して子会社のような立場にある。上の例に見えるように、商務印書館では出版できない作品を、身代わりして発行するなどの役割をはたしている。

日本の小説が、欧米のものに比較して評判が低いため作品を差し換えた、と謝菊曾は説明する。

「説部叢書」が欧米の作品を売り物にしていたとは知らなかった。そうであるならば、菊池幽芳原作作品を「説部叢書」から抜き出した商務印書館の処置も理解できないわけではない。

「説部叢書」の冒頭に収録されていた『佳人奇遇』と『経国美談』が排除されたのも、その延長線上におけば理解できないでもない……。そう考える人がいないとも限らない。しかし、それはありえないことなのだ。

まず、謝菊曾が証言しているのは、1916年当時のことだとわかる。『佳人奇遇』『経国美談』が別作品に入れ替わるのは、それよりもずっと以前の1908年にさかのぼる。

もうひとつ、「説部叢書」の売り物が欧米の作品であったというが、にわかには信じがたい。それでは、日本の作品は、「説部叢書」には一作品も収録されていないのであろうか。

「説部叢書」を見れば、日本語原作の漢訳が15種類もある(書名の現代漢語音abc順)。

不如帰 (哀情小説)

(日) 徳富健次郎著 塩谷栄英訳 林紓、魏易訳

上海商務印書館 戊申10.6(1908.10.30)/1915.10.25四版 説部叢書2=23

塩谷栄、E.F.EDGETT英訳“NAMI-KO”1904。原作は、徳富健次郎「不如帰」1900

懺情記 (言情小説) 2巻 上下冊

(日) 黒岩涙香原訳 商務印書館編訳所訳

中国商務印書館1906.5三版/12再版 説部叢書二=8

黒岩涙香「妾の罪」『都新聞』連載後、大川屋1890.9.19

車中毒針

(英) 勃拉錫克著 吳棹訳

中国商務印書館1905.12/1906.4二版 説部叢書三=10

石井ブラック(HENRY JAMES BLACK 快樂亭ブラック)述、今村次郎筆記『車中の毒針』三友社1891.10

鬼士官 (写情小説)

(日) 小栗風葉著 商務印書館編訳所訳

中国商務印書館1907.11 説部叢書九=4

小栗風葉『鬼士官』青山嵩山堂1905.6

寒牡丹 (哀情小説) 2巻 上下冊

(日) 尾崎紅葉著 吳棹訳

中国商務印書館1906.3/1915.6三版 説部叢書四=10

長田忠一、尾崎徳太郎『寒牡丹』春陽堂1901.2.6。本文に秋涛居士、紅葉山人とある。

橘英男 (偵探小説)

(日) 楓村居士(町田柳塘)著 商務印書館編訳所訳

中国商務印書館1907.12 説部叢書十=2

楓村居士『軍事小説 橘英男』読賣新聞日就社1905.4、菊洋社1906.4

美人煙草 (立志小説)

(日) 尾崎徳太郎著 吳棹訳

上海中国商務印書館 光緒32.6(1906)/光緒32年丙午9(1906)二版 説部叢書六=3

尾崎徳太郎は、広津柳浪の誤り。(広津)柳浪「美人苺」『太陽』11巻12-13号1905.9.1-10.1

秘密電光艇 (科学小説)

(日) 押川春浪著 金石、褚嘉猷訳

中国商務印書館1906.4/9二版 説部叢書四=7

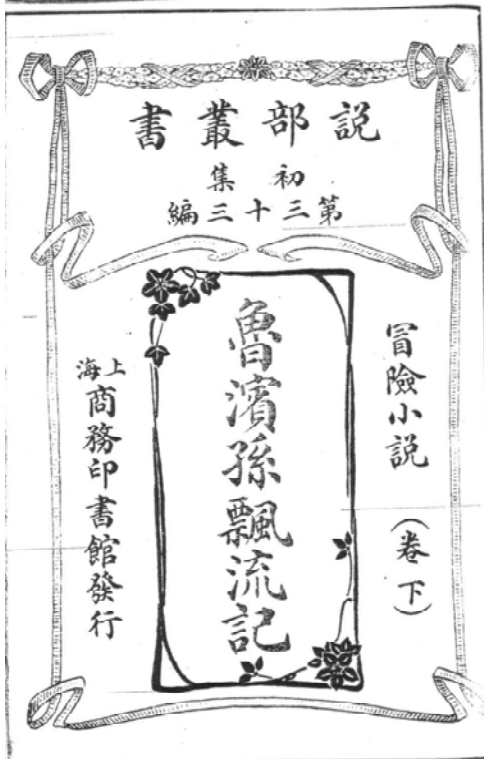
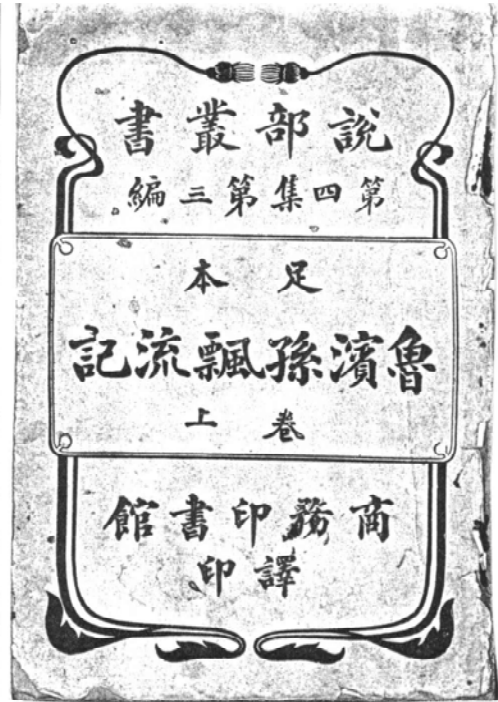
押川春浪『海島冒険奇譚 海底軍艦』文武堂1900.11

秘密怪洞 (社会小説)

- (日) 曉風山人著 郭家声、孟文翰訳
上海商務印書館1915.7.23 説部叢書2=88
曉風山人『秘密怪洞』大学館1905.12か
模範町村 (政治小説)
- (日) 農学博士横井時敬著 唐人傑、徐鳳書訳
上海商務印書館 戊申12.4 (1908.12.26) /1915.10.12再版 説部叢書2=67
横井時敬『模範町村』読賣新聞社1907.10
珊瑚美人 (政治小説)
- (日) 三宅彦弥原訳 中国商務印書館編訳所重訳
上海・中国商務印書館 光緒31.4首版(1905) /9再版 説部叢書二=5
三宅彦弥『珊瑚美人』東京三友堂1895.12.21
世界一周 (冒険小説)
- (日) 渡辺氏著 商務印書館編訳所訳
中国商務印書館1907.6/1908.1再版 説部叢書七=6
侠黒奴 (義侠小説)
- (日) 尾崎徳太郎(紅葉)著 呉棹訳
中国商務印書館1906.6 説部叢書六=2
尾崎紅葉『少年文学第19編 侠男児』博文館1892.6
侠女郎 (冒険小説)
- (日) 押川春郎(浪)著 呉棹訳
上海商務印書館1915.5.26/10.14再版 説部叢書2=47
岡崎由美は、押川春郎『冒険小説 女侠姫』1907未確認とする。
血簍衣 (義侠小説)
- (日) 村井弦斎著 中国商務印書館編訳所訳
中国商務印書館1906.6/12二版 説部叢書五=10
村井弦斎「両美人」『郵便報知新聞』1892.9.7-11.15連載。単行本は春陽堂1897.6。

ほかに日本語経由で漢訳された欧米の作品も多数ある。これらを含めて、「説部叢書」からはいずれも排除されていない。重版をくりかえしているほどによく読まれていたというのが事実だ。

「説部叢書」の目録を見れば、日本の原作があるかないか、すぐに確認できる



ことだ。謝菊曾は、商務印書館編訳所に勤務していたにもかかわらず、調べるといふ少しの努力すらせず、たまたま自分が見聞したことだけをあたかも「説部叢書」全体の方針のように拡大解釈したのである。

集編の番号

『佳人奇遇』『経国美談』にかわって『天際落花』と『劇場奇案』が組み込まれた事実だけは、わかった。

では、両書の集編番号は、どうなっているのか。

元版2型だから第一集第一編『天際落花』と第一集第二編『劇場奇案』となるはずだ。

だが、この両書については、初集本しか記録がない。私が見ていないだけで、どこかに第一集本があるのかもしれない。探索の課題とする。

作品の移動

改組にあたり、作品配列の手直しも行なわれた。

第四集第三編『魯濱孫飄流記』のうしろに、本来は第五集第三編に配置されていた『魯濱孫飄流続記』を移動した。つまり『魯濱孫飄流続記』は、第四集第四編にくりあがったのだ。それにともない9作品について1番ずつズレていった*4。

だが、番号がズレている改組後の元版2型を原物で確認することができない。さがせば出てくるはずだが、今は、課題としておく。

塗りつぶしの謎

元版2型第四集第一編『寒桃記』の表紙に、集編番号を 印で塗りつぶす版本がある。

中村忠行は、塗りつぶしの原因を元版第二、第三、第四集と新企画になる第2、第3、第4集との「間に生ずる名称の混乱」を避けるためであるとする。

はたして、そうか。

確かに、元版第二、第三、第四集と初集以後の名称が重複してしまう。だが、印で塗りつぶした『寒桃記』の発行年は「光緒三十二年二月首版」で1906年だ。



一方、初集以後の第二集が発行されはじめるのが1914年以降になる。『寒桃記』が出てきた1906年には、新企画の第2集など影も形もない。配慮する必要などなかったから 印でかくすこともない。

改組にともなう作品配列の移動に係するだろうか。

説明したように、集編番号が変更になるのは、第四集第四編からだ。『寒桃記』は第四集第一編だからその影響外にある。

理由は別のところに求めなければならぬ。今は、疑問としておきたい。

刊行完結と一括販売

目録を見るかぎり、元版第十集全10編のうち、8編が1908年に発行されている。上の改組が同じく1908年だとすれば、全十集の刊行完結を1908年だと考えれば、つじつまがあう。

1908年に改組と刊行完結があったとすれば、前出『上海指南』に見られる箱入りの一括販売も時間的につながって納得がいく。

実は、『上海指南』(1909年)と同文の箱売り広告が、『東方雑誌』第5年第9期(1908.10.19)に掲載されている。

この広告を根拠にしても、やはり、改組、刊行完結、一括販売が1908年に実行されたと見て間違いなからう。

先に示しておいた『東方雑誌』第8巻第1号(1911.3.25)の広告は、当然、改組後の作品と配列になっている。

一括販売を行なったのは、1908年が最初だ。1911年、おなじく2度目の一括販売が予告される。

『東方雑誌』第8巻第9号(1911.11.15)

「装訂結実／説部叢書／印刷精良／装一木箱定価二十八元」と表示する。説明文は、よくにている。

本館所印之説部皆系新訳新著饒有興味早已風行一時積五六年之力始得完成一百種計一百二十八冊若每冊零購共須洋四十元零若百種合購祇收回洋念八元並装一木箱廉以便携

木箱の写真を添えているのが目を引く。携帯便利とは、とても思えないが、まともしておけば紛失をまぬかれることも可能だ。

以上の2度にわたる一括販売の木箱に詰められた書籍群は、改組されているから『天際落花』『劇場奇案』に始まる元版2型 すなわちタンポポ文様の表紙をもった翻訳小説である。

改称 初集

1908年、作品を入れ替えて改組した元版全十集一百種を増刷して一括販売を行っていた。

清朝末期に歓迎された翻訳小説であるが、中華民国になってそれに対応した新しい時代には、またそれ以上の新しい翻訳小説が刊行されてもいい。継続して規模を拡大するのに、第十一集十種というふうに、数を重ねるのもひとつの方法だ。だが、時代の変化にあわせて古い叢書を新しく装うためには名称を変えるのもひとつのやり方としてある。

元版全十集を初集と呼びかえ、全100種とする。それにつづけて第2集100種というぐあいに数えれば、規模が大きくなってでも対応できる。

というような議論が商務印書館編訳所で行なわれたのではなかろうか。その間の事情を説明する証言は、なにひとつ残ってはいない。だから私が想像するのだ。初集と改称して、表紙も一新する。その時期は、1913年だろう。

1914年4月再版の奥付をもつ翻訳書があまりに多いため、改称は1914年かと考

えた人もいるかもしれない。

だが、初集の表紙をもつ以下の発行年月を見れば、1913年に初集の初版が出版されたとわかる。

初集第14編 『降妖記』 乙巳2/1913.12

初集第17編 『埃及金塔剖屍記』 乙巳3/1913.12

初集第18編 『懺情記』 乙巳4/1913.12

初集第56編 『霧中人』 丙午11/1913.10

初集第63編 『空谷佳人』 丁未3/1913.9

以上の改革は、いずれも商務印書館と金港堂が合弁会社であった時代に実行されている。

ところが、1913年から金港堂との合弁を解消する交渉がはじまった（正式決定は1914年1月）。

1914年の再版

合弁解消が成功することを予定していたのだろう、「説部叢書」初集100種をまとめて再版することにした。

その予告が『東方雑誌』第10巻第4号（1913.10.1）と翌第5号（11.1）に掲載されている。資料だから全文を引用する（下線部分は大活字を使用）。

説部叢書 商務印書館出版

右：一百又三十冊 / 一万六千余頁 / 七百数十万言

左：零售四十余元 / 預約減収十元 / 陽曆二月截止

本館出版小説。情節新奇。趣味濃深。極承閱者歡迎。惟以陸續發行。未得窺全貌為憾。本館特重行彙印發售。定價二十元。預約十元。不及原價四分之一中有林琴南先生手筆二十一種尤為本叢書之特色。三年陽曆三月出版決不有誤另刊目錄樣本函索即行寄贈預約二月底截止。四川、雲南、貴州、陝西、山西、甘肅、新疆、八省。路途較遠。展期至五月底為止。愛讀小説者幸勿失此機會

上海商務印書館謹啓

文中でわざわざ林琴南の名前を出すのは、外国文学の翻訳者として、購読者を増加させる効果があったことを意味する。

民国3年3月には必ず刊行すると約束した。だが、実際は1ヵ月遅い4月になった。

先に『商務印書館訳印説部叢書三集様本』を示しておいた。上の広告を見ると初集を再版するとき募集した予約に「目録様本」を発行すると書いてある。初集で行なったのと同じことを三集発行時にも実行したことがわかる。

中国は広い。上海から離れて遠い地方の読者には、3ヵ月の時間的余裕を見るのも親切な扱いだ。

本文は、紙型を利用して増刷ができる。あるいは、多めに印刷して在庫があったのであれば、それを使うことが可能だ。

前年の1913年に一新した表紙 赤色縦書きの書名は、そのまま流用する。奥付だけを張り替えればいい。

こうして、商務印書館が金港堂との合併を解消した直後に、大型叢書「説部叢書」の初集100種の再版が大々的に発売された。大いに注目を集めただろう。現在、一般に目にするのできる版本がこの1914年再版本であるというのは、それだけ大量に印刷発行したという証拠である。

元版と初集の混在

1914年、「説部叢書」の再版がまとまって出版されたことは以上の説明で理解できる。

再版本が出る前の1913年に、奇妙な現象が発生している。

1913年といえば、それまでの元版(2型)第一集から第十集までを改称して「初集」にした年だ。普通、新しいシリーズの出版がはじまれば、旧版(この場合は元版2型)は、印刷しない。ところが、商務印書館は、作品によっては、「初集」が発行されたあとに、元版を出版している。つまり元版と初集が混在しているのだ。

3 作品について、その元版 2 型と初集本の奥付を示す。

第四集第三編

『(冒険小説)魯濱孫飄流記』2巻 上下巻 (英)達孚著 林紓、曾宗鞏訳
DANIEL DEFOE“LIFE AND STRANGE SURPRISING ADVENTURES OF
ROBINSON CRUSOE”1719

*中国商務印書館 1905.12/1906.閏4再版 [叢書778]

上海商務印書館 乙巳年(1905)十二月/中華民國二年(1913)十月六版

初集第33編

*上海商務印書館 乙巳年(1905)十二月/1913.10五版

上海商務印書館 乙巳年(1905)十二月/中華民國三年(1914)四月再版

「1905.12」は新曆旧曆の混用だ。それを考慮すれば、元版が乙巳年(1905)十二月に発行されたのは、記述が一致している。元版についていえば、その再版、六版がだされたのも理解できる。

初集第33編を見ればどうなるか。奥付表示が1914年の再版となっているのは、同一作品について初集で再版した、という意味である。しかし、初集になって「1913.10五版」があるのに、1914年4月の再版と表示するのは版数の数え方がおかしいではないか。

それよりも、初集の五版を1913年10月に発行していて、おなじ10月に元版六版を出すのは、同時に元版と初集を印刷発行したことを意味する。これが元版と初集の混在である。

第七集第七編

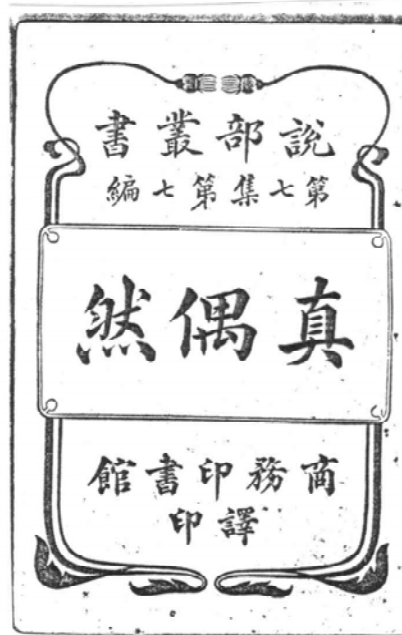
『(言情小説)真偶然』26章 (英)伯爾著 商務印書館編訳所訳

上海商務印書館 丁未年(1907)六月/中華民國二年(1913)十月三版

*1907.6/1908.1再版 [叢書779]

初集第67編

上海商務印書館 丁未年(1907)六月/中華民國二年(1913)七月三版



商務印書館發行

汪文端	臨郭	令公	碑
定價	大洋	三角	一角
何子貞	臨黃	庭	經
定價	大洋	二角	一角

汪何二公書法之妙世所共知本館覓得二公真蹟各一種付之影印筆畫清晰絲毫爽足以供中學堂習字之用

（真偶然一冊）
（每冊定價大洋壹角）

原著者 英國伯爾
譯述者 商務印書館編譯所
發行者 商務印書館
印刷所 商務印書館
總發行所 商務印書館
分售處 商務印書館分館

丁未年六月初版
中華民國二年四月再版

前清宣統二年四月初三日呈報五月十四日註冊
※此書有著作權翻印必究※

商務印書館出版

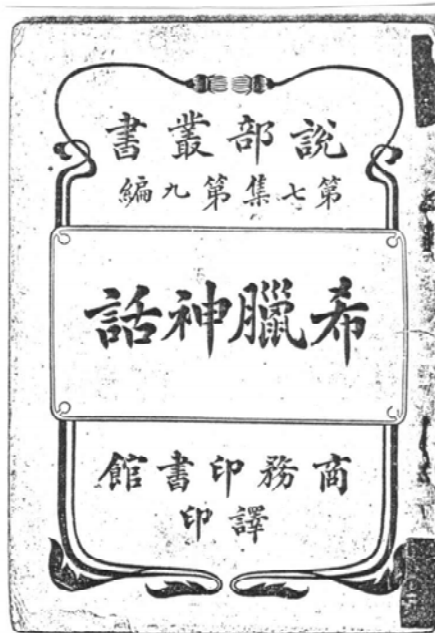
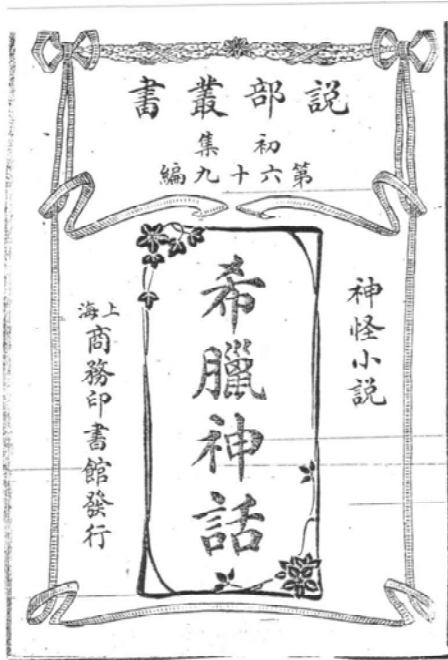
教育小說	天笑	編
埋石棄石	沈運科	編
偵探小說	沈運科	編
七醫士案	沈運科	編

（真偶然一冊）
（每冊定價大洋壹角）

原著者 英國伯爾
譯述者 商務印書館編譯所
發行者 商務印書館
印刷所 商務印書館
總發行所 商務印書館
分售處 商務印書館分館

丁未年六月初版
中華民國二年七月三版

前清宣統二年四月初三日呈報五月十四日註冊
※此書有著作權翻印必究※



問 務 印 書 館 出 版

論 理 學 定價一角半

論理學亦稱哲學必要之科。雖是學精深廣大。欲求其明瞭。適合於教育之用者。實非尋常本學。凡六章。其中廣採諸家。詳得宜。適合於教育之用。

希臘神話一冊 定價大洋貳角

希臘神話。是吾日本文學博士中島所譯。其為不察者。謂之缺乏者。不處於吾國人。用者。故之。適宜。用。精。詳。特。定。此。種。講。義。內。抽。出。印。成。單。行。本。現。已。為。教。育。部。及。商。務。印。書。館。定。作。為。論。理。及。中。學。校。教。授。之。用。

論理學綱要 定價四角半

日本時。論理學。由。來。甚。早。論。理。學。既。譯。學。亦。稱。名。學。是。編。譯。自。本。故。仍。其。神。原。書。條。理。井。然。便。於。教。授。再。文。句。兩。手。既。務。合。原。意。

丁未年六月初版
中華民國三年四月再版

原 著 者 巴 德 文
譯 述 者 德 文
發 行 者 商 務 印 書 館 編 譯 所
印 刷 所 商 務 印 書 館
總 發 行 所 商 務 印 書 館
分 售 處 上海 漢口 廣州 北京 天津 濟南 青島 漢口 蕪湖 鎮江 蘇州 杭州 寧波 揚州 南通 蕪湖 鎮江 蘇州 杭州 寧波 揚州 南通

★此書有著作權翻印必究★

新舊宣統三年四月初三日出版五月十四日註册

論 理 學 定價一角半

論理學亦稱哲學必要之科。雖是學精深廣大。欲求其明瞭。適合於教育之用者。實非尋常本學。凡六章。其中廣採諸家。詳得宜。適合於教育之用。

希臘神話一冊 定價大洋貳角

希臘神話。是吾日本文學博士中島所譯。其為不察者。謂之缺乏者。不處於吾國人。用者。故之。適宜。用。精。詳。特。定。此。種。講。義。內。抽。出。印。成。單。行。本。現。已。為。教。育。部。及。商。務。印。書。館。定。作。為。論。理。及。中。學。校。教。授。之。用。

論理學綱要 定價四角半

日本時。論理學。由。來。甚。早。論。理。學。既。譯。學。亦。稱。名。學。是。編。譯。自。本。故。仍。其。神。原。書。條。理。井。然。便。於。教。授。再。文。句。兩。手。既。務。合。原。意。

丁未年六月初版
中華民國三年四月再版

原 著 者 巴 德 文
譯 述 者 德 文
發 行 者 商 務 印 書 館 編 譯 所
印 刷 所 商 務 印 書 館
總 發 行 所 商 務 印 書 館
分 售 處 上海 漢口 廣州 北京 天津 濟南 青島 漢口 蕪湖 鎮江 蘇州 杭州 寧波 揚州 南通 蕪湖 鎮江 蘇州 杭州 寧波 揚州 南通

★此書有著作權翻印必究★

新舊宣統三年四月初三日出版五月十四日註册

上海商務印書館 丁未年（1907）六月/中華民國三年（1914）四月再版

こちら元版が丁未年（1907）六月の発行であるのは、一致している。

初集は、1913年7月に三版が刊行された。それより後の同年10月に元版の三版を出版したことが奥付を見ればわかる。元版と初集がここでも同時に存在している。初集の三版を数えているのに、翌年4月のあとのものが再版と称するのも奇妙だ。

第七集第9編

『(神怪小説)希臘神話』(英)巴徳文著 商務印書館編訳所訳

JAMES BALDWIN著

上海商務印書館 丁未年（1907）六月/中華民國二年（1913）五月三版

*1908.1再版 [叢書779]

初集第69編

上海商務印書館 丁未年（1907）六月/中華民國二年（1913）十二月三版

上海商務印書館 丁未年（1907）六月/中華民國三年（1914）四月再版

『真偶然』と似た現象が見られる。元版の1913年5月三版と初集の1913年12月三版が、あやしい。ただし、一方が5月で他方が同年12月なら、時間的にズレているから矛盾しているとはいえないかもしれない。初集の三版があるのに、後のものが再版となるのは矛盾する。

混乱しているとしかいいようがない。

5 結 論

商務印書館版「説部叢書」の成立過程は、かなり複雑な様相を呈しているといわなければならない。

商務印書館が翻訳小説をまとめた「説部叢書」シリーズを初集から第4集まで発行しました、と簡単にすませることはできないことが理解できよう。

図式にしてまとめると、以下のようになる。

先元版 (1903-07) 元版 1 型ab (1905-08) 元版 2 型表紙一新 (1908) 改組 (1913) 改称して初集表紙一新 (1914.4) 再版 第 2 集100種、第 3 集100種、第 4 集22種の発行

「説部叢書」の成立と変遷について、要点だけを述べておきたい。

1. 先元版

商務印書館が単行本で出版した外国小説の漢訳本、あるいは『繡像小説』創刊後、連載した翻訳小説がある。最初から「説部叢書」にまとめる構想はなかった。翻訳小説の発行点数が多くなるにつれて、それらをひとつの叢書にまとめる方針が打ち出される。

2. (1903-07) 元版 1 型ab

元版とは、第一集から第十集まで各集十種の合計百種のことだ。

『佳人奇遇』『経国美談』が第一編と第二編に配列されている。

本文は雑誌連載のものならば、その作品部分を抜き出して使用する。単行本で発行されたものは、紙型を使用する。表紙、あるいは扉は別に印刷したものをはりつけるだけでいい。

「説部叢書」としてまとめはじめられたのは、1903年だと考える。

元版 1 型aは、表紙あるいは扉の表示が毛筆であるものを指す。

元版 1 型bは、「説部叢書」の集編表示と商務印書館の名称が活字になったものを指す。

3. (1905-08) 元版 2 型表紙一新

タンポポ文様の表紙に徐々に統一していく。ある作品には、元版 1 型bの扉を併用する。過渡期の現象だ。

表紙を一新したことにより「説部叢書」としての統一感がうまれただろう。

4. (1908) 改組

『佳人奇遇』と『経国美談』の 2 作品を、『天際落花』と『劇場奇案』に差し換える。一部の作品の順序を入れ替えもする。これを改組とよぶ。

1908の改組が実行された段階で、全百種をまとめて販売した。2度目のまとめ売りは、1911年に実行された。

5 .(1913) 改称して初集表紙一新

元版の第一集から第十集というまとめ方を、廃止する。新しく初集100編と改称し番号をふりなおす。同時に、紅字縦書き書名の表紙に変更する。

商務印書館は、金港堂との合弁解消を見越して、1913年に全編の再版予告を行なう。

6 .(1914.4) 再版

予告より約1ヵ月遅れて再版本を発行した。

7 . 2集、第3集、第4集の発行

2集100種を1914-15年に、第3集100種を1916-20年に、第4集22種を1921-24年に刊行した。【増補附記】2集は1916年説あり(1915.12.2付『申報』)

番外 (1914)「林訳小説叢書」の発行

簡単に触れるだけにする。

林紓の翻訳を、まず、50種を集めて「林訳小説叢書」となづけた。その発行は、奥付によると1914年6月である(第2集50種には、刊年を記載しない)。

『東方雑誌』第11巻第1号7月号(1914.7.1)に「林訳小説叢書 五十種九十七冊」の発売広告が掲載されていることだけを指摘しておく。

【注】

- 1) 『商務印書館与新教育年譜』26頁。『東方雑誌』創刊号(光緒三十年正月二十五日)の広告に掲載されている。『商務印書館与新教育年譜』は、『東方雑誌』の広告にもとづいて当時の刊行物を採取したのだから、あって当然だ。
- 2) 『商務印書館与新教育年譜』30頁
- 3) 謝菊曾「商務編訳所与我的習作生活」『(1897-1992) 商務印書館九十五年 我和商務印書館』北京・商務印書館1992.1
- 4) 第四集第四編『洪罕女郎伝』 第四集第五編 / 第四集第五編『白巾人』 第四集第六編 / 第四集第六編『澳洲歴険記』 第四集第七編 / 第四集第七編『秘密電光艇』 第四集第八編 / 第四集第八編『蛮荒誌異』 第四集第九編 / 第四集第九編『弃中花』 第四集第十編 / 第四集第十編『寒牡丹』 第五集第一編 / 第五集第一編『香囊記』 第五集第二編 / 第

五集第二編『三字獄』 第五集第三編

附録1：商務印書館版「説部叢書」変遷概略図

	1903-07	1905-08	1913	1914.4再版
			1908箱売り 1911箱売り	13再版予告
先元版	元版 1型ab	1908改組 2型表紙一新	改称して初集 表紙一新	
*佳人之奇遇1901	*一=一	一=一佳人之奇遇 刊年不記× *一=一天際落花1908	1=1	1914.4再版
経国美談後編 活版線装	一=二経国美談a刊年不記*	一=二経国美談 刊年不記× 一=二劇場奇案1908	1=2	〃
夢遊二十一世紀1903繡像小説	*一=三	*一=三	1=3	〃
華生包探案1903繡像小説	一=四補訳華生包探案a 1903十一	一=四補訳華生包探案 1906/1907	1=4華生包探案	〃
小仙源1903繡像小説	*一=五	*一=五	1=5	〃
*案中案1904	*一=六	*一=六	1=6	〃
*環遊月球1904	*一=七環遊月球b表紙写真*	*一=七	1=7	〃
*吟辺燕語1904	一=八	*一=八	1=8	〃
*美州童子万里尋親記1905	*一=九	*一=九	1=9	〃
*黄金血1904	*一=十	*一=十	1=10	〃
珊瑚美人1904?繡像小説	二=五珊瑚美人b1905	四=一寒桃記1906 で消去	1=15	〃
		*四=三魯濱孫飄流記1905四=三魯濱孫飄流記1913六版1=33		〃
		四=六澳洲歴険記b1906*四=七澳洲歴険記1908	1=37	〃
美人煙草1906東方雜誌	六=三美人煙草b1906	六=三美人煙草1906	1=53	〃
	*七=七真偶然1907	七=七真偶然1913.10三版1=67/1913.7三版		
	*七=九希臘神話1907	七=九希臘神話1913.5三版1=69/1913.12三版		

2集1914-15年刊行
第3集1916-20年刊行
第4集1921-24年刊行
「林訳小説叢書」第1集1914

附録2：商務印書館版「説部叢書」第一集全十編（改組以前）目録（『新編清末民初小説目録』

にもとづき作成した。【増補附記】一部訂正した。詳細は樽目録Xを参照）

1 佳人奇遇（政治小説）

（日）柴四郎著 中国商務印書館編訳所訳

中国商務印書館1906.十一 六版/八 三版

東海散士柴四郎『佳人之奇遇』博文堂1885.10-1897.10 [叢書777][大典9][中村]刊年不記（馬祖毅703頁）訳本於1901年由広智書局出版単行本。1902年、又由商務印書館編入“説部叢書”。

- 『東方雜誌』8:1広告では(言情小説)天際落花に入れ替える。
- 2 経国美談 前編20回 後編25回
((日) 矢野文雄) 中国商務印書館編訳所訳
中国商務印書館 無版年
矢野龍溪『齊武名士 経国美談』全2編 報知社1883.3-1884.2 [叢書777] 『東方雜誌』8:1広告では(偵探小説)劇場奇案に入れ替える。[中村]鉛印本
 - 3 夢遊二十一世紀 (紀西歴紀元後二千零七十一年事)
(荷蘭) 達愛斯克洛提斯著 楊徳森訳 楊珈統校閲
中国商務印書館
DR.PSEUD DIOSCORIDES“ANNO 2065,,EEN BLIK IN DE TOEKOMST”1865。本名PIETER HARTING。華訳はDR.ALEX.V.W.BIKKERSの英訳再版本によつたらしい(中村忠行) 『東方雜誌』8:1広告
 - 4 補訳華生包探案 (のち華生包探案)
(柯南道爾著 上海商務印書館編訳所訳述)
上海商務印書館(光緒29癸卯11(1903))
ARTHUR CONAN DOYLE“THE MEMOIRS OF SHERLOCK HOLMES”1894。光緒二十九年癸卯仲冬上海商務印書館主人序。哥利亞司考得船案“THE GLORIA SCOTT”1893.4、銀光馬“SILVER BLAZE”1892.12、孀婦匿女“THE YELLOW FACE”1893.2、墨斯格力夫礼典“THE MUSGRAVE RITUAL”1893.5、書記被騙“THE STOCKBROKER'S CLERK”1893.3、旅居病夫“THE RESIDENT PATIENT”1893.8。顧燮光「小説経眼録」
『東方雜誌』8:1広告では(偵探小説)華生包探案とする。
 - 5 小仙源 (原名小殖民地 冒険小説)
戈特爾芬美蘭女史著 (商務印書館訳)
中国商務印書館1905.十一/1906.八 二版
JOHANN DAVID WYSS“DER SCHWEIZERISCHE ROBINSON”1812-27。息子JOHANN RUDOLF WYSSが出版。英訳“THE SWISS FAMILY ROBINSON” 『東方雜誌』8:1広告
 - 6 案中案 (偵探小説)
(英) 亞柯能多著 商務印書館訳印
中国商務印書館1904.五 / 1905.三 再版
ARTHUR CONAN DOYLE“THE SIGN OF FOUR”1890.2 『東方雜誌』8:1広告
 - 7 環遊月球 (科学小説)
(法) 焦奴士威爾名士著 商務印書館訳

中国商務印書館1904.七/1906.三 三版

JULES VERNE“AUTOUR DE LA LUNE”1869。英訳“A TRIP ROUND THE MOON”。井上勤
訳『月世界一周』博聞社1883.7.28。『東方雜誌』8:1広告

8 吟辺燕語（英国詩人 神怪小説）

（英）莎士比（亜）著 林紓、魏易同訳

中国商務印書館1904.七/1906.3 三版

CHARLES LAMB, MARY LAMB“TALES FROM SHAKESPEARE”1807。肉券MERCHANT
OF VENICE、馴悍TAMING OF THE SHREW、學誤THE COMEDY OF ERRORS、鏘情
ROMEO AND JULIET、仇金TIMON OF ATHENS、神合PERICLES,PRINCE OF TYRE、蠱
徵MACBETH、医諧ALL'S WELL THAT ENDS WELL、獄配MEASURE FOR MEASURE、
鬼詔HAMLET,PRINCE OF DENMARK、環証CYMBELINE、女变KING LEAR、林集AS
YOU LIKE IT、礼哄MUCH ADO ABOUT NOTHING、仙猶A MIDSUMMER NIGHT'S
DREAM、珠還THE WINTER'S TALE、黒替OTHELLO、婚詭TWELFTH NIGHT;OR,WHAT
YOU WILL、情感THE TWO GENTLEMEN OF VERONA、颶引THE TEMPEST。顧燮光
「小説経眼録」『東方雜誌』8:1広告

9 美州童子万里尋親記

（美）増米自記（英）^{ママ}亜丁編輯 林紓、曾宗鞏同訳

中国商務印書館1904.十

WILLIAM L.ALDEN“JIMMY BROWN TRYING TO FIND EUROPE”1889。『東方雜誌』8:1広
告

10 黄金血（偵探小説）

（美）^{ママ}楽林司朗治著 商務印書館訳

中国商務印書館 光緒30.十一（1904）

LAWRENCE LYNCH著『東方雜誌』8:1広告

商務版「説部叢書」研究の昔と今

『清末小説から』第103-104号（2011.10.1-2012.1.1）に掲載。副題は「不思議な版本」。また、第115-116号（2014.10.1-2015.1.1）に掲載。副題は「改組の時期」。1年の間隔があいたのは、新出資料が出てきたからだ。追加というかたちになった。資料にもとづいて考えている。確認できない状態が続いて疑問が生じた。結局は、最初の推察が正しいことがわかったという次第。

本稿では、商務印書館版「説部叢書」（以下、「説部叢書」）に収録されている謎の版本を紹介する。

ひとつは、最近中国で刊行された刊行物にその表紙写真を見ることができる。もし、文字だけの記述であれば、誤植ではないかと疑う種類の書籍だ。「説部叢書」の成立過程を知る人ならば、疑問を持つだろう。なぜ「第一集第八編」なのか。同じ集編番号を持つ別の作品があるではないか。

その1冊をここに突然示しても、何のことだか理解されない恐れがある。前置きが長くなる理由だ。

「説部叢書」という名称は、清末民初の翻訳に興味をもつ研究者ならば、誰でも知っている。だが、成立の過程を含んだ詳しい状況の理解は、研究者のあいだで必ずしも共有されてはいないだろう。最近中国人研究者が公表した文章を読んで、私はそう感じる。

状況を理解してもらうためには、「説部叢書」の成り立ちから話さなければな

らない（過去の文章と重なる箇所がある）。どういう研究があるのか、簡単に述べる。少し複雑な内容になる。事実がこみ入っているからしかたがない。ご了承いただきたい。

「説部叢書」は、商務印書館だけが使用した名称ではない。ほかの出版社も刊行している。改良小説社、小説進歩社、群学社らがその発行元だ。しかし、生き残ったのは商務印書館だけだった。該社の「説部叢書」全体は、発行が21年間にわたって継続されている。清末の1903年から民国になった1924年まで。今では「説部叢書」といえば商務印書館の印象しかないかもしれない。それは、翻訳小説を集めて特色がある。しかも、合計322編（種と同じ）という多数を収録して規模が大きい。当時、ほかには例を見ない。現在も存続する出版社ということもあり、言及する研究者は多い。ただし、言及することが研究と結びついていないのが実状だ。

大型叢書である。それはゆるやかにはじまった。徐々に形を整えながら、初期にはいくつかの変更が加えられた。編集上の試行錯誤があったことがわかる。

1 日本におけるこれまでの研究

「説部叢書」は、作家、知識人の多くが海外文学への関心を抱く窓口となった。広く知られた事実である。叢書のうちのこれが読まれた、あの作品が影響力をもった、林紓らの翻訳も収録されていた、と語られる。魯迅周作人兄弟が好んだ、郭沫若が回顧して賞賛した、などと部分的に言及されることが多い。著名なのは確かだ。

しかし、翻訳書がどのように「説部叢書」としてまとめられていったのか。知ろうとすれば、これはむづかしい。商務印書館自身は、その詳細を説明したことがない*¹。叢書そのものに焦点をあてて追求した研究論文は、書かれていなかった。1981年以前には中国を含めて「説部叢書」の詳細を解明しようとした文章はないといっていい。

唯一の例外が、中村忠行論文（1981）だ*²。

それは、中村個人が長年にわたり収集した資料を積み重ねたうえに組み立てられている。

中村論文の公表は、どの国の研究者よりも早かった。しかも、詳細にして学術的価値の高さを備えている。今でも古びてはいない。

中村は叢書の成立について、「既刊のものを任意に拾い、叢書に仕上げたことを示すものである」(287頁)と指摘した。私はなるほどと思う。最初から用意周到に編集方針を定めて計画的に刊行したわけではない。やや場当たりのことを進めた。これが、叢書の構成変化、あるいは表紙、扉にいくつかの変化をもたらした。これらの違いは、特にその初期において顕著だ。

中村が目にしたのは、書籍の組版、表紙、扉などの意匠だ。作品は同じ本文であるにもかかわらず、包む外側が異なっている。第1形式から第3形式に分類する。第3形式をさらに5種に分ける。細分しなければならないほど多様な違いがあるという意味だ。

こまかい説明はあとからするとして、結局のところ中村が強調したのは、ひとつの事実だった。

彼は「絶対に混同してはならない」(297頁)という。なにを混同してはならないのか。「元版」と「初集本」の区別だ。「元版」とは、第一集から第十集まで、各十編で全百編の作品群である(後述)。「初集本」とは、そののち覆刻して改称したもの(296頁)。この両者は厳密に分かれていると説明した。この指摘は、きわめて重要である。それまで誰も言ったことがない。

従来、「説部叢書」は、変化のないひとつの集合体のように受け止められていた。それを前提にして個々の作品に言及するというのが一般的だった。だが、中村論文は、「説部叢書」の成立過程を追求したうえで、叢書内部で改組がなされたことを立証する。

中村論文には、基本的な見方がこの時すでに提出されている。元版と初集本は区別する、である。資料も多数かかげて問題の所在を明らかにした。精密で奥の深い立論だと私は考える。1981年時点で群を抜いている論文だ。30年後の現在でも新しい。

その後、樽本論文が公表された*3。

こちらでも「説部叢書」の作品構成、また表紙などの違いを問題にする。基本的に中村説をふまえている。同じなのは、元版と初集を分けたことだ。違うのは、簡略化して元版をふたつに分類する。時間の経過を考慮して少し整理しなおした。また、それまでの「説部叢書」研究について紹介した。それが読者の理解を助けると思ったからだ。

「説部叢書」の成立過程を以下に簡単にまとめておく。本稿で紹介したい書籍の「説部叢書」における位置づけをするためだ。

2 「説部叢書」の成立

商務印書館が外国小説の翻訳をいくつか刊行したとき、それらをまとめる特定の名称、または枠組みは存在しなかった。その発想はなかったし、必要も感じなかっただろう。取り立てていうまでもない。一般の出版社にとってはそれが普通のことだ。

単行本で刊行される。あるいは『繡像小説』などの雑誌に連載された。それぞれの翻訳作品は、バラバラに存在していた。ある作品など、雑誌連載をそのまま抜き出して線装本に仕立てられている。これを「1）先元版」という（別掲の表1「変遷一覧」を参照）。のちの元版グループに先行する。商務印書館の自社広告では、最初は「新訳説部叢書」といっていた。これには小説以外の翻訳書を、また雑誌『東方雑誌』も含めている。すなわち、その意味は新訳の書籍群だ。説部叢書といっても厳密に定義しているわけではない。普通名詞の説部叢書だとわかる。後に出現する固有名詞の「説部叢書」は、この時点では影も形もない。

翻訳作品が増加するにしたがい、商務印書館はこれらを特別に「説部叢書」という名称で一括りにすることにした。作品の刊行年を見ると、それは1903年頃から始まったと考えられる。その時期、商務印書館は、日本金港堂との合併計画を水面下で進行させていた（合併が成立したのは1903年11月）。一集を十編でまとめ、二集、三集と順次増やしていく（後のものと区別するため漢数字を使用する）。これが「元版」だ。

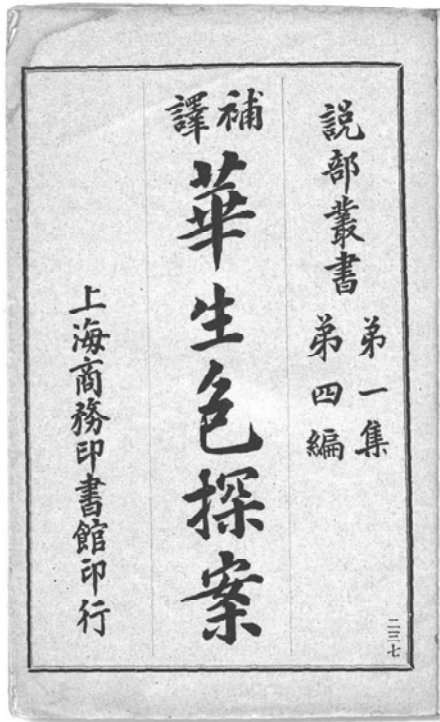


図1 元版1型 毛筆

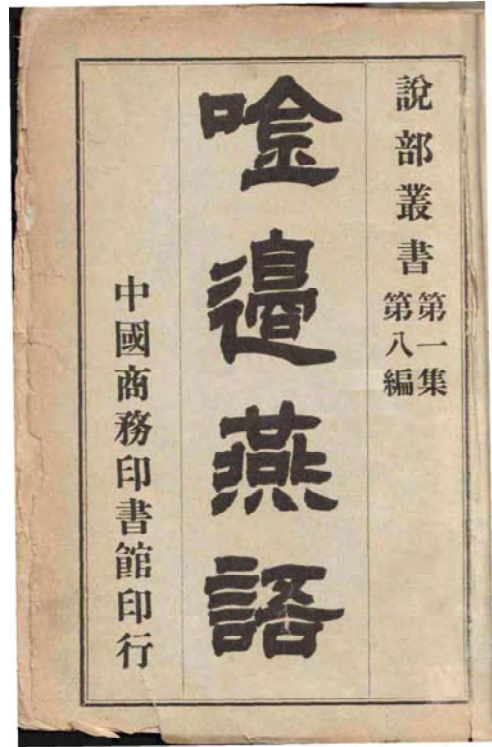


図2 元版1型 活字併用

「元版」を表紙の違いによって2分する。「2)元版1型」と「3)元版2型(タンポボ文様)」である。

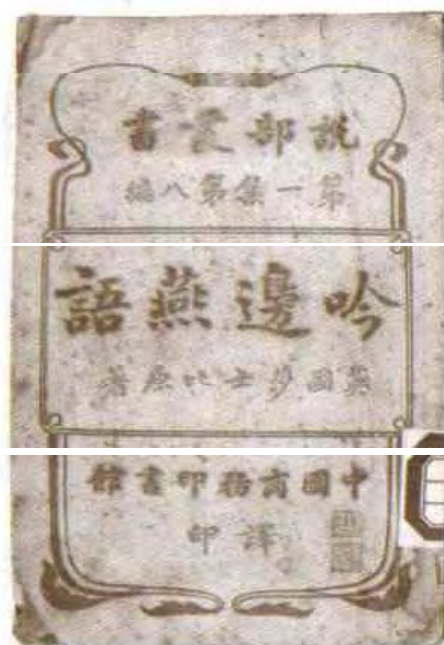
「2)元版1型」は、表紙、あるいは扉に毛筆、活字で「説部叢書/第 集/第 編」と縦書きで示す(図1は毛筆。図2は活字併用)。既刊作品の本文はそのままにして、表紙、扉を取り替えるだけでよい。作品数が増加すれば、叢書らしい形になっていく。厳密な刊行計画があったとも思われない。編集方針があるとなれば、翻訳作品を中心にすくらしいことだった。

「3)元版2型(1905-08)」は、新しい表紙(タンポボ文様。横組みの書名)が付与された作品群を指す(図3は中央の第一集第八編『吟邊燕語』に注目。図4は該書を別の本から引用した)*⁴。

この『吟邊燕語』を例にとる。図2で示した元版1型(第一集第八編)が、図4の元版2型(第一集第八編)に表紙をかえていることがわかる。カッコ内に記入し



図3



林圀彦译莎士比亚故事集《吟边燕语》书影

図4 元版2型 タンポポ文様

ているように集編番号は同一だ。内容はおなじで、表紙だけが異なる。「第一集第八編」という集編番号にご留意ねがいたい。他の作品との関係で問題になる。

元版2型には、タンポポ文様の表紙を持ちながら、元版1型を扉につける作品もある。過渡期の現象だろう。新版であるのに旧版を扉に配置する。その事実が、ゆるやかな変更であることを示している。

第一集から数えて第十集までになった。各集がそれぞれ十編を収録して合計百編である。

元版2型全十集が完結したのは、1908年ころだ。ひとつの根拠は、商務印書館の自社広告だった。全十集百編（128冊）を特製の箱に入れて販売するとうたっている。『東方雑誌』第5年第9期（1908.10.19）、また『上海指南』（1909）などに見ることができる*5。

元版2型タンポポ文様「説部叢書」（128冊）の一括販売はしばらく続いた。『新聞報』（1909.1.25付）に木箱売りを宣伝する商務印書館の広告があるという*6。また、

『東方雑誌』第8巻第9号(1911.11.15)にも同じ広告が掲載されている。

1908年に元版(十集百編)が完結した後は、どうなったのか。

別の作品を収録しながら叢書は引き続き出版されたのだろうか。仮に第十一集(実際には存在しない)だとして、刊行されたかといえば、それはなかった。十集完結後の約5年間は、箱売りを行なうと同時にバラ売りを続けただけだ。作品によると三版、四版と印刷を重ねている。読者に広く支持された証拠といえるだろう。元版の刊行年を見ると、おおよその把握しかできないが、その重版の時期は1913年だ。

例外がある。第四集第十編『寒牡丹』(1906.3初版/1915.6三版)だ。集編番号からすれば、以前の元版2型タンポポ文様で出たことになる。ところが、その三版は1915年の刊行だ。同じ作品が「説部叢書」初集第41編として再版されたのは1914年4月のことだった。刊年を見れば、初集本のあとに元版が出た。つまり、古いはずの元版と新しい初集が混在している。商務印書館による出版管理は、厳格ではないように思われる。

1908年の元版完結から辛亥革命をはさんでこの1913年まで、既刊の作品群をかかえたまま販売営業を続けていた。新しい企画はまだ出てきていない。

変化が見えるのは、まさにこの1908年から1913年の間である。「説部叢書」の内部でいくつかの変更が実行された。

ひとつは改組だ。もうひとつは元版百編を「初集」と改称したこと。さらに、表紙を一新して今ではおなじみのリボン文様になった。

改組を示す根拠は、3点ある。

1点目は、作品の差し替えがある。第一集第一編『佳人奇遇』(図5タンポポ文様)をおろして初集第1編『天際落花』にかえた。第一集第二編『経国美談』を入れ替えて初集第2編『劇場奇案』を収録した。

『佳人奇遇』と『経国美談』は、ふたつともに日本人の原作だ。それをいうなら、割り込んだ『天際落花』の原作も日本の黒岩涙香訳本にちがいない。なぜ入れ替える必要があったのか。その理由を説明した文章を読んだことはない。

2点目は、作品名が変更されている。第一集第四編『補訳華生包探案』が初集



図5 元版2型 タンポポ文様

第4編『華生包探案』にかわった。

残る3点目は、作品の移動である。『魯濱孫飄流記』の正統に關係する。『魯濱孫飄流記』は第四集第三編にある。その続編『魯濱孫飄流続記』は第五集第三編だった。正統でありながら第四集と第五集に離れて配置されていたのだ。それを再編してひとつにつなげたというわけ。つまり、続記を前に移動させた。集編番号は、変更して初集第34編となる。こちらはわかりやすい。作品の移動にともない、初集第35編から第43編まで集編番号がずれた*7。

改称とは、それまでの十集十編全百編をまとめて「初集」にしたこと

をいう。集編番号は第1編から通し番号で第100編までとなる。機械的に置き換えるだけ。第二集第一編であれば、初集第11編である。

表紙のリボン縁取りと縦組みの書名は紅色。「説部叢書」と商務印書館などを表示する箇所は藍色だ(図6)。図6の『吟辺燕語』は、見てのとおり初集第8編になる。もとの集編番号が第一集第八編だった(図7は参考までに「林訳小説叢書」)。

「説部叢書」といえば、この初集(リボン文様)が掲げられることが多い。それだけなじみが深い。しかし、元版を無視しては「説部叢書」の成立過程が見えなくなる。

以上の改組、改称、表紙一新は、事実として存在する。書籍そのものがそれを証明している。では、実施されたのはいつか。

「初集」に改称し表紙を新しくリボン文様にかえたのは、1913年だと考える。しかし、改組については、特定することが困難だ。いま、1908年から1913年までの間としておく。作品の差し替えが辛亥革命に關係しているとするれば1911年以降



図6 初集 リボン文様



図7 林訳小説叢書

となる*8。

以上を「4）初集本（1913）」（表2：「説部叢書」の改組を参照）という。

転換点は、1913年だった。

初集本は、100編をまとめて1914年4月に再刊した（表1：一覧の「5）初集100編再版（1914.4）」）。奥付にはそれぞれの出版年などを示し「中華民國三年四月再版」と記す。1913年以前の版本が四版、五版であっても1914年4月再版と表示する。大きな変更が行なわれた1913年からすれば、1914年の重版は再版ということになる。改版の数字が矛盾しているように見える理由だ。

再版の理由はどこにも書かれてはいない。だが、1914年4月という年月が手がかりになる。商務印書館をとりまく当時の状況から判断すれば、ひとつの事実が自然と浮かびあがってくる。1914年1月は、それまで実質10年間継続された商務印書館と金港堂の合併が正式に解消された時期だ。商務印書館は、合併解消を記念して初集100編を再版した。そう考えれば納得がいく。



図8 2集



図9 第3集



図10 第4集

本稿で問題にしているのは、元版と初集である。それ以後に出現する2集(100編)以降は、いま検討の対象にはしていない。ついだから触れておくと、2集100編は1915年に刊行された(元版と区別するためにアラビア数字を使用する。図8)。表紙を絵図に変更した第3集100編は、1916年から1924年の間に出了(図9)。第4集は22編を1921年から送り出して1924年に終了した(図10)。合計322編である。

以上が日本での研究内容だ。それを理解してもらったうえで中国の研究状況を見てみよう。

表1: 「説部叢書」の変遷一覧

1) 先元版 未組織 個々の翻訳 雑誌連載、あるいは単行本

2) 元版1型(1903より) a 毛筆(図1)、b 活字併用(図2)

『中国近代現代叢書目録』777-780頁所収。該目録は、第一集第三編から第十編を欠く

3) 元版2型(1905-08) 表紙の統一(タンポポ文様 横組みの書名。図5)

扉に元版1型bを併用するばあいもある

1908年元版百編完結 箱売りは1908、1909、1911年に実行

注: 付建舟が「十集系列」と称するのは、上の「2) 元版1型」と「3) 元版2型」だ。両者を区別しない。

4) 初集本(1913) 改組(時期不明)、改称、表紙一新(リボン文様 紅色縦組みの書名。図6)

作品の差し替え 第一集第一編『佳人奇遇』 『天際落花』

第一集第二編『経国美談』 『劇場奇案』

作品の改名 『補訳華生包探案』 『華生包探案』

作品の移動 『魯濱孫飄流記』第五集第三編 初集34編(後年の商務印書館広告では、移動させない目録がある)

5) 初集100編再版(1914.4) 金港堂との合併解消を記念して

以後、2集(1915 図8)、第3集(1916-24 ここから表紙は絵図。図9)、第4集(1921-24 図10)と続く

注:付建舟は、この初集本を「四集系列」と称する。初集作品の差し替えのみをいう。改名、移動には触れない。

表2:「説部叢書」の改組

	元版	初集	
	第一集		
佳人奇遇 第一編	第1編	天際落花	戊申五月(1908)/1914.4再版 差し替え
経国美談 第二編	第2編	劇場奇案	戊申六月(1908)/1914.4再版 差し替え
補訳華生包探案	第四編	第4編 華生包探案	丙午四月(1906)/1914.4再版 改名
	第四集		
寒桃記	第一編*	第31編	*元版初版は集編番号を で塗りつぶす
魯濱孫飄流記	第三編	第33編	
		第34編	魯濱孫飄流記 (丙午(1906))/1913.10/1914.4再版
	移動		
洪罕女郎伝	第四編	第35編	
白巾人	第五編	第36編	
澳州歴険記	第六編	第37編	
秘密電光艇	第七編	第38編	
蛮荒誌異	第八編	第39編	
弃中花	第九編	第40編	
寒牡丹	第十編	第41編	
	第五集		
香囊記	第一編	第42編	

三字獄	第二編	第43編
魯濱孫飄流続記	第三編	(前に移動)
紅柳娃	第四編	第44編

3 中国での研究 1

中国では「説部叢書」を取り上げるにしても、簡単な紹介にとどまっていた*9。謝菊曾(1980)は、自分が商務印書館に勤務していたとき見聞したことを書いている。雑誌に連載した欧米の長編翻訳小説を単行本にして「説部叢書」に収録したことをいうくらい。新しい事実を述べたわけではない。謝菊曾の文章は回顧談であって研究ではない。中村論文ほどの詳細さを期待するほうが無理というものだ。謝は内部事情を身近に知っていそうな人だ。しかし、「説部叢書」についてそれ以上の興味をもってはいなかったのだろう。

陸昕(2001)が書いた文章は、それにくらべれば詳しい*10。

陸昕は自分の所蔵する「説部叢書」が多数あることを披露している。昔は多くの人々が好んで読んだ叢書だった。消耗品扱いされたようだ。今となっては実物を入手することは難しい。だから陸昕の蔵書は珍しいといえる。

掲げられた表紙写真を見れば、のちの初集、第3集、第4集だ。「この本の初集100種は、光緒末年に成立した」「民国2、3年のとき重印された」(107頁)。この説明を見ると、最初から初集で刊行されたと考えているらしい。先立つ元版があることを知らないのか、と思う。のちの第4集は22編だが、それを誤って40編と書く。

陸昕の説明は表面をなでるだけ。以前から中村論文を読んでいるものにとっては、陸論文は浅すぎて、もの足りない。実物を多数所蔵することと研究は必ずしも結びつかないのだ。

最近中国でようやく「説部叢書」の系統について説明する文章が発表された。付建舟(2009)の論文だ*11。

付が指摘する大きな事柄は、ふたつある。

ひとつは、「説部叢書」には2系統が存在すること。私のいう元版と初集本をおぎなって示す。彼は、「十集系列」(元版)と「四集系列」(初集本)に書き分けて区別する(307頁)。ようやく中村論文の水準に近づいた。

もうひとつは、作品の差し替えがあることだ。こちらも同様。

付論文の結論部分から引用する。「商務印書館の「説部叢書」にはふたつの系統がある。「十集系列」と「四集系列」だ。前者は全部で十集、毎集10種で全100種。後者は四集にわかれ、前の三集はそれぞれ100種で、第四集は22種、合計して少なくとも322種だ」(309頁)

別掲表1「変遷一覧」に付建舟の論点を参考までに示しておいた。

付論文で欠けているのは、以下のとおり。

『魯濱孫飄流続記』の集編番号変更には言及しない。付は、商務印書館の広告を資料として利用する。資料そのものが少ないから、それでかまわない。ただ、その広告自体が、事実を反映していないことに気づいていない。作品の実物を見ればわかったはずだが。見逃した理由は知らない。また、書名変更にも触れない。元版(十集系列)から初集本(四集系列)への転換がいつ行なわれたのか説明しない。それ以外は、中村が提示した基本的観点と同じだといっていいたいだろう。

付論文を読むにつけ、私はあらためて中村論文の先進性に感心する。表紙の違いについて図表を掲げて詳しく紹介したのが中村だった。付建舟よりもはるか以前に書かれている。しかし、中村論文の到達地点は、今も付論文より先にある。

4 謎の版本

付建舟は、つづいて「説部叢書」などをおさめた版本資料集を刊行した。

付建舟、朱秀梅著『清末民初小説版本経眼録』(上海世紀出版股份有限公司遠東出版社2010.6。以下、『経眼録』)*¹²である。

各作品の表紙と奥付の写真を多数掲げて説明文を添える。実物を手に取って確認しました、という意味である。書名に「経眼録」と命名している理由だ。

掲載された多数の写真から「説部叢書」を抜き出して数えてみた。説明文での

み触れられた版本は除外している。わかったのは、付らが写真で掲げた元版（十集系列）は3葉のみ。初版本（四集系列）が比較的多く56葉である。

付建舟は、元版（十集系列）について細かく分類していない。私の見方でいえば、その3葉を分けて、元版1型が1葉、元版2型が2葉となる。そのうち後者の2葉は『寒桃記』上下だ。これを1種類だと考えれば、実質は、元版1型と2型でそれぞれ1種類となる。

該書に収録された元版1型の1本『金銀島』が問題だ。表紙を写真で見なければ、最初に述べたように誤植ではないかと疑っただろう。

とりあえず見てほしい。ならべたほうが理解しやすい。『金銀島』は『経眼録』（30頁）から引用する。『吟辺燕語』は架蔵のものを再び掲げる。2件ともに表紙と奥付である。

それぞれの書誌も書いておく。

金銀島（冒険小説）

（英）司的反生著 商務印書館編訳所翻訳

上海商務印書館 光緒三十年九月首版 説部叢書第一集第八編（下線樽本）

ROBERT LOUIS STEVENSON“TREASURE ISLANDS”1883

吟辺燕語（英国詩人）

（英）莎士比著 林紓、魏易同訳

中国商務印書館 光緒三十年七月首版 / 光緒三十二年四月三版 説部叢書第一集第八編*¹³

CHARLES LAMB, MARY LAMB“TALES FROM SHAKESPEARE”1807

奇妙だ。両者ともに「説部叢書第一集第八編」と表紙右側に印刷している。なぜ同じ集編番号なのだろうか。

『吟辺燕語』は1906年の三版である。初版は「光緒三十年」とあるから1904年だ。『金銀島』は初版本で同じ1904年に発行されている。表示のとおり『吟辺燕語』が「七月」出版であれば、『金銀島』が「九月」だから『吟辺燕語』の方が早く刊行された。そう考えて不都合はなにもない。発行元が上海商務印書館と中

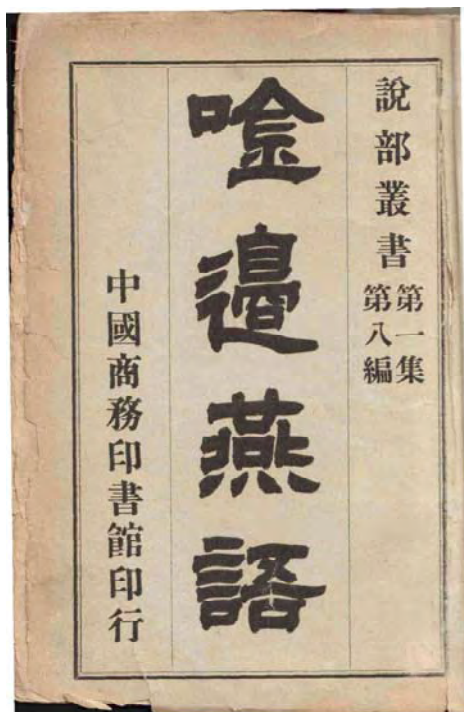


図2 吟邊燕語表紙

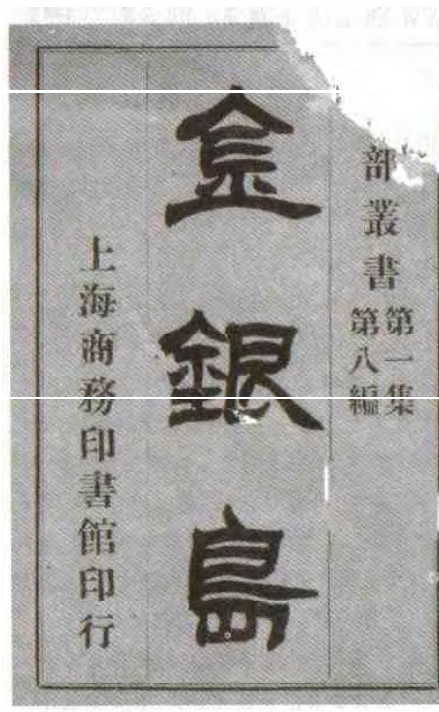


図12 金銀島表紙。『経眼録』30頁



図11 吟邊燕語奥付

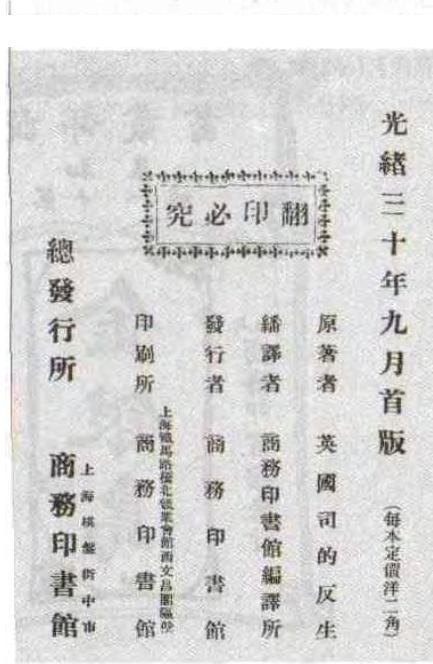


図13 金銀島奥付 同31頁

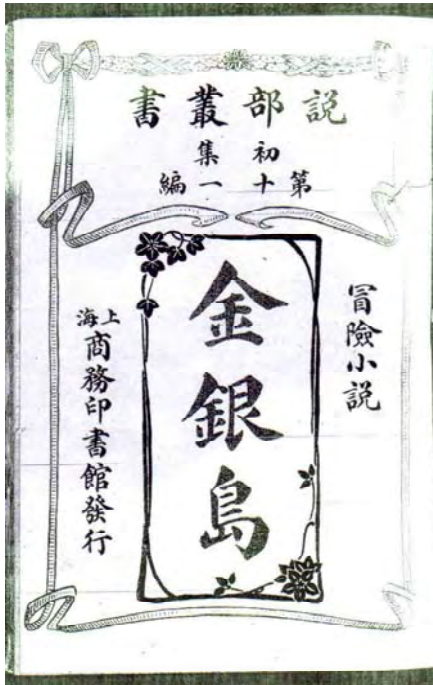


図14 金銀島 初集本

国商務印書館だ。その違いはある。後者は、「説部叢書」元版に使用される例が多い。

『吟辺燕語』の集編番号は、従来から「説部叢書第一集第八編」だ。これが動いたことはない。初集本は、自動的に初集第8編(図6)となる。

『金銀島』は、もともと「説部叢書第二集第一編」なのだ。目録類にもそう記されている。初集本では、初集第11編(図14)になる。なるもなにも、実際にそうだ。こちら『経眼録』から引用して表紙を別に示しておく。

表紙をもう一度見る。『吟辺燕語』と『金銀島』の両本が同じ集編番号であるのが不可思議だ。元版だから差し替えがあったわけではない。差し替えが問題になるのは、リボン文様の初集本だ。

それぞれが異なる作品で集編番号が重複している例を見たことがない。重複させては集編番号の意味がないではないか。

付らは、この不思議な事実について何も説明しない。『吟辺燕語』とかぶさっていることを見落としたのだろうか。『経眼録』は、元版(30頁)と初集本(32頁)の両者を掲載している。しかし、集編番号に矛盾があることに言及しない。元版が第一集第八編であれば初集は自動的に第8編になる。だが、掲げられる『金銀島』初集の表紙写真は第11編だ。番号は、明らかに異なる。付らは記述しないから、結局のところどう考えているのかよくわからない。

この奇妙な事実は、何だろうか。版元商務印書館がおかしたちょっとした誤りなのだろうか。厳密な編集方針がなかったとはいえ、集編番号までいいかげんだったとは思えない。この版本だけに見ることのできる謎の現象なのだ。

不思議といえば、謎の版本がもう1例ある。

中村は、集編番号部分を で塗りつぶした版本が存在することを紹介した。



図15 実藤文庫



図16 『経眼録』65頁

『寒桃記』だ(図15)。「光緒三十二年二月首版」とあるから、1906年初版とわかる。集編番号をなぜ塗りつぶす必要があったのか。こちらも元版2型タンポポ文様だから作品の差し替えが影響したわけではない。理由が不明だ。いまでもわからない。

『経眼録』にはそれと同じ書籍、しかし集編番号を印刷したものをのせている。同じく元版2型タンポポ文様だ(図16)。こちらの奥付には「光緒三十二年歳次丙午二月初版/光緒三十三年歳次丁未仲春月三版」とある。

こちらも、ならべておこう。初版は集編番号を塗りつぶし、三版ではなぜか明記する。不思議な版本だといわざるをえない。

『金銀島』は元版1型だ。『寒桃記』は元版2型タンポポ文様である。いずれも「説部叢書」の初期刊行物に属する。わずかに2件とはいえ、実際に市場に出まわった。商務印書館がそういう奇妙な刊行物を流通させた原因はなんだろう。外から見るだけだから、その理由はわからない。

編集上の不手際による単純な誤りだとしよう。市場に出す前に点検をしなかつ

たのかと疑う。商務印書館編訳所内部での意志疎通がうまく機能していなかった、あるいは商務印書館の製品管理が甘かったということになる。私は、ただ表紙の写真を見るだけだ。

5 理解度で分類

前稿の公表から少し時間があいたので、内容に重複する箇所がある。ご了解いただきたい。

「説部叢書」といえば、商務印書館が刊行した外国小説翻訳叢書として有名である。

「説部」は、小説という意味だ。普通は主として、小説あるいは随筆などを指す。ところが、商務印書館の「説部叢書」は、基本的に翻訳小説であるところに特徴がある。

中国の知識人は、林訳小説によって西洋小説の存在を知り興味をもった。彼らの眼を海外に向けさせた。林紓が中心になって清末の社会に送り出した翻訳小説群についてよくいわれる。その多くは「説部叢書」に含まれる。果たした影響はとても大きい。

研究者が商務版「説部叢書」についてどれくらい理解しているか。その程度によって、以下の4層にわけるとする。これが本稿における新しい工夫だ。各論文の到達点が一目見てわかるようにした。理解度による分類など、今までにはなかったと思う。

結論めいたことを先にいう。どうしたわけか、「説部叢書」については基礎知識が共有されているとはいいがたい。研究する人も多くはないのだ。社会に与えた影響の大きさを考えれば、無視できるはずもないのだが、不思議なことだと思う。

理解度をその程度によって第1-4層にわけた。第1層の理解度は浅く、順に深くなる。第4層にいたると「説部叢書」の問題点はほとんど把握している。そういう分類である。研究者の名前とその論文著作発表年を示す。

具体的な内容は以下のとおり。

第1層 商務版「説部叢書」があることを知っている。

例：謝菊曾1980、郭延礼1998

第2層 「説部叢書」初集から第4集までが刊行されていることを知っている。

例：商務印書館図書目録1981、陸昕2001、陸昕2005、黄惇2008、付建舟2012、陳大康2014

第3層 元版と初集本に分かれていることを知っている。

例：叢書目録1980、鄒振環2000、鄒振環2000、劉徳隆2009、付建舟2009、付建舟ら2010、付建舟2013、鄒瑞玥2013、祝均宙2013

第4層 先元版、元版1型2型、初集本の区別があることを知っている。作品の差し替えを行なった改組、表紙の違い（タンポポ文様とリボン文様）、初集改称について知っている。そればかりか、改組の時期がいつなのかを考察する。

例：中村忠行1981、神田2002、樽本2011、樽本2012、樽本本稿

「例」にあげた研究者の論文を主に紹介しながら説明したい。最後に新しく公表された論文を紹介する。

理解度による層分けをしたところで、その意味を理解する人はほとんどいないと思う（私の論文を読んでいる人は除く）。大部分の人は、商務版「説部叢書」があることを知っているかどうかもわからない。その存在を知っているだけならば、第1層に属している。版元である商務印書館の関係者であっても例外ではない。

上の分類を見ればすぐわかるだろう。

中村論文は、1981年と早いにもかかわらず最深層の第4層だ。中国人研究者の論文発表は、中村論文に比較すれば時間的に見てはるかのちのことだ。陸昕が2001年だから、遅れるといわざるをえない。しかも、理解度は浅い。どういうことか。おいおい説明していく。

「説部叢書」について書かれた論文を読むと、その接近のしかたがふたつに分かれることに気づく。

ひとつ。清末民初の翻訳小説にしぼって研究する人だ。自然と商務印書館の刊行した「説部叢書」に対する関心が生まれて、実物を集めるようになった。

もうひとつ。清末民初小説全般に関心をもつ人だ。多数集めたなかに「説部叢書」が複数あり、文章を書くまでになった。

上記ふたつの人々は、実際に「説部叢書」本を集めるだけでした。

清末民初翻訳研究のなかで「説部叢書」に触れざるをえなくなる研究者にとっては、災難かもしれない。言及する必要があるにもかかわらず、実物が手元にない。無視するしか方法がないのが悲しい。当時はあれほど大量に供給されたにもかかわらず、入手するのがむづかしい。奇妙なことだと思われるだろう。だが、それが事実だ。

郭延礼『中国近代翻訳文学概論』(1998)*¹⁴を書評したことがある*¹⁵。郭延礼は、該書において商務印書館の「説部叢書」について説明していない。私は、不満をのべた。書名に『近代翻訳文学』をうたいながら、それはないだろう、という気持ちだった。今でもそう思う。理解度第1層に属する。

6 中国での研究2

あらためて振り返ってみる。

謝菊曾「《説部叢書》和《林訳小説》」(1980)*¹⁶は、商務印書館に勤務していた人の回想記だ。

『小説月報』に掲載した翻訳小説を単行本にして「説部叢書」に収録した。第3集を出す。日本小説の翻訳は欧米の小説よりも評判は低く、また「説部叢書」は欧米名家の作品を売り物にしていたから、それへの収録を中止した、などなど。

「第3集を出す」というが、実際は第4集がでている。日本小説があたかも収録されていないかのように書く。そうではない。日本小説は、最初から収録している。事実ではないことを記述している。そう書かざるをえなかった、事情があったのであろう。

つまり、謝菊曾は解説して事実誤認と誤解を含めてそれくらいのもの。「説部叢書」について詳しいことは書いていない。内輪話程度の紹介があるだけだといっている。「説部叢書」成立の経過など、その説明は大ざっぱすぎる。あまり関

心がなかったようだ。少しの知識をもった一般人とかわらない。理解度第1層である。商務印書館関係者にしてそれくらいのもの。先行きが案じられる。

基礎資料として重要な目録が刊行されている。

上海図書館編『中国近代現代叢書目録』(1980)*¹⁷である。

1902-49年に出版された叢書の目録だ。商務印書館「説部叢書」「林訳小説叢書」などを収録する。なによりも信頼度を高めているのは、実物にもとづいて記述しているからだ。目録を手にした人は、すぐに理解するだろう。

「説部叢書」は有名だ。しかし、現在すでに実物を入手することが困難な状況におちいつている。するとこの叢書目録が、研究者たちの大いに利用する第2次資料となる。書いてあるそのままを信じる人が出てくるのだ。人によっては、この叢書目録を利用するだけで論文を書くことができると考えるらしい。

叢書目録の冒頭に次のような記述がある。「1903年4月 - 1924年11月 中国商務印書館」

「1903年」は新暦で「4月」は旧暦を示す。今につづく新暦旧暦混用だ。ところが、掲載された作品に該当するものがない。最終作品の第4集第22編『情天補恨録』の刊行は1924年5月初版になっている。11月はどこにあるのが不明だ。

この叢書目録をよく見れば、2系列に分かれていることが理解できる。

第一集から第十集までの1系列(本稿では元版と称する)と初集以降(同じく初集本)の1系列だ。両者には、収録作品に少し違いがある。目録だけを見れば、それ以外は、両者ともに基本的に同じだ。集編の数字が変更になっただけ。実物を手にしなければ、表紙意匠の違いは理解できないだろう。

該目録には、大きな欠点がひとつある。

第一集に日本原作の「佳人奇遇」と「経国美談」の2編しか収録していないことだ。事實は第一集も全十編が刊行された。一集が全十編だから全十集で全体は100編だ。だが、なぜか叢書目録には2編しか掲げない。これを見た何人かの研究者は、第一集は2編のみの収録で、全92編(種でも同じ)であると短絡する。明らかに誤りである。

鄒振環「商務印書館版“林訳小説”的魅力」(2000)*¹⁸において「説部叢書」に言及している。

鄒振環は、私の見るところ、基本的には書物の実物を手にして論述する。私が彼の論文を信頼する理由だ。ところが、どうしたことかこの「説部叢書」に関する部分だけが違う。上の叢書目録をそのまま信じ込んでいる。

大型叢書で「1903年4月」に出版を開始した、と書く。第一集には「佳人奇遇」「経国美談」の2種を収録する。彼は、叢書目録を写しただけ。結局は、「合計92種」と誤る(128頁)。正直なところ、やや意外な気がしなくもない。

もうひとつ、鄒振環『20世紀上海翻訳出版与文化変遷』(2000)*¹⁹がある。商務印書館の「説部叢書」部分は、『訳林旧踪』と同文だ。商務班「説部叢書」に欠陥のある叢書目録に基づいている。しかたなしに理解度第3層に置く。

原則をくりかえせば、実物を見ることから研究がはじまる。ただし、「説部叢書」の実物を所蔵するといっても知識があるとは限らない。

まわりを見回して先行文献が見つからない(と思っただけ)。事實は、中国に手がかりはあった。既述の叢書目録は重要基礎資料だ。しかも、日本にはすでに詳細な論文が発表されていた(後述)。それらの存在を知らない中国人研究者は、独自に模索するしかない。むだな精力を使っている。

陸昕「説《説部叢書》」(2001)*²⁰のことである。

陸昕論文の公表は、中国では早いほうだろう。中国においてそれ以前に「説部叢書」をまとめて論じた文章があるとは、寡聞にして知らない。陸昕論文が出たのは2001年だ。あとで触れる中村忠行の1981年から数えて20年も遅れる。しかも、中村の水準には遠く及ばない。日本における「説部叢書」研究は、中国では誰も知らない。(ここでお断わりを。論述の都合で、先に中国における研究を説明する。日本での研究は、そのあとにまとめる)日本にある先行文献を承知せず、叢書目録という羅針盤も持たない。実物だけを手元におき、蔵書家陸昕はひとりですさまよい遭難する。

文章の大要を紹介しながら説明する。

1 「説部叢書」は4集にわかれ、前の3集はそれぞれ100種、第4集は^{ママ}40種だ(106頁)。

筆者注：陸昕が「説部叢書」の表紙を掲げながら説明しているのは、のちの初集本(2集、第3集、第4集を含む)である。しかも、第4集は22種だが、40種と誤



『蔵書家』第3輯

る。どの目録にも第40編など記載されていない。樽本編『新編増補清末民初小説目録』（濟南・齊魯書社2002。以下樽目録第3版と称する）に「説部叢書」の全部を収録している。だが、刊行された時間からみて陸昕が参照するのは（その気があったとしてだが）不可能だった。それならば、樽目録初版1988、第2版1997は、と要求するほうが無理なはなしだろう。

私が問題だと思うのは、陸昕が説明しているのは初集本のみであることだ。それ以前に元版が刊行されていることをご存じない。さらに先立つ先元版もある。陸昕は、まったく説明しない。説明がないということは、「説部叢書」成立経過についての知識がない、という意味だ。

2 初集100種は、光緒末年に完成したとのべる（107頁）。

筆者注：末年だから光緒三十四年だ。すると、1908-09年になる。それは正し



元版表紙（タンポポ文様）

初集本表紙（リボン文様）

いのか。

3 表紙が変化していることを説明する。

筆者注：よく気がついた。さすがに実物を245種（初集91種、2集87種、3集63種、4集4種）を所有していると自慢するだけのことはある（108頁）。

4 初集の表紙は、柳と桃の花を下地にし、柳は緑、桃花は濃くてあでやか、中央に黒色で縦に書名、という。

筆者注：これが不可解だ。別に「説部叢書」元版（タンポポ文様）と初集本（リボン文様）の表紙を掲げておく。

その両者を見てほしい。陸昕が説明するような、柳と桃花、中央に黒色縦書き書名という意匠は、どちらにも該当しない。陸昕がなにについて書いているのか、この説明では不明だ（後述）。

「説部叢書」の成立過程を大きく示せば、先元版 元版1型2型 初集本へと変化する。最初から初集本であったわけではない。また、陸昕のこのような表紙

をもつ「説部叢書」は存在しない。実物を所蔵しているはずなのに、説明が食い違っているのはどういうことだろう。

見てほしい。元版はタンポポ文様に、書名は横書きが特徴である。話の順序からいえば、陸昕は元版を説明しているように見える。だが、表紙の説明が異なるので疑問が生じる。

だいいち陸昕が掲げている表紙写真の1葉は、元版ではなくて次に説明する初集本なのだ（前出写真『蔵書家』第3輯参照）。

5 民国二、三年に重印（再版）した、と陸昕は書く。

筆者注：西暦でいえば、1913、1914年だが、ここもあやふやだ。どちらなのか。私が見るところ、全部を再版したのは1914年であって1913年ではない。陸昕の説明は、厳密さに欠ける。

6 その表紙だ。新しくなって、青色の花模様と赤色縦組みの書名だ、という。
筆者注：こちらは、実物と一致している。

7 再版初集本の表紙について、陸昕が目にしたのは、赤色縦組み書名とそれを取り囲む青色花模様だ。

筆者注：私の受け取り方はすこし違う。全体を枠取りする赤色リボン文様のほうが印象強い。だから、リボン文様と称している。

この初集が広く読者のもとに出回った。「説部叢書」といえば、リボン文様の表紙を提示するのが普通だ。

版元の商務印書館からして、自社刊行物の歴史資料として掲げてこのリボン文様の初集を示す。それ以前にタンポポ文様の元版があることをまるで知らないかのような態度をとる。おまけに、「説部叢書」刊行の詳細を説明したこともない。ならば、出版目録に元版を収録しているかといえば、それもなし。『商務印書館図書目録（1897-1949）』（北京・商務印書館1981）がそれだ（理解度第2層に分類する）。だいいちその目録には、基本事項である刊年を明記しない。これでは、資料として使用することができないのは常識だ。杜撰な編集物だといわなければならないのは、商務印書館編集部にとっては恥ずかしいことだろう。一般の研究者が元版を知らない原因にもなっている。すると、日本の中村忠行は例外だった。

今、2集、第3集、第4集については、触れない。問題が集中しているのは、

元版と初集なのだ。2集以降では難しい問題は存在していない。本稿で注目するのは、元版から初集への転換問題である。

以上をまとめる。

陸昕2001は、初集本（これには2集、第3集、第4集を含む）については、説明している。表紙が異なることに言及しながら、それを初集内のことだと理解しているらしい。しかも、「説部叢書」ではない表紙を提示する。ここには勘違いがある。理解度第2層に所属する。

では、樽目録第3版が利用できるようになってから、記述は変わったか。

陸昕「従《説部叢書》談搜書所見」(2005)*²¹である。時間的に見て、樽目録第

3版を参照することはできたはずだ。

該書の新しい趣向として、丁東との対談形式で語られる。

同じ説明ではじまる。「説部叢書」は全文で4集に分かれる、などなど。ここでも第4集は40種^{ママ}（203、204頁）と誤ったままだ。

「初集」の表紙を説明して、以前の語句を書きあらためている。すなわち、一律に、藤、緑の柳、青草、および風に舞う垂れ下がった桃色の花などが下地になっている。中央に黒色縦組みの書名だ、という（203-204頁）。

以前は、「柳と桃の花を下地にし」と書いていた。書名を明らかにしていないから、なんのことかわからなかった。陸昕の該書に色彩写真1葉でそれらしい単行本の表紙



陸昕『閑話蔵書』

が掲げられている。そればかりか、毎ページ小口に同じものの縮小白黒写真を配している。それくらいお気に入りの珍品らしい。『匈奴奇士録』である（参照：樽本「周作人訳ヨーカイ・モール『匈奴奇士録』の英訳底本について」）。説明して光緒三十四年九月初版、別に白黒写真を135頁に収録して念がいつている。また、「説部叢書」2集第51編民国四年十月再版本の表紙写真を136頁に掲げる。本稿では、



周作人訳『匈奴奇士録』

「歐美名家小説」シリーズ

より鮮やかな色彩表紙を孔夫子旧書網から引用しておく。

表紙には「歐美名家小説」とある。絵図に描かれるのは柳ではない。藤棚にからみつく藤花だ。中央に黒色縦組みで書名が見える。これは、「説部叢書」ではない。元版でもないし初集本でもない。表紙に明記してある「歐美名家小説」シリーズの1冊にすぎない。なぜこれを陸昕は「説部叢書」だと思ったのか。どうやら、彼は以前から勘違いを続けていたようだ。

周作人訳『匈奴奇士録』が「説部叢書」2集第51編に収録されるのは、1915年10月16日再版時である。2集の表紙意匠はリボン文様だ。

上記のように刊年を書いてきて、陸昕の誤解にいたる筋道が見えてきた。陸昕は、なぜ「歐美名家小説」の1種を「説部叢書」初集本だと誤認したか。

出発点は、奥付の「光緒三十四年九月初版」だ。これは間違いない。ただし、なんども書いている「歐美名家小説」の1種であることをご確認いただきたい。

次は、「説部叢書」2集第51編の刊年だ。陸昕は「民国四年十月再版」としか記述していない。だが、実際は「戊申九月八日初版／民国四年十月十六日再版」なのだ。戊申は光緒三十四年のこと。

戊申（光緒三十四年）に「歐美名家小説」の1種として刊行された『匈奴奇士録』は、1915年に「説部叢書」2集第51編に編入されたことを意味している。

それだけの経過であるにすぎない。

不思議なのは、陸昕の考え方だ。彼は、『匈奴奇士録』初版を「説部叢書」初集だと勘違いした。表紙に「歐美名家小説」と明記されているにもかかわらず、それを無視したらしい。

陸昕が迷走することになった経緯は、私が考えるにたぶん次のようだ。

彼が誤解しているのは、『匈奴奇士録』の「説部叢書」2集本と周作人+魯迅『紅星佚史』の「説部叢書」初集本をならべたところに見られる(136、137頁)。

初集本と2集本の表紙は同じりボン文様だ。『紅星佚史』は、最初から「説部叢書」に収録されている。そこから『匈奴奇士録』も同様に「説部叢書」に収録された、と陸昕は考えたのではないか。「戊申九月八日初版/民国四年十月十六日再版」という奥付表示を見てほしい。初版は「説部叢書」初集であり、再版は同2集だという理解のしかただ。

その証拠に、次のように説明する。

「前に新文学を説明した時に触れた周作人の変名である周連訳述の2種類の著作(注:『匈奴奇士録』と『紅星佚史』)は、「説部叢書」に収録された」(204頁)

もともとおかしいだろう。初集100編のつぎに2集100編が編集刊行されている。初集に収録されて、それが再度2集にあるとすれば、同一系列内で重複するではないか。ありえない。だが、一度思いこめば、その誤りから抜け出すことはむづかしい。

陸昕がそれ以外に述べる内容も、本稿に関係する部分は以前のものと対照して変更はない。

結局のところ、陸昕は、初集本の前に元版が刊行されていたことを知らないのだ。元版タンポポ文様の表紙については、なにもいわないことからわかる。

陸昕は樽目録第3版を見ていない。誤りをくり返している。これでは、理解度第2層にとどまる。

陸昕論文に触発されたのが、次の黄暉である。

黄暉「也説《説部叢書》」(2008)*²²がある。

先に陸昕が「説部叢書」は第4集まで刊行された、と書いた。それを読んだ黄暉が、自分は「第六集第一編、第九集第十編」を所有するという。だから陸昕の「第四集四十種」説は動揺するそう^{ママ}だ。私は自分の眼を一瞬疑う。なにをいっているのか。

第九集第十編の表紙写真が掲載されている(60頁)。見れば、元版である。陸昕が説明しているのは、初集本だ。先行する元版と、後から出てくる初集本の集編



黄煇『蠹痕散輯』

番号が違うのは当然すぎではなしにならない。元版の「第六集第一編、第九集第十編」は、のちの初集に統合される。それぞれ自動的に初集第51編、第90編と番号が振り替えられた。問題はなにもない。

黄煇は、「説部叢書」が成立していく過程を知らないことを自ら暴露した。だが、カンは鋭い。中国においては、と注がつくのは残念なことだが。2系列の「説部叢書」があると推測する。作品『簾外人』は、甲「説部叢書」初集第四十七編で、乙「説部叢書」ではそれが第五集第七編にあたる。ふたつともに光緒末年に出版されているが、なぜそのような、あってはならない「重複事件（双包案）」が出現するのか（61頁）。黄煇

は、そのような疑問を提出するだけである。これを見ても、彼は混乱していると私は思う。「双包案」に注目のこと。5年後の2013年に別論文の中に再度出現するから。

「説部叢書」を甲乙の2系列にわけたのは正解に近づいている。

黄煇がいう乙は元版であり、甲は初集本なのである。1981年という昔に、中村忠行がすでにそう指摘している。「重複事件」でもなんでもない。元版十集（各集十編。漢数字を使う）合計一百編が、初集と改称され全100編になっただけ。元版第五集第七編は、先ほどのとおり初集第47編に読み替えられた。矛盾するところはない。もともと重複するようになっている。

黄煇は、陸昕論文を読んだ。初集についての知識はある。また、所蔵する元版を掲げ、甲乙2系列という見方を示した。しかし、疑問を書きつけただけ。思考を一步深めることができなかつた。陸昕と同様の理解度第2層どまりである。

劉徳隆の論文を見つけたのはまったくの偶然からだ。「商務印書館与小説」である。2008年に中国で開催された張元濟研討会で発表したという。本人に確認し

た。研究会で発表したきり、どこの雑誌にも投稿しなかった。なぜ、ウェブ上にあるのか不明だ、と*23。「説部叢書」に関する発言を読むことができる。ここに取り上げる理由である。

劉徳隆は、商務印書館が刊行した「説部叢書」を簡単に紹介している。注目すべきは、「十集本」「四集本」と名称を使用して2種にわけていることだ。中国人研究者としては、劉徳隆は早くから区別している。微妙なところだが、次に紹介する付建舟と前後する。理解度第3層に属する。

ただし、第一集を2種とし、合計92種に誤る。その原因は、『中国近代現代叢書目録』がそう表示しているからだろう。

中国で本格的な論文が発表されたのは、2009年だ。

付建舟「談談《説部叢書》」(2009)*24である。

付建舟は、最初に黄暉の甲乙2系列をつかまえる。2系列に分けるのは、近代小説研究者にしてみれば、「常識」だそうだ(306頁)。その証拠は、樽本『新編[増補]清末民初小説目録』(2002)が明確に区別しているところにある。ただし、解釈と説明はしていない、と付建舟はいう(同上頁)。どこかおかしい。

私は、中村忠行論文1981を読んでいる。中村のいう元版と初集本を区別して『清末民初小説目録』[初版](1988)に記入した。私にとっては「常識」だ。だから、記述に工夫をした。区別したことがわかるように元版には漢数字を、初集本にはアラビア数字に使い分けた理由である。だがその後、中国人研究者が叢書2系列を区別したであろうか。上にあげた、陸昕2001、陸昕2005を見ればよい。いずれも元版の存在を知らない。黄暉2008は推測して甲乙2系列だが、前後が逆である。明確に認識しているとはいいいがたい。つまり、2系列の存在は、中国人研究者の認知外にある(劉徳隆は除いてもよい)。中国学界においてほとんど誰も知らない「常識」は、それゆえ「常識」ではありえない。

付建舟の文章からは、目録について中国人研究者がもつ一般的な認識の存在を私は感じる。中国では、目録とは先行目録を複写して編集するものだと考えているらしい。そこにあるものを左から右に写すだけ。だから、目録に記述されたことは、誰でもが知っている「常識」にすぎない(はずだ)。そういう考え方である。付建舟は、樽目録第3版に独自の工夫がなされているとは思ってもいないとわか

る。

付建舟は、中村1981、神田2002が書かれていることを夢にも思わない。ゆえに、広告にもとづいて「説部叢書」の2系列を追跡し説明しはじめる。彼にとっては、そうすることが必要だった。既知の事柄を、それとは知らずに最初からやり直す。二度手間だ。研究者としては恥ずかしいだろう。知っている私はそう思う。

付建舟の見解を以下にまとめる。

- 1 商務印書館「説部叢書」は、2系列「十集系列」「四集系列」にわかれる。
- 2 「十集系列」は十集、各集10種、合計100種。「四集系列」は、前の三集は毎集100種、第四集は22種、合計322種。
- 3 「十集系列」100種は、「四集系列」の初編だ。
- 4 1903年からはじまり1924年で終了する。

以上のようになる。

3に見える「初編」(309頁)は、「初集」(307頁)と書くほうが適切だ。

第四集が22種というのは、樽目録第3版に根拠を求めている。叢書目録は見なかったのか。

読者のご賢察とおり、付建舟のいう「十集系列」は私のいう元版だし、「四集系列」は初集本にほかならない。ならば、付建舟の到達水準は、理解度第3層でしかない。

ようやくここまで来たか、あと一步だった。これが私の感想だ。中村忠行1981から付建舟2009まで、28年間もの時間が経過している。しかも、最初の中村が到達している第4層にも届かない。ほとんど1世代を経過しながらその結果だ。その差を見れば、ため息が出てきそうになる。

付建舟「清末民初新小説広告的文学史意義」(2012)*²⁵がある。「説部叢書」については簡単に説明するだけ。刊行は1903年からはじまったと書きながら、元版については言及しない。また、出版は1922年まで継続された^{ママ}と誤記する(72頁)。彼のいう「四集系列」だけを掲げる。理解度第2層に後退した。

いわなければならぬのは、付建舟は、資料の発掘を着実にこなしていることだ。これは注目にあたいする。

以下の3著を公開している。



『清末民初小説版本経眼録』『清末民初小説版本経眼録二集』



『清末民初小説版本経眼録』

付建舟、朱秀梅『清末民初小説版本経眼録』上海世紀出版股份有限公司遠東出版社2010.6

付建舟『清末民初小説版本経眼録二集』杭州・浙江工商大学出版社2013.1

付建舟『清末民初小説版本経眼録三集』北京・中国社会科学出版社2013.8

多くの版本についてその表紙、奥付写真を掲載する。そのぶん資料的価値が高い。ほかの書目を引用した説明を読まされるより、実物の写真を掲げてもらった方がどれだけ有用かわからない。

参考までに触れておく。上記経眼録2種に掲載されている商務版「説部叢書」の表紙写真を数えた。元版と初集本（2集、第3、4集を含む）に分ける。上中下巻のばあいは、3葉とする。「林訳小説叢書」は数えない。

経眼録	元版3葉（1型1葉、2型2葉）	初集本57葉
経眼録二集	元版2型のみ21葉	初集本68葉
経眼録三集	元版2型のみ6葉	初集本58葉

付建舟の説明は、基本的に十集系列（元版1型2型）と四集系列（初集本）の2

種についてだ。理解度第3層である。

努力の着実な積み重ねの上に、研究が結実する可能性が生まれる。ことに付建舟の経眼録二集には、重要版本が掲載されていることを私は理解した。この版本が出現したことにより、ある疑問を解決することができる。「説部叢書」の改組時期についての問題だ。資料を提出した付建舟本人は、そのことに気づいてはいない。興味の持ち方が私とは異なっているからだろう。

7 日本における研究

あとまわしにしてしまった。本来ならば、次の中村論文を最初に説明したほうがわかりやすかったか。中国人研究者たちが、研究の遠回りをつづけ、しかも途中までしか到達していない。その原因は、中村論文を知らないからだ。

中村忠行「商務版『説部叢書』について 書誌学的なアプローチ」(1981)*²⁶である。1981年という早い時期に執筆されている。日本で公表された。しかも「文化大革命」が1976年に終了してわずかに5年しか経過していない。中国人研究者が該論文の存在を知らない理由だろう。まあ、当然か。中国には日本の清末小説研究に注目する研究者はごくわずかしかいない。一般の研究者が知らないのは、残念なことだが、不思議ではない。長年の経験からわかる。

商務印書館「説部叢書」研究における最初の記念的論文だ、と私は考える。多数の表紙写真を掲げてその変化を明解に説明している。最初にして詳細だ。内容は豊富で広がりをもち、存在する問題のほとんどを提出している。中村忠行が彼の約50年間で費やし追求しつづけたその結果を、一気に公開した。中村忠行による「説部叢書」研究の集大成だと私は見ている。「説部叢書」に関して、それまで研究者の誰も書いたことのないすぐれた論文である。だからこそ、私はなんども紹介する。

中村論文については、すでに要約した。ここでは、本稿に関係する重点だけを抜き出して結論を掲げる。

1 元版と初集本の2系列にわかれる。(中村が与えたこの呼称を樽本が継承してい

る)

2 元版所収の『佳人奇遇』『経国美談』は、『天際落花』『劇場奇案』に差し替えられた。(改組である)

3 別作品の移動を行なっている。

4 初集と改称したのは、商務印書館が金港堂との合弁を解消したのがきっかけだ。

中村論文は、「説部叢書」研究の最深部まで到達している。理解度第4層に置く理由だ。

あらためて指摘する。重要案件だといいたい。作品を差し替えて改組したこと、および初集と改称したことの2点である。

日本では、中村論文につづくのが樽本「商務印書館版「説部叢書」の成立」(2002)*²⁷だ。

拙論の内容を以下のように要約する。

商務印書館の翻訳シリーズ「説部叢書」は、有名であるが、その成立について論じた論文は、多くない。日本ではわずかに中村忠行が文章を発表しているだけだ。中国では、「説部叢書」の存在を紹介するだけの短文がようやく執筆されるという寂しさである(注:陸昕2001のこと)。資料上の制約があるのかどうか、詳細は不明だ。本論文は、中村論文よりもより詳細に、原物の書影をかがげながらその成立過程を述べる。略論すれば、最初は、商務印書館に「説部叢書」刊行の構想はなかった。漢訳作品が増加するにしたがってそれをひとまとめにすることにした。第一集から第十集まで各十編で全100編とする。元版である。そののち、表紙をタンポポ文様に統一する。前後して作品を入れ替えた改組を実行した。さらに数年後、元版一百編を初集と改称して表紙をリボン文様に一新する。金港堂との合弁解消を記念して1914年に全部を再版する。結局のところ第4集22編を発行して終了した。その成立過程は、単純ではないのだ。

以上で要約終わり。

樽本2002は、陸昕2001が公表されたあとに書かれた。中国に見るべき「説部叢書」研究がない、という状況であったことを今さらながらに感じる。

第一集第一編『佳人奇遇』を『天際落花』に、第一集第二編『経国美談』を

『劇場奇案』に入れ替えて改組は1908年だ、と推測した。ただし、それを証明するタンポポ文様の実物がでてこない。これが、私の疑念を引き出した（後述）。

問題を整理しなおして次の論文を書いた。

樽本「商務版「説部叢書」研究の昔と今 1 不思議な版本」（『清末小説から』第103号2011.10.1、1-11頁。要約：商務印書館版「説部叢書」に収録された不思議な版本を紹介する。その前に、「説部叢書」の成り立ちを研究した日中の研究を見る。中村忠行論文が早くに、詳細に論じていることを指摘する）

樽本「商務版「説部叢書」研究の昔と今 2 不思議な版本」（『清末小説から』第104号2012.1.1、1-9頁。要約：集編番号が同一である版本は、存在しないはずだ。しかし、『吟辺燕語』と『金銀島』が同一。『金銀島』が間違っている。なぜかはわからない。また、『寒桃記』の集編番号を で塗りつぶす版本がある。塗りつぶしていないものも実在する。こちらの理由も不明。不思議な版本があるものだ。以上の事実は、商務印書館編訳所の刊行物管理が厳格ではないことを示唆している）

その他いくつかの問題に言及した。その中でいまだに疑問のままに引き続いていることがある。作品を入れ替えて改組したのはいつか。最後に残った課題だ。

8 改組時期 問題を絞り込む

「説部叢書」の成立経過を今一度確認したい。改組の時期に焦点を合わせている。それ以外は省略した。

先元版とは、商務印書館が刊行したバラバラの翻訳作品を指す。その時点では、まだ固有名詞「説部叢書」の名称は与えられていない。

1903年より表紙に「説部叢書」と明示する元版が出現する。第一集十編、第二集十編と継続出版する。

1905年、表紙をタンポポ文様に統一し叢書としての一体感を演出した。

1908年、2作品を入れ替え改組する。

改組と同時に元版十集全一百編が完結する。まとめて箱売りをしたのは1908年、1909年、1911年のことだ。

1913年、初集と改称し、統一番号に振り直し全100編とする。表紙をリボン文様へと一新する。

1914年、初集100編全部を再版する。商務印書館が金港堂との合併を解消した記念だ。

以上が、「説部叢書」成立の経過であり、元版から初集本への変更だ。

改組について、当時は上記のように1908年だろうと推測した。その根拠は、差し替えられた『天際落花』（戊申五月(1908)/1914.4再版）と『劇場奇案』（戊申六月(1908)/1914.4再版）の刊行年だ。両書ともに初集本の奥付刊年を示した。それらに印刷された初版らしい刊年を信用すれば、改組は戊申1908年になる。

その1908年が、私の中ではブレはじめた。

ひとつの理由は、元版の初版（戊申五月、あるいは同年六月）が見つからないからだ。

説明する。

1914年に再版した初集は、その奥付に初版の刊年を記載する。しかし、それが正しいかどうかはわからない。ここが重要だ。

戊申初版と表示していても、以前の「説部叢書」であるとは限らない。別の叢書、あるいはたんなる単行本である可能性を否定することができない。周作人『匈奴奇士録』の例がある。また、誤植があるかもしれない。全部が正確に初版刊年を印刷しているとは保証のかぎりではない。再版本で、さまざまな記述を見た経験からいっている。だから、ここはぜひとも戊申1908年「説部叢書」初版タンポポ文様本を確認する必要がある。

1908年初版本が確認できない。考えがブレた原因だ。今から思えば、資料が不足していただけだった。

くりかえす。『天際落花』と『劇場奇案』が1908年に差し替えられたならば、元版タンポポ文様の版本があるはずだ。しかし、それが見つからない。一方で、上にあげた1914年再版本の初集リボン文様は、容易に見ることができる。迷ったすえに、以前の改組1908年説を1913年に考え直した。

決め手の証拠となる実物の元版タンポポ文様本が、出てこない。これは、私にとっては大きな問題だ。「説部叢書」の実物は、現在はほとんど市場で見かけな

い。

私は、手元にある資料に基づいて判断している。状況を考慮し推測する。そう考えるのが合理的であれば、そう書く。新しく資料が出てくれば、それに合わせて変更する。それが私のやり方だ。このばあい、元版タンポが文様本の欠如不在が、1908年から1913年へ考え方を変えさせた。

ただし、1913年改組説に変えると説明できないことがひとつ発生する。そのことも明記している。

『東方雑誌』第8巻第1号(1911.3.25)に商務印書館の自社広告が掲載されている事実だ。

書籍名	価格
身体検査統計表	六角五分
西清續鑑 四十二册	定價二十四元 預約十五元
旬齋臧石記 十二册	十二元
審齋鑑古	近刊
小説類	二十八元
天際落花	三角
劇場奇案	四角
夢遊二十世紀	二角
華生包探案	二角
小仙源	一角五分
案中案	二角
環游月球	三角
吟邊燕語	三角五分
萬里翠親記	三角

『東方雑誌』第8巻第1号

「説部叢書」として掲げられた書名には、改組後の作品が見える。1913年改組説に考えを変更すると、広告の1911年当時、それらは実行されてはいないはずだ。前稿注8において、少し長い注釈を書いた。広告を全面的に信用するのは危険だ。しかし、まったく無視することもできない。改組を1913年だとすれば、広告の記事と矛盾する。説明

できない。1908年であれば、問題はない。しかし、元版の実物が見つからない。そこを巡るだけ。

9 改組年の確定

待ったかいがあった。探していた本が、出てきたのだ。写真ではあるが、なによりの資料だ。前出の付建舟『清末民初小説版本経眼録二集』（2013）である。

「説部叢書」元版タンポポ文様『劇場奇案』1908年初版が掲載されている。25頁の表紙写真には、タンポポ文様に第一集第二編と明記してある。26頁の奥付写真を見れば「光緒三十四年六月初版」だ。1908年に改組された決定的な証拠である。

私は、見た瞬間に理解した。これこそが私の求めていた元版の初版そのものである。清末小説研究会ウェブサイトのように報告したのだった。



付建舟『清末民初小説版本経眼録二集』より引用

2013.5.22

商務版「説部叢書」改組に関係する重要な版本が出現しました。
今まで不明とせざるを得なかった改組の時期を特定することができます。

こうして本稿を書いている。

「説部叢書」元版は、改組して作品の差し替えを実行した。第一集第一編『佳人奇遇』は『天際落花』になる。第一集第二編『経国美談』は、『劇場奇案』(光緒三十四年六月)である。タンポポ文様の元版だ。

改組の時期は、光緒三十四年(1908)で間違いはない。結局のところ、もとの推測にもどって落ち着いた。

付建舟は、該書において写真を示してはいる。だが、改組について何も説明していない。改組そのものを知らないからだろう。

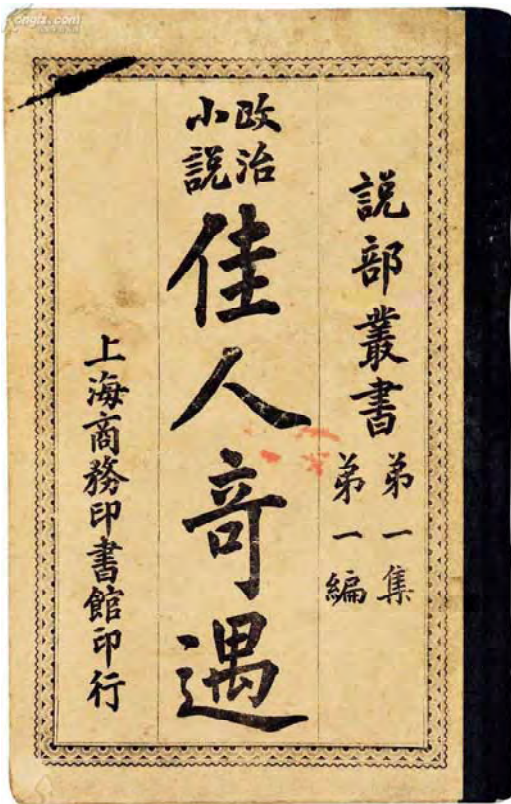
なお、該書についてウェブで検索すると上海図書館所蔵の1本がある。付建舟が写真にかかげた表紙には、上海図書館の蔵書印が押されている。

「説部叢書」成立経過に関する「表」を修正して本稿末尾に掲げる。

なお、ついでながら、上に示した第一集第一編『佳人奇遇』、つまり元版1型aの書影を掲げよう。「説部叢書」本であるところが珍しい。元版1型aの『経国美談』と同じ意匠だ。私は見たことがなかった。

2010年、孔夫子旧書網の競売に出品された記録が残っている。刊年不記らしい。出品書店が、民国刊行だと誤って説明している。それくらい見かけない版本だということができる。

上に示した『佳人奇遇』と同じ写真が、闕文文『晚清報刊上の翻訳小説』(済南・齊魯書社2013.5。41頁)にも見える。左上のキズが一致するから同一版本だとわかる。ただし、文文は、何も説明していない。43頁ではその刊年を光緒二十七(1901)とするが、根拠不明。



孔夫子旧書網より引用

10 中国における最新の研究

鄒瑞珩「“説部叢書”的胸懷」*²⁸が新しい。内容を紹介しながら検討する。

1 商務印書館が発行した最大規模の叢書だという。1903年から1924年まで、全部で^{ママ}220部あまりの作品を出版した(173頁)。

筆者注：最初から奇妙なことが書いてある。「220多部」とはなんだろうか。「320多部」の間違いだろう。また、177頁には323種とも記述する。根拠が不明。事実は、第4集第22編『情天補恨録』(1924)が最後の作品だ。普通は全322編(種)といている。なぜ数字が一致しないのか不明だ。さらに174頁で、第四集は23編のみという。22編の間違い。こまかな数字の違いに過ぎない。だが、客観的な数字だから一致させるべきだ。「説部叢書」の開始を1903年とする。該書の別の箇所では、周羽が『佳人奇遇』について「^{ママ}1902年此書又編入商務印書館「説部叢書」」(133頁)と書いている。『経国美談』でも同様に1902年とする(134頁)。執筆者どうして調整はしなかったのだろうか。

2 全体を2種、つまり2系列に分ける。鄒瑞珩はそれらについて名称を与えていない。しいていえば、「第一種」(173頁)と「新出」だ(174頁)。

筆者注：私が中村論文から呼称を受け継いだ元版と初集本に当たる。黄憚は乙甲、付建舟のいう十集系列と四集系列になる。便利な名称が、それも複数あるのに、先行文献を読んでいないのかと疑う。あるいは、ただ無視したかった。

3 「説部叢書」は、偵探小説が最も多く、言情小説がそれに次ぐ。この2種類で全体のほぼ半分を占める(174頁)。

筆者注：角書を抽出してそう説明している。何を見たのか知らないが(典拠を明示していない)、数えたのだろう。だが、角書で小説内容を分類するのは、少々危険だ。角書をつけない作品はどうするのか(『商務印書館図書目録』には全作品に角書を明示している。ただし、実物とは異なるばあいはいくつもある。鄒瑞珩が見たのは、この図書目録だろうか)。叢書全体の約39.3%には角書の明示がない。それしか手がかりがない、というのならしかたがないが。私が見れば、角書のついた作品で偵探と

言情、それに類似する婚事、愛情、写情、艶情、哀情を含めて、約43.8%を占める。全体からすれば、26.6%にしかならない。「この2種類でほぼ半分を占める（両類相加総共占一半左右）」というのは誇張にすぎる。「説部叢書」は、偵探と言情が特色だ、と誤った印象をあたえる。

4 「双包案」を出す（174頁）。

筆者注：黄暉が以前に提起した。復習する。同一作品が、（乙系列）第五集第七編と表示し同時に（甲系列）初集第四十七編でもある。重複しているから事件だ、と彼はいった。元版（乙系列）と初集本（甲系列）に作品が重複する。当たり前のことで事件ではない。事件と考えるほうがおかしい。

鄒瑞珩がここで指摘するのは、黄暉とは異なる事柄だ。すなわち、第一集第二編には、『経国美談』と『劇場奇案』がある。ゆえに「双包案」だ。第一集第二編に2作品が重複するところに注目した。鄒瑞珩が「双包案」だと説明する理由だ。

私の見方は、それとは違う。これは、作品の入れ替えであって「重複事件」ではない。鄒瑞珩は、黄暉の用語を使用して勘違いしているのではないか。それと同時に、作品の入れ替えが改組であることを鄒瑞珩は認識していないことを示している。「事件」だといいいながら、それが意味する重要事項を見逃した。

鄒瑞珩論文を最初から順に見ている。細部がしっかりとこない。なぜそうになっているのか。考えるに、たぶん「説部叢書」の成立過程を把握していないからだろう。

5 「説部叢書」の位置づけを欧米大衆文学（欧美通俗文学）に定める。しかし、大量の名著を収録する。

筆者注：前者は、一般的な見方だと思われる。後者は、具体的な作品名を列挙しているから納得がいく。

6 『媒孽奇談』の原著者と原作を夏洛蒂・勃朗特『簡・愛』と指摘する（175頁）。

筆者注：この指摘は、新しい。その表示から、シャーロット・ブロンテ Charlotte Brontë 『ジェイン・エア Jane Eyre』1847だとわかる。

鄒瑞珩は、当時の翻訳を以下の3点に特徴づける。

特徴1 名家の名作も物語性を優先し、脚本、伝記も小説として翻訳した。

特徴2 原作が各国語で書かれていようが、翻訳家の限界から多くは英訳本あるいは日本語訳本からの転訳だ。小さな誤りが大きな誤りをもたらした。

特徴3 当時の翻訳小説は多くが意識を採用した。

その通りだろう。商務印書館「説部叢書」に限っての傾向ではない。

特徴1の、脚本も小説として翻訳した、とはなにか。おそらく林紘らが漢訳したシェイクスピアものを指している。だが、これが誤りであることは、すでに明らかにされている。林紘らが底本としたのは、もともと小説化されている作品だ。漢訳して小説になるのは不思議なことではない。また、訳者らの無知からくるものでもない。物語性を優先したわけでもない。鄒瑞珩は、先行論文を追跡する力が弱い。そこは袁進主編がのりだしてきて指導すべきところだった。

鄒瑞珩が「説部叢書」のなかに占める林訳小説の多さを指摘するのは従来通りかもしれない。ただし、一步進めて林紘が「説部叢書」全体の水準を推しあげたし、叢書の読者群の数と水準を高めたと指摘する。林訳小説を肯定的に評価していることを記しておく。林紘が再評価されつつある学界の動きに反応しているのだろう。

鄒瑞珩論文は、「説部叢書」の成立経過については執筆の重点をおいていない。論文の重点でないのは、かまわない。しかし、基礎的な知識は持っている必要があるのではないか。先行論文もいくつか発表されているのだ。

「説部叢書」がどのように形成されたのか、諸論文がそれをどれだけ把握して説明しているか。本稿の目的は、そこを点検するところにある。鄒瑞珩は作品の入れ替えに言及するが、それは注の部分においてであって、重要視はしていない。ましてや、改組の事実にも気がついていない。改組時期が問題の焦点になっているという認識もない。せいぜいが元版と初集本に分かれているという程度だ。理解度第3層にとどまらざるをえない。

祝均宙「説部叢書」*²⁹が短文ながら説明している。

祝均宙は、ふたつの段階に分ける。以下のとおり。一部、漢数字とアラビア数字で書き分けた。

第1段階は1903年4月から1912年まで。十集で92種の小説を刊行した。第2段

階は1913年から1924年まで。4集で全322種だ。第1段階の第一集は、政治小説の『佳人奇遇』と『強^{ママ}国美談』(祝均宙は該書において、すべて誤記している)の2種類だ。

拠った資料は、『中国近代現代叢書目録』だけだと推測できる。と書けば、氏に失礼だ。なぜなら、氏は上海図書館に勤務していた。上海図書館の蔵書で見たはずだ。ただし、第1段階の開始を新暦「1903年4月」からとしたのも該目録に基づくだろう。ここに祝均宙の誤解がある。該目録では、「1903年」は新暦で「4月」は旧暦を示す。祝均宙は、それをそのまま新暦だと考えた。また、彼は、先行論文をなにも参照しなかった。

本稿で使用している元版が祝均宙の第1段階に、初集本が第2段階に相当する。評価は、理解度第3層である。



陳大康著『中国近代小説編年史』全6冊^{*30}(『編年史』と略す)という年表が、いちばん新しい。

陳大康著『中国近代小説編年』(上海・華東師範大学出版社2002.12)を大規模に拡大した。全6冊で3千頁をこえるから、資料を大量に収集して詳細になっている。『編年史』については、別に詳しく紹介するつもりだ。本稿では、商務版「説部叢書」関連部分を簡単に取り上げる。

結論だけをいう。

陳大康は、商務版「説部叢書」についての基本的な知識を持たない。彼の研究蓄積と業績の少しを知っている私は、落胆する。

近代翻訳小説では、はずすことのできない商務版「説部叢書」だ。先行文献も、すでにいくつかある。だが、『編年史』に出てくる商務版「説部叢書」は、それらとは無縁である。つまり、研究もしなければ、吸収もしていない。

私が基本だというのは、元版と初集本の区別をつけることだ。1913年に元版を

「初集」へと改称した。ここが知識の分かれ目だと以前から指摘している。

陳大康が著わした全6冊の巨著は、その収録対象を「近代小説」すなわち、1840-1911年に発表された小説に限定している。ならば、商務版「説部叢書」は、元版である。第一集から第十集までの全一百種だ。1913年に改称した初集100種が出てくるはずがない。初集と書けば、間違いにきまっている。

1例のみを示す。

1904年に出た『環遊月球』は、元版の「説部叢書」第一集第七編である。これについて陳大康は744頁〔編年 744〕で次のように書く。「此為《説部叢書》初集第七編」のちの初集本にしてしまった。誤りである。これでは、彼の認識は第2層でしかない。

以上を見ての私の感想だ。中国の研究者は、理解度第3層に位置する『中国近代現代叢書目録』(1980)の記録から一步も抜け出してはいない。あるいは、第2層にまで退化していることになる。

表：「説部叢書」の変遷一覧(2014.10.24補訂)

- 1) 先元版 未組織 外国作品個々の翻訳 雑誌連載、あるいは単行本。普通名詞としての「説部叢書」

シリーズ名としての「説部叢書」

- 2) 元版1型(1903より) a 毛筆、b 活字併用、各一集十編
- 3) 元版2型(1905) 表紙の統一(タンボボ文様 横組みの書名)、扉に元版1型bを併用するばあいもある
- 4) 改組(1908) 『商務印書館論集』の推測にもどった
作品の差し替え 第一集第一編 『佳人奇遇』 『天際落花』(未見)
第一集第二編 『経国美談』 『劇場奇案』光緒三十四年六月(新出資料2013)

1908年改組と同時に元版第十集は第十編で完結、全一百編 箱売りは1908*31、1909、1911年に実行

注：付建舟が「十集系列」と称するのは、上の「3) 元版2型」だ。「2) 元版1型」については言及がない。

-
-
- 5) 初集100編(1913) 改称、表紙一新(リボン文様 紅色縦組みの書名) 編数は通し番号、全100編
- 6) 初集100編再版(1914.4) 金港堂との合併解消を記念して
以後、2集(1915)、第3集(1916-24 ここから表紙は絵図)、第4集(1921-24)と続く
注: 付建舟は、この初集本を「四集系列」と称する。初集作品の差し替えのみをいう。改名、移動には触れない。

【注】

- 1) 商務印書館は、自社年表の1903年に「説部叢書」の刊行開始をいうのみ。『商務印書館百年大事記』(北京・商務印書館1997.4)は、のちの初集本を写真に掲げて1903年刊行開始だと書く。ここに誤解の1例を見ることができる。『商務印書館110年大事記』(北京・商務印書館2007.5。6頁)も同様。版元による記述が正確ではない。読者がその違いに気づかないはずだ。
- 2) 中村忠行「商務版『説部叢書』について 書誌学的なアプローチ」『野草』第27号1981.4.20
- 3) 樽本「商務印書館版「説部叢書」の成立」『清末小説』第25号2002.12.1。『商務印書館研究論集』所収。関連する文章に次がある。「林訳小説叢書」の作品数」『清末小説から』第89号2008.4.1
- 4) 図3: 阿英編『晚清文学叢鈔』域外文学訳文巻 第1冊 北京・中華書局1961.9の口絵中央。「英国莎士比原著」とある。また、図4: 呉福輝『挿図本中国現代文学発展史』(北京大学出版社2010.1。96頁)に見えるものと同じ。
- 5) つぎの論文を追加する。闕文文「晚清小説出版商的広告營銷」(『明清小説研究』2007年第4期(総第86期)2007発行月日不記。177頁)は、『時報』光緒三十四年七月廿七日(1908.8.23)の広告を引用している。「説部叢書」の木箱入り一括販売の宣伝だ。これを見ても全十集の完結とその一括販売は1908年である。また、この広告には「本館自癸卯年刊行説部叢書」と明記してある。「説部叢書」の刊行開始は1903(癸卯)年だと考えていいだろう。また、別の広告では「本書十集訂一百三十本」(冊数が一定しない)と記す。分割支

払いの方法を宣伝しているのもおもしろい(178頁)。少し疑問がある。前者の引用広告文に「為書三百種、計一百八十八冊」と見える。「一百種」「一百二十八冊」の誤りではなからうか。

- 6) 陳大康「晚清《新聞報》与小説相関編年(1908-1911)」(『明清小説研究』2008年第3期(総第89期)2008発行月日不記。163頁)も128冊。

2014.12.16追加[編年 1577]光緒三十四年七月二十日(1908.8.16)に商務印書館の元版説部叢書完結、箱売り広告あり

[編年 1597]『神州日報』商務印書館の箱売りと月賦販売広告

- 7) のちの広告では、この作品を移動させていないものがある。たとえば、2集第72編『海外拾遺』(戊申七月十六日(1908.8.12)/1915.10.19再版)の広告だ。表紙裏に「説部叢書(初集)」百種(こちらは133冊)の広告がある。10種ずつに分け第一編から第十編の数字を振る。初集は、十編に分けることを廃止している。1915年になっているのにもかかわらず、なぜ実際には存在しない分類をしているのか。それほど厳密には考えていない、ということだろうか。また『魯濱孫飄流続記』も前方に移動させていない。叢書の現実を反映した広告だとはいえないだろう。『説部叢書三集様本』(1920?)も初集部分に『魯濱孫飄流続記』を動かさずもとの位置に置いている。正確ではない広告に頼りすぎると、誤解が生じるおそれがある。

- 8) 問題となる改組の時期について、1908年以前だと推定したことがある。中村論文でも同じ。いくつかの作品広告にもとづいている。1906-10年にしぼったうえで1908年だと考えた。たとえば、差し替えられた『天際落花』(戊申五月(1908)/1914.4再版)と『劇場奇案』(戊申六月(1908)/1914.4再版)の刊行年を見る。初版らしい刊年を信用すれば、改組は1908年だ。

しかし、1908年説ではいくつかの不具合が生じる。

『天際落花』と『劇場奇案』が1908年に差し替えられたならば、元版2型タンポポ文様の版本があるはずだ。しかし、それは見つからない。

『魯濱孫飄流続記』は前の方に移動し集編番号が変わった。それともない元版2型の番号はひとつずつズレていく。たとえば、『洪罕女郎伝』第一集第四編は第五編となるはずだ。しかし、集編番号が変更された元版2型タンポポ文様本は、これも見つからない。

箱売りの中身は、改組後であれば『天際落花』と『劇場奇案』に入れ替わっているはず。しかし、これを確認することができない。

そもそも十集を完結した直後にあわただしく改組をする必要はあったのか。そう問われると答えることができない。

改組が、「初集」改称、表紙一新と同時に、つまり1913年に実施されたとしよう。元版十集が完結してのち約5年間はもとの作品構成 改組前のままに箱売りが行なわれた。それで上の疑問は解決する。しかし、ひとつだけ説明できない事柄が出てくる。『東方雑誌』第8巻第1号(1911.3.25)掲載の広告には、改組後の作品が見える。1911年当時、それらは実行されてはいないはずだ。改組を予告しているにしては、実施の2年前というのでは説明にならないだろう。ただし、商務印書館の広告に厳密性を求めるのもいかなものかと思わないでもない。実際の変更を反映させていない広告が複数あることについてはすでに説明した。

【注8についての補足説明】商務印書館「説部叢書」はいつ改組したのか。その時期について、もう少し考える。改組のあらまは、次のとおり(しつこいところはお許してください)。

「説部叢書」元版十集百編は、1908年に完成した。1908年が重要なひとつの区切だ。その後、一部の作品を別のものに差し替え、あるいは書名を変更し、さらに作品の順序を変更して表紙を一新した。この手直しを経たものを初集(全100編)という。

いま問題にしているのは、初集に改めた時期である。

「説部叢書」初集をまとめて重印したのは、1914年4月で間違いはない。奥付の発行年月がそれを証明している。一般に知られているのは、この表紙がリボン文様の初集本だ。ゆえに、1914年4月が改組改称の時期だ、と考える人がいるかもしれない。だが、私は、改組が実行されたのはそれ以前だと推測している。「1914年4月再版」と明記されるのは、やはり「再版」だからだ。では、いつなのか。作品の移動は、『魯濱孫飄流続記』のほかにも存在する。以下に追加して示す。左の元版から右の初集に新しく配置しなおされている。

表2:「説部叢書」の改組(追加)

	元版	初集	
	第十集		
橘英男1907	第2編	第92編	冰天漁楽記1913.12二版 (1914.4再版あり)
冰天漁楽記1908	第3編	第93編	三人影1913.10再版 (1914.4再版あり)
鉄血痕1908	第4編	第94編	橘英男1913.12再版 (1914.4再版あり)
三人影1908	第5編	第95編	鉄血痕1913.12二版 (1914.4再版あり)

上の4作品を移動させた理由はわからない。移動した事実だけが残る。

私が注目するのは、4作品が示す1913年再版（二版）という時期である。「再版（二版）」というは、元版発行が1907年、あるいは1908年であるのに対して重版になるからだ。順序に移動のある4作品は、すでにリボン文様の表紙を持つ初集である。それが1913年に刊行された。ここでも、初集への転換が1913年であったことを示している。

商務印書館の自社出版広告では、どのように表記しているのか。つまり、広告には作品移動の事実が忠実に反映されているのだろうか。もう一度、見ておこう。

私は、『『東方雑誌』第8巻第1号（1911.3.25）掲載の広告』を例にあげた。時期からいえば、元版の時代だ。初集に移行する前の広告になる。

奇妙なことに、この広告には「改組後の作品が見える」。冒頭に一部作品の差し替えがある。書名を改める。また、『魯濱孫飄流続記』を前部分に移動させている。予告にしても時期的に見て早すぎるではないかと書いておいた。

同じ広告において、上記の4作品はどうなっているか。第92編から第95編だ。その配置場所をいえば最終部分となる。見れば該広告では、作品を移動させていない。

実際の作品全体をながめる。初集に変化があるのは事実だ。くりかえすと、叢書冒頭で作品を入れ替え、書名を改題し、前半部で作品を移動させる。また、最終部分においても複数の作品を動かしている。

以上の事実を把握したうえで、1911年の商務印書館自社広告をもういちど見る。1913年に実施されるであろう変化について、冒頭と前半の変更は反映している。だが、最後部分の移動は表記していない。

当時の商務印書館編訳所において、「説部叢書」にどういう編集方針が定められていたのか。それは明らかにはなっていない。説明した人は、ひとりもないのだ。実物の奥付を見て、広告を参照しながらの推測にならざるをえない理由である。

まとめると。同じ広告のなかで、一部は変化の予告となり、一部は従来通りの作品配列にしている。

つぎのようにいっていいのではないか。1911年当時の編訳所において、「説部叢書」冒頭の変更は予定されていた。しかし、最後部分の作品配列までは考慮していなかった。

商務印書館編訳所は、「説部叢書」について明確な編集計画をもたなかった。別のことば

でいえば、流動的に対処していたことがわかる。

- 9) 謝菊曾「《説部叢書》和《林訳小説》」「涵芬楼往事」『隨筆』第6集1980.2
- 10) 陸昕「説《説部叢書》」『蔵書家』第3輯2001.6。陸昕「從《説部叢書》談搜書所見」『閑話蔵書』北京・学苑出版社2005.8北京第3次印刷 所蔵鑑賞書系
また、関連する別の文章、たとえば郭延礼、鄒振環ほかについては、樽本「商務印書館版「説部叢書」の成立」をご覧ください。最近のものでは、黄惇「也説《説部叢書》」『蠹痕散輯』（上海世紀出版股份有限公司遠東出版社2008.2）もある。
- 11) 付建舟「談談《説部叢書》」『明清小説研究』2009年第3期（総第93期）2009発行月日不記
- 12) 次の文章を書いた。樽本「小説目録はたのしい 『清末民初小説版本経眼録』紹介」『清末小説から』第100号2011.1.1
- 13) 本稿注1に関連する。「説部叢書」が元版から初集本へ再編したのは事実だ。そのことを知らない、あるいはその区別ができない原因のひとつは、版元である商務印書館にいくらかの責任があるといってもいいだろう。版元自体が峻別する意識を現在でも持たない。その結果、長期間にわたって元版と初集本の違いがあいまいな情況がつづいた。区別しているようで誤った、やや意外な例をあげる。賈植芳、俞元桂主編『中国現代文学総書目』（福州・福建教育出版社1993.12）がある。「附録二 1882-1916年間翻訳文学書目」を収録し、翻訳文学を集めて力をいれていることがわかる。発行年月の記載、版数、叢書名および集編番号を採取する。短篇小説集には細目を示す。先行目録（たとえば北京図書館編『民国時期総書目（1911-1949）』外国文学 北京・書目文献出版社1987.4）をふまえた詳細な記述がある。行き届いて有用だから、信頼できる書目のひとつだ。私は、今でもそう思っている。ところが、おかしな箇所がある。この『中国現代文学総書目』に見る林訳『吟辺燕語』について、いくつかの説明が実物とは異なる。著者を記して「莎士比亞原著、蘭姆姉弟改編」とする。実はそうではない。該書の原著者シェイクスピアの表記は「莎士比」だし、もともとラム姉弟の表示はない。ラム姉弟の名前がないからこそ、林訳は戯曲を小説に書き換えて翻訳した、と劉半農によって濡れ衣をきせられたのだ。『中国現代文学総書目』は、あとの知識を盛り込んだ。つまり、実物からはなれてしまった。しかも、「上海商務印書館1904年7月初版。収入説部叢書初集^マ第8編」と明記する。「1904年7月」の「1904年」は新暦で「7月」は旧暦だ。中国において昔から普通に広く見ることのできる新暦旧暦混用である。それは別にして、問題は「説部叢書^マ初集^マ第8編」の箇所だ。ここは、元

版の「説部叢書第一集第八編」とするのがよろしい。該目録の同じ場所に初集本の書影（本稿の図6）を掲げて「本書即《莎士比亞戯劇故事集》初訳本」と注記する。まぎらわしい。書影を示すとすれば、のちの初集本ではなく元版（本稿の図2）にすべきだった。この部分を見る限り、編者は説部叢書第一集（元版）と初集本の区別がついていないといわざるをえない。同様の箇所は多くはない。だから意外に思う。

- 14) 郭延礼『中国近代翻訳文学概論』漢口・湖北教育出版社1998.3 / 修訂本 武漢・湖北教育出版社2005.7第2版第3次印刷
- 15) 沢本香子名で発表。「本格的翻訳文学研究の出現 郭延礼『中国近代翻訳文学概論』について」『清末小説』第21号1998.12.1、1-15頁。のち樽本『清末小説研究論』2005所収。要約：郭延礼の翻訳文学研究が、参考文献を海外に求めており研究の成果が深く広いことを評価する。内容から分類して分野別に記述する第1部と翻訳者個人からその翻訳業績を総括する第2部によって構成されている。翻訳文学全体の流れを概説しながら個別の翻訳に言及しており立体的な記述が理解を助ける。さらに、翻訳原本、その作者についても判明している限りは原文でも表示しているのが役立つ。それができたのも日本、香港など外国の研究の成果を取り入れたからだ。
- 16) 謝菊曾「《説部叢書》和《林訳小説》」「涵芬楼往事」『隨筆』第6集1980.2
- 17) 上海図書館編『中国近代現代叢書目録』香港・商務印書館分館1980.2
- 18) 鄒振環「商務印書館版“林訳小説”的魅力」『訳林旧踪』南昌・江西教育出版社2000.9
- 19) 鄒振環『20世紀上海翻訳出版与文化變遷』南寧・広西教育出版社2000.12
- 20) 陸昕「説《説部叢書》」『蔵書家』第3輯2001.6
- 21) 陸昕「從《説部叢書》談搜書所見」『閑話蔵書』北京・学苑出版社2005.8北京第3次印刷 所蔵鑑賞書系
- 22) 黄惲「也説《説部叢書》」『蠹痕散輯』上海世紀出版股份有限公司遠東出版社2008.2
- 23) 張人鳳氏のご教示に感謝します。劉徳隆「商務印書館与小説」は以下の書籍に収録されていたので購入した。張元濟研究会、張元濟圖書館編『張元濟研究論文集』北京・中国文史出版社2009.8 紀念張元濟先生誕辰140周年暨第三屆學術思想研討會論文集
- 24) 付建舟「談談《説部叢書》」『明清小説研究』2009年第3期（總第93期）2009発行月日不記
- 25) 付建舟「清末民初新小説廣告的文学史意義」『文学評論』2012年第6期 2012.11.15
- 26) 中村忠行「商務版『説部叢書』について 書誌学的なアプローチ」『野草』第27号

1981.4.20

- 27) 神田一三名で発表。「商務印書館版「説部叢書」の成立」『清末小説』第25号2002.12.1。のち樽本『商務印書館論集』2006収録
- 28) 鄒瑞玥「“説部叢書”的胸懷」袁進主編『中国近代文学編年史：以文学広告為中心（1872-1914）』北京大学出版社2013.5
- 29) 祝均宙「説部叢書」卓如、魯湘元主編『二十世紀中国文学編年（1900-1931）』石家莊・河北出版传媒集團、河北教育出版社2013.4
- 30) 陳大康著『中国近代小説編年史』全6冊北京・人民文学出版社2014.1
- 31) 以前のもののほかに次の資料を追加する。闕文文『晚清報刊上の翻譯小説』（濟南・齊魯書社2013.5。252、253頁）。『時報』光緒三十四（1908）年七月廿七日、八月十九日付けで商務印書館の広告あり。箱売りの宣伝だ。ただし、ふたつの広告に見える種類数と冊数は一致しない。理由は不明。

美華書館名称考

『清末小説から』第81-83号(2006.4.1-10.1)に連載。American Presbyterian Mission Pressが中国に創立した印刷所がある。マカオからはじまり、寧波をへて上海に落ち着いた。一般には美華書館の名称で知られる。ところが、それ以前のマカオから寧波では異なった名称を使用しているのだ。本稿は漢語名称を問題にする。中国での記述が混乱していることを引用しながら示しはじめた。あとからこまかい文献が出てきたので加筆している。つぎつぎ出てくるのには、はっきり言ってウンザリした。拾い出すときりがないと思う。先行論文を引用しているだけの文章もある。本来ならば無視をしてもいいだろう。だが、私の性格として目につくとつい収録してしまう。あまり触れる研究者もいないだろうから、あえて加筆した。本稿を読まれるばあい、その箇所はとばしてもらっても結構だ。

美華書館は、アヘン戦争後、アメリカ長老派教会が上海で経営していた印刷所である。最初マカオに設立された。寧波を経て、最終的には上海に落ち着く。1930年代まで存在した

本稿においては、美華書館という名称のみを問題にする。2度の改称情況、あるいは、それにまつわって私が抱く疑問についてのべたい。そのほかの事柄については、別に論じる機会があるだろう。

順序として、中国では、美華書館についてどのような研究があるのかを説明することからはじめよう。

1 中国における研究

上海の美華書館については、中国近代印刷史、あるいはキリスト教とのかかわりで言及されることが多い。商務印書館を創立した人々のなかの何人かは、美華書館で働いていた。ゆえに関連文献にその名前が必ずといっていいくらい出現する。ただし、こちらに入り込むと名称問題どころではなくなる。商務印書館については、必要と考えるもの以外は本稿では触れない。

一応の理解のためということで、とりあえず、誰もが引用する基本文献から見ていこう。文章名をかかげ、美華書館についての記述だけを取り出し（文献の頁数は該当する部分のみを示している）、それについて説明を加える。あらかじめいっておくが、中国において美華書館だけに的をしぼって論じた文章は、ほとんどない。

賀聖焄「三十五年来中国之印刷術」（莊俞、賀聖焄編『最近三十五年之中国教育』上海・商務印書館1931.9。176頁）

1844年、美国長老会はマカオに花華聖經書房を設立した。翌年、寧波に移転し美華書館と改称する。

骨子だけを示すと以上のようなになる。

美国長老会は、日本語に翻訳すれば「アメリカ長老派教会」である。漢語には、もともとの英文は示されてはいない。花華聖經書房、美華書館ともに名称が出てくるだけだ。概説という文章の性格を考えれば、説明がないのもやむを得ないことだろう。

1930年代のこの文献は、ほかに説明するものがないという理由で、引用されつづける。該文は、張静廬輯註『中国近代出版史料初編』（上海・上雑出版社1953.10）に収録された。権威をもつ文章として中国の研究者に利用されたという意味である。1960、70年代とこの研究分野ではほとんど空白の時代がつづいた*1。そう指摘しなければならないのは、不幸なことだ。専門論文をあげようとして、それがないことに気づく。あくまでも中国の研究界であることにご留意いただきたい。

それ以後に発表された美華書館に言及するいくつかの文献を紹介してみよう。

章錫琛「漫談商務印書館」(『文史資料選輯』第43輯1964.3/1980.12第二次印刷(日本影印) / (有刪節)『(1897-1987)商務印書館九十年 我和商務印書館』北京・商務印書館1987.1 / (選)宋原放主編、汪家熔輯注『中国出版史料・近代部分』第3卷 武漢・湖北教育出版社2004.10)

1964年が初出だからかなり早い。しかもその内容は、ある程度深いところまで記述している。なにしろ金港堂との合弁まで書かれているのだ。中国の文献では、これは珍しい部類にはいる。だが、文化大革命以前だから内部発行でしかなかった。外部には出てこなかったという意味だ。1980年代に再録されたが金港堂との合弁部分を含めて多くの箇所が削除されている。こちらを利用するばあいは、注意を要する。

美華書館に言及して1844年にマカオで創業し、原名は花華聖經書房だったこと、翌年寧波に移転し美華書館と改名したと書いている。あきらかに賀聖齋を踏襲する。

曹裕才「美華書館和商務印書館的淵源」(『商務印書館館史資料』之三十一 北京・商務印書館総編室編印1985.6.1。29頁)

この文章が掲載された刊行物は、タイプ印刷の内部発行である。外部に出ることとは、基本的でない。美華書館を題名にしているから特にとりあげる。

美華書館の創設を1892年とし、創立者は宋耀如だと書いている。この部分を見ただけで、怪しげな文章だとすぐわかるだろう。宋耀如(嘉樹)とは、かの有名な宋家姉妹の父親だ。チャーリー宋といったほうが通りがいいかもしれない。該文が美華書館としたのは、名称についての誤解に由来する、ということだけを指摘しておく。さすがに商務印書館の記念誌、たとえば、90周年誌、95周年誌、100周年誌などは、いずれも収録していない。掲載して公開する価値がないと判断されたい。その判断に私も賛成する。

1970年代と80年代にアメリカで出版された「宋家姉妹」ものの記述によって書かれた。宋耀如が、商務印書館を創設したというのも同類だ。こちらは、商務印書館関係者が即座に否定した。中国人の反応を見ると、アメリカの出版物については、それだけ気にしているということがわかっておもしろい。別の角度からい

えば、別稿の予告のつもりでくりかえすが、これらの誤解のもとには、名称問題が横たわっているのだ。

概説書は、通説を取り入れている。それを見れば、賀聖齋説の影響力がきわめて大きいことが理解できる。取り上げればきりが無い。大同小異でうんざりするすが、そういう現状だと認識するために手元のものだけをかかげる。くりかえしが多くなる。了解されたい。

張召奎 『中国出版史概要』(太原・山西人民出版社1985.8。182頁)

美華書館の前身は花華聖經書房という。1844年マカオで設立、のち寧波に移転し、1860年上海で美華書館と改称した。賀聖齋説そのままである。

柳毅 『中国的印刷術』(北京・科学普及出版社1987.6。253頁)

1844年美国長老会がマカオで花華聖經書房を設立し、1845年寧波に移転、華美書館と改名した。華美書館は、誤植だろう。

発表順にいうと次はマキントッシュ*²(Gilbert McIntosh)の漢訳になる。こちらは原資料の翻訳だから、文献の質が異なる。

G・麦金托什著、方麗訳、車茂豊校「美国長老会書館(美華書館)紀事」(『出版史料』1987年第4期(総第10期)1987.12。11-12頁)

俗に『五十年史』(*The Mission Press in China, Being a Jubilee Retrospect of the American Presbyterian Mission Press, with Sketches of Other Mission Press in China, as well as Accounts of the Bible and Tract Societies at Work in China*, Shanghai, American Presbyterian Mission Press, 1895。英文未見)と称される文章の関係部分の漢訳である*³。

漢訳者の前言には、次のように書かれている(本稿の主旨にかかわるので名称は漢語のままを使用する)。

美国長老会書館の前身は花華經書房であり、1844年、マカオに創設された。1860年に上海に移転し美華書館と改名する。『在華教会書館』の前4章から翻訳した、という。

つまり、The Mission Press を教会書館に、American Presbyterian Mission

Press (APMP と略称。ただし引用文は除く) を美国長老会書館と翻訳していることがわかる。歴史的には、もともとは花華聖經書房であり、また美華書館に改称されたというわけだ。

「書館」は、書店を意味するばあいもあるが、ここでは印刷所を示す。「印書館」に同じ。中国では、出版社は印刷所を兼ねていた。商務印書館は、商業関係の印刷所(印書館)からはじまって、のちに出版社になったのは周知のことだろう。

リチャード・コウルが、1844年2月23日、マカオに到着した。1845年、寧波に移転し「花華聖經書房 The Chinese and American Holy Classic Book Establishment」と改称する。この漢訳文は、人名には英語原文を併記している。今示したように、花華聖經書房にも英語原文をそえたというわけ。1860年、上海へ移転した。この上海移転で美華書館に改称したことになる。

マキントッシュの文章は、賀聖籙論文の誤りを正すはずのものだ。

本稿で問題にする名称だから、ここでまとめる。すなわち、1844年花華聖經書房 1860年美華書館という流れだ。

たったそれだけのことが、と思われるかもしれない。ところが、それだけで終わらないのだ。

本題に入る前に、もうすこし関連文献を紹介する。マキントッシュ論文の漢訳が公表されたあとも、中国ではあいまいな記述が続く。いちど権威となった賀聖籙の文章は、その地位が揺らぐことはない。あるいは、あの広い中国の学界においては、情報が伝わる速度が遅いということができるかもしれない。

まったくの勘違いという例もある。

郁為瑾「商務印書館与基督教会的关系」(『商務印書館館史資料』之四十 北京・商務印書館総編室編印1988.3.3)

広学会と同文書会の名前を出して、それが美華書館に改名したという(16頁)。キリスト教の宣教師らが設立した印刷組織とアメリカ長老派教会の印刷所を取り違えている。

ほかに概説書の中で主要なものを参考までにあげておこう。

張秀民『中国印刷史』（上海人民出版社1989.9。584頁）

1844年、マカオに花華聖經書房を開設、翌年、寧波に移転、美華書館と改名した。

中国の印刷の歴史は長い。数多いキリスト教会の印刷所のひとつである美華書館には、ページを割いてもこれくらいのものだ。しかし、マキントッシュの記述を取り入れているところは、さすがだ。

韓琦「十九世紀上半葉西方人对中文活字之研製」（上海新四軍歴史研究会印刷印鈔分会編『活字印刷源流』北京・印刷工業出版社1990.8。273-274頁）

韓琦は、次のように書いている。「アメリカの中国における最も重要な印刷組織は美華書館であり、また花華聖經書房とも称する」（273頁）。「1860年、美華書館は上海に移転した。1849年にもベルリンから活字を購入した」（274頁）

上海移転を1860年とするのはいい。興味深いのは、韓琦はこの時点で、賀聖翬とも違う書き方をしていることだ。なにしろ最初から美華書館と名乗っていたと考えている。後に韓は大きな発見をするから、その彼でさえ、はじめはその程度の認識であったことを知るのだ。誰でもがその当時の定説から出発する。私は批判しているわけではない。

何歩雲「中国活字小史」（前出『活字印刷源流』所収。74頁）

何歩雲の該当論文は、『出版史料』1991年第4期（総第26期1991.12）に転載された。さらに、その抄録が前出『中国出版史料・近代部分』第3巻に収録されている。中国では、一般にあって、転載されるほどの価値をそなえた論文である、という認識だ。

何歩雲が説明するのは、こうだ。

1844年、美国長老会はマカオで花華聖經書房を設立した。1845年、花華聖經書房は寧波に移転し美華書館と改名した。

美華書館と改称したのは1845年だとし、マキントッシュの説明と一致しない。また、何は、上海に移転したのは1859年だとする。浄雨「清代印刷史小紀」に「1859年、アメリカの宣教師が上海に美華書館を設立し（該館は、1845年寧波に設立された）……」（355頁）*4と書かれているのを取り入れたのだろう。この記述は、

2004年の『中国出版史料・近代部分』第3巻でも訂正されてはいない。

同氏「美華書館」(『中国大百科全書』新聞出版 北京・中国大百科全書出版社 1990.12。213頁)でも同じだ。

朱聯保『近現代上海出版業印象記』(上海・学林出版社1993.2。294頁)

前身はマカオの花華聖經書房で、1845年寧波に移転、美華書館と改名する。
1895^{ママ}年上海に移転した。

従来^{ママ}の通説をくり返しているだけ。上海移転を「1895年」とするのは、「1859年」の誤植だろう。

この本の出版は1993年だ。しかし、著者は1988年に逝去しているので内容が通説にしたがっているのも無理はない。

以上の他にも言及するものはあるかもしれない。取りこぼしがあればご教示を願う。

さきに進もう。

1990年代ともなれば、さすがにマキントッシュの説明も定着してくる。

宋原放、李白堅『中国出版史』(北京・中国書籍出版社1991.6。182頁)

1844年、美国長老会がマカオに花華聖經書房を設立し、翌年、寧波に移転。
1860年、上海に移り美華書館と改名した。

例外もある。次の吉少甫は、昔ながらの記述をくりかえすのだ。古いの新しいの、と混在するわけだ。

吉少甫主編『中国出版簡史』(上海・学林出版社1991.11。266頁)

1844年、美国基督教(新教)長老会派がマカオに花華聖經書房を開設した。
1845年に寧波へ移転し美華書館と改名、1860年上海へ移った。

美華書館へと改名する時期が旧説のままだ。といっても、吉少甫は、「基督教《聖經》的翻譯出版」(『出版史料』1987年第4期(総第10期)1987.12)において、「美華書館の前身は花華聖經書房といい、……」(26頁)などと書いていたのだから、少し詳しくなっているのは事実なのだが。

阮仁沢、高振農主編『上海宗教史』(上海人民出版社1992.7/1993.1第2次印刷。815頁)

美華書館を説明してつぎのように書いている。

「美華書館(American Presbyterian Mission Press)は英文を直訳すれば美国長老会伝教印書館となる。最初、花華聖經書房(花は花旗、つまりアメリカを指す)と称し、1844年1月23日、マカオに創設された。最初の責任者はリチャード・コウルである。1年後、寧波に移転し、……」

マカオに創設された年月日を1844年1月23日とするのは、マキントッシュの『六十年史』である。ならば、該書は、漢訳されていない英文原書に拠っていると考える。1860年年末に美華書館は上海に移った、と書くのも同様だろう。これでは、美華書館に改称したのは1860年以前からのことになる。宗教史の立場からいえば、印刷所の名称がいつどのように変化したなどという、いわば「瑣末な」ことがらは問題ではない。しかし、私にとってはその「瑣末な」ことが重要なのだ。

『出版詞典』(上海辞書出版社1992.12。522、523頁)

花華聖經書房の項目を立てる。1844年マカオに成立。原名を長老会書館といい、のちに寧波へ移転し花華聖經書房と改める。1860年上海へ移転後、さらに美華書館に改める。

「原名を長老会書館」とする部分は、マキントッシュの漢訳にもとづいている。美華書館の項目では、1860年上海に成立、前身は花華聖經書房だという。

つまり、長老会書館 花華聖經書房 美華書館という変化があったという把握のしかただ。英語と漢語の混同があるようだが、これはひとつの見解である。

郭衛東主編『近代外国在華文化機構綜録』(上海人民出版社1993.12。310頁)

1860年12月、寧波の花華聖經書房が上海に移転し(美華書館に)改称。

以上、すこしの文献を見るだけで、もう問題が生じている。

1844年、マカオに設立されたのは長老会書館なのか、それとも花華聖經書房なのか。寧波に移転してからが花華聖經書房だと考えるべきか。

一致している箇所はある。引用に引用をかさねて花華聖經書房とする。研究は

多数決ではない。私はいつもそういう。研究者全員が一致していても、新資料の出現によって通説は一瞬にくつがえることがある。つぎに述べるが、該書房も、その好例なのだ。

1860年、上海に移転してから美華書館と称した。これにしても、1860年以前から美華書館であったという文献があるのも上に見てきた。

途中であるが、文献の補充をする。私の言及しなかった書籍を算文生氏よりご教示いただいた。ついでにいくつかの文章を補っておきたい。発行年がさかのぼるが、ご了解のほどをよろしく。

陳旭麓、方詩銘、魏建猶主編『中国近代史詞典』(上海辞書出版社1982.10。535頁)

前身は花華聖經書房。1844年にマカオで設立。のち寧波へ移り、1860年上海へ移転し美華書館と改名した。

賀聖鼐の記述をそのまま受け継いでいることがわかる。中国歴史大辞典・清史卷編纂委員会編『中国歴史大辞典・清史下』(上海辞書出版社1992.10。556頁)も同様だ。

そのほかのものはまとめる。いずれも、1844年マカオで花華聖經書房 1945年寧波 1860年美華書館に改称、と説明する。部分的に異なっているが、基本は同じだ。李華興主編『近代中国百年史辞典』(杭州・浙江人民出版社1987.10。510頁)、湯志鈞主編『近代上海大事記』(上海辞書出版社1989.5。142頁)、上海市地方志辦公室編『上海辞典』(上海社会科学院出版社1989.7。411頁)。中国近代現代出版史編纂組編『中国近代現代出版史學術討論会文集』(北京・中国書籍出版社1990.8)に収録された3本の論文。すなわち、葉再生「現代印刷出版技術的伝入与早期的基督教出版社」(54頁)、張樹棟「近代印刷術的伝入和我国民族印刷業の崛起」(107頁。1845年寧波に移転し美華書館と改称)、張奇「1840-1900新教在华出版書報活動初探」(150頁。改称には触れない)。張仲礼主編『近代上海城市研究』(上海人民出版社1990.12。909頁)。

大同小異の記述だとくりかえしいという。いささか食傷気味である。以上の著者たちにすれば、文章の主題とは関係のない部分で、名前を挙げられるのは迷惑かもしれない。先行論文を引用してどこが悪い、といわれそう。私は、批判しているのではない。似たりよったりの文章が生産されている状況があるということだけをいいたいのだ。つまり、新しく資料を提出する研究者は、まれだという

意味でもある。

2 新しい展開

美華書館研究に新しい見解を加えたのは中国人研究者だった。

熊月之『西学東漸与晚清社会』（上海人民出版社1994.8。169、481頁）

2カ所に記述がある。ひとつは、寧波でのこと。別のひとつは上海の美華書館だ。概要を示す。

1845年、美国長老会伝教士が寧波に印刷所を建設した。鍵となる人物はコウルである。彼は印刷業務に詳しく、1844年2月香港に到着し、同年マカオに移る。1845年7月19日、コウル夫妻は印刷機器を携えて寧波に到着すると、1ヵ月あまりの準備をへて9月1日に印刷所を正式に開始した。この印刷所は「華花聖經書房 The Chinese and American Holy Class^{ママ} Book Establishment」という。「華」は中国を、「花」は花旗国、すなわちアメリカである。1860年、上海に移転し美華書館と改称した。

熊月之は、華花聖經書房に注をつけて説明する。筆者（熊月之）が見たこの印刷所の出版物は、すべて「華花聖經書房」と署名している。英語名称の順序も、中国、アメリカである、と。それまで、研究者の全員がマキントッシュを信じて「花華」と書かいていた。それを、熊月之は「華花」と転倒させたのである。注目すべきだろう。

出版物の原物で確認したというのだ。ここには明記していないが別の文献によると、熊月之は、オックスフォード大学ボドレアン図書館の蔵書を閲覧したらしい。

寧波での正式開業を9月1日とするのも新しい。資料にもとづいているとは思うのだが、残念ながらその典拠を示さない。

もうひとつの場所では、美華書館の前身は、寧波華花聖經書房であり、1860年に上海東門外へ移転、のち北京路に移る、とのべる（熊月之、張敏著『上海通史』第6巻晚清文化（上海人民出版社1999.9。103頁ほか）にも上の文章を要約している）。

熊月之は、「新伝教士早期中文書刊出版史研究」（初出未見^{*5}）において上述の

新見解を公表している。それを紹介するのは、万啓盈「中国近代印刷業発展八題」(『中国印刷史学術研究会文集』北京・印刷工業出版社1996.5。87頁)だ。

華花聖經書房については、次に述べる韓琦による記述がある。

韓琦は、新発見に別の資料を加えて紹介する。その発表の場所は日本だというのが、私に隔世の感をいだかせる。中国「文化大革命」以後の交流断絶時期をへて、ようやく日中の研究交流が実現しているという意味だ。

韓琦「19世紀における漢字分合活字の開発史」(『タイポグラフィックス・ティ』第165号 1994.11.10。訳者不明)

訳文の記述から関係部分を引用する。

「それら伝道印刷所の中で比較的早く開設されたのが、マカオのアメリカ長老会の「華英校書房」であった」7頁

「筆者(注：韓琦)は最近北京図書館のマイクロフィルムの中からアメリカ長老会印刷所華英校書房が1844年マカオで出版した分合活字の見本帳『新鑄華英鉛印』(図8)(註18)を見つけた」9頁

「図8」として、北京図書館蔵マイクロフィルムによったらしい該書の表紙を掲げる。一部破れている。アラビア風といおうか門構えの意匠に、上方に横書きで「華英校書房」、右から「道光二十四年」、中央に「新鑄華英鉛印」、左下に「印蔵香山澳門」と印刷してある。道光二十四年は、1844年に当る。

「註18」は、英文書名を示す。すなわち、“Specimen of the Chinese type belonging to the Chinese Mission of the Board of Foreign Mission^{ママ} of the Presbyterian Church in the U.S.A.”, Macao, 1844 である。「ママ」とつけたのは、原書を所蔵する図書館の表記が“Missions”となっているからだ。私は、原書を見ていないからそのままにしておく(後述)。

華英校書房という名称を提出したのは、韓琦が最初だと思う。

もう少し、引用を続ける。

「1845年印刷所はマカオから寧波に移り、「華花聖經書房」と改称した」12頁
従来の「花華聖經書房」とは異なる「華花聖經書房」を提出している。熊月之と同じ発見だ。なぜ、「花華」を「華花」に変更したのか、韓琦はその理由を述

べない。説明しないが、出している『耶穌教要理問答』*6および『地球説略』という書籍にその表示があるらしい。

名称の変遷をまとめて次のように書いている。

「マカオのアメリカ長老会印刷所華英校書房（1844年） 寧波華花聖經書房（1845年） 上海美華書館（1860年頃）となる」15頁

私は、上の書き方を見て「アメリカ長老会印刷所」すなわち APMP の漢訳が「華英校書房」だと理解した。これが、私が抱く違和感のもとだったかもしれない。

韓琦の該文は、次の書物に吸収された。

張秀民、韓琦『中国活字印刷史』（北京・中国書籍出版社1998.4）

前出『新鑄華英鉛印』の表紙を示し、それに添えて「澳門美国長老会印刷所“華英校書房”印，道光二十四年（1844年）」（178頁）とある。その注2には、原書名を *Specimen of the Chinese type belonging to the Chinese Mission of the Board of Foreign Missions of the Presbyterian Church in the U.S.A., Macao, 1844* とする。前出論文で「ママ」としておいた箇所は、“Missions”が正しいのだろう。

さらに、小宮山の提供になる『耶穌教要理問答』の扉を掲げる（181頁）。これが前出論文に掲載されるはずであった「図11」にちがいない。見れば、右側に「大清道光二十九年華花聖經書房寧波」と印刷されている。「華花」部分は、左右に併記だ。もうひとつの『地球説略』の表紙も日本での重版本とならべて掲げているのが興味深い（182頁）。こちらは、「寧波華花聖經書房刊 / 1856」と読める。

ついでにいうならば、韓琦は触れていないが、ほかにも『古今万国綱鑑録』（寧波・華花聖經書房1850。原本未見）があるらしい。

今まで誰も疑っていなかった花華聖經書房ではなく、華花聖經書房だとは驚く。当事者であったマキントッシュが「花華聖經書房 The Chinese and American Holy Classic Book Establishment」と漢字を添えていくら説明したとしても、原物で示されているのだからこれ以上の説得力はなからう。

ここでも、以上をまとめて「澳門美国長老会印刷所“華英校書房”（1844年） 寧波華花聖經書房（1845年） 上海美華書館（約1860年）」（185頁）と書く。私がか

りかえして引用するのは、これが新しい発見だと考えるからだ。

韓琦の発見をいち早く紹介したのは、小宮山だった。前後するがご了承ください。

小宮山博史「分合活字 Divisible type 史稿」(『(季刊)印刷史研究』第1号1995.10.1)

主題は、分合活字だ。韓琦論文が日本で発表されたのもその関係らしい。説明によると、漢字の偏旁冠脚を組み合わせると1字の漢字活字をつくる方法をいう。活字印刷の歴史における試行錯誤のひとつだと考えられる。手間がかかってしかたがなからう。しかも、できあがりひとつの漢字として均衡がとれているとは限らない。現在では廃れてしまった理由だと思われる。

小宮山は、『新鑄華英鉛印』の英文原題を翻訳して『アメリカ合州国長老会海外伝道会議の中国伝道会が所有する漢字活字見本帳』とする(10頁)。さらに、名称については、「American Presbyterian Mission Press の中国名が「^{ママ}華花聖經書房」(寧波)、^{ママ}「美華書館」(上海)の他に、澳門では「華英校書房」と称していたことがわかったのである」(10頁)と説明している。

私は、この論文を読んでいた。さらに、同氏著「明朝体、日本への伝播と改刻」(印刷紙研究会編『本と活字の歴史事典』柏書房2000.6.5)が出た。私は、該書236頁によって以前の記述を訂正したのである(樽本『初期商務印書館研究(増補版)』42頁)。

范慕韓主編『中国印刷近代史(初稿)』(北京・印刷工業出版社1995.11)

こちらには「華花聖經書房および美華書館」という項目がある。

「1844年2月、コウルが責任を持ってアメリカから長老会書館をマカオに移した*7。中国到着後、華花聖經書房(The Chinese and American Holy Classic Book Establishment)と名付け、翌年、寧波へ、1860年上海へ移転し美華書館と改名した。そのアメリカでの名称は一貫して American Presbyterian Mission Press という。のち、同文書会の顧客はずっと「長老会書館」とよんでいた」76頁

「長老会書館」と顧客から呼ばれていた、という箇所には私は興味を感じる(後述)。また、范慕韓は、華花聖經書房とマキントッシュの記録した花華聖經書房との違いに注目した。

彼は、まず、賀聖鼐が1931年に書いた説明が60年余にわたって中国の研究者によって引用されつづけたことをいう。誰しもが気づく事実なのだ。ついで、熊月之がオックスフォード大学ボドレアン図書館の蔵書からもたらした書影により、1849年の『天文問答』（78頁に書影をかかげる）、1850年の『平安通書』、1856年の『地球説略』がすべて「華花聖經書房寧波」と表示していることを指摘する。その結果は、以前の通説を否定することになるのも当然だろう。すなわち、1．華花聖經書房であって花華聖經書房ではないこと、2．印刷所は1856年以前寧波にあったときはまだ美華書館と改名していない、ということだ（77頁）。奇しくも日本の小宮山とほぼ同じ結論を得た。

該文に新しく掲げられた1849年の『天文問答』は、書影を見る限り『耶穌教要理問答』の表紙と同じ意匠であることがわかる。

范慕韓が、華花聖經書房についてどのような解釈をしているのか翻訳して次に示す。

「長老派教会印刷所（原文：長老会書館）がマカオ、寧波にあった時期に「花華聖經書房」とする印刷物を出しているのを今まで見たことはない。だが、マキントッシュが1895年に書いた *The Mission Press in China*（中国における教会印刷所）という英文原書第10頁には *The Chinese and American Holy Classic Book Establishment* の後ろに漢字で「花華聖經書房」と注をつけている。そこで、長老派教会印刷所はそのころ「華花聖經書房」あるいは「花華聖經書房」というふたつの名称を併用したことがあったのかどうか、疑問が生じるのである」（77頁）

范慕韓は、韓琦あるいは小宮山の提出した華英校書房には気づいていないようだ。だが、マキントッシュの記述を尊重しつつ、当時の出版物を複写であれ手元におきながら、その記述の不一致を問題にしている。ふたつの可能性があるとし、結論を留保しているといってもいい。どちらか一方を簡単に捨て去っていないところに范慕韓の慎重な研究態度をみることができる。

王立新『美国传教士与晚清中国現代化』（天津人民出版社1997.3。306頁）

1844年マカオに設立されたのが花華聖經書房だと書いている。マキントッシュを参考資料にあげているが、あるべきところに美華書館の名前が見えない。

張樹棟、龐多益、鄭如斯等著『中華印刷通史』（北京・印刷工業出版社1999.9）

大部な印刷史だ。分担執筆だからか美華書館についての記述にブレがある。要点だけを書き抜く。

1844年、マカオに花華聖經書房を設立。1845年、寧波に移転して美華書館と改名。1859年、上海へ移転（435頁）。従来の説明をくりかえす。ところが、463頁の一覧表では、「美華書館 / 1860年創設 / ギャンブル主宰 / 華花聖經書房が寧波より上海に移転後美華書館と改名」と説明する。「華花」と書いているところから新説を取り入れていることがわかる。また、467頁において「美華書館」の項目を立てて特に説明する。前身は「長老会書館」であり、1844年マカオに移って華花聖經書房と改称、翌年寧波へ移転する。1860年寧波から上海へ、美華書館と改称した。意見の調整はなされなかったらしい。

『上海掌故辞典』（上海辞書出版社1999.12/2000.5第2次印刷。328-329頁）

美国基督教会が寧波に「花華聖經書房」を設立し、1860年、それを上海に移して「美華書館 Presbyterian Mission Press」と改称した。最新の研究成果は盛り込まれていない。中国ではどうしても時間的な落差が生じるらしい。APMP と美華書館の関係が把握できていないこともわかる。また、夏瑞芳（粹芳）が美華書館で働いていたと誤解もしている。

鄒振環『晚清西方地理学在中国 以1815至1911年西方地理学訳著的伝播与影響为中心』（上海古籍出版社2000.4。85-86、356頁）

書名が示すように西洋の地理書がどのように漢訳されたかの研究だ。書籍を確認しながら執筆しているのが鄒振環論文の一貫した特長である。以前から私が彼の著作に注目する理由だ。

その鄒振環が、奇妙な書き方をしている。例の華花聖經書房についてだ。1844年、長老会はマカオで花華聖經書房（あるいは華花聖經書房、華花書房とも称する）を創設した（85-86頁）。

1844年マカオ花華聖經書房説は、固く信じられている。韓琦が発見した華英校

書房など、どこにもでてこない。

附録にある『地球説略』の発行元を寧波華花書房1856年版としているのが目につく。書影で見れば、あきらかに華花聖經書房だから、名称が一致しない。華花書房は、どこから出てきたのか。私はおかしいと感じる。鄒は、実物で確認したのではないのか。確認したから「あるいは華花聖經書房、華花書房とも称する」と書いたのか。疑問としておく。

姚民権、羅偉虹『中国基督教簡史』（北京・宗教文化出版社2000.11初版未見/2004.11第3次印刷。73-75頁）

初版の発行年からいえば、この順序になる。ただし、私が見たのは後刷り本で、2006年になってからのことだ。

姚民権らは、該書において「長老会的美華^{ママ}印書館」と題して紙幅を割いている。誤植ではない、1カ所を除いて、美華印書館で通す。

その冒頭は、こうだ。「美華印書館は英語を直訳すると美国長老会伝教印書館としなければならない」73頁

著者たちの認識では、APMPの漢語通称が美華印書館だということになる。勘違いしているらしい。

はじめは花華書房と称し、1844年初にマカオに創設された。1年後、寧波へ移転し、1860年に上海へ再び移転した、と説明する。ここでも花華書房が出てくる。

さらに奇妙なのは、商務印書館創設にかかわる部分だ。ギャンブルが寧波から上海に連れてきた一部の職人は、彼のもとで少なからぬ技能を学び、後に資金を集めて中国最初の民族資本である商務印書館を設立した、書く(73頁)。これは事実とは異なる。商務印書館を創設した夏瑞芳らは、ギャンブルと一緒に寧波から上海へ来たわけではない。姚民権らは、風説を無批判に取り入れているだけではないのか。

中国のキリスト教関係者には、それなりの基礎資料があるのかと思えば、そうではなさそうだ。紹介すればするほど混乱状態であることが判明する。

《上海出版志》編纂委員会編『上海出版志』（上海社会科学院出版社2000.12。223頁）

マキントッシュ論文をふまえているだけ。

葉再生『中国近代現代出版通史』第1巻（北京・華文出版社2002.1。96-97頁）

1844年2月、マカオに花華聖經書房（The Chinese and American Holy Classic Book Establishment）を設立した。1845年、寧波に移転し、1859-60年の間に上海へ移り美華書館（The American Presbyterian Mission Press）と改名した。

あいまいな部分を残してはいるが、英語を併記し先行文献を吸収して書かれていることがわかる。

張樹棟、龐多益、鄭如斯『簡明中華印刷通史』（桂林・広西師範大学出版社2004.8）

1999年版を簡明にした。1844年マカオ華花聖經書房説は、本書においてもくりかえされる（199頁）。ただ、「華花」としたところは新しい。新旧混用か。また、美華書館の項目において次のように説明する。「（美華書館の）前身は美国基督教長老会の「長老会書館」である。1844年2月、アメリカの宣教師コウルが中国マカオに移って「華花聖經書房」と改称した。翌年、コウルの提案によって華花聖經書房を寧波に移転した。1860年、さらに寧波より上海に移り「美華書館」と改名する」219頁

マキントッシュの漢訳を取り入れながら、一部を先行論文によって訂正した解説となっている。ここでも韓琦説は、無視される。いくつかの文章を以下ではまとめて紹介する。

最近出版された文庸、楽峰、王継武主編『基督教詞典（修訂版）』（北京・商務印書館2005.2。330頁）では、こう説明している。1844年マカオに設立し、のち寧波に移転した。1860年に上海へ移り美華書館と改名する。この部分だけを見れば、正しい。しかし、華英校書房に触れない。前身は「美華^マ聖經書房」だと書いている。なんの根拠もなく「華花」を「美華」に書き換えているのにはがっかりする。

方華文『20世紀中国翻訳史』（西安・西北大学出版社2005.2。60頁）は、アメリカ長老会が1860年に上海で創設したとだけいう。ここでも、その部分のみは間違っていない。だが、それでは歴史もなにもあったものではない。

蒋曉麗『中国近代大衆伝媒与中国近代文学』（成都・四川出版集团巴蜀書社2005.6。

130頁)は、あいかわらず「花華聖經書房」と表記する。

一方で、熊月之論文を取り入れた著作も公表された。李偉『中国近代翻訳史』(済南・齊魯書社2005.8。140-144頁)だ。1844年マカオ創設、1945年寧波に移って華花聖經書房、1860年に上海移転で美華書館と改称した。そこまではよろしい。だが、該書も、残念ながらマカオでの名称華英校書房に触れない。

李仁淵『晚清的新式伝播媒体与知識份子：以報刊出版為中心的討論』(台湾・稻郷出版社2005.12 史学叢書系列68。50-51頁)は、該当部分を一覧表にみることができる。1845年、美国長老会伝教士コウルが寧波で華花聖經書房を設立した。1860年に上海へ移転し美華書館に改名したとする。1844年のマカオがなくなってしまった。最新の出版物だからといって、正確に記述しているとは限らない。

以上を見れば、中国では記述が以前とおなじように混沌としているといわざるをえない。

マカオで華英校書房、寧波に移り華花聖經書房に改め、上海に移転して再度改称して美華書館となった。この大筋は、中国人研究者の多くからは支持されていない。というよりも、華英校書房の存在が知られていない。問題であると私は思う。

出版史、あるいはキリスト教研究の一部だということはある。文学研究者にとっては、関係のない事柄か。美華書館だけを特にとりあげる意味を見いだせないのかもしれない。

しかし、日本では、美華書館を主題とする研究が発表されている。日本における活版印刷の発展に、美華書館の存在が大きく影響しているからだ。

美華書館をおりこんだ小宮山の論文は、前出『本と活字の歴史事典』に吸収されている。

ここでは、宮坂弥代生の論文2本をまとめて紹介する。

宮坂弥代生「美華書館に関する歴史的考察 史料紹介をかねて」(中央大学『大学院年報』第4号総合政策研究科篇2001.2.20)

「マカオ時代のAmerican Presbyterian Mission Press 美華書館前史 その1」(明治学院大学キリスト教研究所『紀要』第36号2004.1.20)

宮坂は、新しい資料を発掘しながら美華書館をめぐる問題を整理して以下のよ

うに結論づける（本稿に關係する箇所だけを抜き書きにするのでご了承いただきたい）。

1844年2月23日、マカオにて華英校書房として開設

1845年7月19日、寧波に移転、華花聖經書房と改称

1860年12月、上海に移転、美華書館と改称

月日までが記入されるほどの詳細さである。研究の深化を思わずにはいられない。

このように詳しい記述を目にすると、問題はすべて解決しているかのように見える。だが、私が問題にしたいのは、華英校書房、華花聖經書房、美華書館という名称そのものだ。どこから、これらの漢語がでてくるのか。

ここで少し脇道にはいる。宮坂論文に関連して、名称問題とは違うことをつけ加えたい。

宮坂は、1937年頃に出版された新資料を提出した。それによって、美華書館の歴代責任者15名が明らかになった。美華書館廃業時の責任者は、クラレンス・ダグラス（Clarence W. Douglass）だと指摘したのは、注目すべきだ。

だが、私の手元にある次の書籍の説明とは、すこし異なる。

D. MacGILLIVRAY(Ed.) “A CENTURY OF PROTESTANT MISSION IN CHINA(1807-1907)” SHANGHAI: PRINTED AT THE AMERICAN PRESBYTERIAN MISSION PRESS, 1907

貴重だと思うのは、これに、APMP の最高責任者名がまとめて掲載されているからだ（636頁）。

a list of the Superintendents:

R. Cole, 1844-1846.

Mr. Loomis and Dr. McCartee, 1847-1848.

Mr. Coulter, 1849-1852.

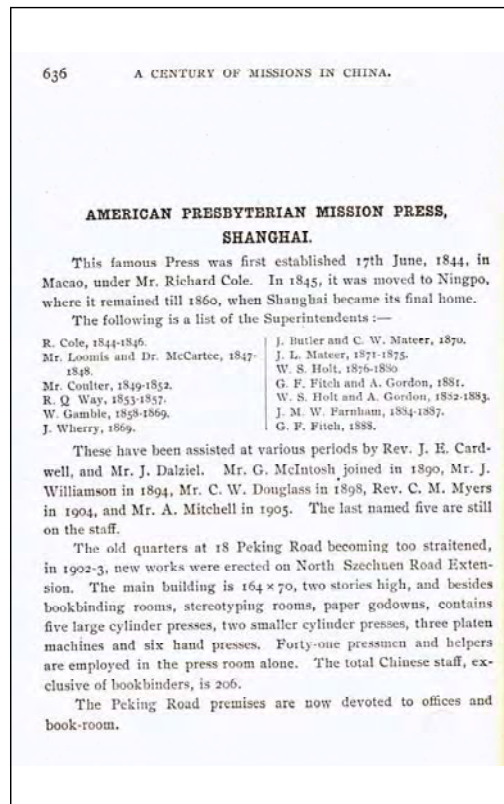
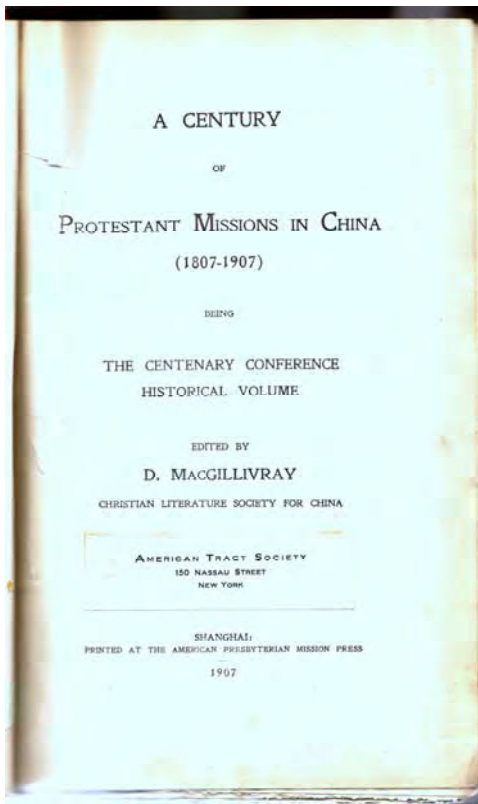
R. Q. Way, 1853-1857.

W. Gamble, 1858-1869.

J. Wherry, 1869.

J. Butler and C. W. Mateer, 1870.

- J. L. Mateer, 1871-1875.
 W. S. Holt, 1876-1880.
 G. F. Fitch and A. Gordon, 1881.
 W. S. Holt and A. Gordon, 1882-1883.
 J. M. W. Farnham, 1884-1887.
 G. F. Fitch, 1888.



名前の後ろに在任期間を明示しているのが参考になる。これほど詳細な資料は、今まで私は見たことがない。

日本に活字の製造法を伝えた人物としてウィリアム・ギャンブル William Gamble (日本ではガンブルと呼びならわす) が有名だ。ギャンブルは第5代責任者であった、というのが従来の説明である。宮坂は1937年頃の文献により、それをくつがえして第6代目であると指摘した。

しかし、上の一覧表を見てほしい。最高責任者は、ふたりが兼務していた時期もある。また、重任している人もいることがわかるのだ。数えれば、ギャンブルは、やはり第5代目なのである。

さらに、彼らの支援者として以下の名前があがっている。原文を引用しよう。

These have been assisted at various periods by Rev. J. E. Cardwell, and Mr. J. Dalziel. Mr. G. McIntosh joined in 1890, Mr. J. Williamson in 1894, Mr. C. W. Douglass in 1898, Rev. C. M. Myers in 1904, and Mr. A. Mitchell in 1905. The last named five are still on the staff.

後ろの5人というのが、つづく最高責任者であったようだ。年数は着任の年を示しているのだろう。ダグラス以後にも、何人かが責任者の任にあったことがわかる。

この文献は、中国における印刷所設立について、つぎのように記述する。「この有名な印刷所は、リチャード・コウルのもとで、1844年6月17日、最初にマカオで設立された。This famous Press was first established 17th June, 1844, in Macao, under Mr. Richard Cole.」1845年、寧波に移転し1860年まで維持され、上海が終焉の地となったという解説である。

マカオにおける印刷所設立の年月日を1844年6月17日としている箇所は、特に興味深い。

今までは、コウルのマカオ到着の日付をもって印刷所の開始としていた。それも、マキントッシュが1月23日と2月23日の2種類を記録していたから迷わされる。宮坂は、別の資料によって「1844年2月23日が正しい」と結論してこの問題を解決した。

コウルのマカオ到着は、2月23日かもしれない。だが、マカオ到着日、即印刷所の設立だ、と認定するのは無理があるのではないか。マカオ到着から印刷所の設立準備に約4ヵ月弱の時間がかかったと考えればよい。マカオにおけるAPMPの設立は、上に見える「6月17日」というのが合理的な理解だと考える。

ただし、6月17日が特別な意味をもっているかどうかはわからない。当時の中

国は旧暦だから道光二十四年五月初二日にあたる。意味のない日付なのか、あるいはキリスト教のなにかの記念日に重ねているのか。

アメリカの研究論文では、以下のものだけを紹介する。

CHRISTOPHER A. REED GUTENBERG IN SHANGHAI:CHINESE PRINT CAPITALISM,1876-1937 (『谷騰堡在上海：中国印刷資本業的發展一八七六 - 一九三七年』)

HONOLULU,UNIVERSITY OF HAWAII PRESS, 2004/又、TRONTO, UBC PRESS, 2004

リードは、本書において美華書館の変遷については簡単にしか説明していない。たとえば、注65で次のように書いている。

The American Presbyterian Mission Press was called Huahua shengjing shufang (Huahua Bible Publishers) when it was located in Macao, but it changed its Chinese name to the more widely recognized Meihua shuguan after it moved to Ningbo in 1845. p.306

アメリカ長老派教会印刷所は、マカオでは“Huahua shengjing shufang”と呼ばれていたとする。だが、漢字を示さないから Huahua が花華かあるいは華花なのか、区別がつかない。華と花は漢語では同音で声調だけが異なるからだ。さらに、1845年寧波に移転してから美華書館と改名したという。古い知識のままであることがわかる。

いくつかの説明を見てきて、マカオ・華英校書房 寧波・華花聖經書房（花華聖經書房） 上海・美華書館と変遷してきたことがわかる。基本はそれで正しいのだと私も思う。ただし、漢語の出現のしかたが、どこかしっかりとこない。APMP と漢語のそれぞれの名称が結びつきにくいと感じる。

3 名称の問題点

私の疑問をくりかえし述べておく。

華英校書房、華花聖經書房（花華聖經書房）という名称は、発行元である

APMP とは直接につながらないのではないか。美華書館という名称も APMP から離れて大胆に簡略化したかたちではある。

私が漢語名称について覚える違和感は、今から考えれば、それらが APMP の漢訳だと理解していたのが理由だった。

華英校書房から検討する。

華英校書房

もういちど張秀民、韓琦『中国活字印刷史』の説明を思い出してみよう。

『新鑄華英鉛印』の書影を説明して「澳門美国長老会印刷所“華英校書房”印，道光二十四年（1844年）」とする（178頁）。原書名は *Specimen of the Chinese type belonging to the Chinese Mission of the Board of Foreign Missions of the Presbyterian Church in the U.S.A., Macao, 1844* だという記述だ。

「華英校書房」と印刷されているのは否定しようのない事実である。写真を見ればわかる。私は、それを疑っているわけではない。華英校書房が、この漢字見本帳の発行元、すなわち APMP（韓琦の書いている美国長老会印刷所）の漢訳名だと私は理解したため、落ち着いた悪さを感じたのだ。

『新鑄華英鉛印』は、分合活字の見本帳であることはすでに触れた。これをもとにして分合活字を実際に組み合わせた見本帳が別に発行されているという。鈴木広光が「ヨーロッパ人による漢字活字の開発 その歴史と背景」（前出『本と活字の歴史事典』所収）において、それが“Characters formed by the divisible type belonging to the Chinese Mission of the Board of Foreign Missions of the Presbyterian church in the United States of America”だと紹介する（203頁）。

掲げられた書影を見れば“MACAO: /PRESBYTERIAN MISSION PRESS. /1844”と書いてある（204頁）。これが版元であることは明らかだ。

書名の“the Chinese Mission of the Board of Foreign Missions of the Presbyterian church in the United States of America”との関係でいえば、版元が華英校書房だという理解であろう。同じ書影（図23）に『華英校書房所有分合活字総数見本』と日本語訳がつけられているところからも、私はそう判断した。

PRESBYTERIAN MISSION PRESS は、日本語では長老派教会印刷所だ。漢語

で長老会書館とするならばわかる。これが、なぜ華英校書房になるのだろうか。

華は中国、英は英国というよりも英語を意味するだろう。それにしても漢字の活字見本帳になぜ「英」が必要なのか理解しがたい。アメリカ長老派教会が所有しているというのであれば、アメリカを表わす「美」を挿入したいところだ。

もうひとつ「校書」がある*⁸。「校書」といえば書籍を校訂するという意味だ。ただし、この単語は具合の悪いことがある。「校書」は、旧時、妓女の別称でもあるからだ。「坊」がつくと妓楼を意味する。華英校書房という文字の組み合わせを読むことのできる中国人は（このように書くのは、当時の識字率は低かったからだが）、中国人と英国人を擁する妓楼だと誤解しかねない。あるいは、中英共同経営になるか。いずれにせよキリスト教会とはなじまない命名であると私には感じられる。中国人であればつけるはずもない名称なのである。

どのみち、書籍に見えるのだから華英校書房は存在するのだろう。存在していても、これは APMP とは直接には結びつかないのではないか。私の率直な感想である。

つぎの華花聖經書房（花華聖經書房）は、どうだろうか。

華花聖經書房（花華聖經書房）

英文名は、The Chinese and American Holy Classic Book Establishment だという。マキントッシュは、それに花華聖經書房と漢字をあてた。しかし、実際に出版されている複数の書籍には華花聖經書房としか表示されていない。現在のところ、これは動かしがたい事実だといえる。

Chinese が華に、American が花に、Holy Classic Book が聖經に、Establishment が書房にそれぞれ該当する。アメリカを意味する花旗国は、俗語だとする辞書もある。たしかに現在は使用しないが、昔は使っていた。聖經は、漢語では聖典を、英語では聖書を意味するから、まことに都合のよい単語だといえる。漢語が、そのまま英語にかさなる。

漢英が重なる例を示せば、商務印書館の英語名称がある。普通は、(the) Commercial Press だと考えられている。しかし、実は、以前には違う表記をしていた。“the Commercial(商務) Press(印) Book(書) Depot(館)”なのである。

宮坂は「美華書館に関する歴史的考察 史料紹介をかねて」において次のように判定する。

マキントッシュの書く「花華」か、それとも逆の「華花」か。

「しかし本論では「華花聖經書房」説をとりたい。それは印刷出版された本の奥付部分にそう印刷されているということと、英語の名称が「Chinese and American」のため、中華の華が先にくるのが自然ではないかという2点の理由によるものである」84頁。熊月之も同趣旨のことを書いていた。

熊月之、宮坂の説明は筋が通っている。

それにしても、The Chinese and American Holy Classic Book Establishment とは奇妙な組織ではないか。

私が考えるに、漢語と英語があまりにも一致しすぎている。その発想のもとをさぐれば、まず華花聖經書房という漢語が考案され、それをそのまま英訳したのだと推測できる。

その成立の順序が正しいとすれば、The Chinese and American Holy Classic Book Establishment という存在の不可解さがはっきりする。この名称を持つ組織が別に存在したのだろうか。APMP という正式名称が最初からあるにもかかわらず、なぜ、別の英語表記を必要とするのか。ここがわからない。また、APMP の関係がどうなっているのか、誰も説明しようとはしない。APMP という印刷所の規模は、もともと小さかった。マカオでは印刷工2名に植字工が1名だった。寧波に移転してそれが植字工3名、印刷工2名の合計5名に増員されたという（范慕韓77頁）。小さな印刷所に別組織があるはずもない。だから、不可解だというのだ。

美華書館

出版物からキリスト教関係の印刷所か、と推測する人はいるだろう。また、知識のある人は、知っている。遠山景直『上海』（出版社名不記1907.2.28）は、「教会堂」の項目に大美国聖經会、長老会、大英聖公会ほかと並べて「美華書館 American Presbyterian Mission Press. 北京路十八号にあり」（210頁）と書いている。ここでは教会あつかいだ。

美華書館という漢語を見ただけでこれが APMP だとは、普通、気がつかない。たとえば、『上海指南』（商務印書館 宣統元年（1909）五月初版／七月再版）では、「書坊」の項目に商務印書館と一緒に「美華書館 洋書 在北京路十八号」と記載されている。一般出版社と区別をつけるのはむづかしい。

APMP だとはわからないような漢語名称に、わざわざ設定したのではないかと考えもする。

私なりにまとめた結論をいう。

英語表記である APMP を一般の中国人がそのまま発音するはずがない。中国人顧客、あるいは教徒読者のために漢語の名称が便宜的に考えだされた。それが、マカオの華英校書房であり、寧波の華花聖經書房（花華聖經書房）である。その当時の主要な出版物に合わせた命名であったろう。短期間で変更するような名称だから、間に合わせ的な措置だったことを示唆する。これはあくまでも私の想像である。上海に移転する前後において、将来、業務内容が多様化することを見越して漢語表記は美華書館とした。これが名称変更の理由だと考えられる。

以上をまとめた略図を次に掲げる。

正式名称	漢語名称
1844マカオ APMP	華英校書房
1845寧波 APMP	華花聖經書房 (花華聖經書房)
	The Chinese and American Holy Classic Book Establishment
1860上海 APMP	美華書館 俗称：長老会書館

上海では顧客から「長老会書館」とよばれていたという。出版物に印刷しているのは、美華書館である。わざわざ中国人用に用意した名称であるにもかかわらず、なぜ、それが使用されなかったのか。

複雑に見えるが、事実は単純だ。当時、上海には、華美書館、華美書局、あるいは華美印書局と称する印刷所が存在したからである。これに加えて上海美華書

局というのもある。いずれも、Methodist Publishing House の漢語名称なのだ。美華書館と、ほとんど区別がつかない。これらとの混同を避けるために漢語の長老会書館を使用したとわかる。

名称問題は、こうしてチャーリー宋についての誤解につながっていく。

【注】

- 1) 中華人民共和国成立以後、キリスト教史研究がタブーであったことが指摘されている。陶飛垂「1949年以来国内中国基督教史研究述評」『縁辺的歴史 基督教与近代中国』上海古籍出版社2005.1所収。
- 2) マッキントッシュと表記したいところだ。本稿では、人名の読みは、『キリスト教人名辞典』(日本基督教団出版局1986.2.15)による。以下同じ。
- 3) 『五十年史』のべつの部分も漢訳されている。G・麦金托什著、方麗訳、車茂豊校「在华早期的教会書館」『出版史料』1989年第1期(総第15期)1989.3。両漢訳ともに、宋原放主編、汪家燊輯注『中国出版史料・近代部分』第1巻(武漢・湖北教育出版社2004.10)に収録された。また、同著者の『六十年史』もある(*The Mission Press Sexagenary: Giving a Brief Sketch of Sixty Years of the American Presbyterian Mission Press, Shanghai, China 1844-1904*, Shanghai, APMP, 1904。英文未見。漢訳はない。日本語翻訳がある。ギルバート・マッキントッシュ Gilbert McIntosh 著、宮坂弥代生訳「美華書館六十年史」『(季刊)印刷史研究』第5巻第1号(通巻第7号)1999.7.1) さらに『七十年史』(*Septuagenary of the Presbyterian Mission Press*, APMP, 1914。英文未見)もあるという。
- 4) 浄雨「清代印刷史小紀」張静廬輯注『中国近代出版史料二編』(上海・群聯出版社1954.5)所収。また、該文にもとづいて美華書館の上海租界内の設立を1859とするものに、唐振常『上海史』(上海人民出版社1989.10。303頁)がある。夏林根、于喜元主編『中美関係辞典』(大連出版社1992.11。162頁)の「美華書館」では、1844年、美国長老会がマカオに花華聖經書房を設立した。1845年寧波に移転し「美華書館」と改名。1859年上海へ移転、という意味のことを述べている。同じく「清代印刷史小紀」によったものだろう。あるいは、発行年から類推して『中美関係辞典』が何歩雲の文章を参照したものか。
- 5) 論文初出の詳細をしらない。熊月之「新教伝教士早期中文書刊出版」宋原放主編、汪家燊輯注『中国出版史料・近代部分』第1巻 武漢・湖北教育出版社2004.10
- 6) 文中には、カッコに入れて(図11-12)と表示する。しかし、「図11」は掲載されていない。

編集の手違いだと思われる。なお、『耶穌教要理問答』については次の論文が発表されている。小宮山博史「19世紀ヨーロッパ・中国での明朝体金属活字の開発，そして日本への伝播」『武蔵野美術大学研究紀要』第23号1993.3.31。40-41頁

- 7) 范慕韓は、74頁において「1836年以前、美国長老会はマカオにおいて活版印刷所を経営していた」と書いている。矛盾した記述ではなからうか。
- 8) 「校書」の出所として『重校幾書作印集字』があることを思いつく。鈴木が前出論文において、1834年、マラッカの英華書院で印刷された『重校幾書作印集字』A selection of three thousand being the most important in the Chinese language を紹介している(187頁)。漢語表記は、英文の直訳にはなっていない。意識したらしい。複数の書籍(幾書)から収集した漢字3千字に校訂を重ねて(重校)載せた一覧表だ。ゆえに「重校幾書」という。そこから連想して「校書」と短くしたかとも考える。ただし、これは私の推測にすぎない。【増補附記】なお、薛濤からきている(寛文生氏ご教示。2006.8.23)

宋家姉妹の父親は商務印書館を創設したか

チャーリー宋と美華書館

未発表。執筆は2006年6月。チャーリー宋にまつわる不確かな経歴は、もはや伝説になっているのかもしれない。なにかの拍子に、彼が商務印書館の創業にかかわっていたという風聞が出てくる。一方で、美華書館の名称問題がこれにからんでくるから問題は複雑になるのだ。

チャーリー宋とは、宋嘉樹（耀如）のことだ。宋查理と書くばあいもある。英語名が Charles Jones Soong で、通称チャーリーの漢訳が查理だ。宋家姉妹の父親である。宋嘉樹名を使用してもいいようなものだが、あえてチャーリー宋と表示する。その特異な経歴からして、カタカナまじりで表記した方がその人物をよりの確に表現していると判断するからである。

表題の結論は、すでに出ている。簡単なことだ。チャーリー宋が商務印書館を創設したというのは誤解である。

その間違いは、どこからどのようにして生じているのか。一応の説明は、ある。だが、誤解をただす人が、別のところで混乱しているという例を見かける。追求していくと、混乱の原因が上海の美華書館にまつわって生じているのがわかってくるのだ。

誤解を避けるために、副題についてもあらかじめのべておく。チャーリー宋は、美華書館とも関係がない。

本稿において、チャーリー宋と上海の印刷所について混乱する記述の原因を明らかにする。

1 問題の発生

宋靄齡、慶齡、美齡のそれぞれの夫が孔祥熙、孫文、蒋介石であることは、周知の事実だ。この宋家姉妹についての著作が話題になったことがあった。

ロビイ・ユンソン『宋家姉妹』(1975)*¹がその1冊だ。

そのユンソンの著作に主としてよっている、とわざわざ注に書いた漢語の文章がある。

曹裕才「美華書館和商務印書館的淵源」(1985)*²という。

表題通り、美華書館と商務印書館の関わりについて書いている。美華書館は、アメリカ長老派教会が中国に設立した印刷所の漢語名称だ。英語では、American Presbyterian Mission Press (略してAPMP) と表記する。商務印書館の創業者のうちの何人かが美華書館に勤務していた。その関係から美華書館の名前がでてくる。ただし、表題に使われた専門論文はあまり見ない。その意味で珍しいと私は思った。

曹裕才は、次のように書いている。翻訳して示そう。

美華書館は、1892年(光緒十八年)に創設された。一般の人は、外国の教会が上海で創設したものだと考えているが、実は本当の創業者はアメリカの教会から任命された宣教師の宋耀如であり、所在は当時は上海市近郊であった虹口地区、すなわち現在の四川北路である。29頁

この説明は、正しくない。

APMPは、1844年マカオに設立され、漢語名称を華英校書房と書いた。翌1845年に寧波へ移転後、華花聖經書房と称し、1860年に上海へ移って美華書館と改称した。これがおおよそその変遷である。

曹裕才の説明は、それから大きくはずれていることは一目瞭然だろう。

編集部が、ユンソンの著作によっている、とわざわざ注をつけるくらいだ。美華書館についても英文原作に言及があるのかと考えた。その著作を見たが、それ

らしい箇所がない。わずかに、つぎの部分がある。「……靄齡とほかの宋家の子供たちは、彼らの父親 宣教師であり、教師であり、事業家である が、革命家であるという事実にも直面することになった。……彼の印刷機が反満洲族のチラシを印刷し、転覆の企てを隠蔽するために、チャーリー宋が聖書印刷の事業に参入したことを家族は知ることになったのである」(32頁)

「反満洲族」とは、反清朝政府という意味であることはいうまでもない。次女慶齡の夫が孫文だ。チャーリー宋が彼を支援していたことも、有名だろう。

たとえば、伊藤純、伊藤真『宋姉妹 中国を支配した華麗なる一族』(1998)*³に紹介される次のような挿話は、一般に広く知られているのではなからうか。

「耀如は事業の合間を縫って孫文を助けた。当局に付け狙われる孫文を自宅にひそかにかくまったのは耀如だった。彼は孫文の秘書であり、革命運動のオルガナイザーであり、資金面のスポンサーでもあった。耀如が経営する印刷会社では、聖書が山積みされた内側で、ひそかに孫文の革命運動に関するパンフレットや宣伝文が印刷されていたという」(12頁)

ここにも、美華書館という名称はでてこない。曹裕才が美華書館を持ち出したのは、宣教師、聖書印刷などという言葉からの推測なのか、あるいは、それとは関係なく彼が独自に調べた結果かもしれないと思う。いずれにせよ、間違っている。

別の1冊が、スターリング・シーグレーブ『宋家王朝』(1985)*⁴だ。

『宋家王朝』がアメリカで出版されたあと、ほとんど直後とっていい時期に、林茂がそれに関連する文章を発表した。日本人の名前に見えるが中国人である。日本語の翻訳で発表された。

林茂「商務印書館創立の経過 併せて宋查理と商務の関係について」(1986)*⁵という。

林茂を紹介して「北京商務印書館の総経理(社長)」と書いてある。翻訳者の名前は見えない。そういうばあいは『東方』編集部が翻訳したと考えてもいい、とこれは私の質問にたいする東方書店関係者の回答である。もうひとつ、林茂は林爾蔚であるとも教えてもらった。その名前なら私は知っている。商務印書館についていくつかの文章を発表しているからだ。

林茂は、シーグレーブの著作から商務印書館部分を抜き出し、それが間違っていると指摘する。

さきごろ、スターリング・セグレフの《宋家王朝》を読んだら、こんな記述があった。“彼（宋查理のこと）は他のひととの合資で上海商務印書館を設立し、英語の教科書を出版したり、商業用の帳簿類を大量に印刷したりした。この印刷所はのちに極東の一大出版社となった”2頁

林茂が引用符で囲んだ部分は、原作の英文では以下のようになっている。

He joined other investors in launching the Commercial Press of Shanghai, to produce Western textbooks for China and to do mass commercial printing. It became one of the biggest publishers in East Asia. p.86

シーグレーブは、チャーリー宋が上海商務印書館を設立したと確かに書いている。

もう1カ所を引用し、あわせて原文を示す。

“一九一七年……彼女（宋美齡のこと）は、全国映画審査委員会とキリスト教婦人青年会の役職についた。キリスト教婦人青年会は、最近、きれいな新しい建物のなかに引っ越した。その付近にはいま一つ、あかぬけたビルがあり、それが查理の商務印書館の所在地である”2頁

As a Shanghai socialite, May-ling was nominated for the usual committee posts. She accepted one on the Film Censorship Board and another at the YMCA. The Y had recently moved into a fine new building. Nearby was another handsome edifice, housing Charlie's booming Commercial Press. p.141

YMCAは、普通、キリスト教青年会と訳す。「キリスト教婦人青年会」ならば、YWCA かと思うが、漢語原文がそのようになっているのかもしれない。ここで

も「チャーリーの景気のいい商務印書館」と原文にある。

林茂は、商務印書館の創業を説明し次のように結論づける。すなわち、「要するに、右に述べた通り、商務印書館の創立とその成長過程には、商務と宋氏一族との直接的な結びつきを裏付けるものは何もない。したがって、宋查理が商務印書館を創立し経営したとする説は、どうやら眉つばものようである」(4頁)

結論は、その通りだ。

ところが、商務の創業過程を説明して、林は妙なことを書いている。創業者のひとり鮑咸昌についてである。

鮑咸昌は浙江寧波の人で、上海長老会清心堂を卒業してから、華美印書館に入り欧文の植字工になった。この印刷所は宋查理が小遣いかせぎに始めたもので、廉価なバイブル、英語のテキスト、帳簿類などを印刷していた。鮑咸昌はこの華美印刷館にいたことから、欧米の機械化された印刷方法をのみこみ、中国で印刷・出版事業を興すことに自信をもったのかも知れない。3頁

鮑3兄弟と夏瑞芳、高翰卿ら商務印書館の創業者たちは、全員が上海長老会の清心学堂に学んでいる。それは、よい。問題は、林茂が書いている華美印書館と華美印刷館である。同じ組織をふたつの名称で表わしているのがまぎらわしい。どのみち、これは正しくない。鮑咸昌と高翰卿が勤めていたのは、美華書館なのだ。林の書くとおりでとすれば、「宋查理が小遣いかせぎに始めたもの」が美華書館ということになる。それでは、曹裕才がおかしたのと同じ間違いになってしまう。商務印書館の社長にして、自社の歴史を知らない、といわれてもしかたがない。そう書くのは酷だ、というのであれば、美華書館と華美印書館(印刷館)の区別がつかない、と書いてもよろしい。

奇妙なことは、シーグレイブ『宋家王朝』の記述にもある。チャーリー宋が始めた印刷所に関するものだ。

He called his company the Sino-American Press (Hua-Mei Shu Kuan) and in short order had contracts to print Bibles for the American Bible Society, tracts for the

Methodists, and hymnals for other missionary groups. p.61

彼は、会社を「華美書館」と呼び、アメリカ聖書協会（注：美華聖經会）のために聖書の印刷を、メソヂスト教徒のために小冊子の印刷を、そしてほかの宣教師団のために賛美歌集の印刷をそれぞれ速やかに請け負ったのである。

チャーリー宋は商務印書館を創業した、とシーグレーブは書いていたのではなかったのか。ここで出てくる華美書館との関係はどうなるのか。それとも、この華美書館が、美華書館のことなのか。

このように書いてあるのを見て、混乱する読者がいるはずだ。混乱するものにも、シーグレーブも、商務印書館社長林茂も、著者たち自身が事実を把握していないのだから読者にわかるはずがない。

それでは、すっきりと説明した研究者が今までいなかったかといえ、そうでもない。

2 チャーリー宋と商務印書館

汪家熔は、シーグレーブの説明は、半分が間違いで半分は正しいという。

汪家熔の論文「商務印書館創業諸君」(1991)*6に説明がある。

一直説商務由夏瑞芳等4位工人創辦，近年西格雷夫的《宋家王朝》里更說其中有宋慶齡的父親宋查理：“他同一些投資者合伙創辦了商務印書館”（該書第4章）。西格雷夫還真說对了，但僅說对一半：宋查理真是商務印書館的股東，只是在創業10年後才投資。111頁

商務は夏瑞芳ら4人の労働者によって創設されたはずといわれてきている。近頃、シーグレーブの『宋家王朝』では、さらに宋慶齡の父親宋查理が、「ほかの投資者たちと共同で商務印書館を創設した」（該書第4章）といっている。シーグレーブは正しい。ただし、正しいのは半分だけだ。宋查理は、たしかに商務印書館の株主だったが、創業後10年になってからはじめて投資

したのである。

チャーリー宋は、商務印書館の創業者ではなかったが、株主だという。

汪家熔は、商務印書館に勤務していた。内部資料を見ることのできる立場にあり、その成果を多くの論文にして公表している。その彼が書いているのだから、なんらかの資料に基づいているのだろう。商務印書館の創業は、1897年だ。創業後10年といえば、1907年になる。1903年に日本の金港堂と合併会社になった。汪家熔の説明によると、チャーリー宋は、商務印書館が日中合併だった時代の株主だということになる。

汪家熔がもつづいたのは、商務印書館の株主会記録らしい。だが、この記録は公表されていない。彼が編集した『中国出版史料・近代部分』にも該当する文献は収録されていないのである。検証のしようがない。

しかし、チャーリー宋と商務印書館に関する資料がまったくない、というわけではない。

汪家熔が上記の論文を発表する前に、吉少甫が「基督教《聖經》的翻訳出版」（1987）*7を書いた。そこでは、資料を引用して次のように説明する。

中国の民族資本が設立した印刷所、すなわち1897年の商務印書館の館名は美華印書館および華美印書館をまねたものだ。宋耀如は商務の創業者とつきあいがあり、のちに、商務印書館と中華書局のふたつに普通預金（原文：存款）を持っていた。張元済の業務日記の1917年11月28日には次のようにある。「宋耀如が預金2万元を引き出す。また、満期になっていないものが1万8千元あるが、これも引き出しに来た」。商務印書館は宋耀如が創設したものであると海外のある文献ではいっているが、これには根拠がない。27頁

文中の「美華印書館」は、美華書館のことだ。華美印書館（別の箇所26頁では華美書館と書いている）はチャーリー宋が創設したという印刷所を指す。同じ著者でありながら名称に統一がないから、わかりにくい。

それとは別に、突然、中華書局が出現する。読者に見ればとまどう箇所だ。

この部分の商務印書館と中華書局については、あとで説明する。

張元済の業務日記は、『張元済日記』の書名で2種類*8が出版されている。該当部分を見てみよう。

1917年11月28日 財政 宋耀如提存款二万元。又未到期者有万八千元、亦来提。翰言須照存入時之洋厘、並改活期息。(1981年版311頁 / 2001年版413頁)

1917年11月28日 財政 宋耀如が預金2万元を引き出す。また、満期になっていないものが1万8千元あるが、これも引き出しに来た。預け入れ時の換算市価にもとづき普通預金の利子に改めなければならないと高翰卿がいう。

チャーリー宋は、1918年に胃癌で死亡するが、なぜこの時期に預金を引き出しに来たのか。なぜその必要があったのか。疑問がでてくるのは当然だろう。

吉少甫が引用するような記録があるのは確かだ。預金を引き出しに来た、というのだから商務印書館に自分の口座があった。定期預金を満期前に解約すると、その利子は普通預金に変更されるのは普通のことだ。文脈から以上のように読めるからには、商務印書館は金融業に類することを行なっていたと推測できる。

会社内部で社員を対象とした預金制度を設けるばあいがある。日本では普通に見られた。市中の銀行などよりも利率を高め設定する。資金を集める手段のひとつだ。上の記述を見ると、商務印書館は、それを外部に開放していた、あるいは最初からそのように設定していたとわかる。だから、金融業だというのだ。ただし、詳細は現在のところはっきりしない。わからないことは質問するにかぎる。2006年6月11日付の手紙で張人鳳氏より以下のようなご教示を得た。自社の職員に貯蓄を奨励して設けたもので、定期と当座(原文:活期)に分かれていた。現在の中国にもあり、「非法集資」「地下銀行」というのだそうだ。私が推測した通りのものらしい。1925年4月19日の日付がある「本公司有十股以上之股東名單」すなわち、株主名簿が同封されている。日付からわかるようにチャーリー宋が死去した後の名簿だ。彼の名前が掲載されているわけではない。

チャーリー宋が商務印書館に預金口座をもっていた。それは間違いない。次からが意見の分かれるところだ。預金口座を持っていることが、該館の株主である

ことを意味するかどうか。私の考えは、預金があるのは預金者にすぎず、株主とは別物だ。そのところを汪家熔は、勘違いしているのではなからうか（汪氏にも根拠を質問したが、こちらには返答がなかった）。前述張人鳳氏は、預金口座を持っているから商務の株主であると推測できる、と書かれている。私は、この点について賛成するものではない。

チャーリー宋の口座には、合計3万8千元が預金されていた。少なくない金額だ。多額の預金をしていれば大株主になることができるし、商務印書館の理事になっていてもおかしくはない。だが、いままで明らかにされている理事一覧に、宋の名前は、ない。

チャーリー宋が商務印書館に投資したのは創業後10年のことだ、と汪家熔はそう指摘した。1907年頃であるとわかる。だが、上の記事は1917年であって、汪家熔が書くのとは10年の時間的開きがある。

というわけで、私は汪家熔の説明には納得しない。彼がよったという商務印書館の株主会記録を見ることができないから、彼の勘違いだろうと推測する。ただし、チャーリー宋の名前を記載した株主会記録が公表されることがあれば、私は、この推測を即座に撤回するつもりだ。

唐突に出てくる中華書局の事情を説明しよう。

3 中華書局の経営危機

1912年、中華民国の成立を見て、そのまま会社名にしたのが中華書局だ。

商務印書館をとびだした陸費逵らが創設し、その故かことあるごとに商務印書館と衝突した。両社は教科書販売でしのぎをけずり、新聞紙上で激しい広告合戦をくりひろげた。新しい時代には新しい教科書を、と中華書局は宣伝する。商務印書館が清朝時代に編纂発行していた教科書は時代遅れだという意味だ。事実、商務印書館は、時代の流れを読むことができず、新しい教科書を編集発行する準備がなかった。中華書局は、そこにつけこんで大いに業績をのばす。1916年には印刷所を含んだ新社屋を建設するだけでなく、四馬路と棋盤街の角地に5階建ての店舗を落成させている。商務印書館に隣接した北側である。中国全土に支店

を40ヵ所（香港、シンガポールを含む）も展開した。

営業の拡大方針が原因のひとつとなり、1917年頃から経営破綻が表面化しはじめたのが発端である。教科書販売の販路を拡大するための手っ取り早い方法は、値引きしかない。収入が減少しているにもかかわらず業務の拡大方針を維持すれば、経済危機におちいるのは誰の目にも明らかだろう。

中華書局が経済危機におちいった原因は、そればかりではなかった。自社で行なった後の調査で以下の理由をあげている*9。

1は無計画であること。2は預金を集めすぎたこと。3は支出が大きすぎたこと。

無計画というのは、編集の進行があわたしすぎる。手元にある原稿は2、3年でも発行しきれない。原稿料も10万元を下らない。印刷機器が多すぎる。半分も使用していない。支店の開設がでたらめで費用がかかりすぎる、などなどを指す。預金を集めすぎた、というのが失敗の原因になる理由はこうだ。出版業というのは、すぐさま現金が入ってくるわけではない。日常の費用には現金が出ていくが、出版物が現金になるには時間がかかる。預金は、その時間差を埋めるために使われるという意味だ。いずれにしても、収入が減少すれば経済危機にみまわれる。商務印書館のところで見たいわゆる金融業を中華書局も行なっていたらしい。それが中国の商習慣だったのか。

中華書局が商務印書館と合併するという案は、だいぶ以前から持ち上がっていた。1914年10月15日の中華書局理事会において陸費逵が提案し検討されている。安売り競争、広告競争、資本競争などで商務印書館と争ってもムダが生じるだけだ。両社が連合すればそれらから免れるという。だが、この時は合意に至らなかった。そうこうしているうちに、中華書局の業績が悪化し、しかもそれが表面化していくのだ。

1917年の3月から、両社の指導者が頻繁に会合を持ち協議が始まる*10。

両社の人間が会合している事実が外にもれる。中華書局社長の陸費逵は、商務がわざともらして合併を失敗させようとしているのではないかと疑う。商務印書館の中でも意見が分かれていた。張元済は賛成するが、鄭孝胥は反対して結論がでない。だからこそ協議が継続されたということだ。業績不振の情報がながれる

とそれがウワサとなって取り付け騒ぎに発展する。中華書局にとっては、1917年5月がその時期だった。中華書局の資本の半分が失われたから商務印書館に売却される、あるいは、倒産するから商務と合併せざるをえない、というウワサが流れた。人々は預金の引き出しに押しかけ、数日で8、9万元にのぼった。5月9日の理事会では、その対策に各理事が金額を分担して準備をした。唐紹儀2万両、蒋汝藻3万両、廉泉と朱幼宏がそれぞれ1万両である*11。

業績不振の中華書局が商務印書館に買収されるというのであれば、預金者にとっては結構な話ではないか。倒産してしまえば預金は失われるが、会社が存続すればそうはならない。冷静に考えれば取り付け騒ぎには発展しない。だが、ウワサというのは理性では判断されないのだろう。

商務印書館と中華書局の合併の話は、結局のところどうなったかといえ、流れてしまった。

1917年5月14日午後、商務印書館は特別理事会を開催し、協議を停止することに決定した*12。

5月16日、張元済は中華書局の史量才を訪問し、合併の話は中止になったと告げている*13。

商務に見放されたかっこうになった中華書局は、独自に再建の道をさぐらなければならなかった*14。

以上のような経緯があったから、それ以後も中華書局からの対商務印書館攻撃は激しさを増すことになる。

4 チャーリー宋と中華書局

中華書局の陸費逵は、当時の模様を回顧して、助けてくれた人物のひとりとしてチャーリー宋の名前をあげるのだ。

ひとは宋耀如氏で、子文大臣の父である。公正剛直で、情理を兼ね備えていた。民国6年（注：1917年）の恐慌の時、氏は株主であり大口預金者であった。最初に会社と年賦償還の契約を結んだ。そればかりか、「われわれは

ことの善悪を明らかにしなければならない。会社の当局者ととも維持する方法をともに探らなければならないのだ。もし軽率に破壊してしまうと、損失はさらに大きくなる」といって起訴した者を非難した。また、不断にご愛顧いただき、努力して回復するようはげまされた。外国の会社は失敗したのち再び立ち上がった者が真の成功となる、とたびたび言われたものだ。^{*15}

陸費逵がチャーリー宋の名前をあげて深く感謝しているのは、単純な理由からだ。すなわち「年賦償還の契約を結んだ」という箇所である。大口預金者が口座を解約すれば、それだけで中華書局にとっては経済上の大打撃をこうむることになる。それをしないで待ってくれた。だから、感謝につながる。

早めに損切りをするという方法もあった。だが、チャーリー宋は、中華書局を破産させて損失を出すよりも再生の可能性に賭けた、と理解できる。

陸費逵の書き方からすると、チャーリー宋が中華書局の株主であり大口預金者であったのはだいぶ以前からのことのように思える。

ただし、チャーリー宋の名前が『中華書局大事紀要』に出てくるのは、1917年10月になってからだ。前述の、会社と最初に「年賦償還の契約を結んだ」大口預金者の宋として登場する。

同年12月16日に臨時株主会議が開催された。理事、監察を改選し、陸費逵が局長、すなわち社長の職務を辞去することに同意する。陸費逵の引責辞任である。新しく理事を選出しそのなかにチャーリー宋の娘婿孔祥熙がいる。数人が辞退し、くりあげて宋も理事になった^{*16}。

理事として宋の名前が見えるのは以上のように1917年12月になってからだ。1916年の「中華書局五年概況」によると、歴年理事の中には、チャーリー宋の名前がない^{*17}。確かなことは、株主会議に出席しているのだから宋、孔ともに中華書局の株主である。

以上の事実をふまえて、商務印書館側の資料を読むとおかしな記述があることに気づく。張元済が中華書局にでむいて合併中止を告げたにもかかわらず、その後も協議が続行しているのだ。これにからんでくるのが、チャーリー宋であり娘婿の孔祥熙なのである。

商務印書館と中華書局が、中止を決めたにもかかわらず協議を続行している。私がおかしいと感じるだけで、当時の出版界、あるいは実業界では裏でながあっても不思議ではない、ということかもしれない。

中華書局側からさまざまな人物が合弁話を持ちかけてくる。その中にチャーリー宋と孔祥熙がいた。以下、張元済の記述から、主としてふたりにかかわる部分を抜き出す。

(1917年)8月21日、宋耀如(注:チャーリー宋)が来ていうには、中華の若干の株主は商務が引き継いで経営してくれること希望している、と高翰卿がつける。正式な代表が来て相談しなければならない、というつもり(『日記』355頁)。

張元済は、宋について大口預金者であるとかの注釈をつけていない。

9月10日、孔庸之(注:祥熙)が手紙で中華を買収するように勧める。本館の株主であり、中華の株主でもある(『日記』369頁、『張元済年譜』*¹⁸148頁)。

張元済はここで、孔祥熙が商務と中華の株主を兼ねているとはっきり書いている。たとえば、10月4日に登場する劉治琴について、本館と中華の株主で1,500両の預金があると張元済は小さく記入している(『日記』381頁)。なぜ、チャーリー宋については、それがいいのか。書いていないから宋は商務の株主ではなかった、と私は考える。

9月13日、孔祥熙らを一枝香に招待した。孔祥熙は、張元済を車で張の自宅まで送り、張宅で中華のことを話し合う(『日記』372頁、『年譜』143頁)。

9月14日、中華のことは決めることができない、と孔祥熙に明日つけることにする(『日記』374頁、『年譜』143頁)。

9月15日、孔祥熙に会って昨日の決定を告げる。はなはだ不満のよう(『日記』375頁、『年譜』143頁)。

10月16日、チャーリー宋が高翰卿を訪問し、また中華のことを話す(『日記』388頁)。

10月18日、張元済、高翰卿、鮑咸昌は、一家春におもむきチャーリー宋と話す(『日記』391頁)。

『年譜』では編者が宋に注をつけて「華美印書局の創業者、当時、中華の株主である」(144頁)と説明する。「華美印書局の創業者」については、後で問題に

したい。

10月19日、宋と会う（『日記』392頁）。

このあと1ヵ月以上の時間が経過した。そうして前に紹介したチャーリー宋の商務印書館預金の引き出しにつながる。しつこいようだが確認のためにくりかえす。

11月28日、宋耀如が預金2万元を引き出す。また、満期になっていないものが1万8千元あるが、これも引き出しに来た。預け入れ時の換算市価にもとづき普通預金の利子に改めなければならないと高翰卿がいう（『日記』413頁）。

陸費逵が書いていた。中華書局が恐慌にあったとき、チャーリー宋が預金の年賦償還に応じてくれた、と。これは、陸費逵にとっては救われたことを意味する。ならば、その宋が、商務印書館の預金をたぶん全額引き出した、つまり解約したという行為は、商務にとっては経済上の打撃になるのではないか。

あるいは、チャーリー宋は、大口の預金を引き出すことにより商務と中華の合併計画を促進しようという意図を持っていたのか。商務側の態度がはっきりせず、協議が進まないのにしびれを切らしたと見ることもできる。中華書局への出資金を守るために、商務印書館に対して、別の表現をすれば「おどし」をかけたということだろう。張元済たちは、宋の行為について何も記してはいない。だが、私にはそう思える。

中華書局にとっては、チャーリー宋は強い味方であった。商務印書館にしてみれば、さて、どうだろうか。敵対者に近いものであったとしても不思議ではない。

11月30日、孔祥熙、チャーリー宋と会見する（『日記』414頁、『年譜』145頁）。

12月14日、ふたりをまじえた中華書局の株主たちと東亜旅館で夕食し買収価格について相談する（『日記』429頁、『年譜』146頁）。

商務の内部で意見が一致しないにもかかわらず、張元済らは中華書局の関係者と交渉をつづけている。

以上を見ると、商務印書館の考えは明らかだ。中華の足元を見てできるだけ買いたたこうというのである。だからこそ、ダラダラと協議に応じた。当事者たちの行動は、はたから見るとあまりにも露骨だ。

チャーリー宋と商務印書館の関係は、大口預金者であったにとどまる。

5 美華書館と華美印書館

チャーリー宋は商務印書館を創設しなかった。これは、明らかである。では、彼は美華書館をつくったのだろうか。つくらないまでも、美華書館で働いていたことはあるのか。いずれも否だ。

林茂は、宋が「小遣い稼ぎに始めた」華美印書館（印刷館）だと書いた。美華書館と混同している。誤解である。しかし、この誤解のなかに問題を解く鍵が存在しているといえる。

前述のように『年譜』では編集者が宋に注をつけて「華美印書局の創業者」と書いていた。これも手がかりになる。

いくつかの資料にもとづいて、チャーリー宋という人物を簡単に紹介しておこう*19。

宋嘉樹（1866、又1861-1918.5.3）は、アメリカで訓練を受けた宣教師、上海で成功した実業家で宋家の家長である。南海文昌の人。又の名は耀如、別名は宋查理。英文名は、Charles Jones Soong。父は韓鴻翼。原名は韓阿虎、教準。のち、叔母の弟宋氏を継いで改姓した。

南海島の貧しい商人の家に生まれる。九歳の時、叔父に連れられアメリカに渡った。叔父の養子となりボストンで働く。十三歳で家を出る。密航を企てて出会ったのが船長チャールズ・ジョーンズCharles Jones だった。船長の好意で働いたばかりか、南部メソヂスト監督教会のリカードRev. T. Page Ricaud師に紹介される。1880年11月7日、宋は、ノース・カロライナの5番街メソヂスト監督教会the Fifth Street Methodist Episcopal Churchで洗礼を受け、洗礼名は船長の名前にちなんでチャールズ・ジョーンズ・スーン（Soon。1886年帰国してSoongに改める）とした。

以上は、ほとんど伝説となっている。だが、ある調査の結果では、船長はエリック・ガブリエルソンEric Gabrielsonというのだそうだ。そうなると、宋の英語名が根拠を失う。霧につつまれた経歴だと思う。

アメリカ人の援助を受け、1881年4月、トリニティ・カレッジ（後のデューク大

学)に入学する。1882年秋、テネシー州ナッシュビルのヴァンダービルト大学神学院へ入り、1885年春に卒業した。1886年、14年間のアメリカ生活を終えて上海に行く。帰国というべきだろうが、アメリカの生活習慣が身についていた宋にとって中国は外国と同じだった。南部メソヂスト教会の牧師として伝道につとめるのが仕事だ。蘇州、崑山一帯に派遣されている。1887年の夏、同じメソヂスト派の信徒であった倪桂珍と結婚した。後に3姉妹と子文、子良、子安の3兄弟が生れる。

1889年上海に移動、いくつかの学校で英語を教えたことがある。そのなかのひとりが胡適だという*20。胡適に直接英語を教えたのかどうかはわからない。だが、チャーリー宋と胡適には面識があったのは事実だ。胡適日記に宋耀如の名前で登場するからである*21。

宋は、最高責任者のアレンYoung John Allen(漢語名:林樂知)と性格上のそりがあわず、それに加えて給料が少なく妻子を養うことができない、という理由で教会の仕事から遠ざかることにした。1890年、上海で華美書館(Sino-American Press)を創設し、中国語聖書を出版。上海福豊麵粉廠の社長、キリスト教青年会YMCAを創設した。その間、孫文(中山)と知りあう。

以上、チャーリー宋の略歴を見れば、彼がメソヂスト教会と深い関係をもっていることがわかる。そうならば、メソヂスト教会が中国で印刷所を開設したいきさつを述べるのが普通の順序だ。チャーリー宋の経歴からして印刷の技術をどこかで専門に学んだとほうかがえない。印刷所を開設したと文章で書くことは簡単だ。事実、華美書館を創設したと上では述べている。だが、印刷についての知識がなければつとまらない。まったくの素人では手に負えない種類の仕事だ。どこかで印刷所との接点があればならないと考えるのが普通だろう。

メソヂスト教会が中国で創設経営した印刷所は、以下のようになっている。

Methodist Publishing House 福州美華書局 (上海)華美書局、華美印書館

Methodist Book Store福州美華書館：福州美華書局

Methodist Episcopal Mission Press福州美華印書局

Mission Press (福州)美華印書局； (上海)美華印刷所*22

問題は、漢語名称のほうだ。福州がつくつかない、の区別はある。華美、美華、および書局、印書館、書館、印書局との組み合わせだ。ほかに、上述のとおり「華美書館」と表示するものもある。

陸費伯鴻「論中国教科書史書」*²³の注3を見れば、1906年の上海書業商会出版『図書月報』第2期に会員22社を記録する。そのほか未加入の会社を『中国出版界簡史』によって「尚有：作新社、蒙学書局、藻文堂、湖南新書局、上海排印局、福瀛書館、華美書館、文瀾堂、東亜書局、同文書局、拜石山房等」と書くのだ。そのなかには、たしかに「華美書館」が存在している。

印刷所名を一覧すれば、時間の経過を無視して名称だけを集めているから相互の関係がわからない。名前から推測すると福州と上海に分かれて存在していたか、あるいはAPMPのように移転したのかもしれない。だから、判別しにくい。加えてAPMPが上海に移転して改称した美華書館があって、ややこしさにワをかける。これが、勘違いと理解の妨げになった理由であろう。

研究者でさえ間違える。複雑であるということが出来る。しかし、それは漢語名称の混乱であるにすぎない。メソヂスト教会系と長老派教会系とでは、印刷所の歴史があきらかに異なるのだ。

メソヂスト教会印刷所を説明する前に、アレン(Young John Allen 林樂知。1836-1907)*²⁴について触れておく。チャーリー宋と人間関係がうまくいかなかったという記述があったからだ。

アレンは、アメリカの南部メソヂスト監督教会の宣教師である。1860年、上海に到着するがアメリカの南北戦争(1861-65)の影響で経済の来源を失い、種々の仕事に手を染めざるをえなかった。1864年、広方言館(又、上海同文館)で英語の教師を勤め、また、上海江南製造局において翻訳に従事する。1868年より上海で独自に『教会新報』を主編し、これは1874年に『万国公報』と改称した。学校関係でいえば、1881年上海に中西書院を、1890年に上海中西女塾を設立している。1887年、広学会の前身である同文書会に参加した(広学会への名称変更年は諸説ある*²⁵)。キリスト教の出版組織である。1889年、『万国公報』は広学会*²⁶の主管となった。1891年に『中西教会報』を主編し発行している。1907年、アレンは上海で死去した。

印刷所とのかかわりでいえば、チャーリー宋よりもアレンの方がよほど経験が豊富だとわかる。だから、宋が印刷所を設立したとする記述には、私は疑いの目を向けざるをえない。

6 中国におけるメソヂスト教会印刷所

メソヂスト教会印刷所の中国における名称を見れば、福州と上海がついていることを思い出してほしい。

中国にやってきたメソヂスト教会は、Methodist Episcopal Missionの頭文字を漢訳して美以美会と称する。1847年福州から活動をはじめた。分派した一方の南部メソヂスト監督教会は英語名称にsouthを加え、漢語では監理会という。1848年から主な活動の地は上海であった。

1862年、福州で設立された印刷所の英文名称は、the Foochow Mission PressあるいはThe Methodist Mission Press, Foochowという*27。

前述の漢語名称一覧で福州を冠するものがあつた。すなわち、福州美華書館(書局、印書局)がそれに該当するだろう。上海にも設立されていたメソヂスト教会印刷所は、(上海)美華印刷所と呼ばれていたと考えてよいと思う。なぜそのような書き方をするかといえば、福州と上海の印刷所を統合しようとする教会両派の動きがあり、それによって名称が変化するからだ。

統合後の組織をMethodist Mission PressあるいはPublishing Houseとするように予定した。その協議は、1894年から始まっている。1897年に完成する予定が延びてしまい、実現したのは1902年であった。1903年3月、上海呉淞路に華美書館として活動をはじめた。しかし、福州の印刷所も存続したままで支店としてあつかわれた。そのもとの名前美華書館を保持した*28。

ここまで説明すれば、今までの疑問を解くことができる。

チャーリー宋が「1890年、上海で華美書館を創設し」た、あるいは「華美印書局の創業者」とするのは間違いである。

理由のひとつは、当時、すでに上海には美華印刷所が開業していたからだ。だから宋を創業者とよぶことはできない。せいぜいが、経営に参加したくらいのこと

とだ。もうひとつは、華美書館という名称は1903年以後に使われはじめたからだ。1890年当時には存在しなかった名称を使用するのは適当ではない。

キリスト教会の組織が異なるにもかかわらず、上海に美華書館があり、福州にも同名の美華書館が存在していた。おまけに、上海の印刷所名が華美書館というのだ。漢語名称の複雑さが、正しく認識する妨げになった。

広く誤解が広まった理由は、それだけではない。APMPの美華書館とこのメソヂスト教会の華美書館が、なんと、のちに合併するのである。過去の状況をよほどはっきりと認識していなければ、区別がつかなくなる。

こうして、はなしは美華書館の最期につづいていく。

【注】

- 1) Roby Eunson “The Soong Sisters” Franklin Watts, Inc. New York 1975
- 2) 曹裕才「美華書館和商務印書館の淵源」『商務印書館館史資料』之三十一 北京・商務印書館総編室編印1985.6.1。28-32頁
- 3) 伊藤純、伊藤真『宋姉妹 中国を支配した華麗なる一族』角川文庫1998.11.25初版未見/2000.5.25十版
- 4) Sterling Seagrave “The Soong Dynasty”Harper & Row, Publishers, Inc., New York 1985
- 5) 林茂「商務印書館創立の経過 併せて宋查理と商務の関係について」『東方』第63号 1986.6.5
- 6) 汪家燊「商務印書館創業諸君」『江蘇出版史志』総第7期1991.10 / 『商務印書館史及其他 汪家燊出版史研究文集』北京・中国書籍出版社1998.10所収 / 宋原放主編、汪家燊輯注『中国出版史料・近代部分』第3巻 武漢・湖北教育出版社2004.10。本稿では、『中国出版史料・近代部分』第3巻を使用する。以下、該書第3巻に収録されている文章については同じ扱いとする。
- 7) 吉少甫「基督教《聖經》的翻訳出版」『出版史料』1987年第4期(総第10期) 1987.12
- 8) 『張元濟日記』上下 北京・商務印書館1981.9 / 張人鳳整理『張元濟日記』上下 石家荘・河北教育出版社2001.1。索引がついて便利だ。以下、『日記』と略す。
- 9) 錢炳寰『中華書局大事紀要(1912-1954)』北京・中華書局2002.5。33-34頁
- 10) 『日記』にもとづいて関連記述をまとめたものが、前出『中華書局大事紀要(1912-1954)』38-41頁に掲載されている。また、王震「張元濟先生願商務与中華合併」(海塩県政協文史資

- 料委員会、張元濟図書館編『出版大家張元濟 張元濟研究論文集』上海世紀出版集團、上海・学林出版社2006.1。470-477頁）がある。
- 11) 前出『中華書局大事紀要(1912-1954)』32頁
 - 12) 前出『日記』294頁
 - 13) 前出『日記』295頁
 - 14) 次を参照されたい。吳中「我所知道的“維華銀團”」中華書局編輯部『回憶中華書局』上編 北京・中華書局1987.2 / 前出『中国出版史料・近代部分』第3巻所収。
 - 15) 陸費逵「中華書局二十年之回顧」『中華書局圖書月刊』1931.8.10初出未見 / 前出『回憶中華書局』 / 俞筱堯、劉彥捷編『陸費逵与中華書局』北京・中華書局2002.1 / 前出『中国出版史料・近代部分』第3巻。174頁
 - 16) 前出『中華書局大事紀要』35頁
1917年10月大存戸宋耀如首与公司訂分年攤還之約。
12月16日 召開臨時股東會議，改選董事、監察，同意陸費逵辞去局長職務，結束出租事宜及募集優先股等。 / 新選董事俞復、于右任、周鵬、范源廉、沈恩孚、康心如、徐可亭、孔祥熙、戴克敦、施則敬、廉泉等十一人。其中周、沈、施、廉一再辭職，以得票次多数陳抱初、宋耀如、謝蘅臆、汪幼安四人遞補。其中俞、于、康、徐、孔、汪六人為初選董事。
.....
 - 17) 中華書局「中華書局五年概況」前出『中国出版史料・近代部分』第3巻。169-170頁
 - 18) 張樹年主編、柳和城、張人鳳、陳夢熊編著『張元濟年譜』北京・商務印書館1991.12。以下、『年譜』と略す。
 - 19) Howard L. Boorman(Ed.) “Biographical Dictionary of Republican China, 1911-1949” Columbia University Press, 1967-71。第3巻(1970)141-142頁 / 陳玉堂編著『中国近現代人物名号大辞典(全編増訂本)』杭州・浙江古籍出版社2005.1。578頁 / 前出の伊藤純、伊藤真『宋姉妹 中国を支配した華麗なる一族』9-12頁 / 徐友春主編『民国人物大辞典』石家莊・河北人民出版社1991.5。447頁。宋の名前を書名に使った出版物がある。たとえば、于醒民、唐繼無、高瑞泉著『宋耀如全伝』上下(哈爾濱・北方文藝出版社1997.1)、あるいは陳廷一『宋查理伝』(北京・中国社会出版社2005.5)などだ。また、(美)埃米莉・哈恩(Emily Hahn)著、李豫生、靳建国、王秋海訳『宋氏家族 父女・婚姻・家庭』(北京・新華出版社1985.9)もある。しかし、あくまでも参考までにあげるだけ。
 - 20) 耿雲志『胡適年譜』(成都・四川人民出版社1989.12。13頁)の1906年満15歳の項目で胡適が中国公学に入学したこと、宋耀如も公学で教えたことがあることをいう。
 - 21) 中国社会科学院近代史研究所中華民国史研究室編『胡適の日記』上下(北京・中華書局

- 1985.1(限国内発行)「藏暉室日記 庚戌第一冊(二十歳) 正月初九日(1910.2.18)……下楼遇宋耀如先生,立談数語而歸」11頁
- 22) 黄光域『近代中国専名翻訳詞典』成都・四川人民出版社2001.12。228、233頁
- 23) 張静廬『中国近代出版史料初編』上海上雑出版社1953.10。214頁
- 24) アレンの経歴については、以下の文献によった。中国社会科学院近代史研究所翻訳室『近代来華外国人人名辞典』北京・中国社会科学出版社1981.12。8頁 / 查時傑「林樂知の生平与志事」林治平主編『基督教入華七十年紀念集』台湾・宇宙光出版社1977.12/1979.4再版。109-160頁 / 梁元生『林樂知在華事業与《万国公報》』香港・中文大学出版社1978.2 / 魏外揚「創辦「万国公報」的宣教士 林樂知」『宣教事業与近代中国』台湾・宇宙光出版社1978.11。93-98頁 / 顧長声「林樂知」『從馬礼遜到司徒雷登 来華新教伝教士評伝』上海人民出版社1985.8。263-280頁。それぞれの事業について設立、改称、林樂知の参加などの時間が文献によって一致していないばあいがある。
- 25) 葉再生『中国近代現代出版通史』第1巻北京・華文出版社2002.1。406頁には以下のように説明してある。要点のみ抜き出す。1884年同文書会(The Chinese Book and Tract Society)が組織された。1887年、それが解散し、同年新しい同文書会(The Society for the Diffusion of Christian and General Knowledge Among the Chinese)が設立される。1892年、広学会という漢語名称が使用され、1905年に英語名称を The Christian Literature Society for China と改めた。
- 26) こう説明する論文がほとんど。しかし、前出葉再生の説明によれば、広学会という漢語名称は1892年以後に使用されるから、1889年時点でそれが出てくるのは矛盾する。私はこれについて資料をもたない。疑問のままにしておく。
- 27) D. MacGILLIVRAY (Ed.) "A CENTURY OF PROTESTANT MISSION IN CHINA(1807-1907)" SHANGHAI: PRINTED AT THE AMERICAN PRESBYTERIAN MISSION PRESS, 1907。p.637。ただし、葉再生『中国近代現代出版通史』第1巻は次のように書いている。1862年、メソヂスト教会が福州に創設したのは、Rozario Marcal & Co. だと(112頁)。
- 28) D. MacGILLIVRAY (Ed.) "A CENTURY OF PROTESTANT MISSION IN CHINA(1807-1907)"。p.639。また、葉再生『中国近代現代出版通史』第1巻には、次のようにある。1903-04年に上海のメソヂスト教会と南部メソヂスト教会が福州のRozario Marcal & Co.と合併して The Methodist Publishing House in Chinaを組織した。113頁

美華書館の最期

未発表。執筆は2006年3月。外国教会が経営する印刷所は、美華書館に限らない。ただ、商務印書館と浅からぬ関係がある。その最期をたどると、また、商務印書館の影が見えてくる。

アメリカ長老派教会が上海で経営していた印刷所（American Presbyterian Mission Press。略称APMP）は、漢語で美華書館とよばれる。その最期はどうなったのか、いくつかの説がある。

1 商務印書館買収説

美華書館の最期について范慕韓『中国印刷近代史（初稿）』は、こう書いている。1927-28年の間に業務を停止し、機材は商務印書館に売却した*¹。

『上海出版志』、あるいは葉再生『中国近代現代出版通史』は、1923年に商務印書館に譲り渡したと説明する*²。

両者ともに商務印書館が関係している、とたしかに書いている。だが、それが1923年なのか、あるいは1927-28年なのかは確定できていない。時期が一致しないのだ。

私が以前に読んで興味深く思ったのは、朱聯保の説明だった。「1923年、商務印書館に売却された」*³

これ以上詳しくは書いていない。しかし、私が因縁めいた感じを抱いたのには

理由がある。なぜなら、商務印書館の創業者たちはアメリカ長老派教会の学校清心学堂で学んだことがある。さらに、そのなかの鮑咸昌と高翰卿は、美華書館で働いていたからだ。のちに、このふたりも商務印書館に移っていった。

商務印書館が美華書館を買収したというのであれば、自分たちの古巣を回収したようなものだ。美華書館は、商務印書館という会社をそれだけ大きく育てることに成功したという意味でもある。商務の指導者たちは誇りに感じてよい事柄だ。

ところが、朱聯保の、あるいは上の范慕韓、葉再生を含めてもいいが、彼らの記述にもかかわらず、商務印書館側の資料に証拠を見つけることができない。詳細な『張元濟年譜』*4にもそれに言及する箇所は見あたらない。商務が美華書館を買収したのであれば、張元濟が記録していないはずがない。不思議に思う。

また、以上とは違う説明をしている文献もある。

姚民権と羅偉虹『中国基督教簡史』は、キリスト教との関係から美華書館について説明する。該当部分の概要はこうだ。

商務印書館が設立されてからのち、美華^マ印書館の業務は衰退していった。1932年の一二八事変により商務印書館が破壊されると、商務の邢志香らが資金を集めて美華書館の設備を購入し牯嶺路に工場を設立し、やはり美華印書館と名乗った。1937年八一三抗日戦争がはじまり、邢志香らは開明書店と合作し、印刷機器を武漢に運搬しようとした。機器を船に積み込んだ後、不幸なことに日本軍に強奪され、美華印書館はそれ以後存在していない。*5

以上の説明によると美華書館は、1937年以降は存在していない。ということは、それ以前はまだあったということだ。1923年、1927-28年に商務印書館に売却されたというのは、これまた時期がずれている。

1932年に「商務の邢志香らが資金を集めて美華書館の設備を購入し」という箇所が商務印書館と美華書館の関係を説明しているように見える。だが、この記述では「設備を購入し」ただけではないか。しかも、「やはり美華印書館と名乗った」のであれば、商務が買収したことにはならない。ついでにいえば、姚民権らは、美華印書館と表記しているがこれは勘違いだ。

どうもよくわからない。「商務の邢志香ら」とある。邢志香という人物は、商務印書館の印刷所にたしかに在籍していた*6。だが、美華書館の設備を購入する、

あるいは買収するならば、普通は商務の首脳が出てくるはずだ。だから、くりかえすが、張元済が美華書館の買収を記録していないことが不思議なのだ。さらに言うならば、朱聯保、范慕韓、葉再生らは商務が買収したと説明するだけで、個人名を出していない。ところが姚民権らは、「邢志香ら」と詳しく、これがかえって不自然だ。一方で開明書店の名前がでてくる。そうすると開明書店と美華書館が合作したのか。疑問はいくつもある。

開明書店の宋雲彬が当時を回想して文章を残している。もう少し詳しいことがわかると思った。

彼の証言によるとこうだ。

1937年、開明書店は国民党の要請にこたえて武漢に移転する準備をしていた。2隻の船をなんとか都合して荷物を積み込んだ。(美華書館から借りた)いくつかの機器、紙型、紙、インクなどを積み込んだが出発する前に日本軍に強奪された。^{*7}

ここには、美華書館から機器のいくつかを借りた、としか書かれていない。なぜ借りることになったのか、詳細がわからない。機器を借りることを合作といっただろうか。だが、合作と買収、あるいは吸収合併は違う。

商務印書館が美華書館を買収したという説明には、確かな資料がない。しかもその時期が特定されていない。謎だらけだといってもいい。中国では、今まで疑問を提出した研究者もいない。

だが、商務印書館が美華書館を吸収合併したという説は、根強く信じられている。

リードは、彼の『上海のグーテンベルグ』^{*8}において、それが1920年代だという。

以上のいずれもが、もういちどいうが、根拠を提出していない。

キリスト教印刷所の統廃合に関係しているように書く文献もある。

2 美華書館と華美書局

本稿では、上海で開業していた美華書館APMPを問題にしている。1860年に寧

波から移転してきて以来のことだから印刷所としての長い歴史をもっている。しかも、その従業員のなかから商務印書館を創業する人が出ていることはすでに述べた。あまりにも有名な話だ。商務印書館が、美華書館と関係があるようにいわれるのはそれ故である。

メソヂスト監督教会の南部（漢語名称：監理会）と北部（美以美会）の両派が、上海と福州でそれぞれ経営していた印刷所を統合する動きがあった。協議に時間がかかり、成立したのは1902年だ。1903年3月、上海呉淞路に華美書局The Methodist Publishing Houseと称して開業した。

1903年以来、上海では美華書館と華美書局が併存していたという事実を見てほしい。普通にあって、名称だけで両社を区別することのできる人は少数ではなからうか。研究者でも取り違えることがある。

そののち、長老派教会の美華書館とメソヂスト監督教会の華美書館[局]が合併することになった*9。教会全体のための印刷組織が必要であるという指令が出され、1913年1月より協議がはじまる。

長老派教会から4人、メソヂスト監督教会から5人が出てきて合併後の名称を協和書局とすることに決めた。ただし、美華書館は時に旧称を使用した。1931年、協和書局は業務を停止し、北京路の店舗と図書は広学書局に売却し広協書局と改称する。

以上が、『上海宗教史』の説明する美華書館の変遷である。

Mission Book Co.協和書局*10と記録するものがあり、該書の記述が正しいことがわかる。商務印書館が買収したという説に比較すれば、上の説明のほうがすっきりとしてよほど理解しやすい。

以上の記述を紹介する日本の論文がある。小宮山博史「明朝体、日本への伝播と改刻」*11だ。小宮山は、結論づけて「美華書館は一九三一年か三二年にその活動を停止したと考えられるが、特定するにはまだまだ資料が少なすぎる」(239頁)と書いている。

それにしても、『上海宗教史』には判断に苦しむ記述があることに気づかれたことだろう。

「ただし、美華書館は時に旧称を使用した」とはどういうことか。協和書局が

成立しているにもかかわらず、昔の名称を使用するなど普通では考えられない。また、1932年以前に該印書館（樽本注：美華書館）は北京路の旧館あとを倉庫として保留していた、とも説明している（816頁）。倉庫だから印刷していたわけではなさそうだ。だが、名称としての美華書館は残っているという意味かもしれない。

合併して協和書局に改組されたのだから、美華書館と華美書局はその時点（1915年）で廃業になった、と考えてもいいのではないか。だが、そうはならない。

1910年代末に中国全土に残っているキリスト教会系印刷所は、5社だという。上海の長老派教会の美華書館、成都の華英書局、広西の華南宣道書局と広東の美華浸会書局だ*12。ここには美華書館の名前がある。

私が所蔵する1916年の『敬拝精義』の扉には上海美華書館擺印と印刷されている。その裏には英文でPrinted at the Presbyterian Mission Press. と表示がある。American が外れているが、漢語名称は明らかに美華書館である。

あるいは、はるかこの1934年に刊行された書籍に「排印者美華書館」と印刷されているらしい*13。

廃業したはずの美華書館が、1934年になっても印刷物を出している事実がある。だから、事実が説明を裏切っている、と私はいう。困惑するのは私だけではないだろう。なにやら複雑な背景が、あるいは経緯がありそうだ。

美華書館の最期に関して、前出『上海宗教史』を参照している出版史が出てきた。冒頭に紹介した范慕韓と葉再生の著作だ。

范慕韓が説明していることを私なりに簡略化して示す。

1915年、美華書館销售部 + 上海衛理公会出版社The Methodist Publishing House 教会図書公司The Mission Book Company（81頁）

+ は合併を示し、 の先に改組したという意味だ。

『上海宗教史』に基づいているはずだが、記述が異なる。単に美華書館とするのではなく、つけ加えて「销售部」だという。販売部という意味だ。販売部だけが合併して、もとの印刷部は残って別に仕事をしたといたいのかと私は推測する。それではなんのための合併かと思わないでもない。销售部と書いているのには、どこかに根拠があるのか。范慕韓は、合併後も美華書館を使用した出版物があることを把握しているのかもしれない。説明がないから、私には理解しにくい。

また、「上海衛理公会出版社」というのは、英語名称を独自に漢訳してそう称している。華美書局という漢語名称が使われている事実があるのだから、ここはそれを使用すべきではなからうか。また、「教会図書公司」というのも同類だ。協和書局としてもらいたい。その漢訳方法を見ると、范慕韓はどうやら英文原書によっているらしく思われる。そうならば、『上海宗教史』を参照したわけではなさそうだ。独自の調査にもとづいているのかもしれない。

本稿冒頭で紹介したように、范慕韓は、美華書館が商務印書館に買収されたと書いている。それとの矛盾がそのままになっている。つまり、説明が不足しているのだ。

葉再生の説明も上と同じやりかたで表示するとつぎのようになる。

1915年、美華書館销售部 + 上海的衛理公会出版社 The Methodist Publishing House
教会図書公司 The Mission Book Company (100頁)

葉再生は、范慕韓の説明をそのまま取り入れたとわかる。また、1923年、商務印書館に売却された、と書いているのは朱聯保のままだ。こちら矛盾をほったらかしにする。

「销售部」というのが気になる。美華書館と華美書局が全体まるごと合併して協和書局になったのではないらしい。美華書館は、協和書局の成立後もこれとは別に存続していたと考えなければ、事情が説明できない。

郭衛東主編『近代外国在華文化機構綜録』*14に掲載された協和書局の説明が興味深い。「美華書館および華美書局が上海に開設した共同販売部（原文：聯合經銷部）である。1915年創設された。上述ふたつ以外にも、中華基督教博医会、中華基督教教育会、中国広学会などのキリスト教伝道の団体および150名の個人が出版した書籍も販売した。……」（173頁）

そういえば、1922年上海で発行されたという『協和書局図書目録』の英文書名が“Catalogue of Chinese books sold by The Mission Book Company”だ。印刷所 Publishing House ではなく書店 Book Company となっているところに注目されたい。漢語でいう書館は印刷所を兼ねているばあいが多いから区別が付きにくい。英語表記では区別されていることが明白だろう。販売を主として行っていた書店だという記述に合致する。

『上海宗教史』の説明で理解できるのではないかと思った。だが、事情はそれほど簡単ではなさそうだ。

販売専門の協和書局とは別に、やはり美華書館と称した印刷所が存在していたと考えていいのだろう。それでも、美華書館の最期はいつなのかが、問題としてやはり残ってしまう。

3 ブラウン説

新しい資料が出てこないままになるかと思われた。そこに宮坂弥代生が「美華書館に関する歴史的考察 史料紹介をかねて」*¹⁵において新しい知見を加えた。美華書館の廃業は1931年だ、と資料を提出したのである。

その資料というのは、Arthur Judson Brown, *One Hundred Years: A History of the Foreign Missionary Work of the Presbyterian Church in the U. S. A., With Some Account of Countries, Peoples and the Policies and Problems of Modern Missions*, New York, Fleming H. Revell Company ほかだ。該書には再版と書かれているが発行年は明示されていない。書目を見れば1936年発行となっている。宮坂は1937年の発行だと推測する。著者のブラウンは、1856年生まれの1963年没だから単純に計算して107歳の長寿を生きた人物だ。ならば、80歳くらいの時の著作である。

ブラウンは、美華書館の最期をどのように書いているのか。まず、そこから紹介する。

「……1931年、土地、建物そして設備機器を売る好機がおとずれ、それらは売却された。設備機器の購入者たちは、美華書館で雇われていた中国人キリスト教徒のグループだった」(375頁)

美華書館に雇われていた中国人キリスト教徒といえば、商務印書館の創業者のなかに確かにいる。

鮑咸昌(1864-1929)と高翰卿(1864-1950)だ。だが、鮑咸昌は1929年になくなっている。高翰卿が死去するのは1950年だから可能性があると思われるかもしれない。しかし、彼は1916年に商務の社長となったが張元済と性格、宗旨があわず1920年に辞職している。ましてや、鮑咸昌の兄咸恩(1861?-1910)と夏瑞芳(1872-

1914) はいずれも早くに他界した。1931年に美華書館の設備機器を購入できる、しかも美華書館ゆかりの関係者は、商務印書館にはいなかったことになる。

ブラウンが書いている美華書館が1931年に廃業したのは事実であるにしても、それと商務印書館は関係がないのではないか。

もうすこしブラウンの説明を読んでみよう。

彼は、APMP美華書館を説明して、といっても漢語名称は使用していないが、1844年マカオにはじまり、1845年寧波に移り1860年上海へ移転したと書く。従来通りの記述だ(それぞれの地で漢語名称が変化しており、それが別の問題を導き出している。しかし、ブラウンは漢語を無視するからその問題は生じない)。

美華書館は、各派教会印刷所の請負印刷を手広くするばかりか、印刷用品の供給も行なった。業務の隆盛を誇っていたが、1910年よりほかの印刷所との競争が激しくなる。美華書館で訓練を受けた人々のなかから独立するものも出てきた。その1例としてブラウンが紹介するのが、商務印書館だ。該当部分を翻訳する。

1898年、それらの人々は上海で商務印書館を設立した。彼らは最新式の設備機器をそなえた巨大な組織と20エーカーの敷地と3千人の労働者を雇用する工場に育てあげた。彼らはキリスト教徒であり教会の寛大な援助者だった。そして中国におけるキリストという大儀のために、彼らは自分たちの仕事を本当の価値あるものとすべく管理したのである。私たちが訪問した1909年当時、それぞれの重要な部門の長は、ひとつを除いてすべてキリスト教徒であり、責任ある地位についている60%の人々はキリスト教徒だった。商務は、政府の学校で使用される多くの教科書と流通している銀行券を多くの比率で発行している。374頁

ブラウンの紹介する商務印書館についての記述は、はたして正確なものかどうかを検討しよう。

商務印書館の創業年は1897年だが、それを1898年と間違っている。だいじょうぶかと不安になる。

「20エーカーの敷地」というのは、1907年に建設した宝山路の印刷工場を指す

と考えられる。

「3千人の労働者」は、1909年当時の人数をいっているらしい。当時の正確な統計は、今のところ公表されていない。だいぶ時間がたったものとして荘兪「三十五年来之商務印書館」*¹⁶がある。これには労働者の数を3,604名としている。宝山路の巨大な印刷工場で働く人数としては、「3千名」でもおかしくはない。

「1909年当時、それぞれの重要な部門の長は、ひとつを除いてすべてキリスト教徒」という箇所は、なにをいっているのか。

「重要な部門」というのは、組織内の部署という意味だろう。

商務印書館は、1902年の失火後にみつつの組織に編成した。すなわち、編訳所、発行所、印刷所である。

念のため、商務印書館編訳所編輯『上海商務印書館創業十年新廠落成紀念冊』（上海・商務印書館 光緒三十三(1907)年七月 非売品）を見たが、組織の構成については記述がない。時間の隔たりはあるが、『創立三十年商務印書館志略』（上海・商務印書館1926.5）によると、1926年当時の組織は以下のようになっている。

- 1 総務処（注：1916年設立）
- 2 編訳所 編訳部、委員会、雑誌社、函授社、事務部、出版部、附属機関（図書館、試験学校、幼稚園）
- 3 印刷所 印刷部份、製造部份、事務部份
- 4 発行所 発售部份、事務部份

組織としては、基本的に以上であると考えていいだろう。編訳所は張元済が、印刷所は鮑咸恩が、社長は夏瑞芳だから発行所の責任者だった。そうするとブラウンの書いている1909年当時における「それぞれの重要な部門の長」とは、彼らのことを指している。鮑咸恩と夏瑞芳がキリスト教徒だ。ひとり張元済を除いて、という指摘は正しい。

「責任ある地位についている60%の人々はキリスト教徒だった」の責任ある地位とはなにか。ひとつの可能性として理事たちがいる。

1909年4月15日の株主会において理事7名と監查理事2名を選出しているので

見てみよう。

それぞれの名前は、以下のとおりだ（†印でキリスト教徒を表わす）。

理事：張元濟、鄭孝胥、†高鳳池、印有模、高夢旦、†鮑咸恩、†夏瑞芳。監查理事：†張桂華（蟾芬）、張国傑（廷桂）。*17

全9名のうちキリスト教徒であると判明しているのは4名だ。これでは約44%にしかない。張国傑についてはわかっていない。もし彼を含めると5名となり約56%だ。60%に近いといえいえる。

以上、ブラウンの紹介は、商務の創業年を除いては、ほぼ正確であると私は判断する。だから、美華書館が1931年に廃業したというのは、それで正しいのだろう。

ただし、不満がないわけではない。美華書館と華美書局の合併についてなぜ触れないのか理解に苦しむ。

問題はそれでも残る。

1931年に美華書館の機器を購入した「美華書館で雇われていた中国人キリスト教徒のグループ」とは何か。また、1932年以降も美華書館を使用した刊行物が出ているのをどう説明するか。

4 結 論

解答は、本稿冒頭ですでに述べている。前出『中国基督教簡史』の説明にもどる。もどるだけでは芸がない。しかも記述不十分の箇所がある。そこでその原資料だと思われる文章を紹介する。章錫琛「漫談商務印書館」*18である

美華書館の消滅という箇所だけを翻訳する。

1932年「一二八」事変後、宝山路の商務の本工場が破壊され、全部の職員は解散となった。その中の邢志香、李開生らは資金を集めて美華書館を譲り受け、ミーレ印刷機および新しい設備を加え牯嶺路に小規模の印刷工場を設立した。商務が委託した印刷物を請負い、やはり「美華^{ママ}印書館」と名乗ったのだ。1937年「八一三」中日戦争がはじまると邢志香は開明書店と合作し、

2台の大型印刷機を開明の名義で武漢に運搬しようとした。開明のために専門に印刷するという契約で、機器を船に積み込んだ後、不幸なことに日本軍に強奪され、まもなく美華印書館は解散したのだ。(日本影印本63-64頁)

美華印書館と書いている箇所があって不統一だ。当然、美華書館である。当事者でさえ書き誤るほどにまぎらわしい。

前出『中国基督教簡史』は、不完全なかたちでこの文献を引用したから理解できなかったとわかる。

ブラウンが説明した1931年に美華書館の機器を購入したのは、もと商務印書館につとめていたグループだったのだ。

APMP美華書館は、1931年に廃業を決定した。その機器を中国人グループが購入したのは1932年だった。邢志香、李開生らはキリスト教徒であった可能性がある。だからブラウンはそう説明したのではないか。中国人グループは、元商務印書館職員だったというだけのことだ。ゆえに、商務印書館が美華書館を買収したと説明するのは正しくない。

美華書館の最期をまとめると以下ようになる。

1931年、アメリカ長老派教会の印刷所APMP美華書館は消滅した。1932年、元商務印書館職員だった邢志香らが美華書館の設備機器を購入した際、旧称をそのまま引き継いだ。つまり、同一名称を持ちながら経営主体が異なる2種類の美華書館が連続して存在したというわけだ。外から見ただけでは区別がつかない。邢志香らの美華書館は1937年頃まで存続した。だから、美華書館と明記する1934年の印刷物があっても不思議ではない。

【注】

- 1) 范慕韓主編『中国印刷近代史(初稿)』北京・印刷工業出版社1995.11。81頁。張樹棟、龐多益、鄭如斯等著『中華印刷通史』(北京・印刷工業出版社1999.9)も同様に説明する。
「1927-1928年間、美華書館停業、設備器材盤給了商務印書館」468頁
- 2) 《上海出版志》編纂委員会編『上海出版志』上海社会科学院出版社2000.12。223頁。葉再生

- 『中国近代現代出版通史』第1巻 北京・華文出版社2002.1。100頁
- 3) 朱聯保『近現代上海出版業印象記』上海・学林出版社1993.2。294頁
- 4) 張樹年主編、柳和城、張人鳳、陳夢熊編著『張元濟年譜』北京・商務印書館1991.12
- 5) 姚民權、羅偉虹『中国基督教簡史』北京・宗教文化出版社2000.11/2004.11第3次印刷。75頁
- 6) 『張元濟年譜』267頁。また、『張元濟日記』上下(北京・商務印書館1981。) / 張人鳳整理
『張元濟日記』上下(石家莊・河北教育出版社2001.1)にも出てくる。
- 7) 宋雲彬「開明旧事 我所知道的開明書店」『文史資料選輯』第31輯 北京・文史資料出版社1962.10 / 1980.11天津第2次印刷 / 日本復刻版1986.6.10。10頁
- 8) CHRISTOPHER A. REED. *GUTENBERG IN SHANGHAI: CHINESE PRINT CAPITALISM, 1876-1937*(『谷騰堡在上海：中国印刷資本業の発展一八七六 - 一九三七年』) HONOLULU: UNIVERSITY OF HAWAII PRESS, 2004又、TRONTO: UBC PRESS 2004。87頁
- 9) 合併のいきさつは、つぎの文献による。阮仁沢、高振農主編『上海宗教史』上海人民出版社1992.7。817-818頁
- 10) 黄光域『近代中国專名翻譯詞典』成都・四川人民出版社2001.12。233頁
- 11) 小宮山博史「明朝体、日本への伝播と改刻」印刷紙研究会編『本と活字の歴史事典』柏書房2000.6.5。239頁。「美華書館の廃業は1931年という」(小宮山「上海美華書館」(阿佐ヶ谷美術専門学校)『ジ・アザー』第4号2002.10.12。97頁)
- 12) 何凱立著、陳建明、王再興訳『基督教在华出版事業(1912-1949)』成都・四川大学出版社2004.8。70頁
- 13) 小宮山「明朝体、日本への伝播と改刻」。239頁
- 14) 郭衛東主編『近代外国在华文化機構綜録』上海人民出版社1993.12
- 15) 宮坂弥代生「美華書館に関する歴史的考察 史料紹介をかねて」中央大学『大学院年報』第4号総合政策研究科篇2001.2.20
- 16) 莊俞「三十五年来之商務印書館」莊俞、賀聖黨編『最近三十五年之中国教育』上海・商務印書館1931.9 / 『(1897-1992) 商務印書館九十五年 我和商務印書館』北京・商務印書館1992.1。前者の54頁と55頁
- 17) 『張元濟年譜』80頁
- 18) 章錫琛「漫談商務印書館」『文史資料選輯』第43輯1964.3/1980.12第二次印刷(日本影印) / (有刪節)『(1897-1987) 商務印書館九十年 我和商務印書館』北京・商務印書館1987.1 / (選) 宋原放主編、汪家熔輯注『中国出版史料・近代部分』第3巻 武漢・湖北教育出版社2004.10)

ヘブバーン、マティーア兄弟と美華書館

『清末小説』第35終刊号（2012.12.1）に掲載。商務印書館との関係で美華書館が出てくる。その美華書館に辞書の^①を依頼した人が複数存在する。まだ日本で辞書を印刷する技術はなかった時代のことだ。日本ではヘボンで知られるヘブバーンもそのひとりだった。

上海にあった印刷所の美華書館は、英語名をAmerican Presbyterian Mission Press（略称APMP、またはPMP）という。日本語に直訳すれば、アメリカ長老派教会伝道印刷所となるだろう。

宣教師が書いた手紙に「われらがミッション印刷所」という表現を見ることがある。アメリカ長老派教会の関係者が使えば、APMPを意味する。組織が異なれば、呼称が同じミッション印刷所であっても別の印刷所になる。区別するためには、漢語で主として使用する美華書館がわかりやすい。また、中国では俗に長老会書館などという。そう記した印刷物があるわけではない。あくまでも俗称だ。

美華書館は、現在は存在していない。だが、周知のように日本と中国の双方で有名だ。

中国においては、キリスト教関係を主としてそのほかの分野を含めた印刷物を多数送り出して知られる。美華書館が導入した印刷機器、漢字の活字製造法は、中国近代印刷史において大きな役割をはたした。また、著名であるひとつの理由は、商務印書館を創立した中国人の幾人かが美華書館で働いていたからだ。人と宗教のつながりで美華書館の名前がでてくる。

日本では、日本語の辞書複数を印刷したことで知られている。和英英和仏和独和といったそれぞれの辞書を印刷するには、当時の日本ではまにあわなかった。上海の美華書館に印刷を依頼せざるをえなかったという。

今までにわかっていることを紹介する*1。

1 ヘプバーン辞書初版と美華書館

上海の美華書館で印刷された日本語辞書複数がある。そのなかで著名なのは、ヘプバーン（James Curtis Hepburn, 1815-1911。日本ではヘボンで知られる。アメリカ長老派教会の宣教医師）の『和英語林集成』（美国平文先生編訳、1867初版）だ*2。ヘプバーンは自分が編集した和英辞書を印刷するため、日本から2度、中国上海に出向いている。初版のときは、1866年に夫人および岸田吟香と一緒におもむいた。第2版については、5年後の1871年に夫人と連れだって行った。

まず、ヘプバーン書簡から辞書初版にふれた箇所を主として紹介したい。外国伝道局本部（以下、アメリカ本部と略す）にあてた手紙から関係部分のみを引用する。以下は、高谷道男編訳『ヘボン書簡集』（岩波書店1959.10.30 / 1977.10.20二刷）による。また、岡部一興編『ヘボン在日書簡全集』（教文館2009.10.10）に収録されるものには、「全集*頁」と末尾に追記する。

ヘプバーンは、横浜において伝道と医療に従事していた。そのうえに、辞書の原稿執筆を進めながら、上海で印刷することを考えている。

1864年2月10日*3 わたしは、他のことをほとんど止めてしまうほどに、辞書の編纂に没頭しております。もしできることなら、来秋、辞書の印刷を始めたいと思っております。そのことでわたしはガンブル氏と文通をしております。そして上海に行き、印刷が終わるまで滞在しなければならないでしょう。この著作が印刷されたら、本部に一切費用をかけずに印刷しても、本部の財産とすべきであると、あなたはお考えになるでしょうか。この件についてあなたのお考えをお聞きしたいと存じます。当地の友人の一人が、辞書

の売上から返済するという必要資金のすべてを立て替えようと申し出てくれております。このことについては、わたしの好むように自由にさせていただきます。全集165頁

この時点で、上海の印刷所美華書館は呉城の小東門外にあった*4。その責任者がギャンブル（William Gamble, 1830-1886。日本ではガンブルで知られる）である。彼とヘプバーンは、ともにアメリカ長老派教会に所属している。ギャンブルの名前は、日本語辞書を印刷することでアメリカ人宣教師のあいだですでに知られていた。のちのことになるが、彼は美華書館を辞職した1869年、来日して本木昌造らに活字製造と活版印刷の方法を伝授した。日本では多くの人が知っている*5。

ヘプバーンの手紙でひとつ目を引くのが、印刷費用についての言及だ。アメリカ本部からの出資はないらしい。ヘプバーンの支援者が費用を負担するという。

辞書の編集と印刷時の校正に協力した日本人がいる。ただし、ヘプバーンの手紙には名前もでてこない。岸田吟香（1833-1905）である。

和英辞書編集の状況を知るために、先行著書から引用して紹介する。

眼病をわずらった岸田吟香が横浜のヘプバーンに治療してもらったのが契機だった。岸田はヘプバーンが和英辞書を編纂中であることを知る。また、ヘプバーンからいえば、和漢語をよく知る日本人の助手を求めていた。ふたりは合意し、岸田はヘプバーンの施療所に移る。彼は施療所の手伝いをしながら、辞書編纂にも協力した。

（樽本注：施療所での）施療を終ると、ヘップバーンと吟香とは書齋に退いて、和英辞書の編纂を進めた。ヘップバーンは施療所をこゝに移した文久二年（一八六二年）の終り頃から、この大著の編述に手を着けており、吟香の移つて来た元治元年（一八六四年）には、誰を助手にしたものか、すでに「真理易知」と称する邦文の翻訳書を公刊しているばかりでなく、自ら「平文」と号するほど、日本語に対する自信を持つていたけれども、何しろ渡日後六年余の時日を経過したのに過ぎない時であるから、厳密な辞書の編纂となると、助手吟香に負うところが多く、吟香は吟香でまたヘップバーンの人となり

心から推服していた上に、和英辞書の編纂に特殊の興味を持つていたので、医療以上の情熱と興奮とを持つてこの仕事に精魂を傾注したのである。その上、吟香は和漢の学に精通し、庶民の言葉にも通じており、且つ、多少、英語をも解したので、和英辞書の編集には最も適任者であつた。ヘップバーンは偶然にも絶好の助手を得たわけである。^{*6}

文中に見える『真理易知』の翻訳書は、そのとき日本では印刷できなかった。あとで述べる。

説明されてみれば、和英辞書の編纂に日本人助手がいたことは、当然のような気がする。ヘップバーン書簡に岸田の名前がないとしても、日本では周知のことだ。辞書の編集が終了してのち、ヘップバーンは、それを印刷するため上海に行った。

1866年12月7日 御承知のように、わたしは上海に来ております、理由は辞書の印刷のためです。十月十八日に横浜を出発しました。ここに来てから赤痢と間歇熱にやられ二回も病床につきました。そうひどくなかったのが長くは床についておりませんでした。でもやせて力が抜けました。全く上海が恐ろしくなりました。上海はマラリヤの本場です。しかし仕事を完成するまでここに止まりますが、それがすんだら、喜んで日本に帰って行きます。印刷の仕事はゆっくりしております。ガンブル氏の印刷技師としての腕前と天分とがなかったら、全くできなかったでしょう。これまでのところではあらゆる障害を超えることができたのです。彼が最も美しい日本字の活字を銅製の母型に作り、一揃いの日本字の活字を鋳かためたのです。英語の大文字、アクセントのついている母音や、イタリックなどが無いし、また上海でそれらを得ることができないので、ガンブル氏自ら母型を作って、必要なだけを鋳かためました。これだけお話ししたら、印刷がどれ程むずかしいものかがおわかりになるでしょう。このために一ヵ月以上を費したのです。わたしどもは着々と仕事を進めております。僅か活字をならべるだけに五人の植字工を使って、二日に八ページの印刷をしあげたいと思っております。やっと四十ページおわり、A・BとCの一部ができたわけです。この仕事がいつ完成

するか、はっきりわかりませんが、おそらく六ヵ月では終わりますまい。176-177頁、全集199-200頁

印刷の中身は和英辞書だ。日本語活字が必要になる。美華書館には、当然ながら基本的な英字と漢字の活字はある。だが、ヘプバーンの手紙を見れば、英字であっても特別な書体は所有していなかった。

日本字についていえば、当時、所蔵していないわけではない。それより以前に、ブラウン (Samuel Robbins Brown, 1810-1880) 編『Colloquial Japanese 口語日本語対話』(1863。本稿では『日英会話篇』を使用する)を美華書館が印刷したとき、日本語のカタカナを製造している*7。

ギャンプルが「最も美しい日本字の活字を銅製の母型に作り」というのは、ヘプバーンのいうとおりだろう。しかし、その「最も美しい日本字」は、どこから持ってきたのか。説明はない。

上海の美華書館でヘプバーンとともに仕事をこなしたのが、さきの岸田吟香だ。彼の書いた日記がある。

2 岸田吟香の上海日記

岸田吟香『吳淞日記』*8という。和英辞書の印刷を管理するヘプバーンを手伝うために、岸田は上海に長期間滞在した。題名のとおり、そのときの状況を記録したものだ。現存するのは第3、5、6の3冊だという。第2冊は、「参考」として最近の同書に翻刻収録されているからこちらも見ると(漢数字は旧暦を意味する。〔 〕に新暦をいれる。[]は異同を示す)。

同治五年十二月八日〔1867.1.13〕 午後、小東門外の美華書館へいたら黄廷元がいふに、先刻、張魯先生と涂子巢、高鶴亭三人でおまえさんの處へお尋申とていきましたといふから、……390頁

岸田の滞在先（湯先生家）は虹口にあった。ヘプバーン夫妻も、岸田と同じ場所に滞在していたのではないか。辞書の校正と原稿執筆が同時に行なわれているならば、そのほうがなにかと便利だっただろう。日記の記述だけでそう推測する。ただし、断定はしない。ヘプバーンは、「ヘボン（また、へぼん）」として登場している。ふたりで辞書について意見を交換したとか議論したとかいう記述も、日記にはない。仕事の分担がはっきりしていたのだろう。当時独身だったギャンブル（樽本注：彼が結婚するのは、アメリカに帰国してのちフィラデルフィアにおいてである。時に44歳）は、小東門外にある美華書館の（たぶん、責任者用）家屋に住んでいた。教会堂については言及がない。日記の記述を拾って以上のように理解した。

岸田は、辞書の校正をするために美華書館へ毎日通っている、と私は想像していた。だが、そうではなさそうだ。校正用ゲラが出てくる状況により忙しさの度合いは変化しただろう。ヘプバーンとは違って、岸田にとって多忙の時期は、すでに終わっていたのかもしれない。ひまな時間に彼は、なにをしていたか。吟香日記を読めばおおよそがわかる。絵を描いたり作詩をしたり、名前のあがっている中国人、美華書館の工員だろう、と飲んだり食事をしたり。上海県城内を散歩して書画を売りつけられたり。上海を訪れた日本人の相手をしたり。「靖遠街といふ女郎屋ばかりあるまちをひやか」（52頁／319頁）したり。また、書画の関係で上海にいる中国の文人と筆談したり、と平穏な日常を上海ですごしている。わざとそう書いているのか。あるいは、多忙を多忙とは思わない豪胆な性格なのか。文面からは、仕事に苦しんでいる様子は見られない。悠々と作業を進めている。

辞書の校正刷りは、印刷所から岸田の宿泊先にも配達されていた。

十二月九日〔1867.1.14〕 四五日前に此樓上にて協文と字書を校訂してみたりしに、……391頁

校正をするのは、岸田だけでなく中国人も手伝っていることがわかる。

十二月十三日〔1867.1.18〕 今夜字書二百枚まで板に成て来る。規模奇謀なという字の處までいくなり。しかし紙数八百張なり。395頁

「規模奇謀」は、ともに和英辞書の200頁に掲載されている。「二百枚まで板に成て」というのは、200頁まで版組されたという意味だ。

十二月二十五日〔1867.1.30〕 和英対訳詞書も、もはやはんぶんできあがりになつたとおもふ。こんやまとまるといふことバの處のあたりまで校正した。405頁

旧暦翌年、元日に小東門外美華書館へ行くと黄廷元、涂子巢、高鶴亭ら20人ばかりが集まって年始の宴を催している。そのころ、岸田は和英辞書を日本語で「和英対訳詞(字、辞)書」と呼んでいた。彼が独自に使用する仮称である。正式の和訳書名はもっとあとで定められることになる。和英辞書に関連する箇所をまとめて示す(影印頁/復刻頁の順)。

同治六年正月十五日〔1867.2.19〕 扱又字書の活字を新にうゑた處のしたずりがきてみたから校合して……58頁/319頁

二月朔日〔1867.3.6〕 辞書が四百張(樽本注:この張は395頁の張と数え方が異なる)の余できあがる。今情死^{シンヂウ}といふことバまで板になつてきたのを校合する。118頁/337頁

三月六日〔1867.4.10〕 七つ半ごろ美華書館へいく。是八詩韻合璧の事についてなり(中略) けふ英語をさきにして和語をひく方の字書がはじめて版になつてくる。166頁/351頁

「情死」が出ているのは辞書の408頁だ。「四百張の余」というのはそのことをさしている。『詩韻合璧』は韻書の名前。どういう理由で岸田が美華書館に行ったのか。詳細は書かれていない。ヘプバーン辞書初版は、和英が558頁(附録を含む)、英和が132頁の合計690頁である。3月6日時点で全作業の約6割が終了しているにすぎない。約1ヵ月後の4月10日時点では、約8割までのところに来た。

同じ頃、ヘプバーンは、アメリカ本部にどのような報告書を送っているか。

日本語の活字を作成するのは手間がかかるし骨が折れる。ギャンブルはヘプバーンの要望を受け止めて着実に実現した。ヘプバーンは、ギャンブルの「印刷技師としての腕前と天分」を認めている。「あらゆる障害を超えることができた」というとおりだろう。その結果、彼の技術にたいする信頼がヘプバーンに生じたとわかる。

1867年1月25日 丁度今はいつもよりももっと仕事におわれているのです。辞書は目下、一日六ページの割で印刷中です。誤植の多い校正刷の訂正をするほかに、最初計画していなかった「英和」の第二編を書き上げなければならぬのです。第一編「和英」の部の約二百五十ページ分が印刷出版されました。和英の第一編は大体六百ページで、第二編（英和の部）は多分、二百五十か三百ページになります。六月一日までに全部を完成したい希望です。経費がいくらかかったか、申し上げにくいのです。植字だけで一ページ二ドル払っております。右の書物の売上高の中からこれを払うつもりです。178-179頁、全集201頁

岸田の日記にただよのんびりした雰囲気とは、異なる。ヘプバーンは、仕事におわれている。新しく英和の原稿を書く必要ができたからだ。印刷をはじめたときは、2日に8ページの速度だった。1日になおせば4ページだ。約2ヵ月後にはそれが6ページに加速している。たぶん、活字もふえ、印刷にも慣れたのだろう。1日6ページの速度であれば、あと約1ヵ月は上海に滞在しなければ作業は終わらない。上海での支払いもドルで計算している。

岸田吟香『吳淞日記』から、もうすこし和英辞書に関係する部分を紹介する。

1867年三月十五日〔4.19〕 けふへぼんデクシヨナリイの序をかく（樽本注：このデは、英字Tに濁点をつけて表わす）。204頁/361頁

1867年三月二十二日〔4.26〕 けふ和英辞書のうちへいれる為に日本の仮名。万葉仮名[字]。カタカナ。ひらかな。いろは。の仮字五体の版[板]下を

かく。232頁 / 369頁

1867年三月二十三日〔4.27〕 けふへぼん^{デクシヨ子リイ}対訳辞書にあたらしく名をつけてください。ほんのとびらがみにかくやうによい名をといふから和英詞林集成とつける。235頁 / 370頁

1867年三月二十五日〔4.29〕 雨ふる。和英語林集成のとびらがみのはんしたをかく。双鉤でかいたがよくてきた。詞の字を語に改めていちりんねあげをした。へぼんだら五十枚くれる。これまで久しくほねを折て此ほんを手伝てこしらへたからおれいにくれるなり。242頁 / 371-372頁

5種類の字体を版下に書いた。これは和英辞書に収録される「A TABLE OF JAPANESE KANA 日本語仮名一覧表」に使うためだ。万葉仮名といってもそれが辞書全体に使用されたわけではない。日本語にはこんな文字があります、と紹介するため一覧表にした。

ヘプバーンが岸田に書名をつける、というのは奇妙に聞こえるかも知れない。だが、もとは英語の辞書だ。JAPANESE AND ENGLISH DICTIONARY WITH AN ENGLISH AND JAPANESE INDEXとヘプバーンは決めている。日本で発行するから、その日本語訳が必要だった。岸田がそれまで称していたのは「和英対訳詞(字、辞)書」だ。それを変更して『和英詞林集成』にする。さらに文字をいれかえて『和英語林集成』に決定した。「詞林(4厘)」から「語林(5厘)」へ「いちりん(1厘)ね(値)あげをした」としゃれたわけ。あまりにも広く知られている。引用するのにかなり躊躇する。ただ、つけ加えれば、ことば遊びができるほど岸田は気持ちに余裕があった、と私は理解する。双鉤は、輪郭だけの中抜き字体をいう。

岸田がヘプバーンから辞書を手伝った礼としてもらった50ドルは、当時どれくらいの価値なのか。

美華書館での植字に、1ページあたり2ドルを支払っている、とヘプバーンは書いた。ならば、辞書25頁分になる。岸田は、その金額が多いとも少ないとも書いていない。

人件費をもとに比較すればどうか。

ヘプバーンは、神奈川で日本人を雇ってその給料を払っている。書簡にこういう部分がある。「1861年5月17日 寺の家賃は一年約百七十五ドルです。雇い人の手当は四十五ドル、医薬その他は百ドルから百五十ドル以上かかり、概算で、三百七十ドルになります。この目的のために以上の金額をわたしに渡して下さいますが、本当にそれだけの支出に値するものだとわたしは考えます」(84頁、全集84頁)

雇い人の手当が45ドルという。それから見れば、岸田に与えられた編集協力費50ドルは、日本の雇い人とほぼ同じ水準になる。

あるいは、つぎのようなヘプバーンの書簡はどうか。和英辞書初版出版に要した経費について報告する。

1872年4月11日 さて、前にも申し上げたように、書物をミッション本部に渡し、その財産とするように提案しています。すなわち、この書物を出版し、その出版に要したわたしの一切の経費を差し引いた後、その残額をミッションの会計に入れるのです。第一版の販売によって生じた利潤の正確な計算はつけなかったのです。それはただわたし個人のことだからと思って全く計算を記録しなかったのです。出版した年にその利益の中から千ドルを妻にプレゼントとして与えました。それは妻が始めから終わりまで忠実に仕事を助けてくれたからです。今、妻の分を保留していただき、残額ほぼ四千ドルをこの第二版の出版のために用いたいのです。上海での経費は仲々かかりませんが、ミッション本部は他の費用以外一ヵ月百十ドルしか下さないからなのです。わたしは勘定をつけておいて、この仕事を終わったとき計算書を提出いたします。242頁、全集259-260頁

辞書初版出版に要する経費は、支持者からの支援とヘプバーンの自費によってまかなわれた。岸田の上海行に要した交通費、滞在費、食費なども、ヘプバーンが負担したのだろうとは推察する。しかし、詳しい事情はよくわからない*9。

岸田の日記には、必要経費についての説明がみあたらない。書いた部分はあったが今は行方不明だとも考えられる。結局のところ、50ドルの編集協力費である。

ヘプバーンが妻に1,000ドルを与えたのに比較すれば、差がありすぎる。岸田の貢献もヘプバーンからみると、金銭になおしてそれくらいの価値だった。

当時の美華書館責任者は、すでに何度も名前が出ているギャンブルである。岸田日記には「姜先生」という表記で登場する。ギャンブルが、姜別利（また姜關理^{*10}）と漢訳されるところからきている。

1867年正月十六日〔2.20〕 ほかにもしらぬ人々をつれて吳淞のかしを西南へ小東門外までいて姜先生の宅へよる。酒などを[×]こちさうになりて...
...63頁 / 321頁

1867年正月十六日〔2.20〕 （樽本注：岸田の友人が）姜先生の處へいて活字板をするのも見たといふから.....66頁 / 321頁

1867年正月廿七日〔3.3〕 小東門外姜先生の處へいてめしをくふて.....
101頁 / 332頁

岸田は、ギャンブルの住居を訪れることがあった。彼が日記に残したギャンブルの名前は、以上だけ。辞書の印刷について話が出たかもしれないが、記録に残すまではないと考えたか。あるいは、岸田の興味は酒食事のほうにあったのか。よくわからない。

上に見える「姜先生の處へいて活字板をするのも見た」とは、活版で印刷している現場を見学した、ということだ。ギャンブルの住居と美華書館はほとんど同じ場所にある、と考えていいだろう。

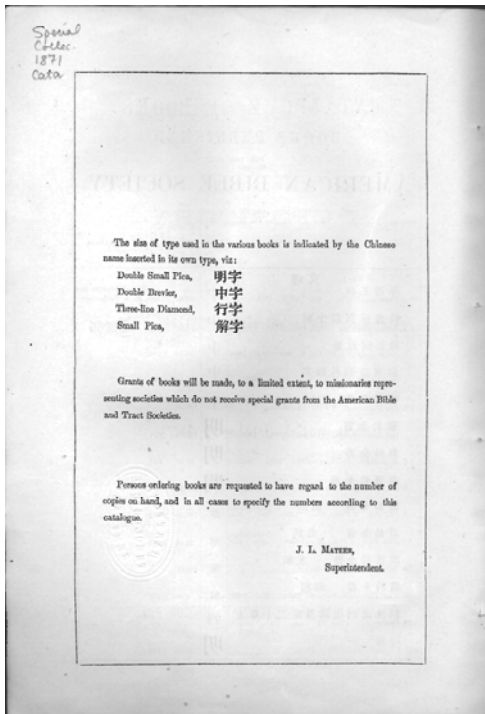
3 日本語訳『真理易知』の印刷

話が前後するが、同じくヘプバーンの1867年1月25日付の書簡からもう少し引用する。

ガンブル氏はわたしが三年程まえに版木にしておいた小冊子（訳注、「真理

易知」のこと)を印刷しております。ガンブル氏はわたしが日本で作って来て来ている版木から、かなり立派な活字を作りました。ガンブル氏は母型を作ったので、わたしどもの欲しいものは何でも日本語で印刷することができるようになりました。180頁、全集202頁

訳注にある『真理易知』とは、マッカーティー (Divie Bethune McCartee, 漢名麦嘉締培瑞, 1820-1900) が中国人向けに漢語で書いた著作だ。マッカーティーもヘブバーンと同じくアメリカ長老派教会の宣教医師。1844年中国マカオに到着。のち寧波に移動した*11。寧波に美華書館の前身である印刷所が置かれていたとき、マッカーティーは3代目責任者をつとめている。



美華書館『在庫目録』1871(部分)

『真理易知』は、ヘブバーンが監督し助言をあたえて日本語に翻訳した39丁の小冊子だった。翻訳したのは1862年だ。同年12月9日付書簡にこう書いている。「わたしは最近「真理易知」というマカルテーの書いた中国語の小冊子を翻訳いたしました。この書はわが長老派のミッション印刷所の出版目録に出ています。ここで木版印刷して出版したいと考えております。多分「キリスト教書類会社」(Tract Society)の援助で出版できましよう」(118頁、全集140頁)

『真理易知』が掲載されているその『出版目録』は、1863年版らしい。私がウェブ上で見る『在庫目録』は、1871年版だ*12。

収録された各種書籍には、値段と在庫部数が明示されている。美華書館は、印刷するだけでなく販売もした。書店を兼ねている。

印刷依頼者別にまとめられているこの『在庫目録』には、つぎのような記載が

ある。

『真理易知』は、キリスト教小冊子出版会 (Tract Society) および長老派教会外国伝道局 (Presbyterian Board of Foreign Missions) の部にある。使用言語は「文理 WEN LI」、すなわち文言だ。

9頁 102 真理易知

Easy Int. to Christian Doct. 12mo. 36p. 1867 明 .90 31 D. B. McCartee

「12mo.」は、判型でいう十二折り判 (twelvemo) のこと。「明」は活字の大きさ (Double Small Pica) を意味する*¹³。活版印刷だからヘプバーンが持ち込んだ木版とは違う。100部につき0.9ドルの価格で販売し31部の在庫がある。

『真理易知』初版16丁は、1853年に寧波で刊行されたという。ゆえに美華書館のものは、何回目かの重版だ。

版木にしたのは「三年程まえ」とヘプバーンは書く。正確に言えば、1863年のことだった。アメリカ本部ラウリー宛の同年3月26日付書簡には、版木を制作中だとある。4月29日付では、未完成で版木師のてもとにある、という。それを上海の美華書館に持ち込んで印刷刊行した。

奇妙なことだと思われるかもしれない。版木になっているものならば、日本において印刷できたであろう、と。だが、当時の日本は江戸幕府の末期である。見つければ禁止されるとわかっていて、頒布禁止になるばかりか、関係者の身に危険がおよぶ可能性もある。

同1863年10月18日付書簡につぎの語句がある。「わたしは寧波の^{ニンポー}マカルテー博士の書いた中国語の小冊子を翻訳し、出版できるように版木に刻んであります。けれども、日本語の教師を失う心配から、いやむしろその教師の生命を危くする恐れから、それを印刷できなかったのです」(140頁、全集156頁)

ヘプバーンは、1873年のニューヨークにおける講演原稿でもつぎのように説明している。「上海にいた間に日本語の最初のキリスト教の小冊子五千部を印刷しました。それはD・B・マカルテー師が中国文で書いた「真理易知」の翻訳です。その小冊子はひそかに横浜で版木にしたが、幕府を恐れてこれを印刷する日本人

が得られなかったので版木のまま上海に持って行って、そこで印刷したのです」(249頁、全集266頁)。そのほか、1864年2月11日付書簡にも聖書の木版印刷に関連して「命がけ」(144頁、全集166頁)などと説明する。

『真理易知』は、漢字とヒラガナを使用して木版に彫られた*¹⁴。そうすると、「ガンブル氏はわたしが日本で作ってもって来ている版木から、かなり立派な活字を作りました」という「版木」は、それとは別物になる。ヘブバーンらが必要としたのは日本語カタカナであったからだ。

以上のように、『真理易知』が印刷されているとヘブバーンが報告したのは、1867年1月25日付の手紙だった。

木版で印刷されたヘブバーンの該翻訳書も、前出『在庫目録』に収録されている。

10頁 128 真理易知 日本字 木板

Easy Int. to Christian Doct.12mo. 78p. 1868 Jap. 3.90 41 J. C. Hepburn

木版だから活字の大きさは関係がない。そこは「Jap.」とだけ記載される。「3.90」も100部あたりのドル価格。41部の在庫がある。印刷年は1868年になっている。ヘブバーンの1867年1月25日付手紙では、印刷中だとあった。印刷時期は、遅くとも1867年の年内だろう。目録の記載は、時期がすこしずれている。

4 ヘブバーン辞書第2版と美華書館

ヘブバーン辞書は、初版発行が1867年だった。それから数えると4年後の1871年、該辞書の第2版を同じく上海の美華書館で印刷することになる。

その間、1869年にガンブルは美華書館を辞職した。責任者は、別人に交替している。ヘブバーンの手紙にはガンブルの名前が出てこない。それが理由だろう。

問題が発生したのは、この辞書第2版を印刷したときだ。

アメリカ本部のラウリーにあてたヘブバーンの報告は、意外なことにその時の模様を説明していない。

1871年12月8日 上海にきて三週間は印刷の準備に過ぎました。やっと昨日から印刷に着手しました。一日八ページばかり進めるとすれば大体四ヶ月ここに滞在していなければなりません、わたしには喜ばしいことです。ノミッション印刷所は現在、大勢の職人を使って非常に多忙を極めております。そして、わたしが数年前持って来た電気製版の活字で立派に日本字を入れた英和辞書を印刷し終わったばかりです。この辞書は八百ページ以上の大作です、ウィリアムス博士もまたその著作「英華分韻撮要」を出版しております。それは、ほぼ千五百ページの大冊でしょう、非常に必要な書物です。
239頁、全集257頁

このノミッション印刷所も、いうまでもなく美華書館のこと。アメリカ人宣教師たちは、ノミッション印刷所（APMP）と呼ぶのが普通だ。漢字名称は、あくまでも中国人のためにある。

12月8日付で「上海にきて三週間」が経過していた。ヘブバーンの上海到着は、およそ1871年11月中旬であることがわかる^{*15}。到着月を視野にいれているのは、美華書館の責任者人事に関係してくるからだ（後述）。

4年前では2日に8ページから1日6ページの印刷速度だった。今回はそれが1日8ページになった。印刷速度は確実に増加しているように見える。

アメリカ本部あての書簡は、公式なものと考えていいたろう。印刷所が「大勢の職人を使って非常に多忙を極めております」と書いてあるところを見れば、辞書の印刷は順調にすすんでいるような印象を受ける。だが、実はそうではなく、ヘブバーンの和英辞書とは別のことがらで印刷所は多忙を極めているのかもしれない。

よく読むとヘブバーンの書いた文面に理解しにくい記述があることに気づく。和英辞書第2版は、「やっと昨日から印刷に着手しました」とある。ならば、「立派に日本字を入れた英和辞書を印刷し終わったばかり」というのは何を指すの

か。ヘプバーンの和英第2版とは別の英和辞書らしい。書名からして異なる。だが、これについてもそれ以上の説明はない(後述)。

もうひとつおかしなことがある。「ウィリアムス博士もまたその著作「英華分韻撮要」を出版しております」だ。手紙の流れからいえば、ウィリアムス(Samuel Wells Williams, 1812-1884)の『英華分韻撮要』も美華書館で印刷したように読める。

該書の書名は、*A TONIC DICTIONARY OF THE CHINESE LANGUAGE IN THE CANTON DIALECT*という。そこからわかるように、広東語辞書だ。印刷されたのは広東省城で、しかも1856年のこと。1871年よりだいぶ以前の辞書が、そのうえ美華書館が印刷していないものが、どうしてここに出現するのか、と思わぬでもない。

ウィリアムスの著書のうち美華書館で印刷したものは、たしかにある。*A SYLLABIC DICTIONARY OF THE CHINESE LANGUAGE, ARRANGED ACCORDING TO THE WU-FANG YUEN-YIN WITH THE PRONOUNCIATION OF THE CHARACTERS AS HEARD IN PEKING, CANTON, AMOY, AND SHANGHAI*, (SHANGHAI: American Presbyterian Mission Press, 1874)だ。しかし、この印刷年はのちの1874年であって1871年ではない。いずれも該当する事実がないから不思議に思う。

ヘプバーンは、上海で印刷をはじめたばかりだからか、アメリカ本部にむけて具体的な状況は書いていない。いや、印刷が完了して日本横浜にもどってからも同様だ。

1872年7月22日付「上海で仕事を無事完了し、二十日の土曜日、大喜びで帰浜いたしました。予定以上、上海に滞在しましたが、炎暑がことにはなはだしく、大変しのぎにくい毎日でした」(243頁、全集260頁)。上海は炎暑だったという。

5 弟スレーターへの手紙

彼が弟スレーター(Slator Clay Hepburn, 1819-1895)にあてた私信では、様子が異なる。

ヘプバーンは、上海に長期滞在することを最初は苦にしていない。ラウリーに

は、上海滞在は「わたしには喜ばしいことです」と書き送っているほどだ。だが、結果からいうと、第2版の印刷はそれほど順調にはすすまなかった。長い期間の作業をへて印刷を終わったあとだ。当時の上海美華書館の内部状況が、彼の書簡に違ったかたちで出現する。

和英辞書第2版の刊行が終了し、ヘプバーンが上海より日本横浜にもどってからの手紙である。以下は、高谷道男編訳『ヘボンの手紙』よりの引用。

1872年8月5日 わたしが上海にいた時、君（樽本注：弟スレーター）からの手紙を見たのですが、仕事に追われていたので、返事を書くひまがなかったのです。辞典の出版を終わり、約二週間前にこの家に着きました。上海に八カ月以上もいましたが、これほど困難な仕事は今までにありませんでした。わたしはそこで校正刷りを訂正したほかに、かなり多くの原稿を書きました。それで、たびたび病気になる、とても弱って、やっと腹ばいで動けるほどでした。試練の時でした。しかし、主はわたしを無事に守ってくださいました。

111頁

上海の風土は、ヘプバーンの身体にはあわなかった。前回は赤痢と間歇熱だったし、今回は炎暑と過労だ。

1872年4月11日付ラウリーあての書簡で補足する。「上海に来てからわたしの健康はよくありません。痼疾の瘡おこりと発汗に悩まされており、上海の冬の寒さと湿気の多い気候のため妻は肺臓と気管とをやられ、ここの医者の忠告によって妻を香港にやることにいたしました。最近かなりよくなって帰ってきました」(243頁、全集260頁)

ヘプバーン辞書第2版が実際に刊行されたのは、同1872年の7月だ。その編集に力を注ぐあまり病気にかかったのでは作業の進行が遅延するのも無理はない。これにつづいて美華書館の内情に触れている。興味深い。

ミッションの印刷所も、またひどく混乱していました。有能な実務的な人物を切実に求めております。印刷所の仕事をさせるのに、あのような人をよ

こすとは全くあきれたものです。ミッションの印刷所では昨年以來、四人のちがった主任者を雇っていたが、そのうちの三人は教職者で、一時的にそこにいただけで、印刷に特別の関心はなかったのです。今もその印刷所にいる一人は傲慢で、でくのぼうです。有用どころか邪魔になる人です。もしわたしが辞書を印刷するために上海に行かねばならぬとしても、決して再びあそこではしません。ともかくも全く疲れてしまいました。どこか他の印刷所にかえたいと思います。111-112頁

美華書館の組織内部がひどく混乱していた、という。もう2度とあそこでは印刷しない、というほどの混乱とは、何なのか。

ヘプバーンの上海滞在期間は、1871年11月中旬から翌1872年7月の間だ。彼はひどく腹を立てている。だが、混乱していたというだけで、具体的な記述があるわけではない。

日本語活字についていえば、辞書初版を印刷したとき、ギャンブルが母型を作った。第2版ではそれほど不自由はなかったはずだ。ヘプバーン自身が、「そこで校正刷りを訂正したほかに、かなり多くの原稿を書きました」とのべている。大量の訂正、追加を行なったらしい。

辞書の編集と印刷には、膨大な労力が要求される。作業の一部分が滞れば、全体の進行に影響をあたえる。編集上の修正を多くほどこせば、それだけ余分に時間がかかってしまうのは当然だろう。

しかし、ヘプバーンが見るところ、混乱の原因は校正、書き換え、加筆を行なった彼自身にはない。そういう認識だ。彼にいわせると、いらだちの原因は主任者4名にある。短期間にくるくる替わる。彼らは印刷に関心はなかった。「教職者」だというのだから、やはり責任者を指すのだろう。しかも、「あのような人をよこす」と書いている。中国に派遣されているアメリカ長老派教会の人間ということになる。

日本で言及されるのは、だいたい以上の情況までだ。ヘプバーンは困難を克服して美華書館での印刷を推し進め完成させた。無能な当時の美華書館責任者たちだった。彼らとは違って、今は退職している、有能なギャンブルへの思いが

強調される。

ヘプバーンは「あのような人」「四人のちがった主任者」と書くだけ。また「今もその印刷所にいる一人は傲慢で、でくのぼうです」「邪魔になる人です」などとは、やはり私信でしかのべるほかなかったものらしい。それだけで、アメリカ長老派教会の関係者ならば、すぐに誰と特定できたのだろうか。

こういう些細で微妙な箇所は、翻訳者も注記することを避けた。ほめるのには名前を出すか、けなすのに名前は不必要だという判断なのだろう。

ところが、記録を残しているのはヘプバーンだけではなかった。あるひとりの人物、かつて美華書館の責任者であった人がいる。この人の伝記に当時の情況に言及する部分がある。

6 美華書館の責任者たち

その内容を紹介する前に、美華書館の責任者たちにどういう人々がいたのかを確認しておこう。以前に紹介した資料だ。今でもそれほど知られていないように思う。それにもとづき作成しなおした。

当時の美華書館責任者の一覧表（部分）である*¹⁶。

美華書館責任者一覧表（部分）

もとの一覧表は、名前と在任期間しか書かれていない。今回、つぎのように補充した。

就任の順番 / 名前 / 在任期間 / 所属 / 派遣元の順に記述する。

所属についてもマックギリヴレイ MacGillivray の該書所収 “Missionaries(1807-1907)” にもとづいている。派遣元については、ワイリー Alexander Wylie, *MEMORIALS OF PROTESTANT MISSIONARIES TO THE CHINESE*, (SHANGHAE: American Presbyterian Mission Press, 1867 / 電字版)によった。参照 : G.Thompson Brown, *EARTHEN VESSELS AND TRANSCENDENT POWER American Presbyterians in China, 1837-1952*, NEW YORK: Orbis Books, 1997

関連する事項、たとえばヘプバーンの上海滞在なども 印をつけて挿入する。印は美華書館に関して整理するために配置した。印刷所の所在地、当時の名称を補う。上海内での移転については、別に説明する。

略号は以下のとおり。

A P M は、American Presbyterian North アメリカ北長老派教会

B F M P C は、Board of Foreign Missions of the Presbyterian Church 長老派教会外国伝道局（漢語：美国北長老会）

1844 マカオ 華英校書

初代コウル Cole, Richard

1844-1846 / R ^マ A P M (樽本注：American Reformed Presbyterian Mission だろう) 1844 / B F M P C

1845 寧波 華花聖經書房（別に華花印書局

2代ルーミス Loomis, Augustus Ward

1847 (Holt:8.24) - ? / A P M 1844 / B F M P C

3代マッカーティー McCartee, Divie Bethune

? -1848 / A P M 1844 / B F M P C

4代コーター Coulter, Moses Stanley

1849-1852 (一説に Holt:1853) / A P M 1849 / B F M P C

5代ウェイ Way, Richard Quarterman

1853-1857 (一説に Wylie: 1853-1858) / A P M 1884 / B F M P C

6代ガンブル Gamble, William

1858-1869 / A P M 1858 / B F M P C

1860 (一説に 1861) 上海 美華書館（別に美華書局、また美華書院）

1863 ブラウン 『日英会話篇』印刷

1866-1867 ヘブバーン夫妻、岸田吟香上海滞在、和英辞書初版印刷（May, 1867.序）

1869 (正月) 薩摩辞書第3版印刷

7代ウェリー Wherry, John

1869 / A P M 1864 / B F M P C

8代バトラー Butler, John

1870 / A P M 1868 / 派遣元不明

1870.10.20 上海 第1回中国長老派教会大会 (Synod of China)

9代マティーア Mateer, Calvin Wilson

1870 / A P M1864 / B F M P C

1871正月 岡田好樹訳『官許仏和辞典』印刷(1871.2序)*17

10代マティーア Mateer, John Lowrie

1871-1875 (一説に1876) / A P M(North)1871 / (B F M P C 推測)

1871十月(新暦11.13-12.11)薩摩辞書第4版印刷

1871-1872 ヘプバーン夫妻上海滞在(11月中旬より) 和英辞書第2版印刷(July, 1872.序)

1872 島田、穎川『和英通語捷徑』

1873 薩摩学生『独和字典』

1875.9 北京路清遠里口(北京路18号)に移転

11代ホルト Holt, William S.

1876-1880 / A P M(North)1873 / 派遣元不明

12代フィッチ Fitch, George F.

1881 / A P M(North)1870 / 派遣元不明

13代ゴードン Gordon, A.

1881 / 所属不明 / 派遣元不明

14代ホルト Holt, William S.

1882-? / A P M(North)1873 / 派遣元不明

15代ゴードン Gordon, A

? -1883 / 所属不明 / 派遣元不明

16代ファーンナム Farnham, John Marshall Willoughby

1884-1887 / A P M1860 / B F M P C

17代フィッチ Fitch, George F.

1888 / A P M(North)1870 / 派遣元不明

拠った資料の出版年限を超えた人物であるばあい、記録がない。そこは「不明」とした。

また、2代目ルーミスの在任時期を「1847-?」と書き、3代目マッカーティのそれを「?-1848」と示したのには、理由がある。原資料では1行に2名が

連っており「1847-1848」としているからだ。1847年から1848年までの期間はわかる。だが、いつ引き継いだのか、その詳細を特定することができない。「？」で示した理由だ。

また、その在任期間は、実際とは違うばあいもある。厳密に記入されているわけではなさそうだ。あくまでも目安と考えたほうがいいだろう。

この1行2名の連記は、ほかに8代目バトラーと9代目C・W・マティーア、12代目フィッチと13代目ゴードン、14代目ホルトと15代目ゴードンに見られる。

アメリカ長老派教会の印刷所は、1844年中国マカオにおいて開設された。初代責任者はコウルだ。当時の漢語名称は華英校書房という^{*18}。翌1845年、寧波に移転し華花聖經書房（別に華花印書局^{*19}）となる。さらに1860年（一説に1861年）、上海に移り現在でいうところの美華書館（別に美華書局^{*20}、また美華書院^{*21}）になった。

中国人むけの漢語表記は変化した。しかも、名称の一部がゆれている。だが、英語のAmerican Presbyterian Mission Press（Americanが表示されないばあいもある）は、基本的に変わらない^{*22}。

上の一覧表の各人について所属と派遣元を示した。その理由は、美華書館の責任者をつとめた人々の全員がアメリカ長老派教会に所属することを確認したかったからだ。

6代目ギャンブルも他の人々とおなじく宣教師の扱いになっている。

派遣元も同様である。例外は、13代目と15代目の2回をつとめたゴードンくらいだ。ただし、彼もまったくアメリカ長老派教会と無縁であったわけではない。ゴードンは、12代目フィッチを手助けした。それを契機として該教会に推薦されて入会している^{*23}。最初から信徒ではなかった方が珍しい。

さきに説明したように、1行にふたり連名のものがある。責任者がふたり同時に就任していると以前は考えた。違うらしい。短期間であってもあくまでも責任者はひとりだということ。

それを見れば、6代目がギャンブルだ。その期間は、1858年から1869年まで11年間にわたる。上海に移動した1860年（一説に1861年）と、ヘブバーンが和英辞書の初版原稿を持ち込んだ1866年のふたつともに関係している。

在任期間が長い人物は、一覧表を見れば、ギャンブルひとりが群を抜く。単純に数えて在任4年以上の人物は、5代目ウェイ、10代目J・L・マティーア、11代目ホルトくらいのものだ。

ヘプバーン辞書第2版の印刷は、1871年だった。上の一覧表をたどると、そのときの10代目責任者は、J・L・マティーアである。

6代目ギャンブルが辞任した1869年から、7代目ウェリーになる。同じ1869年に交替しているのは、在任期間が短いことを意味する。同様に、8代目バトラーも短期間勤務のあとに、9代目C・W・マティーアへ受け継がれた。さらに前出10代目J・L・マティーアへと続く。

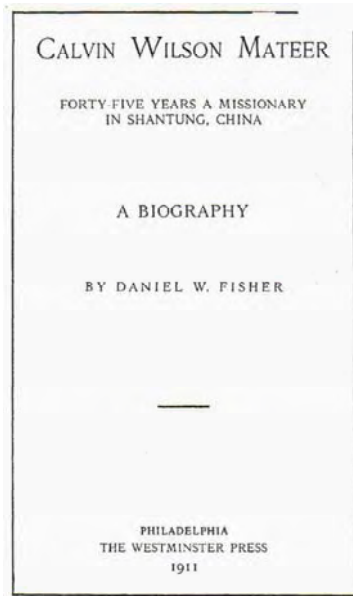
ヘプバーンは、「昨年以来、四人のちがった主任者」と書いている。「昨年」を厳密に考えると1870年になって3人だ。もう1年ずらせて1869年にさかのぼれば4人になる。ギャンブルの任期に比べれば、いかにも短期間だ。

7代目ウェリー、8代目バトラー、9代目C・W・マティーア、10代目J・L・マティーアたちが、ヘプバーンのいう「四人のちがった主任者」に該当する。この4人のなかに同姓の人物がふたりいる。マティーアである。

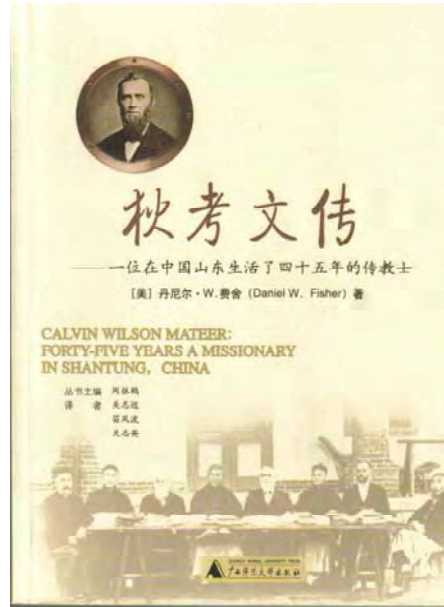
7 マティーア兄と美華書館

マティーアの両親はアメリカ長老派教会の信徒だった。マティーアの子どもたちは、五男二女の合計7名だ。ごく簡単に紹介する。「長男」などは原文についていないが、便宜のため私が補って使う。生卒年も記入した。

長男カルヴィン (Calvin Wilson Mateer, 1836-1908) と四男ロバート (Robert McCheyne Mateer, 1853-1921) は、ふたりとも宣教師になり中国山東で布教につとめた。三男ジョン (John Lowrie Mateer, 1848-1900) は、上海で5年間長老派教会伝道印刷所 (樽本注: 美華書館) の責任者をつとめた。そのあと北京の会衆派教会印刷所 (Congregational Press) *²⁴に勤務し当地で死亡した。次女リリアン (Lillian Ellen Mateer, 1858-1897) は中国登州の女学校で教え、バプティスト教会の宣教師と上海で結婚した。次男ウィリアム (William Diven Mateer, 1843-1914) は、宣教師になりたかった



Daniel W. Fisher、扉



関志遠、苗鳳波、関志英訳、表紙

が、不本意ながら商業の道に進んだ。長女ジェニー (Jane (Jenny または Jennie) Mateer, 1837-1926) は、長老派教会の牧師と結婚、中国へ行く予定だったが健康上の理由で故郷に留まっている。五男ホレイス (Horace Nelson Mateer, 1855-1939) はオハイオのウースター大学教授になった*25。

美華書館の9代目責任者は、長男カルヴィンである。つづく10代目は三男ジョンだ。責任者の地位は、マティーア兄弟の長男から三男に引き継がれたことが確認できる。

長男カルヴィンに注目する。

アメリカ長老派教会が、結婚後まもない長男カルヴィンたちを中国山東登州(今の蓬萊市)に派遣したのは、1863年だ。彼は27歳だった。長男カルヴィンは、その地での宣教、学校の設立と運営、中国人向け理科系教科書の編纂、また漢語教科書の編纂などに従事した。聖書の漢訳である官話和合訳本の翻訳責任者に選ばれたことでも有名だ*26。

長男カルヴィンについては、伝記が書かれている。フィッシャー Daniel W. Fisher 著『C・W・マティーア伝』*27だ。

長男カルヴィンは、登州における活動ですでに手一杯だった。その多忙な彼が美華書館の責任者にならざるをえなかったのには、あるいきさつがあった。以下は伝記による（152頁、漢訳97頁）。

アメリカ長老派教会総会の命令によって中国長老派教会大会（Synod of China）が組織されたのは1870年秋である。同年10月20日、上海で第1回大会（上海大会と略す）が開催された。ちなみに、2回目は1871年寧波で、3回目は1874年芝罘（今の煙台）において開かれる。

大会において、参加者のなかから美華書館の責任者を選出しなければならなくなった。長男カルヴィンが、まず辞退する。さらに、数人に依頼がなされたがすべて断われ、結局のところカルヴィンに廻ってきた。1年だけ、また必要なときに登州に帰ることができる、という条件をつけて、彼はしかたなく承知した。

上の責任者一覧表に9代目長男カルヴィンの責任者就任は1870年とある。34歳のときだ。

上海大会の開催が1870年10月20日だった。1ヵ年というならば、実際の在職期間は、1871年をすぎてその年末に近いだろう。上の記録とは少しのくいちがいがあるように思う。伝記では、最終的には1872年8月ようやく登州にもどったとする（伝記153頁、漢訳97頁）。1872年の8月まで責任者の地位にあったという意味ではない。長男カルヴィンは、必要に応じて登州にもどっていた。また、責任者ではなくなってからも上海に出向いたことを後で説明しよう。

8 9代目長男カルヴィンの働き

伝記によると、長男カルヴィンが彼の能力を発揮したのは、経営と印刷の両方面だった。要約する。

彼は、印刷所内に会計課、職務課、責任者のための住居、工員（すべてが中国人）の宿舎と教会堂、またその他の施設をつくった。その結果、彼が印刷所を辞めるときには、それは健全で安定した効率のよい組織となった（伝記155頁、漢訳99頁）。

この説明によれば、美華書館の内部組織が整備されたのは、長男カルヴィンが辞職する前だ。彼の在任期間は短い。時期は特定しやすい。1871年になってからだと考えていいだろう。いうまでもなく、美華書館が上海県城小東門外にあった時期に重なる。教会堂および「責任者のための住居」が、長男カルヴィンによって印刷所内に作られた。ならば、ギャンブルが責任者だった1869年まで、それは存在しなかったことを意味する。はたして、教会堂とギャンブルの住居は、書館の敷地内にはなかったのか。

教会堂と「責任者のための住居」に関して、ファーナムの証言がある。

上海県城小東門外の地域が火事で焼けたあと、美華書館はその一区画を購入した。黄浦江から運河北側沿いに小東門外にいたる東西方向の細長い土地だ。相当に広い。

川（黄浦江）に面して、カルバートスン氏のための家が建てられた。運河の北側にそって県城までが印刷所の建物で、西の端に教会堂をともない、その向こうの場所は責任者のための宿泊施設だった。^{*28}

焼け跡地だ。必要な建造物は新しく建てる必要がある。印刷所の建物 the Press buildings が複数形だから、いくつかの棟にわかれていたことを示している。広大な敷地に建築物が1棟である必要はない。すると、印刷所とは別に教会堂があったとしてもおかしくはない。最初から複数の（そうとして）建物が、同時に建築されたかについても不明だ。

工員のための教会堂は、印刷所建設の早い段階から敷地内に置かれていたと考えられる。ここが、長男カルヴィンの説明と異なる。美華書館の中国人工員は、長老派教会の信徒だ。礼拝は、毎日の就業前に行なわれる。教会堂は印刷所内にあったほうが、宣教師の側からいっても便利だったろう。

「場所」と訳しておいた原文は、the rooms である。空間、余地などの意味があるが、そこにはじめから建物があったとも思われない。建設優先順位の問題だ。美華書館、すなわちアメリカ長老派教会伝道印刷所が最初に備えるべき施設は、まず操業できる印刷工場と教会堂のはずだ。印刷に不可欠な工員が宿泊する設備

も、早くに用意する必要がある。教会堂と同様に重要だ。だから、責任者の住居建築があとまわしになっても不思議ではない。最初は予定地にしておいて、印刷所全体の機構が整備されるにともない責任者用の住居がたてられたとも考えられる。

責任者用住居が後年整備されたとしても、すくなくとも長男カルヴィン以前ではないか。岸田吟香が訪れたギャンプルの住居は、美華書館にあったように読める。

つまり、美華書館の教会堂と責任者用住居については、『C・W・マティーア伝』の著者が勘違いした、と私は考える。おいおい見ていくが、伝記の中身は事実とそれほど異なっているわけではない。ここは、数少ない勘違いのひとつだ。

長男カルヴィンは、上海美華書館において、印刷方面にも才能を発揮した。具体的にいうと、日本語の辞典を印刷するにあたって活字母型を作成した。これにはかなり苦労した、と彼自身がいう。

印刷に関して経験はなかったはずの長男カルヴィンだ。しかし、それをもってまったくの素人というわけにはいかないらしい。彼は、子供のときから器械を製作しそれを動かすことに興味をいだいていた。中国で生活するのに必要な発電機が故障したとき、彼はみずからそれを修理している。山東登州で必要とする機械は、自分で作らなければならなかったと容易に想像できる。妻のエイダによると、彼は、発電機のほかに、蒸気機関、風車、水道設備などをてがけた。各種工具をそろえた作業場をもっていたという。

長男カルヴィンのことばを紹介する。彼は、美華書館の責任者になった直後、ある困難に直面した。

私は日本語辞書をはじめなければならなかった。そしてこれはとてもやっかいな仕事だった。私の前任者は、自分ではできないことを約束したのだ。工員たちは印刷をするために待っていたが、しかし、私たちはその仕事をするための印刷用紙をイギリスに注文するしかなかった。また、ウェブスター辞書のすべての発音記号を差し込まなければならず、しかも私たちはその活字も母型も持ってはいないのだ。私は木材に文字を彫り、母型を作成した。

これは極めて困難なことだった。いくつかの文字は6回、あるいはそれ以上も彫ったが、結局のところ完全というのにはほど遠かった。また、楽譜活字を一組彫ったものの、すべてを適切に彫るには時間と苦痛をともなった。これもなんとか母型をつくった。最終的に私はそのどちらの期待にもこたえることに成功したのだ。伝記155頁、漢訳99頁

楽譜活字は、楽譜付きの賛美歌本を印刷するために必要だったのだろう*29。長男カルヴィンは、美華書館では日本語辞書のために種字を彫り活字母型づくりまでやったと書いている。持ち前の好奇心とめぐまれた才能によって、印刷分野でも深いところに接触していたとわかる。まったくの未経験者であれば、活字の母型を作ることなどしないだろう。さらに、印刷に興味を持たなければ、その発想すら出てこないはずだ。

では、彼が上で述べている日本語辞書とはなにか。

その手がかりは、責任者となった1870年という年と、文中に出てくるウェブスター辞書だ。時期的に見て、ヘプバーンの和英辞書第2版ではない。ヘプバーンが「立派に日本字を入れた英和辞書を印刷し終わったばかり」と指摘したこの英和辞書だ。

9 もうひとつの日本語辞書

長男カルヴィンの美華書館在任期間を見れば、ちょうどヘプバーン和英辞書の初版と第2版には含まれている。ヘプバーンの上海滞在と重なる時期があるように思う。

ヘプバーンの書簡には、マティーアの名前がたしかに出てくるのだ。

わずか1行にすぎないが、次のようにある。「1871年12月8日 ホェリー氏はマティーア氏の不在中今暫くここで働いておられます」(240頁、全集258頁)

ここでいう「ホェリー氏」は、美華書館の7代目ウェリーJohn Wherryだ。「不在中」とは、長男カルヴィンが登州に帰っていることを意味している。マティー

アの名前を出していることによって、ヘブバーンには彼との面識があったことがわかる。また、彼が上海を留守にすることもある、とヘブバーンは知ってもいる。では、長男カルヴィンは、1871年12月8日の時点で責任者の地位にあったのか。ここだけをつかまえて断定はできない。

周囲の状況を以上のように把握して、長男カルヴィンが格闘していた日本語辞書を特定しよう。

何かといえば、薩摩学生（前田正毅、高橋良昭）編『大正増補和訳英辞林』（美華書館。「序」明治四歳辛未（1871）十月。第4版）にほかならない。

私がそう判断する理由は、その日本語序文のなかにある。該当する箇所は次のとおり。

今片仮名ヲ省キウエブストル氏ノ辞書ニ據テ是ニ易ルニ音^{エキセント}符並ニ字綴^{シレブル}ヲ以テス*30

「ウエブストル」は「ウェブスター」だ。この単語が鍵となって長男カルヴィンの証言と薩摩辞書が一致する。彼の在任中に印刷刊行された。

美華書館の『在庫目録』で確認する。著者からの依頼印刷の部に収録される。

14頁 197 和訳英辞書

English Jap. Dictionary, 8vo. 830p. In Press 5,000 Japanese.

書名の一部は異なって記載されている。しかし、『和訳英辞林』に間違いはない。「8vo.」は、本の大きさ、つまり八つ折り判（octavo）のこと。日本人の著作だから「Japanese」と行末に表示がある。薩摩辞書は、5,000部の予定で、印刷中だと書かれている。価格設定はなされていない。全部を日本に運ぶからだろう。『在庫目録』は1871年10月1日現在のものだ。薩摩辞書序文に明示された旧暦「十月」は、新暦では11月13日から12月11日までの範囲になる。10月1日は印刷中だ。その作業完了が同年11月から12月までのことだとすれば、時間的に矛盾しない。

10 9代目長男カルヴィンの別の工夫

薩摩辞書を印刷するために種字を彫り、活字の母型から手がけていたのは、長男カルヴィンだ。実際の印刷刊行は、新暦11月から12月にかけてだろう。長男カルヴィンはその時期には上海に留まっていた。そう考えていいと思う。

ついでにいえば、薩摩辞書第3版の英文序（1869.^{ママ}1 / 明治二年正月）には、ギャンプルへの謝辞が盛り込まれている。だが、第4版の日本語序では、長男カルヴィンどころか美華書館関係者の名前は見えない。

長男カルヴィンの証言をもう少し引用する。

^{ママ}
..... 私は、また鉛版印刷にも多くの工夫をこらし、十分な成功をおさめたのだった。あるひとりの少年を訓練し、私が退任するまでに『マタイ伝』を鉛版印刷した。その仕事を効果的にしかも迅速にすすめるために、私は加熱炉に印刷機を装着し、いくつかの変更をくわえると非常によく動いた。伝記155-156頁、漢訳99-100頁

『マタイ伝』と訳した箇所の内容はMatthewだ。『在庫目録』には書名の似た書籍が3種類ある。

ひとつは、ブリッジマン（Elijah Coleman Bridgeman, 1801-1861）とカルバートソン（Michael Simpson Culbertson, 1819-1862）の共訳だ。

4頁 15 馬太伝福音書

Matthew. 12mo. 64p. 1871 行 2.10 7,675 E. C. Bridgeman and M. S.

Culbertson

「行」は活字の大きさを意味する（注13参照）。「2.10」は100部あたりの値段、在庫が「7,675」部あるという意味になる。

別の2冊は、次のとおり。後者は、ブーン（William Jones Boone息子, 1846-1891）の

上海方言による翻訳書だ。

5頁 49 馬太伝 鉛板

Matthew. 12mo. 98p. 1871 行 2.45 5,000 Peking Committee

6頁 55 馬太伝

Matthew. 12mo. 114p. 1871 行 2.85 10,000 W. J. Boone

3種ともに印刷は、1871年となっている。同じ判型で同じ大きさの活字を使用し、ページ数がそれぞれ異なる。15番ブリッジマンらの『マタイ伝』の在庫数7,675部を見る。その半端な数字は、すでに販売されて時間が経過していることを示している。49番北京委員会本と55番ブーン本は、その区切りのよい在庫数からして、両者ともにブリッジマン本より後の印刷に思える。

49番『馬太伝』に「鉛板」と表示されている。ここに注目すれば、長男マティーアが訓練した少年、その彼が鉛版印刷したのは北京委員会本であったと考えてよいだろう^{*31}。

長男カルヴィン伝の記述をいちいち確認しているのは、書かれた内容が事実を反映しているかどうかを知るためだ。上海県城小東門外美華書館の教会堂と責任者用住居については、事実と一致していない。だが、それ以外の事柄は、目録などを見るとほぼ伝記の記述通りだと思われる。

長男カルヴィンが説明を続ける。

ママ
..... 私はまた新しい漢字活字ケースを作ったが、これは旧型のものと同くすべて改良されていると思う。さらに、母型についても完全に、また徹底的に見なおしを行ない、すべてを再配置し新しい活字ケースを作成した。これは容易ではない仕事だった。しかし、私は確信しているが、それは印刷所の能率的な作業にとってきわめて大きな助けとなるだろう。伝記156頁、漢訳100頁

改良した、とあっさり書いている。しかし、ここは重要な箇所だ。

漢字活字の母型と活字ケースといえば、ヘブバーン辞書のところで出てきた6

代目ギャンブルに触れなければならない。

彼が美華書館でなした仕事で高く評価されているものがふたつある。電鋳母型^{*32}（蠟型電胎法とも）という方法を採用し、大小数種類の漢字活字を作ったこと。もうひとつは、漢字の使用頻度を調査したうえで、活字を選択（文選）しやすいように部首別に分類して配置したことだ。漢字調査の結果は、1861年に刊行されているという^{*33}。

長男カルヴィンが「旧型」だといっている活字ケースは、ギャンブルが創出したものを指すにちがいない。長男カルヴィンは、自分の行なった改良工夫に対して大きな自信をもっていることが彼のことばから伝わってくる。将来への見通しをも述べているほどだ。

ここで、ヘプバーンの指摘を思い出す。すなわち「ミッションの印刷所も、またひどく混乱していました」だ。

可能性としてその原因のひとつは、長男カルヴィンのその工夫にあったのではないか。

すでに長期間にわたって使用されてきた活字ケースが、そこにある。ところが、責任者の指示で新しいものに置き換えられた。

その時期はいつか。長男カルヴィンの在任期間からみると、ヘプバーンが辞書第2版の印刷のため上海にやってくる前らしい。

実際に活字を拾う工員から見ればどうか。10年かそれ近くの長年にわたって使い慣れた活字ケースだっただろう。それとは別のものが、目の前におかれた。いくら改良されたとはいえ、他人のやったことだ。こればかりは慣れの世界だろう。印刷所の責任者が合理性を追求して新しく工夫したとしても、実際に使用する人々にとってはめんどろなだけかも知れない。それが印刷作業に影響をおよぼす。「混乱」のひとつの表われではなかろうか。推測のひとつにすぎない。

美華書館責任者の地位を短期間で他人にゆずった人たちを説明して、ヘプバーンは、「一時的にそこにいただけで、印刷に特別の関心はなかったのです」と断言した。このなかに9代目長男カルヴィンが含まれている。

長男カルヴィンの印刷に対する熱意も努力も、ヘプバーンには理解されずじまだった。あるいは、印刷について熱心に努力した結果、余計な変更と混乱をも

たらした、というのがヘプバーンの認識だったかもしれない。辞書印刷の作業工程に支障を生じさせたという怒りが「印刷に特別の関心はなかった」という否定形で表出したのではないか。

9代目長男カルヴィンの弟が10代目三男ジョンである。

三男ジョンが美華書館の責任者となるために上海に到着したのは、1871年8月3日だった^{*34}。ヘプバーンが和英辞書第2版の原稿をたずさえて上海を訪問する約3ヵ月以前になる。就任して間もない三男ジョンは、そのころ美華書館において印刷の仕事に早くなれるように努力している最中だ。さらに、漢語の学習もしなくてはならない。そこにヘプバーンが日本からやってきた。以上の時間の推移を考えると、彼は翌年にかけてヘプバーン辞書第2版を担当したはずだ。

ヘプバーンから見ると、10代目三男ジョンは、なんとも頼りない人物だった。

11 三男ジョンの上海到着

1870年、長男カルヴィンはしかたなく美華書館の責任者になった。伝記の作者はそう書いた。だが、長男カルヴィンは、それ以前から美華書館には注目していた。1869年11月だから、上海大会が開催される1870年よりも前のことだ。彼はアメリカにいる三男ジョンあてに手紙を書き、美華書館は、将来中国で最大かつ最高の印刷所になるだろう、と知らせている（伝記157頁、漢訳100-101頁）。

長男カルヴィンは、美華書館で働くのは1ヵ年だと約束した。後任の責任者を急いでさがさなくてはならない。彼が白羽の矢を立てた人物は、身内である三男ジョンだ。ジョンは、大学をおえたあと牧師になり宣教師として外国へ行く希望を持っていた。しかし、健康上の理由でその計画は放棄せざるをえなかった。長男カルヴィンは、三男ジョンが機械を製造する方面に才能があることを知っていた。だから、三男ジョンを美華書館の責任者として派遣してくれるようアメリカ本部に提案し、それが実現する（伝記157頁、漢訳100頁）。

三男ジョンが上海でまずしなくてはならないことは、前述のとおり、ひとつは漢語の学習だった。もうひとつは、彼がやるべき業務の内容を把握することだ。

それらのことが長男カルヴィンの実質的辞任を遅らせた。つまり、三男ジョンが自立できるように、長男カルヴィンが裏で支援していたのだ。約束の1ヵ年になる1871年10月までに身を引いたのは、あくまでも表面上のことだったらしい*35。

さきに紹介した美華書館の『在庫目録』だ。1871年10月1日という日付を記したこの目録には、三男ジョンが責任者の肩書きで名前を出している。ここから考えれば、長男カルヴィンから三男ジョンへの任務引き継ぎは、公式では10月1日以前には完了している。

以上の出来事を時間順にならべてみる。

1871年8月3日、三男ジョンが上海に到着する。同年11月13日から12月11日のあいだに、長男カルヴィンが担当した薩摩辞書の印刷が完了する。1871年11月中旬、上海に到着したヘプバーンは、印刷された薩摩辞書を見ている。

1871年から1872年にかけて、上海の美華書館には、マティーア兄弟、薩摩学生、およびヘプバーンが集合していたことになる。

長男カルヴィンが登州にもどって3ヵ月が経過したとき、ふたたび上海に出向かねばならなかった。三男ジョンを手伝って印刷所を、購入した新しくてもっと良好な場所(家屋)に移転させるためだ。これは大変な作業で、困難で汚れた労働が1週間も必要だった、と書いている。

上海京城の小東門外から動いた先のその場所とは、どこか。北京路だという。

新しい場所までは約1マイル(樽本注:約1.6km。以下同じ)あったが、ほとんどは水路で、陸の両端(川岸から建物まで)は100ヤードと少し(約91m)だけだった。彼(長男カルヴィン)は公式にはすでに印刷所の責任者ではなくなっていた。しかし、彼の弟が言語の習得とおぼえなければならないその他のことに時間を割くことができるように、移転の主要な責務を担ったのだ。
/ その新しい場所とは、現在も印刷所がある北京路である。157頁、漢訳100頁

距離はおおよその数値を示していると考え。上の場所についての記述は、北京路清遠里口にあてはまる(後述)。

1871年10月以前に長男カルヴィンは美華書館を辞任した。登州に帰って3ヵ月

後だから、翌1872年になったかならないころだろう。長男カルヴィンは、わざわざ上海におもむいて美華書館が北京路に移動するのを指導した。

北京路へ移ったことについて、伝記のなかでは一連のできごととして説明している。読んだかぎりでは、それほど不自然ではない。長男カルヴィンは、責任者ではなくなっているにもかかわらず、言語と仕事に不慣れな三男ジョンをおもい彼を支援するために、自分からすすんで困難な仕事を担当した。ある種の美談仕立てである。

美華書館が北京路に移転したのは事実だ。しかしその時期について、この伝記の記述についておのずと疑問がでてくる。

手順として、まず美華書館の位置を再度確認する。再度というのは、すでに解決している問題だからだ。そののち長男カルヴィンの伝記にもどる。

12 北京路の美華書館

英租界北京路に移動したまでは、いい。その先が問題だ。北京路のどこか。

私は商務印書館があった場所を特定するために、美華書館の所在をふるい上海地図で示したことがある。

東西にのびる北京路と、蘇州河の岸辺から南にさがる清遠里^{*36}が交差する箇所に、美華書館の名前がある。『重修上海県城廂租界地理全図』（1893）からの引用だった。

今回、ふたつの地図を掲げる。

ひとつは、張偉等編著『老上海地図』（上海錦繡文章出版社（上海画報出版社）2001.6 / 2007.8第3次印刷）所収の『新繪上海城廂租界全図』（1898）だ。部分拡大しておく（地図1）。もとの鮮明ではないので、せいぜいがこれくらいにしかならない。乍浦路に架かる二擺渡橋の記載がある。作成されたのは、比較的新しい。

別のひとつは、遠山景直、大谷藤治郎編『蘇浙小観』（江漢書屋1903.6.9）の附録地図だ。こちらにも北京路清遠里口に美華書館の名前がある。まず、美華書館を明記した地図はめずらしい。さらに、日本で刊行された書籍だ。日本人読者の興

ヘプバーン、マティーア兄弟と美華書館



地図1：上海1898（部分）美華書館



地図2：上海1903（部分）美華書館

味を引いたものかとも思う。参考のために示す（地図2）。二擺渡橋の記載がない。もとづいたのは1893年版『重修上海县城廂租界地理全図』あたりかと推測する。

その時の私の興味は、商務印書館が移動した先の住所にあった。北京路慶順里でしかも美華書館の西側だというだけで十分だ。美華書館の位置については、それ以上探索する必要を感じなかった。その後、関連論文は読んだが、北京路清遠里口の地図がすでに解答を示していると思っただけ。

このたび、マティーア兄弟と美華書館の問題を調べるにあたり、関係する文章を読みなおし、新しい論文は入手した。それらに美華書館の位置を地図にもとづいて追求している部分がある（論文名は注参照）。

私なりに要約しよう。美華書館の移転先は、英租界北京路18号（あるいは15号）である。その地番を手がかりにして、1866年の上海地図で該当の場所を特定した。円明園路あたりだ。ところが、そののち北京路清遠里口に美華書館と明記した地図『重修上海县城廂租界地理全図』が存在していることに気づいた。増補版『新重修上海县城廂租界地理全図』（1895）にも同じ表示が見える。以前に特定したと考えていた場所よりも西にある、というようなことだ。

なんどでもいうが、英租界北京路清遠里口は、基本にあって動かない。地図でその場所を示した。すでに問題は解決している。

では今取り上げるのは、なぜか。北京路18号^{*37}のほうに問題がある。しいて疑問文にすれば、北京路18号は、北京路清遠里口とはどういう関係にあるのか、となる。もうすこし説明しよう。

13 資料としての案内書

美華書館の住所として表示されるもうひとつの北京路18号について、その地理的位置を別のやりかたで検証する。

私が使用する文献は『上海指南』という案内書だ。1909年再版と1916年第9版の2冊を見ている。

案内書が、上海市内にある建築物の変遷を忠実に、また適切に反映しているか

どうかは断言できない。項目によっては採録が不十分な箇所もあるだろう。時間的にみて食い違うことも想像される。だが、主として建築物をあつかうとき、その時々で存在していた事実を確認することはできる。

『上海指南』から関係のありそうな場所を抽出する。

また、合致する範囲でカッコの中に『list.』と示す。これは、*THE DESK HONG LIST; A GENERAL AND BUSINESS DIRECTORY FOR SHANGHAI AND THE NORTHERN AND RIVER PORTS, 1904*, (SHANGHAI: The Office of the "North-China Herald." 1904 / 電字版) に掲載されていることを意味する。その内容は、上海の会社、あるいは組織の目録1904年版だ。組織の英文表示をabc順にならべる。それに添えられた漢字表記が参考になる。『上海指南』と照合し参考になりそうな記述は、それを示した。そちらに収録された人名は省略する。また、漢字での地番表示はアラビア数字を使用した。

『上海指南』商務印書館 宣統元年(1909)五月初版/七月再版

巻4 公益団体、17丁裏 教会

猶太教真主堂 Synagogue "Beth El." 教士 D. M. David 在英租界北京路16号 (list. 19頁。16, Peking Road.)

美華書館 American Presbyterian Mission Press 教士 Rev. Geo. F. Fitch 在英租界北京路18号 (list. 2, 54頁。18, Peking Road.)

中国基督勉勵合会 United Society of Christian Endeavour 教士 Rev. G. F. Fitch 在英租界北京路18号 (list. 58頁。18, Peking Road. United Society of Christian Endeavour for China)

中国聖教書会 The Chinese Tract Society 教士 Dr. J. M. W. Farnham 在美租界靶子路61号 (list. 17頁。中国聖教書会。The Chinese Tract Society / 61, Range Road. / Book and Tract Depository at the Mission Press, 18, Peking Road. list. 55頁。聖教書会。Depository - 18, Peking road.)

巻4、18丁表

清心堂 American Presbyterian Mission 教士 Ro. J. A. Silsby 在大南門外 (list. 55頁。大南門外清心堂 South Gate)

長老会 Board of Foreign Missions of the Presbyterian Church, U. S. A. 教士 Rev. J. M. W.

Farnham 美租界海寧路1758号 (list. 54頁。Range Avenue 61)

巻4、11丁表 学堂

清心書院 在小南門外

清心女学校 在小南門外

巻5 工商業、9丁表 書坊

美華書館 洋書 在北京路18号

案内書ならば、日本でも多く出版されている。

その中の1冊、たとえば、遠山景直『上海』(国文社1907.2.28)は、『上海指南』よりも以前の刊行だ。

「教会堂」の項目で、つぎの3件を見ることができる。

「長老会 Board of Foreign Missions of the Presbyterian Church,U.S.A. 靶子路にあり」(210頁)「美華書館 American Presbyterian Mission Press、北京路18号にあり」(210頁)「猶太教真主堂是北京路16号にあり」(211頁)などだ。これらは『上海指南』と重複する。また、くらべれば収録項目はそれほど多くない。

『上海指南』1909年版は、もとの名称を英語で併記している部分もある。それが役立つ。また、当時の責任者らしい名前も記入されている。美華書館のフィッチ、長老会のファーナムらも実在する。ただし、変化する人事をどこまで忠実に表示しているかはわからない。

美華書館は、教会と書店の2カ所にでている。教会、印刷所および書店を兼ねているからだ。

清心書院、清心女学校はアメリカ長老派教会が経営する学校である。本稿とは直接の関係はない。しかし、長老派教会との結びつきがある。参考までにかかげた。

上に見る美華書館の所在は、すべて英租界北京路18号となっているのがわかる。

また、中国基督勉勵合会の住所は、美華書館とおなじ北京路18号だ。これは該書1916年版でも変わらない。

美華書館とは一見関係がなさそうなユダヤ教会堂、すなわち猶太教真主堂を抜き出したのには理由がある。

美華書館の住所が英租界北京路18号だから、北京路16号の猶太教真主堂は、その近くにあるだろう。「北京路16号はユダヤ教会堂だ。18号は美華書館でそこでは毎年中国人のために多量の印刷物を印刷している」とならべて説明する欧米人むけのガイドブックもある*38。北京路16号と18号は、数字から推測すると、おたがい近くに位置するだろう。

美華書館が北京路清遠里口に存在していることは間違いない。問題は北京路18号である、とふたたびいう。

後版の『上海指南』1916年版を見る。こちらからもアメリカ長老派教会に関係する組織を書き出した。

すこしの変化があるだけ。旧版と基本的にはほぼおなじとっていい。美華書館は、やはり北京路18号である。ユダヤ教会堂も変わらない。ただ、美華書館が印刷所を別の場所（北四川路横浜橋北）に設置しているのが新しい。

『上海指南』商務印書館1916第9版

巻7 雑録 甲宗教 三耶穌教 1丁裏

猶太教真主堂 北京路16号

思婁堂 北京路清遠里口

清心堂 大南門外

2丁表

中国聖教書会 北京路清遠里東

中国基督勉勵合会 北京路18号

長老会 海寧路1758号

巻6 実業 丁各業店舗 二〇書房 12丁表

美華書館 北京路18号

協和書局 北京路18号

乙工業 二九印刷 5丁表

美華書館印刷所 北四川路横浜橋北

巻3 公共事業 甲学校 4丁裏

長老会中西学校 北京路18号

書店の部に美華書館はおなじ北京路18号に存在している。ただし、宗教の部ではその記載がなくなった。そのかわりに「思婁堂 北京路清遠里口」が新しく掲載されている（後述）。

中国聖教書会の場所は、北京路清遠里東だ。『list.』17頁の記述を見ると場所はふたつにわかれている。北京路18号には倉庫が置かれた。

思婁堂、あるいは中国聖教書会は、北京路清遠里口または東にある。それと北京路18号の美華書館が、どういう関係にあるのか。所在表記が違う。両者は別々の場所にある、と考えてもおかしくない。疑問もわからないだろう。だが、問題を解決する手がかりのひとつは、まさにこの部分にあるのだ。

14 ユダヤ教会堂の存在

猶太教真主堂は、英租界北京路16号で変化がない。ここに注目する。

北京路16号のユダヤ教会堂（Synagogue）を地図上に示すことができれば、近くにある美華書館北京路18号の位置は、自動的に特定される。そう考えた。これが今回の私の工夫だ。

1940年代の上海地図には、そのまま掲載されている（と思ひこんだ）。1940年代の地図とは、『老上海百業指南 道路機構廠商住宅分布図』（1947/復刻 上海社会科学院出版社2004.5）である。

東に英国総領事署を見て西の方向に2筋目が、南北にはしる虎丘路（博物院路）だ。ここに大きく猶太教堂がある。該地図から部分引用する（地図3）。1980年代に取り壊され今は存在しないそのユダヤ教会堂は、写真のなかに堂々とそびえている*³⁹。

このユダヤ教会堂が、誤解のもとだった。はじめはぼんやりと、ユダヤ教会堂とだけ考えていた。今からおもえば、細かく区別しなかったのが誤りの原因である。『上海指南』に掲載される猶太教真主堂が、上海地図1947年版の巨大なそれ（猶太教堂）だと思った。猶太教真主堂の住所は北京路16号だ。すると美華書館



猶太教堂 Beth Ahron Synagogue

地図3：上海1947（部分）
虎丘路（博物館路）

は、このユダヤ教会堂の近くにあったことになる。しかしそれでは、美華書館が存在する西の清遠里からみて、東方へ遠く離れてしまう。つじつまがあわない。

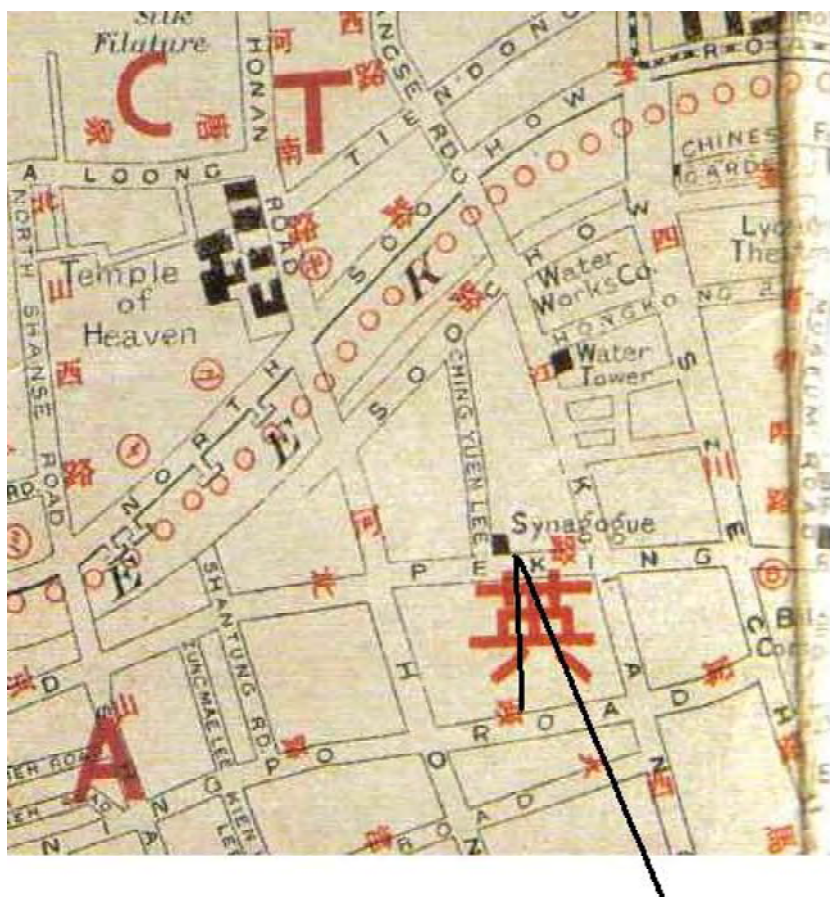
あらためて調べると、次のことがわかった。

猶太教堂は、当時上海にあったユダヤ教会堂のひとつだ。その英語表示は「Beth Ahron Synagogue ベスエアロン・シナゴーク」*40である。建設されたのは1927年だという。これが『老上海百業指南』に見えるユダヤ教会堂 猶太教堂だ。

『上海指南』にある猶太教真主堂とは別物である。1927年に建設されるユダヤ教会堂が、それ以前の1909年版、1916年版の案内書に掲載されることはない。教会堂の名称自体が異なっているのではないか。違う建物を出発点においては、問題は解決できない。

『上海指南』の猶太教真主堂にそえられた英語表示は、「Beth El.ベス・エル」だ。北京路16号に位置しているのは、このベス・エル・シナゴークなのである。1887年に建設された上海最初のユダヤ教会堂だった*41。

ここから、もう一度出発する。ベス・エル・シナゴークを掲載する上海地図を



地図4：上海1910（部分）Synagogue

探す。これこそが今回の問題を解決する方法だ。

前出『老上海地図』に1910年版の1枚が収録されている。日本人が作成した。漢字をまじえながら表示の基本は英語だ。北京路（PEKING ROAD）と清遠里（CHING YUEN LEE）が交差する箇所にユダヤ教会堂がある（地図4）。

また、ウェブ上で地図コレクションを見つけた。テキサス大学が所蔵し公開している。該当する上海地図が2件ある。それらから部分的に引用する。

上海地図の1912年版（地図5）と1932年版（地図6）に Synagogue あるいは Synag と記されているのをご覧いただきたい。ベス・エル・シナゴーク（猶太教真主堂）に違いない。まさに美華書館のある位置に重なっているように見える。もとは隣



地図5：上海1912（部分）Synagogue

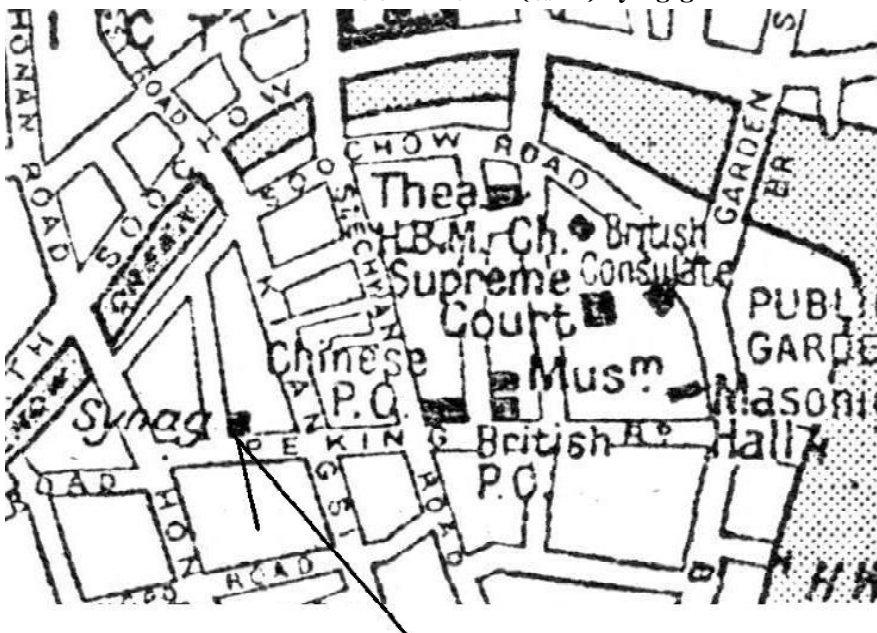


図6：上海1932（部分）Synag

接していただろう。

猶太教真主堂の存在する場所が、同時に美華書館の位置をも指し示している。これは有力な証拠である。

いくつかの地図に表示される美華書館とユダヤ教会堂を確認することができた。これで検証は終了している。

それをあえて、場所を特定するためには、ほかになにがあるのかを考える。

15 ラウリー記念教会堂

ひとつは、前出の中国聖教書会である。住所表示は北京路清遠里東だ。『list.』によると、その書籍部は北京路18号なのだ。北京路清遠里の東とはいえ、北京路18号と場所は同じように思える。

もうひとつある。興味深いのは、ラウリー記念教会堂の存在だ。

宮坂「美華書館史考」は、英文雑誌に掲載された記事を紹介している。すなわち、1895年にラウリー記念教会堂Lowrie Memorial Chapel（またはChurch）が美華書館の敷地内に建設されその正式公開が行なわれた、と（184-185頁）。

該論文に掲載されたラウリー記念教会堂の写真をながめる。

右手前には、門がある。弓形の上部看板に「書館 / OFFICES & SALES ROOM / 美華 / / PRESBYTERIAN MISSION PRESS」と示している。奥は美華書館の3階建ての建物だ。門の左側にラウリー記念教会堂がたっている。かなり大きく見えるのは、写真だからだろう。十字架をかけた尖塔^{*42}をいただいでいかにも教会堂の形をしている。

なにが重要かといえば、こうだ。

美華書館の前庭、つまりもとからあった南側の広場に、ラウリー記念教会堂があとから建設された。同じ敷地だから地番もたぶん同じ北京路18号だろう。その隣には、ユダヤ教会堂がすでに建っていた。

宮坂論文に引用されたその記事原文を読む。「北京路 Peking Road」に所在している「その教会堂は、美華書館に隣接して……」と説明がある^{*43}。このラウ

リー記念教会堂は、美華書館の歴史と切り離せないものなのだ*44。

ほかにも、ラウリー記念教会堂の住所を、英語表示で地番なしの「Peking Road」とするものは、普通にある*45。

アメリカ長老会派教会のウォルター・ラウリー（Walter Lowrie, 1784-1868）の子供たちは、六男二女だ。その中に宣教師になった3人の息子たちがいた。長男ジョン（John Cameron Lowrie, 1808-1900）、三男ウォルター（Walter Macon Lowrie, 1819-1847）、五男ルーベン（Reuben Post Lowrie, 1827-1860）である。

では、記念教会堂に名づけられたラウリーとは誰か。可能性があるのはふたりだ。中国で若くしてなくなったのは、ウォルターとルーベンである。この教会堂は、そのうちの五男ルーベンを記念したものだ。

私がそう判断する理由は次のとおり。

三男ウォルターは、主として寧波で活動していた。海賊の犠牲となった彼の墓は、寧波に置かれた。三男を記念するならば、寧波に教会堂をたてるだろう。

一方、五男ルーベンについていうと、1854年から1859年まで、上海がその活動拠点だった。病氣療養に日本横浜で短期間をすごしたあと、1860年に上海にもどり死亡した。

ヘプバーン書簡に彼ルーベンの名前が見える。関係部分をまとめて示す。

「1860年2月6日 もしルーベンがわたしどもに加わってくださるなら、非常に嬉しいのですが。上海が彼にとって適した場所でないことが分かり、国に帰る代わりに、彼がこちらに来るように、わたしは望んでおります。このことを彼に提案いたしました」（全集36頁）「1860年5月14日 ルーベン君はどうもよくないとききましたが、ここへ訪ねてきたことがよくなかったのです。その後、少しずつ病勢が重くなっているようで、カルバートソンの考えでは中国から帰るまでもたないとの予想です。あなたもお聞きのことと思いますが、このような事情はわたしも疑いません」（42頁、全集50頁）「1860年6月5日 ルーベン氏の死をきいて哀悼の意を表します。多分中国から帰ることに成功しても、病氣は急によくはならなかったでしょう。病氣を癒すことができなかつたためです。彼の仕事はおわり、天国の休みに入ったのです。彼の死は上海のミッション同僚の間で非常に痛嘆されていることと存じます」（49-50頁、全集55頁）

ルーベンは、生前、上海蘇州河沿いのどこかに単独の教会堂を建設したいという願いをいただき、1,916ドルの寄付をすでに集めていた。ニューヨークにいる父ラウリーは、それに1,500ドルを加えた。総額3,416ドルの基金である。

もとをたどれば、上海に（ルーベン）ラウリー記念教会堂ができたのはそういう経緯だった。以上のファーナムによる貴重な証言^{*46}は、事情を説明して詳しい。時間を考えると、ルーベンが上海で死去したとき、ファーナムは彼を看取ったと推測できる。

ファーナムの説明に従うならば、既出の「ラウリー記念教会堂 the Lowrie Memorial Chapel」と題したその報告記事が奇妙だ。なぜだか三男ウォルターを記念したとする。「今は亡きウォルター・ラウリー師」(97頁。父ラウリーではない)と書く。その名前を Walter Macon Lowrie と明示し、三男ウォルターの経歴を紹介する。どこからどう結びついたのか。単なる勘違いだろうか。

誤解といえば、美華書館史を書いたマッキントッシュも同様だ。前出「六十年史」に掲げられた記念教会堂の写真に添えて WALTER LOWRIE MEMORIAL CHURCH と説明する(36頁)。文脈から見ても、三男ウォルターを記念した、とマッキントッシュも信じているらしい。

記念教会堂といいながら、その主体が別人だとはどういうわけなのだろう。兄弟だとはいえ、違う人物を指摘する理由がわからない。五男ルーベンが亡くなって記念教会堂が落成するまで、すでに35年が経過している。当時の事情を知るのは、ファーナム以外には誰もいなかったというのだろうか。

『上海指南』1916年版に記述されている「思婁堂 北京路清遠里口」をもういちど見てほしい。その住所表示は、地図にある美華書館と同じではないか。

漢字で表記された「思婁堂」がなにかといえば、ラウリー記念教会堂そのものなのだ。「婁」とは、ラウリーを表わす漢字である。

「婁」一字で表示する著書^{*47}がある。また、婁理瑞^{*48}とする。あるいは、婁理仁^{*49}というのも見える。

ラウリーをいただいた教会堂が、美華書館の敷地内に建てられた。北京路清遠里口という住所表示を共有するのは、当然のことだ。事実、「北京路18号」を記念教会堂の住所表示とするファーナムの文章がある (another Mission Press chapel at 18

Peking Road.*⁵⁰)

美華書館内に設けてあった教会堂（礼拝所）は、独立した隣のラウリー記念教会堂に移動した。これが、『上海指南』1916年版宗教の部において、美華書館が消失し思婁堂が出現した理由かもしれない。ただし、思婁堂が1895年に完成したにもかかわらず、なぜのちの1916年版『上海指南』に掲載されたのか。疑問はあるが、今は問わない。

以上をふまえての結論はこうだ。北京路清遠里口と北京路18号は、同じ場所を示すふたつの表記だと考えるのがよい。

では、なぜふたつの表記があるのか。これを考えるのはそれほど困難ではない。上海に住む外国人のために便宜をはかったのであろう。欧米人にとっては、清遠里をローマ字綴りで「CHING YUEN LEE」と書くよりも「18, Peking Road.」としたほうが簡単で理解しやすい。

宮坂論文によると、美華書館の責任者だった（11、14代目）ホルトが「15 Peking Road」と記した便箋を使っていたという（184-185頁）。これについては、私にこれといって良い考えはない。

16 伝記と美華書館の移転

『C・W・マティーア伝』にもどる。

伝記が説明している北京路への移転について、時間上の疑問がでてくる。ほぼ事実を反映していると思われた伝記だが、その時期があわない。伝記の記述にしたがえば、1872年ころになるのだ。これは、現在判明している1875年とは違う。

宮坂「美華書館史考」が資料にもとづき美華書館の移動に関して説明している。私はその資料原文を未見のため、事実だけを書き出して孫引きする。

1872年春、新しい建物のために4,020ドルで土地を購入。1875年6月1日、Chinese Polytechnic Society に6,122.42ドルで売却。同年6月、小東門の不動産を20,260.55ドルで売却。同じ頃、英租界の地所を18,039.96ドルで購入。9

月英租界に移転。180-181頁

結論だけを抽出した。1872年から1875年までの間に土地の売買をくり返している。小東門外から英租界北京路へ到着するまでに曲折があったことがわかる。

それにしても、細かい数字があげられているものだ。アメリカ本部に会計報告をする必要があるのだろう。

単純に計算してみる。小東門外の不動産購入費用は含まない。

以前、別の場所に購入してあった土地を Chinese Polytechnic Society つまり、のちの上海格致書院*51に転売して2,102.42ドルの利益を得ている。小東門外の不動産を売却して英租界の土地を購入したときも2,220.59ドルの黒字だ。合計して、4,323.01ドルの純利益を得た。くりかえすが、1872年から1875年にかけてのこと。不動産売買のみによる収益である。そのとき美華書館責任者の地位にあったのは、10代目三男ジョンだ。

土地を購入転売して利益を上げるなどは、並みの才覚では行なうことは無理だろう。単純にそう思う。それとも、外国に住むアメリカ人宣教師は、いわゆる雑事にも精通していたのだろうか。いや、無理矢理対応するしかなかったか。アメリカ人宣教師が、日本あるいは中国で宣教するためには、自分たちの住居を確保することも必要事項のひとつにちがいない。

なるほど、ヘプバーンのアメリカ本部にあてた手紙のなかに、土地の購入と家屋の建築について金銭がどうの、というものを見かけるはずだ。1例を示す。

1862年4月2日 山手に家を建てることにわたしはとても気が進みませんので、請求される高い価格を払ってでも横浜に土地を買い、そこに家を建てる結論を出しました。……(中略)……すなわち、横浜の地所は少なくとも買った値段で、家屋と土地ならより高価に、いつでも売ることが可能でしょうが、山手については何事も不確かです。実際そこにわたしどもが土地を得られるかでさえ確かではありません。あらゆる種類の貿易を麻痺させている合衆国と英国との間の戦いの暗雲に起因して、何事も不確かなこの時期に、そのようなわけで横浜に土地を買う決断をしました。ひそかに

出かけ、配置図を手に入れ、町中で最も良い区画を手に入れました。二五〇〇ドルで買いました。一〇日後であったならば、その値段で手に入れることはできなかつたでしょう。全集117頁

アメリカ本部との連絡には日数がかかる。ヘプバーンが日本で土地を購入するにあたって、時期を逃すとかえって割高になるという例だ。こういうばあい、現地での判断が先行したとわかる。アメリカ本部は事後承諾ということになる。

美華書館が北京路清遠里口、つまり北京路18号に移転したのは1875年9月が正しいのだろう。そうすると伝記で読みとった1872年という時期は、長男カルヴィン、あるいは伝記作家の勘違いだ。

ただし、それによって彼が印刷所の移動を主導したことは事実ではない、と判断してはならない。三男ジョンが美華書館を退職したのは、1876年5月だという^{*52}。印刷所が移転したのは、10代目三男ジョンの任期中であるのはたしかだ。そのため元9代目責任者だった長男カルヴィンが、登州から上海に出てくることもあつただろう。

17 ヘプバーンとマティーア兄弟

マティーア兄弟について、マッキントッシュはつぎのように書いている。

Ｊ・バトラー師が、臨時に彼（樽本注：Ｊ・ウェリー）のあとをついだ。そののち、Ｃ・Ｗ・マティーア師によって1871年の夏まで引き継がれた。つまり、Ｊ・Ｌ・マティーア氏がアメリカからやってきて管理責任を負うまでのことだった。英文24頁、漢訳15頁

ここは、責任者の交替を紹介している。ヘプバーンのいう「四人のちがった主任者」だ。つづいて、マッキントッシュは、マティーア兄弟についてつぎのように説明する。

さいわいなことに、現実的で活気に満ちた、立派な家庭の出身であるこのふたり（樽本注：マティーア兄弟）は、その歴史のなかで決定的な時期にあったとき、美華書館に深くかかわっていた。ふたたび建物が、働くのにはあまりにも狭くなりすぎると*53、兄弟は大規模な計画を立てることができたし、またそう決定したのだが、古い建物を売却し、現在美華書館がある場所を購入し、1875年に所有権を手に入れた。同上

美華書館の「決定的な時期」とは、上海県城小東門外から英租界北京路への移動時期を指している。印刷所が、設備を充実させ大きく発展する転換点という意味だ。マティーア兄弟に対するマッキントッシュの評価は、たかい。兄弟の将来を見通す構想力、土地の売買で見せた判断力、またそれらを実現させた実行力について十分な理解を示している。

1869年から1872年までの美華書館責任者は、たしかに4名が入れ替わりで就任した。「今もその印刷所にいる一人」というのは、10代目三男ジョンのことを指している。その人は「傲慢で、でくのぼうです。有用どころか邪魔になる人です」とまでヘプバーンに書かれた。その「でくのぼう」が、土地の売買にあたっては印刷所に有利になるように行動し、北京路への移転を実現させた。しかも、1871年から1875年（または1876年）まで4、5年間も責任者の任務についている。日本との関係でいえば、その任期中に、アメリカ人宣教師、あるいは日本人が編纂したいくつかの辞書を確実に印刷刊行しているのだ*54。マティーア兄弟に関するヘプバーンとマッキントッシュの意見は、対立しているといわざるをえない。

マティーア兄弟とは面識のあったヘプバーンだ。彼が兄弟に対していただいた印象は、あまりよいものではなかった。一方のマッキントッシュは、その時その場に居合わせてはいない。美華書館の歴史をふりかえり、兄弟がはたした役割を客観的に考えたうえでの説明だ。そこがふたりの意見がわかる理由だろう。

【注】

- 1) 参照：宮坂弥代生「近代日本における宣教師と印刷 キリスト教宣教師の手紙から」『日

本の近代活字 本木昌造とその周辺』近代印刷活字文化保存会2003.11.7

- 2) 明治学院大学図書館『和英語林集成』デジタルアーカイブス
- 3) 全集本で新しく公開された。なお、該書は『ヘボン書簡集』とは日時の表記法を変えている。いずれにしても新暦を使用しているから、本稿ではアラビア数字で表記する。樽本「アメリカ人宣教師の暦」『清末小説から』第106号所収。また、雑誌の巻号数も同じくアラビア数字を使用する。
- 4) 美華書館の地理的位置については、宮坂氏が小宮山博史論文などを整理しなおした次の論文が詳しい。宮坂弥代生「東洋におけるプロテスタント伝道と印刷 美華書館（アメリカ長老会印刷所）を中心に」愛知大学現代中国学会編『中国21』Vol.28 風媒社2007.12.25。同氏「美華書館史考 開設と閉鎖・名称・所在地について」『活字印刷の文化史 きりしたん版・古活字版から新常用漢字表まで』勉誠出版2009.5.15
- 5) ギャンブルと美華書館については、次の論文が詳しい。馮錦栄「姜別利（William Gamble, 1830-1886）与上海美華書館」復旦大学歴史系、出版博物館編『歴史上の中国出版与東亜文化交流』上海文藝出版（集団）有限公司、上海百家出版社2009.11 / 2010.3第2次印刷。また、その簡略版がある。同氏「姜別利与上海美華書館」上下、出版博物館主辦『出版博物館』2010年第3期（総第11期）2010.9、2010年第4期（総第12期）2010.12
- 6) 杉山栄『先駆者岸田吟香』岸田吟香顕彰刊行会1952.4.5。76-77頁
- 7) すこし時間をさかのぼる。ブラウン自身が書簡で述べている。以下は、高谷道男編訳『S. R.ブラウン書簡集』（日本基督教団出版局1965.11.1 / 1980.6.20）による。

ブラウン1861年8月16日 上海の印刷所に渡す原稿の準備で、毎日、仕事におわれています。まだ書名はきまっていません。前の船便で四〇ページのフルスキャップ版を送り、次の便で、また四〇ページを送る用意をしています。この著作は上海の米国長老ミッションの印刷所で印刷することになっています。残念ながら、こちらで校正ずりを訂正することができませんので誤植や誤謬などを正して出すことができません。しかし、わたしはどうしてもこの仕事を思いきってやってみようと思います。75頁

たしかにヘブバーンの和英辞書よりも時間的に先行している。「米国長老ミッションの印刷所」は、前述のとおり美華書館のことを指す。フルスキャップ foolscap は判型のこと。

以上から読みとれるのは、原稿の一部分を試し刷りのために上海の美華書館に送っていることだ。

日本に派遣された宣教師をもうひとり紹介する。フルベッキ (Guido Hermann Fridolin Verbeek のちに改名して Verbeck, 1830-1898) である (参照: 村瀬寿子「フルベッキの背景

オランダ、アメリカの調査を中心に」『桃山学院大学キリスト教論集』第39号2003.3.1)。フルベッキは、主として長崎において活動していた。その書簡集に美華書館についての言及がある。すなわち、1861年9月30日付で、「同氏(ブラウン)の新しい『日英会話編々』が、一部上海で印刷されました」(高谷道男編訳『フルベッキ書簡集』新教出版社1978.7.1。56頁)とある。これが試し刷りの一部分であろう。

さて、ブラウンは、翌年、みずからも上海に渡って印刷情況を確かめている。

ブラウン1862年2月18日 なおこのほか、日本語の研究を始める人々の手引きになると思い編集した『日英会話篇』のおもな部分を、上海の印刷所に送りました。上海の長老ミッシェンのガンブル氏が印刷しています。もっとも、日本字の活字は、そろっていないので仕事がおくれています。印刷の仕事をする目的で、一〇月上海に行き、印刷の監督として、ほぼ三週間すごしました。87-88頁

『日英会話篇』の発行は、1863年というだけで月日は不明だ。ブラウンが印刷のために上海に行ったのが1862年10月だった。その後、江戸幕府の了解のもとに通訳者養成学校で彼らが教えた際に使ったのが『日英会話篇』だという。1863年8月25日付書簡に見える(140頁)。以上から、該書は少なくとも1863年8月以前には印刷刊行されたことがわかる。

そのブラウン『日英会話篇』だが、上海での印刷とフルベッキが関係しているようにも考えられる。それは、こうだ。1862年、日本で生麦事件が発生した。大名行列に馬で入り込んだイギリス人が薩摩藩士によって殺傷された事件である。最初、江戸から遠くはなれた長崎では、外国人は安全だと思われていた。ところが、江戸幕府とイギリス政府の賠償交渉が紛糾するにつれて不安が広がり、開戦への恐れを感じた外国人が増えてくる。そのなかのひとり宣教師フルベッキは、妻子とともに長崎から上海へ避難した。1863年5月のことだった。フルベッキは、美華書館のガンブルと日本語活字について相談している。

フルベッキ1863年5月22日 なおこの外に長老ミッションの印刷局長のガンブル氏が日本字の活字の一そろいを用意しています。ガンブル氏はこのためにわたしに助力をもとめているので、わたしも同氏に助力をおしみません。77頁

フルベッキ1863年6月20日 ちょうどいま、ガンブル氏と一緒に日本文字のかなの活字を用意しております。この活字は長老ミッションの印刷所（美華書館）が所蔵しているので、将来わたしたちにとって、大いに役に立つことでしょう。80頁

当時も美華書館の責任者はギャンブルだった。フルベッキが言及する美華書館に所蔵される日本のカナ活字とは、時期的に見てブラウン『日英会話篇』に使用したものだと思われる。

- 8) 山口豊『岸田吟香『吳淞日記』影印と翻刻』武蔵野書院2010.5.15による。句読点を加えた。
- 9) 陳祖恩著、大里浩秋監訳「第5章文人商人・岸田吟香」(『上海に生きた日本人 幕末から敗戦まで』大修館書店2010.7.10。71頁)には、次のような箇所がある。「上海でヘボン夫妻が病に倒れたため、和英辞書の校正作業の大部分は岸田が担当することになった。彼の月給はわずか一〇円で、半分が食費に消えたが、その残りで好きな書画を購入した」。原文は、陳祖恩「文化商人岸田吟香」『尋訪東洋人 近代上海的日本居留民』上海社会科学出版社2007.1。60頁
- 10) 小宮山博史「一九世紀ヨーロッパ・中国での明朝体金属活字の開発と日本への伝播」西野嘉章編『歴史の文字 記載・活字・活版』東京大学出版会1996.10.1
- 11) 吉田寅「入華宣教師マッカーティと中国語布教書」『立正大学文学部論叢』第94号 1991.9.20 / 電字版。5-32頁。同氏『中国プロテスタント伝道史研究』汲古書院1997.1.20。中国社会科学院近代史研究所翻訳室『近代来華外国人名辞典』北京・中国社会科学出版社 1981.12。298頁
- 12) *CATALOGUE OF BOOKS IN THE DEPOSITORY OF THE AMERICAN PRESBYTERIAN MISSION PRESS AT SHANGHAI, OCTOBER 1, 1871*, SHANGHAI: American Presbyterian Mission Press, 1871 / 電字版
- 13) 「明」は、該目録凡例にある4種類の活字のうちでいちばん大きい。参考までにそれ以外の3種類を大きい順に書いておく。中 Double Brevier > 行 Three-line Diamond > 解 Small pica。該当部分の写真を掲げておいた。

- 14) 参照：吉田寅「中国語キリスト教書和訳版の比較的考察　ヘボン刊『真理易知』和訳版の一考察」『比較文化』創刊号　文化書房博文社1995.9.2
- 15) 高谷道男編訳『ヘボンの手紙』有隣堂（新書）1976.10.10。この『ヘボンの手紙』は、全集に未収録。105頁。ヘブバーンが横浜にいるころ、1871年8月21日付第あての手紙には、「十一月一日ごろ、辞典の第二版のため上海に渡航する予定です。少なくとも六ヶ月その地に滞在しなければならぬでしょう」（105頁）と書いている。予定と実際の出発は、違っていたらしい。
- 16) D. MacGillivray (Ed.), *A CENTURY OF PROTESTANT MISSION IN CHINA(1807-1907)*, SHANGHAI: American Presbyterian Mission Press, 1907. 636頁
- 17) 中井えり子「『官許仏和辞典』と岡田好樹をめぐって」『名古屋大学附属図書館研究年報』第6号2008 / 電字版。該辞典は国立国会図書館近代デジタルアーカイブで閲覧可能。
- 18) K. T. Wu (吳光清), “the Development of the Typography in China during the nineteenth Century”, *THE LIBRARY QUARTERLY*, vol.22 no.3, 1952.7。宮坂弥代生「マカオ時代の American Presbyterian Mission Press　美華書館前史　その1」明治学院大学キリスト教研究所『紀要』第36号2004.1.20。馮錦栄「美国北長老会澳門“華英校書房”(1844-1845)及其出版物」珠海市委宣传部、澳門基金会、中山大学近代中国研究中心主編『玉海、澳門与近代中西文化交流　“首届珠澳文化論壇”論文集』北京・社会科学文献出版社2010.7
- 19) この華花印書局という名称は、今まで知られていない。「己未歲浙寧華花印書局新鑄」と明記した書籍『耶穌基督救世主新約全書』だ。己未は1859年を、浙寧は浙江省寧波を意味する。その書影が、つぎの書籍に掲げられている。居密 (Mi CHU)、楊文信 (Man Shun YUENG) 合編『CHRISIANITY IN CHINA 基督教在中国』The Library of Congress,U.S.A、台湾・漢世紀數位文化股份有限公司2009.9 / 電字版。75頁。華花聖經書房のほか、華花聖書房、華花印書房、華花書局をあげる次の論文がある。韓琦「從澳門、香港到上海　19世紀中葉西方活字印刷技術在中国的傳播」香港城市大学中国文化中心、出版博物館編『出版文化的世界：香港与上海』世紀出版集團、上海人民出版社2011.2。142頁。また、「寧波華花印書房」をあげる文章がある。前出、小宮山博史「一九世紀ヨーロッパ・中国での明朝体金属活字の開発と日本への傳播」261頁。ただし、同論文262頁に掲げられた挿図48の説明文は「寧波華花聖經書房」となっている。
- 20) 前出『CHRISIANITY IN CHINA 基督教在中国』40頁に「蘇松上海美華書局」と見える。

『新約聖書』1863

- 21) 後出馮錦栄「約翰・勞理・馬蒂爾 (John L. Mateer, 1848-1900) 与上海美華書館」213頁に掲げられる書影を参照。『漢英韻府』1874に「滬邑美華書院銅板梓行」とある。
- 22) 樽本「美華書館名称考」「宋家姉妹の父親は商務印書館を創設したか チャーリー宋と美華書館」「美華書館の最期」いずれも『商務印書館研究論集』所収
- 23) マッキントッシュ Gilbert McIntosh, *MISSION PRESS IN CHINA*, SHANGHAI: American Presbyterian Mission Press, 1895 / 複写版。漢訳がある。G・麦金托什 Gilbert McIntosh 著、方麗訳、車茂豊校「美国長老会書館 (美華書館) 紀事」『出版史料』1987年第4期 (総第10期) 1987.12。つぎにも収録される。宋原放主編、汪家熔輯注『中国出版史料・近代部分』第1巻 武漢・湖北教育出版社2004.10。ページは、英語原文と雑誌掲載の漢訳。英文25頁、漢訳16頁
- 24) 一説に1894年、北京のアメリカ外国伝道局 (American Board of Commissioners for Foreign Missions, MacGillivray, 640頁) 印刷所。また後述する『C・W・マティーア伝』でも the mission press of the American Board at Peking とする (278頁)。漢訳では「美国公理会印書局」(179頁)。
- 25) John T. Faris, “V THE UNUSUAL EXPERIENCES OF A MISSIONARY Chapters in the Life of Calvin W. Mateer”, *REAPERS OF HIS HARVEST*, 1915 / 電字版。35-36頁
- 26) 樽本「マティーアと『釘子記』」『清末小説から』第105号所収
- 27) Daniel W. Fisher, *CALVIN WILSON MATEER, FORTY-FIVE YEARS A MISSIONARY IN SHANTUNG, CHINA; A BIOGRAPHY*, The Westminster Press, 1911 / Bibliolife 複写版。伝記と略す。これには漢訳がある。(美) 丹尼爾・W・費舍著、関志遠、苗鳳波、関志英訳『狄考文伝 一位在中国山東生活了四十五年的傳教士』桂林・広西師範大学出版社2009.12。漢訳と略す。
- 28) “..... fronting on the river, a house was built for Mr. Culbertson, and along on the north side of the canal towards the city were the Press buildings, with a chapel at the west end and the rooms over it for the accommodation of the superintendent.”Farnham, “Historical Sketch of the Shanghai Station” / 電字版 / 複写版。60頁
- 29) 1867年、すなわち長男カルヴィン以前に音楽符号活字を製造したという記録があるという。前出、馮錦栄「姜別利 (William Gamble, 1830-1886) 与上海美華書館」, 314頁。そうすると

長男カルヴィンがつくったのは、ギャンブル作成のものとは別物が。

30) 国立国会図書館近代デジタルアーカイブ

31) 該当する書籍を『馬太伝福音書』だとする論文がある。馮錦栄「約翰・勞理・馬蒂爾 (John L. Mateer, 1848-1900) 与上海美華書館」(関西大学文化交渉学教育研究中心、出版博物館編『印刷出版与知識環流 十六世紀以後的東亞』世紀出版集団、上海人民出版社 2011.10. 203-204頁) また、該書1875年版の書影を掲げる。

32) 小塚昌彦「蠟型電胎法による母型製作 本木活字の復元へ向けて」に詳しい。前出『日本の近代活字 本木昌造とその周辺』所収。また、『本木昌造と日本の近代活字』大阪府印刷工業組合2006.9.15

33) 鈴木広光「漢字鑄造活字の開発と日本への伝播」。『日本の近代活字 本木昌造とその周辺』所収。88頁。また、『本木昌造と日本の近代活字』所収。156頁。小宮山博史『日本語活字ものがたり 草創期の人と書体』誠文堂新光社2009.1.23. 111頁。また、前出『CHRISIANITY IN CHINA 基督教在中国』51頁に1865年重版本が収録されている。

34) J. M. W. Farnham, "Historical Sketch of the Shanghai Station", *JUBILEE PAPERS OF THE CENTRAL CHINA PRESBYTERIAN MISSION, 1844-1894*, SHANGHAI: American Presbyterian Mission Press, 1895 / 電字版 / 複写版。66頁

35) ホルトによれば、三男ジョンが来華した1871年夏に長男カルヴィンは責任者の席を退いたとある。W. S. Holt, "the Mission Press in China", *THE CHINESE RECORDER AND MISSIONARY JOURNAL*, vol.10 no.3, May-June, 1879. 218頁。前出 John T. Faris, "V THE UNUSUAL EXPERIENCES OF A MISSIONARY Chapters in the Life of Calvin W. Mateer"では在任期間を1870-1872年とする。42頁

36) 中国人研究者は靖遠里^{ママ}と書いている。1例だけ示す。元青主編『中国近代出版史稿』天津・南開大学出版社2011.2. 86-87頁。靖遠里は、清遠里と通音する。だが、同じではない。靖遠里は、実際には2カ所ある。「英界 松江路北 蕪湖路南(福建路東)」および「美界 南潯路西 閩行路東(百老匯路南)」だ。いずれも清遠里とは明らかに違う場所にある。上海関係の辞典などでも同じ誤りを見かける。

37) 前出 McIntosh の前言 preface (Shanghai, 1st January, 1895.) 序文 introduction (Shanghai, 19th May, 1894.) には、1895年と1894年の違いはある。だが、住所は同じく 18 Peking Road. である。

- 38) Rev. C. E. Darwent, M.A., *SHANGHAI: A HANDBOOK FOR TRAVELLERS AND RESIDENTS TO THE CHIEF OBJECTS OF INTEREST IN AND AROUND THE FOREIGN SETTLEMENTS AND NATIVE CITY*, Kelly and Walsh, Limited(1911) / 電字版。27頁。ただし、“Jewish Synagogue, 18, Peking Road” (144頁) と番地を間違っている箇所がある。誤るくらいに近い、という意味か。
- 39) 唐振常『近代上海繁華報』香港・商務印書館有限公司1993.7。217頁の写真を引用する。
- 40) 木之内誠編著『上海歴史ガイドマップ』大修館書店1999.6.20。69頁。王健『上海的猶太文化地図』上海文藝出版(集團)有限公司2010.4。34頁、114頁では阿哈龍会堂とある。
- 41) 前出王健『上海的猶太文化地図』34頁では埃爾会堂とある。
- 42) この尖塔は、建設当初にはなかった。後に増築されたもの。ギルバート・マッキントッシュ Gilbert McIntosh 著、宮坂弥代生訳「美華書館六十年史」(『季刊』印刷史研究』第5巻第1号(通巻第7号)1999.7.1。36頁)に尖塔のない写真が掲げられている。以下、「六十年史」と略す。
- 43) “the Lowrie Memorial Chapel”, *THE CHINESE RECORDER AND MISSIONARY JOURNAL*, vol.26 no.2, February, 1895 / 電字版。96-97頁
- 44) 樽本「美華書館問題」
- 45) 前出 Darwent, *SHANGHAI*, 146頁。「教団は、1848年に活動を開始し、1858年南門に最初の建物が建設された。1874年に印刷所が、1896年にラウリー記念教会堂が北京路に設立された。ここに書かれた事柄は、それぞれが存在している。しかし、判明している時期とは少し異なる。
- 46) ファーナム Farnham, “Historical Sketch of the Shanghai Station”, 46頁。該書の発行は1895年である。記述内容は1894年までのはず。だが、1895年に完成する記念教会堂にもファーナムは言及している。建築中の教会堂を見ながら文章をつづったと考える。
- 47) Alexander Wylie, *MEMORIALS OF PROTESTANT MISSIONARIES TO THE CHINESE*, SHANGHAE: American Presbyterian Mission Press, 1867 / 電字版。231頁。また、高谷編訳『ヘボン書簡集』44頁注2(『全集』37頁注1)でも「婁」を使用している。小さいことをひとつ。書簡44頁訳注2はルーベンの綴りを Rueben とする。全集37頁訳注1も同じ。誤りだろう。正しくは Reuben だ。
- 48) 魏外揚「最早在中国殉道的宣教士 婁理華」『宣教事業与近代中国』台湾・宇宙光出版社

1978.11。71頁

- 49) 阮仁沢、高振農主編『上海宗教史』上海人民出版社1992.7 / 1993.1第2次印刷。828頁
- 50) ファーナム Farnham, “Historical Sketch of the Shanghai Station”, 46頁。67頁もほぼ同様。
- 51) 上海格致書院が美華書館から土地を購入したことは、つぎの文献にも言及がある。王爾敏『上海格致書院志略』香港・中文大学出版社1980。16頁。同年四月二十七日（一八七五年五月卅一日）美華書館より土地を購入したとする。「地価共値四千五百兩」。また、郝秉鍵、李志軍『19世紀晚期中国民間知識分子的思想——以上海格致書院為例』北京・中国人民大学出版社2005.9。17頁。第7回理事会（1875.5.31）において英租界内旧跑馬場附近に土地を購入した。こちらには金額は書かれていない。なお、馮錦栄「約翰・勞理・馬蒂爾（John L. Mateer, 1848-1900）与上海美華書館」218頁は、名称を区別している。Chinese Polytechnic Society は準備段階での名称。Chinese Polytechnic Institution が成立後の名称だという。前出ファーナム Farnham, “Historical Sketch of the Shanghai Station”, 67頁では、the Polytechnic Institute とする。『list.』16頁は、Chinese Polytechnic Institution and Reading Rooms。
- 52) 前出 Holt 218頁。McIntosh 英文24頁、漢訳16頁
- 53) 別の証言は、前出 Farnham, “Historical Sketch of the Shanghai Station”, 66-67頁がある。大要はつぎのとおり。1874年以後のこと。小東門外の印刷所の建物は広くて使い勝手がよかった。しかし、近所と周囲が工員たちの道徳にとっては都合が悪くなった。そこで新しい土地をさがすことにした。今は上海格致書院が建っている土地を最初に購入したが、後に（上海格致書院へ）売却し、北京路18号にある家屋を購入した。移転の理由は、マッキントッシュの記述とは異なる。
- 54) 美華書館において三男ジョンがあげた多くの業績については、前出馮錦栄「約翰・勞理・馬蒂爾（John L. Mateer, 1848-1900）与上海美華書館」が詳しい。209-219頁

『初期商務印書館研究』中文版序

未発表。執筆は2001年10月。『初期商務印書館研究』（2000）を発行した後のことだった。商務印書館の関係者（汪家燊）から該書を中国語に翻訳したいと連絡があった。出版同意書（中国の習慣なのか、商務印書館だけのものか不明）を要求されたから応じる。本稿は、初版中文版のために書き下ろしたものだ。本文とともに論文を追加して郵送した。しかし、結局、商務印書館から出版契約書は送られてこなかった。説明もなく放置されたまま現在にいたっている。その間の事情は、『初期商務印書館研究（増補版）』（2004）の「あとがき」で少し紹介した。増補版を発行したから、それ以前の出版同意書は失効したと宣言する。文中でのべた中文版のいくつかの改良点は、増補版ですべて実現していることをつけ加えたい。それにしても、世界的に著名な出版社が行なうとは思えないほど無責任なやり方である。

自分の研究が、外国語に翻訳されることは、それだけで名誉なことだと思う。だが、私の『初期商務印書館研究』のばあいは、それとは違う意味で嬉しく感じる。

創業後間もない商務印書館は、20世紀はじめの約10年間、日本の金港堂と合併会社であった。清朝末期から中華民国初期にわたる外国企業との合併の結果は、双方が大きな利益を得るといって、まれに見る成功を示している。

ところが、この事実そのものが、広くは知られていない。日本および中国の研究者でさえ、その詳細を知る人は多くないのだ。

日本において、研究の必要が、過去、言われたことはあった。だが、続く人が

おらず実現しなかった。

両者が合併するにいたったいきさつ、合併の内容、約10年間の期間をへて合併を解消した理由と経緯などなど、不明な部分が多くあり、それが解明されないまま時間だけが経過した。この合併は、近代日中文化交流史上の謎のひとつである。

商務印書館と金港堂の合併事業の実態は、ほとんど歴史の闇のなかに消失しかかっていたといってもいい。

私が、問題の解明にこころざしたのは、清末小説研究と無関係ではなかった。

当時の重要な小説専門雑誌のひとつ『繡像小説』を発行した版元が、商務印書館だ。注目しないわけにはいかない。

清末小説研究の一環として、私は、出版社にも注目していた。その重要出版社が、ある時期、日本の金港堂との合併会社になっていた。この事実を知れば、詳細が知りたくなるのは、当然のなりゆきだろう。

もうひとつは、資料の問題がある。

日本と中国にまたがる課題だ。日本側の資料と中国側資料をあつかう必要がある。中国で日本の資料を見ることがむづかしいならば、日本にいる私は、比較的便利かもしれない。

研究に着手した当時は、まとめて資料が保存されているのではないかと考えた。それは、まったく甘い予測にすぎなかったことが、今だからわかる。もしも、資料が保存されていたならば、私よりも以前に、誰かが謎を解明していただろう。資料らしきものが見当たらないからこそ、だれも手をつけようとはしなかったのだ。

資料を探索しはじめると、手がかりはほとんど存在しなかった。それでも、ごく少数の金港堂の関係者から話を聞くことができたのは、幸運だったといわなければならない。あとは、新聞、雑誌などを追跡し事実の掘り起こしから着手するほかはなかった。

調べはじめてから本にまとめるまで、知らぬうちに約20年がたっている。合併問題のほぼ全体を把握するには、それだけの時間が必要だったということだ。

本書日本語版は、日中双方の資料を使用している。私の力のおよぶかぎり、資料の発掘につくした。日中の研究者の協力も得て、ほかの論文には書かれていな

い事実も盛り込んである。今後の研究の出発点となるように、典拠を明らかにしてもいる。解決できない箇所は、課題として指摘しておいた。

それでも、問題がないわけではない。

私は、新しい事実を見つけだすたび、そのつど日本語で論文を発表していた。外国の研究者がそれを引用するのはいい。自由な討論によって、研究が前進する。だが、恣意的に利用されることもあり、私の考えと違うものが流布する事態が生じている。中国の研究者は、それら漢語論文を読むから、ますます誤解が広がる。

このたび中文版が刊行されることによって、第1次資料を広く利用してもらうことが可能になった。これが、私にとっては、なによりうれしい。推測ではなく、資料にもとづいた論述がでてくる可能性を保証するからだ。

商務印書館と金港堂の合併をとりまいて生まれたいくつかの誤解も、この中文版によって、それらが誤解であることが自然と認識されるのではないか、という期待がある。よろこびのふたつ目だ。

日本語版と中文版の違いを説明しておきたい。

いくつかの点で、本中文版は、日本語版よりもさらに充実したものになっている。

日本語版刊行後、長い間さがしていた英語教科書『華英初階』の原物を見る機会があった。初期商務印書館の出版物として記念碑的意味をもつものだ。これについて説明を追加した。

また、最近の商務印書館研究に見る日中合併の事実について紹介文を書いた。附録として収録する。

文献一覧には、その後の文献も補充している。さらに、いくつかの誤りを正した。渡辺浩司氏のご指摘に感謝します。

もとの日本語版よりもすぐれたものになっている理由である。

中文版の刊行がきっかけとなり、商務印書館と金港堂の合併問題について、さらなる資料発掘と研究が進むことを期待する。

あ と が き

本書には、商務印書館にかかわる論文を集めた。商務の刊行物、あるいは関係した日本人たち、またほかの出版社との交渉などなど、だ。

私の商務印書館に対する興味は、日本金港堂との合併問題に始まっている。いわば研究の空白を埋める作業を継続してきた。先行論文を補充する一方で、新しい資料の発掘も行なっている。

1例として商務印書館と金港堂の合併解約書をあげよう。

この文書は、独自に発見した。出版の発行年月からいえば、同じものを収録した中国の出版史料集の方が早い。だが、掲載した『清末小説』雑誌が一步先行して日本で公表されたのが事実だ。以上のことをくりかえし指摘するのは、日本において資料を発見することが不可能ではないといたいいためだ。

商務印書館の火災問題にしても、重要な意味を持っているとの認識があればこそ、新しい資料にめぐりあうことができた。

だが、できることとできないことがある。一般に公開された材料のなかから新しく利用できるものを探し出すことは、日本において不可能ではないかもしれない。ところが、商務印書館の内部資料となると、外部の人間にはお手上げなのだ。だからこそ、残された問題は多いといわざるをえない。

初期商務印書館の財政状態は、どのようなものだったのか。新しく公開された資料をもとにして検討した。その結果は、解明されたという状況にはほど遠い。編集者の考えにより、資料の一部が、それも重要な意味をもつ部分が削除されているからだ。資料の扱いに根本的な誤解があるのではないか。このように書くのは失礼だと感じる。もしかすると、全面公開ができないなんらかの事情が存在

する可能性も否定はできない。なによりも、資料のより一層の公開が望まれる。将来、それが実現されるのを希望する。ただし、希望するだけで期待しているわけではない。

商務印書館が刊行した大型の翻訳小説シリーズがある。「説部叢書」という。当時の中国文芸界に大きな影響をあたえた。翻訳小説研究の分野では無視することのできない存在だ。しかし、この叢書がどのように成立したのかを説明する文章は、中国では公表されたことがない。日本には「説部叢書」をまとめて所蔵する機関はないのではないかと。実藤文庫にはいくつかを保存していて例外となっている。私は、それらを利用し、自分でもいくつかを集めて、あえて一文を書いた。いわば研究の入り口にさしかかったただけだ。今後も継続して探求する。

商務印書館と美華書館は、ある時期に人的な関係があった。本書に美華書館についての論考を収めた理由である。中国では、美華書館についての専論は発表されてはいない。いくつかの俗説が広まっており、それが訂正されていない原因であろう。

以上をながめれば、考察の対象は商務印書館の「初期」に限ってはいない。また、金港堂との合併以後のことも説明する。これまた「初期」ではない。書名を『商務印書館研究論集』とした所以である。

ひとことおことわりしておく。拙稿「辛亥革命前後における商務印書館と金港堂の合併」(孫文研究会編『辛亥革命の多元構造』汲古書院2003.12.25)は、『初期商務印書館研究(増補版)』にその内容を吸収したため本書には収録を見合わせた。

商務印書館と金港堂の合併についていくらか調査をした。その結果、両者の関係を把握する中国側の意識に偏向があるように感じる。本文中でも説明した。重複するがあらためて述べておきたい。

今でこそ「日中双方に利益があった合併」という意見が商務印書館の人間からも出てきてはいる。だが、最初からそうであったわけではない。まるで被害者のように位置づける人がいたのだ。

常識的に考えて、合併という形態が片方からの強制で成立するわけがない。双方が合意をした合併だから、一方が被害者であるはずもないのだ。事実を冷静に見ればそういう結論におちつくのは当然だ。だが、日本金港堂との合併が、商務

印書館にとってはまことに貴重な体験であり、技術情報を含んで多大な利益をもたらしたという事実を述べるができない時期が中国にはあった。その過程で商務印書館の人々は自分たちが被害者であるかのように装う習慣が身についたらしい。商務印書館文化という遺伝子に刷り込まれているようだ。私から見るとそのように感じる。

研究計画というほどのことではないが、今後の方向を示しておく。

商務印書館と金港堂が合併したのは、唐突な印象を与えているかもしれない。合併にいたる過程がそれほど詳細には明らかになっていないからだと思われる。金港堂が合併の対象として商務印書館を選択したのは、人的関係から生ずる偶然的要素はあったであろう。だが、それに落ち着くまでには長い歴史が、日本と中国のあいだには存在した。今後は、商務印書館が創業される以前の事情をあきらかにする予定だ。すでに、準備をはじめている。

2006.8.1

樽本照雄

増補版あとがき

本電字版を公表するにあたり、論文6本を加えた。合計22本だ。書名に「増補版」とつけた理由である。

初版には『繡像小説』関係論文も少し収録している。その後発表した主として編者問題についての討論論文についても収録の検討はした。しかし、本書に収めることはしていない。

『繡像小説』は、商務印書館の刊行物だ。ところが、編者問題、刊行遅延問題、「老残遊記」と「文明小史」の盗用問題など、関連するその範囲が広い。しかも、日本と中国の研究者間で長年にわたって討論が続いている。その意味で珍しい例だということができる。こちらは別にまとめる機会があるだろう。

初版あとがきに「今後は、商務印書館が創業される以前の事情をあきらかにする予定だ。すでに、準備をはじめている」と書いた。その計画は頓挫した。

電字版により全文検索が可能になった。索引は作成しなかった。また、初版に掲載していた広告「清末小説研究会の本」も削除した。

2016.5

樽本照雄

著者略歴

樽本照雄 (TARUMOTO Teruo)

1948年 広島市生まれ

1972年 大阪外国語大学大学院修士課程修了

現 在 大阪経済大学名誉教授 博士(言語文化学)

季刊『清末小説から』を公開中

編著書 『新編増補清末民初小説目録』 済南・齊魯書社2002

『清末小説叢考』 汲古書院2003

『漢訳アラビアン・ナイト論集』 清末小説研究会2006

『清末小説研究集稿』(陳薇監訳)済南・齊魯書社2006

『漢訳ホームズ論集』 汲古書院2006

『商務印書館研究論集』 清末小説研究会2006

『清末翻訳小説論集』 清末小説研究会2007

『林紓冤罪事件簿』 清末小説研究会2008

『清末小説研究ガイド2008』 清末小説研究会2008

『林紓研究論集』 清末小説研究会2009

『商務印書館研究文献目録』 清末小説研究会2010

『清末民初小説目録 第4版』(CD-ROM)清末小説研究会2011

『清末民初小説目録 第5版』 ウェブ公開 2013

『清末民初小説目録 第6版』 ウェブ公開 2014

『清末民初小説目録X』 ウェブ公開 2015

『上海のシャーロック・ホームズ ホームズ万国博覧会 中国篇』

国書刊行会2016.1.20

『初期商務印書館研究(増補版)』 ウェブ公開 2016

しょうむいんしょかんけんきゅうろんしゅう

商務印書館研究論集 増補版

発 行 2006年12月15日

電 字 版 2016年 5月15日

著 者 兼 樽本照雄

発 行 人

発 行 所 清末小説研究会 〒520-0806

滋賀県大津市打出浜 8番4-202

樽本照雄方

<http://www.biwa.ne.jp/~tarumoto>

Printed in Japan

非 売 品

